山　岳

Vol.83／1988


WILD COUNTRY
NUT KEY

第八十三年（通巻第一四一号）

山岳

一九八八年

山岳　一九八八年　目次

表紙挿画　W・フォレスト
本文カット　W・フォレスト


FOREST

登山の変質　——いま何かが変りつつある——

アルプスからヒマラヤから、そして日本の山々から聞こえてくる足音は？

江本嘉伸

冬のヨーロッパ・アルプス三大北壁をわずか四十時間五十分で連続登攀した男のドキュメンタリーがこの夏、日本でもテレビ放映された。

クリストフ・プロフィ。一九六〇年生まれのこのガイドは一九八五年三月一日、冬のアイガー北壁をわずか十時間で登りきってデビューした。長谷川恒男が初めて冬期単独登攀した時、八日かかっていることを考えれば信じがたいスピードである。同じ年の七月二十五日には、三大北壁のワンデイ・アッセントに挑戦、移動にヘリコプターの助けを借りてマッターホルン、アイガー、グランド・ジョラスの順序で二十五時間四十五分で完登した。正味登攀時間は十五時間五十分である。

三大北壁の連続登攀は、翌八六年三月、ユーゴスラヴィアの二十六才の登山家、トム・チェセンが挑戦している。全く自力の登攀で、六〜七日にアイガーを十二時間、グランド・ジョラスを北壁ランスールから四時間で登り、十一日夜から十二日にかけてマッターホルンを十時間で登りきった。ヘリコプターの助けなしに一週間以内に三つの北壁をおとしたのだから、これもものすごい体力とスピードだ。

プロフィは八七年三月十二日、再度機動力を駆使して冬期の三大北壁に挑んだ。大がかりな撮影態勢がとられたらしく、テレビ画面は時に接近して、時に離れて空から、標高差千㍍のグランド・ジョラスの雪壁をダブル・アックスでぐいぐい登るクライマーの一挙手一投足をとらえる。五時間五十分で登頂、下山は何とパラグライダーを使っての空中降下である。アルプスの豪華な風景に、時折足を振ってブランコでも楽しんでいるかのような風情。降り立つとすぐ車とヘリを乗りついで、夫人とこどもアイガーの取りつき地点へ急ぐ。

標高差千八百㍍のアイガー北壁は、夜の登攀となり、予定より大分手こずったらしい。闇に包まれて、本人の姿は見えないが「先へ行けない。電池が切れて真っ暗だ」などと、無線を通して聞こえる声が、かえって臨場感を高める。十七時間五十分かけて登頂。「今回は参ったよ」と、さすがにバテをみせるが、ハインリッヒ・ハーラーら四人が半世紀前の一九三八年七月に初めてこの壁を登りきった時は八十五時間かかっているのだ。

最後のマッターホルンはやはり取りつきまでヘリで運ばれ、六時間で完登、結局移動を含め四十時間五十分で三つの北壁を登りきった。「四つ目は願い下げにしたいな」が、英雄の感想だった。

いわゆるアルパイン・スタイルがいかにスピード登攀の時代にはいっているか、そしてヘリを含めた「道具」がいかに日常の登攀に持ち込まれているか、を如実に示すテレビ・ショーだったが、スピード登攀はいまやヒマラヤでも主流になりつつあることを、もう一人のフランス人、二十五才のブノワ・シャムーが実証している。

八六年六月二十日、ブロード・ピーク（八〇四七㍍）のBCからの日帰り登頂をなしとげた（正確には二十四時間以内登頂。これは二年前、ポーランドのクシストフ・ヴィエリッキもやっている）。彼は、翌七月五日、今度はK２（八六一一㍍）で似たことをやってのけた。四日午後六時にBCを出発、二十二時間三十分後の五日午後四時半にはてっぺんに立ったのである。K２が二十四時間以内に登られたのは、これが初めてである。

「クォータ８０００」と名付けられた彼の隊には、オーストリアのクルト・ディームベルガー、イギリス女性のジュリー・チュリスも撮影班として参加していた。二人は八月四日に登頂を果たすが、激しい嵐に最終キャンプに閉じ

込められ、チュリスは衰弱死、結局この夏のK2で、十三人ものベテランクライマーが遭難死したことは、今も記憶に新しい。

イタリア人が「五年がかりで八千㍍峰全山を登ってしまおう」と企画した「クォータ８０００」隊の活動は、ヒマラヤ新時代を象徴するものである。すでに八六年には最初の試みであるガッシャブルムⅠ（八〇六八㍍）と同Ⅱ（八〇三五㍍）の登頂に成功しており、第三次に当たる八七年にはパキスタン領に残った最後の八千㍍峰、ナンガ・パルバット（八一二五㍍）に挑戦した。そして、シャムーはここでも、ＢＣから二十三時間で登頂、通算三つの「八千㍍峰ワンデイ・アッセント」をやってのけたのである。

いずれのケースも仲間が先行してトレイルをつけるというやり方だが、それにしても速い。最新の報告では、あのエベレストですら二十二時間（フランスのマルク・バタール）で登られた。スピード＝安全の論理は、近年よく言われることだが、好みかどうかは別にして今後、ヒマラヤはスピードを競う時代がしばらく続きそうである。

八千㍍の大衆化

は、ヒマラヤ登山史が当初考えていた以上に早く来た。無論、山そのものは変わっていないから危険は十分存在する。しかし、ヒマラヤのイメージが変質した。今年八八年八月八日、ガッシャブルムⅡに五人が登頂した橋本しをり隊長以下十一人から成る日本・女子登攀クラブ隊の体験も、時代を物語っている。

オーストリア、フランス、スイス、メキシコ、アメリカ、ベルギー、日本と、ベース・キャンプ周辺は各国隊で大変な賑わいだったそうである。比較的ルートの容易なＧⅡはそれだけ人気があるのだろう。

二千㍍近いフィックス・ロープを準備、三個所の前進キャンプを出して頂上を攻略した女子登攀クラブ隊の古典的と言える登り方に対して、外国隊の多くは「アルパイン・スタイル」だった。ただし、何がなんでも先行する、という元気隊ばかりではなく、ラッセルの苦労を最小限にするために、女子隊の後を常について行く合理主義のパーティもいたらしい。

興味あるのは、一種の省エネ策というべきか、フィックスされたロープや高所に張ったテントがそのまま売買の対象になっていることである。

「あのフィックスは私がフランス隊から買ったものだから、使ってはいけない」とドイツの登山家は言ってきたし、「スイス隊のC2とC3のテントとあなたたちのテントを交換しないか」との話も持ちかけられたという。

少人数が最小限の装備で効率的に八千㍍を登るには、こういう取り引きも必要ということだろうか。それにしてもたくさんのパーティーが夏の剣や穂高のようにはいってきて成立する話である。一口にアルパイン・スタイルといっても、レベルはいろいろで、「できるだけ手間をかけずに」登ろうとする結果に過ぎないことも、あるようだ。

ヒマラヤに限らず、山の世界が変わったという話をよく聞く。実はかなり以前からこのことは言われてきた気がするが、最近になって一層それが強まっているようだ。それなら、登山の世界の何がどんなふうに変わりつつあるのか、今、山でどんなことが起きているのか、をたまには時間をかけて考えてみるのもいいだろう。

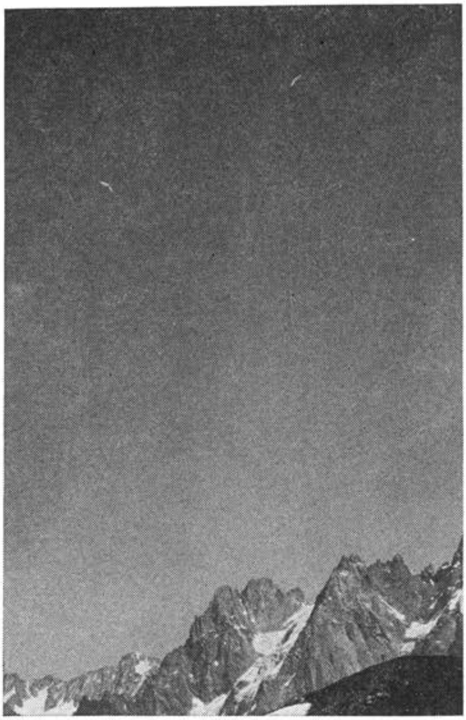
まず、海外を舞台に最近起きていることを思いつくままあげてみよう。世界最高峰、エベレスト（あるいはサガルマータ、あるいはチョモランマ）について言えば、初登頂以来三十五年たって、東壁を含めあらゆるルートが登られた。無酸素、厳冬期、単独、女性初、五度登頂など、にぎやかな冠をつけて延べ登頂者数は二百二十人に達している。

十四座といわれる（実際にはピーク数はもっと多い）八千㍍峰の全てに立った人間が二人出たことも、特筆される。イタリアのラインホルト・メスナーがその一人目だったが、ヒマラヤに完全なアルパイン・スタイルを持ち込んだこの希有な登山家の名は永久にヒマラヤ登攀史に刻み込まれるだろう。

二人目の十四座登頂者であるポーランドのイエジ・ククチカをはじめ東欧の登山家の活躍や韓国登山界のヒマラヤ進出も近年の刺激的傾向と言える。

「国際隊」というと、かつてはいかにも大がかりな響きがあったが、登山許可取得の簡便化と経費の節約を目的とした各国混成隊の増加も注目に値する。「国」を離れた独特の山遊び人の世界がそこに生まれているように思われるからだ。地球の環境問題などで、こうした連帯は将来より深い意味を持つのでは、と私は期待している。登山家同士のコミュニケーションというのは、一般に考えられている以上に重要である。

大がかりではない、小さなエクスペディションが各国を通じて主流になり、スキー、パラグライダー、ハンググライダー、カヌーなど他のジャンルで使われてきた道具を併用した登山が目立ってきた。冒頭、プロフィの例であげたようにそれはアルプスで始まり、ヒマラヤに持ち込まれたようである。



アルプスの空に舞う

既成の登山と一線を画しているように見えるフリー・クライミングの隆盛もいろいろな意味で重要だ。庭先ででき る、可能性への挑戦といおうか、肩に力を入れずに大いなる困難に挑むクライマーたちは、いま世界中にふえつつある。

日本の国内を見てみよう。フリー・クライミングの舞台があちこちに広がっている反面、「山に登らなくなった若者たち」の話をよく聞く。大学山岳部は相変わらず低迷しているし、山々は四十才以上の登山者が主流だ。穂高や三俣蓮華の小屋へ行けばわかるが、三千㍍の稜線にかこまれて雰囲気にあふれたフランス料理やコーヒーを楽しめるようになったのも、従来の山のイメージを変える出来事だ。

小さなコンサートや写真展をやる山小屋もあって、何やら山の文化人集会所の様相もないではないが、山に新しい感覚を持ち込もうとする試みであることはわかる。登る側がそういうものを欲しているのである。山と都会の接点が昔に比べぐんと近づいている。しかし、その主体は若者ではない。テント、ウエア、用具などあらゆる装備が軽量化、機能的になっているのに、若い世代が山に登りたがらないのである。

以上、大ざっぱに登山を取り巻く環境の諸相をあげてみたが、これらの傾向から浮かび上がってくるのは何か。登山の多様化といえば無難だが、その根底にあるのは山以外のフィールドを含めた「遊びの精神」の拡大ということではないか、と思う。

言うまでもなく、山に登るという行為は、本来探検精神と不可分のものだった。人はなぜ山に登るのか、と言えば、その向こうに何があるのか知りたい、見たいという衝動が抑えられないからだ、と私は考えている。地球で最も高いてっぺん、エベレストの初登頂がなぜ大騒ぎに値したかと言えば、そこはこれ以上目線を上げずに済む唯一の場所だったからだ。

その意味では、登山は昔も今も終始個人的な行為である。百人の登山家が参加する大パーティーで何人か登れば「成功」というのは本当はおかしい。てっぺんの視野を獲得できなければ、その人間は登山の本来の満足は得られないからだ。知的抑制力ある動物である人間は勿論、「登れなかった満足」を自らに言い聞かせられるが、程度はともあれ誰も心の底では敗北感を味わうのである。

しかし、一方でてっぺんに立つことが日常化してくれば、優先順位は変わってくる。大勢の人間に踏まれた頂きは、なぜかその素晴らしいパノラマをもってしても感動の質量が小さくなるのである。ヨーロッパ・アルプスでも、日本の三千㍍峰でも、ある時期から登頂そのものより「壁」や「谷」からの登攀、それも夏より冬の厳しい条件下での登攀の方が価値あるものとなった。ボルトやアイスハーケン、バイルからハンモックにいたるまで登攀用具が次々に考案され、ザイル、テント、靴、ウエアなどの装備も強靱、軽量化した。それらの新兵器に支えられて、一つの壁

に幾本もの新たなルートが隣あって切り開かれた。

それでも、こうした困難なルート、いわゆるヴァリエーションを抜けてクライマーたちが必ず目指す場所があった。頂きである。

どんな先鋭的な登山でも、それは変わらなかった、と思う。時間切れでやむなく壁を抜けた所で尾根通し、あるいは懸垂下降で下山することはあっても、それは「完登」とは言わなかった。頂きに達しなければ、単なる崖登りになってしまうではないか。

頂きを意識しない登攀もやがて現れた。難度を追求するクライミングで、もともとゲレンデで生まれたのだと思う。ハーケンやボルトを使わずに岩と遊ぶフリー・ソロを私が初めて見たのは、もう二十年以上も昔、三つ峠の岩場でだった。当時は私もノーザイルで一般ルートを登り下りできたから、確保なしのクライミング自体には驚かなかったが、一人のクライマーがあまりに優雅に難度の高い岩とたわむれるのを見て、茫然としたことを覚えている。

すでにヨセミテの岩場では、本格的なフリー・クライミングが生まれていたのだろう。やがて、ボルダリングという聞き慣れない言葉が広がり、トレーニングのためと思っていた岩とのたわむれがそれ自体で一つの世界となった。垂直、またはオーバーハングしている壁に上半身裸でぶら下がるクライマーの姿に衝撃を受けた登山家は少なくないはずだ。いくら素手で立ち向かうといっても、ちょっと、という感じで、岩場では長袖、長ズボンが当然の既成の登山常識では受け入れがたいものだった。

しかし、そうした驚きをよそにクライマーたちは、どんどん活躍の場を広げていった。以前は登攀対象にならなかった岩場にいくつもの困難なルートがひかれ、筋肉を鍛え上げた男や女が軽やかにダンスを舞った。もともと落ちることを前提にしているから、というと語弊があるが、フリー・クライミングは確保がしっかりしている限り、過去のロック・クライミングと較べて困難度は高い一方で安全なスポーツである。河原に転がっているような石（ボルダー）を攀じるボルダリングにしても、高度はあまりないので、遭難相次ぐという事態にはなり得ない。

クライミング・ファッションを見れば、それが従来考えられてきた登山の世界とだいぶ趣を異にしていることがわかる。快適な条件下、短時間で登りきるための機能的なウエア。ピンクや黄や緑の、さながらシンクロナイズド・スイミングのごとき派手なデザインは、岩を攀じることの快楽を叫んでいるかのようだ。そこには何かと求道者の匂いをふりまきたがるオールド・オーソドックス・クライマーの影もない。

最近、フランスはじめヨーロッパ各地で盛んに催されるようになったクライミング・コンペは、いまやクライミングが「見せる世界」に変わりつつあることを証明している。パリの屋内体育館で八八年一月に開かれた国際大会では、高さ一九・五㍍の人工壁に世界を代表する男女クライマーが腕を競い、六千人の観客を湧かせた。もともとソ連などでは早くから岩登り競技大会をやっていた。ただ、観客を念頭にいれたこのような賞金つきパフォーマンスではなかった。

今日のように、力と技術の公開競技が可能だとすれば、次に来る発想は決まっている。

何とオリンピックである。「クライミング」が五輪種目の一つになるなんて、過去誰が発想しただろう。無論まだアイデア段階だが、既に本気でこのことを考えている人たちがおり、そのうちデモンストレーション種目ぐらいには確実に登場してくるに違いない。その場合、女性の部の方が多分人気が出るだろう。

大学山岳部の凋落

という、いまや古典ともいうべきテーマについてここで考えてみる。その理由の一端が、いま述べてきた事柄の背後にちらついているような気がするからだ。

四年なり五年なり、の貴重な遊びの時間（学問の、などという若者がいたらお目にかかりたいくらいだ）を、たて系列の価値観に支配されているように見えるクラブに捧げたくない、という気持ちが青年たちの間にまずあるだろう。山へ行くのは一人でもできる。ＯＢを含め、アルピニズムの基本についてしち面倒くさく訓戒を垂れるような暗い先輩どもの存在は「疲れる」ばかりだ。

それに、山だけやってりゃいいものではないのだ。スキーも、ヨットもスキューバ・ダイビングも軽くこなしてま

あ、人並。山岳部などというまかり間違えば在学中それだけ、ということになりかねない（そして多少の危険のある）組織は重すぎる。

ライフ・スタイルの変化。結局はそういう言葉でくくるしかないのかも知れない。どうせやるなら、フリー・クライミングのからっとした世界の方が心をとらえるだろう。

足慣らしに、よく奥多摩の山へ走りに行くが、電車の中にいわゆる中高年登山者またはハイカーが多いのには感嘆する。皆コールテンの帽子、ニッカーズボン、軽登山靴といった本格的いでたちで、耳に入ってくる話の様子ではほとんど毎週山に出かけている人も少なくない。

八十才生きることが当たり前になったこの国で、仕事の第一線を退こうとしている人々の心が大自然に向かっていく気持ちはよくわかる気がする。もともと好きだった人もいるだろうし、新しい世界のとびらを叩いた人もいるだろう。

夏の三千㍍稜線でも、若者よりは壮年世代の男女が目立つ。テント場や小屋を早立ちしてじっくりじっくり歩くこれらの人たちを見ると、大学山岳部の伝統は、ひょっとして彼らがある部分を引き継いだのではないか、と思えてくる。

求道的という言葉が適当かどうか別にして、山岳部の世界にはほかのスポーツ・クラブとは違う質の、独特の緊張があった。それは、多分命の問題がいつもついてまわっていたからだ、と思う。山に対するおそれ。それを壮年の登山者の多くも抱いて登っているように感じられるのである。

ふり返ってみると、人間はあれこれ知恵をしぼって山を楽しむ手段を考え出してきた。最近目立つのは、空と水の利用である。

冒頭の北壁スピード男、プロフィがグランド・ジョラスのてっぺんから麓に舞い降りたように、パラグライダーはいまや冒険的クライマーの下山の足となっている。チョー・オユーの頂きから高橋和之が飛んだように八千㍍からで

さえそれは可能なのだ。スキーをはいたら降りられない所がない、と言えるくらいに果敢にスキー滑走をやり続けてきたやはりフランスのジャン・マルク・ボワバンも、ガッシャブルムⅡ峰の頂上からハンググライダー降下をやってみせた。超一流のクライマーでもあるボワバンは、困難なアルプスの壁を連続登攀しながら、スキー、ハンググライダー、パラグライダーを駆使して、「下りのもう一つの冒険」をアピールした、という点でパイオニアの役割をはたした。

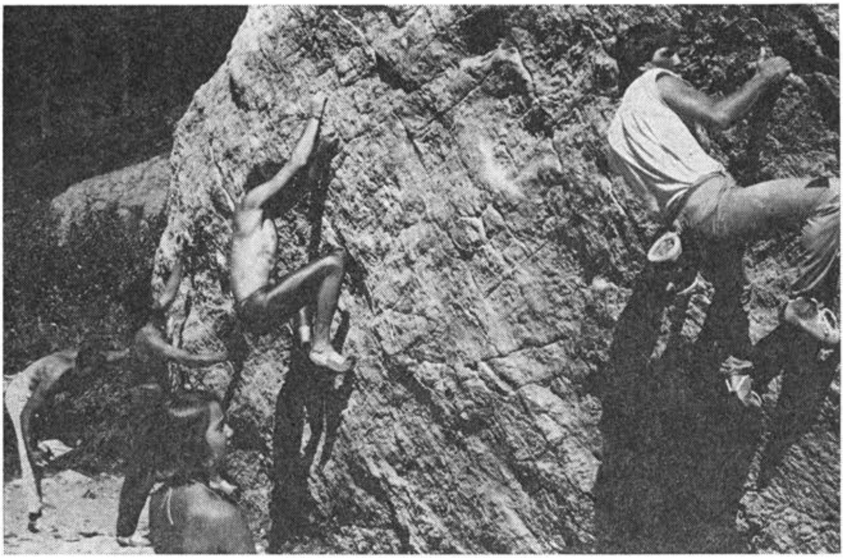
水の利用とは、カヌーのことである。山登りと不可分のスポーツとして市民権を得ているようだが、日本ではカヌー・ファンはふえていても、登山行為に取り入れるまでには至っていない。エベレスト山麓を流れる急流、ドゥド・コシをカヌーで下りるアメリカ人たちの冒険をこれまたテレビで見たが、よく浮かび上がってこれるものだ、と感心するほど激しい川下りだった。さんざん水中にカヌーごと引きずりこまれ、その都度水の底から何度でも這い上がってくる男たちの満足気な顔を見ると、遊びとは本当に限りない世界なのだ、と気づかされる。

アウトドアー・スポーツという言葉は、いつ頃日本に定着したのだろうか。カヌーやマウンテン・バイクだけでなく、小屋の建て方、料理のやり方など野外生活のＡＢＣをあちこちのメディアが教えてくれるようになった。登山を取り巻く環境はこうして少しずつ変わっていき、山のイメージはある意味で拡散されていった。

頂きの感動についての話に戻す。

登山とは、つまるところ山のてっぺんにどれだけ深い感動をもって立てるか、という遊びではないか、と私は考えている。地球最高峰の頂きに第一番に立つことだけが最大の感動とする人にとっては、一九五三年五月二十九日に夢は断ち切られたことになる。アイガーの北壁を初登攀したかった人は半世紀前の一九三八年七月二十四日にハインリッヒ・ハーラーたち四人とザイルを組んでいなければならなかった。

ヒマラヤの高峰が登り尽くされ、エベレストに五回も登る猛烈男（ネパール人のスンダレ）が出てくる時代では、普遍的な価値を持つ登頂は見出しにくい。だから、登山家たちはあれやこれや頭をひねり、大義名分を考え出すのに



シャモニの国立登山学校の講習

全力をあげるが、結局、最後は自分らしい頂きを踏めるかどうかしかないのである。

登山界からはもっぱら皮肉られることの多かった八八年春のエベレスト三国合同登山は、その意味では残された大義名分をかき集めての大がかりな試みだった。しかし、初めから登れて当たり前という側面があったために、登攀内容そのものよりは、金を出したテレビや新聞に取材の現場を提供する役割がもっぱら強調されることとなった。登山がメディアの素材になることはそれまでも数多くあったが、「てっぺんからの生中継」のインパクトの強さが、登山行為を越えてしまったという点で、特異なケースと言える。

大げさなものより小さいものの方がいい、という時代だ。

これからの山登りはもっともっと個人の志向を強めていくだろう。それは、普遍的な価値観とは絶縁するということでもある。

たとえば、メスナーとククチカが果たしたヒマラヤの八千㍍峰十四座登頂（前述の「クォータ8000」隊がねらっている）は、すでに三番煎じだから今後は大した意味は持たない。どうせならヤルンカンやローツェ・シャールなど十四座からはずされている八千㍍をねらってほしいし、わざとエベ

レストに登ってやらない十三座登頂などというのもいい。ランニング登山の猛者の中には例の「日本百名山」を一カ月で登れるのではないか、と考えている人がいるし、海外の山は、ヒマラヤに限らないからそれぞれの大陸で一つずつ非常に面白い山登り（最高峰が面白いとは限らない）をやってみるのもいい。

登山は、長い間極めて精神的な要素を持つ行為とみなされていた。用具の普及とスピード化ですっかり忙しくなった現代のクライマーには、そんなヒマはない。モン・ブランに登り四時間四十七分、下り二時間という特急記録が生まれる時代である。人々はテニスをやるような感覚で気軽に壁に取りつき、空を舞うように見える。

思えば、「のろのろ、一所懸命」皆、登ってきたものである。早く歩きたくとも荷は肩に食い込むし、靴は重い。そんな登り方につきあっていられない先端部分が、軽やかに山と遊び出した、と言ってもいい。筋肉を鍛え、思いっきり空に飛翔する人間たちは「登山家」というよりは「自然遊び人」と呼んでもらいたいだろう。

女性たちの中にも新たなヒロインが誕生しつつある。マラソンやボディビルで男たちの領域とされていた分野に進出した彼女たちは、フリー・クライミングの舞台でも高難度のルートをあざやかにこなす。

フリー・クライミングの記録には「ムーブ」「フラッシング」「ジャミング」「ロワーダウン」などの聞きなれない言葉が頻繁に出てくる。それが、新たな文学のジャンルになるかどうかは疑問だが、中には独特のリズムとユーモア感覚に溢れたものが少なくない。大体「ロリータＪＵＮＫＯ」「ほんにゃらごっこ」「水曜日のシンデレラ」と聞いてルート名（いずれも小川山の岩場）とわかる人は、旧式の登山者の中にはいないのではないか。そんな感覚で岩と遊んでいるのだ。

登山の変質という、やっかいなテーマと取り組んで、じきにこれは我々の日常とも関わることなのだと、気づいた。山の世界だけが変わっているのではなく、時代がゆっくり変容しているのだ。

これから当分は山の世界でも「軽さ」が強調されるだろう。軽薄、ではない。相当刺激的な登攀をしても、気負う

ことのない精神の軽やかさである。重いものは要らない。「征服」も「遠征」もナンセンス。「頂き」すら大して意味を持たない。したいようにやって、時には身軽にほかの世界に転身する。

そういう時代であることを承知して、私はなお「頂き」にはこだわりたい。北穂のてっぺんからB沢やC沢を下って滝谷を登攀することの違和感にこだわって、毎年のように雪の蒲田川から第一尾根をめざした時のことを忘れるわけにいかない。

先人たちが、必死で刻み込んできた登攀の記録にもこだわりたい。今ふうに言えば「ださい、暗い」ものもあるが、そこに流れる情熱は、これからも生き続けるべきものである。

軽やかさに魅かれながら、ふりこの如く揺れて、山を見ていきたいと思う。

『山日記の栞』のこと

――日本山岳会百年史の資料ノートとして――

望月達夫

本会が昭和五年（一九三〇）に創刊し、戦時中一時とだえたことがあったにせよ、半世紀以上も連綿と刊行されてきた『山日記』については、会員各位のよく知るところであるが、『山日記の栞（しおり）』となると、古い会員はともかく、新しい会員のなかには知らない方が多いと思う。

それは一口に言うと、戦後『山日記』が復刊されて間もなく、当時の編集担当者たちが、『山日記』の販売を促進するために、苦心して作り上げた宣伝用の小誌と言って差支えなかろう。製作者の一人である村山雅美氏は、これを「山日記のポンビキ」と言っている。ポンビキとは客引き（あまりよい意味には使われないが）の意である。

実は、先年この栞が、発行所の茗渓堂にも完備されていないことを知り、本会の図書室はどうかと調べたところ、そこにも完全に揃っていないことが判った。もともと精々三〇頁（ページ）ばかりの小誌で、発行されたのが一九五〇年代の初めから六〇年代の終わりまでの十数年間であったため、散佚される憂目にあいやすい代物（しろもの）であった。幸い私の手許に殆ど全部揃っていたので、その当時、コピーを二部作成し、一部は本会図書室に納め、一部は茗渓堂に渡したことがあった。

『山日記の栞』が単なる宣伝誌だけであったなら、敢えて一文を草する価値のないものだが、そこに盛られた編集

者の文章には短いながら、戦後間もないころの『山日記』作成上の意図、それに注がれた編集者の情熱などが、率直に現われているので、会史の一端を知るうえで矢張り見のがし難い資料であると考える。

また、毎号十名ぐらいの会員会友から執筆を求めた随想には、いま読み返してみても掬すべき内容のものが少なくなく、その点からも閑却すべきでないと思うのである。会の正史を綴るとすれば、この栞などはむしろ重視されるものではなかろうが、先に禿筆(とくひつ)を執った有志閑談会がそうであるように(『山岳』第八十一年—一九八六年—参照)、本会のようにユニークな会の伝統は、案外このような、会の公式な事業でないもののなかに如実に現われているように思う。そのことも、栞の編集に一度もかかわったことのない私が、栞に対する愛着絶ちがたく、敢えて筆を執った理由の一つである。

いま私の手許に残っている栞によると、最初に発行されたのは昭和二十七年(一九五二)十月頃で、題名には栞の文字が、まだどこにも使用されず、『山日記　一九五三　お知らせ』として、日本山岳会のマークをほぼ中央にあしらったものである。型は『山日記』と同じ 14.5 cm×10 cm のいわゆる文庫判で、『山日記』のカバーに使われた濃赤色のラシャ紙が表紙に用いられたが、この色彩は僅か一回の例外(一九五四年版の橙色)を除き、爾後すべての栞に踏襲されている。

ところで、栞の号数のことに触れると、元々この栞は、当初から計画的に毎年一回必ず発行されるときまったものではなかったためか、号数が記載されていない。そして昭和三十四年(一九五九)十二月頃に発行された一九六〇年版の編集後記に「〈山日記〉の栞もこれで九冊目になった」とあるので、一九六〇年版が九冊目ということになるわけだが、私の手許の栞によると、それは八冊目であって、これでみるかぎり、先の昭和二十七年(一九五二)の前年に一冊発行されていないと、冊数が符合しなくなる。

この辺が甚だ曖昧なところで、先にも「私の手許に殆ど全部……」と書き、完全にとは書かなかった理由だが、その細かい点は後述することとして、読者の理解を容易にするため、栞の全貌を表示してみたい。

号数	題名	頁数	発行年月	編集者	表紙の色	摘要
1	(筆者の手許にないもの)					
2	山日記 一九五三お知らせ	28	一九五二年(昭和二十七)十月	村山雅美・林和夫・雨宮淳三	濃赤	
3	山日記 一九五四年版	32 写真8	一九五三年(昭和二十八)十二月	村山雅美・林和夫・原正喜・雨宮淳三・戸野昭	橙	目次に「栞」の文字初めて使われる
4	山日記 一九五五年版	40 写真2	一九五四年(昭和二十九)十二月	松丸秀夫・藤井健・大木保太郎・戸野昭・皆川完一	濃赤	目次に「山日記」の栞とあり
5	山日記の栞 一九五六年版	28 写真2	一九五五年(昭和三十)十二月	大塚博美・藤井健・大木保太郎・皆川完一・相蘇良正・松丸秀夫・渡辺公平	濃赤	表紙に初めて「栞」の文字が現われる
6	山日記の栞 一九五七年版	24	一九五六年(昭和三十一)十二月	小倉茂暉・皆川完一・大木保太郎・春田俊郎・松丸秀夫・渡辺公平	濃赤	
7	山日記の栞 一九五八年版	20	一九五七年(昭和三十二)十二月	春田俊郎・加藤元一・坂本矩祥・斎藤光司・田島汎・高島勤・徳久珠朗	濃赤	
8	山日記の栞 一九五九年版	24	一九五八年(昭和三十三)十二月	加藤元一・小泉満・宇田川允敏・徳久珠朗	濃赤	
9	山日記の栞 一九六〇年版	32	一九五九年(昭和三十四)十二月	加藤元一・高島勤・甲斐恒夫・金須久枝・徳久珠朗	濃赤	編集後記に「〈山日記〉の栞もこれで9冊目になった」とある
10	山日記の栞 一九六一年版	20	一九六〇年(昭和三十五)十二月	加藤元一・篠原敏弘・徳久珠雄・富岡卓也・渡辺公平	濃赤	「『山日記の栞』が早くも10号を数えると知り…」(村山)の記述がある

11	山日記の栞　一九六二年版	24	一九六一年（昭和三十六）十二月	渡辺公平・皆川完一	濃赤	
12	山日記の栞　一九六三年版	20	一九六二年（昭和三十七）十二月	皆川完一・大貫良夫	濃赤	
13	山日記の栞　一九六四年版	20	一九六三年（昭和三十八）十月一日	皆川完一・岩佐吉雄	濃赤	
14	山日記の栞　一九六五年版	32	一九六五年（昭和四十）八月一日	皆川完一（代表）	濃赤	
15	山日記の栞　一九六六・七年合併版	40	一九六六年（昭和四十一）十二月一日	伊藤寿男・杉野弘恭・竹内通雄・水瀬昭典・水野弥彦	濃赤	
16	山日記の栞　一九六八・九年合併版	32	一九六八年？（昭和四十三）	大貫良夫・水野弥彦・鹿野勝彦・村瀬満男	濃赤	

〔註〕

一、号数は表示されていないので、筆者が便宜上つけたものである。以下本文でも×号として記述する。

二、第一号は筆者の手許にない（詳細は本文で説明した）。

三、発行年月日については、栞に明記されていない場合が殆どであるため、推定したものが多い。即ち、当該年の『山日記』は、前年の十月乃至十二月に発行される慣行であったから、栞も、宣伝誌の性質上当然そのように考えた。例えば、一九六〇年版の『山日記の栞』は、『山日記　一九六〇年版』が一九五九年の十月〜十二月に発行されたので、その直前か、ほぼ同時に発行されたものと推定した。

　ただ、発行所の都合等で、稀れに当該年の一月になって『山日記』が発行されたこともあったように記憶している。その場合、栞もまた一月にずれ込んだかも判らないが、いまそれをつきとめる術がないので、右の様に一様に扱った。第十四号及び第十五号、第十六号の合併号に於て、かなり不規則の発行になった。

四、編集者は、栞だけの編集者が判るものと、そうでないものとがあるので、『山日記』の編集者全員を一応列挙しておいた。

五、第四号―一九五五年版の栞には、大佛次郎作『旅路』の一節、「赤いクロオス表紙の 山日記の中に……」が、表紙の2にかなり長く引用された。当時、関係者の間でも話題となったことで、たくまずして『山日記』の宣伝になったと、編集者たちが考えての措置であった。

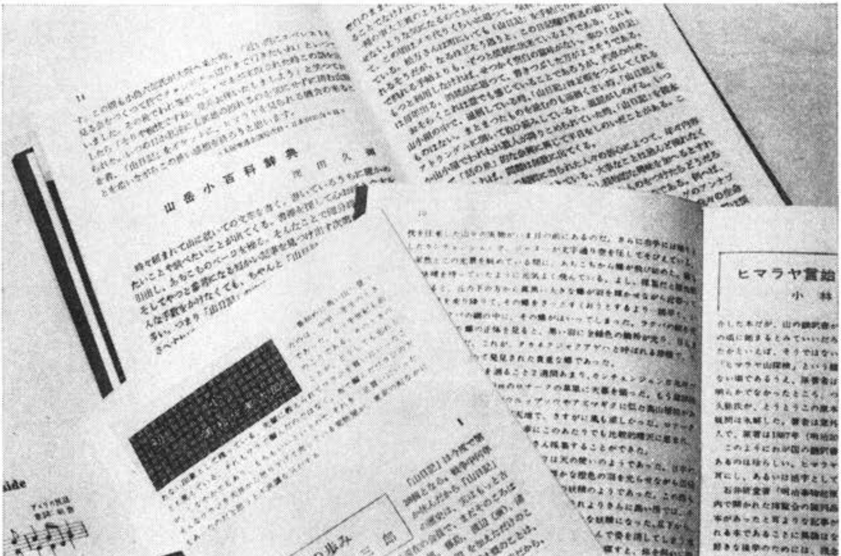
以上表示したものが、栞の全貌である。ただし第一号と記したものが、私の手許には残っていない。くどいようだが、そのことは第九号の編集後記である「栞の編集を終って」の一文で、初めて私が気がついたことである。後記の筆者はK・Wとあるので渡辺公平氏と推定される。ただし、その文中で同氏は「いちばん最初は、たしか鳥海山で国民体育大会が行われた年に、国体に集ってくる全国の登山者諸氏に、その次の年の＜山日記＞を読んでもらいたいと思い、その紹介と宣伝をかねて、予告篇のつもりで編集したものだったように記憶している」と書いている。

鳥海山で国体登山の行われたのは、第七回の国体で、昭和二十七年（一九五二）の秋であるから、もしそれが正しければ、表の第二号が最初の号となるわけで、既にここに誤りが感じられる。

結論を急がずに、更に第十号を見てみよう。その最後の方に、初期の編集者の一人だった村山雅美氏が『ぽん引』によせて」の短文を寄せているが、その中で、『山日記の栞』が早くも10号を数えると知り驚いた。十年一昔と一口にいうが、＜山日記＞にまつわる時のうつりは、私には南極、マナスル、国体の情景が交錯する。たしか鳥海で国体登山の行なわれた頃であったと思う。相棒のA君（注―雨宮淳三氏と推定）と図り＜山日記＞の予告版を計画したのである。……」と述べ、ここでも鳥海山国体登山が引合いに出されている。そして「編者の言葉」をみると、「＜山日記の栞＞もこれで第10冊目になる。……昭和25年鳥海山で国体登山が開かれた時に……」とあるが、この昭和二十五年は誤りで、前述のように昭和二十七年でなければならない。

第九号、第十号共に夫々九冊目、十冊目と二回に亘って明記されているし、また栞が、それまでに何十冊と発行されていた訳ではなく、そんな簡単なことが二度まで誤って記されるとも思われないので、第一号が当然あったと考えるのが自然であろう。それで表には、第二号の前に一冊があると示した。しかしまた、鳥海山国体登山で配布された


山日記の栞
1963年版
山日記の栞
1964年版
山日記の栞
1965年版


山岳小百科辞典

のが最初であると、二度までも書かれているところをみると、第一号は刊行されていないで、第二号が最初ではないか、との推定もなりたつ。

この点について、先年当事者の村山氏に問い合わせたところ、同氏は態々雨宮氏（現在鹿児島在住）にもきき合わせて下さったが、何分、古いことであり両氏の記憶からは明確な解答が得られず、第一号に該当する資料も見出していただけなかった。

また発行所の茗渓堂に於ても、この解答は同様に求められなかった。万一、会員のなかで、明快な解答を寄せていただける方があるなら、是非ご教示を賜りたい。

最終的に私は、表示した第二号が創刊号である可能性が強い、と考えるものである。

やや細かいことを縷々記してしまったが、次には栞の内容を主として、号数別に述べてみたい。

第二号

「編輯室より」として村山雅美、林和夫、雨宮淳三の三氏の短文があり、「購読の諸家より（到着順）」として松方三郎、藤島敏男、明大山岳部中尾正武、学習院山岳部鈴木迪明、桐明高校山岳部佐藤正衛、明大山岳部大塚清一、深田久彌、吉沢一郎、渡辺公平、角田吉夫、田辺主計、坂倉登喜子、見学玄、冠松次郎、成瀬岩雄、島田巽の諸氏が短文を寄せている。

村山氏の文中、同氏が『山日記』の編集に係わるようになったのは昨年（即ち昭和二十六年＝一九五一）と明記している点を特記しておく。

第三号（目次に初めて栞の文字が使用された）

『山日記』に挿入する写真版八頁を添付。

内容　煮つめた味＝松方三郎、テンシンの家のお茶＝村山雅美、ウェストン師にほめられた「山日記」＝田辺主計、

非登山家必携＝戸塚文子、アコンカグア峯での一日＝今村俊輔、僕の山行とカメラ＝風見武秀、妙な因縁＝久米庸孝、ぼくの「山日記」＝山川勇一郎、スキーツアーと「山日記」＝沢田武志、山のスケール＝海野治良、エ峯登頂の報到る！＝竹節作太、山へ行く前の準備の手帖＝黒田初子、高山植物図譜について＝山下一夫、富士かいわい＝百瀬舜太郎、雪の八幡平と八甲田＝村井米子、編輯室から、愛用者の希望に応えて＝林和夫、新しい試みへの苦心＝戸野昭

林和夫氏の文中に、戦後になって茗溪堂が『山日記』出版にかかわるようになり、その苦労に対して犒いの言葉が書かれている。また、本号の最後に近刊予告として、『山の幸』なる山の文集が、昭和二十九年初頭に発行される旨の広告文が載っている。編集者は村山、雨宮、朝比奈菊雄の三氏。これは『山なみ』と書名をかえ、昭和三十年五月に発行された。茗溪堂発行の山岳書としては、ごく初期のものである。

最後の三二頁に栞の説明がやや詳しくなされている。

第四号

写真版二頁を添付。

内容　平原に聳ゆる山々＝伊藤秀五郎、ピッケル談義＝西岡一雄、ガネッシュ・ヒマールという山＝諏訪多栄蔵、大雪山花譜＝山下一夫、ヒマラヤへの夢＝吉沢一郎、山岳小百科辞典＝深田久彌、やまとうた＝山本学治、山の時間＝袋一平、国体の思い出＝跡部昌三、大雪山を囲むアイヌ地名＝奥田五郎、国体登山の愉しさ＝星野重、座右の書＝松方三郎、編輯室より＝戸野昭、山日記への注文＝高橋定昌

戸野氏の一文は五頁半に及ぶ長文のもので、編集者の熱情の強さをよく現わしている。

なお栞の表紙は濃赤色のラシャ紙で、『山日記』のカバーに使われたものと同じだが、そのカットは一九五五年版〜一九五七年版の三冊が当該年の『山日記』のカバーとちがい、一九五八年版〜一九六五年版の栞は『山日記』のカバーと同じである。また一九六六・六七年版は『山日記』のカバーとちがうが、一九六八・六九年版は一九六九

年版の『山日記』のカバーが使用されている。

なお本号の表紙は白川洋作氏、カットは長谷川三千春氏だが、長谷川氏はその後一九七五年まで二十年に亘ってカバーのカットを描かれた。『山日記』及び栞にとっては忘れることのできない人と思うが、本会員名簿にもその名はなく、会員中で同氏をよく知っている方はむしろ少ないのではなかろうか。先般、茗渓堂の坂本矩祥氏から聞いたところでは、長谷川氏は渡辺公平氏の都新聞時代からの友人で、一陽会所属の画家であり、『山日記』のカバーのカットを画くようになったいきさつは、渡辺氏との関係からである。同氏は好日山荘まで出かけて、山の道具のスケッチをした由。既に故人になられた。

本号の栞の表紙の2に大佛次郎作の『旅路』から、長文の引用があることは、前述「註」の五の通りである。

第五号（この号から表紙にも栞の文字が入る）

写真版二頁を添付。

内容　高校登山とその指導者のために＝山日記編集室、私の「山日記」利用法＝藤島敏男、ヒマラヤ一九五五―五六＝吉沢一郎、山の歌＝辻荘一、高校山岳部の在り方＝伊藤洋平、山で読む本＝串田孫一、季節のスロープ＝藤木九三、丹沢の今昔＝長越茂雄、マナスルのテント＝大塚博美、編輯室より＝松丸秀夫

表紙の3にはK・W（渡辺公平氏）のサインで「編集者の言葉」があるが、次に要点を再録しておきたい。「このささやかな小冊子は、ただ『山日記』の宣伝のために編まれたものではない。（中略）一人でも『山日記』の愛読者がふえることは、それだけわが国の登山者の教養を高め、情操を深くするものだという強い自負のようなものを『山日記』の編集者は誰でも持っている。せんえつだと思われるかも知れないが、昔からこのくらいの情熱をもって、この『山日記』は執筆もされ、編集もされているのだといっても云いすぎではない。（中略）単なる宣伝のパンフレットであるならば、読み捨てられてしまう惧れがあるだろう。そうしたことがなく、この小冊子が、これはこれなりに登山愛好者の愉しい読物として、いつまでも登山者のポケットや机上に保存されるよう、岳界のエキス

パートに含蓄に富んだ玉稿を頂いているのである。(後略)」

第六号

内容　南極・山・人＝藤木九三、マナスルの頂上＝日下田実、ナイロンとビニロン＝大塚博美、一九五六年のヒマラヤ＝吉沢一郎、「山日記」―私にとっては大切な「字引」＝田辺主計、日本におけるガルツェン君＝松田雄一、晩秋の蓬峠越え＝渡辺公平、机上ヒマラヤニスト＝深田久弥、編集室より＝松丸秀夫

第七号

内容　七〇〇〇m以上の山々＝深田久弥、南アルプスへの郷愁＝日高信六郎、乗鞍山頂の冬ごもり＝森下博三、山で食べることの楽しみ＝小原勝郎、一九五八年のヒマラヤ＝吉沢一郎、登山講習会とテキスト＝川又恒一、穂高昨今＝梶本徳次郎、ペンギンと山男たち＝朝比奈菊雄、編集室より＝徳久珠朗

第八号

内容　飯豊山に登る＝藤島敏男、ヘルマン・ブールの天幕＝加藤泰安、無題＝田辺主計、キリマンジャロの頂上＝後藤董子、黒部峡谷の今昔＝冠松次郎、マッターホルンの想い出＝今井友之助、ある登山家＝渡辺公平、メルボルン大学山岳部の集会＝松方三郎、ヒマラヤ考＝深田久彌、〈山日記〉編集の思い出＝松丸秀夫、編者の言葉＝H生

第九号

内容　山案内その他＝冠松次郎、山の気象と〈山日記〉＝氷見順一、〝山の旅〟を書いた頃＝河田楨、ヒマルチュリのキャンプで＝村木潤次郎、月山の山小舎＝山下一夫、山登りの Training＝麻生武治、金山行＝日高信六郎、一九五九年の登頂＝吉沢一郎、人ッ気のない山＝望月達夫、八甲田山昨今＝三浦敬三、レールダールの秋―北欧ヴァンデルングー＝雨宮淳三、7号台風後の山＝百瀬舜太郎、編集室より＝徳久珠朗、栞の編集を終って＝K・W本号の編集後記にK・W（渡辺公平氏）が栞もこれで九冊目……と書いていることは、既に述べた。ここには、それに続くところを少し抜いてみたい。「〈栞〉は〈栞〉として 一つの独立した読物としての性格を 次第に明らかにし

てきた（中略）週刊雑誌的なその場限りの読み物ばかりを集めたものではなく、読んで楽しいと同時に、何等かの意味において山を愛する人たちの心のカテとなり、うぬぼれるようだが、事実またそういった〈栞〉を毎年つくることができたと思っている。（中略）片々たる小冊子ではあるが、こうした山岳界の諸先輩や岳人諸氏の愛情に育くまれて、小さいながらも読みごたえのある独自の境地をひらいてきた。今後もこうした風格を濃くして行きたいし、また必ず行けるという確信が持てるようになった。（中略）〈栞〉は〈山日記〉の単なる宣伝パンフレットとするにあき足らず、これを一つの独立した読物として〈山日記〉の愛読者、各地の岳人諸兄にサービスするという精神によって支えられている限り、編集者もまた楽しみながら編集することができるわけである。（後略）」

因に渡辺公平氏は、この年の『山日記』の編集者には名前が見られぬから、栞の編集を専ら担当したと解される。

第十号

内容　チロールの山旅＝岩動洋二、原始時代の山＝湊正雄、山で死ぬな＝田中澄江、マッキンレーのBCにて＝交野武一、読書の楽しみ＝成瀬岩雄、ヒマラヤのプリンス＝並河治、便通＝住吉仙也、「ぽん引」によせて＝村山雅美、愛読者カードから、編者の言葉＝K・W

右の村山氏の文章の冒頭に栞が早くも10号を数える……と書かれていることは、先に引用したが、その続きをここに記しておく。「たしか鳥海で国体登山の行なわれた頃であったと思う。相棒のA君と図り〈山日記〉の予告版を計画したのである。（中略）『山日記の栞』という名はついぞわれわれの口には上らず、これを『ぽん引』と呼んでいた。／生みの親より育ての親という通り『ぽん引』の成長は目覚しかった。松方さんは〈山日記〉を煮しめた味といわれたが、雪どけの野につむ山菜の新鮮味がこの小冊子の身上である。〈山日記〉にまさる期待をこの小冊子によせて、かつての「ぽん引」同人A君と、南の果てを目指して一路南下する機会が一〇年目に巡り来たとは、『ぽん引』の縁はまた奇なものである」。当時村山氏は第二次南極観測及び越冬隊長であった。

また「編者の言葉」の中に、栞がこれで10冊目になる……の記述のある点も既述の通りである。

本号の二〇頁（最終）に、槇有恒・松方三郎監修、日本山岳会編『山日記小辞典』なるものが、明一九六一年初夏に刊行予定の広告が一頁に亘って出ているが、右は遂に上梓されずに終っている。

第十一号

内容　双六かいわい＝中村清太郎、ガルツェンの思い出＝細川沙多子、穂高小屋と重太郎＝折井健一、P29＝篠田軍治、北海道ブームと原野＝坂本直行、チチカカ湖の印象＝吉沢一郎、バス開通後の大台ガ原＝仲西政一郎、山小屋の不快指数＝渡辺公平、雨＝金坂一郎、愛読者カードから、編集室から＝皆川完一、あとがき＝編者

栞の「あとがき」に、「（前略）いつもなら〈山日記〉の前にできあがるのですが、今年は逆になりそうです。（後略）」の記述がみられる。因に十一月四日の日付がある。

第十二号

内容「山日記」の歩み＝松方三郎、焼岳の噴火＝小林国夫、山ダニ＝戸川幸夫、女性登山者と山小屋の飯＝穂苅三寿雄、フランス国立スキー・登山学校＝岡村崔、山の食慾＝水野祥太郎、南極糞談義＝村山雅美、ドルパタンのチベット人＝石坂昭二郎、地図あれこれ＝佐藤洸、編集室より＝大貫良夫、編集後記＝皆川完一

皆川氏の後記から抜萃してみる。「（前略）こうなると宣伝パンフレットというよりは、別冊〈山の豆随筆集〉とでもいった方がよいのではないかと自負している。（中略）こちらからお願いした執筆者はみなこころよく珠玉の随想をお寄せ下さり、〈山日記の栞〉のファンも年々増加しているということだ。（後略）」

第十三号

内容　初心＝浦松佐美太郎、エベレストの高度＝吉沢一郎、四時四五分＝草野心平、ある夏の思い出＝白井久夫、移動編集会議＝渡辺公平、現実主義＝桑原武夫、チロルハット＝石渡清、ドッコ沼の四季と私＝岩動静留、ある先蹤者＝朝比奈菊雄、山の歌＝朝倉宏、編集後記＝（完）

本号で栞としては初めて奥付がつき、発行日が昭和三十八年十月一日と明記された。

そして「この栞をお友達にさし上げたいお方は、その住所とお名前をお知らせ下さい。美しい山の絵ハガキと一緒にお送りいたします。」と書かれている。

第十四号

内容　〝赤い表紙の〟物語り＝久米庸孝、幻の巨峰＝松田雄一、殺したり殺されたりした話＝中屋健一、北の旅でのある日＝三田幸夫、ヒマラヤの蝶＝春田俊郎、ヒマラヤ言始＝小林義正、和山の宿＝串田孫一、南極劇場こぼれ話＝松田達郎、八十里越え＝佐藤金一、山旅古今＝馬場忠三郎、台湾の山＝山本朋三郎、ヨーデル＝本多勝一、南アと大井川＝柴田昌亮、飯豊の国体＝斎藤平七、編集後記＝皆川

本号は発行が大いにおくれた。「いつもなら〈山日記〉と同時に前年中に出すのがならわしでしたが、今回はおくれにおくれて、ついに六五年の秋山の候とはなりました。」と後記に見られるように、奥付の発行年月日は昭和四〇年八月一日であった。

第十五号（一九六六・七年合併版）

内容　異邦人＝加藤泰安、南極よもやま話＝武藤晃、北極カワヒメマス＝須江ひろ子、豪胆な若者たち＝田口二郎、カラコルムの組頭＝藤本慶光、朝熊参り＝河合茂美、山・スキー・テニス＝田中薫、カトマンズ・ハイク＝神原達、フクロウの洞穴＝大貫良夫、湯浜温泉＝渡辺公平、ある「シゴキ」＝加藤喜一郎、Wさんのこと＝平野清茂、少しむかしの話＝初見一雄

本号の発行年月日は奥付によると昭和四一年一二月一日である。

第十六号（一九六八・九年合併版）

内容　極点旅行＝村山雅美、カラコラムとドクトルマンボウ＝小谷隆一、山の絵＝深田久弥、ネパールの旅より＝伊藤邦幸、山を見てある記＝丹部節雄、秩父雑記＝清水武甲、軽装論の根拠＝松方三郎、霧の帽＝見学玄、アンデスの小村にて＝友枝啓泰、南極大陸の旅行＝池戸誠二郎、結晶と砕片＝大貫良夫

本号には編集後記も、また奥付もないので現在では正確な発行年月日が判らない。巻末に七頁に亘って「茗渓堂の山の本」の広告と解説がついている。茗渓堂発行の山岳書がふえてきた状況を物語っている。

一方、栞が『山日記』の編集とやや遊離してきた状態を示しているようにとれぬこともない。編集は茗渓堂社長自らがおこなったかも知れない。

本号を以って栞は終刊となっている。

栞の内容は叙上の通りだが、一見して執筆者の顔振れの多彩なことが、先ず目につくことである。また、或る個人の著作目録を作る場合など、栞に収載された著作の漏れやすいことにも気がつくであろう。執筆者ですら、書いたことを忘れてしまうことがあるからである。

最後に付け加えておきたいことがある。私は一度も『山日記』及び『山日記の栞』の編集に加わったことはない。そういう立場にある私が、栞の編集に携わった何人かの会員が現在おられるのを差しおいて、本稿の如きを執筆することに、自ら聊かの疑問を感じざるをえなかった。偶々私の手許に、栞がほぼ完全に残っていたことから（会員のなかには他にも完備されている方が、必ずやおられるとは思うが）、臆面もなく筆を執ったまでである。

従って、編集担当の方たちから見ると、誤った記述、少なくも不適当な記述がないとは言い難いかも知れぬ。また、大事な点を書き漏らしているかも判らない。それらを指摘され、教示される会員のあることを希望して已まない。

〔附記〕

『山日記』について

一昨年『山岳』編集者から私が依頼された題目は、『山日記』と『山日記の栞』の両方についてであった。『山日記』の方は、本会の出版事業からいうと、『山岳』、会報『山』と共に三本の柱の一つで、その重要度は到底栞の比ではない。『山日記』の史的記述こそ、本会の歴史のなかで欠くことのできない、重要な項目である。

これを記述する場合に、果たして私が適任なのかどうか、省みて聊か躊躇わざるをえない。というのは、私は曽て一度も『山日記』の編集に携わったことがないのである。戦前はともかくとして、戦後の『山日記』の編集を振り返っても、多年に亘り尽力された松丸秀夫、皆川完一、大貫良夫等の諸氏が健在であり、まだ他にも私の気のつかない諸氏がおられるようにも思う。本会として『山日記』の史的記述を残すのであれば、先ず第一に、そうした方々の意見をきかれるべきではなかろうか。それが私の躊躇する理由の主なものである。

次に、『山日記』の戦前時代について気のついた点を左に摘記しておきたい。

創刊当時の会の記録としては、役員会（理事会）議事録が失われているかぎり、『山岳』25年2号所載の松方三郎「『山日記』発刊に就て」が、私の見た殆ど唯一の記録である。ただ幸いなことに出版者、岡茂雄氏（梓書房主）が貴重な一文「『山日記』創刊の経緯」（同氏著『炉辺山話』・昭和50年刊・所収）を残されているので、それを見逃がしてはなるまい。

また、ロンスデール叢書の一巻として、一九三四年イギリスで刊行された“Mountaineering”（本書の詳細な図書紹介は『山岳』30年1号を参照）には、ウェストン師によって日本山岳会と『山日記』のことが、以下のように述べられている。

The Japanese Alpine Club—The Japanese Alpine Club, largely managed by climbers of experience in Europe and the Canadian Rocky Mountains, has a membership of some 800, while nearly all the principal universities and many of the larger high schools, have, like Oxford and Cambridge, mountaineering clubs of their own. Perhaps the most remarkable achievement of the J.A.C. is the publication of a handbook for climbers, on the lines of a well-known Swiss model, entitled *Yama Nikki* ("a mountain Diary"), probably the most thoroughly complete volume of its kind in existence. The information it contains as to routes, huts, the addresses of the various guides associations, equipment, etc., are full and invaluable, as are its important counsels on the varying conditions and differences of summer and winter climbing respectively. All the principal skiing localities, of which there are many, are indicated, and the necessary precautions to be adopted in procuring the use of the huts in them. While many of the summer routes lie mainly in the valleys, these are usually to be avoided in the winter owing to the danger of avalanches. It is unfortunate that this invaluable volume is printed only in Japanese, but the information it contains should by all means be consulted with the aid of one competent to read and to translate its contents.

なお、『山日記の栞　一九五四年版』に田辺主計氏が書かれた「ウェストン師にほめられた『山日記』」は、右のことを簡潔に述べたものである。

（一九八八年六月）

〔中・日・ネ　三国友好登山隊〕

中国・日本・ネパール　一九八八年
チョモランマ／サガルマタ友好登山隊登山を顧みて

大塚博美

▽まえがき

一九八八年五月五日、稀に見る好天に恵まれ、チョモランマ／サガルマタの頂を越えての縦走は成功し、TV中継も併せ十分な成果を収めました。

南・北から三名ずつの縦走隊員、北からのサポート隊員三名、TV隊員三名、合計十二名が山頂に立ち、各々の任務をはたしました。

特にTV中継による山頂からの大観は、世界各国の人々に多大の感銘を与えることが出来ました。

四月下旬から安定した天候のもとで、三国隊員のリーダーシップとチームワークによって得た成功だと思っております。

当初から、一日で、一チャンスのトライで目的を達成出来るとはだれも思っていませんでした。しかしながら、最終キャンプ、C7を八六八〇㍍に設営することがタクティックスの最重要課題だとして全力を投入し、予定通りこれを建設した時は、半ば目的を達した思いでした。

従来から見れば、TV中継が登山隊の負担になることは当然ですが、今回は、当初から別個のものと考えず、二つを一つとしてタクティックスを組みました。頂上にテントを押し上げる余裕がなくては、という意気込みでした。

また、五月五日、子供の日を交差縦走予定日、すなわち、TV衛星中継の日としたことであります。これは、TV側の都合から決められていったものでありますが、登山隊側から見ても、モンスーン前、五月上旬の天候安定期の第一次のトライは、タクティックス上のセオリーでもあるし、異議はありませんでした。むしろ、Xデーを明確にしたことによって、すべての日程、荷上げ管理が、五月五日を頂点として、逆算し、明確に運行プランが作成されるメリットもありました。

特にむずかしいと予想されたのは、山登りやTV中継の実際面でなく、国際協力の三国友好、親善交流のメンタルな面でありました。歴史、風俗、習慣、価値観の異なる中国、ネパールと、日本の若い登山者達が、厳しいヒマラヤの超高所の登山活動の中でいいチームワークがとれるか、意志の疎通をはかる言葉の障害をどう乗り越えるかなど、人の和が成功の鍵となることを考えると、大きな心配の種でした。

そして、サガルマタと呼称し、南側のルートを領土とするネパール王国。同様に、チョモランマのルートを領有する中華人民共和国。三国が平等の原則に立って、対等の立場で登山隊を編成し、何事においても平等におこなう、という大前提の合同登山隊にあって、日本隊の立場は非常に重要でありました。

三国の登山観、合同登山に対する考え方などの喰い違いは当然で、大事なことは、それらを素直な意見交換・討議を通じて、共通の目的達成のための具体的な登山計画、各国の任務分担の合意を得ることでした。

登山の実際は、両隊長の報告にゆずり、三国間交渉を通じこの登山を振返ってみたいと思います。

▽発端・理事会の決定

当初この計画は、本会の東海支部が中国とかかわりを持ち、ネパール側との折衝を経て骨格を作り上げ、一九八六年一月に本部に移譲の申し入れがありました。時を同じくして、読売新聞社から、読売グループ全体をあげてこの登山計画を支援し、共催したいという申し入れがありました。

私達は持込み企画にスポンサーがついて来たという現実に戸惑いました。JACの登山では、夢とロマン、創造性が根本にあって初めて計画が育っていくので、違和感は否めませんでした。

この計画内容をよく吟味する一方、会員には、多数の経験者、現役クライマーがいるので、機会を設け、長老、若手の意見を聞き、じっくり対応をきめていきました。

八六年四月下旬、CMA（中国登山協会）の史占春主席は、この計画推進のため来日し、関係有力議員を訪問した後、一夕、JAC招待の席上の挨拶で「JACはこの計画に参加の責務がある」と熱望された。それまでもやもやしていたふん囲気は、これで吹飛んでしまいました。

中国国内の登山には、一九八〇年登山開放後、チョモランマ登山許可第一号を日本が許され、北壁初登攀、北東稜登頂の栄光ある記録を登山史に残し、その後数多くの登山隊が奥地の未踏の山々に向い、夢や希望を果しました。

ネパールについてはなお一層です。

一九五〇年開国以来、一九五六年のマナスル初登頂以降どれだけの数の登山隊が、どれだけの山々へ行ったか、日本にヒマラヤブームが起きたことは衆知の通りです。

今度の三国友好登山に参加協力するについては、日本山岳会には、歴史的に見てもその責任と義務があった訳であります。

八六年五月の理事会では、この計画に参加し、協力することを決定し、取扱いを会長、両副会長に一任しました。そして、早速次の

懸案事項を処理しました。

(1)CMAへ参加受諾の文書を出す。

(2)東海支部へ、移譲受諾の文書を出す。

(3)読売グループの共催を受諾し文書を作成、挨拶に行く。

(4)日山協も含め、四社の共催とする。

(5)募金活動を行う。―会員・企業―

当初、私達の気持の中には、熱烈なプロポーズを受け、国際信義や義理の手前から、止むを得まい、という受身のスタンスや、時流に反する重厚な極地法登山に対する拒否感はありましたが、JACがやると決定したからには、この登山に対する理念を明確にし、計画を固めて行きました。

「裏方に徹して協力しよう」が基本でしたが、中・ネとの関係を見れば、何事によらず日本側が根廻し役をつとめ、イニシアチブをとらねば進みませんでした。

北からは、独立したTV隊も、登山隊と同数のメンバーが日本から参加することからも南北のタクティックス、物資の調達と荷上げ等、やはり、日本隊が中心になって、計画し、準備しなくてはなりませんでした。

南側についても、あくまでもネパールの自主性を前面に、またこれまで接衝して来た東海支部の実績を尊重してまかせることにしました。

経済援助については、JACの理事会決定以前から、読売新聞社から読売グループあげての支援の約束がありましたので中国、ネパールへの経済援助については心強かったが、すべて親方日の丸という悪弊を排し、個人負担と自主性を重んずるため自助努力の募金活動を行い、不測の事態に備えることにいたしました。

JACが主催する登山であれば、より多くの会員が関心を寄せ、理解してもらわねばなりません。そのために、会報の「山」には、その都度報告をのせ、PRにつとめました。

一九八六年十二月号（No.498）から八八年六月号（No.516）までの間、十三号にわたって、編集者の協力を得て、紙面を借用させていただきました。

▽異文化合同登山の心配は杞憂だった

国際登山隊が空中分解した例はしばしば見聞してきましたが、それはヒマラヤの高所登山では、人の和、チームワークの大切さを物語っています。日本の若い登山家が、中国、ネパールの人たちと同じ釜のメシを喰いながら和気藹々（あいあい）の中で交流をおこなっておりました。国際交流、真の友好の姿でしょう。

今西会長とともに私はBCに滞在し、この模様を見、若い者への信頼と誇りを強く感じ、感激いたしました。一番心配だった友好登山のチームワークについては、老婆心に過ぎなかったのです。

南北合せて二八二人の大世帯です。個々にはずいぶんと欲求不満もあったことでしょう。当然だと思いますが、何事によらず満点ということはありません。立場を替えて、違う観点からそれを見るようにすることが解決策の一つだと思います。

▽議定書の調印までの三国会談

八八年春に登山実施のタイムスケジュールからみれば、一年前の八七年一月には三国間の合意が出来上っていなければなりません。それに向って、八六年七月の日・中予備会談から始まり、二国間、三国会談など、六回にわたって、精力的におこないました。月に一回というペースになりました。次の通りです。

八六年七月、北京、日・中予備会談（大塚）。八月、東京、日・中・ネ。三者初顔合せ、基本計画案、参加の確認（今西会長、両副会長ほか）。九月、カトマンズ、三国会談、具体的打合せに入る（山田、大塚、湯浅）。十月、香港、日・ネ会談（湯浅、橋本）。十二月、北京、日・中（大塚、橋本、磯野）。八七年一月、箱根、三国会談（会長ほか大塚、斉藤、橋本、湯浅ら）。

最初は手さぐりでしたが、軌道に乗ったのは九月のカトマンズ三国会談以降でした。

対中国交渉には、八四年の日・中ナムナニ峰登山を参考にいたしました。

国家的事業として取組む中国、それぞれ参加する三国隊員の意識、価値観、登山観の違い。平等の原則と登山の実体との違い等々。当初はこれら登山に対する基本的な考え方のすり合わせから始めてゆきました。共通の目的を安全確実に成功させようという大きな目標の下で討議を通じて、お互いに理解を深めて行きました。

特に、予測出来ない天候、自然条件の下でおこなうむずかしい登山であるので、縦走隊の編成が各国一名ずつ平等の理想にならず変則的な組合せのパーティとなっても、つまり、どこの国とか、誰々という所属にこだわらず、成功は、三国登山隊共通の栄誉で、個々の国や個人に属するものでないことを確認してゆきました。

これは、今回の三国登山にとって、根本理念に関する重大なことでした。

ネパールとはつき合いが深いので、こちら側の戸惑いはあまりありませんでした。

しかし、彼等がこのような独立した大きな登山隊を編成し、外国と対等の立場に立っての合同登山は初めてのことであり、エベレストのサミッターのシェルパを中心に、好機到れり、ネパール側はおれたちの庭だからまかしてくれ、と意気軒昂たるものがありました。

ナショナリズムの高揚というものでしょうか、雇用関係にあるときの柔和なシェルパの目が、自主独立の隊員として、やる気満々に輝いて見えてきました。高所に強い、個性的な彼等の力を、組織的な管理登山——極地法登山——の中でうまく集束し、三国友好のチームワークの要とすることが出来るか、日本の登山技術援助の任務は重大でした。

議定書は、今回の登山の憲法でした。本文と付帯事項からなるそれには、今回の登山の理念と方策が明示されております。

八七年一月末、箱根の合宿会談において草案がまとめられました。これの作成には、読売新聞側実行委員、編集委員牛木素吉郎氏の卓抜な技倆に負うところが大きかったことを付記いたします。そして二月二十四日、北京の調印式を迎えることになりました。

私は、箱根会談後、血糖値七〇〇を越える糖尿病に倒れ、三月いっぱい入院の事態となり、調印式に立合うことは出来ませんでし

た。
北京では、三国国家首脳立合いの下で、各山岳会長が議定書に署名、引続き、各国首脳の支持、後援社の支援の署名がおこなわれ、この計画の基盤が成立いたしました。
土俵はついに出来上ったのです。

▽三国の任務。各国分担事項

三国友好登山準備の実際面で最も重要な点は、各国が何を分担し、隊の編成はどうなるか、そして経費の分担は、ということになりますが、物、人、金がどうなるかということでしょう。
議定書の付帯事項にはそれが明記されていますので、記載してお知らせいたしますが、一言でいいますと次の通りです。

〈分担〉　ホスト側になる中国、ネパールの任務は、三国隊員の自国内での宿泊と移動とBCまでの物資輸送（航空機、汽車、トラック）を受持つ。中国側の例でいえば日本隊員の受け入れは北京から始まり、成都を経てラサまでの宿泊と航空機の手配、ラサからBCまでの宿泊と車の手配等約十日間の移動に関するすべてであります。物資は天津での船荷の通関と北京までの貨車輸送、そしてBCまでのトラック輸送に関するすべてを受持つことになります。
また、北、南のBC設営、生活に必要な食糧、炊事、燃料などは中国、ネパールがそれぞれ受持つ。日本側は、南・北両側のBC以上で登山に必要な装具、食糧、酸素、通信、医療など三国分の物資のすべてを受持つということでありました。

〈分担項目〉　三国の内容は次の通りです。

〈中国登山協会の分担項目〉
一、全員の中国国内の交通費と宿泊・食費
二、物資、装備、機材、食品などの中国国内の輸送
三、ベースキャンプでの自動車と運転手
四、ベースキャンプの設備
五、ベースキャンプの炊事用具
六、ベースキャンプの大部分の食糧
七、ベースキャンプの燃料
八、南北両側全員の羽毛装備（寝袋・上着・ズボン・帽子・チョッキ・手袋・靴下）
九、中国人要員の保険料
十、中国人高所協力員の給料
十一、中国人の南側要員のネパールまでの往復旅費
十二、ベースキャンプ救急用大型酸素ボンベ
十三、BCからABCまでのヤクによる輸送

日本山岳会は、CMAの任務に対し、一一〇万人民元を援助する。

〈ネパール山岳協会の分担項目〉
一、食糧
（A）キャラバン　七日間
（B）ベースキャンプ　四十日間
二、燃料および炊事用具
三、輸送および航空機チャーター
四、国内航空運賃

五、ネパール人要員の賃金および保険料
六、航空貨物料金（登山靴輸入用）
七、梱包資材
八、ホテル代
九、チベット側ネパール隊員、要員の移動費・宿泊費・食費
十、輸入関税および輸入許可料（登山靴輸入用）
十一、ポーターの保険および装備
十二、ネパール人隊員、準隊員用登山靴
十三、アイスフォール・シェルパ用装備
十四、連絡官およびベースキャンプ要員の装備費（羽毛装備を除く）
十五、国立公園入園料、キャンプ地謝礼、その他

日本山岳会は、NMAの任務に対し、五五〇万ネパールルピーを援助する。

＜日本山岳会の分担項目＞
一、南北両側の登山要員の登山装備と用具
二、南北両側の高所での装備、機材、テント、食糧、燃料および炊事用具
三、南北両側の高所での酸素とその付属品
四、南北ベースキャンプの食糧の一部
五、南北ベースキャンプでの医療器材と薬品
六、南北ベースキャンプでの気象観測機材
七、南北両側のベースキャンプ、北京、カトマンズ、ラサの通信機材
八、南北高所連絡用トランシーバー
九、日本人要員の中国、ネパールへの往復旅費
十、日本の物資の中国およびネパールへの輸送と返送費用
十一、日本人要員の保険料
十二、全登山隊員が使用する羽毛装備製作用生地およびファスナー（三〇〇人分）の提供
十三、南北ベースキャンプで使用する発電設備

▽隊の編成

三国の合同登山でありますので、北京に総指揮部を置き登山活動の最高決議機関とし、三国の総隊長が指揮に当り、首席総隊長には、中国登山協会々長の史占春主席が就任しました。指令は無線連絡により、両BC指揮部に伝達されました。

登山隊は一覧表の通り、二八二名の大人数となりましたが、中核となる登攀隊員は各国共に隊長以下一六名であり、南・北のルートによって、協力員、アイスフォール・ポーターの人員が編成されました。またTV班が独立した隊として北に中継基地を置き、南・北に配置され、制作責任者が隊長となりました。このため北側には、登攀隊員の数を越えるTV・報道の隊員が入り活動するために、日本の北側統括隊長を設け、主任医師の斎藤惇生氏がこれに当りました。

BC以上の登山活動のリーダーシップは、南北各々三国の隊長の協議により進めましたが、北は中国、南はネパールの各隊長が責任者となりました。またABC以上の登攀隊長は、南北ともに日本が当り、副登攀隊長として中国、ネパールからおのおの就任し、補佐

総指揮部 Headquarters

	中 国 CHINA	日 本 JAPAN	ネパール NEPAL
総顧問 Patron 後援総顧問 Chief Supporter	李 夢華 Li Men Hua	櫻内義雄 Sakurauchi Yoshio 小林與三次 Kobayashi Yosoji	R.N. パンディ R.N. Pandey
総隊長 General Leader	*史 占春 Shi Zan Chun	今西壽雄 Imanishi Toshio	クマール・カドガ Kumar Khadga Bikram Shah
副総隊長 Deputy General Leader	許 競 Xu Jing	大塚博美 Otsuka Hiroyoshi	ハルカ・グルン Harka Gurung

＊首席総隊長 The First General Leader

日本隊名誉総隊長 H. General Leader for Japanese Party	橋本龍太郎 Hashimoto Ryutaro

日本隊北側統括隊長（登山隊医師兼任） Cordinate Leader For North Side Japanese Party (Team Docter)	斎藤惇生 Saito Atsuo

する形をとりました。

▽日本の準備

二月末北京での調印後、国内の登山組織を編成いたしました。

主催は㈳日本山岳会を中心に、㈳日本山岳協会、読売新聞社、日本テレビの四社の共催とし、後援は文部省、外務省。最高決議機関として登山委員会（委員長、今西寿雄）、実施の中心になる実行委員会（委員長、大塚博美）、事務局（事務局長、橋本清）を設置し、共催四社から必要な委員が就任しました。特に登山委員会には顧問を置き、日本隊を代表する総顧問の桜内義雄議員をはじめとする議員の諸先生、共催各社から代表者の方々に就任して頂きました。

また実施団体である日本山岳会は、その責任において、募金活動のため、募金委員会（委員長、西堀栄三郎）を設けました。

▽隊員の公募と選考

山の様相も資金も、おおよその見当がついたとすれば、この登山に見合う隊員の選考が最重要課題となってきます。中国はチベット山岳協会からの精鋭を中心に、ネパールからは、シェルパを隊員として、いずれも高所における強さには定評があります。

各国の隊員数は、議定書の編成により平等に決められました。ホームグラウンドの中国、ネパールは、補充、交替が出来る有利な点があるが、多ければいいということではないと思います。

中国・ネパール各々に登山をしている日本側が、三国の間をとりもって、協調の実を挙げなければ、いいチームワークは出来ませ

中・日・ネ　三国友好登山隊

登　山　隊 Expedition (1988年2月20日現在)	北側 North 計 Tot.	中国 CNA	日本 JPN	ネパ NEP	南側 South 計 Tot.	中国 CNA	日本 JPN	ネパ NEP
隊　　長 Team Leader	3	*1	1	1	3	1	1	*1
日本統括隊長 Coordinate Leader	1		1					
	4	1	2	1	3	1	1	1
登　攀　隊 Climbing Team								
登攀隊長 Climbing Leader	1		1		1		1	1
副登攀隊長 Deputy C. Leader	2	1		1	2	1		1
隊　　員 Climbing Member	21	7	7	7	21	7	7	7
準隊員 Associate C. Member	21	7	7	7	21	7	7	7
協力人員 Support Member	12			12	10			10
氷瀑ポーター Icefall Porter					20			20
計	57	15	15	27	75	15	15	45
ベースキャンプ要員 Base Camp Staff								
連絡官 Liaison Officer					1			1
TV監督官 TV Officer	2	2			1			1
管　　理 Management					1	1		
食糧係 Food	2	2						
炊　　事 Cook	6	5		1	4	1		3
炊事補助 Kitchenboy					8			8
運転手 Driver	5	5						
メールランナー Mail Runner					4			4
装具係 Equipment	1	1			1		1	
通　　訳 Interpreter	4	2	1	1	4	2	1	1
気象係 Weather Reporter	2		2		2		2	
通信係 Telegraph Operator	2	2			2		1	1
医　　療 Medical Doctor	4	2	2		3		3	
計	28	21	5	2	31	4	8	19
テレビ班 TV Staff								
テレビ隊隊長 TV Team Leader	1		1					
テレビBC隊員 TV BC Member	18		18					
テレビBC以上隊員 Above BC	15		15		6		6	
TV隊サーダー Sirder for TV	1			1				
TV隊シェルパ Sherpa for TV	10			10	5			5
計	45	0	34	11	11	0	6	5
報道隊員 News Staff								
記　　者 Journalist	9	5	3	1	5	2	2	1
写　　真 Photographer	2		2		2		2	
技　　術 Technician	4		4					
報道隊シェルパ Sherpa for P.	2			2	3			3
ラジオ Radio Staff	1	1						
計	18	6	9	3	10	2	4	4
総　　計 TOTAL 282	152	43	65	44	130	22	34	74

(注)　①＊は第一登山隊長。②日本隊統括隊長は斎藤惇生。医師兼任。③北側運転手のうち日本報道隊員用1。

ん。隊員選考の基準として、八〇〇〇㍍の高所登山経験を第一とし、裏方に徹する今回の登山の主旨を理解出来、協調性のある人柄を重視しました。

全国の支部長ならびに高所登山経験者を通じ隊員を公募しました。八七年三月十五日締切りには東北から九州にわたり五九名の応募者がありましたが、登山経験と年齢などからみて、全員が第一の基準を満たすのは困難な実情でした。八〇〇〇㍍以上の無酸素、アルパインスタイルの登山を実施している第一線のクライマーの一部は、この三国登山には魅力を持たなかったようです。

八七年四月四日、五日の両日、神田事務局で、会長、副会長をはじめ、隊長、登攀隊長を中心に幹部九名の立合いで面接を行い、第一次隊員候補者三六名を選考し、具体的な準備に入りました。

その後有力隊員候補であった鈴木章氏がK２で遭難し、和田氏も登山事故で負傷し候補から外れました。山田昇氏が北側を希望し参加表明したのは六月に入ってからでしたが、彼の参加によって強力な隊員編成となりました。

十月の実行委員会、臨時理事会で隊員の承認を得、正式発表を行いました。

▽物資の準備

日本の準備すべき物資は莫大な量となりました。酸素、高所登山靴以外はすべて国内で準備しましたが、羽毛製品（寝袋、羽毛服上下、手袋など）は中国が縫製しました。新素材はウェアー・羽毛製品生地としてユニチカのディンカム。新製品ダンロップ天幕。特に高所用テントは四〇㍍/秒の風洞実験に十分耐えました。ほとんどの装具、食糧は、市販の物で十分カバーが出来たことを思うと、日本の科学・産業技術のレベルの高さがうかがえました。

十月末に約三〇㌧の物資の集結を終り、十一月中に梱包を終え、十二月上旬に天津、カルカッタに向け各々船出しを完了いたしました。国内準備の総量は、約六九㌧（登山・四〇、TV・二八、新聞一）でした。ほかに中国側準備物資（食糧、燃料、大型軍用天幕）約三〇㌧、BCへの輸送トラックは四三台、BC大型テントは三七張に達しました。ネパール側の準備は約一五㌧になり、悪天候のためにルクラへの空輸便が確保出来ず、登山の運行に支障をきたしました。

▽隊員全体集会

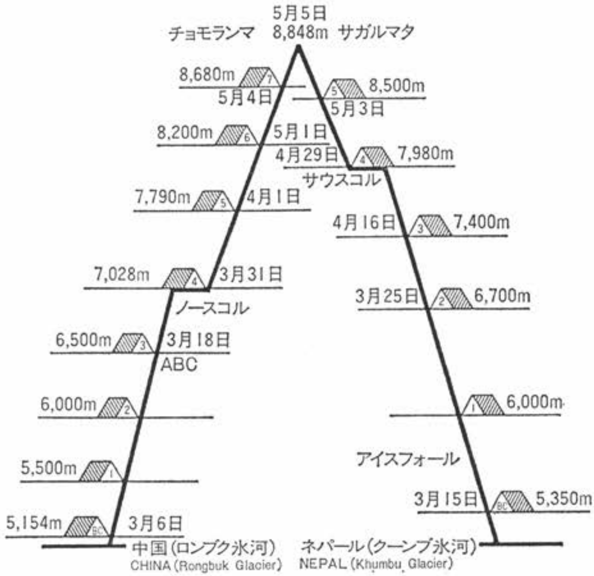
東北から九州にわたる隊員候補の一泊の全体会議を持つと約百万円かかりました。東京を中心に、東海、関西と開催いたしましたが、全員が顔見知りになり、準備を円滑にすすめるため月一回、延べ十一回の集会を持ちました。この隊の性格上の必要な経費というべきでしょう。

東京中心の隊員は一〇人と少なく、食糧、輸送、梱包を中心に、装備は関西（重広）が中心に受持ちました。

第一回集会は来の宮NTV寮でおこない、この登山の特殊性、三国友好登山の趣旨、異文化登山の実態―ナムナニ登山―などから話し、登山の全体像を認識してもらいました。第二回は名古屋尾上支部長方会議室で、基本的なビジョンとポリシーが明示されました。

八七年九月の第四回集会までは候補の身分のままでありました

キャンプと日程



が、十月に正式に隊員と決定してからは、一段と準備に拍車がかかりました。

▽三国実務者会談

議定書調印によって、三国友好登山の基本計画と各国の任務、経済援助など、合意が出来上りましたが、さらに具体的実施について、リーダー、実務者会談を開催し、細部の煮つめを七回にわたって次の通りおこないました。

八七年三月、カトマンズ、日・ネ、NMA（ネパール山岳協会）の業務、予算の実務会談（湯浅）。五月、北京、中・日、タクティックス中心実務会談（橋本、重広）。六月、カトマンズ、日・ネ、予算実務会談（湯浅、磯野）。七月、香港、中・日・ネ、予算会談（橋本、湯浅）。十月北京、中・日、輸送・通信実務会談（伊丹、貫田）。カトマンズ、日・ネ、輸送、食糧、タクティックス会談（磯野）。八八年一月、カトマンズ、中・日・ネ、リーダー会談（橋本、重広、湯浅、磯野）、総指揮部会談（今西、大塚）、準備の総括、点検と実施の最終打合せをおこないました。そして、準備万端整った状況で外国記者会見をおこない、世界に発表しました。翌一月二十五日、三国友好登山の結団式がカトマンズのアンナプルナホテルで開催されました。橋本龍太郎名誉総隊長も出席され、ネパール側の一方ならぬ熱気を感じました。

▽募金―会員・企業―

会員募金の目標は八〇〇人、一口五〇〇〇円、目標五〇〇万円と

し、積極的に呼びかけましたところ、協力を得、八五四人、九六九万五六〇〇円（会報517号八八年七月号）になりました。

会報を通じ、機会あるごとに会員に報告してきた努力が報いられ、目的を達し、会の主催事業の趣旨に沿うことが出来ました。

また企業募金（七〇〇〇万円）は、日体協の免税寄付枠を日山協共催事業として受け、経団連の協力を得てその加盟各団体、連合会に割当てをして頂き、JAC側は関東、東海、関西の三地区に分れて、各連合会に接衝しました。

こちらは概略七〇パーセントの成績でまあまあというところでした。

経費の決算はこれからですが、議定書調印時は二五四人の総数が実施の段階で二八二人と一〇パーセント余り増加しました。南・北・TVと三つの登山隊の規模、重厚な準備量からかなりの物資増加となりました。後援社からの援助金不足分は、予備金として募金額で補うことが出来、面目を果すことが出来ました。

また物品の寄贈、輸送（人と物）、サービスの提供依頼に力を注ぎ、推定概算七〇〇〇万円の現物寄付協力を頂くことが出来、各隊員の努力もさることながら、関係企業のご支援に本当に有難く感謝の極みでありました。これがないと大変苦労したことでしょう。それにしても、JACの信用と底力は、いまさらのように絶大なものを痛感いたしました。

成功の喜びは、これら多くの支援の会員や企業の関係者と分ち合うべきものと思います。紙上を借りてここに厚くお礼申し上げます。

▽通信ネットワーク

南・北同時進行の登山活動、両隊が独自に行動する連絡のトランシーバーは三系統ずつ六系統、南・北連絡に一系統、計七系統。五月五日、ランデブー成功のためには、南、北ともに日々綿密な連絡打合せが必要でありました。詳細は、報告書の担当に譲りますが、各国に一系統ずつチャンネルを割り当て、トランシーバーを各キャンプに配置しましたので、両サイド、三国分で三十六台になりました。

また北京総指揮部とBC間の連絡のため、ラサ経由の無線系統を設置しました。

極地法登山は、換言すれば、荷上げ管理につきる訳ですから、責任者の的確な指示と、その実行の可否の確認が直接登山活動に影響を及ぼしてきます。日々の定時連絡は、登山の一歩一歩の積み重ねの記録と同じように重要でした。

両隊長はBCで頑張り、北側ABCには伊丹、ノースコルには重広登攀リーダーが全期間張付き、南側ABCでは磯野登攀リーダーが任務に当りました。

さらに二つの人工衛星を使用した報道体制、TVはインテルサット、新聞は船舶通信の海事衛星のインマルサット。

登攀の詳細は別項に譲りますが、ここでは登山活動に直接威力を発揮したインマルサットについて報告いたします。

四月二十一日、南側で水腰ドクターの事故が発生しました。南BCから北BCへ即時情報は刻々的確に入りました。そして死亡が確認されましてから、東京本部へは、その新聞のラインを使って報告

いたしましたが、登録加入の自動電話機を使いました。
　チョモランマのBCから五千キロの彼方の東京へダイヤルボタンを十数個押すだけで、あっという間に通話可能、全く驚くべき威力でした。遺族への連絡、カトマンズでの日程など、瞬時に情報を交換出来ました。これがネパール側だけの登山を考えた場合、多くの日時と、錯綜した情報が行き交ったことでしょう。
　また日々の運行表、報告など、原稿送稿業務の空き間を見ては利用いたしましたが、これもすべて、北側の地形の天恵といえましょう。BCまで、大きなトラックが入れなければとても出来るものではありません。
　このため、新聞の速報の威力も目を見張るものがあり、今日の行動が、明日の朝刊に掲載されました。特にBC建設のカラー写真が、記事と共に送られたことは全く画期的な報道でした。
　ロー・ラにアンテナを設け、南側からの原稿（記事と写真）を受け、北と併せ交互にFAXで送稿しておりました。
　どこでも、どの隊でもこのような送信設備を設置出来るわけではありませんが、いまやその気になって衛星通信を利用すれば、地球上の情報交換は手の内にあるといってよいでしょう。

▽最　後　に

　祝賀会が、カトマンズ（五月二十七日）、北京（六月三日）、東京（六月十七日）で、それぞれ盛大に開催されました。
「中国・ネパールの皆さんに、こんなに喜んでもらって、ほんまによかったなあ、しかし、これからしんどいなあ」と今西会長はしみじみ洩らしていました。
　短いこの一言に万感がこもっているようです。終りよければすべてよし、でした。諸々の喜怒哀楽は成功したおかげですべて喜びに包まれておりました。
「……これからしんどいなあ」と思わず洩らした言葉は意味深長だと思いました。その一面には、ヒマラヤをめぐるアジアの諸国――中国、インド、韓国、ネパール、パキスタン等――との国際交流が今後、いや応なしに日本の登山界の肩にかかって来る、ということです。
　そして、二十一世紀へ向けての、クラブとしてのJACの在り方と強くからんで、無視出来ないという見通しを感じたものと思いました。
　終ってみて、これだけ莫大なエネルギーを使った登山であってみれば、JACとしても、個人としても、収穫なくしては間尺に合いません。それを生かすも殺すも、これからだと思いますが、それは、志半ばにして病いに倒れた水腰ドクターを悼むとともに、この計画に参画した隊員の責務だと思います。

〔中・日・ネ 三国友好登山隊〕

隊長日誌（北隊）

橋本 清

本隊出発

北側本隊は二月二二日、成田を出発。北京、成都を経由、空路にてラサに到着、ここで、中国隊員と合流、熱い歓迎を受ける。ラサでは、物資の点検、キャラバンの出発準備にあたる。物資の輸送に関しては中国が担当してくれ、非常にスムーズにベースキャンプへ搬入してくれた。

本隊は二月二九日、ラサより陸路にてシガツェに移動。三〇日、シガツェよりシガールに入る。ここでネパール隊員と合流、三国の隊員が初めて全員そろう。大部隊だが意気投合、ベースキャンプに入るべく高度順化を行ない出発の準備をする。シガールに五日間滞在。

BC建設・本格的活動に入る

三月六日、予定通りベースキャンプに入る。ベースキャンプでは、本格的登山活動を前にキャンプの建設、装備、食糧等の点検と、休む間もなく働く。三月一〇日の開村式を迎え、いよいよ本格的登山活動に入る。第一期は、C3までのヤク輸送とC3からC4へのルート工作。C4への荷上げだが、C4へ隊員が入ると同時にC5へのルート工作が始まり、第二期へ突入。C4からC5へのルート工作は、七四五〇㍍に風口といわれる強風帯があり、強風にはばまれてルートが拓けず苦戦する。強風を押してのルート工作だったが、七七九〇㍍のC5予定地より上部七九〇〇㍍までルートをのばすことが出来る。

このルートがひらけるまで非常な苦戦をしいられたが、上部にキャンプを上げることが出来、有利な展開となる。

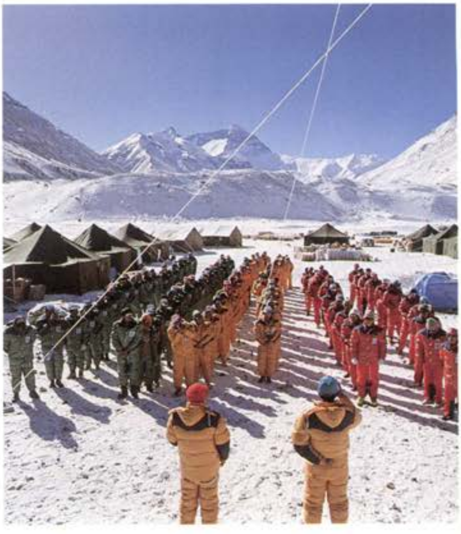
C5を建設、荷上げと同時にC6八二〇〇㍍へルート工作が始まる。この頃（四月九日）になると、風も弱まり、荷上げのピッチもあがる。荷上げは三国の隊員が平等に上げることを原則に、各国三名ずつ九名のローテーションを組み、荷上げを行なう。このため、日本隊員に負荷がかかり苦戦させられる。しかし、三国平等を原則に、隊員みなよくがんばり、予定通りの隊荷をC6へ上げ、第二期を終了する。日本、中国、ネパールの全隊員は、休養のためベースキャンプに集結、一週間の休養をとる。いよいよ五月五日の交差縦走を大目標に、三国で調整を行ない、第三期の登山行動を決めた。

アタック態勢ととのう

第一期、第二期とも非常に順調に進み、計画通りの運行を作る事が出来た。縦走隊は各国一名ずつの三名とし、頂上サポート隊も、各国から一名の計三名と、計画通り

中国・日本・ネパール1988年
チョモランマ／サガルマタ友好登山隊

China, Japan, Nepal Friendship Expedition to Qomolangma / Sagarmatha 1988



↑山頂の北縦走隊。アン・ラクパ Ang Lhakpa Sherpa（右）とツェリン・ドルジェ Ciren Douji
→北側ベースキャンプ　開村式

↑ノースコルからのチョモランマ Northeast Ridge from North Col

The North Side

↓ノースコルへの荷上げ to North Col

ローツェ・フェイスを登る at Lhotse Face

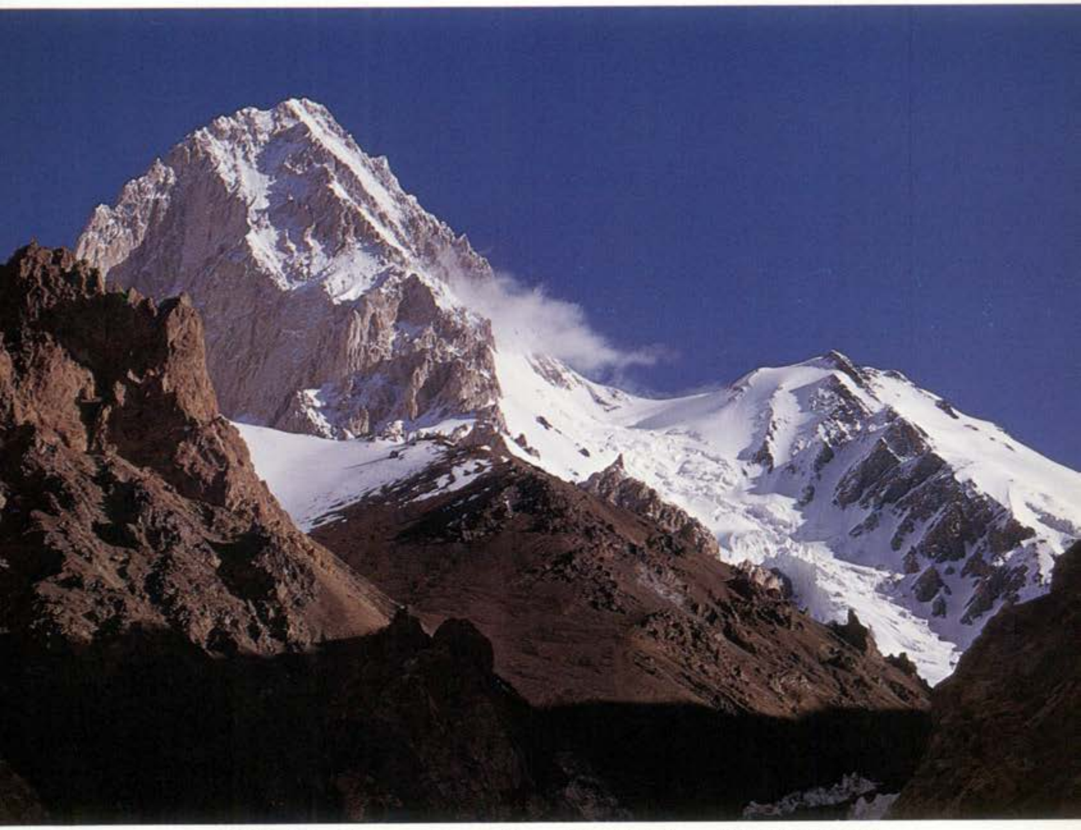
The South Side

チョモランマ西稜1987秋

防衛大学校山岳会

The West Ridge of Mt. Qomolangma
/autumn 1987

→チョモランマの月　C2からの北支稜
↓BCから望むチョモランマ北壁と西稜



皇冠峰 The Crown (Huang Guan Shan) 7295 m.(提供・山本良三)

ナンダ・コート Nanda Kot 6867m.(提供・太田晃介)

アンナプルナ南壁 Annapurna South Face／December 1987（提供・八木原圀明）

のメンバーを送りこむこととする。

四月二三日、第三期に突入、先行隊が出発。順次、隊員は上部へ移動。休養期間中、各キャンプに被害もなく順調。みんなベストコンディションで、C３（ABC）とC４の前進キャンプに集結、アタック態勢に入る。アタック隊の選考にあたっては、第一期、第二期の登山活動を通じ、任務を確実に消化し、特に上部キャンプへの荷上げのスピードなどを参考に隊員を選考。日本隊員は第一次縦走隊・山田昇、サポート隊・山本宗彦、第二次縦走隊・三谷統一郎、サポート隊・馬場哲也とする。この選考に関しては、日本隊ヘッドクォーターも全員一致で決定する。

四月三〇日、縦走隊、サポート隊は五月五日の交差縦走に向けC３を出発、C４へ。予定通りC４に入る。

五月一日、晴、縦走隊、サポート隊、TV隊はC４からC５へ移動。天候にも恵まれ順調に。

五月二日、晴。縦走隊は、C５よりC６に移動。C６に到着後、C７に向けルート工作を行なう。稜線まで六ピッチのルート

ノースコルのC４

工作を行ない、予定通り進む。順調に一歩前進だ。サポート隊はC5で休養。五月三日、天候は良くないが、縦走隊は昨日のルート工作の上、第一ステップの上部雪田を通過、リッジまでルート工作を行なう。ガスの中での登攀に非常に緊張する。サポート隊はC5よりC6に移動、C6に縦走隊、サポート隊、TV隊が集結。なお、この日C6よりC7にサポートするネパール隊員四名もC6に入る。

五月四日、縦走隊、サポート隊、TV隊の九名とC7へのサポート隊四名はC7へ向け出発、稜線まではルート工作がしてあり、順調に進む。C7には予定通りに入る。キャンプを建設し、アタックに必要な登攀具、酸素、食糧も上がり、アタック態勢がととのう。心配なのは天候だけだ。

アタック

五月五日、午前三時、重広登はん隊長が山田を起す無線でこの日が始まる。C7では風は強いが快晴、出発の準備にかかる。6時40分、縦走隊三名は強風をついて出発。しかし行動の出来る状態ではなく、すぐ引返す。テントにもぐり天気待ち、アタック態勢に入って最後の時間待ち。天気が良いのが救いだ。

8時30分、縦走隊は少し風が弱くなったので出発する。順調に進み、第2ステップ、ラダーを通過。10時30分、第2ステップの上に出る。ここからは稜線上を頂上へ、三角雪田を12時23分にぬけ、12時50分、縦走隊ツェリン・ドルジェ、アン・ラクパ、山田昇の順で頂上に立つ。このころサポート隊、TV隊は、三角雪田にて苦戦、なかなか進まず、縦走隊は頂上で南隊と北からのサポート隊を待つ。サポート隊が縦走用酸素をあげて来るからだ。

待つこと一時間半、南隊もサポート隊も上がって来ない。縦走隊三名は、南側C4サウスコルへ向け降りだす。残り酸素が少ないので非常に気になる。しかし、スピードがあり、縦走隊三名は明るいうち南側C4に着く。

サポート隊の山本宗彦、4時5分、登頂。TV隊も同じ頃登頂。南からの縦走隊も登頂。南側の縦走隊、北側サポート隊、TV隊は北側C6へ向け下山。C7、19時40分、小休止の後、C6へ向う。C6には翌朝3時30分、全員帰幕。ミッドナイトの間一髪の帰幕となる。

五月六日、第二次縦走隊員とサポート隊員6名がC5へ荷上げ、二次アタックにそなえる。この頃、北京総指揮部より中止の要請が来る。現地では、すでに第二次計画に突入しており、物資、コンディションとも充分なので納得出来ず、指揮部では初期の目的をすべて達成したので中止にしたいとの意向、現場と指揮部で再々論議をしたが、翌七日、再度の登山終了宣言の命令により、第二次縦走隊を中止とする。全員くやしさの中に登山を終了、撤収に入る。

回顧

今回の三国登山をふり返ったとき、三国の隊員が力をあわせ、つねに上部へ荷上げをおこない、キャンプサイトの位置も予定地より上部に建設できたことは成功への大きなポイントであった。さらに三国のリーダー陣をはじめ隊員各々が三国平等の原則のもとに理解しあい、苦労をともにしたことで、この計画を達成できたものと信じている。

〈中・日・ネ　三国友好登山隊〉

南側登山隊報告

湯浅道男

二月二四日、磯野登攀隊長以下一二名（報道四名を含む）の先発隊が出発。三月八日湯浅以下二二名（報道五名を含む）の本隊が北隊（二月二二日出発）より遅れて成田を出発、カトマンズに向った。

先発隊の主要任務は、ネパール山岳協会（以下NMAと略称）の担当する通関業務のコントロールとキャラバン出発地であるルクラにおける個人装備支給という作業であった。これだけの任務に従事するために、当初予定していた三名という先発隊員を八名に増員決定したのは一月中旬、そしてそれはつぎの理由からであった。

計画原案作成にあたっての隊長の指示は、ルクラからのキャラバン一六日、登攀期間（登頂まで）五〇日、南側登攀計画は常に北側登攀計画の〝受け身〟の形で立案・実行される、というものであった。ところが、登攀計画原案が梱包の終了した段階ではキャラバン一六日、登頂日数三六日となってしまっていた。五月五日前提の予備日数もない。登頂日数は最低四〇日〜四五日を要する。しかし、書面になった登攀計画は印刷に付され、独り歩きをしはじめていた。東京不在ということもさりながら、これは隊長であるわたくしの重大な責任といわなければならない。

そこで、なるべく決定済みの隊全体のスケジュールに支障をきたさないことを前提に、登頂日数四〇〜五〇日を確保するための行動計画の修正案を磯野と共に一二月末に作成した。そのためには、ひとりでも多くの若手隊員を先発隊として可能な限り送り込み、高所順応を済ませ、本隊BC到着までにBC整備とアイスフォールのルート工作を完了する。そのことによって、若手隊員最低五〇日、ヴェテラン隊員最低四〇日のBC以上登頂までの登山活動を実質的に確保できるからである。

カトマンズよりBCまで

二月二五日、磯野ら先発隊カトマンズ着。三月一日ルクラ集結、三月四日キャラバン開始の予定が大幅に遅れることになった。南側は、種々の問題が山積、折りしもトレッキングシーズンの最盛期、加えて天候不順も重なりルクラフライトもままならなかったからである。三月三日、八名の隊員をルクラへ送り込むことができたものの、ルクラに全員集結できたのは三月一一日。ルクラ出発は三月一四日、先発隊は一〇日遅れの出発となった。その間、磯野、相馬はNMAとの連夜の追加予算請求の会議で人質同然のカトマンズ滞在、予算会議

は湯浅が引き継ぐ旨をNMAに国際電話を入れ、ようやく磯野はルクラ入りすることができた、という始末であった。

湯浅ら本隊は、三月一〇日カトマンズ着。夜九時王振華隊長ら中国隊も宿舎であるブルースター・ホテルに到着。クンガシエルパ・ネパール隊長もホテルに来て早速第一回の会談。一二日のNMA主催の晩さん会終了後、遂次ルクラ入りすること等のスケジュールの打合わせ、何よりも大切なことは、①クンガ隊長が主席隊長であること、②重要な問題は常に話し合うこと、③今日からは三国でなく一つの隊であることを再確認し合った。まずは順調なスベリ出しにホット胸をなでおろした。

翌日から、湯浅らはNMAとの交渉、隊員は隊荷の輸送問題を一気に片づけるべく奔走した。さらに、突発的問題が発生した。シャモニのガイドとスンダレ君を交えたフランス隊問題である。登山許可は一四日には出ることになっている、ということである。真偽を確かめなければならない。グルン博士は、ポカレルNMA副会長を通じてモハシン観光大臣、そしてビナヤ氏に連絡をとる。Guy Garibalgi の手になるもので、サガルマタ国立公園の全体像の実況をテレビ放映し、その一部（象徴）としてサガルマタの頂上に最低一名の隊員を送り込みテレビ放映するというものであった。周到な説得力をもって、マヘンドラ・トラスト財団事務局長ミシュラ博士とすでにカトマンズに来ている Guy Garibalgi 氏が観光省に日参しているという情報を確認。テレビ生中継の可能性はともかく、許可が出れば、それでなくても遅れているわれわれの計画は、ヤクやポーター不足をさらに悪化させ成功はおぼつかなくなる。徹夜でファクシミリを橋本名誉総隊長に送り外交ルートの解決をお願いする。日本大使、中国大使には、あわただしく、モハシン大臣を訪問していただいた。許可そのものは拒否できない。幸運なことにモハシン大臣、グルン博士、そしてポカレル副会長は親友同志、不許可に等しい五月一五日以降の登山活動許可という形で決着をしていただく（したがって、本年は断念することになり、同計画は八九年春に実施されることになった）。NMAとの予算問題は、実行委員長グルン博士のもとでシャルマNMA事務局長と話し合い一気に解決することができた（三月一六日）。

不眠不休といってよい毎日、さまざまな友情によって困難な問題を克服できた。だが、毎日の空港通いにもかかわらず、天候不順（ルクラ降雪）、強風、トレッカーの増加etcによって隊員をルクラに送ることができない。大河原夫妻の努力によって、一八日にはルクラ全員集結の目安がついた。だが、同日全員空港で待機したものの、一便だけ飛んだだけで後はキャンセル。これ以上の遅れは致命的である。ただちにポカレル副会長と共にラナ将軍に依頼して軍用ヘリ（プーマ）を特別チャーターして中国隊員を中心にルクラへ。一九日、湯浅以下全員が特別チャーターヘリを利用してようやくルクラへ。つづいて、午後、軍用ヘリによってクンガ隊長、タパ副隊長らネパール隊員がルクラに飛来して、ともかく三国首脳陣が勢ぞろい。ただちに会談。とりあえず、明日、日本隊が出発。二日遅れで中国隊・ネパール隊出発ということで合意。旧時と異なり、ロッジングのため全員一

緒の行動などできない。パグディン（一泊）、ナムチェ（二泊）、タンボチェ（二泊）、ペリチェ（二泊）、ロブジェ（二泊）、ゴラクシェップを通過してBCに三月三〇日到着という行動予定。ルクラから九日間の日程である。

最大の問題点は、個人装備を含めて、隊荷の三分の一がカトマンズ、ルクラ、ナムチェに滞っていることである。最も信頼できるラクパ・テンジンがルクラにはりついて（登攀隊員である彼がクマールカドガ殿下とBC入りしたのが、実に登山の終りに近い四月二四日、最終隊荷は四月一七日であった）の輸送計画を信頼する以外にはない。

もうひとつの難問は個人装備の支給に関してである。王隊長と中国報道隊員からのクレームはいくら説明しても登山中期まで、理屈としては了解していても感情面では納得してもらえなかった。

キャラバンは順調に、しかも笑いの絶えない楽しい毎日であった。TV隊も報道隊も何の区別もなく一つの隊となり、本隊は予定通り三月三〇日苦労の連続の磯野登攀隊長に出迎えられBC入りをした。ひとりの落ちこぼれもなく、ほぼ全員BC以上の行動が約束される体調とスピードでBC入りしたことは快事といわなければならない。水越ドクターの地元住民へのサービス、TV隊、報道隊の明るい山好きの人柄も大きな影響があった。ネアカに徹すること！　こんな子供じみたことをみんなが守ってくれたことに感謝。

途中、二〇日には、オーストラリア大使との出会い、ナムチェからは先発隊との交信開始、タンボチェでの北側との初交信の感激、そしてロブジェでは北BC入りを果した橋本名誉総隊長との涙の交信、すべてが忘れられない想い出である。悲しい出来事もあった。われらのサーダー、ペンバ・ノルブがロブジェで父親の訃報に接してリタイア。

南隊ＡＢＣ

BCよりABC建設まで

アイスフォールは安定している。一五年前のスケールの三分の二といっても過言ではない。二六日にBC入りした先発隊員のうち、アンリタ、アンカルマを中心としたネパール隊員と共に、磯野が二九日、三〇日の二日間のアイスフォール偵察、大宮、高野が三〇日のルート偵察一日を消化しているだけである。その意味では、これから全隊員の登山活動が同時に始まるといってよい。明日（三一日）、明後日（四月一日）をBC建設にあて、四月二日から登山活動を開始することにした。クンガ隊長、王隊

長の到着を待ってから行動した方がよい、と判断したからである。忽滑谷ドクターと共にロブジェに待機してもらった森本から、「日本隊だけで行動するのはよいが、ネパール隊員の行動はまかりならぬ」というクンガ隊長の意見が送信されたからである。かなり感情的なようだ。

翌三一日、植木、三輪隊員の作った苦心の歓迎アーチをくぐって、上機嫌のクンガ、王両隊長を筆頭にした総勢が夕刻BCに到着。早速ミーティング。四月一日は、特に中国隊員を中心とした装備と点検を技術交流。行動は四月二日からということにし、夜は歓迎パーティでにぎわう。北側との交歓、いよいよ南側も登山活動開始だ。

行動指針は、日本隊は、磯野、山本、大宮、織田、鈴木をリーダーとする五チーム、中国隊は、Aチーム〜Dチームの四チーム。ネパール隊は、一言でいえばフレキシブルにチームを構成したいというものであった。つまり、登攀隊員ラクパテンジンはナムチェの輸送担当、同様に準登攀隊員パサンもBCサーダーとして専従させるというように種々の問題にすべて対応するのだから、フレキシブルに対応する以外にはない。特定チームのローテーションを組むことは不可能である。そして中国隊も、荷上げは高所協力員がすべきだ、とりわけ、アイスフォールの荷上げは絶対にしない、という哲学を一歩も譲らない。

彼らのより高く登高しようという意識を隊全体の行動にどう生かすかだ。ネパール隊も同様、荷上げ担当はネパール隊の主要任務だという自負心を十分に機能させることだ。激論して、すべて平等だ！という結論を導き出す時間的余裕もない。それぞれが有する得意の力を組み合わせて五月五日にきちんと対応することだけが重要だ。

四月二日、C1に向けて行動開始。大宮をリーダーとする五人、ピンゾーら三人の中国隊、ナラヤンら三人のネパール隊、さらに一〇人のシェルパによって、一気にC1までの荷上げに堪え得るルートを完成。四月三日、橋本龍太郎名誉総隊長を迎えてBC開きをすることができた。超多忙の中を北側BC訪問を済ませ、中国道路を越えて、カトマンズから一気にヘリコプターでBCへ直行された。三国隊員、特にクンガ隊長らの感謝の念は、南側の志気を一気に高めてくれた。

この期間はなによりも高所順応に専念。アイスフォール・ポーター一〇人〜一九人の連日の荷上げ。四月四日、早くもC1（六一〇〇㍍）を設営し、日本・磯野ら二名、中国・ピンゾーら三名、そしてネパール・アンカルマら三名がC1入り。アイスフォールポーター、高所協力要員（シェルパ）の力絶大である。この日、ネパール側副総隊長グルン博士BC来訪。四月五日、橋本名誉総隊長迎えのヘリがBCに飛来。離陸直前、水腰ドクターの注意でオイルパイプの損傷を発見。大変な事態になるところであった。いま考えてもゾッとする。ヘリをBC氷河上に固定、公務予定の変更できない先生に二日行程のペリチェまでグルン博士、パイロット二名と共に、一気に一日で下っていただくことにする。鈴木、高村、忽滑谷ドクター、サンブー登攀隊長ほか三名のシェルパが同行。夜七時ペリチェに無事到着されてホッとした。

日本隊員七名のみ行動。磯野、高野C2予定地（六七〇〇㍍）までトレース。六

日、磯野らC２予定地往復、大宮パーティC１入り、北村パーティC１往復。七日、大宮パーティC２往復後、中国隊Aチーム（リンツェン・ピンゾー、シャオチミ、揚久揮）C１入り、ネパール隊ナラヤンら三名C２予定地往復、C１への荷上げに一五人のアイスフォールポーター（IPと略称）を投入。次第にチーム全体のペースが上る。四月八日、大宮チーム・織田チームC２予定地への荷上げ開始。中国隊にも荷上げをするよう説得。ハクパギャルブほか二〇名のIPを投入してC１への荷上げ完了を急ぐ。中国隊Bチーム（ダンツェン・ドルジェら三名）C１往復。

アイスフォールの登り

　四月九日、山本チームC１入り、日中ネ一〇人でC２へ荷上げ。中国隊Cチーム（王勇峰ら三名）C１往復。IP一八名C１へ荷上げ。BC入りからの好天続きで計画の遅れを回復しつつあるが、悪天への兆し。気温が上昇してきたからである（午前六時マイナス八度）。四月一〇日、BCは春を告げる大雪。サンブー登攀隊長ら五名がC１入り、山本チームがC２までのルート工作以外は完全休養日となる。

　この日、待望の医療器具到着。読売の大型無線機も到着、これでファクシミリ送信も可能となる。湯浅の頭痛の種が一つなくなる。読売さんもドクター陣もよく堪えて下さったと感謝。早速、眼底出血の検査、先発隊の若手隊員ほぼ全員と本隊では中世古隊員が症状を発見される。一寸ショック。

　四月一一日、ピンゾー登攀隊長ら中国隊、山本チーム、アンリタチームによって待望のC２が建設され、中国、ネパール隊そのままC２滞在。テント三張りが設営され、約四〇〇キログラムの隊荷が集積された。この日、はじめてアイスフォールの崩壊がみられた。雪温が上昇しはじめた。C１へは、ネパール隊員、IPら計二五名によって大量の荷上げが敢行された。計画は順調に進行。

サウスコルへ

　四月一二日、いよいよサウスコルへ向って行動開始。磯野チームがC2入り。中国・ネパール隊によってローツェフェース・ルート工作開始。三隊そろってABC滞在。一三日、磯野チームらローツェフェースのルート工作に加わり七二〇〇メートル近くまで迫る。ローツェフェースは例年より雪が少なくテント設営地点の選択に難渋。荷上げもその分だけ負担がかかりそうだ。ようやく日本隊も全員高所順応完了というところ。アイスフォール往復を拒絶する中国隊では、漢民族の隊員の順応不全が目立つ。一四日、磯野、高野、態崎の日本隊だけで強風の中をルート工作。BCは雪。一五日、ABCは朝から雪。マイナス二〇度。八時半、王勇峰ら六人、アンカルマら五人の中ネ隊出発。天候悪く、途中で帰幕。一六日、一七日、一八日、天候悪く、行動の能率が上らない。アンカルマから直接私にC3位置が若干低いがそれでよいか、との意見を求めてきた。OKを出す。

　一九日、明日からは好天の予報。いよいよ、ローツェフェースのC3建設の日である。山本ら日本隊四名、シェルパ九名のサポートを受けて、ピンゾーら中国隊三名、アンカルマらネパール隊三名が午後二時七三五〇メートル地点にC3を建設。六人用テント二張りを設営して明日からサウスコルへのルート工作である。北隊は、今日から登頂態勢前の休養に入るとのこと、若干焦りを感じる。水越ドクター、中世古、TV班はカラパタールへ。四月二〇日、BCは比較的好天。上部は強風と雪のためサウスコルへのルート工作不能、そのまま停滞。酒井チームABC入り。ABCでは強風のため、テントが飛ぶ。通信用ポールも折損。水腰ドクターら一〇時過ぎ、カラパタールより帰る。元気だが、疲れた疲れたを連発。でも上機嫌。午後八時頃、疲れているのでお先に寝ますといって帰幕。

　四月二一日（晴）、想像もしなかった痛恨事、水腰ドクターが亡くなられた。いつも隊長テントで早朝コーヒータイムを過される先生が顔をみせない。午前一〇時、すでに先生は他界されていた。鈴木ドクター、オーストラリア隊も含むBCのすべての医療関係者の一時間余にわたる懸命の蘇生の努力にもかかわらず……。折しも、北側BCの今西総隊長、大塚副総隊長に報告。下山の相談をする。両隊長からBCを離れないよう指示があった。水腰さんと最も親しい酒井に高村と共にBCに帰るよう依頼。日本式のお通夜で全隊員先生とお別れをした。中国隊、ネパール隊も全員参加して下さった。クンガ隊長、王隊長と協議の結果、湯浅はカトマンズに遺体に付添って行くことに決定。タンボチェから軍隊のヘリで運ぶことを了承してもらった。隊長代理は山本に依頼。

　全隊員四月二二日より本格的な上部荷上げとサウスコルへのルート工作開始。相変わらずの好天を利して一気にしなければならない。日本隊も、ほとんどABCに集結しC3への荷上げに従事する。ペリチェより隊長交信。二三日、日本、ネパール各八名ずつでC3へ荷上げ。ルート工作隊は二〇ピッチを延ばしてピストル岩をぬける。ピンゾー、シャオチミ、アンリタが強風の中三時一五分サウスコルへ。隊長タンボチェより交信。二四日、大宮パーティC3入

り、渡辺パーティC3への荷上げに従事。湯浅午前八時三〇分タンボチェよりヘリでカトマンズへ。有地大使、丸尾氏、大河原氏に附きそわれ、病院へ解剖願いと遺体を収容。浜口欣一ドクター、柳沢昭夫両氏に付き添われた水腰夫人、令息を空港で出迎え病院へ直行。水腰先生の御遺体に対面された後、ホテルへ帰って、お詫びと状況説明。浜口ドクターによる解剖の結果、死因はくも膜下出血によるものと判明した。

二五日、織田パーティ、ネパール隊員五名、中国隊員三名と共にC3へ荷上げ。鈴木、北村C3入り。大宮パーティは、佐藤、加藤のみサウスコル到達、日本隊として初のサウスコル到着。湯浅は早朝ペリチェまでヘリで引き返す。ペリチェよりBCと交信。二六日、鈴木、北村パーティ烈風の中をサウスコルへ。山本パーティ、ネパール隊員五名と共にO_2荷上げを兼ねてC3入り。湯浅ロブジェより交信。

二七日、サウスコルに待望のテントが設営された。いよいよサウスコルへの大量荷上げ態勢作りと最終キャンプ(八五〇〇メートル)設営へ向けて、登山隊のファイナルステージを迎えた。山本パーティ、サウスコル手前まで荷上げ。中国隊の荷上げの途中デポが目立つ。いい加減な中国隊員によるデポ方式のために、日本隊員の目の前をO_2ボンベが三本も火を吹いて落下していく。BCに帰着した湯浅は、中国・ネパール両隊長に御礼とお詫びと、そしてデポの仕方についてのお願いを王隊長にする。ニマテンバのもと、C2からのサウスコルへのダイレクト輸送の開始に感謝。

四月二八日、明日登頂隊員同時発表という要請が橋本北側隊長から何度もなされる。この時点での隊員決定は苦しい。縦走隊員の完全な資格は？　と問われれば、いまのところ南側全隊員のなかでも、アンプルバ一人といってよい。そして、苦労をしつづけているアンカルマがこれに準ずる。日本隊員でサウスコルに完全な形で到達しているのは、北村、鈴木、加藤、佐藤の四名。もう一週間もすれば、ほとんどの隊員もぐんぐんと伸びてくる。申し訳なさで一杯である。サンブータマンからみた日本隊員への評価も一致。磯野、山本と個別的に相談、水腰ドクターがいてくださったらと思うことしきり。縦走隊員は、北村、鈴木のいずれか。二人で話し合ってみろ、といってその回答待ちにした。最終キャンプから各国二名、サウスコルから各国二名総計一二名の登頂計画が可能かどうか。この日も烈風の中、織田、大貫、井本らはサウスコルへ懸命の荷上げを完了。

四月二九日、あわただしい一日が始まった。日本側リーダー会議で隊長原案が了承。つづいて全体会議を開催。縦走登頂者・北村、C5出発のサポート・磯野、サウスコルよりのサポート鈴木、加藤と発表した。隊員全体の賛成を得て、三国隊長会議にのぞんだ。最終的にはサウスコル到達時に決定するというのがクンガ隊長の意見。中国隊は、ダツェリン(縦走)、ピンゾー、シャオチミ、ベンバザシに内定。ネパール隊は、アンプルバ、スンダレ、アンリタまたはアンカルマそして軍隊代表トップ・バハドゥールということだ。

交差縦走に向けて

四月三〇日、TVの要請からBC出発を七時、日本隊、中国、ネパール隊と順次出

発。酔っているスンダレをサンブーとパサンが抱きかかえるようにしてアイスフォールまで連れていく姿に全員爆笑。C1直下でTV隊の長々としたインタビューを受けたことに、磯野・TV隊は隊長に一喝されるという一場面もあった。

五月一日、磯野らABC入り。サウスコルサポート隊BC出発。鈴木には、サウスコル出発は午前一時、遅くとも三時、O_2は早朝は思い切って毎分3㍑を基準にして行動せよ、と子供じみた注意を与えて見送った。何故か胸がしめつけられるような思い。この日ネパール隊は、高所協力要員一〇名がC2からC4へと荷上げ、C3からはネパール隊員がC4へ荷上げ。O_2二四本、テント三張りほかの荷上げとアイスフォール・ポーター二名がサウスコルに到達したことを誇りをもって伝えたい、とのことであった。酒井ら日本隊四名C2よりC3へ荷上げ。これで、とにかく最終キャンプ設営と交差縦走の目処が立った。日本隊員全員が南側荷上げの中心的な存在になったことも心強い。

五月二日、磯野、北村、青田(TV)ら日本隊C3入り。中国隊・ネパール隊も全員C3入り。この日、ナラヤンらネパール隊員・高所協力要員六名によって、八五〇〇㍍最終キャンプ(実は八三五〇㍍であった)にO_2一〇本、テント二張り、食料一五キログラムを荷上げ。テント一張りは設営されたが、テント一張りとO_2一本はキャンプ下一〇〇㍍地点にデポ。明日中あるいは最終キャンプ入りする隊員によって完全な登頂態勢ができる見通しがついた。鈴木、加藤は二時間でC2入り。高村ら日本隊三名昨日につづいてO_2六本C3へ荷上げ。後は、五月五日に向けて後三日、ひたすら頂きを目指すチームとしてのコンセントレーションを作り出すことだ。

五月三日、最終キャンプ入りを目前に控え、北も南もピーンとした空気がはりつめている。午後から天候悪化の予報であったが、早朝から上部はブリザードにさらされていた。磯野は、「しばらく待機」のコールを送ってきた。しばらくして「本日の行動は無理、鈴木、加藤のC3入りを止めて欲しい」とのコール。「鈴木、加藤は予定通りC2をすでに出発して、もうすぐC3入りをする。それよりも、今日どんなことをしてもC4入りする、という前提で問題を考えて欲しい。勿論、それらの決定は君に委ねてあるし、君以外に判断することはできない。いま、王隊長・クンガ隊長と相談して君だけはC4までO_2を使用する、という了解も得てきた。五月五日がターゲット、このことを十分に認識して欲しい。それには今日は、もっと天候が悪化する前O_2を使用してもC4入りを敢行してくれ」とコールバックした。中国隊もネパール隊も行動の気配は全くないという。「もし今日C4入りしないのであれば、明日は北村、鈴木のコンビというように計画を変更して、一気に最終キャンプ入りをさせるという方法もある」と示唆。九時三〇分C3入りした鈴木、加藤から、一たんC2に帰り明日一気にサウスコルまで上りたい、との要請があったがこれを断ったのも、磯野の新しい可能性への判断を期待したからだ。二時間後、いよいよ激しくなったブリザードのために、磯野からC3滞在の決定を知らせてきた。もう無理であろう。

命運を分けた日

結果論的には、この日Ｃ４への登高敢行の断念が命運を分けることになった。他のスポーツにとっても必要不可欠の集中力の有無である。高野ら三名Ｃ３へO_2三本荷上げ。織田ら三名Ｃ２入り。サウスコルから、アンカルマ、ナラヤン、ニマテンバがＣ２へ一気に下降。

五月四日、若手日本人隊員は昨日の指示通り六時にテントから飛び出す。それにもかかわらず、まず六時三〇分、アン・プルバ（ネ）を先頭に、ダツェリン、ピンゾー（中）、さらに中国隊、ネパール隊の順で七時半にＣ３を出発。最後に、磯野を先頭に鈴木、北村、加藤、遅れてＣ２からのアンカルマ、スンダレ、最後に不調のトップ・バハドゥール・カトリが後続した。固定ロープ使用のため、ほぼこの順序で全員サウスコル到着。一二時、日本隊は、鈴木、シャオチミら中国隊員、遅れて磯野、青田の順で到達。アン・プルバは、クンガ隊長の厳しい命令によって一二時一五分Ｃ４出発、ピンゾー、ダツェリン（中）がこれにつづく。全員O_2を使用して出発。一二時三〇分から一時にかけて北村、加藤、スンダレ、トップ・バハドゥールの順で目の前を登高しはじめたネ・中の隊員をみながらサウスコルに到着。山本らＣ２に集結。

しかし、サウスコルで磯野は最悪の状況を迎えた。予定していた酸素二四本がない。三本をアンプルバらが使用して出発したので二一本はある筈。ＢＣとＣ２の森本を介しての再三の交信。鈴木、アンカルマはそれらの情報を頼りに散在するデポを探してサウスコルを走り回る。結果、本隊のO_2一八本を集めたが、ほとんど使用済みで、フル充填のO_2は八本しかなかった。苦悩する磯野に湯浅は、日本隊員を送り出すことをまず前提にして考えよ、と送信して仲介する森本が困惑する場面もあった。磯野は、シャオチミら中国隊員、軍隊の栄誉を守ろうとするトップ・バハドゥールの登高断念とＣ３への下降の説得に苦労していたからである。ＢＣは、これを受けてクンガ隊長、王隊長への上部説得を依頼。あっという間に二時間を経過、磯野は意を決して北村を単独で送り出したが、ブリザードが激しくなり北村はＣ４へ引き返す。

五月五日、待望の交差縦走の日である。午前〇時三〇分、一時三〇分、ムダを承知でサウスコルへ送信。与えられた条件のもとで、ギリギリまで考えつくすところに登山の厳しさと面白さがある。それらのすべての権限は磯野に一任してある。磯野の苦悩はいかばかりであろうか。クンガ隊長からも何度も問い合わせがある。本日のサウスコルへの酸素荷上げ量とその到達時間の打合わせと確認をする。いずれにせよ、北側隊員の迎え入れ態勢は心配はない。北村のサポートおよび翌日の登頂の可能性も話し合う。深夜からの不眠不休の会談でＢＣは多忙。これらの諸々の可能性を示唆するためにも、交信を何度も試みる。

ようやく五時頃よりＣ２経由の交信開始。ネパール側交信から、午前五時五分、アン・プルバら三人の最終キャンプ出発を知る。同時に、北村がO_2の用意をして出発準備完了の旨の連絡。六時には出発するとのこと。急げ！

六時三〇分、四人のシェルパがＣ３より四本の酸素をもってサウスコルへ出発。Ｃ

2からサウスコルダイレクトの荷上げのために一〇人のシェルパも出発。十分な支援体制、さらに、C3からは、織田、渡辺、井本も荷上げ。八時四七分、北村よりの交信がC2経由で入電。最終キャンプ（C5）到達。順調と判断。九時三〇分、北側と第二次縦走計画について交信。橋本隊長には、その気配がチラつく第二次計画が中止にならぬよう先手を打って北京と連絡をとってくれるよう依頼。

九時三五分、ネパール隊長、中国隊長用テント騒然。想像を超えたスピードで、わが山田昇らが北東稜より登頂した。重広が三人の登頂のために用意したであろう祝いのメッセージを贈る。自信に満ちたねぎらいと満足の言葉が聞く者にずっしりと伝わってくる。重広登攀隊長そして橋本隊長へ南側を代表して祝辞を送信。クンガ隊長、王隊長と共に抱き合い喜びを分ち合う。百パーセントの幸福感は、北村の登頂まで待たなければならない。

一〇時一五分、ようやく磯野よりコール。いままでの経過報告。御苦労様。後は北村の力と強運に期待しよう。

読売の撮影取材フライト（一〇時三〇分）。しかし、南側には頂上付近に隊員はいない、という情報。

一一時一〇分、山田昇ら下降開始。北側サポート隊の苦闘の様子伝わる。北村の縦走はあきらめよう……。

一一時二五分、アン・プルバO_2不調により、スピード落ちるがもうすぐ登頂する、との交信入る。

一二時一〇分、山田昇よりヒラリー・ステップの下でアン・プルバら南側縦走隊員と出合った旨の交信。なぜこんなに遅いのだろう。北村の姿はもちろん視野にはないとのこと。いずれにせよ、サウスコルにO_2一二本、最終キャンプ直下一〇〇メートルにO_2一本があるので安心して下降してくれるよう伝える。重広と交信。重広と話をしてみたかったからだ。北側サポート隊は北村を意識せずに下降して欲しい。重広了承。つづいて、ABCに待機している山本に交信。「山ちゃん！　北村からの交信があったら、ただちに下降を指示して欲しい！　北村の命が大切だからだ。隊長からの命令だと伝えて欲しい」「了承！　必ずそう伝える！」。涙を押えることができない。申訳なさで一杯だ。

一二時二五分、北村より山本に交信が入る。山本が「バラサーブからの命令である。君の生命が大切だ。だから、ただちに下山すること」と北村に伝えている。昨夜来、何もたべていないが決して調子は悪くない。山田昇と会ってから下降したいとのこと。現在のヒマラヤ登山であれば、ギリギリの限界まで登頂を試みるべきであろう。北村ならばできる。しかし、遭難一歩手前の登頂を試みさせるわけにはいかない。三国合同登山隊だからだ。ただただ詫びる以外にはない。

一二時四五分、重広にコール。北村の登頂断念を伝える。適切な処置であろう、とのコールバック。

一二時五五分、テレビ隊、サポート隊登頂の報伝わる。つづいて、南側三名も、頂上からの視野に入ってきたとのこと。ネパール隊長用テント、中国隊長用テントが熱気に溢れて歓声を上げている。複雑な心境のまま祝意を表しにテントを出る。抱きつかれ、きつくホホずりをされる。

　とにかく、歴史的な交差縦走が実現した。みずからをふるい立たせ、二次登頂計画に着手する。一一時四〇分、磯野らBCに帰着、二時二五分山田昇らサウスコル帰着、遅れて四時近く北村もサウスコルへ。この間、織田ら三名は、二次登頂に向けてサウスコルへの荷上げを完遂。長い五月五日、南側の行動は終った。六時二三分、大塚副総隊長と交信。北側隊員へ詫びる。夕方、ビレンドラ国王より異例の祝電があった。ネパール隊員の意気は益々あがった。

登山中止命令後

　五月六日から南側は大量登頂をもって画竜点睛を欠いた五月五日の埋め合わせをすべくただちに行動を開始した。午後六時、北側大塚副総隊長より北京総指揮部の登山中止命令が伝えられた。王隊長からは何の話もない。クマールカドガ殿下からは二次登頂GOの入電。クンガ隊長からは協力要請。五月八日まで一二名の登頂ができるまでにサウスコルに完全に荷上げを完了。今度は、日本隊主導による土台作りができ上っていたのである。大塚副総隊長、斎藤統括隊長を数時間煩わせての説得。五月八日、今西総隊長から「……最終キャンプにいても、日本人の登頂はあきらめて欲しい」旨の入電。それは、八日午前中に送ったネパール側の日本隊と共に登りたい、との公式要請状への返事をも意味していた。クンガ隊長も泣きながら納得してくれた。登頂目前の隊員達もさわやかに応じてくれた。この三日間の湯浅と北側との交信をすべて傍受していたのである。五月九日午前七時「……ネパール隊員をいま送り出しました。私達はこれからBCに下降します」という山本の明るい声を私は終生忘れない。こうして、三国合同登山は終結した。

　翌日、日本隊のサポートによって、ネパール隊単独登頂という新しい歴史のページが書かれることになった。スンダレ五度目の登頂、パダム・バハドゥールはロイヤル・ネパール・アーミー初登頂となった。

　短い春のサガルマタ登山は終った。〝山は逃げない〟とはいうものの、それぞれの若い隊員達のサガルマタは遠くへ去ってしまった。すべてが隊長であるわたくしの責任である。とりわけ、いまだに信ずることのできない盟友・水腰ドクターの死は重くのしかかってくる。わたくしの配慮が足りなかったにちがいない。すべてのことに、どのように償うべきかを知らない。いまは唯お詫びする以外にはない。しかし、すべての人の力によって、この登山隊の目的は達成した。日本隊は、南側からの登頂隊員を送り込めなかった。どれもこれも隊長の責任である。その直接原因も間接原因も、南側日本隊員は知っていよう。八八四八㍍の高さは偉大である。ひとつひとつの積み重ねの大切さも学んだ。なによりも、チームに五月五日の集中力を作ることができなかった、という批判を甘受せざるを得ない。それと共に、登攀者みずからの集中力という問題も、南側に下降した山田昇君の行動から、すべての隊員が学んでくれた筈である。それは、観念的なものではなく、実践のなかでのみ培われるものであろう。いまは参加した隊員諸兄が大きく飛躍してくれることを確信する以外にはない。

　最後にすべての関係者と隊員諸兄に心からの謝意とお詫びを申し上げて、南側登山隊の報告の稿を閉じたいと思う。

〔中・日・ネ　三国友好登山隊〕

チョモランマからサガルマタへ
初縦走を完成して

山田　昇

一九八八年五月五日、12時50分（北京時間、日本と同じ、ネパール時間9時30分）、頂上。天気晴朗で微風。〃山田さーん〃と呼びながら、ツェリン・ドルジェ（中・29歳）とアン・ラクパ（ネ・27歳）の二人は〃ワーッ〃と抱きついて来た。

〃よかったなあー〃と握手して肩をたたき合った。

自分を信頼し、まかせ切っていた彼等。キャリアも年齢も、私の方がずうっと上なので当然かも知れないが、縦走隊員が決定されてから、三人の中では自然とリーダーシップは私がとるようになってきた。

三度目の登頂だ。つき上げる感動より、冷静な、余裕のある気持でいられた。そして、北側からぜひ登ってみたいと思って参加したので、本当にうれしかった。

頂上では恒例の儀式、記念の写真を撮り合い、各々独自の行動をしていた。

私は、重広登攀リーダーとトランシーバー交信をし、南側からの縦走隊、TV隊を少し待つことにした。

頂上での1時間ぐらいはあっという間に過ぎてしまった。ノースコル、ABCにいる仲間の一人一人と交信し、喜びをわかちあい、祝福を受けた。

ツェリン・ドルジェはフィルム・チェンジの際素手になったためか、手が凍傷になりかかり、足も冷いと言い出し、アン・ラクパも寒いから下ろうとイライラし出した。

そんな時に、サポート隊のリチシンの姿が見えてきたので、少し待つことにした。

頂上についた彼に、酸素を荷上げしたか、ときいたが、〃ない〃という返事であった。

アン・ラクパは酸素二本をかついできたので、自分でつけかえた。私のは残量30気圧だったが、下りはいらないと思ったので心配はしなかった。

14・00、頂上を後にした。

6 m/mのロープにアンザイレンし、私がトップでヒラリーステップの頭まで下ると南峰が見え、南隊員が登って来るのが目に入った。ルートの見通しが出来てホッとした。

登ったことのあるルートでも、踏跡のないルートを降るのは、雪崩の危険もあるし、嫌なものだ。これで雪の状態がわかり南側の下降への安全性は高まった。

南隊も、われわれのトレースによって安全に頂上に達することが出来るだろう。南隊とは、頂上と南峰とのコルで出会った。お互いに無事を祝し、一気にサウスコルのC4に向って下山した。16・00頃、南峰下で独り登って来た北村隊員と会い、下からの指示通り、一緒に下る。

Ｃ４では、スンダレとアン・カルマの二人が私達を迎えてくれた。折から荷上げでＣ４に到着した井本は、炊事などサポートしようと申し出てくれたが、寝袋が不足しているので、そのまま下山して行った。

かくして無事、初縦走は成功し、翌日ＢＣへ下山し、完了した。

成功の原因

北側について言えば、荷上げ管理のうまさ、重広登攀隊長の手腕に負うところが大きかったと思う。

ルートがわかり、特別に困難な登攀のない今回の登山では、天候次第ではあるが、成否の鍵は荷上げ管理につきる訳である。ＢＣ・ＡＢＣの責任者は荷上げ輸送に努力し、その成果がこの成功を支える陰の力となった。

三国が対等、平等に荷上げすると云っても、荷上げ、荷物の管理は三国平等では出来ない。その辛い作業が日本隊員にかかるのは当初からわかっていたので、文句なしに積極的に日本側が任務をはたした訳だが、こういう態度がいい結果をもたらした。

好天も幸いし、計画通り順調に運んだのはこういう基盤があったからだ。これにより、高所のＣ５・Ｃ６・Ｃ７を予定のキャンプサイトより高い所に設営することが出来たと思う。

厳しいチョモランマの気象

春のチョモランマは極めて厳しい気象状況であった。私の過去10年、16回のヒマラヤ登山の中では、パキスタン、インドを除くと、12回はネパール・ヒマラヤで、冬期は6回（サガルマタ、マナスル、アンナプルナを登頂）経験している。その冬期の体験より、今回のチョモランマの春は厳しかったと感ずる。それは風と嵐である。特に3月中の烈風でＢＣの生活は辛いものがあり、ＡＢＣのテントの一部は休養中に吹き飛ばされ回収不能の物もあるほどであった。そしてノースコルＣ４からＣ５へのルート工作、荷上げに当った4月上旬、初体験の風とのたたかいであった。

特に七五〇〇㍍ぐらいのところ、北東稜の雪稜の終了する付近は風口と思われ、北壁にぶち当った風が、一気にその付近を吹き抜けるようである。地形的に対比すると、南のサウス・コルがローツェ・フェイスの風の乗越しになっているのと同じようである。風の吐息というか、切れ目がなく、30～40ｍ／secの強風がグワーッと吹き荒れている。

４人でルート工作の途中であったが、はいつくばり、岩にしがみついて息をつめ、チョロッ、チョロッと動くのが精いっぱい。気圧が低いからその分風圧も減るのだろうが、平地だったら吹っ飛ばされているだろう。フィックド・ロープをザックから出そうとしても、風がザックと身体の間を吹き込み、もぎ取ろうと襲いかかるのでザックを外すことが出来ず、身体ごとザックを預け、ザイルを出してもらう有様で、こんなひどい風の状況の中で行動したのは初めてであった。

稀に見る好天が続いたといわれる今年の春のチョモランマ登山では、風は大敵であった。

最終キャンプ・Ｃ７八六八〇㍍のこと

最上の位置で、ここしかないであろう。キノコ型の岩があり、四人用のテントを三張り建てるスペースが稜線上にあった。

今回はＴＶ中継を行う目的があるため、

八六八〇㍍の最終キャンプ確保と物資の集結は最大任務であったので、5月4日に、縦走隊3名（日・中・ネ各1名）、荷上げ隊4名（ネ）によってアタック態勢がとれたとき、成功の確率は非常に高まった。

少し下の八六〇〇㍍付近にも、かつての中国登山隊のキャンプ跡と見られるところがあったが、上の方が遥かによかった。

最終キャンプの夜―異文化登山の断面―

会話や話題には不自由しなかった。私とアン・ラクパがネパリーで話をすると、ツェリン・ドルジェがじっと聞いていて、アン・ラクパとチベット語で話す。ざっとこんな具合で、きわめてリラックスした気分で、これにサポートメンバのーラクパ・ソナが、テントに入り込んで、一層賑やかであった。夕食のメニューを紹介しよう。

(イ)ツァンパを溶いてソバガキ状にしたデュロー。これをチーズとからしのスープでたべる。

(ロ)カップライス。隊の用意したもので、インスタント食品。

(ハ)α米、肉、ツァンパをスープ状にしたもの。

これらを交互に調理してたべた。やはり中心はツァンパであった。

日・中・ネ三国の異文化の合同登山については、出発前からいろいろと心配があったが、私はそれほど気にしていなかった。

それは、シェルパには友人も多いし、私の知らないシェルパも私のことは知ってくれているであろうし、私もいくつかの合同登山――ポーランド、インド、ネパール――の経験があり、どの人たちともいまでも友人としての交際が続いている。合同登山の持つ いい面や楽しさを私は経験しているので、それが今回も参加の動機の一つであり、大きな魅力であった。

私は、登山家に必要なものは、体力・技術のほかに、いい人柄だと思う。山に入ってテントで同じ釜のメシを喰えば、少々の文化の違いはお互いを理解しよう、たすけあおうということで、問題にはならず、うまく運んだ。私の場合は、特にそうであったが、全体的に見て、友好登山は成果があがったと思っている。

第2ステップと上部について

C7から一〇〇㍍ぐらいのトラバースで第2ステップの基部につく。第2ステップは取付きからクーロアール状の岩場、チムニー、雪壁、梯子（鉄・アルミ）の順となり、その取付きのクーロアール状の岩場には一つの段があって、ちょっと急になっている。二～三㍍右に逃げて上の一つの段に、腰ぐらいの高さのテーブル状の段があり、その上に乗ってからトラバースしてチムニーに入る。

ツェリン・ドルジェがさっと登って行ったが、ピトン、ハンマーなど持っていないので私が登って行き、ピトン2本でビレイの支点をつくる。岩がもろく、ピトンがうまくきかなかったが何とかだましながら打った。古い6m/mのフィックスド・ロープがあり、これを利用した。ビレイしてアン・ラクパを登らせると、ツェリン・ドルジェは上に登っていった。ハシゴ下の雪面に着き、75年の中国隊の残置した鉄、85年のスペイン隊が補強したアルミ（六～七㍍）の二段の梯子を登ると、その上に岩のピナクルがあり、これを支点にしてロープをフィックスした。ハシゴを登りきり、二㍍ほどの垂壁を右に廻り込むとガラ場に到着、ざ

っと1時間ぐらいであった。あとはこのガラ場の斜面を二〇〇㍍ほど登り稜線を行くと三角雪田につく。雪の状態は一定せず、軟かい所は、膝、腿、腰ぐらいまでのラッセルがあり、ルートは、硬い、歩きやすい所を選んで、右、左と方向を変えた。ある時は東面のカンシエン氷河側、また北壁側を登りそのまま抜け切った。

交信したり写真をとりながら、最後から登って行った。私は競争するつもりはなかった。しかし、中国とネパールの連中はやはり、どちらが一番に登るかという意識はあったようだ。交信、撮影などの任務をはたしながら、遅れたのは10分ほどであった。

アルパインスタイルと極地法

極地法登山は古いやり方でアルパインスタイルが近代登山だという短絡的な認識があり、大きな極地法登山は時代遅れだという意見もあるが、それを正確に論評出来るのは両法の登山を実践した者だけだろう。

メスナーは極地法登山はやらないし、やろうとしても出来ないだろう。そういう彼も最初の頃は、オーソドックスな極地法登山でヒマラヤ登山の経験を重ねた末に、無酸素・単独という独創的な登山を行った。

アルパインスタイルは、それを実践するには、強い身体、技術、精神力がいる。自分自身への追求であり、緊張の持続が要求される。登れない確率も多く、下山のルートも確保されない場合があり、リスクが多くなることもある。

極地法登山のむずかしさもある。リスクを少なく、安全、確実に登山を成功させられるのがこの形式のメリットだが、それは反面デメリットでもある。タクティックスは複雑になりむずかしくなってくる。

私はいままでに、短期（20～30日）の極地法登山を経験してきたが、だれでも出来るものではない。全員登頂出来るような登山を実践したらよいと思う。

どちらの方法がよいかでなく、登るルートによって方法が選択される訳である。その選択はあくまでも個人の経験と判断によるものであって、山岳雑誌に見られる似非な論評や、登山の風潮に惑わされてはならないと思う。

登山

参加してよかった。中国やネパールの友人達も本当に心から喜んでくれた。

多くの人達と一緒に山登りが出来るというのが参加する魅力の一つであったから、成功して、その上、こんな多くの友人が出来、人脈がひろがったことは、私にとって大きな財産となった。特に若い連中と知り合いになったので、希望があれば山行を共にし、引張って行きたいし、自分を生かして行く上に、あらゆることをどん欲に吸収したいと思っている。

JACには、次の何かを企画し、続けてやってもらいたいと思う。

展望

私個人については、冬のアンナプルナ（'87冬）を終った頃から、八〇〇〇㍍の14座を山田が登るべきだ、という励しの声を真剣に受けとめている。残り7座あるが、この10月には中国側からのチョーオユーとシシャパンマを登りに行くので、あと5座（ネパール1、カラコルム4）は40歳になるまでに果したい。そして登山が社会的認知を得るのに一助をつくしたい。

チョモランマ／サガルマタ友好登山隊に参加して

一、いちばんうれしかったこと（または、うれしかったとき）
二、いちばんたのしかったこと（とき）
三、いちばん困ったこと（とき）
五、いちばん残念だったこと（とき）

○———名越　実（北）

一、チョモランマの頂上に立ちたいという気はこの話があるまでは毛頭なかったので、登山活動については、自分としてはこんなもんだと思っている。なんといってもうれしかったことは永年あこがれていたチベットの地を踏み、ものの本に読んだ道をたどり、寺々を訪れることができたことであろう。他にもたくさんあるが一番はこれにつきる。

二、今度のような登山の場合、最初に橋本隊長もいっておられたが、半分請負のようなところもあって、登山活動の中では楽しいようなことは少なかったように思う。

やはり帰りの途中途中での街であり、買物の掛け引きであったと思う。

三、いろいろ困ったことはあったが、何といっても言葉の問題。とりわけ中国語はまるっきりで、片言もしゃべれなかったので本当に困った。中国の隊員たちとも、もう少し気持をかよわせることができたら、自分の中にも変なわだかまりを残すことはなかったと思うのだが。

四、山屋としては、やはり思う存分の活動ができなかったということにつきる。

今までのエクスペディションを含む長期登山において一度もなったということのない胃潰瘍なんぞにかかってしまったということは、ひとえに自己管理のまずさにあるわけだが、残念というよりは情けない気持の方が強い。

○———三輪　文一（南）

一、C2まで登り、BCに帰って来た時に、しばらく来なかった、家族からの手紙がまとめて到着しました。子供達がそれぞれ、元気に新学年に進級し、妻も頑張ってくれている様子で、安心すると同時に大変うれしく思った事を思い出します。

二、BCからの帰途、我々BC要員三名は、ゴーキョにトレッキングに行きました。そしてナムチェバザール近くまで下山して来た時に、ネパール隊員達と偶然出会いました。彼等も登山が終了し、少し酒が入って、大変リラックスしていました。満開の石楠花の中、ラジオカセットのボリュームを一杯に上げて、ナムチェまでの道を皆で、ワイワイ言いながら歩きました。

三、中国隊の隊員との意思の疎通がうまくいかなかった。もう少し中国語を勉強し

ておけばと、くやまれます。ネパール隊員とは、片言の英語でなんとか会話できたのですが、中国隊員とは、英語のできるごく一部の人としか話せなかった。

四、南側の日本人が頂上に行けなかった事等、他にもありますが、なんといっても水腰ドクターが御逝去された事につきます。心より御冥福を御祈りいたします。

○――――熊崎　和宏（南）

一、自分はサミッターにもアタッカーにもなれなかったので、特にうれしかったことはなかった。でも、日本人隊員は勿論だが、ネパール人隊員や中国人隊員ら多くの友人を得ることができたのはうれしい。下山後、カトマンズで彼らと別れるとき、「またきっと必ず一緒に登りに行きましょうね」と言わずにはいられなかった。

二、キャラバンの最中、アイスフォールを登っているとき、ウェスタンクウムを登っているとき、そしてローツェフェースを登っているとき、自分がエヴェレストを登っていると実感するとき、すべてが楽しかった。

それとやはり、メイルランナーが日本からの手紙を持って来てくれるときはとてもうれしいものでした。

三、カトマンズへ下山後二日目にひどい下痢になり、それから一週間おいしい御馳走を前にして何も食べられず、とても悲しい思いをした。

それと、高所の冷たく乾燥した空気に気管支をやられ、咳が止まらなくなり、肋骨まで痛めてしまい、寝返りも打てない状態になってしまったときもつらかった。

四、高所では登りで自分の限界まで出し切ってしまうと、下降中高度障害にやられ非常な危険にさらされる。自分は高所での経験が少ないため、高度に対する自分の限界が見極められず、また順応のパターンもわからなくなり、結果として本当に自分の力を出し切れなかったような思いが残り大変悔しい。この悔しさをバネに、これからも高峰への挑戦を続けていきたいと思います。

○――――増山　茂（北）

一、登頂隊員が限られる今回の如き登山隊の場合、医師にさえ自らの不調を訴えるのを躊躇しがちになるのだが、喉が頭が痛い、咳が止まらぬ、下痢ぎみだと始終訴えるネパール隊員がいた。痩せて小柄な病気持ちのこの男、しかし頂上サポートに選ばれ登頂成功。無事ノースコルに下りてきた。「ラクパ・ソナ。薬ばかり服んでよく登れたな」「ドクターサーブ。ごめん。あれはうそ。友だちが言えないので私が代わって薬を貰ってたんです」これは自己犠牲の精神か、それとも計画的略取か……。「でも、ありがとう、ドクター。ハイ、これ」昨日ひらったばかりの頂上の石。複雑な気持ちは残るが、まあうれしいよね。

二、言葉の問題もあろう。ネパール隊員には通ずるインチキ英語も中国人隊員には無効で、どうも疎遠になりがちな間柄。殊に筆談の中国語会話すらままならぬチベッタン隊員。名前さえ覚えられぬ。しかし、凍傷の治療の間など、〝ヤボドゥゲ〟〝カンダドゥー〟などとチベット語で話しかける。"How are you ?" の意と解した彼、顔をほころばせて〝トゥジェチェ〟と答える。治療が終れば、ニヤッと笑って差し出

されたのがサントリー（に入ったロキシー）。いつでも、どこでも、会話と酒は精神の窓。

三、咳は高山病の典型症状だといわれる。今回も例に漏れず、特に六五〇〇㍍のABC以上では、ほとんどの隊員を悩ませた。「ねえ、ドクター。なんで高所ではこんなに咳がでるの？　乾いた冷たい空気の吸い過ぎだけ？　気道のレセプターを刺激する何らかの化学物質が岩層の中にでもあるのかしら。装備の羊毛や羽毛がアレルギー反応に関与しているのかな。低酸素や低圧それ自体が刺激要因？　肺胞壁にあるレセプターって何？」「ねえドクター。この前の鎮咳剤も抗生物質も全く効かなかったし、きのうの消炎剤もダメ。何かちゃんと効く薬は持ってないの？」……そんなこと判っていたら、昼夜を問わずゴボゴボ苦しめられている自分自身の咳を真っ先に治しておるわい。

四、まず最初に水腰Dr.の御逝去。合掌。次に五月六日夜の登山終結宣言。当日の事態の推移は正確に再現されねばならぬ。二転三転した総指揮部の決定は首尾一貫した方針の下にあったか否か。その方針は議定書に定められた精神に合致したものであったか。もしポリシーの変更があったとすれば、前のそれを覆すに足る合理的な根拠理由の提示がなされていたかどうか、が問われねばならぬ。後の評価に耐えぬ強権的決定であったとすれば、三国の友好を著しく損なうものとなろう。

○――――中世古隆司（南）

一、それは、三国間で大事に至るような大きなトラブルが発生しなかったことです。実際はいろんな注文、苦情が中、ネ両国より隊長に寄せられましたが、隊長あるいは担当者の段階で処理され、あまり気まずくなるようなことはなかった。お蔭で湯浅隊長の白髪が一段と増えたとか。また日本人隊員同志は特にチームワークもよく、みな協調的に事を運んだのが私にはよい印象として残りました。

二、登山が中止になり、隊員は随時下山したのですが、たまたま私はナムチェでアーミィとシェルパの合同祝賀会に出くわし、午後から夜遅くまで、飲めや歌えや踊れやの大さわぎ。特にアーミィの一団とシェルパニ達の掛合いの歌は音楽好きの私には最高のプレゼント。またBCではドクターの勧告で禁酒していたので、この日は解禁とばかり、ビール、ロキシー、チャンと飲みに飲んで踊りました。

三、五月に入り、アタックが目前にせまった頃になって、今までの、まずまずの好天続きから雲行きがあやしくなり、特に五月三日は完全に悪化し、四日も引続きよくなく、登頂予定日の五日も早朝は悪かった。それまで気象係の私はのんびりと構えていたが、この三日間は心配で心配で、夜もおちおち眠れなかった。もっとも私がじたばたしても仕方がないことは解っていても、気象係と名がつくと悪天候に何となく責任を感じてしまうから不思議なものです。

四、それは登山の突然の中止です。五日に日本人登頂者を出せなかった南隊としては、どうしても二次には成功させるべく、直ちに態勢を立て直し、前進しました。私が見ていても隊員の中には、気力、体力とも十分登れそうな者も何人かいたので、本

当に残念でした。山は逃げないとはいっても、サガルマタを狙えるチャンスは少ないものです。

いちばんが二つあるのはおかしいのですが、水腰先生を山で亡くしたことです。いわゆる山のアクシデントではなかったにしろ、帰国者が一名欠けたことは、本当に残念なことです。

○――上野　幸人（北）

一、なによりも第一次隊の成功を喜びたい。そして、私個人としては、登山における重広さんの登攀隊長としての指導力と山田さんのすばらしいリーダーシップを見せてもらったことが大きな収穫となった。

二、食事のひとときである。それぞれの隊員たちのおもいのこもった料理を食べながら仲間たちとの雑談はとても楽しく、疲れを癒してくれた。このひとときは、なににもかえがたい時間であった。

三、ABCでの食事当番のときである。限られた材料を使い、いかに工夫するか。それぞれの腕前を発揮し、しだいにエスカレートしていったため三順目、四順目となるとネタが切れてしまい、何を作ったらよいか前日から思案したものである。

四、五月七日中国政府より、日本隊の登山活動に中止命令を出されたことである。

○――奥　淳一（北）

一、ラサールクズーシガールーBCと高度を上げその度に高度に悩まされた。BCに到着しても頭痛や「むくみ」がひどくその中での作業は大変つらかった。五月十三日高度のトレーニングとしてC1を往復した。空身であったが歩けた。今までの苦しさからBC以上で歩けるか不安であった。一歩一歩踏みしめて歩いた!!　歩ける、登山ができる!!　私の知人すべてに知らせたかった。「歩ける登山ができる」と……。

二、大変一般的だけれどやはり手紙を受け取る時です。それ以外では食当になって作った料理が全員に受けた時。好評だったメニューは、かき揚げ、カツカレー、フレンチトースト、etc……。

三、装備担当の私はシガールにて、装備を各国に分配の指揮を執らなければならなかった。高度障害のひどい私は思うように動けず、登攀隊長はじめ多くの方々に迷惑を掛けてしまいました。チベットの高度と風と寒さには本当に苦労しました。

四、いうまでもなく登頂の機会を一度もあたえてもらえなかったこと。

○――神園泰比古（北）

初めてC1に到着した時は感激した。何に感激したかというと、そこにあった食料にである。私は入山以来一ヶ月と少しの間、ずっとBCにいて、中国人コックの手による料理を食べていた。この料理がまずいというわけではないのだが、あいにく私の口には合わなかった。食傷気味の所でようやくBCを離れC1に上った。そこには大好きなカップライスはなかったものの、〝ガンバレ玄さん〟や〝レトルトのカレー〟などBCでは食べれないものがあふれていた。その晩、私はあれやこれや三人分食べてしまった。この時ほどめしがうまいと思ったことは後にも先にもなかった。この時ほど満足感を得て床に就くことができた夜もなかった。これはいってみれば次元の低い話だが、逆にこの程度であったとい

うことだろう、私とチョモランマとのかかわりが。
この次元の延長にある限り、楽しいことも、困ったこともなかった。感情の起伏はいくつかあっただろうに、たいしたものではなかったように思われる。今から振り返ってみれば、この点残念だ。

○―――――――馬場　博行（北）

一、二、どんなに山に対する情熱があっても、多少のヒマラヤ登山の経験を有していても、大規模な遠征ともなると、おのずと隊員決定の範囲は狭まってくる、しかし今回は地方のほうにもという配慮があり、長い間夢みたチベットからの登山のチャンスを掴めたこと、そして真黒に雪焼し、苦楽を共にした、すばらしい全国の仲間達と出会ったことは、私にとって生涯忘れることのできない思い出となった。
三、四月十四日八時、意を決して第五キャンプから出る。外は冷凍庫のような外気マイナス二十五度に包まれながら、肌をさす烈風に手と足の指は、すぐに凍りついてしまった。そんな中で二度目の八二〇〇㍍への荷上げである。リュックの中に酸素ボンベ三本を入れ、一本は吸うために、感覚が失われた手先で、凍りついた酸素ボンベへやっとの思いでレギュレーターをセットした。サァこれで出発できる。コックをひねる、ところが酸素は全然流れてこない。いくらコックをひねってもレギュレーターの針は0をさしたままである。「アーアー神様」ネパール隊員によって吸いつくされた空ボンベに、強風吹きすさぶ中、必死になってセットしていたのである。
四、BCで十分休養したのち、なにがなんでも、どんなことがあっても、「必ず頂上に立つんだ!!」そんな決意と闘争心が、身体と心を支配しきっていた。「ヨシ!!頑張るぞ!!」僕はみんなに見送られながらABCを後にして、約一五キロの食糧を背負って、ノース・コルへ向って歩きだした。しかし第四キャンプで待っていたのは悲しい知らせだけだった。「今日を最後にABCで待機せよ!!」僕はア然となりヘタヘタと座りこんでしまった。一瞬僕は僕でなくなってしまった。チョモランマの頂が涙と共に流れ去ってしまった。華やかな夢とロマンがくだけた一瞬、僕は自分の意志と肉体を最後まで、あくまで美しい、このすばらしいチョモランマに、ぶつけることができずに終ったことがくやしくてたまらない。チョモランマの懐の中で、わずかばかりかいまみた一瞬のみで終ったことが残念でたまらない。ノース・コルからは僕は魂のないマリオネットのようにただフラフラになってABCへと下降した。

○―――――――大宮　求（南）

一、サガルマータ遠征二年半くらい前に、肝炎になったことがあって、それから六千㍍弱の山には数回登りにでかけていたが、八千㍍以上へはしばらく登っていなかったので高所の不安が少し残っていて、現実に山に入ってみて、八千㍍の高所で、充分無酸素で動けたとき。
二、入山キャラバン時、ルクラの荷物フライト待ち時や、ベースキャンプのレストの時に仲間と、トランプなどでバクチに興じる時間があったこと。
三、個人装備担当だった私に、ベースキャンプで、ネパールや中国の一部のメンバ

ーが、隊の共同装備である、歯ブラシ、石ケン等を大宮個人にたのめば、自由に追加をもらえると錯覚してたのんでこられたこと。

四、遠征の後半、アタック時、私ども第二次アタック隊は、充分酸素、食糧、燃料等荷上げして、第三キャンプまで上って待機していた時、とつぜん急に、第二次アタック中止、下山との指示が出て下山せざるをえなかったこと。

○―――磯野　剛太（南）

一、登攀隊員について南北ともに無事故であったこと。

二、期間中を通じて新しく若い友人達を得たこと。

三、指揮系統が大変複雑であったこと。

四、まだまだ日本のメンバーは国際性に乏しいこと。

○―――山本　宗彦（北）

一、いちばんうれしかったことはやはり頂上に着いた時です。今回の登山ではチョモランマにすでに何回も登ったことのある人もいたわけですが、自分にとってはやはり一生のうちで一度あるかないかという出来事だったのではないかと思います。頂上が目前に、もう四〜五㍍に迫った時なんとなく頂上は本当はもっと遠くにあるのではないかと思ったこと。目前にして非常に心臓が高なったことを覚えています。そして登頂できた時、それまで思ってもいなかったのですが、涙があふれてくるのをとめることはできませんでした。今まで何度か他の山で登頂したことはありますが、涙がでたことはなかったですし、それにもまして、隊員を含めて多くの人達の顔が走馬灯のように浮かんでは消えていったということにいたっては自分でも信じられませんでした。これは、多くの人達のおかげで登れたんだぞということを何かが自分にいましめてくれたのではないかと思います。

二、楽しかったことは割とたくさんありましたが、一番、といわれると少々迷うところです。がいろいろと振り返ってみると日本から来た手紙を読んでいた時かなという気がします。別に手紙のために登っているわけでは少しもないし、また今回のように情報がわずかな時間で日本へいってしまうような状況の中で何をいまさらという感もなきにしもあらずですが、でもやはり手紙を受けとる時、そして封をあける時が一番楽しかったのではないかと今は思っています。

三、特にありません。

四、何といっても二次隊がああいった形で中止させられたことです。今回の山登りは登山ではない。ましてスポーツなどではありえないという見方からすれば、あの中国側の態度・行為はそれも仕方がない、とされてしまうものかもしれません。が、このまま仕方がないですましてしまえば、今後第二、第三の友好登山隊が誕生することは火をみるよりも明らかだろうと思います。中国との友好登山はありえないのではないかという疑問をもったまま今回の登山が終ってしまったことは、現場にいた人達がいい人達が多かっただけに余計残念でした。議定書はあってなきがごとし、だったのではないでしょうか。

○——橋本　清（北）

一、今回の登山、計画段階から、五月五日の交差縦走日を決め、それに合せて、TV生中継を行なうという無茶の計画だったため、非常に苦しい登山をしいられ、それだけに五月五日、無事交差縦走が行えた時は心の荷物が軽くなり、ホッとした感じ。それだけに全員、無事ベースキャンプに降りた時、終ったと同時に本当によかったなと思った。口にはあらわせない喜びがあります。

二、この計画が始まってから二年以上、三国間の調整、準備の分担、国内準備と長い日月を費やしました。実際の登攀活動は三ヶ月と長いような短い登山でした。この間、たのしかったことはあまりありませんでした。登って帰って来た今が一番たのしい時です。

三、今回の登山は、日本、中国、ネパールと三国登山でしたので、三国間の調整がうまくゆかず、こんな時、我々がいくら説明しても理解してくれず、山登りのちがいか、言葉の不足か、国のちがいか、困りました。

四、五月五日、無事初期の目的を達成、二次縦走隊を送るべく、五月六日C6へ荷上げ。しかし、ベースキャンプでは日本、中国、ネパールで、第二次アタックの中止か続行かに意見がわかれ、最後に中止と決まり、この時ばかりは、残念とくやしさが一体となり、言葉も出ない程でした。今でもあの二次がと残念です。

○——小池　英雄（北）

一、二、全国から集まった隊員だけでなく、日本テレビ、読売新聞のメンバー、そしてネパール、中国のメンバーと知り合いになれ、個性あふれる人柄に接することができたこと。

三、四月十五日、C5からC6へ荷上げのためノース・コル（C4）から酸素ボンベをかついでC5入りする予定であったが、雪稜の上部において、五歩歩いては立ち止まらないと息が続かず、しまいには雪に坐り込んでうとうとしていた。結局、雪稜と岩稜帯の境に酸素ボンベをデポしてしまったが、時間をかければC5には行けたかもしれない。しかし、翌日には荷上げが待っている。この状態でそれが十分可能か。C5でただメシを食うことにならないか。葛藤の末、任務遂行の中止を決めたとき。

四、五月五日に第一次隊が交差縦走・登頂に成功し、物資・日数に余裕があるにもかかわらず、第二次、第三次隊を送り出すこともなく、三国友好登山が終結をむかえ、上部への望みを断たれたこと。

（編集注・このアンケートは、TV、報道を除く南北双方の日本人登山隊員全員に発送し、回答のあったものをそのまま到着順に掲載しました）

チョモランマ峰西稜（一九八七年秋）

川上　隆

「一九八七年の秋、チョモランマ峰を西の山の背に沿って登ることを許可する」という、中国登山協会からの文書が、川上宛に届いたのは一九八五年二月のことである。部内調整に一年程かかり、東京周辺の会員を中心として本格的な検討・準備に入ったのは、翌年の八月からである。登山隊出発まで約一年、慌しい毎日であった。

高所順応と登山

登山隊は、有馬元治総隊長以下三十一名、このうち登攀隊は、登攀隊長横山正夫以下二十名で構成された。登攀隊員の高所登山体験者は四名（コングル・チュビエ峰七五九五メートル一名、パース峰七二八四メートル一名、六〇〇〇メートル台二名）と少ないため、高所順応期間を可能な範囲で長く取った。B・C建設から撤収までを九〇日間と設定、登頂の鍵は、八〇〇〇メートル以上の高度八四八メートルをどう処理するかが一番の問題であった。

ルートの特徴は、B・C（五一五四メートル）～C2（五九五〇メートル）間比高七九六メートル、水平距離二二キロ。C2～C4（七三〇〇メートル）間比高一三五〇メートル、平均傾斜五十度、最大傾斜七十度。C4～C5（七六〇〇メートル）間比高三〇〇メートル、水平距離三キロ。C5～C6（八一〇〇メートル）間比高五〇〇メートル。C6～頂上（八八四八メートル）間比高七四八メートル。B・C～頂上の水平距離約三〇キロ。水平的にも垂直的にも長く険しい。

C2からC5までは雪稜となっており、C5上部七六〇〇メートル以上は、四級四ヵ所、五級二ヵ所の岩場をもつ岩稜帯が中核となって、頂上へと続いている。この間、八〇〇〇メートル前後の雪の斜面を除いて、適当な攻撃キャンプ地が見当らない。下部キャンプと上部キャンプの自然状況にも、かなりな違いがある。

現在（一九八八年六月）まで、西稜から登山した隊は二二隊（春九隊、秋九隊、冬四隊）だが、成功したのは春の四隊（ホンバイン・ルート二隊、ダイレクト・ルート二隊）のみ。秋の難点は、(1)日

照時間が短い。(2)モンスーン中の降雪。(3)モンスーン明けあとのジェットストリームによる強風と寒気、等をあげることができる。

我々としては、八月上旬から行動を起こし、モンスーン・ブレイクを利用して、九月上旬までに北支稜から七六〇〇㍍までのルート工作と、できればC5建設まで完成させ、九月下旬から予想されるモンスーン明けの晴天約十日間を利用して、八一〇〇㍍地点にC6（攻撃キャンプ）を建設し、頂上攻撃のメドをつける作戦で臨んだ。ともかく、七三〇〇㍍以上の西稜での滞在日数を可能な限り減らすため、登攀のスピード・アップが要求される。順序としては、先ずそこまでの高所順応を、時間をかけて上手くやることである。

1 日本におけるトレーニング

出発一ヵ月前の六月、富士山頂を利用し七日間の順応トレーニングを実施した。この間、低気圧が通過したため気圧高度が上昇し、各人各様であったが、多くの隊員に障害（頭痛、発熱、むくみ、息切れ、食欲不振、吐き気等）が現われ、よい体験になった。

2 現地でのトレーニング

(1)北方隊（十二名） 成都（五〇〇㍍）から一気にラサ（三七〇〇㍍）まで高度が上がるため、通常、初体験者は相当数が高所障害症状を呈する。北方隊の場合、富士山合宿に参加できなかった一隊員に、頭痛、息切れ、吐き気等の症状がでた。

(2)南方隊（十八名） ネパールからのキャラバン、中国・ニェラム（三六〇〇㍍）での順応トレーニングのあと、十分な休養を取らなかったため疲労が残り、B・C以上の順応に苦労した隊員が数人でた。

(3)北方隊は、シガール（四二八〇㍍）に二泊後、チョゾン幕営地四一〇〇㍍（ロンブク川右岸）を根拠地として、五〇〇〇㍍前後の山を各人のコンディションに応じて、三日～六日間のトレーニングを実施した。南方隊も、一部を除きこの場所で行った。リーダーの中には、一日も早くB・C入りを実現したいという意見もあったが、計画通り実行した。

(4)B・Cでは、ロンブク川右岸に位置する六三〇〇㍍の岩山をトレーニング場とし、各人四～七回、順応状況に応じたトレーニングを実施した。チョゾンでの結果がよかったので、B・Cでのトレーニングは各隊員とも積極的であった。日本を出発してからB・Cにおける順応トレーニング終了まで二十日～二十五日を要している。

(5)六三〇〇㍍までの順応に力を入れたので、三名～四名の隊員を除き、比較的スムーズにC2に入ることができた。しかし、順応が上手くいったという安心感から、横山の障害を見過してしまった。強い責任感、弱気をださない持ち前の粘り強さ、すべてが裏目にでた。いつのまにか、自己管理能力の限界を越えていたのだろう。およそ横山らしくない事故死であった（九月二日、五七〇〇㍍のC1から単独下山中、東ロンブク川渡渉点五三〇〇㍍で滑落事故。遺体は、翌日渡渉点より五〇〇㍍下流で発見された）。

3　C2から上部への展開

C2以上で行動した隊員のほとんどは、六三〇〇～七三〇〇㍍の間が、今回の登山で一番苦しかったと報告している。酸素は、C4で睡眠時毎分〇・二㍑とした。C4までと比較して、気分は楽であったようだ。しかし、C4への荷上げが渉らないことと、できるだけ上部テントに酸素を荷上げする必要から、C4で睡眠時酸素を吸入できない場合もあった。ある程度、滞在高度に順応していたので問題になるような障害はでなかった。C4における最多連続滞在者は涌井の九日間である。息切れと若干の頭痛がでた程度であった。

C4～C5間の行動は無酸素、C5では睡眠時毎分〇・五㍑、上部への行動時毎分一・〇㍑、最高到達点八一〇〇㍍まで三隊計六回、ルート工作と一部資材の荷上げを実施した。行動中、酸素マスクの排気弁やジャバラホースの連結管が氷結するトラブルと、強風・寒気で苦しめられたが、行動は比較的スムーズであった。シェルパは、七三〇〇㍍以上では、下痢、発熱、軽い凍傷（一度）等に罹った者が多かった。隊員も一名、七八〇〇㍍でルート工作中二度の凍傷に罹ったが、手当てが早かったので後遺症は残らなかった。

日本における当初の計画では、C4またはC5に滞在した隊員を三隊に分け、九月上旬にいったんニェラムまで下山させ、五日～七日間程度の休養を取らせる構想だったが、このプランは運行上に無理が生じ、実現しなかった。結局、主たる休養キャンプはB・Cとし、隊員のコンディションに応じてC2～C5での行動の後、事故による活動中断を含めて五日前後の休養を五回程度実施した。

北支稜と雪崩

北支稜は、末端から西稜の肩までの比高一三五〇㍍、平均傾斜五十度の雪稜である。フィックスロープは、二三〇〇㍍使用した。風は西風が卓越しており、降雪は支稜線に沿って吹き溜るため、稜線全体が雪崩のでやすい危険を孕んでいる。

九月十五日、C2からロー・ラに向った撮影隊は、中央ロンブク氷河上に散乱しているC3（六三〇〇㍍）のテントや隊荷を発見した。C3のすべてが、根こそぎ雪崩で流出しているとの報告である。早速、山口をリーダーとするC2滞在隊員によって、流出荷は集められた。酸素ボンベ、ガスボンベ等重い物を除き、ほとんどの荷を集めることができた。

1　C3に襲来した雪崩

(1)発生時期　九月十四日二三時三〇分頃（C2で雪崩の爆風音聞こえる。この時点では発生場所不明）。

(2)雪崩の種類　積雪量の増加による乾燥雪崩。発生のきっかけ増雪（風成雪を含む）。

(3)雪崩の型　降雪と風成雪による自然発生の襲来雪崩。

(4)発生地点の高度　六三二〇㍍付近。

(5)雪崩の規模と崩壊した斜面　幅六〇㍍、長さ一五〇㍍、厚さ一・五〜二・〇㍍の層で雪崩れる。当日の雪崩は、北支稜六三五〇〜六二〇〇㍍の東・西両側面に数本発生していた。

(6)雪崩発生地点の地形　①斜面の状況　発生面より五〇㍍上部には、大きな岩が稜線東側寄りに露出している。稜線と東・西側斜面は、降雪と風成雪で形成され積雪量は一〇㍍前後である。西側斜面下部の傾斜は六十〜七十度、C3からでは中央ロンブク氷河まで、直線距離で五〇〇㍍ぐらいである。東側斜面は、稜線上から小さな雪庇が張り出し、七十度以上の傾斜で中央ロンブク氷河に切れ込んでいる。②発生面の傾斜　C3周辺の場合三十度。

(7)斜面の方位　C3が流された斜面は、西側斜面。

(8)気象状況　①天候　九月十一日、高曇り後雪。十二日、一日中雪が降ったり止んだり。十三日、晴後雪。十四日、晴後雪。衣類が濡れる程の湿っぽい雪であった。夜間に入り、雪・風ともにやや増加し気温も下った（この頃の北支稜は、B・Cが晴天でも午後になるとロー・ラから吹き込んできたガスで稜線が覆われた。ガスに覆われた部分は必ず雪となっている）。十五日、晴後雪が降ったり止んだり。以上C2での天候である。②積雪量　九月十一日からの積雪量は、C3付近で一〜二㍍。

(9)徴候　九月に入ってから徐々に気温が下降し、モンスーン・ブレイクが終った九月中旬から、北支稜では降雪と西風による風成雪の影響が顕著となった。C3は、その度にテントが三分の二程埋った。三〜四回の除雪の後、テントが下方向に少しズレていたように感じたそうである。一部リーダーは不安を感じたが、直接、雪崩に結びつくとの認識には至らなかった。

2　C3決定の経緯と雪崩対策

C3位置を決定するにあたり、前線リーダー山口は、数回にわたり現場周辺の偵察を実施した。その結果、北支稜における隊員の行動と順応、隊荷輸送と集積場所等を総合的に考えると、六三〇〇㍍地点を除き他に適当の場所なし。この地点、雪崩の危険がないとはいえないが、他の場所と比べ安全度は高いと思う、と報告した。

リーダー会は、再三にわたる検討の結果、隊の安全対策を十分に守ることを前提として、六三〇〇㍍地点をC3位置に決定した。

雪崩対策　(1)降雪中の行動禁止　(2)行動時、ルート及びテント位置とその周辺の積雪状況チェック　(3)危険箇所の通過は、十分に間

隔を開ける　(4)危険を感じたら、速やかに退避する　(5)C３は、原則として隊荷集積キャンプとし、晴天時、雪崩の危険がないと判断した時のみ、登攀隊長の許可を得て泊る。

3　登山期間（八月～十月）中、隊員等が体験した雪崩

(1)九月十四日一三時頃、C３周辺の積雪状況を調べていた山口は、六四五〇メートル付近で上から厚さ四〇センチ程の表層雪崩が発生し捲込まれたが、フィックスロープに確保していたので、三メートル程流されただけで事なきを得た。一二時頃から雪となり、下降に入る寸前だった。

この雪崩は、規模を大きくしながら一直線に中央ロンブク氷河に流出した。C３の状況が心配になったが、影響はなかった。山口は、C３泊りを希望したが、雪崩の危険を感じたので、C３に上っていたルート補修隊員ともども、即刻C２への下降を指示した。

(2)十月二十一日、C１から下降中の上田は、一三時頃中央ロンブク氷河右岸の五五〇〇メートル地点で、側壁から発生した幅五メートル、長さ三〇メートルの雪崩に膝まで埋った。天候快晴。

(3)十月二十日、東ロンブク氷河からB・Cに下降中のイギリス隊コック一名は、東ロンブク川右岸五三五〇メートル地点を歩行中、幅八メートル、長さ三〇メートルの雪崩に埋り死亡している。

登山終結

横山登攀隊長の事故死の後、有馬元治総隊長の決断に従って、九月十九日登山再開。九月二十六日、新C３（六九〇〇メートル）建設。九月二十八日、C４を西稜の肩に建設。十月三日、西稜の岩稜帯基部七六〇〇メートル地点にC５建設と、慌しい展開となった。日程上の遅れは二十日である。七三〇〇メートル以上の西稜線上では、数人のシェルパが体調を崩し、思うように荷上げが渉らなかった。

十月十八日夜間より二十日早朝まで、チョモランマ峰周辺に襲来したサイクロン崩れの暴風雪は、C２で最大風速三五メートル以上、降雪量三メートルと大きく、この地方六十年来の悪天候となった。C２周辺は怒涛のように荒れ狂う風雪にすっぽりおおわれた。この時C２滞在者は、上部への展開から休養のため下山した隊員が主であった（川上、涌井、日根野、細田、佐藤（敏）、佐藤（今）、河内、杉江Dr、撮影隊北村、明石、以上一〇名。シェルパは、サーダー、ナワ・ヨンデン以下一二名。計二二名）。

B・Cにおける松本気象官の予報によれば、天候は不安定であるが、十八日現在すでにサイクロンは消滅し、徐々に回復期に入る。しかし、風・寒気とも一段と厳しくなるだろう、ということであった。十九日、早朝からの天候は刻一刻悪くなり、九時二〇分のネパールの気象通報は、本日、ネパール全土は天候極めて悪く、ヒマラヤ地方は大雪である、と報道していた。明日は晴天になったとしても、この大雪と強風では、北支稜全体が雪崩の危険にさらされる。

C４に滞在している山口隊は、山口、松岡、吉田、撮影隊村口、井納、シェルパのダワタシの6名。C４隊員の疲労、隊荷集積量、次の展開、悪天候等を考えると、彼等が消耗し尽くす前にC２に下ろし、休養を取らせることが急務である。川上は、フィックスロープが北支稜に隈なく展張してある状況を考え、今ならば、彼等の体力・気力をもってすれば、C２への下降は可能であると判断した。九時四〇分、着装を完全にして、必要最低限の個人装備のみを持参

し、直ちにC２に下山せよと指示した。

一〇時三〇分、山口をトップに下山開始。下るに従って天候は悪化し、風雪に視界はとざされる。雪に埋ったロープの掘り起しに悪戦苦闘しながら、一九時三〇分ダワタシ、松岡、吉田、山口の順でC２に到着した。殿を務めた村口、井納は、六二〇〇㍍のルート切り替え地点でフィックスロープを見失ったが、約二時間、暗夜に咆哮する風雪の中、死力を尽してロープを発見、二一時三〇分氷雪の鎧を纏った姿でC２に入った。

登山期間ぎりぎりまで粘り、登頂が駄目なら、一人でも多くの隊員を八〇〇〇㍍台に立たせることを考えていた。フィックスロープは、八一〇〇㍍のC６予定地まで展張されている。C２にいる隊員には、まだ余裕があった。しかし、今、C２のテントは四割が豪雪のため潰れ、隊の主力であるC２隊も心身共に消耗し始めた感がある。川上は、二二時登山終了と二十日からの撤収を宣言した。

＜記録概要＞

隊の名称　防衛大学校山岳会チョモランマ峰登山隊

主催団体　防衛大学校山岳会

活動期間　一九八七年八月～十月

目　　的　西稜からのチョモランマ峰登頂

隊の編成　総隊長―有馬元治（衆議院議員）、登山隊長―川上隆（防衛大学校山岳会々長）、副隊長―若浦義弘（52）、総務―大崎直彦（49）、医官―沢本裕明（31）・杉江琢美（26）、撮影隊―北村皆雄（45）・明石太郎（39）・村口徳行（31）・井納吉一（28）、記録―真神勇（37）、駐北京代表―長野陽一

登攀隊長―横山正夫（44）、隊員―福楽勲（40）、山口陽一郎（37）、涌井鋼一（37）、狩野隆平（31）、松本圭一郎（27）、小林勇夫（28）、日根野伸一（27）、高橋宏一郎（25）、上田寛孝（25）、細田美紀男（34）、岩崎俊夫（38）、佐藤敏志（36）、松岡茂（33）、清沢幸則（33）、千葉勝彦（34）、篠田力良（30）、吉田治（29）、佐藤今朝治（29）、河内正樹（25）

シェルパ、サーダー　ナワ・ヨンデン以下一八名。

中国側、連絡官―趙連友、操縦手―彛金庭、通訳―董紅俊、合計五三名。

行動概要　七月十五日、日本出発。七月二十九日、B・C建設。八月六日、C１建設。八月十五日、C２建設。八月二十九日、旧C３建設。九月二日、横山登攀隊長事故。九月三日～九月十八日、登山活動中断。九月十九日、登山活動再開。九月二十六日、新C３建設。九月二十八日、C４建設。十月三日、C５建設。十月十日、八一〇〇㍍に到達。十月十三日、C６予定地までのルート工作完了。最高到達点八一〇〇㍍。到達者、松岡、岩崎、千葉、細田、佐藤（今）の五名。五名ともに、海外登山は初めてである。十月三十日～十一月四日、B・C撤収。

報 告 書　概要報告書一九八七年十二月発行

公式報告書「防衛大学校山岳会チョモランマ峰登山報告一九八七」一九八八年八月発行予定

冬期アンナプルナ南壁初登攀

八木原圀明

再挑戦による登頂

私ども群馬岳連は三年前の一九八四〜五年の冬に、七二〇〇メートルを最高到達点として、アンナプルナ南壁登山に失敗した。

敗因は私共のカネ不足、冬のヒマラヤの降雪に対しての認識不足等であった。失敗したとはいえ、技術的にも決して登れないルートではない、と強く感じた私は近い将来に再起し、雪辱を果たす、と決意した(「山岳」第八十年参照)。

その雪辱戦による初登攀であった。十二月二十日、十二時間の登攀で登頂には成功したが、四名の登頂者のうち二名が下山中に転落死するという悲運にも見舞われたのが今回の登山である。

一九八五年二月、アンナプルナから寂しく帰国した私に持ち込まれたのが映画「植村直己物語」のエベレスト撮影隊長の話であった。ヒマラヤ登山を成功させるには、ヒマラヤ登山を経験する以外にない、と考えていた私は隊長を引き受け、宮崎勉、山田昇らと共に次のアンナプルナ南壁へ続く群馬岳連会員中心のエベレスト撮影隊を編成した。

本職のカメラマンを含む十一名の頂上までの撮影隊中、撮影助手の斉藤安平を入れると八名が群馬岳連会員というものである。登山は日本人九名、シェルパ二名の十一名が撮影アタック隊としてサウスコルに入ったが、酸素器具の故障等の理由で七名の登頂にとどまった。しかしそのうちの私を含む五名が群馬岳連会員という、まず まず私の思惑通りの結果を得ることができた。この八名を中心とした総隊長以下十四名の登山隊となった。

短期速攻への戦略

宮崎は前回の失敗・反省の上にたち、悪天候につかまることなく迅速かつ安全に登るためのタクティクスを再考、再構築した。眼目は登山期間を十五日間とする短期速攻である。長期登山は肉体的、

精神的にも辛く、危険な場所に長時間わが身を晒す、という「労多くして、しかも危険な登山」となる。

一番の問題となる十二月下旬の悪天・降雪を考慮すれば、短期速攻しかなく、我々の経験と実績をもってすれば充分可能であると し、それを達成するための方策として、先ず充分なる高所順応計画をたてた。

もう一つはBCをより南壁に近づけ、キャンプ数を減らし、よしんば降雪があっても、安全に長期戦に耐え得る地点へのキャンプ建設であった。イギリス隊が第七キャンプ予定地としたミニロックバンド上を第五キャンプとし、キャンプ数を減らす。実際には七四〇〇㍍のC4が最終キャンプとなった。

十二月前半に登頂するというのは、十一月初めからこの頃までが一年のうちで最も天候の安定する時期であり、厳密に考えれば「冬期登山ではないのでは？」とする我々自身の印象はぬぐい切れない。しかし、現段階としては一月、二月の冬の真最中の登山は困難すぎるため、次の厳冬期登山のためのステップと考えることにした。

十五日間で登る、としても慎重を期し、二月中旬までの食糧を用意した。長びくということは降雪以外の理由は考えられない。特にアンナプルナ南壁の場合は、強風と寒気の影響は比較的少ない。降雪でロープ等が埋没した場合のルート工作のやり直しを想定し、ロープ等の登攀具も二倍の数量を用意した。

隊員のヒマラヤ経験

私は常々隊員達にこう繰り返し言い続けてきた。「我々のヒマラヤにおける経験と実績は、一九七〇年のボニントンが率いたイギリス隊とは較ぶべくもないほど上である。しかも彼等は寒気は多少ゆるいかも知れぬが、冬とは比較にならない降雪量の春に登っている。それらを考え合わせれば、我々に登れないはずがない。自信をもって南壁の冬期登攀に挑め」と。

事実、ヒマラヤ登山降盛への緒についたばかりの当時のイギリス隊のヒマラヤ経験は、三名の延べ六回のみである。我々の側はといえば「ヒマラヤ地域」だけで、延べ六十回を数える。八〇〇〇㍍峰の登頂者は八名、延べ十七回の登頂を数えている。

冬のアンナプルナ南壁は、我々の失敗のあともブルガリア、スイス隊と退け続けていた。

カトマンズ、BC、順応訓練

十月二十九日に本隊五名がカトマンズ入りした夜、名塚、佐藤が二台のトラックと共にポカラへ出発。「南アジア七ヶ国のサミット」開催直前の交通規制の厳重な最中であった。

キャラバンは十一月三日から五つのグループに分かれて出発する。トレッキング最適シーズンのため、ポーター集めに苦労させられる。マチャプチャールBCまで六日間。前回のBC、今度の南壁基部の新BC（四三〇〇㍍）と計八日間のキャラバンとなる。

高所順応トレーニングは、テントピーク（五六六三㍍）とグレッシャードーム方面の二回、約十日間。テントピークは十一隊員により、合計二十七回登頂し、グレッシャードームでは七〇〇〇㍍ラインまでの到達を計画していたが、六〇〇〇㍍ラインまで登っただけ

でＢＣへ戻る。休養と簡単な登山開始準備に四日間をあてる。

十一月末の山田、藤岡医師の入山時にマチャプチャールＢＣでの発電工事中の林克之氏の転落事故に遭遇し、藤岡医師が手当し、山田達が呼んだヘリコプターでカトマンズへ送るというハプニングもあった。

登山開始、キャンプ建設、雪崩、降雪

十二月一日、満を持しての登山開始。ルートは十一月末に確認だけしてある。ルート工作不要のアイスフォールを登り、Ｃ１建設。五三〇〇㍍。翌日、山田、斉藤、小林はＣ２へのルート工作。前回と同ルートのため早い。

十二月三日、ルート工作隊のうしろから荷上げ、Ｃ２建設隊が続き、同時に建設してしまう。六一〇〇㍍。極めて順調。しかし、好事魔多しとかいうが、この日の午後、南壁にかかっていた懸垂氷河が崩壊し、Ｃ１がおそわれる。

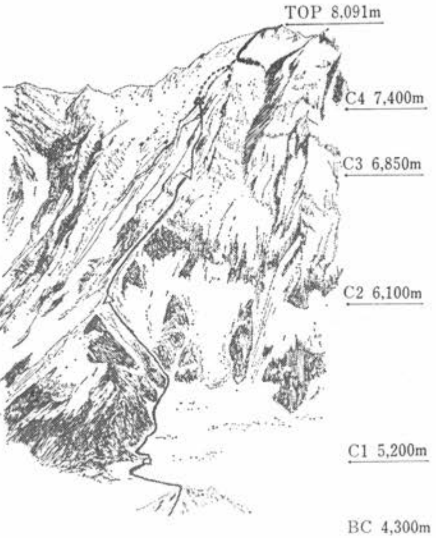
雪崩の支流ではあったが、直撃を受けたＣ１は、六張のテントと九割方上げきった上部キャンプ用の装備、食糧の殆どを飛ばされてしまった。Ｃ１にいた隊員、シェルパ十名は氷の段の下にかくれ、シェルパ一名のブロックが当たっての頭、肩の負傷だけで済んだ。ＢＣにあたる予備物資の荷上げにより続行可能。

十二月六日、ルート工作はＣ３地点へ到達。六八五〇㍍。しかし、好天続きの南壁全体から、落石が雨あられと降っている。翌日Ｃ３を建設に行くが、サイトを捜していた隊員が足に頭大の石を受け、負傷。幸い打撲のみで、翌日収容する。キャンプも下へ移動する。

十二月十日、正式なＣ３建設日とする。しかし、天気が下り出し、翌十一日とうとう降り出す。丸一日降り続き、Ｃ２で一㍍の積雪。雪崩、落石事故、シェルパのクレバスへの転落、降雪とイヤなことが続くと、三年前の失敗を思い出し、暗い気分になる。十三日も雪崩の危険があり、全キャンプ行動中止。

やはり南壁（彼等は南東壁といったが）を新ルートから登りに来ていたカナダ隊が、この雪を潮に引き揚げた。六一〇〇㍍まで。

アンナプルナI峰南壁ルート図
（1970年のイギリス・ルート）



十四日よりルート工作再開。浮いていた石が降雪で押さえられ、落石は減少した。前回の最高到達点（七二〇〇㍍）を越え、フラットアイロンと呼ばれる岩壁の右基部へ着く。ここが本ルートの最核心部。岩場は約一〇〇㍍。部分的にはかぶり気味となる。ここを名塚が四時間少々で突破する。

ファイナル・キャンプ建設

十二月十七日、名塚、三枝、小林がルート工作にあたり、弥野、シェルパ一名が建設資材を運び、やはり同時にC４建設（七四〇〇㍍）。

　C４は雪稜であるが、少し削ると硬い氷になってしまい、テントは三分の一程はみ出てしまう。三名は寝袋にも入らず、身を寄せ合って夜を過ごす。

　C４から二日間でミニロックバンド（七七〇〇㍍）までのクーロアールにロープを固定し、二チーム（六〜七名）がアタックをかけることとする。

アタック、登頂

十二月二十日、まだ暗い三時四〇分、山田昇、斉藤安平、三枝照雄、小林俊之の四名がアタック開始。気温約マイナス三十五度。無風・快晴。私はBCでカイラス山のふもとから採ってきたというドゥープを燃やし、無事を祈る。

　九時、ミニロックバンド着。頂上岩壁に向って雪壁、雪稜をたどる。一二時、頂上岩壁へ入る。BCからは双眼鏡によりすべて確認できる。二時間かかって頂上稜線へ出た。北側は陽が当たらず、微風だが寒いという。一五時一七分、登頂。ビデオを廻す。

　頂上からは喜びと感謝の声が届き、下からはねぎらいと感謝の声が伝えられた。一五時四八分、山田、斉藤が最後から下り始める。先頭を下る三枝のスピードに私はすっかり安心しきっていた。

小林転落、斉藤転落

ところが、一時間後、急な頂上岩壁を下りきり、比較的ゆるい斜面に出たところで小林が転落してしまう。シュカブラに足をとられたような感じで転倒した、と山田はいう。山田、斉藤は小林の落ちた斜面をのぞくが、止まるはずも、助かるはずもない急峻な南壁での転落である。一瞬にして絶望と判断するほかなかった。

　一七時半、残照が南壁をあかく染める頃、山田、斉藤も固定ロープにたどり着く。一九時少し前、山田がC４帰着。斉藤もすぐ後ろにいるという。キャンプから声をかけると返事も聞こえる。三枝が迎えに出、声を交していた斉藤があとわずかなところで「あれっ」という声を残して転落してしまう。

　アイゼンが岩にあたり、赤い火花が暗闇に散った。登頂の喜びもつかの間、小林、斉藤が相次いで転落死するという最悪の結果を招いてしまう。悲喜のあまりの落差に言葉もない。第二次アタックを中止し、撤収。

　山田、八木原が一足先に下山し、ヘリコプターによる捜索も空しく、遺体はおろか、遺品の一つさえ発見することはできなかった。

登山を終えて

冬期の八〇〇〇㍍峰のバリエーションルート登山がアンナプルナ南壁において、酸素も使うことなく果たせた。入念な高所順応トレーニングと休養による短期速攻（の部類に入るか？）により、まずまず我々の思い通りの登山ができたつもりであった。

しかし、当初の十五日間登頂は果たせず、二登頂隊員を失ってしまっては、とても会心の出来とはいえなくなってしまった。

小林俊之は群馬大学を留年して十九歳でエベレストに行き、酸素を使わずにサウスコルへ二度到達し、その後の進境著しかった二十二歳の学生であった。

斉藤安平は山田昇とのペアーで冬のマナスルをアルパインスタイルで登頂し、日本山岳会の初登頂時の「ピース缶」を持ち帰って話題となった登山や、ダウラギリⅠ峰・ペアールートの初登攀者でもあった。

＜記録概要＞

隊の名称　群馬県冬期アンナプルナⅠ峰登山隊一九八七〜八八年

活動期間　一九八七年十二月

目　的　アンナプルナⅠ峰南壁の冬期登攀

隊の編成　総隊長＝星野光（54）、隊長＝八木原圀明（41）、副隊長＝宮崎勉（40）、登攀隊長＝山田昇（37）、隊員＝斉藤安平（34）、名塚秀二（33）、木村文江（32）、阿久沢芳雄（30）、三枝照雄（30）、佐藤光由（26）、神戸誠（24）、弥野光一（22）、小林俊之（22）、医師＝藤岡俊樹（30）

行動概要　十一月二十二日南アンナプルナ氷河上にBC建設（四三〇〇㍍）、十一月二十四日〜二十六日第二次高所順応（フルーテッドピークの六〇〇〇㍍）、十二月一日登山開始、C1建設（五三〇〇㍍）、十二月三日C2建設（六一〇〇㍍）、C1雪崩により全滅、十二月六日C3地点到達、十二月十日C3建設（六八五〇㍍）、十二月十一〜十二日降雪、十二月七日C4建設（七四〇〇㍍）、十二月十八〜十九日ルート工作、十二月二十日四名登頂するも二名が下山中に転落死、十二月二十二日全員BC集結、十二月二十七日ヘリコプターによる捜索。何も発見できず。

記録発表

日本ヒマラヤ協会『ヒマラヤ』一九八号
東京新聞社『岳人』四八九号
山と渓谷社『山と渓谷』六三二号・六三三号
山と渓谷社『岩と雪』一二八号（追悼）

日印ナンダ・コート合同登山

――立教大学ナンダ・コート50周年記念登山――

太田晃介

一九八六年一〇月、東京・日比谷松本楼でナンダ・コート登頂五〇周年の祝賀会がおこなわれた。その盛上った席上ではじめに記念トレッキングの話が出されたが、そんな中で現役学生を中心とした遠征隊を送り出す話になった。出席者全員の賛成もあり、総会を待たずに決定された。

さて再度の挑戦が決ったとは言え、インナーラインに位置するために難問が残されていた。たまたま日本山岳会理事であった私が交渉役の指名を受けることとなり、十一月末、IMFに仮申請書を提出し根廻しを始めた。窓口としてN・クマール氏（カンチェンジュンガ隊長）を後にJ・シン氏、コーリ氏（ナンダ・コート隊長）各理事を通じ交渉を進めていった。三氏からこの計画を非常に好意的に受止めていただけたので計画が実現するとの確信を持つことが出来たが、やはり許可書が届くまでの四ヵ月間は不安で一杯であった。

歴史に残る山登りへ

一方、暮から正月にかけて立教鹿島槍山荘にこもり、基本計画に取り組むと同時に、学生達を説得し、私が監督のとき新入部員であった宮坂（四年生、カカサイジモンカ隊員）を隊長として、富山（三年）、武石（一年）の三名をネパールのトレッキング・パーミッションで登れる六千メートルクラスのロブジェ・アイランドピークに送り出し、ヒマラヤを経験させることが出来た。残念なことに宮坂は肝炎を患い本隊に参加出来なかったが、富山、武石の両君が先兵として活躍してくれることになった。

三月下旬、許可のおりる目途がついた旨の一報が入り、四月中旬に書類が届き本申請書の作成作業に取掛っていたその最中に、部の育ての親である辻荘一名誉教授（元部長、日本山岳会名誉会員）が永眠された。学生主体の遠征を一番ご心配下さっていた先生の崇高な理想を継承することを霊前に誓った。

葬儀を終えた後の四月下旬、今西会長と吉田宏氏のIMFサリーン会長宛の親書を携えて本交渉のため第一回目の訪印をした。

IMF事務局のカトーチ氏との交渉の結果、当初の厳冬期登山計画は、十一月から三月の五ヵ月間は登山禁止期間になっているため認められず、十月一日より十月三十一日の一ヵ月間とする。またインナーラインの関係上インド隊と七対七の合同登山隊で、隊長・医師はインド側、経費は折半、ただし連絡官の装備費用は日本側負担という条件で合意し、早速本申請書を提出受理される。翌日H・C・サリーン会長宅に招かれ、五十年前の我々の先輩方の偉業を高く評価していることから特別に許可された旨、細部にわたって説明を承り、十日後正式に許可を受け、登山料を支払い手続きは完了した。

五月初旬に勇躍帰国し、本格的に組織作りに取掛ることになったが、学生達が不参加を表明したのには戸惑いと怒りを覚えた。理由を聞いたところ、親の反対、落弟、就職の心配等至極もっとものことばかりであったが、一転気をとりなおして学生達の説得に当る。

「おまえらは歴史に残る山に登るチャンスを目前にしながら歴史からはずれる人間になりたいのか。歴史に残る人間になれ、さもないと一生後悔することになる」という殺し文句で納得させていった。

六、七月は食糧、装備、医薬品の収集と隊荷のパッキングに務めさせる。八月中旬になり同時に計画されていたトレッキング隊とともに隊荷輸送のためふたたび訪印する機会を得、IMF側と最後の詰めの交渉にのぞむことになり、牛窪浩総隊長とサリーン会長の会談に始まり細部にわたって確認された。その結果インド隊員は四名となり、そのかわりにネパール・シェルパ五名が追加された。ただしシェルパの費用は日本側負担となる。我々としてはシェルパを使えるとなれば入山後の行動の負担が半減し、登山活動の展開もスムーズに計れるし見通しも立つところとなった。トレッキング隊は国内航空事情もあり、さんざんの目に合いながらも多くの想い出を残して一週間遅れの九月初旬、成田に帰り着くことが出来た。

二週間後の九月二十日、成田を立ち深夜のニューデリーに着き、その夜はYMCAに旅装を解く。二十三日にIMFの宿泊所に移り、シェルパと合流しインド隊員の到着を待つことになった。二十五日出発の予定より三日遅れの二十八日になり二人の隊員と連絡官が到着し、見切発車の恰好でいよいよ本番に向けて出発することになった。クラー氏（一九八四エベレスト隊長）の音頭で乾杯し、「これですべてクリアーした。後はあなた達の幸運を祈るのみである」との言葉に送られて、本隊は一路ムンシャリに向い、インド隊長、連絡官、太田、武田の四名は地方行政府のあるピトナガルにインナーライン・パーミッションを受取るためタクシーで出発した。

二十九日午後三時、ようやく行政府に着き、一連の許可書類を提示し、許可証の発行を申し入れたところ、そのような書類はこちらには届いていないので発行は出来ないとはね付けられてしまった。連絡将校Cap・ラムルとヴィジャイ隊長が書類を手に喰い下ったのだが「ノー」であった。たまたまこの地の軍師団長 Brigadier クラー氏は Col・クラー氏の実兄であったので、Cap・ラムルと表敬訪問して事情を説明し、仲介をお願いしたところ、快く引受けてい

ただき、その夜のうちにニューデリーに連絡して下さり、将校クラブの宿舎にお世話になる。

三十日、行政長官と師団長の交渉は執拗に続けられたが一向に進展が見られない。正論と正論のぶつかりあいで無理からぬことであった。一方は国際合同登山隊として政府の許可書類も整っていることを理由に迫るのだが、一方も連絡書類が届いていないことから地方行政府の一存で出すことは出来ないとお互いの面子の問題にまでなってしまった。夕方になりニューデリーより一報が入り、書類は途中の郡役場にあることがわかる。Cap・ラムルの説明によればここから一日のところであるらしい。師団長はその夜のうちに連絡将校を派遣して下さっていた。

表敬訪問した際、前二回の挑戦では悪天候に阻まれていずれも三十五日以上かかり悪戦苦闘の登頂であったこと、今回の計画で我々に与えられた期間は一ヵ月間であり、入下山に十日はかかり、残された日数は最大二十日間しかないので安全かつ迅速に終らせねばならない。よって一日も無駄に出来ないとの説明に応えていただいた格好になった。十月一日夕方四時、書類も届き、六時には入域許可証を手にすることが出来た。「明朝出発したら良いだろう」の言葉も、気持はすでにムンシャリに待機する本隊に飛んでいたため耳に入らず、すぐにでも出発したかったのでお礼を述べてお別れした。待たせてあったタクシーの運転手はこの辺の地理がわからないし、夜の峠道を走ることは危険であると断られてしまった。師団長は私のはやる気持を察して、軍のメカニック二名とジープを先導さすから行ってやるようにと説得してくださった。一八〇キロの峠道を走り続け、夜明け前の三時、ムンシャリの軍キャンプに傭兵のグルカ兵に迎えられ、無事着くことが出来た。

五十年前と変らぬ山

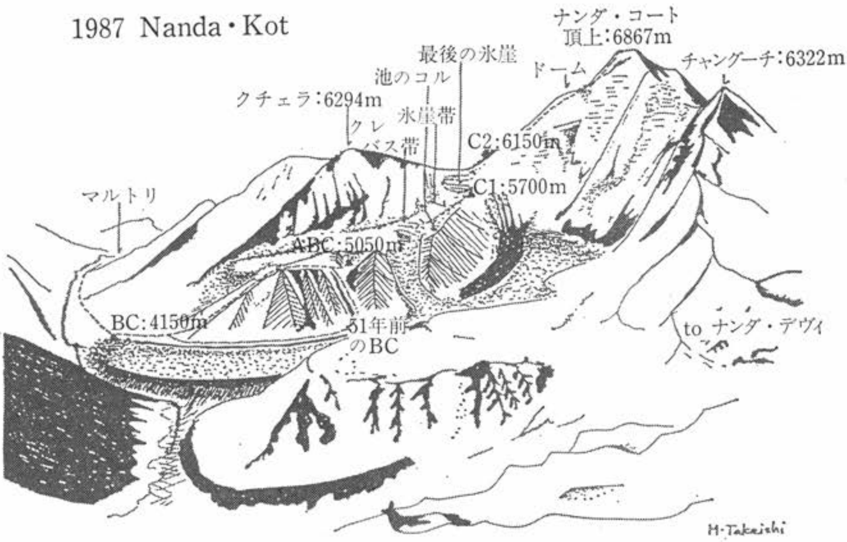
夜明けの朝霧の中にパンチチュリが勇姿を現した。午前四時本隊と合流し、皆を起して出発を告げる。エージェントのマネージャーとサーダ・シェルパのナウアンと打合せ、三々五々出発する。インナーライン・チェックポストのリラムに着き、手続きを終える。三日リラム〜ブクデヤル、四日ブクデヤル〜リルコット〜マルトリ。

マルトリは広々と開けた草原の台地の突端に位置し、目の前には中国領チベット圏の山々が展開しており、今は交易も途絶えて廃墟の村と化していた。ここで初めてナンダ・デヴィが頭を出す。五日マルトリ〜ローン、途中山崩れ、渡河地点等で手間どりやむなくBHを設営。渡河地点でポニーが引返す。

六日、日本隊五名、シェルパ三名で氷河の末端モレーンの下四一五〇メートル地点にBCを設営。他はシャルン谷渡河地点の隊荷の収容にあたる。七日、ABCの偵察、日本隊全員集結。他はBH〜BCのピストン輸送。

入学以来三十年以上、頭の中にあったナンダ・コートの美しい全容を目にすることが出来た。山は五十年前と何も変らず我々を迎えてくれたようである。感慨も一入であった。

八日、日本隊とシェルパ三名で雪線である氷河の末端五〇五〇メートル地点にABC設営、インド隊、シェルパ二名、ポーター一四名はBH〜BC荷上げ、九日富山、武石、ナウアン、ペンパABC入り。



十日、ＡＢＣ〜Ｃ１ルート工作。ＢＣ、ＡＢＣ間荷上げ、ＢＨ撤収、全員ＢＣに集結。十一日、氷雪壁の下五七〇〇㍍地点にＣ１設営。牛窪登攀隊長、武田、アジワ・シェルパＣ１入り。ポーター一四名ＡＢＣに荷上げ。十二日、先行四名Ｃ１入り、他は荷上げ。インストラクターのカリータ、ニマ・シェルパＡＢＣ入り。

十三日、Ｃ１〜上部氷雪壁ルート工作。ヴィジャイ、太田、野村、高橋の全隊員がＡＢＣ入り。Cap・ラムル、キッチンボーイ・パサン、テントキーパーのソラ、ポストランナー二名はＢＣ入り。ポーター一二名は二十四日に荷下ろしに四十五名で登ってくることを約して下山していった。十四日、Ｃ２へのルート工作が終る。十五日六一五〇㍍地点にＣ２設営。

第一次アタックメンバーのカリータが突然ＢＣに下ってしまい、入山以来不調の野村を武田とともにＣ２入りさせることにする。十六日、ヴィジャイ隊長もＢＣに下りてしまい、ＡＢＣ以上は日本隊のみとなった。牛窪、太田はＣ１入りし、武田、野村をＣ２入りさせる。ここまで来れば速攻である。高度障害を受ける前に登頂することを決め、明日登頂するよう指示を出す。

十七日富山、野村、武石、武田の学生四名とペンパ、アジュワ・シェルパの六名は午前十時四十五分登頂に成功。太田、牛窪Ｃ２入り。登頂後調子の良い富山、武石は一人待つ高橋のためにＡＢＣ入りさせ、不調の野村、武田はＣ１に泊り、明日の撤収に備えさせる。アジュワ、ペンパには明日Ｃ２に登ってくるよう指示する。

夕暮頃から今日まで連日快晴であった空模様があやしくなり強風となる。学生たちは安全地帯まで下山したし、もう心配することは

何もない。後は天候が明日までもつことを祈るだけである。十八日、太田、牛窪ら四名は四時起床、五時前に出発し、強風のなか十時十五分、故辻荘一名誉教授の写真を胸に喜びの登頂であった。

C2、C1を撤収しABCに下る。夕食後シェルパたちは明朝撤収に来るからと暗闇の中をBCに下っていった。十九日全員でABCを撤収しBCへ下り、IMF差入れのウイスキーで乾杯し、インド隊の祝福を受ける。

二十日、皆が私の指の凍傷を心配しピトラガルの陸軍病院で手当を受けるよう勧めるので下ることになり、牛窪登攀隊長、Cap・ラムル、ポーターの四名は夜来の雪にヒザまでのラッセルを強いられ、リルコット泊。二十一日ブクディヤル軍キャンプのワイヤレス電話でピトラガルの軍本部に登頂成功の一報を入れ、IMFへの連絡を頼む。リラムではCap・ラムルと士官学校同期の指揮官に迎えられ泊ることになる。夕食時ブクディヤル・キャンプより緊急連絡が入る。

「インド隊長ヴィジャイがシェルパともめごとを起し殴る蹴るの暴力行為を受けたのでシェルパの逮捕を要請しているがいかに対応すべきか」と。指揮官、Cap・ラムルと三者で協議し、穏便にすますことで一致し、後でカリータに情況を聞き対処することになる。指揮官はそれよりも今はあなたの指の処置を急ぐほうが先決であろうと気づかってくれる。

二十二日、今日はインドの祭日であった。夕暮になると、家々のまわりには何百本ものローソクが灯され、花火が打上げられ、まるでわれわれの登頂成功を祝ってくれているように思えた。七時グルカ傭兵部隊に着き応急手当を受け、救急車の寝台に揺られピトラガル陸軍病院に向う。着いたのは午前三時であったが多数の人々が出迎えてくれ、診察後そのまま入院することになった。

BCの出来事で眠れぬまま朝を迎えると床屋が来て整髪とヒゲを剃ってくれる。サッパリしたところへ師団長B・クラー氏が見舞いに来られ、成功を祝ってくださる。毎日新聞への一報をすまして来院した牛窪とCap・ラムルから牛窪浩教授(総隊長)の亡くなられたことを告げられる。一瞬信じられなかった。

夜B・クラー氏が御家族を伴い見舞いにこられ、牛窪教授への悼辞を受ける。貴兄は大事を成しとげたのであるから今はリラックスし、スマイルでいるようにとねぎらってくださる。

二十四日、手術台に上り押えつけられた時、私は思わずノーカットと叫んでいた。一皮剝ぐだけで手術は終り、指はカットされずに残った。しかし指先は真黒である。いずれ失うことになろうと思った。

二十五日、本隊が明日夕方にはムンシャリに着くと連絡が入る。二十六日、バスをチャーターしムンシャリに向う。二十七日、村をあげての祝賀会をすませた本隊と合流し、帰路に着く。二十九日早朝IMF宿舎に入る。

十一月五日、サリーン会長宅においてIMF理事会が開かれ、隊長ヴィジャイと太田が呼ばれナンダ・コートの討議に入る。サリーン会長の挨拶があり、今回の登頂に対し成功したのは良いのだが、IMFとしてははなはだ遺憾であり喜んで祝福できない。隊長の報告書によればインド隊員が頂上に立てなかったこと、BCでのシェ

ルパの暴力事件、そして連日起ったポーターとの紛争も日本隊が自分勝手な登山を押し進めた結果生じたことであり、責任はすべて日本隊にあると報告されており、このことが本当であればわれわれがこの一年努力し、協力してきたことが全く報われず、国際信義にもとり今後日本隊に対する協力は出来ないし、明晩予定されている祝賀会も中止することになるだろうと、大変な怒りようで、怒られるであろうことは覚悟してはいたものの、一時はどうなることやら不安で一杯であった。反論の機会を与えられ説明を申し上げていると、インド隊長がいちいち口をはさみ中断されるので会長もたまりかね、いまはお前にきいているのではない。日本隊の隊長である太田君にきいているのだからお前は黙っていなさいとたしなめられる。そうこうするうちにCap・ラムル、カリータ、シェルパの報告書が届けられそれを読み終るとヴィジャイ隊長は退席させられ、サリーン会長は「われわれは本当のことを知るために話し合っていたのであり、いますべて明るみになった。本当におめでとう。君たちは国に帰れば英雄として迎えられるだろう」と握手を受け、三時間にわたって行われた会議は終った。No Problem インドでなじみになった英語はこれであった。

十一月六日、予定外であったがH・C・サリーン氏邸に野田大使、広瀬領事官、日本隊員が招かれパーティが催され、記念品を頂くことになった。その夜の祝賀会は四人の大将、各国大使も出席され盛大に催され、すべての行事を無事終えて翌七日、成田に帰ることが出来た。総費用は全額日本隊負担で終ることになった。

＜記録概要＞

隊の名称 一九八七立教大学山岳部ナンダ・コート登山隊 INDO-JAPANESE NANDA-KOT EXPEDITION-1987

活動期間 一九八七年一〇月

目　　的 ナンダ・コート（六八六一㍍）（五十周年記念）登頂

隊の編成 総隊長＝牛窪浩(63)、立教大学社会学部長、隊長＝太田晃介(52)、登攀隊長＝牛窪光政(42)、隊員＝富山晃(22)、野村正樹(21)、武石浩明(20)、武田剛(19)、高橋洋(18)

インド隊長　ビシャイ・ラクワン(32)、カリータ(28)、サーダーシェルパ　ナウアン・サムデン(36)、ニマ・ノルブ(36)、アジュワ(34)、ペンパ・ツェリン(43)、キッチンボーイ　パサン(26)

連絡官　Captain ラムル(23)

行動概要 一〇月一七日十時四十五分、富山、野村、武石、武田、ペンパ、アジュワ登頂

一〇月一八日十時十五分、太田、牛窪、ナウアン、ニマ登頂

記録発表 一九八七立教大学山岳部ナンダ・コート登山隊報告書

中国・皇冠峰登山を顧みて

――その人間的側面――

山本良三

はじめに

これは初登頂失敗の記録である。

静岡大学山岳会は一九七五年のテラム・カンリ峰（七四六四㍍）の初登頂に成功した後の十年間、海外登山を実施することが出来なかった。それまでは五年に一度の割合いで海外登山を続けていたのだが……。

動けなかった最大の理由は、山岳会内部での登山観の衝突にあった。これまで通り初登頂主義を貫こうというグループと、八千㍍峰のバリエーション・ルートを狙いたいとするグループがあり、山の選定で調整がつかなくなるという事態が起っていた。

会員三百名弱の小さな大学山岳会では、同時に二つの登山隊を派遣出来るほどの力量は持ち合わせてはいなかった。

そのうち、初登頂主義を主張するグループがいっせいに海外登山計画から手を引く事態となり、八千㍍峰の登山計画が進められたが、諸般の事情から実施に結びつかないまま時は流れた。これは小さなコップの中の嵐に過ぎなかったが、一つの山岳会の動きを停止させるには十分であった。

この間にも数少ない世界の著名な未踏峰は次々と初登頂されていた。

やはりもう一度未踏峰登山に戻ろうとの意図で研究が続けられた。その結果広大な未踏地域を有する中国ヒマラヤに焦点をあてることになった。しかし初陣の我々には情報が不足していた。幸い登山解禁後の中国を訪問した知人、友人は数多く、その気になりさえすれば必要な情報はたちまち集められた。

そして多くの人々の協力を得て、目標とする山は二転三転したが、中国登山協会は一九八六年七月、ついに新疆ウイグル自治区カラコルムの未踏峰皇冠峰（七二九五㍍）の登山許可を出してくれた。

一方、新疆に学術調査の関心を示した静岡大学の研究者達の要望は中国科学院との合同調査を別働隊の形で実施することで話し合いがまとまり、ここに静岡大学西域学術登山隊（一九八七）が成立した。

中国登山協会が皇冠峰と命名した当峰は、今を去る五十年前、パキスタン側からかの地を探険した英国の登山隊E・シプトンによって[1]クラウン峰（Crown）と呼ばれた独立山群の盟主で、パキスタンとの国境上ではなく、完全に中国領内に位置し、頂上部に鋭い岩峰を有する峻峰である。

西蔵の麗峰として知られるメンルンツェ峰（乔格茄七一八一㍍、ガウリサンカールの隣峰）とともに、現在中国ヒマラヤを代表する未踏の難峰の一つである。

その後、一九八七年十一月、北京にて議定書が締結され、その際に皇冠峰近くの未踏峰である麒麟峰（七〇九〇㍍）の登山許可も与えられた。しかしながら、当峰については、全く手をつける余裕はなかった。

登山隊は、日照時間の長い夏場（六月～八月）を登山時期に選び、中国大陸最長のインスガイティ氷河上の物資輸送に約一ヶ月間を費やし、そこからクラウン氷河を経て、急峻な皇冠峰の東南稜上にテントを進めたが、七〇一〇㍍附近にて岩壁の突破に失敗し、頂上まで約二八五㍍を残して初登頂に成功することが出来なかった。

一方、別働した学術隊は世界初の学術調査をジュンガル盆地周辺に展開すると共に、タクラマカン砂漠周辺の調査をも行ない、多くの成果をあげて成功裡に第一次隊の任務を終えた。

当紙面では、登山記録の報告の代りに、種々の問題を内包していたと考えられる登山隊の人間的側面に焦点を当てることにした。

隊の人間的側面

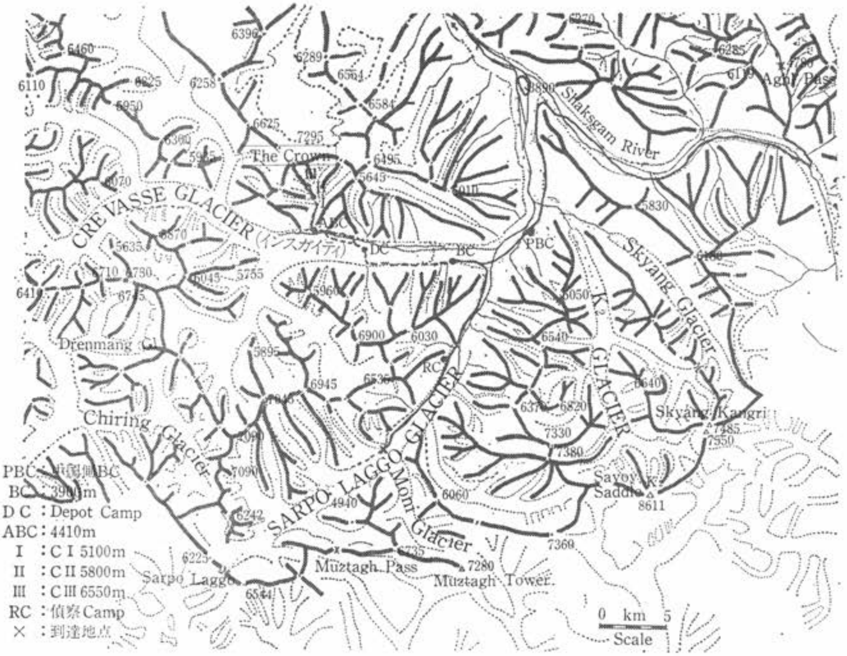
〝敗軍の将、兵を語らず〟という言葉を承知の上で、幾多の問題提起があったと考えられる今回の中国登山を、人間的側面から考察してみたい。

まず最大の問題は、隊長を務めた小生が「良好なリーダーシップを確立出来なかった」と考えている点にある。初登頂失敗の理由は表面には悪天候、隊の力量不足、時間切れなど、いずれも結果論としては当たっていよう。しかし、全員が力を出し切ったとの気持で帰国したか否かを問えば、その答は〝否〟と出よう。全員の持てる力を十分発揮させ得なかった責任は当然リーダーが負うべきものである。

なぜ良好なリーダーシップの確立が出来なかったのか、この点は明確にしておかなければならない。これが敗軍の将たる小生の役割であると考える。これまでに幾多の海外登山の報告がある中で、隊の内幕を公にした報告は皆無に近い。内幕をさらけ出すということは、仲間うちの恥部を見せることであり、自己批判せざるを得ないことになる。

しかし、いろんな意味で変革期にある大学山岳部の現状やその海外登山を考えようとする時、これは避けられない認識と考えられるので、あえて触れることにした。

紙面の関係で内容を深く広く考察することはかなわないので、そ



の一部を示すにとどめる。

はじめに、中国へ出発する前の小生の考えていたことから記してみよう。過去数回の遠征経験（いずれも成功）から、誰が隊に参加しようとも充分一緒にやってゆけるとの自信を持っていた。早くいえば高を括っていた。

価値観の多様化した現在、若者は自由奔放な生き方を好み、枠にとらわれない物の見方、考え方をするであろうことは、充分理解しているつもりであった。さらに、少なくとも海外登山に参加する意思のある者であるならば、事前に関係のあるヒマラヤ遠征記録は読み、関連事項については充分勉強しているはずであり、冬山の経験も相応に積んできているものと考えていた。

また、出発近くなって参加出来なくなった中核隊員数名の代りに外部から参加してもらった六名のうち、四名はヒマラヤ登山の経験者であった。

以上のような考え方と人員構成から、チームワークのための必須ともいうべき、全員の登山に関する基本的な考え方や認識の統一あるいはその確認をしなかった。それには、隊員達が地理的に離ればなれの状況にあったこと、小生が資金集めのためにそうしたことに余裕がとれなかったことも大きな理由であった。準備も特定の隊員に集中しがちで、全員が力を合わせるという状況をつくり出せなかった。その結果かどうかはともかくとして、現地で登山観、価値観の分裂が生じた。これは深刻な事態を招き、その傷口は今も深い。

驚愕すべきことに、参加した山岳部員及び若手ＯＢに本格的な日本の冬山での経験が不足していた。これでは自分の登山技量に自信が

持てるはずはなく、ヒマラヤ遠征に関する書物一冊すら読んでいない者がいたことは、参加意欲と目的意識の無さを示していた。初登頂を目指す山登りにロマンを持っていない者が多かったことは、当計画の意義を理解していないことでもあった。

なかには物見遊山的な気持で参加した隊員もいた。そんな彼等がなぜヒマラヤの未踏峰を目指す登山隊へ参加する気になったのか。

その動機はどうやら当世風の〝かっこいい〟という言葉に代表される風潮にあったらしい。誰一人本気で初登頂出来ると思っていた若手隊員はいなかったらしく、ヒマラヤ登山隊に参加することにのみ意義を見出していたようである。

しかし、そんな彼等にも言い分はあるだろう。「今になってそんなことをいうなら、なぜ事前に説明したり、指示をしなかったのか、それをせずに期待はずれだと言われても、何を期待されていたかも知らなかった」と。

小生はこのような隊員を引き連れて、中央アジアの奥深くの峰に挑もうとしていたのである。明らかに一部の隊員の選定を誤っていた。しかしいまさら引き返せない。

楽しかるべきはずの海外登山がちっとも楽しくなかったのだから、どこかが狂っていたとしか言いようがない。親が子供をしかるのは親の子供に対する愛情である如く、小生が若い隊員に厳しく注意したり、叱るのは同門の後輩という仲間意識からの愛情なのだが、彼等は夜ごと自分達のテントで酒をくみかわしては、そんなこと言われるのは論外といわぬばかりの隊長批判を続けたという。

注意の仕方にも問題があったのであろう。

万事甘やかされて育ち、規律ある団体生活の経験にも乏しい彼等にとっては、我慢の出来ぬことであったようだ。

そんな彼等を外部からの参加者の一部がなだめに廻るといった構図が出来つつあった。そして、彼等は隊長に対して被害者意識を持つ集団として結集するようになっていった。外部参加のヒマラヤ経験者も小生が招聘したとはいえ、日頃からの親しい友人とはいえない人達であったので、隊長に相対する立場からは程度の差こそあれ身内の若い隊員の被害者意識に同情もしくは理解を示す位置の人達であった。両者は隊長に対峙して結束した。この段階で隊は心理的背景においてすでに分裂していた。

この種の被害者意識問題を考察した名著に『甘えの構造』(2)がある。被害者意識とは、甘えたいのに甘えさせてもらえないことからくる、一種のすねた状態である。しかし、この場に及んで分裂回避に動かねばならないという気は小生にはなかった。

これまでも山岳会内での人間的なトラブルは遠征のたびごとにあった。だが、決定的な破局に至るようなことはかつてなかった。それは同じ釜の飯を食った仲間意識を共有する人間集団であり、山岳会への帰属意識についても何ら違和感はなく、多少の人間的な気まずさや、わだかまりを残しながらも、基本的な点では一致団結出来たからであると思う。

今回は小生にとっても、山岳会にとっても初めての外部参加者との混成隊であると共に、全く世代のかけ離れた、同門とはいえ二十歳台の隊員を中心とする登山隊であった。

破局が決定的になったのは、ベースキャンプの全員集会の場で、

小生が指名した登攀リーダー候補がその受諾を拒否したときであった。このままでは隊長に殺されるのではないかと感じた隊員がいたという。

隊の崩壊を覚悟の上で激論をするか、それとも「全ての責任は隊長がとるから、君達でやれるだけやってみよ」といって任せるかの二者択一の時であった。

小生は全員の意見を聞いた上で、後者を選択した。それ故に小生をはじめ年輩者四名にとって今回の遠征はつまらないものとなってしまった。

意識の背景には㈠、この隊を具体的に組織した責任は小生にある。㈡、山岳会ではなく大学主催の隊である。㈢、隊長である小生が我慢すれば、この隊は崩壊しなくてすむ。㈣、いまさら議論を重ねて隊を二分しても隊の目的達成のためにプラスになるかどうかわからない。㈤、誰が登攀リーダーになろうとも、必要な装備・食糧は準備してきている、などがあった。ビジネスの世界であれば、この段階で徹底的な議論を通してリーダーシップの確立をはかるのが常態であるが、小生の意識の中には趣味の世界にまでビジネスのやり方を持ち込みたくないという気持が強く、趣味の世界の論理はロマン追求型であるべきとの考え方が支配的であった。

それ故に、小生の深層ではこんな状況に直面した自分に自己嫌悪を感じていた。いまさら何を議論してもはじまらない。

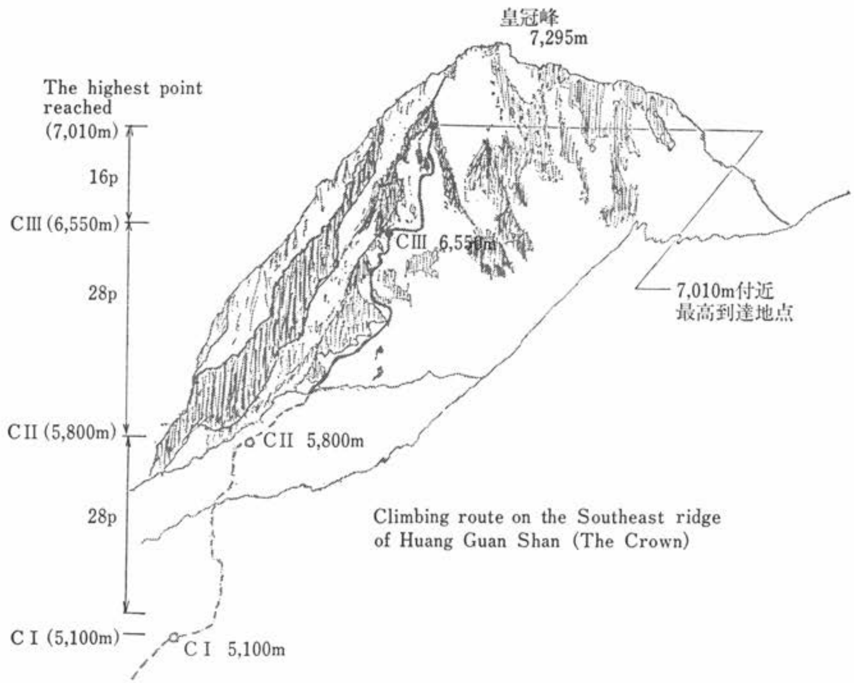
最もショッキングであったことは、同門の若手隊員にロマンと感動と使命観が感じられなかったことである。世界第三位の未踏峰の初登頂を目指すというロマンを求めて、タクラマカン砂漠を越えて、ここまでやってきた自分の気持とあまりにもかけ離れた現実の姿を思うと暗澹たるものがあった。そして、この隊では自分の考えている初登頂を狙う山登りの出来ないことを本能的に感じていた。この隊の中では初登頂登攀に最も経験の豊富な自分が後へ身を引くことで、若い隊員達がどこまでやれるかを見てみよう。

大学山岳部のあるべき姿

今回の遠征を通して、参加者全員が何らかの強い欲求不満を持ったまま帰国したのではないかと思う。そのことに関しての大半は隊長たる小生の責任であり、全隊員に申し訳ないと考えている。だが、なぜこんなことになってしまったのか。その背景の一つに、ここ十年ぐらい前から静岡大学山岳部は人気がなくなり、部員数が激減し、名ばかりの存在になってしまっている、という実情がある。なぜ大学山岳部は人気がないのか。

かつて大学山岳部に身を置いた者として、最近の大学山岳部の低迷ぶりに心を痛めていない者はいない。時代の風潮といってしまえばそれまでだが、何とかならないものか。

今回の遠征を機にわが大学山岳部も息をふき返してほしい、との願いもあったのだが……。山岳部が現代の学生気質から敬遠されている理由はいろいろあろうが、一つには山岳部という名前から連想するイメージに問題があるのではないかと考える。すなわち、㈠、統率的イメージ→自由がない。㈡、先鋭的で冬山指向のイメージ→危険がいっぱい。㈢、重い荷物をかつぐイメージ→しんどい。などが代表的なものではないか、と。もし〝自由がなく、危険がいっぱ



いで、しんどい〃というのが山岳部の代表的イメージなら、部員数は減りこそすれ、増えることがないのは当然という時代認識を持つ必要があるような気がする。

しかし、このような時代背景の中で、あえて山岳部を選んだ学生は骨っぽいものを持っている人間だと思いたい。だが、ある程度の人数が集まらなければ、いわゆる個人山行の域を出ない。とすれば、団体生活の経験も乏しく、基礎訓練も不充分となり、強いて言えば個人山行の集りにすぎない。

このような世代の山岳部員を、三十名以上の部員を擁した最盛期の山岳部員と同様に考えていた小生の思い違いに今度のことは端を発したのではないかと考えている。

さらに当然のことかもしれないが、小生には驚くべきことに若い人達の帰属意識の希薄さがある。組織母体が大学山岳会であり、派遣母体が大学であるにもかかわらず、当人達はあくまで個人としての参加を強く意識していたようである。言い換えれば、共に仲間であるとの意識よりも、隊長と隊員との関係しか考慮していなかったことになる。そのことは、小生との対話の欠如していた二十歳台の若者達は断片的な小生の指示や注意などから、自分が隊長にどう思われているかを察知しようとしていたように思える。隊長とうまく行かないと思えば、造反するか、すねてしまう以外に方法がないと思ったとしても不思議ではない。そこで自分が孤立しないためには同志をつのってかたまるしか手がないことになる。

これは組織への帰属意識のない個人が一つの集団の中で生きて行くための自己防衛本能である。しかし、帰属意識という共通の土俵

があれば、お互い仲間なのだという気持が働くので、隊長対隊員という対立構図にはなり得ないはずであった。

次に、これまでの海外遠征の経験からみると、今回参加した人達の自覚と認識がこれまでの隊員のそれとは随分と違っていたにちがいないと思われる。この自覚と認識の差はどこから来たのだろうか。少し分析してみると、初登頂への意欲の差については、ぜひとも成功させたいという主体的な気持で取組むのと、出来れば成功してもらいたいという協力者的な気持との差があったのではないか。この違いは決定的だと思う。

またこの意欲を裏づける経験の有無についても、日本の山で四季を通してどれだけ鍛えこんだかにより、重要な要因の一つである技術的な自信となるのだが、これも不足していた。それと当人の社会的意義を認識しての使命観がある。

使命観のない人間、目的意識の薄い人間は弱いといわれる。

これらは、基本的には教育と訓練なしには体得し難い価値観と思われるが、私の認識が間違っていなければ、使命観や目的意識は人間に固有の資質である。残念ながら、この面でも今回は問題があったようだ。

要するに、今回の若者は鍛えられていなかった。ヒマラヤを目指すには早すぎた。何も知らず、わからないままにヒマラヤ登山に放り込まれてしまって、戸惑っていた状態が本当の姿ではなかったのか。

不用意に仲間と思って一緒に出掛け、ベース・キャンプへ着く頃にはお互いに深い溝が出来ていたという悲しい現実はあったが、これを他山の石とすると、今後に残された対策は次のようになろう。

一昔前であれば、急拠寄せ集めて、現地で初めて顔を合わせた人間同士でも基本波長が近接していたので、一つのベクトルに合わせるのにさほど時間はかからなかったものだが、現在の若者の波長は千差万別で、現地でベクトルを合わせるのは不可能に近く、一つの方向に合わせようとすると、逆にバラバラになってしまう恐れがある。国内で鉄則通り、じっくり時間をかけて、近接波長の人間でチームを作り上げてから出掛けることだ。

鉄則をはずれ、時代感覚を忘れて、チーム・スピリットの浸透していない見せかけのチームを率いることは、罪悪ではないにしても、実につまらない。今回はこのことを再認識した海外登山であった。そして、若い人達と意欲的な登山をするには、その成果はいかなるマニュアルを事前に作成するかにかかっている、といっても過言ではない。

したがって、初登頂ならずの最大の要因は、装備・食糧の不足や、悪天候でもなく、実にリーダー・シップの確立が出来なかったことによる、人災と断ぜざるを得ない。そして、最後に、小生にロマンを通して心豊かな人間関係を築きあげるだけの人間的魅力や力量が足りなかった。

これが今回の遠征で将たる位置にいた小生の自己批判である。

<記録概要>

隊の名称　静岡大学西域学術登山隊

主催団体　静岡大学

活動期間　一九八七年五月〜九月

目　的(イ)皇冠峰（七二九五㍍）及び麒麟峰（七〇九〇㍍）の初登頂

(ロ)ジュンガル盆地及びタクラマカン砂漠周辺の学術調査

隊の編成　総隊長＝郗田卓夫　静岡大学農学部教授（青果保蔵学）　55歳

登山隊長＝山本良三　ローヌ・プーラン薬品㈱開発部長　47歳

副隊長＝広瀬義輝　味の素㈱医薬事業部課長　47歳

隊員＝竪山隆三　岡崎城西高校教諭　49歳、近藤信行　作家　56歳、星野貢　三友設備工業㈱　39歳、落合守和　静岡大学教養部助教授　37歳、清水久信　医師　33歳、清水永保　自営業　30歳、内山一彦　静岡県立二俣高校教諭　29歳、岡本良治　カメラマン　28歳、桜井卓　無職　25歳、山本啓司　東京大学大学院地球科学科　22歳、水野俊哲　静岡大学工学部学生　23歳、田山幸生　静岡大学理学部学生　22歳

学術隊　隊長代行＝大石惇　静岡大学農学部助教授（園芸繁殖学）　48歳

隊員＝近田文弘　静岡大学理学部助教授（植物分類学）　44歳、福田明　静岡大学工学部 助教授（電気工学）　42歳、**大村寛**　静岡大学農学部助教授（砂防工学）　42歳、高木敏彦　静岡大学農学部助教授（果樹園芸学）　39歳、糠谷明　静岡大学農学部助手　36歳、森　誠　静岡大学農学部助教授（家畜飼育学）　38歳

報道隊員＝江木真吾　朝日新聞　25歳

中国側隊（運転手、コックは除く）

登山隊＝連絡官　尚子平、副連絡官　張智光、通訳　宿瞳、管理人　党小強

学術隊＝鄭錫瀾　中国科学院地質研究所、王雲鶴　中国科学院新疆生物土壌砂漠研究所、揚戈　中国科学院新疆生物土壌砂漠研究所、郎楷永　中国科学院植物研究所、張宏俊　南京農業大学

行動概要　一九八七年五月二十六日先発隊日本出発。六月一日に本隊日本出発。ウルムチ、カシュガル、イエチェン、マザーダーラを経由、六月十八日高度三九〇〇㍍にBC設営。インスガイティ氷河上のルート偵察と荷上げに時間を費やし、七月二十一日にABC（四四一〇㍍）を設置。クラウン氷河を横断して七月二十九日にCⅠ（五一〇〇㍍）を設置。ジャンダルムを迂回し東南稜上のCⅡ（五八〇〇㍍）設営は八月四日。さらにルートを伸ばして、八月十日、CⅢ（六五五〇㍍）を設営。東壁の急峻な雪壁を攀じて、A字状岩壁の基部へ達し、そこから困難なチムニー状岩壁に挑むも、突破出来ず、八月二十二日に最高到達地点（七〇一〇㍍附近）をもって登攀を断念。九月一日、BC撤収。

（学術隊は省略）

報　告　静岡大学西域学術登山隊公式報告書　昭和六十三年秋

（予定）

近藤『朝日新聞』一九八七年七月十四日
近藤『日中文化交流』一九八七年十二月十日
近藤『山梨日日新聞』（連載一〇回）一九八七年十二月
近藤『季刊民族学』一九八八年43号
近藤『學鐙』一九八八年一月号
岡本『山と渓谷』一九八八年一月号
岡本『山岳年鑑'88』（山と渓谷社）
山本『American Alpine Journal』（Vol. 30, 1988）

文献

（1）『地図の空白部』シプトン著、諏訪多栄蔵訳、ヒマラヤ名著全集〈10〉あかね書房、一九六七年六月十五日刷
（2）『甘えの構造』土居健郎著、弘文堂　昭和六十年十月二十日刷

スダルシャン・パルバット 一九八八

木戸繁良

スダルシャン・パルバットは、インド、ガルワール・ヒマラヤのガンジス河の源流をなすガンゴトリ氷河の支流ラクトヴァルン氷河の北西に位置する。

この山は一九六七年インド隊による初めての挑戦から五回とも（いずれもインド隊）失敗に終り、外国隊に解放されたのは一九七九年の春で、その二年後の八一年にインド・フランス合同隊によって東稜から初めて登頂された。その後一九八三年、日本から初めて慶応大学隊が南東稜から登頂を試みたが不成功に終った。その翌年、北大隊が南西稜から、続く一九八五年に帯広わらじの会が東稜から成功している。

富山山想会の創立三十五年記念事業として、一ヵ月位の期間で個人負担五〇万円以内、それでいて六五〇〇メートル以上の山ということで条件を絞った時、インド、ガルワール・ヒマラヤが浮かびあがった。まだ外国隊に解放されてから新しいガンゴトリ山群からということで、アプローチの短い、スダルシャン・パルバット、六五〇七メートルを目標とした。「スダルシャン」は、サンスクリット語で〝魅力的な〟〝美しい〟の意で、「パルバッド」は山を示し、名の通りガンゴトリから見たスダルシャンの西面は、マッターホルンによく似た、魅力的な美しさであった。

ガンゴトリへ

四〇度C以上の気温が毎日続くデリー。税関の荷物も本隊が着いた翌日入手することができた。IMF、日本大使館と所定の手続きをすませ、荷物のパッキングと、隊員は毎日を忙しく過ごす。

四月三十日、隊員六人とリエゾン（現地連絡官）、それに四〇〇キログラムの荷物を乗せ、北の町リシケシへと走る。常時八〇キロ以上のスピードで他の車をけちらすように、埃を巻き上げ直線の並木道をつっぱしる。一三時三〇分リシケシのツーリストホテル（一人二五〇円）に着く。

翌日別のマイクロが迎えに来る。荷物を屋根に乗せる。途中、登山学校に立ち寄り、ガンジス川が町の中を流れるウッタルカシの町に着く。ここで野菜、タマゴ、ケロシン等を購入し、ツーリストホテルに入る。

翌日、さらにガンジス河をさかのぼり、厳しい谷間の道を手に汗を握りながらひたすら事故のないことを願う。途中道の真中に大きな石が行手を阻むがテコと人手で石をよけ、ガンゴトリに着いた。バス停から、上流に向ってVの字の緑の谷間の中に白く大きいスダルシャンが見える。なんて素晴しい山であろうか、この山を選んだことの満足感で一杯であった。

ベースキャンプへ

ガンゴトリ、三〇四八㍍は、ヒンズー教のメッカで巡礼の人々で一杯。ツーリストホテルも予約なしでは泊れなかった。朝は六度Cで寒さを感じる。ここからポーター二十四名、隊員その他で三十五名のキャラバンになる。青空の下、良く整備された道を源流に沿って右岸を歩く。途中日本の年配の旅行パーティにあう。松林のチルバスを通り、バギラッティ峰が目の前に立ちはだかるころ、開けた三七〇〇㍍のホジバサに着く。ヒンズー教の寺院があり、ここのレストハウスは四棟で、管理人がいて食事も出来る。巡礼の人々の憩いの場所でもあった。

翌日、高熱を出した藤村、米田を残し四五〇〇㍍のBC予定地に向う。この先ゴウムク、四八九二㍍の氷河の末端までは整備された道が続き、巡礼者のために馬で運んでもくれる。

ガンジス川の上流、バギラッティ氷河の末端は三〇㍍の氷の壁が切り立ち、その下からわきでる聖なる水を汲みとり持ち帰る人、こごえるような冷たい水で沐浴する人々がある。ここから先は道らしいものもない。右手、針のようなシブリンが立っている。これを背にして、左にラクトブアン氷河に入る。出合付近のモレーンは状態が悪くガレた斜面のトラバースは大変だった。ここを抜けると穏やかなモレーンとなり歩きやすい。BC予定地の四五〇〇㍍地点はすでにインド・カルカッタ・ハイスクールの登山隊に占領され、上の四六〇〇㍍にBCを置くことにするが、ポーターのストライキが起こり、納得させるのに一時間余り費やした。

高度順応そして登攀へ

高度順応のためBC建設後いったんゴウムクまで下る予定だったが、ストライキ等があったためポーター全員が着いた頃はもう薄暗くなっていた。五月五日休養と設営。キジを撃ちに行ってきばると頭が割れるように痛い。六日リエゾン、コックを残してゴウムクに下る。途中、登ってくる藤村に出合う。ゴウムクでは米田君が薬と体温計をかかえてふうふう言っている。

七日、再びBCに向う。途中で藤村君が頭痛が激しく下って来る。彼に米田君をつけてゴウムクへ下る。わりに早くBCに着いたので、C1ルートの偵察、トランシーバーの確認をしながら、四八五〇㍍で引返す。八日、一部荷上げとルート工作。BCのラクトバン氷河を登り、スウェットバン氷河に入る。出合の岩場に五〇㍍のロープを工作し、急しゅんなガレ場を登り氷河の中位でいやなトラバースにさしかかる。谷は狭くなり、登りつめるとスダルシャン東

面の全容が目に入る。左に東南稜、右に東稜。我々は北面から東稜に取付くことになる。五一〇〇㍍ぐらいから雪面になり五二〇〇㍍で開けた広い雪原帯となる。そこにC1を設営しBCに帰る。
米田、藤村君もBCに入っていた。午後からの強風でテントがつぶれ、建て直し、全員がBCで顔を合せ、BC開きのパーティーをする。

九日、全員で荷上げし、尾島、ラックスマンがC1に入る。十日、米田、藤村はC1に入りテント一張りふやす。尾島、ラックスマンでC2入り。藤村、米田、ラックスマンでC2の設営。尾島休養、上部の荷上げ終る。

十二日、C2へのルートは多少起伏のある雪原帯の東稜を巻き込み北面に出る。長い長い雪原帯のアプローチである。五八〇〇㍍にC2。十三日、同じく東稜へのルート工作、C2から東稜のコルは七〇度の雪壁を五〇㍍二本フィックスし、コルに出る。

十四日、尾根上部約六三〇〇㍍のスノーキャップまで工作し時間があれば頂上を目ざす予定だったが、ロープと時間切れのため、スノーキャップからいったん下り、約六一〇〇㍍の岩場でビバークする。山田は顔のはれがひどく、BCに下山。

十五日、ビバーク地点からC2にもどり休養。十六日、C2を五時四〇分出発。昨日のビバーク地を過ぎ、スノーキャップを右側にのりこえ、四ピッチで頂上に立つ。十三時五十分。十四時二十五分頂上を後にする。C2、十九時三〇分。

＜記録概要＞

隊の名称　富山インドヒマラヤ登山隊一九八八

主催団体　富山山想会

行動期間　一九八八年五月（四月二十七日～六月四日）

目　的　スダルシャン・パルバットの登頂

隊の編成　隊長・木戸繁良(53)、山田信明(39)、藤村宏幸(36)、前田友子(32)、尾島健誠(40)、米田繁雄(40)、リエゾンオフィサー、PRAKASH・KATOCH

行動概要　四月三十日デリー出発。五月二日ガンゴトリ（三〇四八㍍）キャラバン開始。四日ベースキャンプ（四六〇〇㍍）建設。八日第一キャンプ（五二〇〇㍍）建設。十一日第二キャンプ（五八〇〇㍍）建設。十六日スダルシャン登頂。十八日ベース・キャンプへ下山。二十一日撤収。二十四日デリー到着。

記録発表　『山と渓谷』、立山の自然を守る会会報57号（88・8号）

図書紹介

今西錦司編『ヒマラヤへの道』

中央公論社　昭和六十三年五月刊　四六判
四二六ページ　定価一八〇〇円

東京の風下に立たず、輸入文化を咀嚼し独創的なものをつくりあげた京都学（岳）派の活気溢れる実録。

登山と学術探検の両刀を使いわけ、わが国の登山界に独創的な一大勢力を築き上げた京大学士山岳会（AACK）の、草分け時代から今日に至る活気溢れる歴史の実録である。会員のジャーナリスト、斉藤清明が会の委嘱で執筆したものだが、同会五〇周年編集委員（近藤良夫ら）の下に集められた厖大な資料を駆使して、会代々のおびただしい数の人間像とその活動を描きAACKのインサイドを白日の下にさらしたあたり、さながら「水滸伝」といった趣きあり、と同時に一級の登山と探検の資料でもある。

戦前の荒々しい開拓時代を語る初めの六章（頁数では三割）が白眉である。東京の風下には立たない、輸入文化を鵜呑みにせずうまく消化して独創的なものに作り上げる、こういう京都盆地の歴史的風土を体現したのが京大だといえる。文理両科の垣を越えた結束力と綜合力をもつ。なかでも三高出は本流とされた。

今西錦司、後年彼の妹を娶った西堀栄三郎と四手井綱彦、高橋健治、桑原武夫ら皆三高だが、彼らの登山は慶応や早稲田にくらべ後発だった。当時数年の年齢差は大きい。槇有恒のアイガーの年、揃って高校生になる。京大に進んだ年にアルバータ遠征のニュースをきく。彼らは揃って学者志向であり、彼らの上に国際的な生物学者、日本のスキーの草分け、木原均教授がいたのが幸いだった。木原はAACK初代の会長を引きうけた。彼の令名にはマスコミもなびいてくる。今西らの登山は初めから何かを編み出す登山だった。直線的な近代アルピニズムとどこか違う。昭和初頭、一挙にヒマラヤ登山を決意する。一挙というのは、ヒマラヤの初登は最も容易なルートをたどるからアルプスの高等技術は不用のはずとの今西発想による。甲南高校出身で仲間に加わった伊藤愿が訳したバウアーの『ヒマラヤに挑戦して』をただの山の洋書としてではなく、実践的なマニュアルとして読み、画期的な極地法を編み出す。ヒマラヤ登山の方法論だ。実地訓練の場として白頭山にでかける。登山だが自然と人文観察の文武両道の、京大型遠征の嚆矢である。創始者たちが登山家兼科学者であるのを反映したものだが、これが戦後世代を重ね学者と登山の両人脈を抱え込むにつれ、内部の緊張を生みだす。いつも両者併用とはいかなくなる。どちらに重点を置くか、の間ならまだ納まるが、どちらかを切らぬばならぬとなると最高幹部を巻きこんだ対立の人間ドラマにまで発展する。右へ左へと揺れながら前に進むAACKの姿は大蛇の蛇行を思わせる。

昭和十二年初頭、木原教授を隊長に大胆なK２遠征を公表する。

大阪朝日新聞社の後援だ。一番若い隊員に加藤泰安がいた。戦後京大の登山遠征の万年副隊長、今西錦司に重用された。伊藤愿が渡印までしたが、戦争でK2計画は夢物語になり、ここで会の登山の系譜はいったん切れる。しかし学術探検の系譜は大陸辺境に於けるフィールド・ワークで生き続け、今西子飼いといわれた梅棹忠夫、川喜田二郎、中尾佐助、吉良竜夫ら、行動力に溢れた二世の学者グループが生まれでる。

戦後、内蒙の張家口から引き揚げた今西錦司はこの学者グループを抱えて再出発した。京大にはアカデミズムを離れて組織をつくる自由な雰囲気があった。木原均を迎えて探検のための団体、生物誌研究会（FF）ができる。このFFの中からマナスルが「発見」された。これを体して戦前から東京住いの西堀が電撃的なネパール工作に成功。今西と西堀は木原、桑原の同意を得て大局的立場からマナスルをJACに譲ることを決意する。登山史上の一大事件である。これは本書から得た評者だけの見解だが、京都が思うままに執った未曽有のイニシアティヴは、今西と西堀を京都を超えた汎日本的なVIPにした。

しかしJACへの移譲は反発を生んだ。その間にやっとAACKが復活したが、その再建委員長桑原に対して、最古参の四手井が「移譲は背任だ、切腹せよ」と迫った、とある。また若手学者グループに囲まれていた今西も、古参の目の届かぬところに若い登山勢力が育っていたのを、十分認識していなかった節がある。伊藤洋平、藤平正夫、船橋明賢、林一彦、脇坂誠ら、どれも三高出ではない。マナスル移譲の反動であるかのように、戦中派の今西寿雄をリーダーに右の人々を戦力にしたアンナプルナ四峰遠征が、再建AACKヒマラヤ第一号として送りだされた。マナスル一次と同年の秋である。

かくして戦後AACKは学術探検と登山の両翼に豊富な人材を持つことになり、近年までの三十年間、学術と登山の両部門で、あるいは両部門の合同で次々と大小の遠征をうってきた。本章はメイン・イベントに独立の章を設けて語ってくれる。カラコラム、チョゴリザ、ノシャック、サルトロ・カンリ、インドラサン、ヤルン・カン、カンペンチン、ナムナニへと。主遠征には京大教授の看板をもつ古参がリーダーになるが、時代は次々に秀れた後継者を生んできた。本多勝一のような別派を生む素地もある。だが京大の山にはどの時代にも、他の大学にはないダイナミズムがある。何故か。平たくいえば長老たちが実力に於いて偉かったのだ。南極やアフリカを野性的としかいえない実力で開拓する人達である。しかし息子や孫も息ぎれひとつ見せなかった。長老の重圧をはね返えそうとエネルギーをたくわえる姿が、本書で面白く描かれている。

さて、今西錦司が序で語った言葉には、遺言の重いひびきがある。初登頂主義を守っていけ、高い山は次々になくなろうが、科学のメスをぶちこめば、まだまだ仕事がある、と。

ここ二十年、登山の世界も高度消費文化に組みこまれ大きな変容をとげた。AACKはいうなれば古典派であり、その精神の強い担い手だった。会の行動史が精神史の趣きをもつのはそのせいである。しかしさて、これからは……、本書はまたそれを問いかけているようにも読める。

（一九八八年八月　**田口二郎**）

色川大吉

『雲表の国　青海・チベット踏査行』

小学館　一九八八年三月刊　B６判　三三八ページ　定価一五〇〇円

六二〇〇キロ、五十余日におよぶ〝世界の屋根〟の紀行。「互いの理解」と「真の友好」のために遠慮なく書かれている。

著者は、一九八六年の東北大学日中友好西蔵学術登山隊の人文班（学術班）の班長として参加した。そのときの私的な踏査記として本書が出版された。登山隊は念青唐古拉（ニェンチンタングラ）主峰（七一六二メートル）の初登頂に成功した。それに前後して、人文班は四月中旬西寧を出発し、青蔵公路を南下して拉薩に至り、この付近を調査したあと中尼公路を経由して、五月下旬中国からネパールに入り、カトマンズに至っている。この約一ケ月半の中国での調査見聞をまとめたのが本書である。

わたしもその前年（一九八五）、揚古拉山脈の主峰各拉丹冬雪山（六六二一メートル）登頂と揚子江（長江）正源流踏査のため（「山岳」八十一年、一九八六年）、同じ青蔵公路を通って自然と人文の観察を試みている。そのため、ことのほか興味をもって読んでみた。当然のことながら、私の知っていることや、中国の知人もでてくるので、なつかしさを感じた。例えば、人文班の李軍連絡官は、わたしたちの副連絡官であった。彼はチベット語と漢語ができるチベット族で、わたしたちも揚子江源流で遊牧民のテントを訪ねたときや、ベースキャンプなどで、ことのほかお世話になった。また、東北大学術交流団の連絡官は、中国科学院地質研究所の常子文先生であった。先生は東北大学理学部岩鉱学科卒業で、日本語が達者なのは当然のこと、さらに久野久先生の『火山及び火山岩』（岩波全書一九六、一九五三年初版）を中国語に訳している。先生とわたしは、専門を同じくすることや、四川省〜雲南省にかけての横断山脈の日中共同地質研究（この一部は「山岳」＜七十九年、一九八四年＞に踏査紀行として報告）などの関係から、朋友の間がらでもある。

ところで、著者の色川氏は歴史学専攻であり、人文班は、宗教史、民俗学、インド仏教、ヒンドゥ芸能、チベット学、自然環境学、新聞記者など七名（ラサまでは六名）で組織された。人文班の調査目的としては、次の四テーマがかかげられている。

一、入吐蕃道（七世紀以降、唐と吐蕃＜チベット＞を結んだ文明交流公路）をできるだけ実地踏査する。また青蔵公路（西寧—ラサ間）と中尼公路（ラサ—ネパール・カトマンズ間）を完全に踏破し、「もう一つのシルクロード」の実態の確認。

二、チベット仏教（日本の大乗仏教、とくに密教と同じ関係にある）の古寺における信仰情況、仏教美術などの文物調査。

三、高地農耕民、遊牧民の生活文化の変遷、とくに文革や社会主義的近代化による変化の有無などの調査。

四、チベットの自然環境と家畜や生物との関係、生態などの観察。

以上のテーマと著者の専門から考えられるように、由緒ある古

寺、古城、宮殿などの調査や、これらと関係した中央アジアからチベットの歴史に関する記述が多い。

青海省の古寺では、湟中のタール寺、楽都のチュタン寺について記している。チベットの寺院については、ラサのポタラ宮、チョカン寺、セラ寺をはじめ、ヤルルン谷、ツェタン、さらにギャンツェ、シガツェなどの二十ヶ所ほどの古寺や宮殿について報告している。このなかで、それぞれの古事、歴史から、チベット仏教との関係、過去訪れたことのある日本人や外国人、そして現在の状況などについて、くわしく述べられている。とくに文化大革命前と現在とを比較しているが、文革によって破壊された文化遺産は世界的な損失であったことがしみじみとわかる。つい三十年ほど前に、千年以上〜数世紀にわたって栄えてきたチベット文化の歴史的遺産が、文革のため瞬時に破壊されたとあっては、文革の否定だけではなく、憤怒と裴哀の感をおぼえる。失われたものは、いくら修復や再建しても、過去のものに戻りはしない。

青海湖付近では、倒淌河の黒城と、青海湖西方の伏俟城（フースイ）を実測している。伏俟城は、青海湖を中心に三一七年に建国し、吐蕃と戦って六六三年に滅亡した吐谷渾（トヨク）の古城とされている。鉄卜加草原といっても、茫漠とした砂原のなかの古城であり、わたしたちも訪れた。わずかに残された外壁の土塁と、内壁の城壁に一千年以上も前の往古がしのばれる。とくに四世紀から九世紀にかけて、青海湖を含めて中央アジアを舞台にした、北周、隋、吐谷渾、白蘭、多弥、唐、吐蕃、羌などの諸部族や王朝の攻防、外交にまつわる栄枯盛衰は、まさに歴史のドラマとして興味がつきない。

青海省の都蘭では、発掘中の王墓を見学している。これは、李連絡官などの好意と努力によって見学できたようであるが、同行のプロカメラマンが撮影禁止の掟を破ったためトラブルがおこる。中国人は仁義を重んじるから、わたしたちもとくに注意せねばならないと思う。カメラマンは陳謝につとめたが、傷ついた心の問題は複雑で、いちど割れたコップを元に戻すことはできなかった。

ラサ南方のヤルルン谷には、古代チベット王国（吐蕃）の古墳群、すなわち王墓が十座残っている。吐蕃王家はソンツェン・ガンポ（五八一〜六四九年）からダルマ・ウィドゥムテン（八〇九〜八四二年）まで十名の王がいたとされている（山口瑞鳳著『チベット』上・下　東京大学出版会　一九八八年）。これらの各王と王墓との関係について、著者独自の推考によって、初代から六代までの王墓を推定している。

著者は一九二五年生で高齢である。そのため著者自身も高山病で苦しむが、それ以上に岳友山縣登氏の高山病による死亡と鳥葬などで心を痛めている。それらの悪条件を乗りこえて、フィールド・ワーカーとしての調査と責任を全うしているように思われる。

著者は、本書を「自由で奔放な著作」としている。なるほど、かなり思いきった遠慮のない感想や批判的な意見も書かれている。しかし、熟読すればわかるように、また著者がいうように、「対立は対立、主張すべきことは主張しあい、友情は友情のつきあいとして、互いに理解してこそ真の友好が生まれる」という考えを最初から最後まで通している。

なお、人文班に同行した岩垂弘記者は、『青海・チベットの旅』

(連合出版　一九八七年)を公表している。わたしたちは、『遥かなる揚子江源流、青蔵高原学術登山隊記録』(日本放送出版協会　一九八七年)を、また松原正毅副隊長は『青蔵紀行　一九八八』(中央公論社)を出版している。これらをあわせて読むと、青蔵高原の自然と人文に対しての理解がますます深まるであろう。

(松本徰夫)

山田圭一(写真)/佐貫亦男・杉本誠(文)
『空撮・世界の名峰　山田圭一作品集』

白水社　一九八七年一二月刊　B5変型判
一五三ページ　定価四八〇〇円

空に舞う登山家のカメラ・アイがとらえた華麗な高峰群像

ヒマラヤ、アルプス、アフリカ、北米、南米の五つの地域にわたって名だたる高峰群を一冊の本で観望できるとは、なんと嬉しいことだろう。これまで私たちは高峰に登った人たちの写真を数多く目にして、そのたびに山の大きさに驚嘆したものだが、山田氏の撮った写真はなおいっそう高くて深くて広い山岳の様相をこれでもかこれでもかといったふうに見せつける。山々に刻まれたフォルムの、なんという複雑さ、なんという多様さ!

飛行機から撮られた写真は今にはじまったことではない。でも、山を単純に上から見下すのでなしに、横から撮ろうとする姿勢、山頂や稜線の高さをひどく超えない高度から撮ろうとする一貫した態度が嬉しい。たとえ空中に舞ってはいても、この撮影者は登山する人に許された高度を逸脱しない。折にふれて登山隊のたどったルートについての記述がそえられて、登攀者たちの労苦をしのばせることも忘れない。登山記録の読者には有難い参考資料になる。

もしも、自分の足を使って登るのでなければ登山家ではない、といった旧式な定義に凝り固まっていたのでは、山田氏の写真集はたんなる山好きの写真家の作品集と呼ばれるにとどまることになるだろう。しかし、自然界の造形美を追求するだけの審美家の目ではこの写真集は生まれるはずがなかった。登山と呼ばれる行為の体験者ならではの視角を本書の写真は明らかに示している。登山家による写真集の名に立派にあたいするものであることは、本書の山岳写真が如実に証明する。

本書をはじめて手にした時、私はこれがなぜ「作品集」と銘打たれているのだろうか、と不思議に感じた。「写真集」ではないか。操縦者の飛行技術と、高度に発達した写真技術とに支えられた、いわば技術の産物であって、作品集と呼ぶのは妥当なのか。そんな疑問が私の頭に去来した。実際、本書にそえられた撮影者自身の文章は、いかにも技術者らしくもっぱら空中での撮影の技術的困難さを語るものであって、芸術やら情緒やらに立ち入るものではない。

けれども、二度三度と本書を見開くうちに、私は自分の疑問を次のような解釈によって解消しはじめた。私の推理するかぎりでは、撮影者は本当の苦心の部分を語ってはいない。その慎しみ深さが私を感動に誘った。つまり、関係官庁との交渉と認可の獲得、パイロ

ットに対する説得と誘導、そして好天を待つ時間の辛抱、そういったことを撮影者はつつましく黙して語らない。そうした避けて通れない面倒なプロセスを含めて考えるにつけ、得られた写真はまさしく作品集の名にふさわしいものとなる。

『鳥の目で見たアルプス』と題された大判の写真集が私の手許にある。一九六七年に刊行されたヨーロッパ・アルプスの空中写真集は、この種の山岳写真集の、本格的なものの最初の一つではなかったかと思う。この本は、極度に高い所から見下すのでなしに、山肌にそって舞う鳥の視点から撮られた一四〇点ほどのモノクロ写真を収めている。視点の選び方という点では『空撮・世界の名峰』の先輩格と呼んでよい。ただの空中からの山岳写真集といえばそれまでだが、『鳥の目で見たアルプス』は、スイス連邦軍事部、オーストリア連邦国防省、西ドイツ・シュワーベン州政府の認可を受けなければ完成できない写真集だった。

なにも山田氏の写真集の場合にもその種の手続きが必要であったなどと推測しているわけではない。二十年ほどものちの今日では、種々の条件がかなり異なっているはずだからだ。とはいえ、飛行機をチャーターしてパイロットにルートと高度を指示すればあとはシャッターを押すだけ、というほど単純なことではよもやあるまい。ましてや特定の一地域だけでなしに、たがいに遠く離れた高山地帯の空中を飛ぶのは、一時の気紛れでなしうるわざではない。科学技術を専攻する登山家という撮影者が並々でない執念を、この写真集で結実させた。結果的にそれは、情熱が作り出したもの、つまり作品集ということになる。

大森弘一郎氏の日本アルプスの空中写真集の存在を過小に評価するのは私の好むところではないから、私は『空撮・世界の名峰』を画期的な山岳写真集などとほめそやすことはしたくない。本書の撮影者ばかりでなく、友情にみちた文章を本書に寄せている佐貫・杉本の両氏も、その種のレッテルが本書に貼られることを望んではいないだろう。

巻末には撮影に利用した飛行機の名称が挙げられている。そればかりか、控え目なサイズではあるけれども、山岳写真集のそこここに小さく軽い単葉機の写真が載せられている。ただ一つ、トライデントが営業路線機の窓から遠望した中国山岳の写真にそえられて異彩を放っている。それ以外は、いずれも、けなげに飛んでくれて有難うという思いをこめた小型機の写真ばかり。山への愛情とひとしい愛情を小型機に注いだことの証明写真にほかならない。こうして本書は、山岳写真集であるばかりか、山と飛行機と人とのかかわりをものがたるものともなっている。

一口に登山家もしくは山岳愛好家と言っても、山とのかかわり方には人それぞれ、いろいろある。さりげなく収められた小型機のスナップは、本書の作者の山とのかかわり方、それも他人には容易にゆずりわたせない独自のかかわり方を示していて、私は思わず微笑しないではいられなかった。こんな思いを抱いてふたたび本書をめくって、私はあらためて山と呼ばれるものの多彩さと奥深さに感じ入る。

（宮下啓三）

岡澤祐吉

『スイス山案内人の手帳より』

ベースボール・マガジン社　一九八七年一〇月刊　A5判　定価二二〇〇円

ロマンチシズムを胸に古きよき時代のアルプスを登った日本人の動向を知る貴重な文献

この本の著者岡澤氏は一九七八年の六月、スイスのグリンデルワルトに名ガイドのサムエル・ブラヴァント氏を訪ね、彼が大切に所持していた山案内人手帳を見せてもらう機会を持った。その手帳にはブラヴァントが一九二〇年から山に案内した日本人登山者の手によって記された山行と、その感想文がぎっしりつまっていた。

これを読んだときの岡澤氏の驚きとよろこびは容易に推察できるが、幸いなことにその山案内人手帳の中の日本人登山者と関係のあるページをカメラにおさめておくことを思いついた。

これらの写真は、まず会報「山」に、「ブラヴァント氏の山案内人手帳」と題して、解説とともに発表された。ここ二十数年間アルプス登山に打ちこんできたわたしは、今世紀前半、日本人登山者がアルプスのどのようなピークを、そのどのようなルートから登ったのかということに以前から大きな関心を寄せていたが、自分で詳細に調べるようなことはしなかった。それだけに八回にわたったこの連載を読むのは非常な楽しみだった。

岡澤氏の今回の著書は、このときの原稿を元にして執筆されたものだが、発行までに十年近くが費やされている。グリンデルワルトとツェルマットをベースに活躍した十数名の昔のガイドたちの手帳を丹念に調査するのに要した歳月である。それだけに内容はきわめて正確で、一九二〇年から一九四五年までの日本人登山者のアルプスでの動向を知ることのできる貴重な文献で、長年にわたった著者の地道な研究調査の成果である。

著者もそのあとがきで書いているように、この本に集められた以外のスイス山案内人手帳に日本人の記録があることはたしかだろうし、ガイド・レス登山もあったろうから、この本に発表されているのが今世紀前半、日本人によってなされたアルプス登山の記録のすべてではないのも事実だが、このことがこの本の価値を下げるものでは毛頭ない。貴重な基礎文献として残るものだ。

内容を見ると、ひとつの特徴と、いくつかのよろこばしい事実を知ることができる。特徴は、現在の日本人のクライマーの登攀対象の九十パーセントがフランスのモン・ブラン山群に集中しているのとは逆に、当時登られたピークの大半はスイスのベルナー・オーバーラントとワリスに属していることだ。案内したガイドたちがすべてグリンデルワルトかツェルマットの出身だったから、これも当然のことだろう。

よろこばしい事実の第一は秩父宮殿下が一九二六年の夏に天候に恵まれた実にすばらしい登山シーズンを過され、スイスの山々を十峰以上登られていることだ。殿下はフリッツ・ストイリの手帳に自らの手で長い感想文を寄せられているが、グリンデルワルトを去る

前に、ふたたび訪れる日の来ることを期待して、

「アイガーの峯の白雪よ、永遠に清かれ、

グリンデルワルトの人々よ常に変わらない心でいてくれ。僕は故郷に帰る思いで来るだろう

雍仁」

と書かれておられる。殿下のアルプス再訪は実現しなかったが、アルプス登山は山のお好きな浩宮さまに継承していただきたいものだ。

第二のよろこばしいことは、槇有恒氏によるアイガー東山稜の岩のルート、田口一郎、二郎兄弟によるシュレックホルン北東壁の氷雪ルートの初登攀といった立派な記録が樹立されていること。

第三のよろこびは各務良幸氏がすでに時代を先取りして、現在行なわれているような継続登攀のスピード・クライムを実行していたことだ。とくにダン・デランスからマッターホルンの縦走を一日で仕上げていることは、ダン・デランスの二キロにわたる長い困難な東稜が下降に含まれているから、五十年後の今日でもビッグ・クライムだ。ゴットフリート・ペレンと各務氏のペアは、次にモン・ブラン山群に転身し、グレポンとドリュで岩登りのトレーニングを重ねてから、モン・モディの北東の肩に抜け出る南西側稜を登る新ルートを十七時間で開拓している。

ツェルマット出身のペレンが、当時のワリスにまだいくらでも求められた新ルートの開拓に各務氏を同行しないで、当時は日本人登山者がめったに登らなかったモン・ブラン山群になぜ遠出したのか、わたしには大変興味あることだが、この初登が今世紀前半、モン・ブラン山群でなされた日本人による唯一のビッグ・クライムになった。今世紀後半になると、日本の若いクライマーたちの目標はスイスの山々からもっぱらモン・ブラン山群に移り、数多くの初登攀が樹立された。

最後に本書の読後感を記すと、六年ほど前の会報「山」に田口二郎氏が当時を回想して、「山と私達との間には聖なる心の距離がいつも保たれていた。この聖なる距離こそが考えてみると、私達のロマンチシズムの源泉であったように思われる」と書いておられたが、まさにその通りで、こうしたロマンチシズムは現代のスピードとテクニックだけを競い合うような登山、また頂上に登ることを目標にするよりも、ひとつのルートの面白い、むずかしい箇所だけを登り、あとはアプザイレンで下降してしまうような、頭も尻尾もないようなクライムからは次第に消え去ってしまうような感じが強い。

いまから五十年ほど前にアルプスを登っていた人たちは、アルプスの古きよき時代、アルプスのベル・エポックを体験した幸せな人たちだったということが言えるだろう。

（近藤　等）

上田茂春

『日本の女流登山家　人と本』

未来工房　昭和六十二年八月刊　豆本　写真十六ページ　並装版定価一二〇〇円　特装版定価三五〇〇円

初期の女流登山家の、単なる史実や記録の羅列ではなく、彼女たちのありし日を彷彿させる温もりのある一書。

ファミコン・ソフトの半分ほどしかない、この小さなおしゃれな豆本が、おそらく日本の初期の女流登山家の姿を書いた、はじめての〝単行本〟ではないでしょうか。

高校で教鞭をとり、山書の収集家でもある著者は、まえがきに「日本の女性登山史などといったあらたまったものでなく、女性登山者（家）が書いた本や記録を、興のおもむくままにとり上げ、とりとめのない山書談義を繰り広げようとするものに過ぎない」と記しています。しかし、明治・大正を通じて女性の書いた山の本は数冊、登山史に女性が登場することは稀な現状で、日本山岳会機関誌「山岳」などに載せられたわずかな記述（殆んど男性による）と書物を往来しながらまとめ上げていく難しさは随所に察せられます。

さて本書は、大正二年、ウェストン夫人の槍ヶ岳登頂に筆を起こし、一、明治・大正時代の女性登山　二、昭和前期における女性登山家の著書　の二部構成になっています。

一部には、明治二十八年、野中千代子の富士登山や、「山岳」第一年第一号に掲載の「女子霧ヶ峰登山記」に代表されるような集団登山が盛んであった状況が述べられ、とくにお茶の水高女有志富士登山隊著『不二にのぼって』から、口絵写真に当時の女学生の登山姿が紹介され興味深いものでした。

二部では、女性初の山岳紀行、昭和三年刊斉藤美子著『山と女』、いよいよ女性登山家の著書登場という書き出しで、同六年刊、黒田正夫・初子著『山之素描』が取り上げられます。初子と姻戚関係にあった黒田（村井）米子の処女作同八年刊『雪　女性とスキー』に及び、二人の著作、造本、山歴などに本文一〇〇ページ中三十八ページを費やし、山書の上での彼女達の重要性が強調されています。

著者がウェストン夫人の颯爽とした登山姿や坊やと間違えられた初子の可愛らしい様子などを、憧憬とも思えるタッチで描いているので、史実や記録にありがちな平板さはなく、心を遊ばせることができました。ただ、昭和九年浅間山スキー行で遭難した三田姉妹の『山に帰へる』を載せるなら、所属するＹＷＣＡ山岳会を創立した中村テルを、『初恋の山』の川森左智子を書くなら、『心に山ありて』の筆者今井喜美子に筆を及ぼしてほしい気がしました。

山崎安治著『新稿日本登山史』、安川茂雄著『近代日本登山史』に登場する女流登山家は数名であり、むしろ、昭和十一年共立社『登山講座』に今井喜美子が、同三十三年山と溪谷社『登山講座』に村井米子が、五十一年成美堂『女性登山教室』に小倉薫子がというように、女性登山家自身が登山史にかかわるページを割いています。

最後に、私ごとで恐縮ですが、いま〝女流登山家人物史〟という方向で、本人や周りの方々から取材中です。「どなたかまとめてくださると有難い。できれば女性の手で」という著者のあとがきに力を得て、寂寞たるルートながら、女性登山史へのホールドを探していきたいと思っています。

女性登山が注目を浴びる昨今でさえ、女性による史実的、記録的著述が極めて少ないという現実を改めて認識させられた一冊でした。

（児玉俊子）

クリス・ボニントン、田口二郎・中村輝子訳

『現代の冒険』（上・下）

岩波書店　一九八七年一二月・一九八八年二月刊　A5変型判　(上)三二三ページ・(下)二八二ページ　定価各二八〇〇円

ラインホルト・メスナー、横川文雄訳

『生きた、還った　8000m峰14座完登』

東京新聞出版局　一九八七年八月刊　A4変型判　二四六ページ　定価六三〇〇円

現代の冒険を実行した人々の行動の意味を伝える、読まれるべき本二つ。

ティルマンはサンドハースト士官学校の講演会での席上、「遠征にはどういう準備が要りますか」との質問に対し、即座に「自分の靴をはいて出かけなさい」と答えたという。ここで紹介する二つの図書に収められた冒険の数々は、まさにティルマンの言葉を実践した先蹤者達の物語である。

まず、クリス・ボニントン『現代の冒険』（上・下）であるが、著者は「冒険とは何か、そして人はなぜ冒険するのか」（原題は"Quest for Adventure"）を追求するため、第二次大戦後になされた各分野での代表的な冒険の記録、すなわち七つの山の記録と三つの極地探検、一件の河下り、六個の海洋探検、そして空、洞窟、宇宙での各一個の冒険をとりあげ、その豊富な経験に裏付けられた目を通して紹介・分析する。取り敢えず本書に収められた山の記録だけをみると、エルゾーグのアンナプルナ、ハントのエベレスト、ティッヒーのチョー・オユー、ボナッティーのドリュ南西ピラー単独登攀、ブールのブロード・ピーク、著者自身のアンナプルナ南壁、そしてメスナーのナンガ・パルバート等である。なお、故植村直己会員が、日本人としてはただ一人、極地探検の項で扱われている。

もとより以上の諸記録はいずれも我々にはお馴染みのものだが、このような形で一度に纏められたものを読むと、それらに始めて接した時への軽いノスタルジーを覚えるとともに、その時は気付かなかった新たな視点があることを知らされる。ボニントンがそのままに体験的な共感をもってこれらの冒険を再構成しているからであろう。その意味でこれは著者自身の山に対する姿勢を表わしたものと

いってよい。

ところで、ボニントンは冒険について「一定期間にわたる旅もしくは持続的な努力であり、個人個人の肉体的な技倆で克服する危険と未知という二つの要素を備えたものである。それに加え、冒険とは個人が自分の意志で選んだ行為であり、そこに含まれる危険は自らに課したもので、自分以外の何者をも脅かしたりしない」(上巻七ページ)としている。だから、本書ではアームストロングの人類初の月着陸も一連の冒険の一つとして扱われているが、ボニントンはこれについて「これら二つの冒険(メスナーのエベレスト単独無酸素登頂とアームストロングの月着陸――評者注)の根底にある考え方において、それほど大きな違いはあるだろうか。人間を月に送りこむことは、冒険がもつあらゆる要素を含んでいる。それは、危険への挑戦をともなった未知の世界への巨大な一歩であり、また、人類が経験したこともない異様な自然美への跳躍であった……テスト・パイロットを職業とするアームストロングが私に飛行体験を語ってくれたときの言葉は岩壁登攀者が語る言葉と非常に似かよっていた。この二つの未知への挑戦は、手段や性格において全く異なるものの、その背後にある本質は驚くほど似かよっている」(下巻二六一~二ページ)として、両者の共通であることを強調するのである。

評者も、率直にいって、山の記録よりもむしろ他の分野でのそれぞれの冒険(家)とそれに対する著者の評価の方に興味をひかれた。我々が求め、それによって生きてきた山での冒険以外のところにあって、しかし基本的には同じ方向を見ている他の分野での冒険と山の経験を通して心を通じあいたいということであろう。「人間という複雑な存在のなかに潜んでいる謎」(下巻二七九ページ)である人間の冒険への追求心をより広く探りたいのである。そこで苦言を一つ。本翻訳にあたって訳者は「その旅の主たる冒険的要素が砂漠の民との複雑な交渉であるため」(下巻二八二ページ)ウィルフレッド・テシガーの「砂漠の空白地帯」を除いたというが、むしろそうであればあるほどボニントンはそこにもう一つの冒険のありかたを見た筈なのだから、それを除くべきではなかったであろう。しかしいずれにせよ、評者は本書によって読書を堪能させられた。本書は読まれるべき図書である。

次にメスナー『生きた・還った』であるが、これは一九八六年一〇月ローツェの成功によって八〇〇〇㍍峰一四座の全てに登頂した直後に、いわばその総決算として書かれたそれまでの記録の集大成であり、個々の登山記録というよりも一四座完登記念写真集ともいうべき趣がつよいものである。本書では一座ごとにその登攀史や彼の登頂ルートが図形的に示され、次いで彼自身の登頂記録が簡略に述べられている。したがってメスナーの一四座登頂等についてまとめて知るには便利だが、本書からメスナーの全貌を推し量ることはできない。そのためには彼がそれまでに書いた個々の記録を読むほかない。

だが本書でもっとも興味深いのは、メスナーが一四座完登を果たしたあと何を感じているかを知ることができることであろう。彼は本書の冒頭で次のようにいう。「四年前から思いついたことがすんでしまったので満足していた。また他の人々が、ぼくを利用して宣

伝していた〝競争〟で最初の男となれたこともうれしかった。やっと、こんなことも終わった。そして明日から八〇〇〇㍍峰後の時代がいよいよ始まるのだ。自分の行く手に全世界が広がっているのだ。なにか心が軽くなったような、自由になったような思いだった」（一一ページ）と。まさに「一六年間ヒマラヤに出かけたということは、一六年間にわたるトレーニングと辛苦を意味する。生き抜くということを保証してくれる危険の戒めを守るためには、気力の集中が必要である。一六年の長きにわたり、何度も敗退すること、そして、最初からやり直すこと」を続け、そして「自分が生き抜いてきたことを誇りにおもっている」（以上一四ページ）彼の実感であろう。ちなみに本書の原題は"Überlebt"（生き抜く）である。

だが、メスナーの偉大さは「偶然の所産」（一二ページ）にすぎない八〇〇〇㍍峰のすべてに漫然と登頂したことにあるのではなく、それぞれの登攀に「その都度新しい講想を実現したい」（一四ページ）という「自己を〝発見〟するためには自分を限界状況に直面させる必要」を厭わず、「それぞれの状況を自分の力で克服して、なんとか危地を脱して安全圏に達し、それらの経験から以前よりさらに深い自己発見に導かれている」（以上ボニントン・前掲書（下巻）二六三ページ）ことであろう。たとえばペーター・ハーベラーと共になしとげたエベレストの無酸素初登頂の二年後、彼は再びチョモランマ（エベレスト）の単独無酸素初登頂に成功しているが、それは彼が今まで「チベットを知らなかった」からであり、そして何よりも「登山をもう一歩先まで進められるのではないか」（以上七六ページ）ということに支えられたものであったのである。

ボニントンは「ゴール志向型の冒険を行う冒険家たちは……未知のことを達成する際、例外なく二番目でなく一番目を求める」（前掲書（下巻）二六九ページ）といっているが、本書はメスナーがその一つの典型であることを理解するためには有意義なものであろう。

（三辺夏雄）

『上昇するヒマラヤ』

木崎甲子郎 編著

築地書館　一九八八年三月刊　二一四ページ
定価一二、五〇〇円

日本の地球科学のヒマラヤでの大展開と進歩を教えてくれる本。

本書は、ヒマラヤ山脈を、その隆起上昇を中心にして、山脈形成のあり方を、地球科学の各分野の科学者たちが多角的に調査研究したプロジェクトの報告書である。

読めば誰でもわかるといった啓蒙書、解説書のたぐいではない。地球物理、地質、地形、測量などについて、それぞれの専門家が、これまでの世界の科学者たちのヒマラヤに関する調査研究を総括しながら、自分達の実施した調査研究について報告し、その新知見をもとにヒマラヤの山脈形成史を時間的な問題をふくめて明らかにしようとした本である。

日本の、ヒマラヤの地球科学の分野に関する調査研究は、一九五五年のマナスル偵察隊に参加した北大の橋本誠二に始まる。以来、北大の研究者達は、一九六二年の安間荘隊によるアルン川〜ドゥド・コーシ流域から、一九七六〜一九七七年の在田一則隊による西ネパール、ララ湖地区までという具合に、広汎で継続的な研究をつづけてきた。

これらの成果は、それぞれの遠征隊報告書や学会誌等に発表されたほか、一九七三年、"Geology of the Nepal Himalayas" という約三〇〇㌻の英文学術書にまとめられ、北大ヒマラヤ委員会より刊行されている。

琉球大学の木崎甲子郎教授は、北大関係者のヒマラヤ研究グループの中心的な存在でもあり、学際的に関心の高まりを見せてきたヒマラヤ上昇の数千万年にわたるプロセスの全体像をあきらかにしようというテーマでプロジェクト・チームを作り、文部省の科学研究費の海外学術調査の補助金を得て調査をスタートさせた。

第一回の調査が一九八〇年、第二回が一九八二年、第三回が一九八四年であった。そして完了しない調査を、一九八五年に自己資金のみで実施、完了のはこびとなった。

この研究の成果のうち、一九八〇年度と一九八二年度調査のものについては、すでにネパールの地質学会誌の特別号として英文で印刷刊行され、一九八四年度調査のものについてはメンバーが所属の学会において発表、学術雑誌に論文や報告が載せられている。

しかし、この画期的なプロジェクト研究によるいろいろな新しい事実の発見について、また、現在ヒマラヤの地球科学的研究がどこまで進んでいるかということを、今後そうした問題に取り組みたいと考えている若い人や、関心を持っておられる一般の方々に、この際まとめて報告しておくのが自分達の義務であると考えた木崎教授を中心とするグループの意向が、この本となって結実したのである。

以下、この本の内容を少しくだいて紹介してみよう。

ヒマラヤ山脈は世界各地の他の山脈にくらべてずば抜けて高い山脈である。ヒマラヤ抜きだと、世界最高峰は南米アンデス山脈のアコンカグア峰（六九六〇㍍）になるが、ヒマラヤには、これより高い山や峰が、名前が知られているものだけでも二一峰ある。最高峰のエベレスト山（中国側でチョモランマ峰、ネパール側ではサガルマータが公式名称）は、前記のアコンカグア峰より二〇〇〇㍍近くも高い。そしてその高い山頂部を造っているのは、浅い海底でできた砂や泥の地層であり、日本隊の初登頂だったマナスル（八一六三㍍）の頂きは、同じような海でできた地層と、それを貫く花崗岩との境界部になっているのが、登頂の写真でもはっきり観察できた。

海底に積った土砂からできた岩石が山頂にあると、昔そこが海だったと短絡して考えられがちだが、「そこ」という水平、垂直の位置が海だったということには問題がある。八八〇〇㍍の山頂に海があれば、地球水没である。そんな大量の水は地球上にない。

海でできた地層や地下深いところでできた岩石が現在山頂にみられるということは、大陸の移動、隆起上昇、侵食、断層活動、海進海退、傾動、火山活動など、内的な地殻の活動と風化、侵食、運

搬、沈積など外的な作用がからみあって働き、変動をくり返したあげく、また、変動の途中として、現在そこが山頂になっているということなのである。

この『上昇するヒマラヤ』は、ヒマラヤ山脈が現在の形をとるに至ったその変動のいきさつを、隆起上昇を中心テーマに、地質、地球物理、地理など地球科学の各分野にわたる研究者が、編者の木崎甲子郎教授をチームリーダーとして、一九八〇〜一九八五年に計四回の現地調査を行ない研究した成果をまとめた学術報告書である。

本書の中身は、リーダの木崎が、ヒマラヤの地学研究の概説と自分達の目的意識を第一章に書き、続いて酒井治孝をはじめとするメンバーが第二章〜第一三章の各論を分担執筆し、最後の一四章で再び木崎が、各論の研究者たちのめざましい成果を紹介しながら、世界各国の研究者たちの研究と合わせて総合化し、時間の軸をとらえながらのヒマラヤ山脈形成史をわかりやすい通史の形でまとめたものとなっている。

このヒマラヤ山脈形成史のために、木崎教授を中心とするチームがヒマラヤで調査し研究した分野は、地球物理学、一般地質学、構造地質学、岩石学、堆積学、古地磁気学、地形学、測地学など多岐にわたるものである。それぞれがどんな調査研究を行ない、どんな結果が得られたか、それがヒマラヤ山脈の隆起上昇の時期と量にどうかかわっているかを述べたのが第二章から第一三章までである。

ヒマラヤ山脈の地球上ここだけという異常な高さ、チベット高原、ヒマラヤ一帯に見られる他地域の二倍という地殻の厚さは、ユーラシア大陸プレートにインド亜大陸プレートが衝突し、もぐりこんだためではないかと考えられてきた。ヒマラヤ一帯に多い地震の震源地の地下での分布状況はそれと矛盾しない。ヒマラヤの南麓では浅い震源地が、山脈に近づくにつれてだんだん深く潜り込んでいるのである。

木崎プロジェクトチームのヒマラヤ山脈形成史も、このプレートテクトニクスを基盤にして構築されている。しかし、五年間の調査研究で、この本の内容ができあがっているのではなく、インド測量局の測量やら、インド、中国、ネパールなどこの山脈にかかわる各国、また、欧米、日本の科学者たちのこれまでの地球科学的な研究すべてが、ソースデータになっていて、その上に新たな前進を加え、より具体的で、すっきりした山脈形成史を提示したあたりに功績があるのである。

その、ヒマラヤ山脈形成史を略述しよう。

古生代二畳紀、約二億年前、地球上には、超大陸パンゲアがあった。いまの六大陸全部がくっついた状態のものだ。それが、中生代三畳紀（約一億八千万年前）には、北米大陸とグリーンランド、それにユーラシア大陸が一緒になったままの状態のローラシア大陸と、その他の大陸がまとまったゴンドワナ大陸の二つが存在するようになっていた。この二つの大陸の間にあった海がテチス海である。この名は、ギリシャ神話に出てくる海の女神、テチス（トロイ戦争で活躍するアキレスの母）からとったものだ。ゴンドワナ大陸の名もインド高原にあった古代王国の名からとっている。このゴンドワナ大陸は白亜紀ごろ（約一億三千万年前）、分裂して、南米大陸、アフリカ大陸、マタガスカル島、インド亜大陸、オーストラリ

ア大陸、南極大陸となり、マントル対流にのって移動をはじめた。テチス海は、パンゲア超大陸の時代もユーラシア部分とアフリカ＝インド＝オーストラリア部分の間に湾入する海であったようだ。

やがて、北上するインド亜大陸は、ユーラシア大陸南部に衝突し、テチス海に堆積した地層がヒマラヤ山脈の最高所にまで持ち上げられ、海は消滅してしまうことになる。

ここでヒマラヤの地勢について概略を述べておこう。

ヒマラヤ山脈は、東西二五〇〇㌔、南に向ってふくらんだ弧状の山脈だが、北側に標高四〇〇〇㍍をこえるチベット大高原があり、その大高原から標高二〇〇㍍ばかりのヒンドスタン大平原（ガンジス川の平原）に向う南斜面をやや下ったあたりについたてのようにそびえる高い山脈で、大気の対流圏をわけへだてているのである。

このチベット高原南斜面を流下する川は、ヒマラヤのついたてをところどころで断ち切って、横谷を作ってヒンドスタン平原に向って流れ下る。ヒマラヤ山脈の最高部稜線は分水界ではなく、もっと北側の山脈が分水界になっているのである。その分水界から北へ流れる水は、すぐ北側で、東か西へ向きを変える。境になっているのはカイラス山のあたりで、西へ向くインダス川、東へ流れるヤルツァンポー川に注ぐからだ。それらの川は、それぞれヒマラヤ山脈西端のナンガ・パルバット、東端のナムチャバルワの山をまわり込んで南に向きをかえて、インダス川はアラビヤ海へ、ヤルツァンポーは、名前をブラーマプートラと変えてベンガル湾へ注ぐ。

ヒマラヤ山脈最高部をふくむ六〇〇〇～八〇〇〇㍍の山地は、高ヒマラヤ帯と呼ばれ、テチス堆積物やその下位にあるヒマラヤ片麻岩でできあがっている。その南側には、浅い角度の衝上断層帯があって、ＭＣＴ（主中央衝上断層）と呼ばれている。そのあたりから山地の標高も三〇〇〇㍍以下と低くなって、低ヒマラヤ帯と呼ばれる。このあたりは山や尾根の高さが二五〇〇～一〇〇〇㍍にそろっていて、ミッドランドとも呼ばれている。この山地は、変成を受けた堆積岩類でできており、南はずれには、東西にのびる三〇〇〇㍍級のマハバラート山脈がある。高ヒマラヤ帯を横谷として直角に突き抜けてきた川も、ここでは、その山脈にさえぎられて、東へ西へと縦谷になって走る。この山脈の南側には、ＭＢＴ（主境界衝上断層）と呼ばれる断層があり、そこから南は、もう一段低い亜ヒマラヤと言われるシワリク層群から成る一〇〇〇㍍以下の丘陵帯になる。この丘陵がヒンドスタン平原と接するところも、平原の沖積層との間にＨＦＴ（ヒマラヤ前縁衝上断層）で区切られている。

さあ、話をふたたびもとへ戻そう。

これまで、インド亜大陸のプレートとして動いてきたゴンドワナ大陸の岩石は、前にのべてきたＭＣＴの南側にあるはずだというふうに思われてきたが、きちんと確認されていなかった。それをチームの酒井が確認し、テチス海堆積物やゴンドワナ起源の岩石の分布がよりくわしく知られることになった。しかし、中国＝フランス隊のチベット調査により、テチス海の深海部の名残りであるインダス＝ツァンポ縫合帯の北側にもゴンドワナ起源の岩石が古いテチス堆積物の間に分布していて、チベット高原は、インド亜大陸に先がけて衝突したブロックがいくつも折り重なってできていることがわかりかけてきた。揚子江、怒江などはそのブロック間の縫合線から

流れ出す河川である。
テチス堆積物は古生代のカンブリア紀から新生代古第三紀始新世(約五千万年前)までの地層が厚くたまっているもので、浅い海の底で堆積したことが化石からわかる。
約四〇〇〇万年前ごろの漸新世には、既にラサブロックがくっついていたユーラシア大陸に、ネオテチス海を消滅させてインド亜大陸のプレートが衝突、三〇〇〇万年前ごろ、トランスヒマラヤが隆起、約二〇〇〇年前になるヒマラヤの高ヒマラヤ帯が隆起を始めた。その証拠は、北から南へ流下して堆積したドゥムリ層である。このあたりでMCT上をすべって、カトマンズ盆地、カシミール盆地などのナップも形成された。
メンバーの林は、地殻を粘性流体とした、有限要素法による数値シュミレーションによって、ユーラシアプレートとインドプレートの衝突を数値シュミレーションで検討した。その結果、チベット高原は出現し、シワリーク層の堆積する前縁盆地も生れることがわかったが、ヒマラヤ山脈は出現しなかった。比重の小さいダイアピルの存在を設定しても、まわりから、一〇〇〇㍍ほど上昇するだけである。
MCT附近で、片麻岩の縞模様の中に白い長石の眼玉のような大きい結晶を持つ、眼球片麻岩が見られる。高ヒマラヤ帯では、巨大なもの、マハバラートでは切れ長の眼のものが見られるが、メンバーの加納は、これらは、片麻岩帯が厚いところの中央はゆっくり冷えるので大眼玉が、薄いところでは早く冷えるので切れ長の眼になることを発見、プレカンブリアの古い片麻岩が新第三紀のMCTの活動に巻き込まれて再結晶し、眼球片麻岩を作りながら断層帯に入りこみ、ブロック運動の潤滑剤となって隆起を助けたと考えている。
プレートの衝突後も続く押し合いは、時間を置いて、MCTの衝上断層の活動の次に、もっと南へ飛び移って、MBTの活動となった。長い間ヒマラヤ各地の調査を続けてきたメンバーの在田は、一五〇〇万年前ごろ、MCTが活動し、高ヒマラヤ帯が隆起、一〇〇万年前ごろMBTが活動してマハバラート山脈が隆起したと考えている。シワリク層群は、一三〇〇万年前ごろから堆積をはじめた。最も下部には細かい砂やシルトの層、鮮新世の一〇〇〇万年前ごろになると黒雲母のまじったゴマシオ砂岩の層が現れる。これは、ヒマラヤ片麻岩や高ヒマラヤ帯の花崗岩が風化侵食されて運ばれてきたためで、ヒマラヤの隆起成長を裏づけるものである。こうした、シワリク丘陵(ネパールではチュリア丘陵)の堆積物の調査は、徳岡、高安、吉田、久富によって実施された。
彼等は、ナラヤニ川右岸の一帯で綿密な調査によって、シワリク層群の全容と、古地磁気による編年や緯度の変化を知り、淡水貝化石により、ヒマラヤの成長の様子、山間盆地の堆積物との関連などから、ヒマラヤ山脈全体のでき方の後半部を押えることができた。
動物化石の種類の変化と山脈隆起の時代との関係から、鮮新世(約五〇〇万年前)あたりにヒマラヤ山脈が南と北の動物群の交流を止めるほどに成長していたことがわかり、高安の調査した淡水産の貝類は、三五〇万年前から多様化している。約三〇〇万年前になると、ミッドランドの山や尾根のほぼ平坦な侵食面ができあがっ

て、こんどは隆起を始め、シワリクに珪岩質の礫を供給するようになる。古地磁気を調べた吉田の研究により、この時期に山脈が南にぼう張しながら大規模に上昇したことがわかった。

シワリク層の上位の新しい礫は、丘陵化したシワリク層そのものからの礫が入っている。

第四紀に入る一〇〇万年前ぐらいになると、マハバラート山脈の隆起が激しくなり、ヒマラヤの高い部分を横谷で抜けてきた河川は、マハバラートの北側を山脈に沿った縦谷として流れ、低い地点まで行ってようやく南下するような流路に変わった。マハバラート隆起以前のまっすぐ南下していた谷の名残りや、その下流の扇状地の地形や地層が、マハバラート山脈上に空谷として、あるいは礫層として残っている。調査した目崎によると、この空谷の標高と山脈形成から現在までの時間から、年平均二・四ミリの隆起上昇があったという。

こうした隆起により、カトマンズやカシミールには、湖沼が出現した。シワリク層の粗粒堆積物もこのころのものであり、更新世中期の七〇万年前ごろになると、ヒマラヤ山脈はほんとうに高くなって、モンスーンもさえぎられるようになってしまった。

在田は、両プレートの衝突の圧力は、縫合線での押し合いとズレが南に及んで、MCTの衝上断層を引き起し、押す力と抵抗力の合力から隆起力を生じて山脈形成につながった、と考えている。この力はさらに時間をおいて南方に飛び移り、MBTの発生とマハバラートの隆起を起こし、その次には、HFTの発生とシワリク丘陵の隆起をもたらしたというわけである。

地形学的立場から調査研究にあたった岩田は、河成段丘面の現河床との比高から、MCTの活動が終ってからも現在もふくめて高ヒマラヤ帯の隆起上昇が激しく継続中であり、曲隆的な運動であろうとしている。河道や河床の面から調査した目崎も、河道の縦断面に見られる遷急点が、MBTやHFTで生じたものまで、隆起上昇の激しいMCTから高ヒマラヤ帯部まで移動して集まっていることから、このあたりに隆起上昇の中心があることを指摘している。

中田は、二〇年ほど前のカルカッタ大学留学時以来、ヒマラヤ山麓部の活断層に注目し、調査してきているが、空中写真の判読と精力的な広範囲の現地調査から、ヒマラヤの活断層のほとんどが、北落ちで山脈の隆起とは結びついていないこと、ヒマラヤ内部では、北西—南東方向の右横ズレ、チベットでは北東—南西方向の左横ズレが多く、ヒマラヤ山脈の南北圧縮による東西への伸長を現わし、断層による上昇は前縁丘陵で見られるが、高ヒマラヤ帯は、現在は断層によらない上昇だろうと考えている。

大村、横山、久保の三人は、その現在進行中の隆起上昇を精密な光波による距離測量と直接水準測量を、MCTをまたぐ小範囲で実施した。結果は、高ヒマラヤ側が年間六ミリの隆起上昇であった。

目崎は、ネパール河川での浮遊砂の観測値から、日本での経験法則を用いて推定し、ヒマラヤの山地削剝量、年間三～四ミリを求めた。さらにこの数値に対応する山地の隆起量を年間約一〇ミリと推定した。

城崎は、これらを総括して、第十四章でまとめている。ヒマラヤは二〇〇〇万年前からゆっくり隆起をはじめ、それが北から南へと

波及していった。山脈形成の初期は衝上断層にともなう隆起で、その断層は、南方へジャンプしながら、インダス＝ツァンポ縫合帯→MCT→MBT→HFTと移動した。その後高ヒマラヤ帯は曲隆運動による隆起を現在も続けているのである。

わたしは、地図を見るたびに、あるいは地図を描くたびに、中央アジアの平面形が気になってしかたがない。ヒマラヤ山脈の南への弧の形成に関係のありそうな動きが古地磁気の調査から浮かび出したが、新疆ウイグル、青海、西蔵の範囲の地形の平面形は、タクラマカン盆地、ツァイダム盆地、西蔵高原、みなまん中が南北にふくらんで広く、東西が細くなる「まなこ型」の平面形をしているのである。この形にはきっと「いわくいんねん」があるにちがいない。チトワンの山間盆地については記述があったが、東西の関連山脈までふくめこうした大規模な地勢の形成についても、またインダス・ツァンポ川の河川史についても問題にしてぜひ解決して欲しいものである。また、隆起の問題に関連しては、スカンジナビア半島の解氷による隆起の継続のようなことが、氷期にチベット高原に氷雪が充満したことを考慮すれば当然起ると考えるべきだが、この本の中ではふれられていないようである。この問題も加えて欲しい。仮説を設定する場合に、ある種のヒラメキがあった方がいいと考えるが、そのためには、ヒマラヤ山脈をとりまく大地勢コンピューターグラフィックスを作って、皆さんで観察されたらどうであろうか。

わたしは、ダージリンの登山学校の博物館の大模型に感動したことがある。いたって大ざっぱな地形模型の展示があるのだが、その大型模型で見ると、ヒマラヤ山脈は、ぶ厚く高いチベット大高原からインド平原に落ち込む大斜面の上側中腹のうすっぺらなついたてであった。チベット高原側から見おろすと、その大斜面のとちゅうにあるついたての横谷のはざまから、はるか下のインド平原が見おろせること、そのはるかなへだたりからチベット高原の高さ質量を、ずしんと感じたのである。

これだけの報告、論文を書かれた方たちなら、きっとそうしたヒントで輝かしい新大論文が誕生するのではなかろうか。

ともかく、大変な労作であると共に、日本の地球科学のヒマラヤでの大展開と進歩を教えてくれるこの本に感謝し、こうしたすばらしい科学者達の多くが日本山岳会のメンバーであることを喜びたい。

なお、メンバーの一人、在田一則氏が、青木書店から『ヒマラヤはなぜ高い』（地球の歴史をさぐる③、一九八八年三月、二〇〇〇円）というわかりやすい解説書を出しているので、専門家以外の方は、まずその本のほうから読まれるといい。

最後に、メンバーの一人であった山中英二君が、一九八三年、二月、南アで亡くなったのは残念であった。わたくしも、飯豊、アキタノノゾミの平の調査では数日間を共に暮した仲間だ。ここに御冥福をお祈りして終りとする。

（五百沢智也）

会報『山』図書紹介一覧

—一九八七年度—

●四月号（五〇二号）

アサヒタウンズ編『高尾山　身近な自然を考える』（朝日ソノラマ社）

●五月号（五〇三号）

日本ネパール協会編『シンポジウム　ネパール（一九八五）』（日本ネパール協会）

児玉　茂著『PERU ANDES '84』（Sea-Gale 発行）

●六月号（五〇四号）

図書紹介なし

●七月号（五〇五号）

G. Weare『Trekking in the Indian Himalaya』（Lonely Planet）

工藤父母道著『ほろびゆくブナの森』（岩波書店）

松方三郎コレクション「浮世絵美人画名品展」カタログ（浮世絵太田記念美術館）

●八月号（五〇六号）

畦倉　実著『水源林の四季—多摩川上流・緑と水のレポート—』（朝日新聞社）

●九月号（五〇七号）

クライミングジャーナル編集部編『穂高岳の岩場』（白山書房）

今井通子著『魔頂〔チョモランマ〕』（朝日新聞社）

玉村和彦著『聖山巡礼』（山と渓谷社）

佐古清隆著『ひとりぼっちの山歩き』（山と渓谷社）

岩橋崇至写真集『黒部渓谷』（山と渓谷社）

タウン情報とやま編『とやま山歩き』（C・A・P発行）

上村幹雄・遁所彊二著『続・片雲往来』（非売）

笠原藤七著『川内山とその周辺』（茗渓堂）

「北越雪譜」の英訳本・訳者ローゼ・レッサー　書名『Snow Country Tales』（J・ウエザヒル出版社）

●十月号（五〇八号）

報告書四冊

『氷壁のワンダーランド　福岡大学山岳会ナンガパルバート遠征隊登頂記』

『高みを求めて　HAJ　K2登山報告書』

『K7初登頂　東大スキー山岳部カラコルム学術登山隊一九八四』

『CHIRING　チリン峰・七〇九〇m登攀と遭難の報告』（横浜山岳会）

津田邦宏著『屋久杉が消えた谷』（朝日新聞社）

筑木　力著『山頂へのみち—わが未踏峰探訪の旅—』（ほおずき書籍㈱）

加藤久晴著『尾瀬は病んでいる』（大月書店）

橋本　廣著　画文集『山麓紀行』（能登印刷出版部）

松本徰夫著『火山の一生　地球の歴史をさぐる②』（青木書店）

太田　敬著『守れ權現』（金星堂）

●十一月号（五〇九号）

陳舜臣編集・解説『中国辺境の旅（全八巻）』（白水社）

平野惣吉・山田亀太郎・並木晴政・平野守元述『イワナ・源流の職漁者』（白日社）

小林泰彦著『低山逍遥』（山と渓谷社）

岡田日郎『雲表のわが山々』（東京新聞出版局）

小林碧郎著　句集『雷鳥』（茗渓堂）

●十二月号（五一〇号）

高橋八十八著『雪国の四季と人間と（山村の博物誌）』（白日社）

藤木高嶺著『天葬の国　高原の民』（立風書房）

山田哲郎・横山厚夫著『青空と輝く残雪の山々』（茗渓堂）
宇江敏勝著『木と人間の宇宙（1）——若葉萌えいづる山で』（福音館書店）
松本徰夫・松原正毅編著『遥かなる揚子江源流』（日本放送出版協会）
工藤茂美著『五能線沿線と白神山地の植物』（秋田魁新報社）
山里寿男画集『春ふたたび』（私家版）
沢野ひとし対談集『僕はやっぱり山と人が好き』（山と渓谷社）
本山賢司画文集『海流にのって——僕と九つの島』（山と渓谷社）

●一月号（五一一号）

木下是雄著『物理・山・ことば』（新樹社）
高木泰夫著『奥美濃——ヤブ山登山のすすめ』（ナカニシヤ出版）
R・メスナー著　横川文雄訳『生きた、還った』（東京新聞出版局）
深田クラブ著『日本二〇〇名山』（昭文社）
ダヴィッド・パイ著　杉田　博訳『マロリー追想』（日本山書の会）
久米　準著『山の心・道しるべ』（日本教育新聞社）

●二月号（五一二号）

宇江敏勝著『木と人間の宇宙（Ⅱ）—青春を川に浮かべる』（福音館書店）岡澤祐吉著『スイス—山案内人の手帳より』（ベースボール・マガジン社）西澤憲一郎著『ネパールの社会構造と政治経済』（勁草書房）

●三月号（五一三号）

梅木秀徳著『大分の山—大分県主要山岳丘陵一覧』（私家版）
栃木県山岳連盟編『栃木の沢』（栃木県山岳連盟）

京都における近代アルピニズムの曙

桑原武夫

（以下は四月に亡くなった会員桑原武夫氏が、京都で開かれた昨年の日本山岳会全国支部懇談会で行った記念講演を、生前、氏の了承を得て文章にしたものである。速記の整理は京都支部がおこなった）

近代登山は西欧文化移入の産物

このごろは、山はまったく怠けておりますので、恥しいんですけども、それは皆さんご承知のことですから、謙遜すべきなんですけど、いたしません。私は本来おしゃべりでありますけども、去年とおととし、ちょっと体調を崩し、そこへ、今度は勲章をいただきまして、新聞記者諸君の、好意のある質問などによって、疲労こんぱいしております。それで、文化勲章受章後の初めての講演というのは、事実としてはその通りでありますけども、もう少しちゃんと準備をするつもりでおったんですけど、こういう事情が発生しましたので、なんにも勉強しておりません。それで、大変粗雑な話になると思いますけども……。

演題に「京都における近代アルピニズムの曙」と書いてあるのは、大変文学的な題になっていますが、これは斎藤支部長がつけてくれたんだと思いますけれども、私の言いたいことは、京都と近代登山ということであって、「曙」というのは、日が当たりだしてからのことは知らん、という含みもあるわけです。で、最近はどうなっているのか、それはあんまり知りません、という逃げ口上になっております。

日本で登山ということがいつから始まったか。登山という言葉の定義をやり出すと大変ですが、修験道などで山登りはしておりました。徳川時代に剣岳に登ったとか、薬師から何が出てきたとか、そういう話はみなさんよくご存じですから省略いたしますけども、省略するのは、それが悪いからというのではありません。徳川時代にそういうことが行われたということは、われわれ日本人として誇りにしていいことと思いますけども、しかし、明治維新以後の登山とは別のものだろうと思います。別と言っても同じ日本の山を日本人が登るのですから、薬師なら薬師に登る道は決まってますから、まったく別の世界ということでは、もちろんありません。

しかし、明治以後の日本の登山は西洋文化移入の産物であります。これがいつ始まったか、これはまたむつかしい問題でしょうけども、ごくおおざっぱに見て、一九〇五年（明治三十八）の日本山岳会の創立に始まるとして、歴史的にはいいかと思います。それより前に志賀重昂さんが『日本風景論』（一八九四年）で山登りせんとだめだ、ということをお書きになってます。それからウェストンさんがやってきた。武田久吉先生、この方私もお目にかかったことがあります。怖い先生ですね。大変偉い先生です。それから、言うまでもなく小島烏水、こういう人たちの名前が皆さんの頭の中に浮かぶと思います。そういう人を中心にして日本山岳会が作られた。それが普及しまして今日に至ったわけです。

それはもちろん、近代日本人のやっていた登山ではありますけども、まだモダンアルピニズムとはいえない。これも定義を厳密にしますと難しいことがあると思いますが、普通の意味でのモダンアルピニズムは、やはり槇有恒さんからですね。一九二一年（大正十）にアイガーの東尾根を登られた、ということをその始まりと考えていいと思います。ですから、一九〇五年からおよそ十六年経ってるんです。そのあと浦松佐美太郎さんとか松方三郎さんとか、一々名前は挙げませんけど、ヨーロッパアルプスで名を挙げた人が出てきます。そうして、新たに躍進した技術を踏まえて日本の国土以外に出てみよう、つまり海外遠征をやってみようということは、当然、みな考えたのであります。それが最初に実現しましたのが、一九三六年（昭和十一）の、ご承知の立教の堀田さんの登られたナンダ・コートです

ね。

日本山岳会は東京にありまして、そういう関係もあって、最初の動き出しはやはり東京が中心であった。公平に見てそう考えてよろしいと思います。九州とか東北とかにも優秀な方がおられたと思いますけれども、中心は東京にあった。そして、その中心の勢力を成したのが慶応大学、早稲田大学、立教大学、学習院そのほかで、ビジネスマンは山に登ってはいかんということはなかったけれども、ともかく日本で近代登山というものが始まった時の主力は学生でありました。

そして、当時の学生山岳部の業績をふまえて、戦後になりますと、日本の近代登山が最盛期を迎えることになる。ヒマラヤなど海外遠征登山もきわめて盛んで、今西寿雄さん、斎藤惇生さんたちがいま計画していて、来年実現されようとしている三国合同チョモランマ登頂計画を見ても明らかなように、最盛期はまだ続いている。これが十年後、二十年後にどういう展開をするか、これはみなさんのご努力次第のことでありますが、そういう歴史の中にあって、京都もなにほどかの業績をあげてきた。そのことを少しお話してみたいと思います。

学生が近代登山を担う

私自身はつまらぬ登山家でありますが、私がそこへ入っておりましたところの、第三高等学校、俗に「三高」と言っております。それからその三高の連中がみな入りました京大、それから同志社、まあ、この辺りが中心で、むやみに熱心でありました。私はそれを身近に見ていたのであります。私はその関係者の一人でありますから、自己賛美あるいは、仲間ぼめになる恐れがない、という保証はないんです。ですから、出来るだけ個人の名前は避けて、詳しく申し上げることはやめたいのですけれども、戦後の日本人の行った海外登山と、遠征登山というものは、京都の登山家たちの努力なくして、あんなに早く始まりえなかったと思います。とくに西堀栄三郎という才能のある人物の名前は避けて通るわけにはゆきません。彼はまだ、開国していないネパールに入りこんで、登山そのものは、もちろんす

ぐにはできなかったけれど、あざやかな政治工作、外交工作をすることによってマナスル登山の許可を取りつけた。それを京大から日本山岳会に譲渡して、槇さんをリーダーとする、三回目の遠征で今西寿雄君がマナスルの頂上に立つ、ということになるわけです。

そして、京都だけでなく、日本全体の近代登山を、率直にゆうて、リードした人間の一人として、今西錦司の名前も挙げることが許されるだろう。これは決して、身びいきで言っているわけではありません。きわめて個性的な彼の言動について、ご批判が出てくるとしても、私はそれを否定致しませんけれども、彼の強い信念と先見の明、それから冒険心があってしかも策略にもすぐれていた点は、何人も承認せずにはすまないと思います。そして彼は中学生のころから説得力をもち、統率力にすぐれたリーダーでありました。三高のころ、私たちはスキー合宿に関温泉に行っておったのですが、そこへは慶応、早稲田、明治、学習院、一高なども来ておりましたが、滑っておりまして、スキーが一番、だれが見てもうまいと思ったのは、岡部長量でした。岸和田の殿様の息子、学習院ですね。それが病気で少し弱った時に、山スキーで一番うまかったのは、これは否定し難く西堀栄三郎でしたね。立山のガイドたちもそういってました。

伊吹へ登ったことがあるのです。その時に偶然一緒になりましてね。慶応とか早稲田の、関温泉で、われわれのよく知っていた、ものすごくうまい人たちです。ゲレンデでは西堀よりうまいぐらいです。それで、頂上から、一斉にさあっと滑り出した。私などはすぐこけてね、雪をいっぱいつけて、おくれて下りてきた。上へ行かずに待っていた連中にきくと、西堀栄三郎がトップで下りてきてね、パイプを一服ゆっくり喫い出したところに、早稲田、慶応が到着した。しかも、その連中は服に雪がついている。西堀はきれいに止まった時、雪がどこにもついていなかった。これで完全に押さえたことがある。これは一つの象徴的な事件であったといえるかも知れません。私たちはつねづね慶応を目標にしていて、これを抜きたいと考えていたのです。

槇さんが日本に帰って来られまして、京大の学生集会所でも講演会がありました。今西錦司は興奮措くあたわず、

登山に精進する決意を固めるわけですが、私たちのグループの成立も、その辺がきっかけになると思います。それは、要約すると、京大の入試のない学部にそろって入学し、卒業後はヒマラヤ遠征を目標に、京都学士山岳会というものをつくりました。AACKと略称してますけども、それの歴史を目下執筆中で、来年中には本になるかと思います。それは私たちだけの歴史であります。しかし、ある意味で日本の登山の歴史の近代編の中の一節になるものです。それをお読み願うことに致しまして、その成功と失策は一々申しませんけども、京都の山登りの連中がある時期に、ある形において日本山岳界に強い刺激をあたえたと、いうことはあると思うんです。それは、もちろん優れた人物たちの努力によってそうなったんですけれども、それを特定の人々の登山技術における、あるいは企画性における天才によって説明するだけでは、不十分だと思います。できれば、私は今日、それがなぜ京都でそうなったか、ということについての、おおげさに言えば、社会的、文化的理由ということについて、少しお話してみたいと思います。

歴史ある土壌が育む〝革命〟

これはもちろん、私個人の考えです。山仲間と相談のうえのことではもちろんありません。それで、どうして京都で近代登山が興ったか、このことは事実であっても、それはなぜか、ということが大変説明しにくい。京都はどの案内書にも、伝統の都、あるいは歴史の都と必ず書いてあります。その通りであります。千年の都ともいわれ、あと七年ほどで建都一二〇〇年にもなるのです。それから多くの古い神社、仏閣、あらゆる宗派の本山がここにある。芸事の家元も相当住んでらっしゃる。絵画、芸事と言うと失礼かもわからんけども、お茶とか生花とかお香とか、お茶の中には煎茶がありますし……、そういう広い意味での家元、古くからの権威の中枢みたいなものが、みなここにあります。そういうことが、頭に浮かびますから、京都と言えば、長く続いた伝統の都である、ということが言われて、それは、その限りにおいて正しいと思うんです。

しかし、もし京都の人々がその伝統というものに寄りかかって、その上に眠っていると、それは閉鎖的保守社会に

なってしまいます。そういう状況は都市、あるいは国家にとって危険だと思います。転換期においてはとくにそうでありります。もし、その古くすぐれた伝統を、破壊までいかなくても、批判する、改める、あるいはその上にものを築く、という精神、あるいは現実行動がなければ、その地域は潰れるはずです。

いままでのところ、京都は滅びていない。優れたものの堆積の中で、満足できなくて、それからの脱出を図るところにこそ、新しい生き方が生まれてくるのだろうと思います。新しい道を拓くということは、昔からの古い形の幸せ、あるいは幸福、つまり幸福一号から、古いものをはねのけることによって生まれる幸福、幸福二号に飛びうつることです。ちょっときつい言葉でいえば、革命ということです。意識革命といった方がいい。新しいことが始まるのには、そういうことが必ずある。近代日本を拓いた明治維新というものも、私はこれを文化革命といっているわけです。そういう全般的な背景の中で、京都の近代登山も生まれてきたというわけです。

それで、もう一つ付け加えて申しますと、これは私のやや独断と見えるかもわかりませんけれども、日本の都会の中で、京都だけが西洋ふうの近代ブルジョワ社会に似たものを持っている、と思います。日本のほかの町は、田舎でありまして、素晴らしい村ではあったにしても、都会という感じはなかったわけです。つまり、そこには明治維新後の、新しい自由はなかったかもわからない。しかし、ほかの都会より、ここの市民は思想の自由を持っていたのではないか。都会性を持っておった。それは今でも看取されることであります。どういうところが近代的か、と言うと、まず、めいめいが個人であって、お金に細かい、ということです。これは近代ブルジョワジーの特色であって、つまり、宵越しの金(ぜに)は持たん、などという、素朴な考えは決して持たないのです。

京のお茶漬という話をご存知でしょうか。人を訪問して、食事時に近くなったので「失礼します」と言うと、「まあ、そんなこといわんと、お茶漬でも、お茶漬しかでけまへんけど」。それで、私の国の、越前ですけど、アホが縁談の相談に来ていて、もういっぺん靴脱いで、上がって、縁談が破談になりました。これ、実話です。あんなアホのせがれにうちの娘はやれん、ということです。これはタトエ話ですけれど、京都のブルジョワは計算をする、楽しい

こととして計算してるんです。朝から勉強している、商売してる、祇園祭もしてる、祇園の芸妓さんと遊んだりもしてる。しかし、ある意味で、自分の個性というものは失わない、というところがあったと思います。京都へ来て、いろんな人に付き合ってみられたらわかると思いますけども、頭がよくて、知恵は働くけども、どこかさらっとしている。悪く言うと冷たいところがある。それがわかってなければ、京都で生活した、あるいは京都を訪れた、ということにはならない。

ですから、京都はパリと姉妹都市約束を結んでますけど、西洋の町と姉妹都市になる資格を持っているのは、京都だけではないかと思います。姉妹都市になって相互に感激するのは、シャンペンで乾杯する時だけで、やはりお金に細かいパリ人は、今晩の泊りはどちらが払うのやろ、などと考えているわけです。もちろん、京都だけでなくて、例えば、大阪の堺、これは最初の近代都市であったかも知れません。それは、織田信長の暴力、ゲバルトによって潰されるわけですけれども、日本の文化人、例えば千利久とか、そういう人間、それはやっぱり堺とか京都から出てますね。仙台からは生まれなかったのです。

京都岳人のバックボーン

そういう背景があるのですが、京都が今日までもってきたのは、明治維新の危機の切り抜け方が見事だったからです。天皇が東京へ移られました。遷都といいます。そこで、京都は最大の危機感に襲われた。危機感だけでなく、事実、危機に襲われたのです。しかし、槇村とか北垣とかいう優れた、頭のいい為政者と申しますか、知事が出て、このままではだめだ、新しい世界に生きなけりゃだめだ、ということで革新をはかり、大胆に実行したのです。そして、市民もそれに協力したのです。

例えば小学校。小学校はどこにだってある、と思われるかも知れませんけど、小学校の歴史を調べてみますと、全国で京都が一番古いですね。大阪、東京なんてはるかに遅れてますね。ついそこの柳池校というのが日本で最初に出

来ました。そして父兄の努力で全市に続々とできた。ほっといても小学校が生えてくるんではないんです。金もいるわけです。それをやった。それから、知事だけではありません。今の言葉でいえば財界というか、が金を出して、京都の秀才、若い秀才を海外に留学さして、その学生中には、例えば、いま大きな財閥になっている稲垣勝太郎がいますね。それから、先程から度々出ている今西錦司君のおじいさんも行った一人ですね。リヨンに留学して、新しい機織機技術を京都に導入した。いまは留学生制度というものはちっとも珍しくありません。しかし、それを最初にやった、というのが京都の進歩性ですね。それから、電車、チンチン電車と申します。市電を走らせたのが、明治二十八年です。ちょっとおおげさな、昔風な言い方をすると、東洋最初の電車ということになりますね。それをやった。それから、琵琶湖から京都へ水を引いて、インクラインと申します。琵琶湖疏水。これをまかされてやった田辺朔郎先生というのは、この大事業をやったとき二十二歳ですね。今の金にすると兆という事業を二十二歳の青年に、信用して、命がけでやってくれ、といったところに明治の京都の若々しい精神が見られます。それで京都は、おおいに工業が伸びるわけですね。

当日の桑原武夫氏

　それから、日本での映画、これは京都が最初ですね。いまは映画村になって、見世物だけが残っていますけども。それから自動車、これも京都が最初ですね。大沢商会とゆうのが最初に売り出した。まだたくさんあるんですけども、明治の初め

に、京都は古いものをかかえながら、新しいことをやらなきゃならん、という精神が盛んでした。そういう流れのなかに、京都の山登りも位置づけて考えなければいけないのです。

個人の名前を出しすぎますけれども、今西とか西堀のうちは、京都の古くからの町家です。今西のとこは西陣の織り元。西堀のとこは木綿問屋です。日本に最初にアールベルグ・スキー術を導入した高橋健二の家は古材木屋です。みな古いブルジョワで、さむらいの子ではない、ということが面白いと思います。京都の人間は古い家、古い伝統の圧力の中で生きてきたのだが、それだけに一度目覚めると、新しいものへの挺身が熱をおびるのでした。そこから京都人独特の新規好み、よく言えば、進取の気性が生まれるのです。それは古い伝統と矛盾するじゃないか、と思われるかもわかりません。しかし、私の考えによると、すべて人生における創造は、矛盾の中からしか生まれない、と思います。

山登りに関係して言えば、シルクロードに最初に手をつけたのは西本願寺の大谷光瑞です。偉い人です。ぼくらが三高の時、まだ生きてられました。代表として今西錦司がうかがいまして「われわれもヒマラヤへ行きたい」というと、「それは今西さんおよしあそばせ、あぶのうございますから」と鼻であしらわれて帰ってきたこともありました。京都には石崎光瑤という有名な絵描きさんもいらっしゃいました。インドなどへ行って、熱帯の絵などをお描きになった。石崎さんは私もヒマラヤのことを知りたくておたずねしたことがあります。

それから、これはあまり一般には知られていないかもわかりませんが、スキーで最初に上高地へ入られた田中喜左衛門という方がおられました。お金持で、七条の辺に住んでおられた。東の冠松次郎、西の田中といわれて、黒部についての権威で、民間の長老でした。田中さんには、私などは、大変可愛がってもらったんです。お宅へ行きますと、アルパインジャーナルが積んである。英語はそうお得意ではなかったけど、がんばって、ヒマラヤ関係のところには、赤い鉛筆であちこちにアンダーラインがつけてある。私が、西堀なんかと一緒に一九二五年三月、仙丈岳と北岳へ登った時、単杖のスキーで一緒に来られました。そういう冒険をやってみようという、いま申し上げたような民

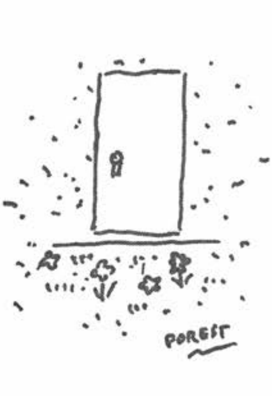
間人が京都にはおられた、ということは注目すべきことですね。

パイオニア精神と創造性

京都の学問ということにちょっと触れておきたいと思います。渡辺慧という、大変偉い物理学者がいらっしゃいます。IBMの技術研究所長までやった人ですが、この人のエッセイの中に、独創性のある新しい学問、国際的に通用する学問は、日本国においては京都にしか生まれていない、と書いている。例えば、湯川・朝永の新しい物理学、それから木原均さんの遺伝学。日本人で世界の学会の会長になったのはこの人が初めてです。世界遺伝学会の会長をしていた。それから、今西錦司を中心とするサル学、霊長類研究、これはもう世界を制圧しています。それから、内藤湖南、狩野直喜などを中心とする東洋学。西田幾多郎、九鬼周造などの哲学。渡辺さんの説は江崎、福井、利根川らの出る前の指摘ですが、これはちょっと論駁し得ない指摘だと思います。京都のモダンアルピニズムの担い手には学者になった人が多いのですが、パイオニア精神の必要をつねにとなえていたこの連中と、京都の創造的な学風とのつながりは見のがせない点だと思われます。

明治以後の京都は、学界でもスポーツ界でも世界に誇りうる人材を出しているが、芸術の分野ではどうか、というおたずねを受けることがあります。京都画壇は東京画壇を恐れしめる仕事をしていたのです。富岡鉄斎は日本の画家で、世界で最も尊敬されている人です。これは京都を超えていますが、栖鳳、華岳、麦僊らがあり、そして梅原、安井は京都の人です。しかし、文学はと問われると、私もちょっと困る。与謝野鉄幹、佐々木茂索くらいしかすぐには頭に浮かばないのです。現存の人は除くとすれば、選手が少ない。大岡昇平、野間宏、山口誓子、高安国世、伊東静雄などは、私たちと同じ頃に京都大学で学んだ人ですが、いずれも京都人ではない。このことに対する私の解釈はまだ確立してはいないのですが、端的にいって、京都の人間は先にも少し触れたように、パッション尊重が少ない。パッションに対する評価が低い点が、文学の成長をさまたげたのではないでしょうか。

京都人が一番ばかにするのはアホです。アホは白痴ということではなく、熱情が激しすぎて常軌を逸する人のことです。パッションを燃やすのはいい、しかし、合理性を忘れてしまって、夢中になるアホを京都人は決して好きではない。学者に対するほど小説家、詩人を高く買わなかった。それが影響していると思います。京都の登山グループには、ものすごく熱心な人がいた。しかし、あまり常軌を逸した無茶をやる人はいなかったのではないでしょうか。この点、説明がまだ不十分ですが、ちょうど時間になりましたので、この辺でおしまいにします。まとまりのない話をお聞き下さって、ありがとうございました。



立教大学山岳部初期の登山

堀田弥一

＊これは一九八八年三月十九日におこなわれた「第16回山岳史懇談会」での堀田弥一氏の話を、紙数の都合で約半分にまとめ、同氏の校閲をへて収録したものです。

大橋　今回は立教大学山岳部の初期の登山ということで、堀田弥一さん始め、古い立教の方々にお集まりいただき、いろいろ珍しいお話を伺わせていただこうと企画いたしました。で、今日の引き出し役は近藤信行さんにお願いいたします。

近藤　みなさんお集まりいただきましてどうもありがとうございます。山岳史懇談会は非常に有益な会で諸先輩のお話を伺うのを毎年楽しみにしております。今回は、もっと早く機会を作るべきだったのですが、昨年立教大学の若手によるナンダ・コートの再登頂ということもあり、それに合わせて話を伺えたらと思っております。今日ここに部報を持って来ていただいておりますが、確か大正の末期に旅行部として創立されて、堀田さんの時代に山岳部ということで発足したと伺っております。昭和三年だったでしょうか、雪の立山に登ったことが、ひとつのきっかけになって、後立山や黒部と非常に積極的な、先鋭的な登山が行われた、今日はその登山の社会的背景とかいろんな事情を含めて、お話いただけたらと思います。

堀田　お断りしておかなくてならないのは、登山の記録は、本や部報で興味のあるところは皆さんお読みになればわかることだし、またそれを重ねて話していくと非常に長たらしくなる。自分のことが中心になるようで、お聞き苦しいことがあるかも知れないけれども、その点はご了承いただきたいと思います。というのは、自分の接触したもの、自分の感覚でないと話できないことがずいぶんあるんです。やっぱり当時の背景なり時代というものが少しでもわかっていただければ、登山の記録を読まれても、今と昔といろいろ比較されてもわかりいいんじゃないかと思います。

立教山岳部の創立

で、順序としては、登山史の中の立教というのであれば、部の創立のことから触れなきゃならないと思うのですが、立教大学の山岳部ができたのは大正十二年です。山岳部ができたというのはえらそうに聞こえるんですが、そんなもんじゃなくて、子の

権現、これは奥多摩かどこかだと思うんですが、そこに行ってそれが創立総会。そしてその年の記録というのは日光から赤城というこの二つしかない。だから当時としてもピクニックのようなものだった。

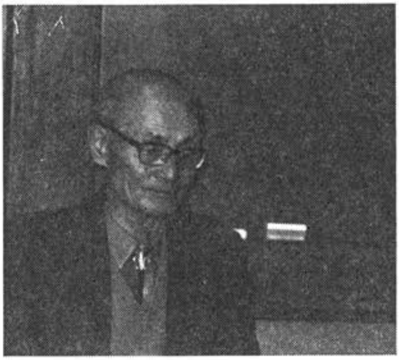
昭和二年に私は立教大学に入った。ところが大正十年頃にもう慶応では冬山が始まっている。

大正十二年というのはどういう時代かというと、槇さんが三田さん、板倉さんと立山に行かれて、板倉さんが亡くなった。立教山岳部の大正十二年というのは、全くお粗末、十三年も同じようなこと。十四年になってはじめて銀座通りの烏帽子から槍へ縦走しているわけです。その間に大菩薩峠へ行ったというのが記録の主をなしているような状態で。だから大正十二年の創立とは言ってもまことに……。

ただ大正十三年から赤倉でスキー合宿を正月にやっている。そのスキー合宿に集まってくる連中は他の部の学生、バスケット部の連中もあれば陸上競技の連中もいるというわけで、そういうスキー合宿でした。ただこのスキー合宿をやっていたために、体育会の他の部からの協力があって、初めの間は他の部の予算の中からいくらかの金をもらって山岳部の基金にしていた。少し話がとびますけど、私は昭和二年に入って翌三年にスキーで立山に行きましたが、その年、体育会の中で公の部として認められた。それはスキー合宿に他の運動部のキャプテンだとか、マネージャーが参加していて、立教の中で社交的な面があったために体育会の山岳部になれたわけです。そういうわけで立教の山岳部は、いかにも僕が昭和二年に入るまでには山岳部の形があったように聞こえるんですけど、そうではなくて。名前もややこしいんで、旅行部になったり、山岳部になったり、スキー山岳部になったり、そして昭和三年の暮れに山岳部になり、それから山岳部が本腰になってくるわけです。まあ、そのへんがほんとうの創立かも知れない。

だから創立が古いようであっても、活動し出したのは昭和に入ってからである、そういう具合に思っていただきたい。私が入ったのもそんなわけで、実績のない山岳部であって、入ったのを忘れていた。そしたら山岳部から呼び出しがあった。夏山の計画があるから行け、というようなことで。大町、針の木から剣に行けと。それじゃあ、くにに帰るのにちょうどいいからと、それに参加したわけです。私自身、予科時代は同級生の友人に誘われて陸上競技部に入っていた。四百メートルをやっと一分五秒を切る程度でものにはならなかったが、普段の練習が山登りをする時に役立った。

当時の登山というものは、言葉としてはスポーツアルピニズムが出てきたけども、スポーツをやるという感覚じゃなくて、まあ、山が好きだから、旅行が好きだからぐらいであって、なかなかスポーツ的までいっていない。慶応山岳部などは、槇さんがヨーロッパの山登りを仕込んでこられたし大島さんのように外国の本を読んで非常に詳しい方もあるから、これはまあ、相当山登りとしての哲学もあれば、情緒もあるし、そういうものは備わっている。また三高の方もドイツ語などに堪能な人があったでしょうから、だいぶ本の上では詳しく、従って登山のひとつの理念というものを持っておられたようだ。



当日の堀田氏

話がとんで、後のことになりますが、慶応におられた佐藤文二さんが、私が会社（安田生命保険）へ入って間もなく京都支店長から人事課長になってこられた。ナンダ・コートの時もそこを通さなきゃならないんだけど、人事課長ではどうにもならない事だし、会社では一番上の人から話を通してもらったのです。

縁というものは続くもので、三田さんに初めて紹介されたのは、三田さんがよく佐藤文二さんのところへ来られた。その折に僕が引っ張り出されて、紹介された。また、逸見真雄というのが僕の冬山のただ一人の最初は相棒だったわけです。僕より一年上ですけど。彼は佐々保雄さんや坂本直行と中学時代の同級生になる。そして山の本に詳しかったり、松方さんや浦松さんの下働きで、昭和六、七年頃から日本山岳会の会報の編集をやってた。そして僕らがナンダ・コートへ行く頃は、山岳会の理事で会報の担当だった。その逸見真雄の長兄というのは、今西さんの先生で、京都大学の農学部の教授。僕らが学生時代、大沢の小屋で今西さんと初めて会った時、今西さんはその頃大学院にでもおられたのか、雪の中の虫を研究しておられたようだ。逸見先生の弟と一緒だということで親しくしてもらった。

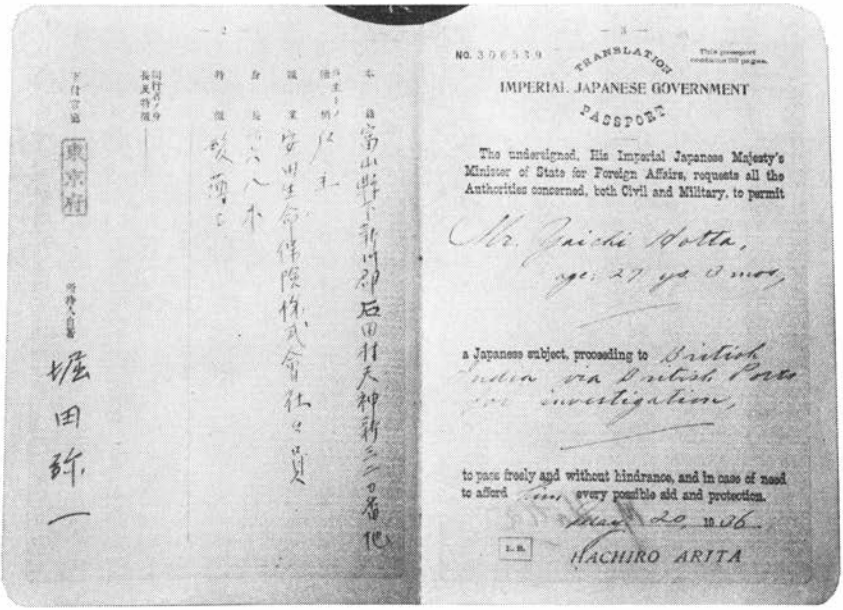
そういう中で、私たちには、誰も山登りを教えてくれるわけではない。逸見は本を読んでその知識を僕に教えてくれる。実際の山登りは、故人に対して悪いかも知れないけれど、僕の方はいろんな運動をやっていたから、一年後輩だけど山登りのことは私がリードしていたわけです。だけどいろんなことを教えてくれるのは逸見君。そしてその後に小原君だとか、酒井君だとか、斯波とか、沢本とかが加わってきた。

山岳部というのは、当時お金のかかる部だということになっていた。なぜかというと、山へ行く時に人夫を連れて行かなきゃならない。それでまた旅費も余計にかかる。私の後に出てくる人たちは比較的裕福で、坊やばかりだったから、私とすればリードしやすいし、素直だし、行くときの費用には心配のない連中だった。そんな金のかかる山登りでも斯波なんか、「斯波の倍貰い」といって、倍貰ってくる。斯波というのは、斯波孝四郎と言って、戦前ですが、三菱重工の社長、会長をやった人で三菱財閥の重鎮でした、その長男。奥さんは伊藤文吉さん（伊藤博文の息子で子爵、日本鉱業協会会長）の長女です。奥平昌英は伯爵のせがれだし、沢本辰雄は東京で一番大きなラシャ屋のせがれで、兄の一人は三郎と言って一高、北大のスキーや山での大先輩、弟は松高の山岳部にいた。それから小原勝郎君も裕福だった。四、五年後になるけれど須賀、浜野の仲間で中島雷二君など長者番付に載る程の裕福な家だったが、

本人はナンダ・コートの計画中に病気になり、我々の帰国した日に病死した。
　私たちは伝統も何もないわけだから、自分たちで体験しなくてはならない。そして人夫を連れていくのも必ず一流。芦峅では喜一、宗作、南アルプスでは戸台の竹沢長衛のように。私が初めて立山で出会った志鷹喜一は、三高の人らとよく行ってて、今西さん、西堀さんもよく知っている。彼は当時宗作と並び称されたガイドだった。彼は、剣沢のあの有名な遭難の時の発見者です。ところがあのとき、喜一が初めて現場に到着した時掘り起こせば助かったかも知れないが、一人や二人の力で掘り起こしたってどうにもならんから、すぐ下って芦峅に注進に来たわけ。そして当時芦峅の冬山に入る全人夫を連れて、佐伯平蔵、八郎などの長老まで皆連れて行ったわけです。ところが芦峅の優秀な人夫が二人も死んでいるために、喜一はどうも極端に言うと、村八分になって、その後、だんだん異端者扱いされていったようです。
　そして喜一は、黒部源流の山々へ行った頃は、非常に元気だったんですけども、僕が黒部に入る頃から彼は怖いことや危険なことには非常に消極的になっていた。だから、人夫として僕はあれはだめだから宗作にとりかえようと。ところがなかなかとりかえることができない。それが奥平の時になってやっと宗作が立教のものになった。私や逸見の時代には宗作は手に入れられなかった。当時宗作は一番。喜一は非常にハイカラ者で、三高の人たち、あるいは学習院など冬山に入る人たちにくっついて行っているものだから、英語だかドイツ語だか彼自身は意識しないでいろんな単語をおぼえていて、そういう新しい言葉を私たちは喜一から聞いた。それに冬山じゃ、出かけられない日もあって、一日中彼らと一緒にいるもんだから他の大学のことが、部報よりも口伝てで詳しく聞けるわけです。
　いずれにしても、私たちが黒部源頭の山々を三月に歩いて、黒部川から剣、針ノ木、最後は小原たちが内蔵助から剣を縦走して、馬場島の方へ下るというような、昭和三年を元年とすれば、昭和十年ぐらいまでは、そういう具合で、昭和六、七年ごろにはどんどん記録が進んでいた。
　先ほども言いましたように、私たちは伝統もなにもないから一山越すごとに新しい記録、次の目標、次の目標と出てくるんですけど、よその大学では剣と穂高が登られると、もう、目標が薄くなってくる。それでその頃、はやり出したのが、中級の山、横への広がり。三月の上越だとか、東北の山へ行くとか、北海道へとか。

ヒマラヤを意識する

　そういう具合で、まあはっきり言うと、悪い言葉で言うと、当時低山趣味がはやり出した。情緒的な山が戻りかけたわけです。それから、岩登りといっても興味がないのは穂高にしても部分的になって山のスケールが小さいわけです、岩登りの。小槍にしたって、高々六十メートルの所ですから。そんなのよりも、スケールの大きさと言ったらやっぱり冬山が一番魅力がある。そしてそっちへ向かって行ったわけです。で、関東の学校でも、どこでも創立者が、事業でもそうなんでしょうね、活発な時代は非常にレベルが上がるわけなんです。事業は一生涯やるけれど、山登りは、我々学



1936 年のときのパスポート

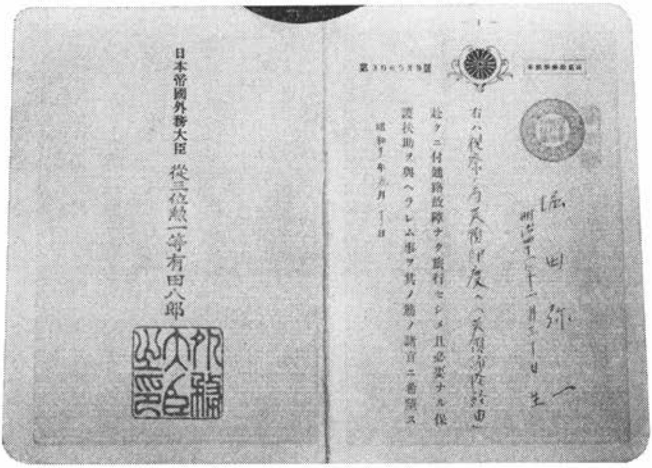
生時代だけで、学校出てせいぜい一、二年ぐらいしか参加してないから、非常に寿命が短いわけです。だから二代目、要するに次代を継ぐ人がどうなるかによって切れてしまうわけです。

まあ、そういうことで日本の冬山のバリエーションの新しい所、新しい所をやっているうちに、辻荘一先生の所で訳読会を開いて、そういうことがきっかけになって、ヒマラヤというものが我々の間に非常に意識されるようになった。ことに奥平が自分の環境がいいもので、非常に夢中になった。また当時山岳部には彼を中心にして集まってくる連中も多く、その中に優れた連中が、例えば山県が同級生で、湯浅、浜野がつづいた。それからヒマラヤに行かなかった優秀なクライマーの一人、僕はどうしても連れて行きたいと思っていたのが、須賀君。戦後、名古屋に移り日本山岳会の東海支部長をしたことのある須賀太郎氏の弟で須賀幹夫。単独行で三月の剣の小窓尾根から剣のニードルを登った男で、早月尾根も彼が冬期初登攀だし、そういう連中がいた。そういうことで、奥平を中心に集まっ

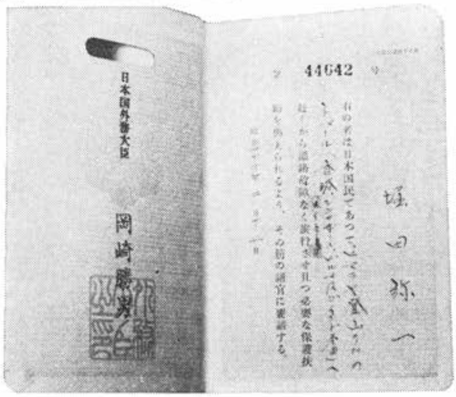
て来て、結局最後は奥平が抜けて、僕が支えるようになった。金持ちで裕福であっても、その人たちはやっぱりどうしたって家の了解を得ないといけない。で、ヒマラヤに行けなくなった。ところがすべてのスポーツ、山登りによらず、なんでもある程度ハングリーの状態で厳しいことをしない限り、一定以上にただの遊びから抜け出すためには、相当厳しいものがなければならない。立教の山岳部のナンダ・コートへ行くまでの後輩の連中、昭和七、八年、僕が出た頃からというものは、そういうハードな登山の方に向いていって、斯波なんかも恵まれた家であったけれども、ツェルトザックでビバークしながら冬期の白馬から鹿島槍、種池まで縦走して、だんだん厳しい山登りにすすんでいった。

　で、これはもう全く、今の社会にも当てはまる。まあ、学生諸君が山登りするにしても、親がかりで、どうしても温床に育っているということになる。ほんとうに自分の自由っていうものは、厳しさに耐えて厳しさを乗り越えていくところに道が開けてくるんだろうと思う。その点じゃやっぱり到達するところは昔も今も変わりない。

　メスナーのような登り方をするというのは、我々をメスナーに例えることはできないけれども、ややその中間の方にあって、例えば、私が黒部から鹿島槍へ登ったときは一時間の歩き出しのピッチが高度差で六百㍍。黒部へ入るには克服するいくつかの条件があります。なんといったって雪崩のすごい所だから、それに立ち向かうことを知ってなきゃならない。立ち向かうといえばえらそうだけど、避けることですね。どうやって避けるかというと、これは分かり切ったことで、新雪の大降りした時は出ない。雪がしまってから出る、そして見定めてから出る。それから急な所には朝の五時とか六時くらいには出発して九時にはもうてっぺんまで行っていること、帰りは午後四時前後から下りだす。そういう具合に、自然の原理に従って。天候だって今のように無線があるわけじゃないから、猟師の言うことをみんな聞いて身につけていなきゃならない。それから雪崩はどういう種類があるかとか、これなんか大島亮吉さんが雪崩の種類をくわしく分類されている。こういうものを読んでいて現場にぶつかれば利用できるわけです。ただ、本で読んでいても実地では通用しない。自分たちで現場にぶつかっていないとただ知識としてあるだけではだめなんです。そういう知識を知って、現場に行って、神経が理屈で動いていてはだめで、反射的に動く、すべてスポーツというのは神経が反射的に動く、野球にもセオリーがある、ゴルフにもセオリーがあるけれども、それを理屈で知っているだけではだめ。正しい型でスムーズに体が動くには反射神経が働かねばならない、それには練習しかない。山登りでも冬の山へできるだけ多く入って、ふだんは神経がのんびりしているけれど、危険な場所へ行ったらいつも反射神経が働くかどうかと、そこまでいっていないと、僕は冬山へ入る資格がないと思う。ところが、リーダーの後にだけくっついていて、リーダーの言っていることを、あるいは人夫の、ガイドの後にくっついていてその言うとおり聞いていたんでは、山登りはマスターできない、そういうことは今の山登りを見てもよくわかると思うんです。



1936 年のパスポート。視察の為英領印度へ……とある。

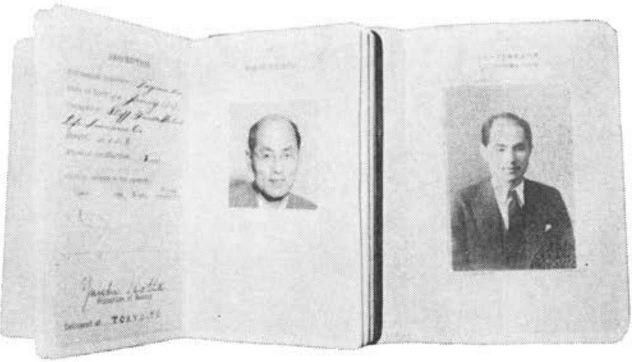


1954 年，マナスルの折のパスポート，ヒマラヤ登山のため……とある。

私は田口君の訳した『現代の冒険』という本を戴いて、非常に面白く読みましたけども、彼らのやっていることも、現場での訓練と集中力ですね。そりゃ、いくらトレーニングていうものを平地でやったって、低い山でやったって、例えば、三ツ峠でいくら岩登りの稽古をしたってヒマラヤでは通用しない。やっぱり六千㍍、七千㍍の岩登りをどんどん経験していくということ、そういうことが肝腎じゃないか。

ナンダ・コートの背景

まあ、話は変わりますが、ナンダ・コートというものの背景というものを考えてみますとね、今の人たちはインドと言えば独立国のインドしか知らない。我々がナンダ・コートへ行った頃のインドのキングはイギリスのキングです。実力者はインド総督です。そういうわけで、すべてイギリスへたのまなきゃならない。で当時、日本でも長谷川伝次郎さん、鹿子木さん、大谷探検隊などいろいろあるけれど、山へ登る目的でイギリスから許可を取ってないんです。だからああいうところへ忍び込んだ人



ナンダ・コートとマナスルのときのパスポート

は、長谷川伝次郎さんもインド人になりすまして、河口慧海さんもインド人になったりネパール人になったりして行ってるわけです。だから大谷探検隊もインドのブラックリストに載ってるわけです、みんな法を犯しているから、許可書を貰っていない所へ行っているから。

　で、我々はどうしたって、日本を出る時は、イギリスの正規の許可をとらなきゃならない。ところが、外務省にいくら説明してもヒマラヤ登山なんて当時の外務省はわからない。だから外務省を説得するために専属の係りをきめて、時間をかけて説得した。もちろん毎日新聞や辻先生も後押しされた。

　なぜガルワルへ行ったかというと、許可を一番取りやすい所だから。仮に許可がおりたとしてもカラコラムなんかへ行くと、また向こうで別の許可をもらわなきゃならん、シェルパや費用のかかるものを抱え込んで、そこで思わぬ長期間の滞在を強いられたら、もう費用で参っちまう。

　それでイギリス人は、当時はドイツ人や要するにヨーロッパにたいしては、非常に理解もあったろうけれども、日本などという国に対しては、恐らくそういう意味での理解は非常に薄い。また意志を理解してもらうのに日本流じゃ通らない。外務省を通してきっちりした許可を取ってそれに従って行かなきゃならない。とにかくその許可書を貰わない限り、物にならないわけで。日本でもヒマラヤに行きたいと思われた方は当時たくさんあったし、いろんなことがあったろうけれど、外務省へ正式に許可申請を出された方は聞いたことがない。で、僕らがナンダ・コートへ行ったんで、僕らが行っている間に、あわてて京都大学では伊藤愿氏がインドへ飛び込んできて、いきなり米沢総領事のところへ行って交渉された、談判された。当時はインド総督は冬はカルカッタ、夏はシムラ、中間期はニューデリーにいるわけです。ちょうど夏にかかったんで、伊藤愿氏はシムラまで行って交渉した。それでも一つ断っておきますが、インドには日本大使ってものはおりませんから、総領事が一番偉いわけで、いくら総領事館へ行って米沢さんを責めたって、やっぱり外務省に正式に届けをして、僕らも許可をとるのに二カ月間もかかったんだから、急に飛び出して行って許可をとれるなんていうのは……。ことにK2、カラコラムに行こうとすれば、もっと複雑な手続きがいると思うんです。

まあそういう状況下でナンダ・コートに行ったんですが、第一次欧州戦争の後は日本は金持ちになったから、ヨーロッパなんか行くと随分優遇をうけた人もあるけれども、インドのようにイギリスの支配下にある国では日本人というものは一流国扱いされないで、従ってヒマラヤ・エクスペディションなんて言ったって、ベルサイユ条約の黄禍がたたっているような、あのしっぽをひいたようなものはどこにもありました。

僕らがヒマラヤに行く時に、シンガポールに着く頃から日本人はこのごろ少しのぼせているからヒマラヤに行って少し頭を冷やして来いなんて、言う連中もいたわけです。それでも外務省がくれたパスポートの中には登山なんて書いてない。英領インドへ視察のため行くと書いてあった。しかし外へ出れば、「ザ・ジャパニーズ・ヒマラヤ・エキスペディション」でした。

ま、そういうことですが、いままで山登りを始めてからずっと、山登りを通じて見てきているところでは、やっぱりほかのスポーツ、陸上競技にしても野球にしても何にしても、最後はハングリーでトラブルに徹底的に立ち向かうようなことをやらないと道は開けないんじゃないか。

山登りはそういうもんじゃない、それは片輪の山登りであって、山登りはもっと情緒もあれば哲学もあればいろんなものもあろうというんだけども、第一線の山登りをやろうとすると、そこまで突き詰めなきゃならない。基本にあるものを見てみるとマロリーにしたってメスナーにしたって、そのほかの人たちだって、基礎的には叩きに叩いて、自信というものは一山越すごとについてくる。それの飛躍があらねばならない。だからヒマラヤに行く回数が増えても同じことやってんじゃ駄目。一つ一つの飛躍がどんどんあがっていく、そういう体系を保っていく、段階をふんで行けば山はそれほど危険なものでもないし、それほど恐いものでもなく、道はひらける。メスナーなんかずいぶん冒険をやっている、あれで死なないのは不思議だと思うようなところもあるけれども、あれだけやって、道が開けてくるんです。ところがそれをやらないで、大学山岳部の腐敗だとか、わが部は、なんて言っていれば、ちょうど三代目に没落する金持ちと同じことです。僕なんかいい祖先をもっていないで、名もないからこんなことを言うとひがみと思われるけれど、今となっては、殿様を頼りにしていた連中はみんな駄目、没落する。やっぱり力を貯え、そして訓練し、一つ一つ困難を克服していけば、道は開けるんだろうと思う。メスナーが生きてちゃんと下ってるところをみると、ヒマラヤがどんなに大きくたって、どんなに険しくたって、それ相応の知識と訓練をして、それを使っていれば、やはり開ける道はあるんだろうと思います。

追悼

山縣　登氏（一九二〇〜一九八六）

「前世紀の末以来、アジア内陸地方の探検は欧米人により盛んに行はれて来た。我国に於てはどうか。諸科学者が欧米人の域に達し、或は之を越えんとした近年に到るも、我々による科学的探検は全然無いといつてよい。その原因の一つは、世の人々の所謂学者という概念から外れる様な学者が居なかつたからであると信ずる。雪にも夏の暑さにも負けぬ逞しい身体を持ち、自然の豊かさと深さ、そして自然人の真の人間らしさの中に科学しようという、心からの欲求を持つ学者よ、出でよ！　こゝに掲げる書は、最近一年余の間に筆者の集め得たアジア内陸に関する探検及び踏査の書である。若き学者よ！　学者たらんとする人々よ！　之等の書によつて、その未知の自然を科学せんとする情熱を燃やせよ！」

これは今から四五年前（一九四三年）に刊行された「アジア内陸踏査探検文献抄（二高山岳会特別号）」という小冊子の序文である。

筆者、山縣登さんがこれを書いたのは大学生の頃で、すでに二高山岳部員の時から未知への探検指向はきわめて強かった。専攻を化学に選び、〝化学と山とをどのように結びつけようか〟と考えた末（山縣登随筆集『むかし人魂、いまUFO』のあとがき、「私の履歴書」より）地球化学の道に進んだとのことである。そして研究のテーマが稀アルカリ元素（セシウムを含む）の地球化学であった。若い頃の山縣さんは全国の山を歩いて源流の水を採ってきてはセシウムの分析をしていたようで、その業績がビキニの「死の灰」事件以来、群馬大学の若い教授山縣さんが、ミスターセシウム一三七として脚光を浴びるようになった所以であろう。

昭和三十四年には国立公衆衛生院に新設された放射線衛生学部の初代部長となり、時代の強い要請を背景に、環境放射能の問題と取組むようになったのである。山縣さんは以前に、尾瀬ヶ原の環境調査団に加わったことがある。当時〝電気かトンボか〟とマスコミを賑したもので、只見川上流をせき止めて発電に利用しようという一方の計画に対し、これに反対する方であった。これは二高山岳部の先輩であった久野久さん（東大地質学の教授、故人、日本山岳会員だったと思う）の誘いで、山男として設営兼地球化学者としてメンバーに加えられた由である。昭和二十五〜二十七年頃のことである。

このように生物圏における微量元素に強い関心をもっていた山縣さんの研究が、核実験から原子力平和利用施設と環境の関連へ転化していったのは自然な流れであったろう。さらに水銀やカドミウムの環境汚染が社会問題として注目をあびたが、山縣さんはカドミウムの分析方法や環境調査法の標準化にかかわり、イタイイタイ病の原因物質として認定される基礎作りに貢献している。この間南極大陸に三回にわたって調査研究に赴き、昭和四十三年十二月には南極

点基地にも訪れている。

前に山縣さんから話が出て、『蔵王―自然と人間』という小冊が東北大学山の会編で発行された（環境科学ライブラリー、14　大日本図書　一九七五年）。その中で山縣さんは執筆者を代表して、本書は「山の案内書でもないし、蔵王山をくまなく紹介しようとするものでもない。蔵王をめぐっての自然と人とのかかわり合いを、この山を愛して過してきた人たちが、それぞれの持ち分を生かして振り返ってみたもの」であるとし、「広い意味での環境問題を考える上で何かの役にたてば……」とのべている。

昭和六十年三月定年退職し名誉教授となった。その時、大学の教師、研究者の反省として、「科学技術の近年の進歩のスピードと素晴らしさにくらべ、人の心は何千年前と少しも変わらないのでは（前掲、私の履歴書参照）……と思い、それが恐しいことをもたらさなければよいがと考え、物質のみを追求してきた（と御本人はいうのだが）研究生活を終えたあと、残された時間の多くを、心の追求に向けたい」とのべている。

折しも昭和六十年春、東北大学山岳部、同山の会、二高山岳会の西蔵、念青唐古拉峯（ニンチェンタングラ）（七一六三メートル）の計画（六十一年五月八日初登頂に成功）の一環として組織された日中友好東北大学西蔵学術登山隊学術交流団の一員として、ラサを訪れ、西蔵大学において学術講演を行い、登山隊基地（標高四八〇〇メートル）をたずねた後、シガツェ市のホテルで五月四日午前六時五十分急逝された。同日夜ラサ人民医院病理部で剖検。高原病（西蔵で高山病のこと）性肺水腫と冠状動脈粥状硬化による心不全と診断された。遺体はセラ寺背後の天葬場で荼毘に付されたのであった。昭和六十二年五月の一周忌には中国登山協会史占春主席の御招きで山縣夫人と子息を含む西蔵訪問団（団長、佐々保雄前日本山岳会会長）一行十名がラサを訪れ、セラ寺及び天葬場において、ラマ僧四百人による大法要が営まれたのである。

山縣さんの西蔵における死は御遺族はもちろん友人知人にとって痛恨の打撃であるのみならず、研究者としても希有の人材を失い哀惜の思いは尽きない。しかし自然と真実を愛して未知を探ね続けた山縣登さんは、史占春氏から贈られた追悼の言葉「烈士壮心懐四方」に象徴されるように、「若き日の志を貫いて西蔵の地を踏み、そして一生を終えた、本望だろう……」と友人で極地研究の権威である鳥居鉄也氏（東大化学教室、山岳部からの同級で南極へも同行された）も弔辞でのべておられる。山縣さんの御冥福を祈る。

略　歴

大正九年　東京渋谷に生れ、府立四中、二高を経て、東大理学部化学科卒業（昭和十八年九月）。地球化学の研究に従事
昭和二十五年〜三十七年　群馬大学の講師、助教授、教授として研究
昭和三十七年〜六十年　国立公衆衛生院放射線衛生学部長
昭和六十年四月一日　停年退職し、国立公衆院名誉教授となる
南極大陸へ出張三回（昭和三十八年、四十年、四十三年）
昭和六十一年四月　東北大学日中友好西蔵学術登山計画の一環として学術交流団に参加し、西蔵旅行中、五月四日午前六時五十分、ラサの西方三五〇キロのシガツェ市において急逝された。

（佐藤春郎）

牛窪　浩氏（一九二四〜一九八七）

一九八七年九月二十七日、日曜日の正午、立教大学の庶務課長から牛窪浩さんの急逝の知らせを受けた。「今朝ジョギング中、急性心不全で倒れそのまま逝去されました」。絶句。愕然とする。まさかと思う。前々日の金曜日に、定期ヘルスチェックの結果を勧め先の診療所に聞きに行ったところ、たまたま牛窪さんといっしょになったが、その時なにか注意を受けた様子はまったく見受けられなかった。当時、牛窪さんは立教大学ナンダ・コート登山隊の総隊長を引き受けていた。立大山岳部部長でもあり、ベース・キャンプぐらいは行くぐらいの意気ごみであった。公務多忙で実際の山行に加われないとわかると、立大山岳部にとって由緒ある山の成功と、登山計画終了後に、ニューデリーの首相官邸で予定されていたインド登山財団との公式レセプションにご自身も出席するべく心をくだいておられた。私は、山友会（立大山岳部のOB会）の一人であり、立大に奉職するものとして、太田晃介ナンダ・コート登山隊隊長や現役の諸君の相談相手となっていたので、牛窪さんの突然の昇天がもたらした深刻さが、一分、二分と時間が経つにつれてわかってきたが、ただ、茫然とするばかりであった。

牛窪さんは、日本経済新聞に載せたエッセー「旅は道ずれ」で「私にとってもっとも楽しいことは山旅である」と書いている。ほんとうに、山登りが好きであった。日本山岳会会員。会員番号八八四六番。山岳会のルームで「入会申込書」をみせてもらうと、山行経歴に「八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、ヒマラヤトレッキング、アンナプルナ、同、ランタン、奥穂高、北穂高、蝶ヶ岳、その他山岳部長として学生と倶に数度」とあった。紹介者は、堀田弥一、小原勝郎。また、小原さんの自筆で、「牛窪浩氏入会の紹介者、堀田弥一氏は来会の節署名捺印することになっています」とあった。後日、書かれたであろう堀田弥一という署名もちゃんとある。入会日、昭和五十五年九月二十七日。失礼ながら、たいした山歴ではないが、立教で山を登った者にとって、堀田・小原の両氏が Proposer, Seconder となることは特別な意味がある。

牛窪さんは一九七五年山岳部長になり、亡くなられる一九八七年まで、その職につかれていたが、その間、よく部員やOBと山に登られた。そして、たいそう強健であった。ある夏、涸沢の合宿に徳本峠をこえたことがあった。牛窪さんに島々を一時間おくれて出発したリーダーが明神まで追いつかなかったことなど、牛窪さんの山の強さは今でも語り草となっている。

昨年八月、太田さんはナンダ・コート隊を支援するため、カシミールのトレッキングを計画、参加者の荷物は飛行機持込み分だけにしてもらい、二〇キロまで認められる手荷物の全部を登山隊の器具の輸送にあてた。牛窪さんも進んで参加され、インドのI・M・Fの本部で今度の合同登山の最後の交渉にあたられた。私も同行したが、現JAC信濃支部長など気のおけない山仲間ばかりであったが、このトレッキングは、ハプニングの連続で、窮することもしばしばあった。そういう時の牛窪さんは見事であった。その場の雰囲気が明

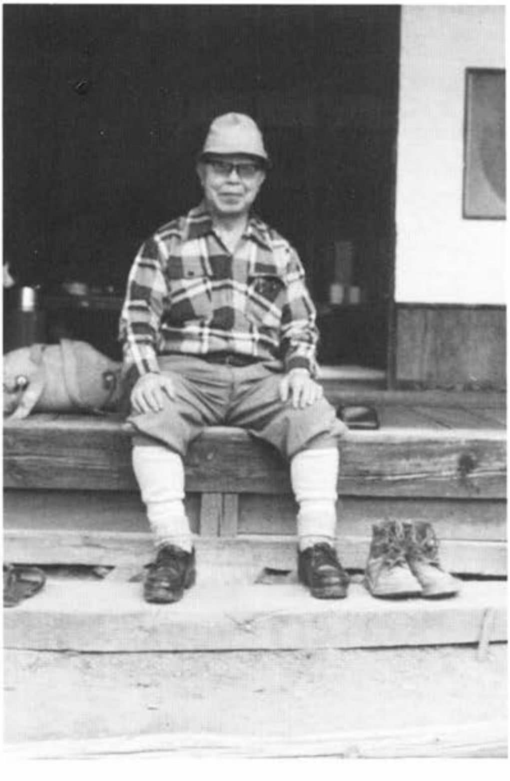
追　悼
OBITUARY

桑　原　武　夫氏

KUWABARA Takeo

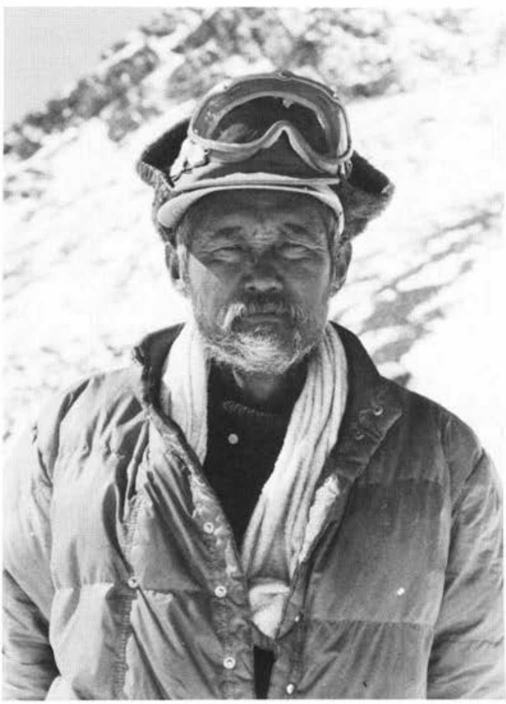
(1904～1988)

山縣　登氏
YAMAGATA Noboru
(1920～1986)



山崎　金次郎氏
YAMAZAKI Kinjiro
(1898～1987)

加藤　喜一郎氏
KATO Kiichiro
(1920～1987)



清　田　　清氏
SEITA Kiyoshi
(1909～1987)

谷　　　　博氏
TANI Hiroshi
(1910～1988)

大　島　永　明氏
OHSHIMA Eimei
(1897～1988)

小 池 文 雄氏

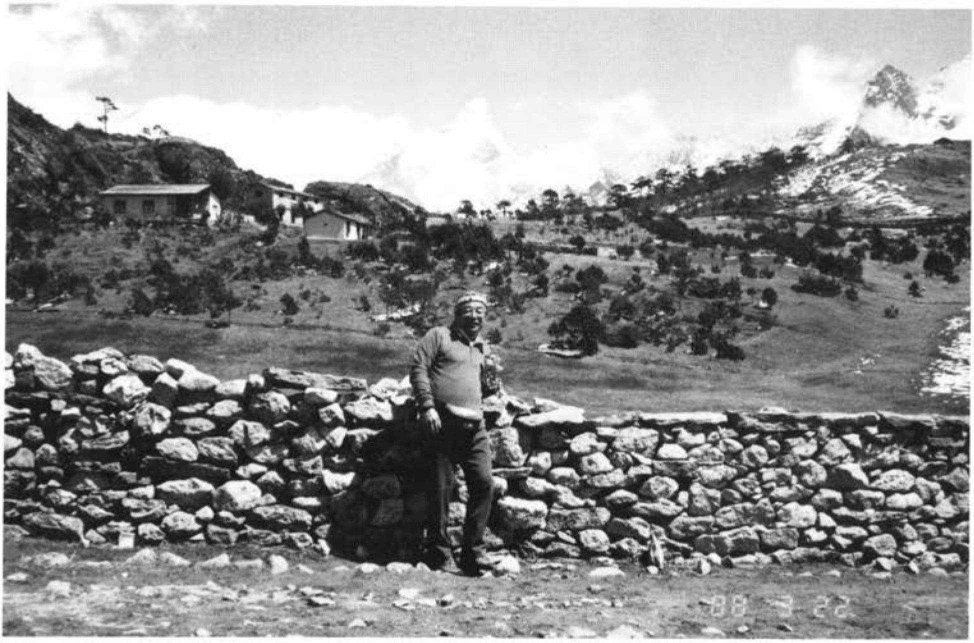
KOIKE Ayao

(1903～1988)

織 田 収氏

ODA Osamu

(1897～1988)



水 腰 英 隆氏

MIZUKOSHI Hidetaka

(1939～1988)

名誉会員

川 森　左 智 子氏

KAWAMORI Sachiko (Hon. Mem.)

(1907～1988)

森 田　　茂氏

MORITA Shigeru

(1915～1988)

名誉会員

浜　野　正　男氏

HAMANO Masao (Hon. Mem.)

(1913～1988)

1954年夏，"岳人"（中日新聞社）ポートレート集のとき

牛　窪　　浩氏

USHIKUBO Hiroshi

(1924～1987)

るく保たれるような気くばり、ベストセラー『職場のモラール』『課長の条件』の著者のまさに実践であった。

崖くずれのため、進退窮まった秀麗の地、ソーナマルグの三日間。タジワス（四八五五㍍）の四一〇〇㍍地点まで登った時のことである。輝く青空、氷河、岩峯、予定になかった素晴らしい登山であった。牛窪さんは矍鑠と申し上げるにはばかるほどの元気であった。下りはかなりきつく、牛窪さんはスリップして抱き止められ、二の腕をかなりすりむかれた。それでも下山後、BCまで四㌔程の径をポニーに乗ってもらうのに説得する有様であった。合宿で学生が部長に顔負けするのはこれだなと思った。

牛窪さんの最後の山は、エーデルワイスと青いけしが咲き、アポロ蝶が飛んでいたヒマラヤの山であった。

牛窪さんは何事にもアクチブで、かつてネパールとトレッキングに行ったついでに、エヴェレスト登山の申請を出し、それが許可されたという話がもたらされ、「どうするんだ」「よしやろう」と、今にして思えば楽しいひとさわぎであった。もちろん、牛窪さんは「よしやろう」派であった。こんな牛窪さんのお人柄の影響があったからだと思う。ナンダ・コートには一年生から四年生までの部員全員が参加した。牛窪さん亡き後、十月十七日一年生を除いた学生全員とシェルパが登頂に成功し、翌日太田隊長と牛窪光政登山隊長が第二登を果した。

牛窪さんの死を、マス・コミは「ジョギング人間への警鐘」「中高年者に残した教訓」としてとりあげた。そうには違いないが、「それはそうだ」と素直にうなずけない。なんとも悔しいからである。二十年も前からご自身の鍛錬のために、深酒でもされた時などを除いて、規則正しく毎朝ジョギングに励まれた。猛烈に意志の強い方であった。親友の経済学者西山千明教授が、納棺の折に牛窪さん愛用のセントポール名入りのストップウォッチを「お入れしましょうか」と奥様に伺ったところ「天国でも走るでしょうから、どうぞ入れて下さい」。私は、そばに居合せて、胸がしめつけられ、息をするのがやっとであった。

立教大学社会学部長、前立教大学総長事務取扱、学校法人立教学院常務理事、体育会長、山岳部長、等々。牛窪さんは、立教大学では、産業関係論という比較的新しい学問領域での研究者であり、常務理事という経営者であり、体育会回生の期待を一身に集めた人でもあったのである。

西山教授の弔辞からの引用を牛窪さんを追悼する言葉のしめくくりとしたい。「私はあなたのための通夜の式に、皆様が供花されるお花を四百本用意しましたが、あなたを偲び同夜に集った人々の数は遥かに多く、不様なことでしたが、四百本のお花を三回転も四回転もして、これをようやくまかなうことができました」

オーガスチン・牛窪浩氏、享年六十三。

（中村太郎）

略年譜

学歴

一九二四（大正十三）年九月十三日　横浜市に生まれる

一九四二（昭和十七）年九月　北京大学文学院（旧制大学予科）入学、一九四四年三月　北京大学文学院第二学年(予科)修了(仮卒業、応召のため)

一九五〇年三月　立教大学文学部社会科卒業

職　歴

一九五〇年四月　立教大学文学部副手、一九五八年四月　同大学社会学部助教授

一九六五年四月　立教大学社会学部教授、一九六六年十月〜一九六七年三月　シカゴ大学産業関係研究所客員教授

一九八二年四月〜　立教大学社会学部長兼社会学研究科委員長

一九八六年四月〜五月　同大学総長事務取扱、その後立教学院評議員、同学院理事、同学院常務理事を歴任。ほかに立教大学ヨット部長、同大学チャプレン室委員、同大学体育会長など。

一九七八年〜　同大学山岳部長、一九八〇年〜　同大学体育会顧問

一九八七年　ナンダ・コート初登頂五〇年記念登山隊総隊長

名誉学位　L・H・D（ドクターオブヒューマニティーズ、米国ルイス大学・イリノイより授与　一九七四年五月）、賞　ブレントハウス奨励賞（シカゴ大学）　一九六七年二月

主要著書・論文『産業の社会心理学』一九七三年　学文社、『労働のなかの若者論考』一九七四年　人間の科学社、『課長の条件』一九七九年　東洋経済新報社、『課長のリーダーシップ』一九八三年　大和出版（一九八六年新装版）、『盛り場・池袋の魅力』一九八五年　時潮社、『孫子の人間学』一九八七年　大和出版

一九五〇年十二月二十五日　立教学院諸聖徒礼拝堂にて後藤眞司祭より受洗（教名アウガスティン）

一九五一年二月十八日　同礼拝堂にて蒔田誠主教より堅信受領

一九八七年九月二十七日　午前八時五八分　逝去（六十三歳）

山崎金次郎氏（一八九八〜一九八七）

永年会員山崎金次郎さんは、昭和六十二年十一月二日、八十九歳の高齢で逝去された。

三日の夕方、私が奥美濃の蕎麦粒山の山行からちょうど帰宅したばかりの時、ご子息の郁郎君から電話を頂き、突然で言葉もなかった。

実は十月の末に、奥様から電話があり入院された話は伺っていたが、こんなに早く逝かれるとは夢にも思っていなかったので、驚いた次第で誠に残念でならない。

山崎さんは明治三十一年五月の誕生で、日本山岳会には大正十一年十二月に入会され、会員番号も三桁の八二七番、大先輩である。

入会前の大正八年三月、山崎さんは東京府立工芸学校出身の同輩四人と、低山趣味を唱えて霧の旅会を結成され、創立会員の一人としてめざましい活躍をされていた。

霧の旅会は当時としては珍しい社会人の山岳団体で、後で岳父と仰がれた木暮理太郎、日本山岳会創立者の一人武田久吉両先生を名誉会員に迎え、若い同志会員も大勢参加して山岳研究、低山開拓の山行、会誌「霧の旅」の発行など活発な活動で大きく発展した。

私の手元に五冊ばかり霧の旅会の会誌がある。終戦直後運よく手に入れたもので、その中の一冊、昭和四年発行の会誌十年記念特輯号に、山崎さんの随筆「山旅十懐」が載っているが文章も軽妙でな

かなか面白い。中の「駒込の里」では会創立の裏話や、十年目の発展ぶりが夢のようだと書いてある。また若い頃から温泉の旅に親しんだ思い出記事も多く、晩年も温泉付山旅を好まれたわけが理解出来る。

また同年九月発行の松井幹雄（霧の旅会創立者）編著『大菩薩連嶺』の中にも紀行文「大菩薩峠行」が二十ページ近く収録されているが、これは大正十年に書かれたものである。

戦前の山崎さんとは面識はなかったが、私が初めてお会いしたのは戦後の昭和二十二年一月、下目黒の塚本閤治氏邸で開かれた霧の旅会の新年会の席であった。

私は神谷恭さんに誘われて初めて参会した。その時出席の霧の旅会々員は山崎さんはじめ十四名で、席上皆に紹介され、その場で入会を認められて会員となった。

会食後塚本さんが撮られた珍しい立体写真のスライドを拝見し、記念写真を撮るのに私が持参のカメラを出したら、一同顔を見合わせて大家の塚本さんの前でカメラを出すとは随分心臓だと笑われた。それで少々上り気味になって写真はピンボケだった。最近そのピンボケ写真を探し出し眺めて見ると、五十歳の坂を越えられたばかりの山崎さんは、さすが若々しくスマートに写っていた。

この入会を機に私は度々会の行事に参加して山崎さんとも親しくつき合うようになったが、単独の山行に同行したことはなかった。

昭和二十六年私は東京から静岡に転勤になって清水市に住んでいた。三十年代初め頃と思うが、ある日山崎さんから電話をもらい、静岡で一緒に食事をしたことがある。当時は日本光学を退職され、五藤光学に勤めておられた。その日は日本平にプラネタリウムの据付の指導に来たとの話であった。

晩年の山崎さんは静岡と縁が深い。三十六年第四回静岡支部の紅葉会に初めて参加して第二十回まで連続十七回も参加され、第三十回記念誌上の参加回数番付では東の関脇である。私も静岡で霧の旅会の例会の係を何度か引受け、安倍峠越や、秋葉山、伊豆の天城山など案内をしたのも今は思い出になった。

霧の旅会々員の中でも山崎さんは酒豪の一人で、宿に着くとまずウイスキー、食事時には日本酒、また朝は起きるとウイスキーで、アルコールの切れ間がなかった。しかし長い附合いの間酔い潰れた姿は一度も見たことはない。よほど丈夫な身体の持主だと思った。

例会には必ず信州の地酒、筑摩錦をさげて来られた。何か特別に因縁のある酒ではないのかと伺ったら、若い時の思い出酒だよと笑われついに詳しい話は聞き洩らした。

神谷さんが亡くなられて、毎年五月の金山の木暮祭には、山崎さんが霧の旅会を代表して二、三人の会員と共に参列されていた。帰りには必ず連れの鶴岡さんと二人で、上高地の山研を訪れるのがお定まりのコースだった。また季節を変えて一人でもたびたび山研に行かれ、そのたびに、山の気分を味わい楽しんでいますと、よく絵葉書を頂いた。

山崎さんの温泉好きは若い頃からだと前にもふれておいたが、数年前ご家族とヨーロッパ旅行をされた時も、温泉市バーデンバーデンに泊り楽しまれている。その時の絵葉書に「こゝは熱海と草津の温泉を一緒にした様な所です」と書いてあった。

六十年の六月には「私の米寿と家内の喜寿の祝いに、娘と孫からハワイ旅行をプレゼントされ、ワイキキの浜の見えるホテルにいます」と、心温まるお便りをホノルルから頂戴した。大変筆まめな方であった。

創立会員では最後の一人であった山崎さんの死去で霧の旅会も誠に淋しくなった。

現在会員は野口末延、鶴岡元之助、神奈川甚吉、吹原不二雄、原田幹市、桜井稔、牧野衛の七名で、平均年齢も八十一歳、酒豪も相ついで逝かれ酒の旅会などと陰口を聞くこともあるまい。皆で山歩きするのも無理なので、時々箱根山の温泉宿に集って、思い出など静かに語りあいたいと願っている。

心からご冥福をお祈り申しあげます。

（牧野　衛）

略年譜

明治三十一年五月八日　市外千駄谷町原宿二四五（現、渋谷区神宮前）に生れる

明治四十四年三月　東京府青山師範学校附属小学校卒業（現、東京学芸大学）

大正六年三月　東京府立工芸学校（現、東京都立工芸高等学校）卒業

大正六年四月　藤井レンズ（日本光学工業株式会社の前身）入社

昭和十二年　春　社命により満州光学工業株式会社設立委員として渡満する

キャノン光学工業株式会社入社

昭和十五年　その後宇都宮製作所、昭和工機（株）、五藤光学（株）に勤務す

大正八年　東京府立工芸学校の友人三人と共に「霧の旅会」を発足。会員番号 No. 2

大正十一年十二月　（社）日本山岳会に入会　会員番号　八二七

昭和六十二年十一月二日　他界

（略年譜・山崎郁郎）

加藤喜一郎氏（一九二〇〜一九八七）

昭和六十二年十二月十日、加藤喜一郎さんが急逝された。全く予期しない突然のことだった。十二月三日朝、「加藤さんの手術に必要なB型の血液提供者を至急集めてくれ」と、突然友人の国立大蔵病院のドクターから電話があって僅か一週間後のことだった。

十一月初旬までゴルフをやりお酒も飲んでいたが、身体の節々が痛いからと下旬検査に行き、そのまま入院したばかりだった。

早速慶応関係のほか日本山岳会学生部を中心とした若い仲間が協力し、三十名近くも検査に集ってくれた。七日の午後、見舞に伺った折り加藤さんは時々襲われる激痛に顔をしかめながら、それでも元気に笑顔でいろいろと話をしてくれた。

しかし翌日の午後から容態が急変し、僅か三人の血液をもらっただけで、願いも空しく帰らぬ人となってしまった。およそ「死」とは縁遠い人、あの頑健な加藤さんが……と信じられぬ思いだった。

加藤さんが三度マナスル登山に参加して活躍され、初登頂者の一

人になったことは有名であるが、それ以外のことが案外知られていないのは不思議な気もする。

ある先輩が葬儀の折り、「加藤君は俺の前を疾風（はやて）のように駆け抜けた気がするよ」と語っておられたが、その言葉通り人との出会いにいっとき強烈な印象を与えるけれど、さっと疾風のように去ってしまう人のようだ。

ひと回り年下の私は、加藤さんについては学生時代の山登りや、航空隊での生活、爆撃の帰り東支那海に不時着し、一昼夜漂流した後危うく潜水艦に助けられた話など、時々断片的に聞いただけだった。身近に接することが出来たのは、マナスル登山の準備の手伝いをした時と、三十四年にダウラギリⅡ峰の偵察隊で丸四ヶ月間寝食を共にした時だけである。したがってあの自由奔放に人生をつっぱしった加藤さんの、ほんのひと時しか知らない私が加藤さんを偲ぶのは僭越なことかもしれない。

しかし山登りに関していえば、多分全盛期であったと思われる時期に、ヒマラヤ登山の何たるかを身を以って「いろは」から教えてもらった私は、幸運だったといえる。

加藤さんのマナスル登頂までの経緯は、三十二年に出版された『山に憑かれた男』に書いているのでご記憶の方もいると思う。あの古典的登山の典型ともいわれるマナスル登山で、個性豊かで自由人の加藤さんがその内面と自分の気持を素直に表現した本として、とてもユニークな読物だった。話の上手な人だけに、口語体の描写は正に活き活きとして、故人を彷彿とさせる名文である。

鎌倉の小学校から慶応の普通部に入学したが、加藤さんの悪童ぶりは有名で学校にはいたずらをしに行くのが楽しみだった、と本人が言うほどである。反面多くの友人を得、一部の先生方には特別可愛がられた。「喜一じゃあ……」と、昔から憎めないところを多く持っていた。

普通部ではラグビーに熱中し、学校は休んでも練習は休まずに頑張った。身体が大きく、抜群の体力と運動神経、加えて豊富な練習量に、四年生の頃には予科生や大学生に混って練習試合に出られるほど鍛えられ、将来を期待されていた。

山登りへの転機は普通部四年生の冬、好奇心から山岳部の冬の八ヶ岳山行に参加したことによる。当時の大学山岳部のチーフ・リーダー山本雄一郎さんが直接、新入りの普通部生を熱心に指導し、加藤さん達は深い感銘を受けた。よい新人を育てるのは最初の山が肝心であるという考えが徹底していた部だった。

通称「タコ」さんと呼ばれた山本さんは、柔軟な体と強靱な体力、広い視野と包容力を備えた名リーダーで、加藤さんが頭の上らぬ数少ない一人だった。惜しくもシベリヤ抑留中に病死されたが、もし山本さんが生きて還られたら慶応山岳会の歴史は塗り替えられたろうといわれた方だった。

予科に進学した時、強引なラグビー部の勧誘をやっと断り、晴れて山岳部に入部できた。部報の「登高行」によると、予科時代以降の加藤さんは山一途にノメリ込んで、数多くの山行を行っている。十六年一月の西穂高高所露営や、三月の北穂高雪洞生活、十七年冬の槍ヶ岳北鎌尾根の極地法登山など、当時の学生登山界の第一級の経験を積んだ。

しかし戦時色の強まってゆく中での山登りは次第に困難を極め、山に出掛けるには厳しい覚悟が必要だった。

昭和十八年九月、繰上げ卒業と同時に海軍予備学生として土浦航空隊に入隊、猛烈な特訓を受けた。強烈な空腹感しか記憶に残っていない土浦の生活を終え、希望通り操縦過程の筑波航空隊に進み、スピードと急降下爆撃のスリルのある艦上爆撃機のパイロットに選ばれた。

苛酷な訓練の後、同期生の中で実戦部隊に配備されたのは僅か数人、成績優秀な学生と並外れて勘のよい実技成績一番の加藤さんだけだった。常々、俺は急上昇の記録を作ったくらいだからヒマラヤの高い処では強いんだと豪語していたが、高々度まで急上昇したり目の前が真暗になるほどの急降下をするスピード、スリルの魅力は、加藤さんの性質にピッタリであった気がする。

何度か生死を分ける危険な目に遭いながらも運よく済州島で終戦を迎えた。米軍の進駐する一日前の厚木飛行場に、航路地図もないまま単独飛行で降り立った時、加藤さんの戦争は終った。いろいろと辛いこと嫌なことがあったに違いないが、他人にあまり積極的にその話をする人ではなかった。

加藤さんの山登りへの復帰は割合早かった。それは親分の谷口現吉さんのせいである。谷口さんは大磯の自宅に若い山の仲間を集め、いち早く山岳部の再建を打ち出され、小さい山行をすぐに始めていた。

二十一年に三島通陽氏経営の那須の三島農場に勤めて気力・体力の回復に努め、二十二年の一月には学生達と冬の穂高に出掛けた。二十二年の農地改革で農場は解散を余儀なくされ上京した。二十四年、槇さんが始められた佐倉飼料にさっそく押掛け入社し、大いに営業マンとして活躍された。

当時慶応の先輩方は、佐倉飼料の会議室や日本橋の辰沼医院の診療室、その近くの酒亭「ふくべ」がタマリ場で、ヒマラヤの話などが大いに語られていた。加藤さんもよく顔を出し、例の鼻にかかったハスキー・ボイスで隅っこに控えている学生達をよく煙に捲いていた。二十七年、すでにヒマラヤに向け始動していた京大グループより禅譲を受けた、日本山岳会のマナスル登山準備に加藤さんは勇躍参加した。ヒマラヤの具体的な資料は殆んどなく、本格的な氷河の経験者は田口二郎、高木正孝のお二人だけで登山準備は大変だった。

今西さんの踏査隊、翌二十八年春の本隊の準備にとび回った。幸い三田さん率いる第一次隊の中核隊員として選ばれ、その活躍は素晴らしかった。プラトーの下、七三五〇㍍地点に山田さんと二人で雪洞を掘って頑張ったり、六月一日の山田、石坂さんとの頂上アタックは、残念ながら時間切れで、頂上まで三七五㍍を残して撤退したが、ヒマラヤ・ジャイアント初見参としては見事な成果だった。

先輩方は日本の冬山での経験が充分役立つことを知って感激し、後輩達は将来の目標を持てたことで一層ふるい立った。

二十九年、第二次隊にも参加したが、不幸にしてサマ部落民の妨害に遭いガネッシュに転進した。帰途ルピナ・ラ越えの折り、ヒマルチュリやバウダー峰の西面を望み、後年我々にその登攀の可能性

を示唆してくれた。

この二次隊の準備の時、私は九月から四ヶ月間、学校へ一日も顔を出さずに日本橋の辰沼医院内の事務所に手伝いに行った。事務局専任の加藤さんとは毎日顔を合わせ、いろいろと無理難題を言われながら準備に追いまくられた。この期間中に見、聞きした加藤さんのエピソードはたくさんあるが、故人の名誉のこともあり割愛する。ただ底抜けに明るい性格は周囲の人に絶えず笑いと活力を与えていた。

三十一年、第三次マナスル登山隊では今西・ギャルツェンさんに続く第二次隊で、日下田さんと念願の登頂に成功した。加藤さんが頂上に埋めたピースの缶を、六十年十二月冬期登頂に成功した山田昇さんが三十年ぶりに発見、持ち帰って大きな話題となった。中のマッチ箱の裏には、まぎれもなく加藤さんの書かれた全隊員の名前がはっきり読み取れた。頂上アタックの前夜、あの興奮した中で頂上に残してこようと考えた、加藤さんの余裕と隠れた繊細な神経の一面を垣間見ることが出来た。

帰国後、毎日新聞社で加藤さんが撮った写真のネガを整理する時同席していたが、頂上附近で撮ったフィルムに横一筋の大きな傷らしきものを見つけ、「エライ傷を付けちゃった。あの日は寒かったからフィルムも凍っちゃったのかな……」としきりにボヤいていた。

後日、そのフィルムが焼付けされると、何とその傷とは天空に大きく弧を描いて伸びたロープであって、下の急な雪壁を登ってくる日下田さんをしっかり確保している傑作写真だった。あとになって何度かこの構図で写された写真を見たことがあるが、加藤さんの撮った、はるか足元からマルシャンディ渓谷まですっぱり切れ落ちた凄い迫力のある写真には敵わなかった。依田カメラマンご推賞の写真で加藤さんも大得意だったが、本当は全く偶然のスナップだったと思う。

三十三年に入ると、若手を中心に慶応義塾創立百周年記念のヒマラヤ登山を実施したいと、何回か研究会が開かれた。ネパールからの登山許可がなかなか入手出来ず、目標の山も何度か変更されたが遂にダウラギリII峰が選ばれ、隊長は山田二郎、三十五年春実施が決定された。

何とか自分達だけのクラブでやりたいと熱望し、それには何としても偵察隊を出さなければならないと思った。しかしいろいろな障害があり計画は遅々として進まなかった。思いあぐねて六月のある日、白木屋に加藤さんを尋ね我々の窮状を訴えた。一時間もしないうちに上司の内諾をとりつけ、あっさり隊長を引受けてくれた。頼みに行った我々があぜんとした決断の早さだった。

ヒマラヤ初見参の我々若手三人とマナスル三回の猛者――油の乗り切った加藤さんのパーティの中身は想像に難くない。いいことも悪いこともすべて伝授してもらった気がする。

乏しい外貨を闇でいろいろやり繰りしたり、ダージリン・シェルパの雇用問題でヒマラヤン・ソサイティと対立し、その仲介をコイララ首相やテンジン・ノルゲイ氏に頼んで解決するなど、その手腕もさることながら加藤さんの真価は、キャラバンや登攀中にこそ発揮された。

往復四十日を超え、五千㍍以上の峠を七回も越えた西ネパール一

周の辛く長いキャラバンでも、サバイバルの達人の加藤隊長の智恵と工夫で、今でも一番懐かしく楽しい思い出の山旅となっている。

反面、山に取り掛かると厳しかった。若いくせにダラシがないとか、あの氷瀑はお前達だけで充分登れるとかハッパのかけられ通しだった。確かに今考えても加藤さんには、今何が大事か、何が危険かを的確に見抜く素晴らしい天分があった。まさに動物的な勘である。

ムクット・ガオン周辺で一ヶ月以上、四ルートにわたってダウラギリⅡ峰北面を偵察したが、残念ながら内院に入る荷上げルートは発見出来なかった。翌春の本隊はどうなるかと気が気でない我々に「大丈夫、ヒマルチュリはやれるよ」と太鼓判を押し、帰途口実を設けて連絡官に目をつぶらせ、ヒマルチュリ西面の谷に入った。

ベース・キャンプ予定地の一日ほど手前の丘から双眼鏡でのぞいて、「よし、ルートはあの鎌形氷河沿いで絶対登れる」と指摘した。三十五年春のヒマルチュリ登頂ルートは、まさしく加藤さんの引いたルートそのもので、幸運にも頂に立つことが出来た。山を見る目の確かさについては、多くの方から聞かされた通りであった。

その後は山登りよりもっと楽しい？　ゴルフやスキューバ・ダイビングにこっていた。ゴルフの腕前は豪快だが口ほどではないとの評価だったが、ダイビングの方はご自慢どおり獲物は多かったようだ。何度も南の島に潜りに行って、その赫々たる戦果は何度かお酒の席で聞かされた。

すっかり山の世界から足を洗ったのかとさえ思えたが、もともと組織とか固苦しいことの苦手な加藤さんは、総会など大人数の会は敬遠したが、小人数の山の集りにはよく顔を出したし、出席すればいつも賑やかな輪の中心にいた。

私も何度かチョモランマやカンチの若い仲間と加藤さんのステーキ・ハウスにお邪魔したが、本当に喜んでいろいろと昔話をしてくれた。

最近では「学生達はどうしてるんだ。手伝うことがあったら連絡してくれ」と有難い手紙を頂いたりしたが、機会を得ないまま逝かれてしまった。やはり最後まで山登りの動きが気にかかっていたのだと思う。

大好きな先輩を失って悲しい。

略年譜

大正九年十一月二十九日　鎌倉に誕生。鎌倉師範学校附属小学校を経て、昭和九年四月、慶応義塾普通部入学。

昭和十三年　普通部四年生の時ラグビー部員であったが冬の八ケ岳山行に参加、強い感銘を受ける

昭和十三年四月　法学部予科入学。ラグビー部の烈しい勧誘を断り山岳部に入部する

昭和十六年四月　慶応義塾大学本科入学

昭和十八年九月　戦時特例の繰上げ卒業。この間十五年七、八月の台湾新高山登山、同十二月より十六年一月の西穂高高所露営、同三月の北穂高雪洞露営、十七年十二月の槍ケ岳北鎌尾根の極地法登山などを行う

昭和十八年九月　大日本製糖（株）入社。同九月、予備学生として土浦航空隊に入隊、厚木、誉母、都築、済州島の各航空隊に配属、八月十五日終戦を迎える

昭和二十一年　三島通陽氏経営の那須農場勤務。二十二年、農地改革によ

り解散
昭和二十四年六月　槇さんの始められた佐倉飼料（株）に入社。その後
（株）白木屋、（株）山啓を経て武井産業（株）勤務
昭和二十八年三月より七月、第一次マナスル登山隊、二十九年三月より六月、第二次マナスル登山隊、三十一年二月より六月、第三次マナスル登山隊に参加。同五月十一日、第二次隊として日下田実さんと登頂
三十四年八月より十二月、慶応義塾創立百周年記念のヒマラヤ登山に、偵察隊長としてダウラギリⅡ峰北面及びヒマルチュリ西面を偵察、登路を発見する
昭和二十一年八月二十六日　日本山岳会に入会、会員番号二三七一番
著書『山に憑かれた男』三十二年七月　文芸春秋新社（五十六年三月中公文庫で復刊）、『冬山のサムライ達』三十三年文芸春秋、『夏山三題』三十四年三田評論、「登高行」十四号に各紀行等を執筆している
昭和六十二年十二月十日　逝去、享年六十七歳

（宮下秀樹）

清田　清　氏（一九〇九〜一九八七）

清田先生と日本大学山岳部

先生は旧制六高から東大と在学中の昭和初期積雪期穂高初登はん時代に活躍されました。昭和三十四年に縁あって、日大で教べんをとられることになり、それが当時、桜門山岳会会長の初見先輩の知るところとなり、初見先輩の推薦により、昭和四十年に日本大学山岳部部長に就任されました。

そして、ネパール・ヒマラヤの登山解禁を翌年にひかえた昭和四十四年十一月、私（当時三十一歳）と学生の平野隆司の二人は先生の中板橋の自宅にお伺いしました。用件は先生に来秋に予定している現役からなるヒマラヤ登山隊の隊長をお願いすることでした。

これまでに山岳部の総会などで顔を合わせることはあっても、全くの初対面と同じであったし、先生はもうすでに六十歳の高齢であり、一方、我々の隊は全くヒマラヤの経験のない私と中村進（当時二十三歳）の二名のＯＢが現役をつれてヒマラヤへ行こうという計画に同意を得られるのは至難のことと考えていました。おもむろに「先生、ヒマラヤへ行きませんか」と切り出したところ、即座に「行きましょう」と快諾されました。

先生は山岳部部長として、旧友のつてで加藤泰安氏にお逢いになり、ＪＡＣのエベレストには日大から何名くらい参加出来るか、学生と若手ＯＢはどんな動きをしているのかのすべてを掌握されていたようでした。

これから出発までの約一年間に数回にわたり隊員は先生のご自宅に招待を受けました。

料理は奥様手作りの本場の中国料理である。先生はなかなかの食通で、まず食前酒からはじまり、前菜と続くのであるが、ころあいをみて、ご自身が立ち上がり、書斎よりカミュとかヘネシーを大事そうに小脇にかかえて戻られて、君達のように量さえ食べて飲めばよい連中にはもったいないがといって振舞っていただいた。席上ではもっぱら昭和一ケタ時代の積雪期穂高登山が主で、慶大の斉藤長

寿郎氏には一目おかれ、大島亮吉氏には大きな影響を受けられたようでした。
　ヒマラヤ登山ではパウル・バウアーのカンチェンジュンガ北東稜の闘いを熱っぽく語られました。私達の計画の方は私から報告する以外は質問されたり、指示がましいことは一言もなく、しいていえば「お金はたりているかね」だけでした。この姿勢は登山を終えて、帰国するまで終始変ることはありませんでした。このようなすばらしい隊長のもとに隊がまとまらないわけがなく、一九七〇年十月二十六日ダウラギリ山塊の一無名峰の登頂に成功しました。山の命名はシタ・ツツラとし、標高は六六一一メートルでした。先生は高齢にもかかわらず五二〇〇メートルまで登られました。
　帰路、ツクチェ村からポカラまで先生と柴田ドクターは本隊とわかれてベニルートを二人でキャラバンすることになり、全員均等に少ない旅費が支給されました。
　お二人は人後に落ちない左党ですが、ポカラで再会した私に、先生は旅費を自分が管理しなかったなら、ドクターは一晩で飲んでしまい、おそらくポカラにはたどり着けなかったのであろうと冗談で語られました。この旅でお二人は意気投合し、登山の心配もなく、最も楽しい旅だったようでした。これが縁で、お二人は昭和五十三年池田錦重隊長の北極点遠征隊に総隊長とそのお供ということで参加されました。
　先生の人柄は清廉潔白、語りはゆっくり一語一語噛みしめるごとく、口数は少なく、背筋を真直ぐ伸ばし、私達の話をニコニコしながら聞いているのが常でした。特に功名心の強い人は体質的にも毛嫌いし、約束の時間は厳しく、十分前に来るのが礼儀と教えられました。お酒が入っても人前で崩れることはなく、崩れそうになると途中で失礼するのが常でした。苗字のごとく澄んだ目はまさに明治人の気概がありました。
　先生を囲んでヒマラヤと北極の隊員は毎年新緑には奥多摩へハイキング、秋には一泊で山の温泉、暮れには新宿で忘年会を行っておりました。先生が昭和五十四年に古稀を迎えられて日大生産工学部機械学科教授を辞される頃から、当時学生であった隊員が奥さんや子供を連れて参加するようになり、一層楽しみにされておられる様子でした。
　昭和六十二年の六月に奥多摩のハイキング以来疲れが取れないとは聞いておりましたが、まさか体が肺癌でむしばまれているとは知らず、池田と私は先生の足腰がめっきり弱くなってきている。これからは強引にお願いして歩くようにしようと相談しておりました。そして、その秋に中房温泉へ行き、先生も杯をかたむけながら来年は北極の十周年になると語られておりました。このときは今にして思うと律義な先生が無理を押して参加されたとしか思われません。
　暮れに用件あって電話を入れましたところ入院されていることを知り、早速お見舞にかけつけました折りも、私のような若輩に対して、病床から起き上り、対応していただいた姿は今では痛々しいばかりです。それから一週間後の昭和六十二年十二月二十日、苦しまれることもなく七十八歳と十一ヶ月の生涯を閉じられました。
　昭和六十三年四月三日、富士山の見渡せる富士霊園で納骨をすまされ、私達ヒマラヤと北極の隊員も参列させていただき、その帰り

道に池田の発案で、先生が亡くなられた後も秋の旅行は続けようということになり、場所も雨飾山と決定しました。今後とも先生の思い出話が語られることでしょう。

先生の祖父は東京で漢学塾を開いておられ、父は祖父の影響で中国語が堪能なことから、明治四十年頃関東州関東法院の通訳官をされておりました。先生は法院官舎（旅大市）で明治四十二年一月九日誕生され、大連第一中学校から、旧制第六高等学校と進まれ、ここで山岳部に入部され、東京帝国大学工学部機械科を昭和九年に卒業されました。東大でもスキー山岳部に籍を置かれました。先般、六高時代の岳友、堀龍雄氏（京大OB）にお逢いし、先生のお話を伺いましたところ、無口で、山はめっぽう強かったと語られておりました。

主な積雪期登山と遠征隊

昭和二年十二月　旧制六高山岳部スキー合宿関温泉に参加（最初の山行）
昭和四年　二月　伯耆大山登頂
　　　　　三月　蒲田側から槍、南岳縦走
昭和五年　一月　涸沢側より前穂登頂
　　　　　四月　北穂高沢より北穂登頂
昭和六年　三月　北穂北壁チンネより北穂登頂
昭和七年　一月　天上沢より北鎌尾根独標を目指すが失敗
　　　　　二月　谷川岳一ノ倉沢より谷川岳登頂
　　　　　八月　東大スキー山岳部朝鮮金剛山遠征隊に参加
昭和八年　一月　槍頂上から北鎌独標まで縦走
　　　　　二月　屏風岩ルート偵察（戦前の登山の終り）
昭和三十八年五月　JAC入会、会員番号五五四五　紹介者初見一雄・折井健一
昭和四十五年秋　ダウラギリ峰フレンチコル（日大山岳部ヒマラヤ登山隊隊長）
昭和五十三年春　日大北極点遠征隊総隊長として北極圏へ

著書に自費出版された「穂高　ヒマラヤ　北極」昭和六十一年刊がある。その他、学会、専門誌の依頼で原稿を書かれること多数、ただし、教育者生活の約二十年間、教科書はすべて自筆で原稿を書かれてコピーして無料で配布されておられたとのこと。

（高橋正彦）

大島　永明氏（一八九七〜一九八八）

本会の最も古い会員の一人である大島永明氏（会員番号五一三番）は、去る二月一日午後二時五十五分、急性心不全のため亡くなられ、故ヨハネ大島永明氏の葬儀は二月六日、東京聖テモテ教会で行われた。

東京高等師範学校付属中学山岳部は、我が国の大学高校中学等、学校山岳会の先駆者の栄を担うものであって大正元年に発足している。翌年には一高、三高、さらに引続き二高、慶応、神戸高商、立教などに山岳会が成立した事情は「山岳」にも詳しい。大島永明氏は、伴野清氏（会員番号二八四番）らと共に、東京高師付属中山岳部に属し、共に中学時代から日本山岳会にも入っていた学生会員の草分けといえよう。

筆者は昭和十六年に一高に入学した旅行部の後輩であるが、当時伴野・大島先輩は、大木・日高・藤島・黒田先輩らと共に旅行部創設期の大先輩であった。たまたま終戦直後、これら諸先輩はいずれも激職から開放されたため、寮の一室にも気軽に見え、私共と車座になって話合いなどする機会が持てた。その結果、昭和四十一年には一高旅行部五十年の記念誌を作る話が持上り、しばしば会合を開き、当時の話を直接伺ったり、その関連で武田久吉先生や、田部重治、中村清太郎氏などにもお会いできた。

この記念誌に大島先輩が最初に登場するのは大木操氏の記事「大正三年鹿島槍から劒岳へ」であり、当時大島永明氏は高師付属中学の四年生であった。大木氏と大町のガイド伝刀林蔵の組が鹿島槍、五竜を越えて、三ノ窓雪渓の初登攀をなしとげ、室堂に達した時、たまたま百瀬慎太郎氏と伴野・大島の組も室堂にいた。共に劒の第三登を果そうとの話は直ちにまとまり、同じく一高文科の矢田部達郎、一高工科の箕作新大の組も合流し、七月二十九日には霧の中、長次郎谷から全員が劒岳頂上に達した。

その頃、神河内を中心に穂高の開拓も行われ、穂高から槍への縦走は行われていたが、槍から穂高への逆縦走はなされず、上記箕作氏の組や、小倉氏の組なども試みて失敗していた。伴野清氏は大町を中心とした登山の一環として、この槍からの逆縦走を成功させたいと考え、大正五年、大島、中上川小六郎、宮川久雄氏らと共に、大町のガイド大西又吉を伴って高瀬川から烏帽子―雲ノ平―太郎兵衛平―槍と歩いて殺生小舎に入った。八月三日には、大キレットへの下りや、キレットの先の飛騨側の急なガレ場のトラバース、北穂直下の天狗岩の小さい足がかりを使っての回り込みなど、苦労もあったが、無事北穂を越え、白出のコルに達し初の逆縦走に成功した。キレットという名称はフィッシャーのクレフトという表現から伴野氏が思いつき、この縦走の記念に初めて使用したものである。

大正七年、旅行部の委員であった大島氏は一年先輩の藤島敏男氏らと共に四十日近くの鮮満支旅行を企画し渡正監、三輪寿壮、嘉治隆一、小池厚之助氏ら三十数名を伴って釜山―京城―平壌―新義州―奉天―大連―旅順―太沽―天津―北京―武昌―漢口―南京―蘇州―上海・杭州―青島を回った。八達嶺や万寿山、泰山などにも登ったが、この旅で大陸を自ら親しく踏み、得た認識や体験は誠に貴重なもので、同行の中から多数の国際人――外交官、政治家、実業家、評論家、スポーツマンが輩出したのも決して偶然ではなかったと、上記五十年史の中で述懐しておられる。

他にも富士五湖から身延、赤城から尾瀬・日光その他を甲藤新・斉藤直一・大山松次郎・矢内原忠雄・辻二郎・桜井盛二氏らと歩いておられるが、奥様となられた清子さんも山がお好きで、一高同級の黒田正夫氏夫人である初子さんの所へ料理など習いに行っておられた。そんな関係で大島氏の結婚式は黒田氏夫妻媒酌の下に行われ、一高旅行部OBの会である縦の会でもよく話題に上ったものである。

大島先輩は私共にとっては、いつもニコニコと話をされる慈父のような存在であった。初期の南極観測に村山雅美氏らと参加した際なども、進んで壮行会に出て来られ、岩波文庫の何冊かを餞別に頂いた記憶があるが、ヒマラヤの話なども常に期待し、楽しんでおら

れたようである。
今年一月には、大島永明さんのような草分け時代の会員に、想い出の一文でも会報に書いて頂ければと、松田雄一氏らと共に依頼したところ、次のような便りを頂いた。「伴野兄とはよく山旅を一所にしました。槍から穂高の初縦走の外、立山の劒も大町側のガイドを連れて登りました。昔話はいろいろありますね。私の弟がビルマで戦死しました時、ヒマラヤを見たことと思います。……中略……やっと適当な写真を見付けましたから同封いたします。……」この時送って頂いたのが、別ページに掲げられた写真で、去る昭和十五年四月二十九日、勲三等瑞宝章を宮中で受けられた時のスナップであろう。しかしこの手紙を頂いた直後、大島さんは敗血症を起され、会報用原稿を永久に頂けずになったのは誠に残念である。
最近、大島さんの唯一の子供さんである雨宮和子さんから頂いたお便りによれば、「父は昨年五月末ころんで軽い骨折を致しましたが、さすが若い時山できたえた体だけあって、御医者様もびっくりされるほどの体力であり、このため昨年十一月の卒寿のお祝を母と共に迎えることができました他、父の命を今年まで支えることができ、一同喜んで居ります」とあり、せめてもの慰めと考えられる。
偉大な山の大先達の昇天に際し、心から御冥福をお祈り申上げる次第である。

略歴

明治三十年十一月三日　東京山王に生れる
明治四十四年　東京高師付属中学に入学。在学中日本山岳会に入会（五一三番）
大正五年　第一高等学校文科入学。旅行部入部
大正八年　東京帝国大学法学部入学
大正十一年四月　東大を卒業し、農商務省入省
大正十四年四月　農商務省の農林・商工分離に当り、商工省に属す。爾来大臣官房文書課長、特許局意匠商標課長、鉱山監督局長、貿易部長を歴任
昭和十六年三月　商工省定年退官。四月、日本貿易振興KK常務取締役
昭和十八年　交易営団理事に転任。北支那開発KK理事兼任
昭和三十一年　米国より技術導入の日本カニゼンKK常務取締役つづいて専務取締役
昭和三十一年四月　国際工業所有権保護協会日本部会理事兼事務局長
昭和四十一年　日本カニゼンKK任期満了
昭和五十二年　国際工業所有権保護協会名誉会員
昭和十六年四月十六日付　正四位に叙せらる
昭和六十三年二月一日　心不全のため逝去。享年九十歳

（中村純二）

谷　博　氏（一九一〇〜一九八八）

昭和二十九年の春、医師国家試験もすんで、専攻する科を決める時、外科系とは思いながらもいろいろと迷って谷先生に相談した所、「やっぱり外科やな」と言われ、母校の第一外科学教室に入りました。

その頃谷先生は、学生時代に山岳部員だった第一外科の講師の先生に依頼されて、宮島の診療所でよく一緒に手術をされておられましたが、私も講師の先生のお供をして手術に入れてもらいいろいろと教えて戴きました。その後、私が昭和三十二年一月より国立福知山病院に、二年後に府立与謝の海療養所に勤務するようになってからは、講師の先生が助教授になられ、また勤務地が谷先生の所に近くなったこともあって、私が行くようになりました。そして昭和三十八年五月に京都府南部の精華町国民健康保険病院に転勤してからも、先生がお元気でおられた十数年間、大体月二回ほど行って、主に虫垂炎の手術をしていましたが、時には稀に見る症例として、先生と共著で医学雑誌の「外科」に発表した、長さ二〇・〇センチ、周囲一八・六センチもある我が国では最も大きい「巨大胆嚢下垂症」と、小腸を約六〇センチ、緊急に切除して救い得た「急性腸間膜動脈閉塞症」の二例のようなものもありました。

確かに外科医というものは手術が好きでないと出来ませんが、谷先生から電話がかかると業務に支障のない限り、夕方の六時前の汽車に乗ってイソイソと出かけたものです。でもそれだけではなく、手術後、静原のお宅に帰りお風呂に入ってさっぱりしたあと、囲炉裏のそばで奥様の手になるすてきな御料理を戴きながら、夜の更けるのも忘れて話したり歌ったりする楽しみに惹かれて出かけたのも確かです。

「御苦労さん。まずは乾杯」に始まり、その日の手術に対する検討ののち、一般的な診療の話題に移って行きますが、いつしか山の話になってしまいます。そしてアルコールがまわると、北大予科の「都ぞ弥生の……」に始って七高造士館の「北辰斜めに……」に至るまで、夜の夜中に大の男が蛮声を張りあげているのを、炉端で微笑みながら遅くまでお付き合いして下さった奥様には今省みて申し訳なく思っております。

こんなに寮歌のお好きな先生ですのに三高山岳部の「吹雪のする日は……」の歌をお聞きしたことがないので、いつでしたかその理由をお尋ねしたところ、「木村君、何でアルピニストが街に住めないのやろ。俺にはそんな考え方があわへんのでなあ……」と笑っておられました。

もう遠い昔のこととなってしまいましたが、昭和初期の北アルプスにおけるバリエーションルート開拓時代に、府立医大予科教授で山岳部長だった北上四郎先生と学生であった谷先生による「ジャンダルム飛騨尾根」の第一下降・第二下降や、「滝谷第二尾根」の初登・「第四尾根」の完登、その他いくつかの初登攀の記録は、当時全く無名の京都医大の名を山岳界に知らしめられたのみならず、その業績は我が国の登山史にも残る栄誉とも申せましょう。

山男と自認する人の中には、ちょっと変っていて、独り善がりの所があり、気位が高く、過去の業績を誇ってそれに浸っている人がありますが、谷先生はあれだけの業績を持っておられるのに自ら話されたことはなく、こちらからお尋ねすると初めて事実を淡々とお話になり、自慢話など一度も聞いたことはありませんでした。

谷先生は常々「屋内登攀」と称して、これと思う山の登攀記録や関連のある文献に眼を通し、その山の概観を把握して岩場や渓谷の略図や鳥瞰図を画き、その地形や状態を頭にたたき込まれておら

れ、私達にも奨められましたが、昭和三十七年五月に先生と二人で穴毛谷の四ノ沢・左俣から笠ヶ岳に登った時、その「屋内登攀」の成果と実力を目のあたりに見せて戴いて、ただただ感心するばかりでした。

このように私達後輩にとっては誇るにたる大先輩でしたが、自らも認められておられた如く、その論理に一見ドグマチックなところがあり、何か質問される時、ギョロッとした眼で簡潔にズバリと言われるので、急には返答に困り、何だか叱られているような雰囲気でした。そしてこちらから話している時には途中で、「ちょっと待て、どこどこまではよく解ったが、それから先をもう一度説明してくれ」と自分が納得出来るまで尋ねられました。

昭和二十七年八月、私が大学の四回生（旧制、今の六回生）の時、涸沢にベースをおいて滝谷や北尾根の岩場に入るので、新書大の三十数ページの計画書を作って先生に見て戴いたのですが、その第一ページに、「かかる無意味な印刷物の作製に関しては、その払われた手数と費用を度外視するも、なおその冗慢なる努力に顰蹙を感ぜざるを得ず。―先輩―」とズバリ冒頭に書かれてあったので、「またやられた」と思いましたが、次のページからはルートの再検討から始まって、変更後のコースの詳細な説明は勿論、携行品・食料品の内容から調理法、さらに私達に出来る救急処置法に至るまで、実に克明に記入しておいて下さいました。後日帰宅した夜に電話で報告した時、めったに褒められたことのない先生が、「よくやった。御苦労さん」と言って下さった時にはホッとして身体の力が脱けるように感じたことは忘れることが出来ません。

先生には非常に厳しい面と同時に、大きく包み込んで指導して下さる温いところがありましたが、事物の処理に際し、山登りに限らず日常生活や診療においても、「事にあたって何を第一にやるべきか」という理念に基づいて行動されるため、その論理も一見ドグマのように感じられたかもしれません。

「決断の時」という言葉がありますが、昭和三十六年の暮も押し迫った頃でした。私に転勤の話があったので相談に行き、ひと通り説明したあとで、「京都に帰るよい機会だと思うのですが……」と言った時、暫く腕を組んで考えておられたあと、「なあ木村君、よう考えてごらん。商人はな、十人が十人共、出来るだけの情報を集めて、これなら必ず売れると見極めを付けてから品物を仕入れるのやけれども、その内でもうけるのはせいぜい二人ぐらいやろう。俺達のような世間知らずの医者が偉そうに機会をねらってなどと思ったところでその情報量なんて知れたものや。君が今までやって来た業績というものは、君自身は知らなくても必ず誰かが見ているもので、長い人生の間には君を見込んで高く買いに来る時が何度かはあるものや。その時にはこちらの言いたいことも言えるし、よい条件も適えられるやろ。この話は君には物足らん。当分は今のまま真面目に勤めていなさい。なにも自ら無理して機会を求めなくてもよい」と言われ、「でももし生涯に一度も自分を買いに来てくれることがなかったら、これは我が運命と諦めるしかないなあ」と笑っておられました。そしてそれから一年余、機会は求めずともやって来ましたが、先生から「今こそ決断する時やぞ」と奨められ、それがその後の私の人生にどれだけプラスになったかは測りしれません。

先生のお宅には奥様の妹さんがおられ、私によく、「兄さんと姉さんはそれは本当に仲がよろしいわ」と言われていましたが、いつか診療所からお宅に帰る野道を歩いていた時に、先生が奥様と結婚された経緯を話して下さって、「俺みたいによい Frau を貰えよ」と冗談とも本気ともつかず、さらりと言われたのを覚えております。

入院中や自宅で療養されていた間、奥様のやさしい献身的な看護を受けられていましたが、「寝たきり」になられて私が一番気に掛ったのは排便と褥瘡で、これに就いて奥様にお尋ねした時、「はい、大便の方は浣腸で一日一回きっちりとありますし、褥瘡も毎日何回か定時に体位の変換をしていますので出来ておりません」とのこと。寝室の風通しもよく、ベッドも清潔に保たれていました。

褥瘡というものは一度出来ると非常に治りにくく、化膿して悪臭を放ち、創が拡がって骨まで露出することがあり、日々の処置も大変ですが、排便のコントロールや体位の変換など、さすがは助産婦の免許をお持ちの奥様、先生も安心して療養されたことでしょう。

昭和四十五年九月、脳血栓症で倒れられ、一時回復に向っていたところ、五十三年に胃潰瘍のために手術を受けられましたが、その後三回の発作があり、六十一年秋の五回目の再発後は床に就かれたままで、昭和六十三年二月八日午後八時五十五分、奥様の手厚い看護も空しく、眠るが如く安らかに永遠の旅に立たれました。

私の山の先輩であると共に、医師として人生の先達としてよき指導者であった谷博先生の想い出のこの拙文が追憶のよすがともなればと思いつつ、心から先生の御冥福を祈りペンをおきます。

略年譜

明治四十三年九月二十六日　京都府北桑田郡宮島村静原（現在の北桑田郡美山町静原）に代々医師の旧家に生る
昭和三年三月　京都府立京都第一中学校卒業
昭和十一年三月　京都府立医科大学予科を経て、京都府立医科大学卒業
昭和十一年四月　京都府立医科大学内科学教室に副手として入局
昭和十三年四月　京都府立医科大学薬理学教室研究科学生として入室
昭和十四年四月　大阪商船株式会社入社
昭和十六年四月　大阪鶴町病院勤務
昭和十八年二月　応召、軍医少尉として南方第十二陸軍病院勤務
昭和二十一年十二月三十一日　復員
昭和二十二年一月　父君の医業を継ぎ六代目の医院開設
昭和二十二年四月〜昭和四十七年九月　北桑田郡医師会長
昭和二十二年四月〜昭和五十一年四月　町立宮島小学校・町立北星中学校・府立北桑田定時制高等学校の各校医
昭和四十一年二月〜昭和四十二年六月　北桑田郡ライオンズクラブ会長
昭和四十二年四月〜昭和五十三年四月　美山町保育園園医
昭和三十八年一月　京都府知事より地域医療に貢献により表彰を受く
昭和五十九年五月　勲五等に叙せられ瑞宝章を受領
昭和六十三年二月八日　逝去、享年七十七歳

登山歴

近畿のうち、京都北山と丹波高原は先生のお住いが丹波高原の中の北桑田郡にあったため、京都一中・府立医大予科・府立医大を通じ、あたかも我が家の庭の如く跋渉されておられます。また比良や鈴鹿の山々も未だ『比良連嶺』（角倉太郎著）や『近畿の山と谷』（住友山岳会編）などが出版されていなかった大正末期から昭和初期に既に数多く登られ、また府立

とくに穂高連峰の岩場や渓谷には異常な執念ともいえる程の情熱を燃やされ、「これが穂高の一人の登山記録か」と思う程の山行です。また昭和十年の京大の「白頭山探検隊」には唯一人府立医大メンバーとして加わっておられます。

医大予科から大学卒業まで、北アルプスの立山連峰・後立山連峰は勿論、とくに穂高連峰の岩場や渓谷には異常な執念ともいえる程の情熱を燃やされ、「これが穂高の一人の登山記録か」と思う程の山行です。また昭和十年の京大の「白頭山探検隊」には唯一人府立医大メンバーとして加わっておられます。

登山記録をすべて記載することはあまりに多く不可能であるため、概略のみとし、初登またはそれに準ずる栄光の業績のみを記載します。

昭和五年七月十六日　奥穂高「ジャンダルム 飛騨尾根」〔京都府立医大予科教授・北上四郎山岳部長の第一下降に次ぐ同部長との第二下降〕
昭和六年七月十九日　北穂高「滝谷第二尾根」初下降
昭和六年七月二十九日　前穂高「明神岳東稜」初登攀
昭和六年七月三十一日　前穂高「明神岳最南峰東南壁」初登攀
昭和七年六月十二日　鹿島槍「天狗尾根」初登攀
昭和七年七月二十九日　北穂高「滝谷第四尾根」初完登
昭和九年十一月三日　槍ヶ岳「バットレス（東壁）」初登攀

（木村義照）

小池文雄氏（一九〇三〜一九八八）

小池さんが逝去されたのを知った暫らく後に、会報「山」五一七号に綴った短い追憶のなかで、私が初めて徳沢の小屋でお会いしたのは昭和十年頃と書いたが、その後旧い山日記を見ていたら、それは昭和八年夏のある日の午後のことであったようだ。とすれば私はまだ十九歳、小池さんは三十歳になったかならないかのときであった。

三十歳といえば、今から思うと随分若いが、当時の私からすれば相当な先輩で、いかにも山に年季の入った人に思えた。囲炉裏ばたに胡座をかき、たしか釣竿をいじっていたように思う。そばにいたのは、当時飛騨の山案内としては名の通った中島作之助で、釣竿を扱っていたのは、或いは中島だったかも知れない。何しろ半世紀以上も昔のことなので、すべてが朧気にしか頭に残っていない。

その時私は上高地から一人でぶらっと徳沢を訪ねたせいもあり、小池さんからはかなり長時間、山の話をうかがったような気がする。記憶に残っていることは一つもないが、小池さんに限らず先輩から聞いた山の話は、その年ごろの私には、すべてがいろいろの形で吸収されて、血となり肉となった筈である。

その後、古い『山岳』をあちこち繰っていたら、小池さんの書かれた積雪期登山の記録がかなりあって、当時社会人でそういう登り方をしていた人は数えるほどしかなかったせいか、少なからぬ尊敬の目を向けるようになったし、「小池文雄」という名前は私の脳裏に消えずに残ったのだった。

昭和十年十二月に私たちの仲間は、乗鞍でスキーと冬山合宿をやった後、私は小谷部全助、鷹野雄一両君と上高地へ入り、西穂高の間ノ岳に登った。その後、私は用事があってやむなく一人下山したが、あとの二君は徳沢へ行き、十一年一月一日に奥又白から北尾根を経て前穂高へ登頂した。丁度そのとき奥又白に幕営していた小池さんも同日前穂高に登られた。小池さんの連れていた山案内が、私

たちとも親しかった奥原守（現・村上―西穂高山荘主人）と平林次男だったことが、小池さんと二人との口がほぐれた因だったようだ。あとから小池さんの噂を二人としたことも思い出される。

それから間もなく戦中戦後の長い空白の期間が続いた。奥又白で小池さんとお会いした私の仲間も、二人とも戦中戦後に亡くなった。

私が再びJACの業務に携わるようになったある日、それがいつ頃か、もうしかと思い出せないのだが、長野県の小池文雄という会員の住所が不明で会との連絡がつかず、会費滞納となっていて、除籍会員の対象であるのを事務所から耳にした。小池さんは『山岳』へも屢々寄稿された熱心な古い会員でもあったので、私は何とか連絡をつけたいと思った。地元の郵便局などに手紙を書いたりして、漸く住所をつきとめ連絡がついて、除籍から免れることができた。

昭和五十三年十二月の年次晩餐会に、はるばる長野県から出席されて、永年会員章を受けられたとき、私はほとんど小池さんの容貌すら忘れていた。そして暫らく懐旧談を交わしたが「貴方のお蔭で永年会員になれましたよ」と、銀の縁のついた永年会員章を胸につけて、喜んでおられたことが今でも忘れられない。

昭和初頭、北アルプス等の高峻山岳の積雪期登山が、ほとんど大学・旧制高校山岳部員及びその若いOBに占められていた時代に、小池さんはそれを実行した数少ない社会人であった。そして、その記録を度々『山岳』に寄稿し、また会報にも通信として寄せた。いまそれを基にして、小池さんの当時の足跡を振返ってみよう。

●昭和二年十二月末、山中金次郎と宮坂治作を案内として厳冬期の鹿島槍ヶ岳を目指した。大冷沢本谷、布引沢を経て主稜線に達し布引岳の先まで登ったが天候悪化のため断念して戻る。『山岳』23―2参照。この全文が『日本登山記録大成』12に採録されている。厳冬期の鹿島槍は当時まだ未登であり、小池さんはひそかにそれを狙っていたのではないかと思う。厳冬期の初登は昭和五年十二月の立教大、堀田弥一氏によるものとされている。

●昭和五年三月末から四月にかけ、八方尾根―唐松小屋―五竜岳往復後、不帰を経て白馬鑓まで縦走（友人一名の他横川文蔵を伴う）、この初縦走は小池氏らの数日前、立教大山岳部（堀田弥一氏ら）と明治大山岳部（交野武一氏ら）によって奇しくも同日に行われた。『山岳』25―2所収「春、頂稜を追ひて」参照。

●昭和五年十二月下旬、八ツの権現岳登頂。『山岳』26―1所収「冬の臼窪岩小屋と権現岳」参照。

●昭和六年四月初旬、唐沢金十郎を案内人夫とし、梛ノ脇から中田切川をルートとして空木岳積雪期初登。『山岳』26―2。『日本登山記録大成』20に採録。

●昭和七年十二月～翌八年一月、厳冬期赤牛岳初登頂（案内人夫桜井一雄、桜井親次）。『山岳』28―2。「小池文雄による烏帽子越えの厳冬期赤牛岳初登頂は、北アルプスにおける積雪期初登頂時代の最後に残された大課題の解決とみることが出来る」と山崎安治氏は『日本登山記録大成』15に書いている。

●昭和八年一月、浅間山スキー登山。『会報』23。

●昭和八年三月下旬～四月初旬、畠山善作を伴い東沢乗越より餓鬼岳、北燕岳。『会報』25。

●昭和十一年一月、奥又白から前穂高。厳冬期としては最初の記録。『山と渓谷』41。『日本登山記録大成』4に採録。
●昭和十一年三月下旬〜四月初旬、餓鬼岳。案内人夫は桜井とのみあり、一雄か。『会報』57。
●昭和十二年三月下旬〜四月初旬、中尾の山本清をつれクリヤ谷から笠ヶ岳、錫杖岳登頂。『会報』65。
●昭和十三年一月、富士山。『会報』73。
●昭和十三年三月下旬〜四月初旬、穴毛谷から笠ヶ岳。『会報』77。
●昭和十四年一月上旬、桜井親次を伴い北葛岳登頂。『会報』84。

以上が『山岳』と会報に載っているほとんどすべての寄稿だが、『山岳』24—3所収の昭和四年十一月の会員通信には、「後立山山脈中地形図の誤りに就いて」という一文も見られる。

また『山と渓谷』誌の総索引を繰ってみると昭和六年から同十五年ごろまでに、小池さんによる二十数篇の寄稿が見出された。その中には先述の記録と重複しているものがかなりあるが、「南駒ヶ岳オンボロ沢遡行」(昭6年7月)、「濁より唐沢岳・餓鬼岳をへて二ノ沢を下る」(7・7)、「厳冬の烏帽子・三ツ岳」(8・1)、「春の稲子渋ノ湯と根石岳」(8・3)、「餓鬼・唐沢山塊の積雪季登路」(10・1)、「窮冬日記—厳冬の黒部川遡行」(11・1)、「スゴ谷より薬師岳・金作沢へ」(12・7)、「積雪期における八ヶ岳東面」(13・1)などがあり、それらは先述の記録と異るものであって、当時の小池さんの足跡を窺うに足りる。発表されたなかには無雪期の記録もあるが、小池さんはかなり困難なルートを目指していたことが、特徴といえよう。また、どちらかというと友人と同行するより、信頼に足りる山案内との山行が多かったのも、同氏の登り方であったようだ。

なお昭和十四年四月から約二年間、北海道留萠に在住したが、その間に大雪山系の冬山や利尻山等にも登ったが、「利尻富士」(『山と渓谷』21年8月)はその時の紀行と想像される。

私との関係は先述の通りで特に深いものではないが、同氏を熟知する会員も見当らぬので不適任とは知りつつ、枉げて筆をとった。偶々去る八月上旬西穂高山荘に一泊した折、村上守君と会って懐旧談に時のたつのを忘れたが、七十八歳になった彼も独得の信州なまりで、小池さんを偲びつつ往時を語っていたことを付け加えておきたい。

小池さんは長野県松代町の出身だが、大正末期一時山形県に居住された関係から、青年時代に山スキー、冬山に親しみ、登山に専念したい一心から当時としては最も時間的余裕のある教職の道を選んだとうかがっている。

またスキーに長じていたため、かなり高齢になってから自動車運転免許証を取得し、北海道や九州へも自らドライブするのが楽しみであった。偶々昭和六十三年二月二十七日、自家用車を運転して埼玉県熊谷市から長野市松代町の自宅へ向かう途中、上田市大屋で自動車事故にあい、翌日惜しくも死去された。合掌。

略　歴

明治三十六年(一九〇三)六月五日　長野県埴科郡松代町(現・長野市松代町)に生まれる

大正十四年三月　米沢高等工業学校電気工学科(現・山形大学工学部)を

卒業し信濃電気株式会社（現・中部電力）へ技師として入社したが、主として登山に専念したい欲求から、
昭和三年四月　長野県立須坂高等女学校教諭として教職の道に入る
昭和三年九月　日本山岳会入会（会員番号一〇八四）
昭和六年　県立上田高等女学校、その後飯山高等女学校教諭となり、昭和十四年四月、北海道庁立留萌中学校教諭となったが、十六年、再び長野県立大町中学校教諭となり、戦争中は陸軍少尉として出征、南方海域で撃沈されたが幸に帰還し得た
昭和二十二年三月　長野県立大町中学校校長事務取扱を命ぜられる。当時大町に疎開されていた槇有恒氏の知遇を得る
二十二年四月　北安曇郡町立池田中学校校長（以下新制）、須坂町立相森中学校長、更級郡八幡村立八幡中学校長等を歴任
二十七年四月長野県立篠ノ井高等学校教頭、野沢北高等学校教頭
三十八年三月　同高校を最後に三十五年間に亘る公立高等学校教員を退職する
三十八年四月以降六十一年まで、私立埴生高校、長野文化高等学校、長野中央高等学校、県立須坂高校、中条高校、長野工業高校、長野南高校、長野北部高校等の教諭、或いは講師として教育に携わった。長い年月に亘り、各学校の生徒に登山の指導を行なったことは枚挙に遑がない
昭和五十三年十二月　日本山岳会年次晩餐会のとき永年会員となる
六十三年二月二十八日　自ら運転する自家用車の自動車事故により、午前十一時三十分死去、享年八十四歳八ヶ月

（望月達夫）

織田　収　氏（一八九七〜一九八八）

私が織田さんを初めて知ったのは、二十数年前の学生時代でした。学生といっても、勉強はほっぽり出して山登りに明け暮れていたころ、たまたま大山でお逢いし、大先輩に「廣江でございます」と挨拶したら、「君が廣江の弟か。えらい、山登りで頑張っとうしこだな。」とにこやかに声をかけていただきました。兄はスキーで、私は山でと今日まで大変かわいがっていただきました。

我々山陰の山登りの好きな連中で、ヒマラヤへの夢を語り合っているうちに、気運が盛り上がりました。いざ出掛けようと思っても資金的に苦しく、日本山岳会山陰支部長であった織田さんを担ぎ出して、日本山岳会ヒマラヤ遠征隊を組織しました。当時ネパールは外国人の登山禁止で、我々の目標をパキスタンのヒンズークシュ山脈のピーク六四四一㍍として、私を含め四人の隊員で出掛けることになりました。織田さんというバックボーンがあったおかげで世間的信用を得、資金集めも順調に推移して、二日間に分け、処女峰に登頂することができました。地図上、ピーク六四四一㍍と標高でしか表わされていないその山を、ヒムゾムと命名しました。

ヒムは現地語ではた（機）を織るという意味で、御世話になった織田さんへの、隊員一同よりのせめてもの御礼の意味で付けさせていただきました。このことを織田さんは大変喜んでくださり、帰国後、奥様の経営される皆生温泉松風閣で大変な御馳走にあずかりま

した。

私の明大時代の山仲間で、先年アラスカのマッキンリーで亡くなった植村直己君も、大変かわいがっていただいた一人です。無名のころから植村のよき理解者として、親身になって育んでいただきました。植村も世界中の行く先々から、織田さんへは必ず便りを書いていたようです。その植村が結婚したときには、新婚旅行がわりに皆生温泉へ招待したり、不慮の事故で亡くなったときにも、公子夫人に何回も励ましの便りを出したりと、父親にも勝る気くばりをいただきました。

織田さんと山へ御一緒させていただいた思い出として、大山平原ゴルフができた年の秋に、仁王茶屋の裏手より、南光河原（佐蛇川）をゴルフ場まで下降したことがあります。真っ盛りの紅葉の中に、庭木のごとき老松が絶妙のコントラストを見せ、あたかも南画を見ているようでした。織田さんのルート選択の素晴らしさに、同行者一同感心したものです。

旅行好きの織田さんへのせめてものお返しにと、ヒマラヤ眺望の旅を何回かお誘いしたのですが、実現しなかったのが心残りです。ネパールなら私が案内できる、山の好きな織田さんにはもってこいの国と思ったのですが、もう少し早い時期にお誘いすれば……と後悔しています。

大山への有料道路が出来るとき、昔からの信仰登山の人達のいこいと道しるべのためにあった、数多くの松の大木を一丁ごとに立てられた一丁目地蔵とを、道路公団が切り捨てたり山の中へ捨て去ろうとしたことがありました。このとき、織田さんは大山国立公園協会副会長として公団側と掛け合い、松はどうしても切らなければならない二本だけを切ること、そして地蔵さんは山中に捨てられていたものを再度新道の両側に呼び戻すことに成功されました。今の大山道路にこの二つがなければ、と思うと、織田さんの目の確かさに感心させられます。

喜寿のお祝のときいただいた手作りの茶碗に、〝山のエスプリはその頂にあり　神はここに降り人はここに登る〟という織田さんの好きだった詩が書かれています。今も時々この茶碗でお茶をいただいていますが、山と自然とを愛しつづけられた心がジーンと伝わってくるような気がします。

織田さん、先立たれた最愛の奥様菊枝さんにお会いになったことでしょう。また、山の後輩であった佐野勇一さんや石原健次さん、植村たち大勢の仲間が待ち構えていたことでしょう。一献傾けながらの楽しい語らいが、再開されていることと思います。

織田さんにお作りいただいた日本山岳会山陰支部も、来年は四十周年を迎えます。記念事業も企画し、一緒に御祝の会をと張り切っておりましたのに、大きな心の支えを失ってしまいました。しかし、会員一同、織田さんの教えを心の糧に、頑張っていきたいと思います。

どうか天国より、御遺族とともに我々をも御見守り下さるようお願いするとともに、心よりの御冥福をお祈り申し上げ、御別れの言葉とさせていただきます。合掌。

略　歴

明治三十年八月十五日　米子市東町に生まれる

大正九年七月　東亜同文書院卒業
大正十一年四月　大阪毎日新聞社入社
昭和七年十二月　山陰日日新聞社主幹
昭和十二年四月　鳥取県議会議員
昭和十四年十月　日本海新聞社副社長
昭和二十六年十一月　鳥取県軟式野球連盟会長　日本山岳会山陰支部長
　十二月　鳥取県スキー連盟会長
昭和二十八年十二月　株式会社ラジオ山陰取締役社長（現、山陰放送）
昭和三十年四月　大山国立公園協会会長
昭和三十二年七月　米子ロータリークラブ会長
昭和三十六年四月　大山観光開発株式会社取締役
昭和三十八年四月　社団法人日本民間放送連盟理事
昭和四十九年五月　株式会社山陰放送取締役相談役
昭和六十三年三月一日　米子市皆生の自宅で永眠。九十歳。盛徳院滬嶽収道居士
昭和四十三年四月　勲三等瑞宝章
昭和六十三年三月　従五位・銀杯

（廣江　研）

水腰　英隆　氏（一九三九～一九八八）

四月二十一日、サガルマータのベースキャンプにて水腰英隆氏逝く。カトマンズまでお迎えにあがり、ソナンブナートで茶毘にする煙りがヒマラヤの青い空に高く昇って消えて行った事実を確認しても、未だに水腰さんの死を信じることができない。あまりにも早過ぎた故に、あまりにも大切な友人であったが故に、心の深いところで、水腰さんの死を拒絶しているのかも知れません。

水腰さんは、越中でも飛騨との国境にある雪深い細入村の名家に生まれ、名門富山高校から金沢大学へと医学の道を歩まれるかたわら、地元の剣岳を中心に山登りを続けてきました。一九七五年のパキスタンのK６遠征をかわきりに、一九八四年にはヒマラヤの難峰ガウリサンカールに遠征（日本山岳会東海支部）、そして今回は、チョモランマ・サガルマータ三国友好交差縦走登山へと参加されました。

富山市民病院に席をおかれてからは、専門の脳外科医としての御活躍はもとより、年間八十件を超す剣岳から薬師岳へかけての事故者のほとんどを市民病院に引受けていただきました。富山県警の山岳警備隊のよき理解者として、御霊前には、山岳警備隊より感謝状を贈られています。山岳遭難救助は、救助はもとより、後遺症なき社会復帰が医者に課せられた使命であるというのが水腰さんの持論でした。ヘリコプターの機動力をフルに活用して、一刻も早く病院に収容するのが、これからの救助組織のありかただと熱っぽく説いておりました。それもあってか、市民病院の改築に際しては、病院の屋上に全国でも初めてヘリポートを設置するよう並々ならない御尽力をいただいたのも、後遺症なき社会復帰を持論とする水腰さんの、登山者に対する深い愛情があったからだと思います。

金沢大学は、剣沢と雷鳥沢に診療所を開設しているので、水腰さ

んは学生時代から入山し、山岳診療にかかわってきました。ことに登山医学に関しては造詣が深く、登山研修所では、豊富な臨床経験に基づく講義を毎回のようにお願いしてきました。おそらく、日本で一番ではないかと思われるほど豊富な、登山医学の臨床スライド写真をもとに、登山医学一般と高所医学の二回に分けて講義していただきました。御自身でも、登山医学を大系づけるのがライフワークの一つであったと思いますが、志半ばにして逝かれたことを悔むのは決して私一人ではないでしょう。

水腰さんと知り合いになったのは、私が文部省登山研修所に勤務するようになってからですが、生まれたままの富山弁で、しかも、専門的な脳浮腫、肺水腫など、高所の重篤な病症について話に熱がはいると、富山弁がエスカレートするのです。脳浮腫、肺水腫がありふれた病気であること、高所の障害と脱水との関係など興味深く聞かせていただきました。なによりも豊富な事例に基づいた話ですので迫力があります。

多少やんちゃで、迫力のある人でしたが、私や研修生の幼稚ともいえる質問にも親切丁寧にわかりやすく答えていただきました。ことに、私とは同じ年ということもあり、気楽に悪口を言いあえるほどの付き合いをさせていただいたのですが、それでもずい分と気を遣っていただいたように思います。大親友の剣沢小屋の佐伯友邦さんや天狗の小屋の佐伯守さんをはじめ、どんな人にも分けへだてなくつき合い、とても楽しい人でした。一見やんちゃに見えながら、とても親身になって人の世話をする優しい人だったと思います。山の人達と山でマージャンをすることを非常に楽しみにしていました。時としてメンバーが不足すると、このときばかりは不気げんで室堂から剣沢へ人を（犠牲者は警備隊の人が多かったですが）呼び寄せてさえする人でした。とても愉快なマージャンでしたが、とても強く、友邦さんや私はずい分やられました。

人からみれば、やれ遠征だなんだかんだとうつつをぬかし、全く意味のないかも知れないことに情熱を燃やし、堂々めぐりの山の話を口から泡を飛ばして議論する様は、ある意味では、あきれかえる光景です。こんな私達に、奥様から極楽トンボの名を頂だいいたしましたが、まさにその通りかも知れません。

考えて見れば、よき奥様や御子息に恵まれたからこそ、夢を見続け、燃焼しつくすことができたのだと思います。水腰さんは全くの幸せ者です。子供のように、いつでも目を輝かせて極楽にいった水腰さんは、多分トンボを集めて、大好きなマージャンを愉快に打っているでしょう。

山を好きな人には、極楽トンボが多いようです。例にたがわず、登山研修所にも極楽トンボが大勢集まってきます。そうした人達が集まって信州の鹿島槍を仰ぎ、青木湖を見下ろす眺望のよい高台に山小屋を建てました。

富山弁では、馬鹿なことをする人を「ダラブツ」といいますが、極楽トンボの小屋にふさわしく陀羅佛小屋と命名しました。もちろん水腰さんは仕かけ人の中心人物ですが、夢を見続けて、何かを求めて山を登る人達の心のベースキャンプが欲しかったのです。この小屋に集まる人達が、友情だけを絆に、いい山登り、豊かな遠征ができることを夢みていたと思います。まだまだ水腰さんには、いい

山登り、いい遠征の仕掛人になって欲しかったのですがとても残念なことです。

水腰さん、私達一生懸命、いい山登りを求め続けます。どうぞ静かに深くおやすみください。合掌。

略年譜

昭和十四年十月十日　富山県細入村に生れる。富山県立富山高校卒業。金沢大学医学部卒業の後、昭和五十年富山市民病院に勤務

昭和五十年　K6遠征（富山隊）

昭和五十九年　ガウリサンカール遠征（日本山岳会東海支部隊）

昭和六十三年　チョモランマ・サガルマータ三国友好登山隊参加、四月二十一日没

（柳沢昭夫）

桑原　武夫氏（一九〇四～一九八八）

桑はん（仲間うちの言い方で許してもらう）が亡くなられた。この二、三年病院へ入ったり出たりであったが、昨年十一月、文化勲章受章の少し前から元気になった。記念パーティでのスピーチもエスプリのきいたよい話だったし、本年早々の梅棹さんの朝日賞受賞パーティでも元気だった。

この調子なら九十歳まで大丈夫かとおもったものである。

六月上旬、家内がおくやみにいきたいというので、お宅に奥様をお訪ねした。

遺影を前にしていろいろ想い出を話していると、亡くなられた実感がどうしても湧かず、「何をシケた顔をしているんだ」と笑いながら、のっそりとあらわれそうな気がしてならなかった。

桑はんと知りあえたのは、チョゴリザを通じてであったが、山の想い出よりも、ほかのいろんなことのほうが多い。

専門的な山の話などは、私たちの会合ではあまりでず、世事万般、ひろいレパートリーにわたっていた。

文化・歴史・科学・文学・食いものなど碩学の桑はんを前にしてオコがましいことであったが、決して鼻の先であしらわれることはなかった。まともに受けとめて論議に熱中されたものである。

こうした論議のなかで気がついたのは、桑はんの思考は、常により高い見地にたつことを忘れなかったことである。どうした位置づけで、それを考えるのかに必ず論議はもどっていったのである。

チョゴリザ登山のときでも、そうした思考態度が焦る隊員の心をときほぐし、余裕をうしなわせなかった。

登山にこんなことを言うのは変かもしれぬが、桑はんの人徳がチョゴリザ遠征を成功させたとおもう。

これは隊員一同が異議なく賛同してくれることだろう。

C3の加藤泰安副隊長との俳句のやりとり、アタック失敗後の私の通信メモにかいた「月明星稀といいたいところでしたが」の語句をみて、余裕ありと判断されたこと、高度障害で休養に帰ってきた若い隊員のグチ話を笑いながら受けとめた桑はん。

こうした一連のふるまいのなかから、たくまずにチーム・ワーク

が強化され、とげとげした雰囲気がなくなり、隊の復元力がうまれた。リエゾンのワジー大尉は典型的な軍人気質で、しかも厳格な回教徒である。こうした性格は、ともすれば隊員とまさつを生じがちであったが、桑はんには絶対に心服していたようである。
登頂成功しラワルピンデイに帰ったその日に少佐に進級した。ワジー少佐は
「これはすべてプロフェッサーのおかげである。感謝にたえない」と涙ぐみながら桑はんの両手をかたく握ってはなさなかった。
こうしたときの桑はんの顔は実にすばらしい。テレにテレて「コングラチュレーション」といって、うなずくだけであったが、満面の笑みは心からの喜びをつたえて余りがあった。
余談になるが、数年後サルトロ・カンリ遠征隊がスカルドで、チョゴリザのハイ・ポーターの一人、イスマイルに会った。
再び加藤泰安サーブに会えて感激して泣いたそうである。イスマイルによれば、加藤さんはグレート・サーブである。チョゴリザでトランクの鍵を彼に預けてくれた。これほどの信頼をうけたことは生涯忘れられぬことだったのである。
回教徒は、われわれと全く別の考え方や習慣の世界に住んでいるようにみえるが、人間の心の奥底には共通の琴線があるようである。人の善意や誠意は、すべてを超えて理解されるものであろう。
毎年一月七日にＡＡＣＫ幹部の新年宴会を祇園で開く。今西(錦)、西堀、桑原、多田の元老をはじめ四手井、今西(寿)、梅棹、中尾、林、山口、中島、斉藤、平井、岩坪など十五、六人である。
チョゴリザ、アンナプルナ、サルトロ、ノシャックの連中は八月四日、アンチョゴ会と称して集まっている。場所は林君と私が在住しているので北陸方面が多い。
二つの会とも桑はんの出席率は抜群であった。山の連中との集りを心から楽しんでおられたようである。
アンチョゴ会を越前海岸で開いたとき、桑はんの水泳をはじめてみた。背泳が得意で長身をくねらせてゆっくりしたストロークで、波間をぬっていったのには感嘆した。
敦賀出身のこともあってか、北陸が好きで会合以外でも遊びにこられたものである。
金沢に勤務していたとき奥様と二人でおみえになったことがある。鮴(ごり)料理が好きだからというので、家内と二人で鮴料理専門の料亭へ案内した。大変ご満悦だったことはいうまでもない。ただ数年たってから家内から聞いたのだが、奥様はたべるふりをされただけだったそうである。きりょうの悪い魚はお嫌いとのことであった。桑はんはそれに気がつかなかったようである。このへんのやりとりは、羨しいほどよいご夫婦だった。
白山のふもと、中宮温泉でのアンチョゴ会は面白かった。
宴なかばで興いたりアルバイトの女子短大生と桑はんが野球拳をはじめた。これは脱ぐものの多い女性が勝つにきまっているゲームである。案の定、桑はんはパンツ一枚になってしまった。このスナップは手もとにあるが、浴衣がけの桑はんが若い女の子を相手に、長身をおどらせて拳をだそうとしている。
今みるとおかしいやら、なつかしいやらであるが桑はんの名誉のために門外不出にしている。

白山スーパー林道往復、マイクロ・バスの運転手が白山で一番うまい水を案内してくれ、ウイスキーの水割がバス内をめぐった。

兼六園で昼食散会、幹事の私はつかれはてたものである。もっとも、（一番のんでよっぱらったのは藤平だ）と誰かのかげぐちだったが、金沢言葉ではこれを「亭主八杯」という。

今年はチョゴリザ登頂三十年になるので盛大にやろう。物故隊員もふえたので奥さん方も是非およびしようということで、桑はんも会合を心まちにして、どうなっているのかと催促されたものである。

九月一日は越中八尾「風の盆」である。これも、どうしてもみたいとのことで、一日の夜、宿をとっておいたのに。

二つとも桑はんの憶い出を語るのに、ふさわしい集りでよい供養になるだろう。是非実現したいものである。

（藤平正夫）

略年譜

明治三十七年五月十日　福井県生まれ。京都一中、第三高等学校をへて
昭和三年三月　京都帝国大学文学部仏文学科卒業。東北大学助教授の後
昭和二十三年十一月　京都大学人文科学研究所教授、同三十四年同研究所所長
昭和四十三年三月　京都大学を定年退官
大正八年七月　同級生七人と富士山登山
大正十一年十二月　越後関温泉で初めてスキーを学ぶ
大正十四年三月　西堀栄三郎氏らと仙丈岳、北岳など積雪期初登頂
昭和四年八月　尾上郷川を遡り、白山をへて中ノ川を下る
昭和三十三年一月から三十八年月　京都大学学士山岳会長
昭和三十三年　チョゴリザ遠征（隊長）
昭和五十年十二月　フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章受賞
昭和六十二年　文化勲賞受賞
学問的業績は桑原武夫全集（岩波書店）にまとめられているが、『登山の文化史』では、登山を文化的行為と規定した。他に山の関係では『チョゴリザ登頂』など。

森田茂氏（一九一五〜一九八八）

森田茂先生は、昭和八年、東京慈恵会医科大学予科入学と同時に山岳部に入部されました。当時、慈恵医大山岳部は、揺籃期から充実期に入った頃で、慈恵医大苗場ヒュッテを建設したりした錚錚たるメンバーが在籍しており、森田先生もその中に伍して、卒業までの七年間、谷川岳、北アルプス、苗場ヒュッテでのスキー合宿等に足跡をのこされ、また、昭和十二年に発刊された部報ＪＯＣＨ３号の編集にもあたられました。

昭和十五年、大学卒業と同時に海軍軍医中尉に任官、南太平洋を転戦され、終戦時は、海軍軍医少佐としてラバウルに駐屯して居られました。当時、ラバウルには同じく山岳部出身の故武藤晃先輩も海軍軍医として勤務しておられ、食料の乏しい場所にいた武藤先輩が、時々ＳＯＳの伝令を出すと、森田先生がバナナその他の食料を届けてくれたと、当時の話を武藤先輩から聞かされたものです。

終戦後の昭和二十一年、慈恵医大解剖学教室に入られ、講師、助教授を経て、二十九年、東京教育大学助教授に転じ、三十一年、同大学教授に就任されました。昭和三十九年には、母校東京慈恵会医科大学教授に御就任、解剖学講座を担当され、昭和五十五年、定年退職されるまで、解剖学、人類学の研究と後輩の教育に精進されました。在任中、学生部長や教学委員長もつとめ、また、昭和五十一年から六十二年まで、千葉大学の非常勤講師としても教育に携わっておられました。定年退職後も客員教授として、また、慈恵看護専門学校長として母校のためにつくされ、昭和六十三年四月には、勲四等旭日小綬章を受章されました。

私が学生の頃、先生は講師として御活躍の時代で、講義も受けた筈なのですが、山のことばかりやっていたのと、当時、解剖には新井先生という名物教授がおられ、ユニークな講義をされるので、真面目一方の森田講師の講義の印象は残念ながら濃くありません。

昭和四十一年二月、故杉本良一部長の後をうけて山岳部部長に御就任、同時にOB会である山の会会長も兼ねることになり、その頃から俄然、私どもとの接触が密になりました。

丁度、各大学のヒマラヤ遠征が隆盛期に入った頃で、エクスペディションドクターとしての参加要請を受けて、山の会会員が次々と遠征に参加しました。毎年、誰かが海外に出ているといった状態で、森田会長は、その度に、それぞれの遠征計画を検討し、派遣する山の会会員を人選し、在籍している教室に参加の許可を懇請し、心配する家族を説得し、出発を羽田で見送り、遠征期間中は隊の成功と無事を願い、帰国を羽田に迎えるといったパターンの繰返しで、今思えば、一名か二名であっても毎年遠征隊を出しているのと同じ心労だったと思われます。

韓国、アラスカ、ヒマラヤと学生をメンバーに加えての慈恵医大単独での海外遠征では、アクシデントを心配してしぶる大学側の説得に尽力して下さいました。

森田先生は、大変に温厚な紳士で、私は先生に叱られた記憶はありませんが、慈恵医大単独でのガネッシュヒマールV峰の遠征計画が進行中のこと、「僕は、君か大森君かが隊長を引き受けない限りこの計画は許可しないからね」と言い渡されました。その時の先生のいつになく厳しかったお顔は忘れることができません。この計画は、慈恵医大創立百年を記念して、森田先生を総指揮に仰いで、立案、実行され、登頂に成功したわけですが、私達は、先生に是非一緒に現地入りを、それが不可能ならせめて下山の頃カトマンズにおいで下さいと懇請したのですが、大学の入試や教学関係の仕事でその頃は大学を離れられないからとOKしては下さらず、その後も遂にネパール訪問の機会はなく、先生に素晴らしいヒマラヤの峰々を御覧いただけなかったことは痛恨の極みです。

先生は、また、昭和二十五年に創設された慈恵医大槍ヶ岳山岳診療所の管理運営にもあたられ、派遣医師の確保や資金面での大学側との折衝などで長年苦労されましたが、昭和四十五年に、北アルプス南部地区の遭難防止対策協会から、昭和六十一年に、北アルプス北部地区遭難防止対策協会から、多年にわたる登山者の診療と遭難救助に対し感謝状がおくられている。

晩年の先生は、山の会のメンバーと新橋烏森(カラス)界隈で飲み歩くのを

楽しみにしておられました。糖尿病に罹患しておられたのに、そのことは一切われわれにはお漏らしにならず、ニコニコと杯を傾けておられたのです。

昭和六十三年三月六日、突然森田先生御入院のしらせが入った。糖尿病を基盤とした重症肺炎で、意識がなく、面会謝絶で、ＩＣＵ（集中治療室）の中というむごいしらせだった。以来四カ月にわたるＩＣＵ内での闘病生活が続いたが、快方にむかってほしいというわれわれの切なる願いも空しく、七月五日逝去された。

御存命中、なんだかんだと難題をもちかけ、また、遠征などでも一番御心配をおかけすることの多かった私は、御逝去の翌日、御自宅にお悔みに参上したが、既に御遺体はなかった。後輩達の解剖学実習の教材たるべく献体をされ、母校に移された後であった。日頃の先生の教育に対する確固たる信念と厳しい姿勢とを目のあたりにみる思いで御遺影に深く頭を垂れ御冥福をお祈りした。

略年譜

大正四年一月一日　東京に生れる
昭和八年　東京慈恵会医科大学予科入学、山岳部入部
昭和十五年　東京慈恵会医科大学卒業、任海軍軍医中尉
昭和二十一年　海軍軍医少佐にて予備役、東京慈恵会医科大学助手
昭和二十三年　東京慈恵会医科大学講師
昭和二十九年　東京慈恵会医科大学助教授、東京教育大学助教授
昭和三十一年　東京教育大学教授
昭和三十五年　日本山岳会入会
昭和三十九年東京慈恵会医科大学教授（解剖学講座担当）
昭和四十一年　東京慈恵会医科大学山岳部部長（昭和五十五年まで）
昭和五十一年　千葉大学講師（非常勤）（昭和六十二年まで）
昭和五十五年　東京慈恵会医科大学定年退職、同校客員教授、慈恵看護専門学校長（昭和六十年まで）
昭和六十三年　勲四等旭日小綬章受章
昭和六十三年七月五日　逝去、享年七十三歳

（**長尾悌夫**）

川森左智子氏（一九〇七〜一九八八）

五月二十日総会の日に川森さんが亡くなられた。伊東の国立温泉病院から熱海ケアホテルへ移られたのが一昨年の暮である。温泉病院ではリハビリを受けていらっしゃったが、熱海ではほとんどベッドの生活のご様子だった。

昭和六十年六月に日本山岳会創立八十周年記念の展示品をお借りしに伊東へ伺った頃は、言語と歩行がほんの少しご不自由だったもののとてもお元気で、伊東の海と街を一望するすばらしいお宅でアルバムを見ながら山のお話をして下さったり、ご主人にアトリエのたくさんの絵を見せていただいたりして本当に楽しい一日を過ごしたことが夢のようになつかしい。その後もお見舞に伺って山や山岳会のあれこれをお話すると目をきらきらさせて嬉しそうにきいて下さったし、一昨年秋、名誉会員推せんが決ったことをお知らせに伺った時は本当にお喜びになり、車椅子ででも年次晩さん会に出席し

たいとおっしゃったのが忘れられない。

今、私の前に展げた写真集『山と闘ふ』(昭和十四年六月発行、朝日新聞社編)の中に、溌溂とした川森さんの姿がある。

昭和七年、海野治良氏に岩登りの手ほどきを受けてからその面白さにとりつかれ、日本登高会に入会。昭和十一年夏には海野氏らとともに前穂高奥又白側第四峰フェースの初登はんに成功した。日本登高会会報を見ると昭和七年五月、山の映画会出席者の中にはじめて川森圓次郎、時子(注・本名、左智子はペンネーム)夫妻の名前があり、その後も九年四月の芝倉沢、八ヶ岳にもご夫妻での参加が記録されている。昭和十年前後の涸沢本谷での充実した生活、それから前記十一年の前穂四峰フェースの登はんへと、この時期が川森さんの山登りの絶頂期だったのではないだろうか。海野さんに伺うと、この頃の川森さんは山に対して本当にひたむきで、何ごとも素直に吸収されたという。

そしてその後の昭和三十二年のヨーロッパ・アルプスでの輝かしい登山へと続くのだが、私たちにとって全く不幸なことは、川森さんとの山行がほとんどなかったことである。スキーはJAC東京支部が主催したスキースクールに講師としてたびたび参加されていたので、古いメンバーは川森さんのエレガントなフランスのエミール・アレー式スキーを知っていると思うが。山登り、スキー、そしてカメラ、お料理、日本刺しゅうと、何をとっても一流の腕前であり、私たちにとっては雲上人のような方であったが、婦人懇談会の行事にはいつも一会員として参加されメンバーシップを大切にして下さった。婦人懇談会の行事は名簿の順番で係が廻ってくるのだが、昭和五十九年の忘年会には川森さんも係に当り「お名前だけで結構ですから」と恐縮する私たちに、「大丈夫よ」とわざわざ伊東から前日上京され、国際文化会館に宿泊して当日はもちろん準備会にも出席して下さった。そして悲しいことに、これが川森さんがルームに見えられた最後になってしまった。

川森さんは、「山登りはあくまで趣味であって、命をかけたり、家人や周囲に迷惑をかけてはいけない」というのが信条で、「自分で作ったお金で、主婦としても手落ちなく登り続けていく」ことを誇りとされていた。パートナーであった小林静子(旧姓長谷川)さんのお話をきいても、出かける時は毎日のおかずをきちんと冷凍庫に用意するなど、それはみごとだったという。スキだらけでだらしない私たちにとって、完璧主義、負けず嫌いの川森さんは少しまばゆい存在であったことは確かだが、そのご自分の思うままにさっそうと生きていらした川森さんが、お会いするたびに目に見えて弱っていかれ、いつも山や雪で焼いていらっしゃったお顔が白くすき透って、まるでかわいいお人形さんのようになられたのは本当に胸がいたむ思いであった。ご自分でもどんなにか歯がゆく、無念に思われたことであろうか。もっとたびたびお見舞に伺わなかったことが何とも心残りで、申しわけない思いでいっぱいである。

略年譜

明治四十年　石田雄二(陸軍少将・軍医)の長女として東京小石川に生れる

昭和二年　同志社大専門部卒業　京都在住中に洛北の山を歩き、山登りの魅力につかれる

昭和三年　川森圓次郎氏と結婚

昭和七年　交流のあった上田哲農氏らを通じて海野治良氏に紹介され、岩登りの指導を受ける
同年日本登高会に入会、その後山行、集会に活発に参加
昭和十一年　海野、泉田氏とともに前穂高奥又白側第四峰フェース（日本登高会ルート）初登頂
昭和十三年　藤木九三、新村正一、長谷川静子、上田安子と北穂高第三尾根登はん
昭和二十二年　日本山岳会入会　会員番号三〇〇七
昭和二十四年　全日本スキー連盟指導員
昭和二十五年　日本山岳会東京支部委員
昭和三十二年　ヨーロッパに約八ケ月滞在、その間マッターホルン、モン・ブランなどに登る。シャペル夫人、フレンド氏らフランス山岳会員と交流
昭和三十三年　『初恋の山』を平凡出版（株）より出版
昭和四十二年　日本山岳会評議員
昭和四十三年　日本山岳会理事
昭和六十一年　日本山岳会名誉会員
昭和六十三年五月二十日歿

（山口節子）

浜野正男氏（一九一三〜一九八八）

かけがえのない山の先輩が世を去られた。

浜野正男さん、一九八八年七月七日十二時三十分、心不全のため埼玉県与野市の自宅で逝去。享年七十六歳。奥様から電話で訃報を伺い、とうとうお亡くなりになったか、お元気なうちに、もっと無遠慮にご教示をお願いすればよかった。淋しさと悔恨とが綯い交ざる。葬儀・告別式は九日、与野市のひかり会館でとり行なわれた。むし暑い日、日本山岳会、立教山友会、清水組、数多くの友人、関係者に見送られて浜野さんは旅立って行った。

浜野さんを、立教の後輩どもは「弁十郎」とお呼びした。余計を付け加えれば、浜野さんの渾名は「弁当」。大宮の大きな駅弁屋の息子だったからだ。古い話だが、ナンダ・コートに行く前、鹿島の北壁の積雪期初登攀者中島雷二さんが病を得て急逝した。浜野さんはナンダ・コートの隊員になったかも知れない中島さんを悼む言葉の一つに「渾名が雷鳥というのはうらやましい。立教ではろくな渾名を付けない」といっていた。

弁十郎はご本人が名乗ったのだ。

一九三五年夏山、浜野御大は学部二年、穂高涸沢合宿を終え、御大は予科一年新入部員のSさん一名を連れて、横尾へ下り槍沢を上り、北へ向って縦走し、剱沢を下って、真砂沢にテントを張り、剱で岩登りをしたことがある。新人のSさんにとっては、つらい、長い夏山であった。田舎に帰ったSさんのところへ、浜野御大から手紙が来た。

「一年生ながらよくやった。大いに見所がある。辻さんにも話しておいた」差出人、浜野弁十郎。

夏休みが終って学校に行くと、早速部長の辻荘一先生から呼ばれた。

「S君、君は有望だそうじゃないか、浜野がああ言うからにはまちがいない」

「おだてられちゃってね、山岳部辞められなくなっちゃたんだよ」

縦走第一日は大雨だったので横尾の岩小舎で泊る。

「なにしろ、色んなことよく知っていてね、山岳部のこと、ヒマラヤのこと、浅草の確か、ペエル・ヴァリアントといったと思うがエノケン一座のこと、歌舞伎のこと」

西鎌尾根を下り出すと

「オレ、先に行くぞ、自分で道を見つけてついてこい」

そうとうな重い荷を背負って飛ぶように駆けくだる。ヒマラヤに行こうという人は違うなと思いながら後から行くと、大きな岩の影にかくれていて、

「おい、休め。一服しろよ」

先輩が背負っている米から使うのだが、朝パッキングをしていると、

「おい、使った分だけオレによこせ」

芦峅では、宗作の家に立ち寄ってお線香を上げてきた。

一九四六年八月、戦後ようやく復活した立教大学山岳部は剱沢合宿を行った。浜野さんが三日間だけ参加している。部の記録には短く、

「八月二十五日、浜野先輩がナンダ・コットを踏んだ靴をはいて頑張っていた。二十六日、A班八ツ峯上半、浜野先輩同行。二十七日、浜野先輩帰る。」と記されている。

浜野さんは、Sさんと二人の夏山以来十年ぶり。ガダルカナルから九死に一生を得て内地に帰り、最初に登った山であった。

一九四六年「山」の会員消息。「浜野正男氏復員、清水組へ復帰」とあった。

浜野さんは、一九一三年一月十三日生れ。旧制浦和中学から立教大学予科に進学し、一九三七年三月立教大学経済学部を卒業している。子供の頃に両親を亡くしたこともあって小学生の時から一人でボールで遊んでいたそうである。浦中から立教には、バスケットボール部の推薦で入ったといわれている。直接聞いた話だが「羽織袴でくれば、入れてやる」どこまで本当だったのか。

それはさておき、ベルリンオリンピックのバスケットボールの有力な候補選手であったことは事実。では、なぜ山岳部に移籍したのか、堀田弥一さん曰く、

「バスケットがあきて山がよくなったんだろう」

浜野さんが立教の山岳部に入部した頃、堀田さんはすでに卒業。小原勝郎さんが最上級生。すぐ上に、山縣一雄、湯浅巖というナンダ・コート勢がいた。一九三二年の十月、入部した年の秋山、浜野さんは小原さんにともなわれて、上高地からバリエーションルートを辿り前穂・奥穂に登っている。

浜野さんの告別式で、ご長男が、

「父は、生涯ナンダ・コートを生きがいにしていました」

という意味のことをいっておられた。私は正にその通りだと、うなずいた。浜野さんの生き方の中に、常にナンダ・コートが陰翳となって投影されていたのだ。さらにいえば、私が直接お近付きいただけるようになった戦後は、日本山岳会そのものが、浜野さんの心

の中に蟠っていたものと思う。印象の濃い告別式であった。

ここに一冊の本がある。浜野正男著『ソロモンの人形』B六判二〇〇ページ、臙脂の布で装釘され表紙に題名、裏表紙に日本山岳会の会員章と1730とあり共に金で捺してある。昭和四十八年十月五日、自費出版。十月五日は著者が一九三六年にナンダ・コートに登頂した日、一七三〇は浜野さんの日本山岳会の会員番号である。『ソロモンの人形』という題は、土グモのように、じめじめした南海のガダルカナル島で細ぼそと生きて、奇跡の生還をするまで背嚢にくくりつけていたソロモンの人形に由来し、早稲田大学関根吉郎氏が命名したものである。

この本は、読み進むうちに衿を正し、まことに心に重たい本となっていく。著者は絶望の戦いを戦って、なお生き、戦力を失って、まわりの多くの人が餓え、マラリヤに倒れ生を絶つ極限状態で、遂に数少ない生還者となる。一見、山とは縁遠い手記でありながら、実にナンダ・コートが見えてくる。

「……俺は絶対に死なない。俺は絶対に死んではいけない人間だ。俺は生き残ってヒマラヤに登った経験を若い登山者に教え伝えなければならぬ人間だ。それが出来るかどうかが今度の戦闘だ」

浜野さんは、戦場にあって着のみ着のまま真暗な密林の中で雨に打たれて、うずくまっていることを忘れて、越しかたの山を回想する。

「雨や、雪や、霙に叩かれながら、岩棚にザイルを結んで一緒に一夜を明かした時の煙草の火のことや、吹雪く尾根に雪穴を掘ってツェルト・サックを被って、ヒュウヒュウと鳴る吹雪の音をききながら小止みになるのを待った時の煙草のこと」

浜野さんは生存への望みをかけて、七里の道をタサハロングからエスペランスへ生き残った兵を導いていく。

「左の脇の下にかいこむ枝。背嚢を負うてゆっくり歩いていると、何時しかピッケルを小脇にかい込んで、夜の山路を登っているような気がした。そして、まざまざと登高の時のはり切った攻撃心と、希望を憶い出した。あきらめず、あせらず、じわりじわりと山に迫るあの一時の緊張と自信。……俺にはもっと苦しかった登高の経験があったではないか。

私は一歩一歩を数年前の登高の気持に比較して歩いた」

ナンダ・コートは浜野さんにとっても、うちなる山であったのである。

一九三六年のナンダ・コート初登頂については、堀田さん、竹節作太さんの書いたものが世に顕著である。浜野さんも、NANDA KOT, 東京―アルモラ―マルトリ―BC―CI―CII、No. 1, No. 2, という膨大な日記を残している。因みにいえば、もう一冊ぼろぼろになった日記帳があり、七月十三日から十一月十四日まで毎日克明に記録が残されており、最後に、「以上記録係　湯浅巌、帰国の途　アフリカ丸にて　十一月廿八日清書完了す」と、戦死した湯浅さんの署名がしてある。いずれも、浜野さんが大事に保管していたもので、今回、奥様から拝借して見たものである。当然、公表したものと異なる味わいがあるが、浜野さんが書いたごく一部を転写しておこう。書き出しは、まず、

「幻想と夢の世界から現実へと移動する過程における精神的、肉

体的の過激な労作こそ、今の度の遠征の最も苦しい事であった。誰もが相手にせぬ時代より、暫時熱と憧を抱き常にヒマヤラを夢み、研究し来り、遂に幾人かの人達が相手にしてくれる時代が到来し、又私達も研究も暫く目鼻が付いたのである」

十月五日、登頂記は「十月五日、堀田隊長記」とあり、堀田登頂記がそのまま使われている。山顚の感慨として、つぎのような文章がある。浜野さんの文章と思うがつまびらかではない。誰しもの感慨と察するので挙げておく。

「苦節何年。私達の宿望は達成せられたのだ。あせり、あきらめ、元気を出し、再び、あきらめた、あのいらいらした、苦しいあの三十五日間の攻撃の日。九月二九日の苦しい死闘。それも無駄骨ではなかったのだ。あの日、赤い炎を中天に燃し私達を拒否した神の御座、聖なるナンダ・コートは、私達の望をかなえてくれた。……出発前の目まぐるしい肉体的、精神的の労苦も、これでやっと実を結ぶのだ。日本山岳会の人達が餞けとして云ってくれた言葉、―登らずに帰って来ても成功なんだから、くれぐれも無理をしない様に―船出して、日本の登山界の、希望を負ふと、登らずに帰って何の成功があるのか、何の面目があるのかと知らず知らず考へてしまうものだ」

私は、立教で山登りをした者にとって、ナンダ・コートは桎梏の山であったと思っている。一九八七年、五十一年ぶりに、太田晃介隊によって登頂されることによって、ナンダ・コートの重しがようやくはずされた。

浜野さんが、十年ぶりに剱に登った年の十月二十三日、立教の山岳部は不幸にして創部以来皆無であった遭難事故を起して、槍から西岳へ向う途中、Nさんという部員を失ってしまった。責任者だったIさんが、堀田さんのところへ詫びに行ったところ、

「立教大学山岳部の看板をはずせ、暫くあずかっておく」

と、散々だった。Iさんは、浜野さんのところへ相談に行った。浜野さんは、そのうちになんとかなるさ、となぐさめてくれたそうである。Iさんは、浜野さんの勤めていた清水組の入社試験を受けて通り就職することになった。

浜野さんは、「山と高原」（一九五五年　5号）、「立教大学山岳部々報」を山岳史の立場から解説する中で、この一件にふれている。

「俺は遭難を起すような部の先輩ではないといって追い返してしまった」

けんもほろろの堀田さんに理解を示しつつ、

「堀田にすれば当然口から出る言葉である。自分が特に力を入れて築いてきた輝かしい部の発展の歴史の中に遭難という文字はなかったからだ。……I君は立派な部員であったが、入社してもよい社員として評判がよかった。そのうちに堀田の考えも折れて、昔ののれんをかけてもよいことになった」

浜野さんは、戦後、日本山岳会の復興の第一歩からかかわっている。

日本山岳会会報一三八号に、一九四七年十二月二十八日臨時会員総会が開催され、新理事に浜野さんが選出され、「用具資材」の担当委員長となっている。会報一三九号に、月刊「山」発行、「山」は会報としてではなく、月刊山岳雑誌として五月号から発行する、

とあり、浜野さんは「山」の編集者となり、あわせて毎号の執筆者となる。「山」第四号、浜野正男「登山界の動き方」という論文を読むと、浜野さんの思想、山登りの考え方がよく解る。

日本山岳会は、既成登山者の集りであってこれからの新人を養成するところではなかったため、会員は勝れた登山者であるが、自ら進んで宣伝的な仕事をしたがらない。私としても、自分でこれから書くことに対して、いい気持はしないが、日本の登山界が安定するまで「自分の良心とけんかをしながら力を盡すつもりでいる」。安定したら「元の巣に舞いもどって、静かに山に登り、山を想い、あまり人前に出て、厚くもない顔を赤らめる行為は止めたいと思っている……」。「山」にしても日本山岳会の何人かの人はなかなか「うん」といわなかった。が、「山に登る人達、云いかえれば、高い山であろうが低い山であろうが、山に登る行為をする人達が読んで、それによって、山登りが更に前進するような行き方でありたい」。

浜野さんは、国体の登山部門の仕事を積極的にするようになる。

一方、「山」は日本交通公社の手にゆだねられ、月刊「山」（河出書房）となり、最後は朋文堂から発行されることになった。浜野さんは、「山」十一月号、技術研究「初冬の山」関根吉郎氏との対談を最後に、以後登場しなくなる。スポーツが近代化することは大衆化することを意味し、「山」の主流が、立教大学山岳部、日本山岳会で育った浜野さんには、やはりそぐわなくなったのではなかろうか。一方、日本山岳会では、「山岳」が復活し、「会報」も軌道に乗ってゆくようになった。

会報二〇六号（一九五九年十一月）をみると、日本山岳協会設立経過報告があり、協会会長に武田久吉、JAC選出役員として、副会長日高信六郎、専務理事浜野正男の名前があがっている。また高校生登山技術講習会の報告があり、講師団浜野正男。浜野さんの講評「ヒマラヤから帰った人々を中心に、将来ヒマラヤに行けそうな人々でメンバーを構成したが、高校生を対象としては一寸ぜいたくな感じがあった」。いろいろな機会に、様々な人たちが、浜野さんの薫陶を受けている。

「山」三六二号、一九七五年八月、浜野さんは、

「今年のウェストン祭は二十九回目だそうである。会報を調べてみたら、昭和二十二年六月十四日が第一回と出ていた。実はその時上高地の梓川のほとりの岩壁のレリーフをはめ込みに行って第一回のお祭りを演出したのは私なのである」。

「山」三九二号、一九七七年二月、「信濃支部創立三十年記念行事」に一文を寄せ、

「昭和二十二年六月に日本山岳会としては、ウェストン師のレリーフを元の位置に嵌め込むという大きな仕事があった。当時の山岳会は今とちがって、人を集める能力もなく、会員の住所も確実につかんでいない有様で、もちろん金もなかった。従って地元の会員の方々に何もかも頼る他はなかった。幸か不幸か、私のいた会社が、接収された上高地の帝国ホテルの改修工事を請負っていたので、〝どうにかならぬかタダで〟というのが松方、藤島さんの本音であった。……たまたま槇さんが大町の近くに疎開していた頃なので、信濃の会員等との話し合いでウェストンさんとの縁の深い大先輩も参加してくれた。本部からは松方さんも参加し、レリーフの壁の下

に横書きの看板文字まで同氏独特の文字で書いてくれた。」

浜野さんは、卒業後清水組、現在の清水建設株式会社に入社、外事課長、名古屋・福岡支店の責任者を経て、常任参与で退社する。

ゴルフがお得意で、ハンディキャップ「6」、クラブのマンスリーにも度々優勝する腕前であった。

浜野さんは、お酒と甘いものが好きだった。福岡から東京に帰ってきた頃、糖尿病にかかり、インシュリンの注射を打つようになる。晩年は低血糖障害をおこすようになる。それでも、日本山岳会に出かけるのがなによりの楽しみで、よく奥様やご子息をお供の浜野さんをみかけたものである。一人での外出が許されなくなり、近所の床屋にだけは大目にみてもらっていたそうである。そんな時ふらりと山岳会のルームまで足をのばしてしまう。ダンディな浜野弁十郎が、ポロシャツで現われた時は、おしのびであったのである。

一九八五年八月二十四日、日本山岳会創立八十周年記念式典・祝賀晩餐会の席上、浜野正男さんは名誉会員として紹介を受ける。秩父宮妃殿下がご臨席になり、ご祝辞を述べられたひときわはなやいだ晩餐会であった。

主な山歴

一九三二年七月　穂高涸沢合宿、後立山縦走、十月前穂・奥穂

一九三三年二月　富士山、七月燕・槍・穂高、八月甲斐駒水晶谷と仙丈岳、十月聖沢溯行、十二月聖沢より聖岳

一九三三年二月　鹿島槍東尾根、三月立山川から立山・大日岳、四月剣岳・源次郎尾根

一九三四年五月　赤沢スバリ西尾根、七月穂高涸沢、八月剣岳・池の谷、十月北岳バットレス、十二月北岳バットレス東北稜

一九三五年一月　聖沢より聖岳・遠山川へ、池の谷より剣岳

一九三五年七月　穂高・槍・剣縦走、真砂沢生活、十月槍北鎌尾根、二月硫黄岳、三月富士山、ヒマラヤ準備

一九三六年　総務、現在の主将となる。ナンダ・コート登頂

日本山岳会入会は、一九三八年二月、紹介者は逸見真雄、松方三郎の両氏。一九四七年から一九五〇年、一九五八年から一九六二年まで理事、一九七五年から一九七九年まで評議員。

一九八五年八月　名誉会員

（中村太郎）

支部だより

富山支部

六十三年度の富山支部行事予定は次のようになった。まず

(1)播隆祭　富山県中新川郡大山町河内の中村家跡地に富山県の生んだ「槍ヶ岳開山者」播隆上人の顕彰碑を建立してから五年目を迎えた。毎年播隆さんの直系である中村俊隆さんを中心に旧河内居住者が集い、支部員、自然保護協会員等が播隆さんを偲んできた。今年は五年を迎えることで大山町とも協議を重ね百五十余人の集いとなって五月十五日盛大に行事を了えた。支部員にとっては心温まる行事であった。

(2)山行　今年は活火山の焼山、黒部の北又谷遡行、小滝川の地層調査行を十月中旬に計画している。焼山は要許可ということになろう（目下入山禁止中）。北又谷は越道峠を経ることになろう。小滝川の調査は小滝からの予定で秋の行事の目玉にしたい。

(3)会員の増強　会員の老齢化は悪いことではないにしても世代の順からして若い会員の代謝が不可欠であることから一人でも多くの会員が必要である。

(4)行事参加　全国的な行事、例えば支部の集い、自然保護集会等に参加し実り多い親睦と情報の消化につとめたい。

(5)例会　定期例会を開いて会員の親睦と情報交換をはかり支部運営の力としている。

以上要約すると次のようになる。

三月例会、四月例会・総会、五月播隆祭、六月白木峰、九月例会、十月焼山・北又谷・小滝川山行遡行、十二月例会、二月例会

なお支部役員名は次のようである。

支部長　若林啓之助

支部委員　◎石坂久忠、森　丘実、広瀬　誠、竹本融司、木戸繁良、太田　昭、高塚武由、中西紀夫、佐伯久雄、木内静子

水腰英隆隊員チョモランマで急逝

哀悼の詞を知らない事が突然天から降ってきたことがあった。チョモランマ・サガルマタ三国友好登山隊員として参加されていた水腰英隆医師の死去の報であった。「六十三年四月二十一日十四時三十分南側ルートBCで心蔵発作のため死去」と東京の留守本部関塚さんからである。驚くこと驚くこと誤りではないかと我が耳を疑う。早速留守宅に電話を入れる。ご夫人は「本当ですか、死んだのでしょうか生きているのでしょうか」お気の毒です……。その後東京留守本部への連絡はつきない。二十一日南側BCで通夜、二十二日テリチェ、二十三日タンボチェ、二十四日〜二十五日ネパール軍ヘリでカトマンズへ遺体を移送、隊員で同郷の酒井秀光が途中まで同行すると。二十三日遺族日本発、同行者は長男、妻、柿沢（文登研）、本部より浜口医師。浜口医師によりカトマンズで解剖、結果は「くも膜下出血」ということだった。

遺族の帰国にあわせ五月二日午後一時三十分富山市にある西本願寺別院で告別式を了えた。痛々しいことであった。五月五日交差縦走成功のかげに。

（石坂久忠）

京都支部

昨年秋の全国支部懇談会京都集会を前に、記念品を何にするかで支部委員会は知恵をしぼった。かさばらず、実用的でかつ京都らしい付加価値のあるもの、がその条件であった。

「清水焼のぐい飲みはどうや」という提案に「おっ、それや」と衆議は一決した。サンプルを多数取り寄せ、色、形などを検討した。その結果、直径六センチ、高さ四センチ、茶道具の建水に似た形に決まった。周囲に緑の葦のような図柄、内側の底にJACのマークとローマ字でKYOTOと入れた。なかなか品のよいデザインである。

これを三百個作った。全国からご参加いただいた百五十人に一個ずつお渡しし、追加ご希望の方には一個千円で頒布した。好評であった。支部委員の中には、行きつけの店にこのぐい飲みを置き、これでしか飲まん、という愛好家もいる。

百二十二個残った。このうち五十個を年次晩餐会で頒布することにした。京都支部のPRになるとの狙いである。

前年通った中央自動車道の気分がよかったので、この年も名神高速道路から中央自動車道へ車を進めた。伊那谷から眺める新雪の中央・南アルプスがよい。雑木林が迫る長野・山梨県境あたりもよい。土曜日の午後だったので、首都高速に入ってから渋滞した。おまけに出口を一つ間違えたので、会場の私学会館に着いたのは予定より一時間遅かった。大半の会員は会場へ入りかけていた。事前に総務委員会に連絡しておいたので、販売品コーナーに京都支部用のスペースがとってあり、急いで持参の品物を並べたが、数個売れただけで晩餐会は始まってしまった。

さてどうしたものか。折角持ってきたものをそのまま持って帰るわけにはいかない。一個取り出し、思案顔に眺めていると「まあ、素的な清水焼」。声の主は同じテーブルの小田稔氏夫人知枝さんであった。この一声でにわかに勇気がわいてきた。自ら売場に立ちながら、営業不振に落ち込んでいた朋友横田明男さんの顔にも精気が蘇ってきた。「そうだ、自信をもってセールスにあたろう」。それから会場内でなりふり構わぬ営業活動を始めた。「どうどす、清水焼どっせ」。集会委員会の中川武さんには絶大な協力をいただいた。佐々保雄前会長や西堀栄三郎元会長にはいささか押し売り気味であったが、たちまち売りつくしてしまった。会員番号一〇〇一、やんごとない新会員には記念に一個進呈した。

まだ七十二個残っている。これは京都支部を訪れる客人などへの記念品にすることにした。その適用第一号はフィレンツェ大学名誉教授フォスコ・マライーニ氏であった。戦前札幌や京都に居住し、日本山岳会会員でもある屈指の親日イタリア人である。今年三月から、京都の国立国際日本文化研究センターへ客員教授として招かれた。昨年秋、仕事でフィレンツェの自宅を訪ねている支部委員の前芝茂人さんが、支部の総会で講演してもらえるよう話をつけてき

た。マライーニ氏の講演は優しい人柄がにじみでるような内容であった。ぐい飲みの小さな箱に赤いリボンを結び、八千㍍峰初の女性登頂者（一九七四年、マナスル）、京都支部のマドンナ内田昌子さんが手渡した。二次会では「山の大尉」を合唱した。六月に帰国したマライーニ氏のトランクの底に、かのぐい飲みが大事にしまいこまれていたはずである。

第二号はアメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長のヒューバート・A・カーター氏である。中国の梅里雪山へ向かう途中、アン夫人を同伴して四月末、ふらりと京都へやってきた。まだ新緑の浅い京都・北山を案内し、支部主催の夕食会も設定した。この時は手違いで記念のぐい飲みを渡せず、帰国前に再度来日した時に吉沢一郎さんのお手をわずらわせた。太平洋を渡ったこの一個は、多分ボストンに近いカーター家の食器戸棚に飾られているだろう。

第三号は東洋の大国へ渡った。十月、中国登山協会の史占春主席ら三人が京都国体視察のため入洛した。この機会に、支部でも歓迎の昼食会を開き、主席を囲んで日中の山の話がはずんだ。ことしは斎藤支部長以下六人がチョモランマ・サガルマタ遠征に参加、三国友好に貢献したが、一九八七年の全国大会で友好の絆となった小さな記念品も、こうして世界各地へと広がっていく。日本の皇室でも愛用されている（と信じている）清水焼は、過去のメモリアルとしてだけではなく、今後も山の仲間の友情の証として、世界の平和に役立つだろう。

（四手井靖彦）

越後支部

昭和六十年は日本山岳会が創立八十周年を迎えた年で、全国の十九支部を六つのブロックに分けて、各地で盛大な祝賀行事が開催された。その際に越後支部は特にお願いして、六月に独自の記念講演会、晩餐会と会員の作品展覧会などを長岡市で催し、親睦登山を越後三山の霊峰八海山で実施したが、今西会長、佐々前会長、西堀元会長ほか約三百名の参加があり、多彩な記念集会となった。

翌六十一年はまた、昭和二十一年に発足した当支部の結成四十周年ということで、十月に阿賀野川畔の麒麟山温泉で祝賀晩餐会を行ない、新雪と紅葉に彩られた一等三角点の狢ヶ森山へ登ったが、関東、関西方面など県外からの参加者も多く、八十名を越える楽しい集いであった。当日はまた、十年間も足踏みをした機関誌「越後山岳」第七号の発刊披露も行なった。

それらの行事を契機に、以後毎年一回は山行を據り処として、会員の親睦交流を深めようということになり、六十二年十月には秋山郷の大赤沢新道から苗場山へ、六十三年は会報「山」に発表して県外の会員にも呼びかけ、六月に巻機山と清水峠で山仲間の集いを実施したが、台風一過の苗場山も、梅雨入り直後の巻機山も幸いの好天に恵まれて、実行委員や地元会員の熱意と苦労が報いられた快適な登山となり、大勢の参加各位に喜んでもらえたのは何よりの収穫であった。

親睦登山の目的は山歩きで苦楽を共にしながら、仲間同士の友情を深めようということにあるが、支部会員だけでなく、県外や他支

部の会員からも参加してもらうことによって、新たな面識を得て交流の輪を拡げ、あるいは新鮮な情報や知識を互いに交換、吸収したいという願いもあってのことで、山麓での前夜祭や、山頂で酌み交わす酒は人々の心に温もりや潤いを与えてくれ、気心の知れた親しい付合いが生れてくる。それに越後の山を他県の岳人に紹介するよい機会ともなるから、今後も当支部の恒例行事として、県内の名山、秀峰を選び、会員各位の楽しく実りある交歓の場として、親睦登山会の充実を図ってゆきたいと願っている。

六十三年度の支部総会は、例年どうり弥彦山上で高頭祭と併催することになったが、明年からは県下各地に会場を移して、総会終了後に山を歩くといった、初期の頃の姿に戻したいと考えている。

高頭祭は高頭仁兵衛翁の寿像建立から三十回を数えたが、これも今後は会報「山」などで意義を高揚して大勢に呼びかけ、趣向をこらした支部行事に盛り上げたい。

「越後山岳」は支部会員の強い要望もあり、第八号の発行に向って準備を進めているが、なんとか今年度中には発行に漕ぎつけて、会員の期待に応えたい所存である。

なお、蛇足のようだが、「山岳」の編集に関してお願いを申し上げたいのは〝支部だより〟を原稿用紙三枚以内にと限られては、まとめるのに苦労する。年間行事の多い支部では到底意を尽せぬことになろうから、たより欄を充実させるために若干の増ページを考慮していただけないものであろうか。毎月の「山」に支部行事の報告などが掲載されてはいるが、各支部の年間を通した動向、運営面の苦心談などが伺えると、貴重な参考資料となり、会員にとっても親しみの持てる「支部だより」になるのではあるまいかと思われる。

（佐藤一栄）

信濃支部

当信濃支部はこの春の定例総会で、赤羽孝一郎新支部長が就任し、これまでの輝かしい歴史の流れを大切にしながら新たな歴史を築いて行くべく張り切っております。

ウェストン祭について

年間行事の中でも当支部にとって対外的にも大変重要な行事である。ウェストン祭も今年第四十二回を迎えたが、四十回を迎える頃からマンネリ化、観光化したのではないかという疑問の声が支部内外から聞かれるようになり、「創立当時の素朴なものにしては」ということになり、支部内部に「ウェストン祭の在り方を探る会」なる諮問委員会（水上巌座長外五名）を設け、この委員会の答申を基にして、昨年の第四十一回、今年の第四十二回を無事終了できました。

永い歴史と、多くの先輩達の苦労の上で続けられて来た行事であり、また各協賛団体やマスコミ関係注視の中での行事ゆえ、答申通りに一挙に変えることも儘ならない点もありますが、徐々に答申の方向に近づけるべく努力致します。今年の第四十二回ウェストン祭は、記念山行の前日まで中部地方は一五〇ミリを超える降雨が続いていたため島々谷の増水が心配になり一般の徳本峠越えを前日夕急遽中止とし、当日支部員数名が、谷の橋や道路の確認の意味も含めて先発組と遅出組に別れて峠越えを行い、永く続いている記念山行

の歴史の灯を消さずにすみました。碑前祭については会報「山」と重複するので省略致します。

山行とその他の行事について

現在（昭六十三年六月）信濃支部員百二十七名（団体加入含）が広い長野県下はもとより、県外にも点在しているといった特殊性と年齢的にも大変な開きがあり、それぞれの個性を大事にするという意味もあって、ここ何年間かは個人山行を中心に行って来た。支部として年間山行は昨年まで、夏山（三泊四日）、秋山（一泊二日）、スキー例会（一泊二日）程度と少なかったが、若い人も徐々に増えつつあるので、今年度から信濃支部全体としての山行も積雪期を含めて回数も増し、また内容もより密度の濃い充実したものにして行きたい。このことが、赤羽新支部長を始めとする当支部員全員の願いでもあるのです。

その他の総会等々の行事、および会報の発行等は従来通りとし、以上現況を記して報告と致します。（文責　支部総務　金子丞二）

福岡支部

本部が「全く動かない大支部が二つあって困る」とぼやいていた所の一つからご挨拶申し上げます。

加藤数巧・橋本三八の両先輩が活躍されていた戦前・中・後の三時代を経て約三十年、当支部はほとんど冬眠状態に入り、上記の嘆きも当然のことであった。だが、著作もある松本徰夫・脇坂順三・新貝勲各会員を始め、海外経験者も多いのに、それぞれが山岳会を作り、あるいは属してそこで活躍し、会員としての横の連絡はなかった。

たまたまＪＡＣ創立八十周年記念の九州大会で久し振りに顔を合わせた折、再建の要望が強く、準備に約二年、ようやく昨年四月に総会を開き、役員、定款、予算、年間計画を定め再発足の段取りとなった。

まず、支部の組織化のため、名簿上の在住者の実体の把握、実存者の三分の一を占める未所属員への支部への登録の勧誘など深田事務局長を中心に実務的処理を急ぎ、一方新入会員十四名（うち女性二名）を得て、九十三名が登録済みである。

次に活性化するための行事は、九州の他の支部のような独立山岳会的な在り様でなく、前にも書いたが各人の山岳会が初めに在り、ＪＡＣ関係はその余暇での活動となる実体を踏まえ、通年して軽登山四回、講演会、映画付きの総会程度を目標にしている。

上記の事情と三十年間冬眠していた関係から支部会費を別途徴収するわけにはゆかず、当分は本部返戻金のみで運営し、皆様が納得できる実績を積上げてから、一部から要望の出ている機関紙発行の件と共に考えることにしている。

県内の山は一二〇〇㍍級まで、勢い岳人は他県、本土、海外へと高みを求めて行く。幸いこの二月、九州四支部の初めての連絡会を持ち他支部の主要行事への参加、自然保護上の問題点の情報交換などを申合わせた。

以上が再建中の当支部の組織化・活性化の足どりであるが、若手および婦人層が加入しやすい雰囲気作りを次の課題としたい。

しかし目下は「屋久島縄文杉見物用ロープウェイ建設」阻止を最重要事項と考え、七月末の屋久島産業文化研究所主催の「屋久島シンポジューム」に当支部の松本徑夫自然保護委員を特派し、地元の「島おこし」の悲願を充分聴くと共に、言うべきは言うことにしている。

本部ならびに他支部のご指導、ご協力を切にお願いしたい。

また、当支部創立三十周年記念行事として「ヒンズークシュ真只中の旅」へ新貝隊長以下十名を、八月中旬に送り出すべく準備中である。

（権藤太郎）

熊本支部

〔三十周年記念集会〕

熊本支部は昨年、支部結成三十周年を迎え十一月十四日、十五日の両日、阿蘇山南郷谷の南阿蘇国民休暇村において記念集会を開催した。小さな支部でもあり予算の関係もあって大きな行事は出来なかったが、好天に恵まれ、今西会長はじめ全国から多くの会員に出席していただき大変盛大に挙行できた。

かねて交流の少ない支部の方々と親交を深めることができたことは大変嬉しく、これを機に今後とも交流を深めてゆきたいと願っている。

〔支部総会〕

六十三年度支部総会は五月十五日、熊本市のＮＴＴ会館会議室で行われた。今年の総会では支部結成以来三十年にわたり実質的に支部運営に携わってきた西沢支部長が、支部結成三十周年の節目を機に支部長を退き、新しく奥野正亥が第四代支部長に選出された。

また支部規約の一部が改正され、新たに副支部長の職を設け、本田誠也が選出された。なお、西沢前支部長には顧問として、これまで通り支部運営について指導、助言をお願いすることになった。

〔支部の現況〕

七月現在の支部会員三六名。これまで会員数の伸びが今ひとつ停滞していたが、昨年から比較的若い層の入会が増す傾向が出てきた。今後の支部活動の活性化につながるものと期待している。

事業内容は、大方の支部会員が他の山岳会にも属しており、それぞれに指導的立場に立っているので、支部としてはクラブ的な色彩が強く、もっぱら懇親を目的とした小さな山行を年に四回程行っているというのが現状である。

〔支部の課題〕

現在の支部活動については充分とは考えていない。たとえば本部でやっておられるシンポジウムや映画会など、山行以外の何か支部独自の特徴ある企画なども考えてゆかなければならないと思っている。他支部の動向も参考にさせてもらって、さらに検討してゆきたい。

また支部だけの限られた交流をするのではなく、他の支部との交流の輪を積極的に拡げてゆくことも大切である。これに関しては、今年二月、福岡支部の提唱で九州四支部連絡会が北九州市で開かれた。とりあえず今年からこれまで以上に互いの連絡を密にすることになったが、さらに他支部行事への参加、合同行事の開催など交流

を深めてゆきたい。

支部活動の原動力としての会員、とくに次の時代の支部を構成する若年層の会員の獲得については、支部としても積極的に取り組んでゆかなければならない。しかし会員の加入促進をはかるのは勿論であるが、あくまでも会員としてふさわしい経験、人柄の人物を地道に求めてゆくことも忘れてはならない。

ＪＡＣには他の山岳会にない歴史の重みや伝統があり、クラブとしての独特の気風があると思う。三十周年の節目を終えた今、これらの伝統を守り、それぞれの登山哲学に従い、次の四十周年に向ってさらに充実した活動をしてゆきたいと願っている。（田上敏行）

■関西支部

初めての「支部便り」でありますので、今回は、関西支部の現状をお伝えするにとどめたいと存じます。

関西支部は、日本山岳会初の支部として昭和十年に設立され、すでに半世紀を経過しております。この間の歴史を語る資料としては、会報「山」をはじめとし、関西支部発行の「時報」（昭和二十三年〜二十六年）や「関西支部報」（昭和三十三年〜現在）などがあります。しかし空白部もあり、現在、当時の模様をご存知の会員を訪ねてお話を伺い、この空白部を埋める資料を収集しております。

関西支部設立五十周年にあたる一九八五年には、前今西壽雄支部長が日本山岳会会長に就任され、現在は阿部和行支部長に引き継がれております。

会員は現在三百六十七名おり、十八都府県に広がっております。この中で約七〇パーセントは阪神地区に在住しておりますが、関西支部の範囲には山陽地方や四国地方も含まれており、これらの地域に住んでおられる会員へのサービスもかかせません。年に数回は遠方の会員にも参加しやすい行事を計画しておりますが、大阪を中心とした行事が多く、まだまだ充分とは申せないのが現状であります。

また、他支部との交流も計るべく、毎年二月には京都支部との合同スキー山行が実施されており、一九八七年度には山陰支部との懇親会が蒜山山麓にて催されました。一九八八年度には、静岡支部との愛鷹連峰の合同山行も予定されております。

◎一九八七年度行事

支部総会（記念講演「ギャラペリ初登頂とブータン最新情報」
日本ヒマラヤ協会　尾形好雄氏）四月十五日
山行　吉野・青根ケ峰　四月十九日
山行　播州・砥の峰　五月十日
山行　石鎚山〜瓶ケ森　六月五日〜七日
山行　六甲・赤子谷東俣とビアパーティ　八月二十三日
支部蔵書虫干し・読書会　八月二十九日
山行　鈴鹿・高室山　九月二十三日
山行　奥美濃・平家岳　十月十七日〜十八日
山行　山陰・烏ケ山と蒜山三座（山陰支部と合同）
十一月七日〜八日
図書交換会　十一月十四日

年末もちつき会　十二月十三日
山行　紀北・七霞山　十二月二十日
山行　丹波・白髪山　一月十日
新年会　一月二十七日
山行　湖北・権現山　二月六日～七日
山行　湖北・武奈ケ岳（京都支部と合同）二月二十日～二十一日
山行　但馬・青ケ丸　三月五日～六日

◎関西支部報
第五十号（十二月発行）、総目次（三月発行）
現在、第一号～総目次を合本製本中です。

（水谷　透）

東九州支部

東九州支部二十八年目をむかえ、特に報告することもない。一九六四年暮れより二代目支部長として本部とのパイプ役を続け、毎年ヒマラヤへ出かける野口秋人氏は、六十九歳でカラパタールへ登ったのは、十年前のことである。

あとに続く者五十九名は、会員番号四千台三名、五千台五名、六千台四名、七千台三名、八千台二十八名、九千台十一名、一万台五名である。

年齢別では、七十代四名、六十代四名（女一）、五十代十五名（女一）、四十代十五名（女一）、三十代二十九名（女二）、二十代二名である（七月一日現在）。物故会員には一千番台の加藤数巧氏と工藤元平氏がいた。加藤代のご子息英彦氏は二代目会員である。

支部名も一、大分、二、宮崎の会員入会で東九州と改め、今は、宮崎支部が設立されて三年目になるが、東九州といつまでも呼ぶことにした。二十周年行事までは、報告ずみなのでその後の活動についてひろってみよう。

一九八〇年に大分百山を選び、県内の山を知らないことを自覚し、毎年の行事に六回百山登りを加え、登山路開拓を始めた。七〇〇㍍以下の山が重なる土地がら、五万の地図に出ている道もほとんどが、やぶである。また一歩もあるかず三角点という山もあり、スーパー林道のおかげと、町村の活性化のため、ハイキングコースとして広くなった道もある。道より取り残された山の方が登るには面白く、百山も選びかえねばという意見もある。四月第二土曜日を総会とし、年二回の役員会で計九回の年中行事をくりかえている。

一九八五年支部二十五周年は、椎葉の里で京都、熊本、宮崎支部の参加をいただき、今西錦司氏（前会長）と三方山、高岳、扇山黒岳と大谷優氏の案内で登る。宿では上椎葉役場の方がみえ、錦司先生へ自然保護と植物の生長について御指導をいただく。総勢五十二名で、十一月三、四、五の三日間すみきった秋空に恵まれた登山であった。いまだに心深くきざまれていることは、扇山より林道へ出たとたん「万歳」とさけんだ今西先生の声である。

海外は、田川義久、本田博二名でヒンズークシュへ。シャーハンドックは行けなかったが、多くの資料を持ち帰った。十一月にアイランドピークへ阿南寿範、甲斐良治、西孝子参加、山頂へは阿南だけが行き、C1上部まで甲斐、西はBCどまり、そのあとカラパタールへ。この時の反省で、カラパタールを最初に行ったため次の年

西孝子、アイランドピークへ登る。同じ年興田勝幸、宮脇稔、恒松勲、木辺正夫はニンチンカンサへ、東チベット、ヤルツァンポ河踏査に梅木秀徳、八八年一月興田、恒松はアコンカグア峰へと、短い日数と少ない費用で行ける海外を選んでいる。

ふるさとの山は、神秘的な原生林も年々少なくなりつつある。一七九一㍍の久重山系を中心に、祖母、傾と重なる山々を青春の心意気と情熱を持ち続け支部員一同黙々と歩いている。他支部の方もどうかこの美しい東九州へ一年に一度は、おいで下さいませ。

（西　孝子）

北海道支部

北海道支部は六十二年度総会で、記念事業としてヒマラヤトレッキングを目差し、海外研究委員に石崎貞子、高松秀彦両氏を新任し、当年度に講演とスライドの会が二回開催された。また会報編集委員に小野肇氏を新任し記念誌発行の推進を計った。

支部顧問として前会長佐々保雄氏と、北海道の登山界の発展に登山用具店として貢献し、支部運営の円滑を計るために、店内に連絡事務所を設置していただいたり、会報発行に少なからずご協力いただいた金井五郎氏の二名が推薦委嘱された。

二十周年記念事業として、当初は北海道で最も古い記録のある羊蹄山（蝦夷富士）を想定し、準備が進められていたのであるが、全国支部懇談会の開催候補地として北海道があがっており、東京での六十二年度年次晩餐会で、ほぼ引き受けざるをえずのやむなきに至り、六十三年一月二十六日開催の支部臨時委員会で、正式に全国大会と併せて支部二十周年記念行事を大雪山旭岳で開催することに決定。その準備が急拠変更し進められた。

六十三年度支部総会を五月二十日に開催し、全委員を再任し、二十周年記念の諸事業を推進することに決議された。

その事業は「一九八八年大雪の集い」として、六十三年七月十六日に旭川市民文化会館ホールで、旭川市、旭川市教育委員会、東で、中国・日本・ネパール一九八八年チョモランマ／サガルマタ友川町後援好登山報告会を開催した。今西会長の挨拶に続いて、南・北からの登山報告を磯野剛太、重広恒夫両登攀隊長からスライドをまじえてなされ、五月五日の登頂シーンの感激が再現された。

その夜は旭岳温泉勇駒荘の前庭で懇親会を野田四郎副支部長の歓迎の挨拶で開宴。降雨にもかかわらず野趣たっぷりなチャンチャン料理の炉を囲み、鉄板で焼かれた鮭、イカ、野菜などで舌つづみを打ち、全国から持ち寄られた銘酒に酔い、各地から自慢の唄が披露された。終了後は勇駒荘内のスナックで夜遅くまで歓談が続いた。

明けて十七日、今西会長を始め百余名が最高峰の旭岳に向った。頂上では北海道の主要行事に道外から連続参加された砂田定夫、吉村健児両氏に旭川市の渋谷正己会員制作の大雪山版画が贈呈され、また折りしも誕生日を迎えられた遠田篤子さん等にはバースデーケーキのお祝いや、抹茶の野点がふるまわれた。

下山コースは高山植物が絢爛と咲き誇る裾合平をたどり、盛会のうちに無事終了した。

（高澤光雄）

東海支部

東海支部の海外登山略譜（Ⅰ）

毎年六月になると、「山岳」の編集者からこの支部だよりに対する原稿の執筆依頼がくる。支部だよりは、その意図からいって、内容がどうしても日頃の支部活動の様子や、行事の案内といったものになりがちになる。

東海支部には支部報があって、これらの情報は支部報を通して割合詳しく支部員に流されている。したがって支部報と同じような原稿を送っても馬鹿らしい。さらに衆目の興味を惹くような内容ならまだしも、どうせ大したことをやってもいないのに「山岳」などへの投稿などむしろ面映ゆい。かといって随想や紀行文もおかしかろう。

実のところ、何がふさわしいのか思案しあぐねていた。そんなことで昨年は、とうとう権利放棄してしまった。

今年も依頼状を横目に、どうしようかと思案投首で、古い支部報や、四、五年ごとに発刊されている東海山岳を眺めていた。その時にふと一つ気付いたことがある。それは、東海支部が今までに派遣した海外登山の記録をひとまとめにした類のものがないことである。

東海支部の海外登山は、今年出た二隊を加えて一一を数える。一つや二つでは、記録をまとめるなどというにはおこがましいが、一一あれば格好はつこう。

東海支部は、間もなく創立三〇周年を迎える。ここらで今までの東海支部の海外登山の記録をまとめるには丁度よい機会でもあろう。しかも与えられたページ数から、どうしても連載にならざるを得ないし、そうなると毎年一隊ずつで今後十一年かかる。当分種（タネ）にもこまらないのである。さらに「山岳」に永久保存されることにもなる。支部にとっても願ってもないことである。よしこれにしようと一人決め込んだわけである。

さて、東海支部の今までに出した海外登山であるが、先にも記したように一一隊を数える。この一一隊以外に、支部員が参加した登山隊や支部がかかわった登山隊を上げれば枚挙にいとまないが、支部が主体となった登山隊に限定すると一一隊になる。それらを年代順に上げてみると次のようになる。

東海支部の最初の海外登山は、一九六六年のアコンカグア南壁である。以後、一九六九年のマカルー偵察隊、そして一九七〇年のマカルーの本隊、一九七五年のラトックⅠ峰、一九七六年のパミールと続く。このパミール隊は、主催日本山岳会となっているが、実質は東海支部が請負った形なので支部の海外登山に入れた。

その後しばらく間を置いて、一九八〇年には、支部の創立二〇周年を記念してガウリサンカールへ登山隊を送った。一九八四年には、同じ時期に二つの登山隊が海外へ出掛けている。一つは、一九八〇年の雪辱を期した第二次ガウリサンカール隊である。もう一つは、若手中心のボゴダ隊である。このボゴダ隊も一九七六年のパミール隊と同様に本部主催であったが、東海支部が担当した。

さらに一九八六年には、日本人として初めて天山山脈の雪蓮峰（六六二七㍍）に足跡を残した。続いて、本年は二つの登山隊が海外を目指した。一つは、一昨年の再挑戦である雪蓮峰隊と、もう一つは隊員の資格が五十歳以上というインドヒマラヤ・ヤン峰（六二三〇㍍）実年登山隊である。

以上の一一隊となるが、隊員の一人一人の顔を思い浮かべると、実に様々な人間が、実に勝手にやりたい放題やってきたものだと少なからず呆れ返る。東海支部設立の動機が、海外登山にあったというのだから当然だといえなくもない。支部三〇年の歴史は、そのまま支部の海外登山史だといい替えれよう。一つ一つの海外登山を経て、それらの一つ一つに支部の歴史が深く刻み込まれてきているのである。そこに刻まれているのは、いわずもがな、生臭い人間の息づかいである。

一番古い記録は一九六六年のアコンカグアで、二二年も前のことである。今さら二〇年も前の記録をしかつめらしく記述しても興味は湧かないと思うので、できればその当時の登山界の背景や支部の流れといったものを人の息づかいとともに表わしてみたい。

次号のアコンカグア南壁から始まるのだが、これら一一隊の外に、番外編として次の三つも取り上げるつもりである。年代順にいえば一九六五年の夏、支部員高田光政氏によって成し遂げられたアイガー北壁の登攀記録と、今年のチョモランマ／サガルマタ三国合同登山隊と、小笠原聟島列島針之岩（一三六㍍）の登攀記録である。前の二つは、東海支部抜きでは成し得なかった背景を持っていたし、針之岩は海外登山ではないが、大変ユニークで貴重な記録と評価されているからである。

どうやら長期の連載ものになりそうである。末長いお付き合いをお願いしたい。

（尾上　昇）

宮城支部

宮城支部も創立三〇周年を迎える年、若い新入会員を迎えて支部会員数は五〇名を超えました。支部の行事も四季の山行と、標高こそ低いが県内未登の渓谷やルートを探索したり、夏のビールパーティと支部晩餐会に、恒例となった新年の元旦登山、泉ヶ岳（一一七二㍍）も連続十六回を数えている。

泉ヶ岳は仙台市の西北にあって、穏やかな山容は、新幹線からも望まれ、槇有恒大先輩が『わたしの山旅』に記載された山で、今ではその頃の面影も少なくなり、山麓は野外活動の施設が展開したリクリエーションゾーンに変わっている。その中でも登山は盛んで、厳しい冬季の登山を楽しむ人も多い。

初春の元旦登山は、昭和四十七年の元旦、飯野信（会員番号七四一七番）会員が一人で登ったのが始まりで、今日まで続いている。

今年は、例年になく暖かく、山裾の駐車場に、三々五々県内各地から支部会員が集まり、新年の挨拶も早々といつもの水神コースを登る。関口を経て、前年までの風雪や積雪を忘れたような、静かな霜柱の山道を登れば、東の空が白み、やがて正月のお供えが飾られた水神の碑前に着き、沢に降り水筒に若水を汲んで一休みする。この辺りから小さいパーティになって新雪の賽の河原を登る頃、松島

湾の上に初日が薔薇色の顔を見せる。展望のよい僅かの道を過ぎれば、膚を刺す風が吹き抜ける霧氷の頂上に着く。二等三角点の側にある石の社に手を合わせ、先着の会員よりお神酒を頂き、宮城支部恒例の宴が山頂で賑やかに開く。

春の総会は、五月十五日（日）、泉ヶ岳で故高橋憲二（会員番号七三〇三番）先輩の追悼と併せておこなう。

昭和六十三年度宮城支部総会。議事は一、昭和六十二年度事業報告・同会計報告、二、昭和六十三年度事業・会計計画案について審議、いずれも原案通りに可決された。その他、「みやぎ百山」調査登山の継承、支部機関誌「宮城山岳8号」の出版が承認された。

追悼会は、木皿　譲会員デザインの美しいレリーフを前に同会員の司会ではじまる。支部長の挨拶、参会者の献花に続いて、清野誠一会員が、まんさくの花が咲く頃、単独で、泉ヶ岳に登山、遭難逝去された先輩を偲び、高憲さんの愛称で会員に親しまれた先輩は、独特の服装装備と片手に8ミリカメラを持って、本部や各地の山行に参加され「老いらくの山日記」を制作し続けた笑顔の、山の友を、柴崎徹会員は、山のレリーフに想う、を話され、最後に山の歌を歌い閉会した。

（庄司駒男）

会務報告

昭和六十二年（一九八七）六月〜昭和六十三年（一九八八）五月

一九八七年度役員・評議員・支部長

会　　長　今西寿雄
副 会 長　大塚博美・村木潤次郎
常務理事　鴫原啓佑・鈴木郭之・橋本　清・西村政晃・新井陽一郎
理　　事　大橋　晋・松永敏郎・織田沢美知子・太田晃介・田部井淳子・浜口欣一・大森久雄・岡沢祐吉・早坂敬二郎・小林政志・関塚貞亨・勝山康雄
監　　事　山本健一郎・太田　敬
常任評議員　松田雄一・小倉董子・山野井武夫・平林克敏・中島　寛
評 議 員　近藤信行・宗実慶子・大森薫雄・中世古隆司・田中弘美・安間荘・佐々木豊喜・越智英夫・広羽　清・山田二郎・大島輝夫・川上　隆・杉野目　浩・日下田　実・沢村幸蔵
支 部 長　橋本誠二（北海道）・佐藤敏彦（岩手）・岡田光行（秋田）・村上勝太郎（山形）・庄司駒男（宮城）・中島正夫（福島）・佐藤一栄（越後）・蒲生明登（信濃）・大沢伊三郎（山梨）・安間　荘（静岡）・尾上　昇（東海）・松井辰弥（岐阜）・斉藤惇生（京都）・若林啓之助（富山）・増江俊三（石川）・阿部和行（関西）・港叶（山陰）・権藤太郎（福岡）・野口秋人（東九州）・西沢健一（熊本）・魚本定良（宮崎）

理事会は会長、副会長、理事、監事、常任評議員によって構成される。

◇六月（一九八七年）理事会　六月十日（水）ルーム

出席者　二十七名

▽審議事項

一、常務理事互選の件

二、各理事の分担について

▽報告事項

一、会長諮問調査委員会設置について

二、常任評議員選任結果について

三、委員会報告

会報「山」五〇六号参照

◇七月理事会　七月八日（水）ルーム

出席者　二十五名

▽審議事項

一、山崎文庫・書籍および書架購入の件

二、韓国仁川山岳会招請状発行の件

▽報告事項

一、浩宮、寛仁両殿下入会の経緯について

二、三国合同登山関係

三、委員会報告

会報「山」五〇七号参照

◇評議員会　七月二十五日（土）三国友好登山事務所

出席者　松田雄一（議長）、山野井武夫、平林克敏、宗実慶子、中世古隆司、田中弘美、安間　荘、越智英夫、広羽　清、山田二郎、大島輝夫、今西寿雄、大塚博美

▽審議事項

一、本会の二十一世紀へのビジョン作り、定款細則の見直し、国際化への対応に対する諸問題を会長より評議員会に諮問の件

会報「山」五〇八号参照

◇八月理事会 休会

◇九月理事会 九月十日（木）ルーム

出席者 二十四名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、常務理事会報告

二、委員会報告

会報「山」五〇九号参照

◇十月理事会 十月九日（金）ルーム

出席者 二十三名

▽審議事項

一、秩父宮記念学術賞候補推薦の件

二、ウェストンレリーフ複製の件

三、名誉会員推薦の件

▽報告事項

一、委員会報告

会報「山」五一〇号参照

◇臨時理事会 十月九日（金）ルーム

出席者 二十三名

▽審議事項

一、三国友好登山隊の隊員決定の件

会報「山」五一〇号参照

◇評議員会 十一月九日（水）ルーム

出席者 松田雄一（議長）他十七名

△審議事項

一、名誉会員推薦の件 本年度該当者なし

二、会長諮問の件 継続審議

会報「山」五一三号参照

◇十一月理事会 十一月十日（木）ルーム

出席者 二十四名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、中間決算、監査報告

二、三国登山準備状況

三、委員会報告

四、評議員会の報告

会報「山」五一一号参照

◇支部長会議 十二月五日（土）ルーム

出席者 二十一名他執行部八名

▽審議事項

一、六十三年度全国支部懇談会開催場所と日程について

▽報告事項

一、三国合同登山の準備経過

二、その他

◇十二月理事会 十二月九日（水）ルーム

出席者 二十四名

▽審議事項

一、法政大学アンナプルナI峰登山計画（一九八九年）の推薦について

▽報告事項

一、支部長会議報告

二、委員会報告

会報「山」五一二号参照

◇一月（一九八八年）理事会　一月十三日（水）ルーム
出席者　二十二名
▽審議事項
一、大阪市立大学日中友好学術登山隊（一九八九年）の後援依頼の件
▽報告事項
一、三国合同登山について
二、評議員会での会長諮問答申について
三、委員会報告
　会報「山」五一三号参照

◇二月理事会　二月五日（金）ルーム
出席者　二十五名
▽審議事項
一、三国合同登山隊隊員変更等の件
▽報告事項
一、委員会報告
二、評議員会よりの答申について
　会報「山」五一四号参照

◇三月理事会　三月九日（水）ルーム
出席者　二十四名
▽審議事項
一、明治学院大学梅里雪山登山隊一九八八の名儀後援の件
二、昭和六十三年度事業計画、収支予算案編成について
三、通常総会開催日の件
▽報告事項
一、委員会報告
二、三国合同登山の予定について
　会報「山」五一五号参照

◇四月理事会・評議員会　四月十三日（水）ルーム
出席者　二十九名
▽審議事項
一、通常総会付議事項（昭和六十二年度 事業報告・収支決算決算および財
　産目録、昭和六十三年度事業計画および収支予算案）承認の件
▽報告事項
一、監査報告
二、三国合同登山関係
三、委員会報告
　会報「山」五一六号参照

◇五月理事会　五月十一日（水）ルーム
出席者　二十五名
▽審議事項
一、三国友好登山報告会開催の件
▽報告事項
一、委員会報告
　会報告会報「山」五一七号参照

◇支部長会議　五月二十日（金）ルーム
出席者　二十名他執行部六名
▽報告事項
一、三国合同登山について
二、六十三年度全国支部懇談会北海道大会について
三、支部事務局担当者会議について
四、各支部報告

◇昭和六十三年度通常総会　五月二十日（金）於　千代田区九段四―二―二
五　私学会館（アルカディア市ケ谷）

出席者　今西会長以下二二六名（委任者を含む）

▽総会次第　司会　勝山康雄

一、会長挨拶　今西寿雄
二、会務報告　新井陽一郎
三、昭和六十二年度事業報告承認の件　新井陽一郎
四、昭和六十二年度収支決算、財産目録承認の件　西村政晃
五、監査報告　山本健一郎
六、昭和六十三年度事業計画（案）承認の件　新井陽一郎
七、昭和六十三年度収支予算（案）承認の件　西村政晃
八、昭和六十三年度除籍対象者の件
九、議事録署名人選任の件

総会終了後、懇親会が行われた。

会報「山」五一七号参照

◇主なる行事と集会

▽昭和六十二年六月三日（火）ルーム
探検家列伝集中講座「大谷探検隊」　講師　片山章雄

▽昭和六十二年六月六日（土）～七日（日）七時雨山荘
東北ブロック集会、記念山行

▽昭和六十二年六月六日（土）～七日（日）上高地
第四十一回ウェストン祭

▽昭和六十二年六月九日（火）ルーム
探検家列伝集中講座「趙爾豊」　講師　水野　勉

▽昭和六十二年六日十一日（木）ルーム
遭難救助机上講習会　講師　金子・渡辺

▽昭和六十二年六月十三日（土）～十四日（日）小川山
岩登り講習会　講師　丸山・金子・渡辺

▽昭和六十二年六月十三日（土）～十四日（日）京都
第七回日本登山医学シンポジウム

▽昭和六十二年六月二十三日（火）ルーム
講演と映画の会「北千島昭和初年の頃の山旅」　講師　佐々保雄

▽昭和六十二年六月二十六日（金）ルーム
講演会「火山地形、噴火予知」　講師　沢田河洋

▽昭和六十二年六月二十六日（金）神保町区民会館
ストレッチング講習・実技　講師　笠松美和子

▽昭和六十二年七月三日（金）～九日（木）銀座フジフォトサロン
山岳写真の源流展（後援）

▽昭和六十二年七月十六日（木）ルーム
談話会「この人と語ろう」　田部井淳子

▽昭和六十二年七月十八日（土）～十九日（日）一切経山
火山地形探索山行　講師　沢田河洋

▽昭和六十二年七月二十一日（火）ルーム
ストレッチング講習・実技　講師　笠松美和子

▽昭和六十二年七月三十一日（金）～八月十一日（火）京王百貨店
ネパール神々と舞踏劇展（後援）

▽昭和六十二年九月八日（火）ルーム
講演「フィーゲルのすすめと実演」　講師　玉木正之

▽昭和六十二年九月十七日（木）駒町区民集会室
ストレッチング講習・実技　講師　笠松美和子

▽昭和六十二年九月二十七日（日）鉢盛山
現地小集会

▽昭和六十二年九月二十九日（火）ルーム
映画会「あるガイドの死」
▽昭和六十二年十月十日（土）〜十一日（日）二軒小屋
紅葉会（最終回）
▽昭和六十二年十月十五日（木）ルーム
会員懇談会「山の映画あれこれ」　講師　羽田栄治
▽昭和六十二年十月二十四日（土）ルーム
第二十回山岳図書交換会
▽昭和六十二年十月二十七日（火）ルーム
講演とスライド「ソ連の岩登りと山岳事情」
講師　オレグ・シュミロフ
▽昭和六十二年十月三十一日（土）京都西本願寺会館
支部事務局担当者会議
▽昭和六十二年十月三十一日（土）〜十一月一日（日）京都・比良山
全国支部懇談会京都大会
▽昭和六十二年十一月三日（火）高千穂町
第三回高千穂ウェストン祭
▽昭和六十二年十一月五日（木）ルーム
談話会「この人と語ろう」　講師　藤原雅一
▽昭和六十二年十一月八日（日）上州武尊山
現地小集会
▽昭和六十二年十一月八日（日）皇居外周
学生部マラソン大会
▽昭和六十二年十一月十四日（土）〜十五日（日）八王子セミナーハウス・奥多摩
第十三回自然保護全国大会・自然観察会
▽昭和六十二年十一月十四日（土）〜十五日（日）高森町、根子岳東峰
熊本支部創立三十周年記念集会・山行
▽昭和六十二年十一月十六日（月）ルーム
会員懇談会「山の新装備をさぐる」　講師　大賀由晋
▽昭和六十二年十一月二十日（金）ルーム
談話会「環境の科学」　講師　高遠　宏
▽昭和六十二年十一月二十六日（木）ルーム
第二十五回「この一本展、望月文庫より」
▽昭和六十二年十一月二十六日（木）ルーム
第十九回山岳図書を語る夕べ　講師　望月達夫
▽昭和六十二年十二月五日（土）私学会館
年次晩餐会
▽昭和六十二年十二月六日（日）城山
懇親山行
▽昭和六十二年十二月十日（木）ルーム
雪崩講習会　講師　宮下秀樹
▽昭和六十二年十二月十一日（金）ルーム
談話会「燃焼とコンロの科学」　講師　小西奎二
▽昭和六十二年十二月十九日（土）三国登山隊事務所
シンポジウム「チョモランマ登山における高所の問題」
▽昭和六十二年十二月二十日（日）倉岳山
現地小集会
▽昭和六十三年一月九日（土）三浦富士
自然観察山行
▽昭和六十三年一月十五日（金）〜十七日（日）八方尾根
スキー懇親会

▽昭和六十三年一月十五日（金）〜十七日（日）六日町
スキー講習会　講師　若井　清、榊原庸子
▽昭和六十三年一月二十一日（木）ルーム
談話会「スキー板の新しい傾向」　講師　松丸秀夫
▽昭和六十三年一月二十七日（水）ルーム
講演会とスライド「スコットの跡を辿って」　講師　ロバート・スワン
▽昭和六十三年二月七日（日）奥久慈男体山
現地小集会
▽昭和六十三年二月十八日（木）ルーム
談話会「東南アジアの薬草」　講師　山口一孝
▽昭和六十三年二月二十日（土）〜二十一日（日）六日町
スキー講習会　講師　若井　清、榊原庸子
▽昭和六十三年二月二十六日（金）ルーム
講演会「登山と水分補給」　講師　鈴木政登
▽昭和六十三年三月三日（木）ルーム
ロープワーク講習会　講師　松永敏豈
▽昭和六十三年三月十二日（土）ルーム
第十四回新入会員オリテンテーション
▽昭和六十三年三月十九日（土）ルーム
第十六回山岳史懇談会「立教大学山岳部初期の登山」
講師　堀田弥一他
▽昭和六十三年三月二十一日（月）横浜アンデレ教会
横浜ウェストン記念祭展示（後援）
▽昭和六十三年三月二十五日（金）ルーム
談話会「登山の行動科学」　講師　千葉重美、小山内正夫
▽昭和六十三年四月十五日（金）ルーム
談話会「山の航空写真あれこれ」　講師　大森弘一郎
▽昭和六十三年四月十六日（土）ルーム
シンポジウム「危険な動物と安全登山」
講師　大田原美作雄、浅沼　靖、影井　昇、近藤　了、塩原幹治、中村
純二、浜口欣一
▽昭和六十三年四月十七日（日）浅間嶺
新入会員歓迎さくらハイク
▽昭和六十三年四月二十四日（日）黒姫山
現地小集会
▽昭和六十三年五月十四日（土）〜十五日（日）西吾妻山
若葉会山行
▽昭和六十三年五月二十日（土）〜二十二日（日）金山平、天女山
第二十六回木暮理太郎翁碑前懇親会
▽昭和六十三年五月二十七日（金）〜二十九日（日）白神山地
懇親山行
▽昭和六十三年五月三十日（月）ルーム
講演会「初めてのヒマラヤ」　講師　沢野　公

◇海外登山界との交流

▽昭和六十二年九月十九日（土）〜二十六日（土）カナダ・オハラ湖畔
カナダ山岳会インディアン・サマーキャンプへ参加
▽昭和六十二年九月二十六日（土）〜十月十日（土）インド・シバ峰
婦人懇談会インド・ヒマラヤ偵察隊
▽昭和六十三年二月六日（土）ホテルニューオオタニ
日本・中国・ネパール一九八八年チョモランマ／サガルマタ友好登山隊
壮行会
▽昭和六十三年二月〜五月　チョモランマ

日本・中国・ネパール一九八八年チョランマ／サガルマタ友好登山実施
（交差縦走と頂上からのＴＶ中継）
▽昭和六十三年三月二十三日（水）ルーム
インド・ヒマラヤ、シバ峰偵察報告
▽昭和六十三年五月五日（木）
チョモランマ／サガルマタ交差縦走成功

SANGAKU

The Journal of the Japaneses Alpine Club

Vol. 83 (No. 141) **Issued in December 1988**

Contents

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Tokyo, Chiyoda-ku, Yonban-cho, 5-4 Sun-View Heights,

Office Bearers and Committee

1988 (May 1988-April 1989)

President : IMANISHI Toshio
Vice-president : OHTSUKA Hiroyoshi, MURAKI Junjiro
Honorary Secretary : SHIGIHARA Keisuke
Honorary Editor : OHMORI Hisao
Honorary Librarian : OHHASHI Susumu
Honorary Treasure : NISHIMURA Masaaki
Auditors : YAMAMOTO Ken'ichiro, OHTA Kei

Committee

SHIGIHARA Keisuke
HASHIMOTO Kiyoshi
OHHASHI Susumu
MATSUNAGA Toshiro
HAMAGUCHI Kin'ichi
OKAZAWA Sukeyoshi
ARAI Yōichiro
SUZUKI Hiroyuki
OHMORI Hisao
OHTA Khosuke
SEKIZUKA Sadaaki
TABEI Junko
KOBAYASHI Masashi
ODAZAWA Michiko
HAYASAKA Keijiro
KATSUYAMA Yasuo

Council

MATSUDA Yuichi
OGURA Nobuko
YAMANOI Takeo
HIRABAYASHI Katsutoshi
NAKAJIMA Hiroshi
MUNEZANE Keiko
ANMA Soh
NAKASEKO Takashi
SASAKI Toyoki
TANAKA Hiromi
KONDO Nobuyuki
OHMORI Shigeo
OCHI Hideo
HIROHA Kiyoshi
YAMADA Jiro
OHSHIMA Teruo
KAWAKAMI Takashi
SUGINOME Hiroshi
HIGETA Minoru
SAWAMURA Kozo

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : HASHIMOT Seiji
Iwate : SATOH Toshihiko
Akita : OKADA Mitsuyuki
Yamagata : MURAKAMI Katsutaro
Miyagi : SHOJI Komao
Fukushima : NAKAJIMA Masao
Echigo : SATOH Ichiei
Shinano : GAMOH Akito
Yamanashi : OHSAWA Isaburo
Shizuoka : ANMA Soh
Tokai : ONOE Noboru
Gifu : MATSUI Tatsuya
Toyama : WAKABAYASHI Keinosuke
Ishikawa : MASUE Shunzo
Kansai : ABE Kazuyuki
Kyoto : SAITO Junsei
San'in : MINATO Kanoh
Fukuoka : GONDO Taro
Higashi Kyushu : NOGUCHI Akito
Kumamoto : NISHIZAWA Ken'ichi
Miyazaki : UOMOTO Sadayoshi

China, Japan, Nepal Friendship Expedition to Qomolangma/Sagarmatha 1988

OHTSUKA Hiroyoshi

The Chinese Mountaineering Association (CMA), the Japanese Alpine Club (JAC), and the Nepal Mountaineering Association (NMA) agreed to cooperate with each other for scaling Qomolangma/Sagarmatha (Everest), the highest peak of the world, from the North as well as the South by organizing a joint expedition. The protocol for the tripartite expedition was signed by the representatives of each country, on February 24, 1987 at Beijing.

The expedition had the following three major objectives :

1) International cooperation towards promotion of friendship and development of mountaineering techniques.

2) The expedition was organized in a spirit of equality. The expedition was divided into two simultaneous ascents from the Chinese and Nepalese sides of the mountain. After the summit celebrations, those who climbed from the Chinese side descend the Nepalese side and vice versa.

3) Live television transmission through a communication satellite from the world's highest peak.

The expedition conducted mountaineering with due respect to the spirit of the Kathumandu Declaration of the UIAA that emphasises the importance of protection of natural and cultural heritage. The expedition attempted to become a model for mountaineering groups worldwide.

To control mountaineering activities performed on both sides of Qomolangma /Sagarmatha, the expedition established its headquarters in Beijing. The headquarters was formed with general leaders and deputy general leaders recommended respectively by their countries of origin. Mr. Shi Zhanchun, the President of CMA was general leader of the Chinese team. Mr. Toshio Imanishi, the President of JAC, was general leader of the Japanese team, and Kumar Khadga Bikram Shah, the President of NMA, was general leader of the Nepalese team. Mr. Shi Zhanchun served as Chief of the headquarters staff.

Basic plan of climbing was as follows :

Period : March through May 1988. Expected to climb the mountain on May 5, 1988.

Route : The North Side : East Rongbuk Glacier — North Col — Northeast Ridge — Summit

The South Side : Khumbu Glacier — South Col — Southeast Ridge —

— Summit

Tactics : A detailed climbing plan for the north side route was determined by representatives of China and Japan, and the plan for the south side route by representatives of Nepal and Japan. These plans were executed after they were approved by the headquaters.

The expedition party was devided into two sub-parties : the north party and the south party. The leader of the north party was a Chinese team member, and the leader of the south party was a Nepalese team member. However, leaders of the actual north party and south party climging groups were Japanese team members. 15 members from each country were selected as climging groups.

Mountaineering activities were transmitted live from Qomolangma/Sagarmatha, including its summit portion using a communication satellite as a relay facility. 40 members participated in the TV coverage. The TV transmission base was established on the north side of the mountain for technical and geographic reasons.

Three countries provided the mountaineering party with their own news reporters. 18 members participated in the report acitivities. They sent their fresh reports and photographs using a communication satellite.

The mountaineering organizations of the three nations undertook respectively to carry out preparation for mountaineering activities in the north and south sides as specified below :

CMA—mainly preparation up to the camp in Chinese territory (transportation, lodging supply, of foods and fuel, setting of base camps and etc.).

NMA—mainly preparation up to the base camp in Nepalese territory (transportation, lodging, supply of foods and fuel, setting of base camps and etc.).

JAC —mainly preparation for high altitude climbing activities above both base camps in Chinese and Nepalese territory (equipments for climbing and communications, oxygen, medicine, foods for high altitude and etc.).

On May 5th, 1988, the expedition finished with a big success. The 12 team members scaled the top from two directions, and descended in directions opposite to their climb. The entire event was broadcast live to the world. The climb took place in the finest weather the expedition could have expected.

The south party encountered an unexpected heavy snow fall and hard wind at the last stage which slowed it down. The last camp was set up at the height of 8300 meter, lower than planned, which resulted in a 4 hour delay to reach the top. However, they succeeded in reaching the summit and attained the object in good cooperation of three countries members, especially Nepalaese team-Sherpas. It was really difficult for both parties to rendez-vous from the north and the south at the top in time and descend for each to the opposite side, because there is a big difference in weather and geographical features between Tibet and Nepal.

In conclusion, we promoted the friendship of three countries. Each country showed their own speciality in good cooperation and made a contribution to the world history of mountaineering by establishing a new and remarkable record.

We believe this project helped to develop and reinforce the friendship among the Asian countries that possess the Himalayan Range, China, India, Nepal and Pakistan.

Lastly, we should add Japan's contribution in financial and techical assistance which helped result in the success of the expedition.

From Qomolangma to Sagarmatha
Successful completion of first traverse

by YAMADA Noboru

I reached the summit at 12 : 50 p.m. (Beijing time, same as Japan; Nepal time 9 : 30 a.m.) on May 5, 1988. The weather was magnificent with a slight breeze. I heard a voice yell "Yamada San". Cirendouji (29, of China) and Ang Lhakpa (27, of Nepal) were already on the summit and shouted "waa !" as they embraced.

We congratulated each other for a job well done and slapped each other on the shoulders.

They had trusted me and left the lead to me most of the way up. Perhaps that was natural since I am much older and more experienced than they. Once the members of the traverse party were decided, leadership sort of naturally gravitated to me.

It was my third climb of Everest. I was not so excited this time : rather I felt calm and more than capable of reaching the top. As I had long wanted to climb the mountain from the north. I was very happy to be given this opportunity.

At the summit we went through the standard ceremony of summit photographs, then each of us took care of our separate summit business.

I called Climbing Leader Shigehiro on the transceiver. It was decided that we should wait on the summit for the south side climbing party and the television crew.

Our one hour on the summit passed quickly. We talked individually to our companions at Advance Base Camp and on the North Col, and received congratulations from them.

Cirendouji removed his mittens to change film and his hands began to freeze, and he also complained of cold feet. Ang Lhakpa also became cold and impatient to start down. Just then the figure of Li Zhixin of the support party came into view, and they were persuaded to wait a bit longer.

As soon as Li Zhixin reached the summit we asked if he had brought oxygen. He answered "no".

Ang Lhakpa had 2 bottles of oxygen and changed to his second bottle. I had only 30 atmospheres left but expected that I wouldn't need oxygen for the descent, so I was not worried.

At 14 : 00 we left the summit.

We roped up with our 6 mm rope, with me in the lead. When we reached the top of the Hillary Step the South Summit came into view, and we could see the south side party climbing. We were relieved that the route was clearly visible. Even if one has climbed a route before, descending a route without footprints can be scary, not to mention the danger of avalanches. So it was a relief to see that the snow on the south side was in safe condition.

Our tracks would also help the south side party reach the summit safely. We met them at the small col between the South Summit and the main summit. We wished each other a safe climb. Then our group pushed on past the South Summit toward Camp 4. At 16 : 00 we met Mitsugu Kitamura climbing alone below the South Summit. He was under instructions to meet us and accompany us down.

At Camp 4 we were met by Sundare and Ang Karma. Imoto, who had just finished bringing a load up, wanted to stay to help with cooking and other chores, but there were not enough sleeping bags, so he went down.

Thus having completed the first north-to-south traverse of Everest, we descended to Base Camp the next day.

(1) Reasons for our success

On the north side, success was largely due to competent organization of the ferrying of supplies and to the skill of Climbing Leader Shigehiro.

As the route was already known and there were no particular obstacles, success depended largely on luck with the weather, but in the final analysis the key was competent organization of load ferrying. The responsible people at Base Camp and Advance Base Camp did their jobs well, providing the support that we needed for success.

Equality among the three nations was a basic principle of this climb, but the work of organizing the load ferrying could not be shared equally. It was clear from the beginning that this painful task would fall to the Japanese members, and this burden was shouldered without complaint. This attitude was an important factor in our success.

This provided the foundation for our steady progress in the good weather which we were fortunate to have. It permitted us to establish our high camps, Camp 5, Camp 6 and Camp 7, higher than originally planned.

(2) The severe weather on Qomolangma

Qomolangma in spring has generally severe weather. I have climbed in the Himalaya and other high ranges of Nepal, India and Pakistan 16 times over the last 10 years. Of these climbs 12 were in Nepal, 6 of them in winter, including successful winter ascents of Sagarmatha, Manaslu and Annapurna. The spring weather on Qomolangma this time was more severe than the weather than on those winter ascents. In particular the winds and storms were severe. Life at Base Camp in the severe winds of March was particularly hard, and some of the tents at Advance Base Camp were blown away and could not be recovered. Our first real battle with the wind during climbing was in early April, in putting the route through from Camp 4 on the North Col to Camp 5 and then ferrying loads up it.

The top part of the snow-covered Northeast Ridge at about 7,500 m seems to form a funnel for the wind that strikes the North Face, analogous to the South Col serving as a funnel for the wind that strikes the Lhotse Face. The wind there kept up a steady 30 to 40 m/sec without a break.

Once when 4 of us were putting the route through that stretch we had to crawl, clinging to the rocks, struggling to move from one hold to the next. Fortunately the force of the thin air was reduced; the same wind at sea level would have blown us away. Once I tried to remove my pack to take rope (to be fixed on the route) out, but the wind immediately blew between my body and the pack, threatening to wrench the pack from my grasp. I gave up on removing the pack and had another climber take the rope out for me. It was the first time I had ever climbed in such a terrible wind.

Our spring climb was blessed by an unusual stretch of clear weather, but the wind was our great enemy.

(3) The last camp, Camp 7, at 8,680 m

It had to be the last possible place. Beside a mushroomshaped rock on the ridge was iust enough space for 3 4-man tents.

Since one purpose of this expedition was to send the first live telecast from Everest, it was our responsibility to prepare adequate space for the last camp and the television equipment. Our probability of success was greatly enhanced when, on May 4, we succeeded in assembling our 3-man summit assault team (1 each from Japan, China and Nepal) and the 4-man (all-Nepali) load ferrying support team at the last camp.

Slightly below that, at 8,600 m, we found the remains of an old Chinese expedition camp, but the higher site was far superior.

(4) Night at the last camp——a cross-section of cross-cultural mountain climbing

We had no trouble conversing with each other and no shortage of things to talk about. While I talked to Ang Lhakpa in Nepali, Cirendouji just listened; then he talked to Ang Lhakpa in Tibetan. While we were enjoying our conversation in a relaxed mood, Lhakpa Sona of the support party popped into our tent, livening things up.

Here is our dinner menu that night :

(a) Soup made from tsampa crushed up like buckwheat mash, with cheese and mustard.

(b) Instant rice.

(c) Soup made from instant rice, meat and tsampa.

We ate these alternately. Tsampa was our main staple.

Before departure we were somewhat worried about cultural differences on a trinational expedition, but in the event it did not bother me.

This was for several reasons : I already knew some of the Sherpas; even those Sherpas I did not know knew about me; I had already climbed with several foreign or joint expeditions including Polish, Indian and Nepali climbers and keep up the friendships with those climbers to this day. I knew about the bright side, the pleasures of joint expeditions, which in fact was one of the main reasons I joined this expedition.

I believe that in addition to being strong physically and skilled technically, a mountain climber has to be good-natured. Once you're in the mountains, sharing the same tent and eating from the same pot, cultural differences can be overcome by an effort at mutual understanding. This was particularly true in my case, but on the whole things went well throughout the expedition.

(5) The 2nd step and the final summit climb

A 100 m traverse from Camp 7 brought us to the base of the 2nd step. The 2nd step consists of a couloir-shaped rock pitch, a chimney, a snow slope and a final pitch that is climbed with the aid of iron and aluminum ladders. The rocky couloir included one rather steep step. I traversed 2 to 3 meters to the right, climbed up one step to another step about hip height, then got up that and traversed back to the base of the chimney.

Cirendouji climbed well but as he did not have a hammer or pitons. I had to climb first and prepare a belay point with 2 pitons. The rock was brittle and the pitons were hard to place, but by hook or crook I managed to pound them in. We used an old 6 mm fixed rope that we found. Cirendouji went on ahead while I belayed Ang Lhakpa up this pitch. Then we climbed an iron ladder left by the 1975 Chinese expedition and an aluminum (6 to 7 meters long) ladder left by the 1985 Spanish expedition. Above that was a rock pinnacle that we used as a support for a fixed rope. By the time we climbed up another ladder and detoured to the right around another 2 m-high wall to the base of the talus slope above, an hour had passed. Then we climbed another 200 m up the talus slope to the base of a triangular snow field. The snow was not uniform. Where it was soft we sank in to the knee, thigh or even hip. We tried to place the route on hard snow where walking was easy, which required switchbacking right and left several times. Sometimes we were on the East Face overlooking the Kangshung Glacier, sometimes on the North Face.

I picked up the rear on the last stretch to the summit. I never thought of climbing as competition, but the Chinese and Nepali climbers with me seemed to each be intent on reaching the summit first. I took my time, communicating with the camps below and taking photographs as I climbed, and arrived at the summit about 10 minutes behind the others.

(6) Alpine style vs. polar method

These days many people seem to have the impression that alpine style climbing is the "new style", the polar method is the "old style" and large polar method expeditions are obsolete, but I think that the only people who are really qualified to argue the relative merits of the two styles are those who have actually done both.

Reinhold Messner does not use the polar method, and if he tried it he would probably find himself incompatible with it. But even he got his first Himalayan experience doing classical polar method climbing. Only after he had accumulated sufficient Himalayan experience did he move into alpine style, solo and oxygenless climbing.

Alpine style climbing in the Himalaya requires superior physical strength, technical mountaineering skill and psychological fortitude. It is a continual struggle with oneself under continuing stress. The risk is high, with a high proportion of unsuccessful attempts and many cases of failure to find a good route for the descent.

The polar method also has its difficulties. The advantages of this method are reduced risk, increased safety and improved chances of success, but to some people these are also disadvantages. And the tactics become more difficult and complicated.

I have been on short (20 to 30 days) polar-style expeditions. It is not something that just anybody can do. I have come to prefer climbs in which everybody makes it to the summit.

Neither method is inherently superior to the other. Some routes are better climbed by one method, other routes by the other method. Each climber must make his own decisions in these matters. I think it is important not to be swayed by the pretentious arguments in mountaineering magazines or by climbing fads.

(7) Some thoughts on this climb

I am glad that I went on this climb, and my Chinese and Nepali friends seemed genuinely happy to have me there.

To me, the chance to climb together with many good people was one of the attractions of this expedition. Success in traversing the mountain and the vastly expanded human contacts have become important assets to me. In particular I made important contacts with the younger generation of climbers, whom I hope to take along on future expeditions.

I hope that the Japanese Alpine Club will continue to plan and carry out good expeditions.

(8) Prospects

As for my own plans, since I climbed Annapurna in the winter of 1987, many people have been encouraging me to complete climbing all 14 8,000-meter peaks. As of this writing, in the summer of 1988, I have 7 left. In October I plan to climb Cho Oyu from the Chinese side and then Shisha Pangma. If successful that will leave 5 (1 in the Nepal Himalaya and 4 in the Karakoram) which I hope to complete by age 40. After that I hope to work to gain more public recognition of the value of mountaineering.

(From Qomolangma to Sagarmatha : Translated by Harold Solomon)

First Winter Ascent of Annapurna South Face

by YAGIHARA Kuniaki

Success on the second attempt

Our group from the Gumma Prefecture Mountaineering Federation attempted the South Face of Annapurna in the winter of 1984～1985, only to be turned back after reaching the 7,200 meter level.

Causes of failure included inadequate funding and inadequate knowledge of winter Himalayan snow conditions. We felt that the route was within our technical ability, and resolved to make another attempt in the near future. (Our report is in the Japanese mountaineering magazine "Sanguku" in 1985, in Japanese only.)

On our return attempt, we succeeded. The summit was reached on December 20 after 12 hours climbing, but unfortunately 2 of the 4 summitters fell to their deaths on the descent.

When we returned to Japan our first attempt in February 1985, I was asked to lead an Everest expedition to make a motion picture team on the life of Naomi Uemura. Since the only way to succeed in a Himalayan climb is to gain Himalayan experience. I, together Tsutomu Miyazaki and Noboru Yamada, organized an expedition for the purpose, consisting mainly of climbers from the Gumma Prefecture Mountaineering Federation who were expected to be on the next Annapurna South Face expedition.

Of the climbers on that expedition, including a professional cameraman and photographic assistant Yasuhira Saito, 8 were the Gumma Prefecture Mountaineering Federations; 11 climbers, including 9 Japanese and 2 Sherpas, made it to the South Col. Due to breakdown of oxygen equipment and other reasons, only 7 made the summit. Of those, 5, including myself, were from Gumma Prefecture Mountaineering Federation, so my plan to have us accumulate high-altitude Himalayan experience was basically successful. These 8 became the core of the second Annapurna expedition, which included, in all, 14 people including the non-climbing General Leader.

Fast assault strategy

Miyazaki, reflecting on the reasons for our previous failure, formulated fast assault tactics designed to keep us from getting caught in bad weather for a long time. It was planned to restrict the assault period to only 15 days. Longer periods are difficult both physically and mentally, requiring one to risk long periods in dangerous locations.

Considering that the bad weather and snowfall of late December would be our major problems, we felt that a fast assault was our only choice. We felt that our ability and experience are sufficient to do the climb in that time, if we could solve the problem of high-altitude acclimatization.

Another element of our strategy was to move Base Camp close to the South Face and reduce the number of camps. The camps would have to be able to withstand long periods of snowfall. We planned our Camp 5 at the site of the British Camp 7 above the mini rock band. In the event, Camp 4 at 7,400 m was our highest.

To make the summit in the first half of December we would have to start from the beginning of November. November offers the most stable weather of the entire year. Some people ask whether this was really a winter climb, and even we are unable to rid ourselves of doubt on this point. However, we feel that a climb of this route in the high winter months of January and Fabruary is beyond reach at today's mountaineering standard, and that our climb was a useful step on the way to this eventual goal.

Although we planned an assault period of only 15 days. We adopted a cautious approach and took enough food to last us until the middle of February. We saw snowfall as the only thing that could prolong our climb. On the South Face of Annapurna, the effects of cold and strong wind are not as severe as in some other places. Expecting to possibly have to reconstruct routes due to fixed ropes becoming buried in heavy snowfall, we took double the usual amount of climbing hardware.

Expedition members' Himalayan experience

There is one thing that I told our members over and over. "Our cumulative Himalayan experience and accomplishments are far superior to those of the 1970 British expedition led by Bonington. Moreover, they climbed this route in spring when much more snow falls, although the cold is not quite as severe as in winter. Considering this, it is inconceivable that we should be unabls to climb this route. We can approach our South Face winter climb with confidence."

The 1970 British expedition, in what now seems a relatively early period in Himalayan mountaineering history, had only 3 members with Himalayan experience, with a total of 6 climbs among them. We had 8 members who had climbed 8,000-meter summits a total of 17 times.

After our first failed attempt on the South Face of Annapurna, Bulgarian and Swiss expeditions tried the route in winter, and they also failed.

Kathmandu, Base Camp, acclimatization

The night of October 29, when the main group of 5 members reached Kathmandu, Nazuka and Sato departed for Pokhara with two trucks. It was during strict traffic control preceding the South Asia 7 Nations Summit Conference.

The main caravan left on November 3, split into 5 groups. Since it was the height of the trekking season, we were hard put to find enough porters. We took 6 days to Machhapuchare Base Camp. Then we passed our previous Base Camp, and after 8 days set up our new Base Camp at 4,300 m at the base of the South Face.

We took acclimatization trips, totaling 10 days, to Tent Peak (5,663 m) and in the direction of Glacier Dome. Tent Peak was climbed a total of 27 times by 11 members. We hoped to climb to the 7,000 m level on Glacier Dome but reached only 6,000 m to return to Base Camp. We then took 4 days for rest and some simple preparations.

Yamada and Dr. Fujioka came at the end of November. On the way, at Macchapuchare Base Camp, they encountered an accident where Katsuyuki Hayashi fell to his death while building an electric power generating facility. Dr. Fujioka administered treatment while Yamada went to get a helicopter to take Hayashi to Kathmandu.

Start of climbing, camp pitching, avalanches and snowfall

December 1, the real climbing started, after checking the route before the end of November. We climbed an icefall that did not need to have a route put up it and pitched Camp 1 above its top. That was at 5,300 m. The next day Yamada, Saito and Kobayashi started to put the route up to Camp 2. It was the same route we had used in 1985, so progress was fast.

December 3 ferrying of loads started in the rear of the route blazing party. Camp 2 was pitched at 6,100 m. Progress was very fast. However, too much of a good thing isn't always good. The mountain lost little time striking back. That very afternoon a hanging glacier on the South Face collapsed and scored a direct hit on Camp 1. It was only a branch of the avalanche that hit the camp, but nevertheless all 6 tents and the supplies — 90% of the supplies needed for the upper camps had already been ferried up and were cached at Camp 1—were swept away. There were 10 climbers and Sherpas in the camp. Fortunately they took shelter under an ice step and the only injury was to one Sherpa, who was hit by a block and injured in the head and shoulder. Ferrying up of reserve supplies from Base Camp started immediately.

By December 6, the route was put through up to the site of camp 3 at 6,850 m. However, hecause of the long period of good weather on the South Face, a shower of rocks rained down continuously. The next day we climbed back up to pitch Camp 3, but one climber who was looking for the site took a direct hit from a rock the size of a man's head, which hit him in the foot. Luckily he was only bruised and we were able to evacuate him the next day. We also moved the camp site down a bit.

We rescheduled the pitching of Camp 3 for December 10. By that time the weather was turning worse. On the 11th snow began to fall. It fell all day; 1 meter accumulated at Camp 2. The series of accidents—an avalanche, a falling rock accident, a Sherpa falling into a crevasse and now snowfall—reminded us of our failure 3 years previously. We became gloomy. The 13th was a day of avalanche danger, and activity was stopped at all camps.

A Canadian expedition that was trying to climb the South Face (which they called the Southerst Face) by a new route decided to call it quits in the face of this heavy snowfall. They reached 6,100 meters.

The 14th we started work on the route again. The newly fallen snow held loose rocks in place, reducing the amount of fallen rock. We passed our 1985 high point at 7,200 m, then arrived at the right side of the base of a rock face called the flatiron. This is the crux of the route. The rock face, 100 m high, overhangs in places. Nazuka led the way and reached the top in a bit over 4 hours.

Pitching the final camp.

December 17, Nazuka, Mie and Kobayashi put the route up while Yano and a Sherpa carried the materials for Camp 4. As a result the camp was pitched as soon as the site was reached, at 7,400 m.

Camp 4 was on a snowy ridge, but clearing only a small amount of snow away exposed hard ice, and a third of the tent was suspended in space. The three climbers inside could not get into sleeping bags; they had to huddle together as they passed the night.

The next 2 days we fixed a rope from Camp 4 up a couloir to the base of the micro rock band, and decided that the assault would be carried out by 2 teams of 6 to 7 men each.

Assault, summit

December 20, 4 climbers, Noboru Yamada, Yasuhira Saito, Akio Mie and Toshiyuki Kobayashi, started the assault at 03 : 40, while it was still dark. It was clear and calm, the temperature −35℃ (−31°F). At Base Camp I burned dope said to have been taken from the base of the holy Mt. Kailas and prayed for the safety of our climbers.

At 09 : 00 our climbers arrived at the micro rock band. They climbed a snow face and a snow ridge leading to the summit rock face. At 12 : 00, they started up the summit rock band. I could watch them from Base Camp through binoculars. They took 2 hours up the rock face, then started up the summit ridge. On the north side they were in the shade and it was quite cold, although there was only a light breeze. At 15 : 17 they reached the summit and made a video tape of the scenery.

They called us from the summit, expressing their happiness and thanks. We in turn expressed our thanks and appreciation to them. At 15 : 48 Yamada and Saito left the summit; the other two had gone ahead. I was reassured by the speed of Mie, who was the first to head down.

Kobayashi and Saito fall to deaths.

However, an hour later, as the climbers finished desending the steep summit rock face, just as they started down a relatively gradual slope Kobayashi fell. Yamada said that he seemed to have tripped on the skavler. Yamada and Saito watched as Kobayashi fell, but on the steep South Face there was no hope that he would stop or be saved. It was all over quickly, and they had no choice but to resign themselves to his fate.

At 17 : 30, as the South Face was red with alpenglow, Yamada and Saito reached the end of the fixed rope. Just before 19 : 00, Yamada reached Camp 4. Saito was said to be right behind; and it was said that a call from camp to Saito brought a response. Mie went out to meet him but just before Saito reached camp he suddenly yelled "are...!" and fell.

His crampons scraped against rock, and red sparks flew in the darkness. The joy of the summit was now replaced by the sorrow of seeing Kobayashi and Saito fall to their deaths. The difference between joy and sorrow was just too great and left us speechless. We decided to abort the second assault and withdraw.

Yamada and Yagihara descended first. A helicopter search was a complete failure, with no trace of either the climbers or any of their equipment.

Completing the climb

We successfully climbed a difficult route on an 8,000-meter peak for the first time in winter, on the South Face of Annapurna, without using oxygen.

Adequate acclimatization and rest permitted us to complete the climb in a short time (was this perhaps also a first?) and to some extent the climb went according to plan.

However, we were not able to complete the climb in the 15 days as originally planned and lost 2 climbers, so we could not feel satisfied with the results of this expedition.

Toshiyuki Kobayashi was a 22-year-old student at Gumma University, voluntarily taking 5 years to finish school. He had been to Everest at age 19, making it to the South Col twice without oxygen, and after that continued to show rapid progress as a climber.

Yasuhira Saito had teamed up with Noboru Yamada for an alpine-style winter climb of Manaslu. That was the climb on which they found and brought back a "Peace" tobacco can that had been left on the summit ridge by the Japanese expedition that did the first ascent of the mountain in 1953, an event which became quite a topic of conversation. He also participated in the first ascent of a route on Dhaulagiri I.

(Translated by Harold Solomon)

The Defense Academy Alpine Club Mt. Qomolangma Expedition 1987

KAWAKAMI Takashi

Party members

(1) The headquatrers of the Expedition

Leader of the Expedition : Motoharu Arima (a member of the House of Representatives)

General leader : Takashi Kawakami, Sub leader : Yoshihiro Wakaura, General affairs : Naohiko Ohsaki, Doctors : Yoshiaki Sawamoto, Takumi Sugie, Cameramen : Minao Kitamura, Taroh Akashi, Noriyuki Muraguchi, Yoshikazu Inoh

(2) Climbing party

Japanese party : Masao Yokoyama (Climbing Leader), Isao Fukura, Yohichiro Yamaguchi, Kohichi Wakui, Ryohhei Karino, Keiichiroh Matsumoto, Isao Kobayashi, Shinichi Hineno, Kohichiroh Takahashi, Yoshitaka Ueda, Mikio Hosoda, Toshio Iwasaki, Toshizi Satoh, Shigeru Matsuoka, Isamu Magami, Yukinori Kiyosawa, Katsuhiko Chiba, Chikara Shinoda, Osamu Yoshida, Kesazi Kawauchi

(3) Sherpas : Nawang Yonden and 17 members

(4) Chinese members : L.O Choh Renyuu and 2 members

(5) A Japanese connector in Peking : Yohichi Nagano

Schedule

Aug. 4	Built a base camp (5,154 m)
Aug. 5	Started to send our belongings by yaks to the base camp.
Aug. 6	Camp 1 (5,700 m) was built on the right bank of Rongbuk Glacier.
Aug. 7-14	Inspected the place destined for Camp 2 and the route of north ridge of Mt. Qomolangma.
Aug. 15	Camp 2 (5,930 m) was set up.
Aug. 29	Camp 3 (6,300 m) was built on the north ridge.
Sept. 2	Mr. Masao Yokoyama, Climbing Leader, passed away by accidentaly slipping down into the Rongbuk River on his way from Camp 1 to the base camp.
Sept. 14	Camp 3 was swept away by an avalanche that was 40 m wide, 150 m long, and 2 m thick (around 23 : 00).
Sept. 11-14	Suffered from heavy snow.
Sept. 19	Rosumed climbing, reinforced the route, landed our belongings and examined the place destined for New Camp 3.
Sept. 26	New Camp 3 (6,900 m) was set up on the north ridge.
Sept. 27	Advanced to the shoulder of the west ridge and then examined the route up until 7,400 m.
Sept. 28	Camp 4 was set up on the shoulder of the west ridge.
Sept. 29-Oct. 2	Inspected the place destined for Camp 5 and sent our belongings there. Examined the route up until 7,800 m.
Oct. 3	Camp 5 (7,600 m) was set up.
Oct. 4-18	Inspected the place destined for Camp 6 and sent our 5 members and 3 sherpas stood at 8,100 m, which is the highest point we had ever reached this time.
Oct. 18-20	Terminated climbing and started to withdraw due to heavy snow and wind.

It took a long time for us to adapt ourselves to the different height as only 4 out of 21 members had practical climbing experience. One of the members climbed Mt. Kongur Tiubie (7,595 m) and reached the summit. Two others climbed Mt. Passu (7,284 m), which is located in Pakistan. The fourth member climbed Mt. Sickle Moon (6,574 m), which is located in India.

Training for Adaptation

Each fellow made 1) a 5-day training tour to 5000 m-high mountains according to his conditions from the base on the right bank of Rongbuk River, and 2) a 5-day training tour to 6300 m-high mountains on the east side from the base camp.

As most of the fellows were not familiar with climbing up higher mountains, at first some of us had some trouble with their conditions. However, later at the end of September when we tried to climbe up again, none of the members fell into bad conditions.

An Oxygen Inhaler

We used an oxygen inhaler from Camp 4.

Directions for use are as follows :

Camp 4 (7,300 m) : for sleeping, each uses 0.2 liters per minute
Camp 5 (7,600 m) : for sleeping, each uses 0.5 liters per minute
for activity, each uses 1.0 liters per minute
Camp 6 (8,100 m) : for sleeping, each uses 1.0 liters per minute
for activity, each uses 3.0 liters per minute

It is regretful that we failed to build Camp 6 owing to heavy snow and wind, even thoughwe had completed the route to the place destined place for it.

The Crown (Huang Guan Shan) 1987

YAMAMOTO Ryozo

Prologue

Summer in 1987 we, Academic Alpine Club of Shizuoka and Shizuoka University, sent a scientific and mountaineering Expedition to Xinjiang in China, whose purpose is to climb The Crown (7295 m : Huang Guan Shan) and to do scientific investigations around Dzungarian basin and Taklimakan desert. The Crown is located about 40 km northwest of K2 and it had been the third highest unclimbed peak in the world.

Let me say this in conclusion, unfortunately we could not get to the summit. Our highest point reached was about 7010 meters.

With regard to the scientific investigations, many fruiteful results were obtained from these investigations.

We had permission to try The Crown in the end of July and the agreement with Mountaineering Association of The People's Republic of China (CMA) was concluded at Beijing in November 1986. By the help of many friends in China and Japan, the permission to do scientific investigation was finally given provided that it must be performed with joint of Academica Sinica.

The expedition party consisted of : Prof. T. Murata as the chief leader, 14 climbers (Leader : R. Yamamoto), 7 scientists (Leader : Dr. Ohishi), one Newspaper reporter and 9 Chinese including 5 scientists from Academica Sinica.

Ascent of The Crown

Along with the approach route well-known to K 2 Base Camp from China side, on June 18 we arrived with 75 camels at Base Camp (BC) at 3900 m near the end of the Crevasse Glacier which is the longest one in China, via the Aghil Pass (4780 m) and Shaksgam River from Mazar-Dara.

Advanced Base Camp (ABC) was established on July 21 at 4410 m near the junction of the Crevasse Glacier and the Crown Glacier. As the route from BC to ABC was about 20 km long, we have to make Depo Camp (DC) on the halfway in order to make smooth transportation of our load on the Crevasse Glacier and also we sometimes have encountered violent water streams to be caused by afternoon fluids have prevented us to go up and/or down there. Therefore, it was necessary one month more to carry the load to ABC.

It seemed to climb the tongue of the Crown Glacier was very difficult, we climbed the side wall and traversed on the Crown Glacier. Camp 1 was set up on July 29 at 5100 m below the southeast ridge of the Crown. To reach Camp Ⅱ at 5800 m on the ridge, we climbed a steep rock band a snow face with a help of fixed ropes 1500 m for 28 piches.

From there, the traverse route was taken on snow entirely just below rocks on the east side of the ridge, and on the way we went up to on the ridge where Camp Ⅲ was made on August 17 at 6550 m.

We fixed ropes 1500 m for 28 piches between C Ⅱ and C Ⅲ. Then we traversed for 200 meters on the steep snow east face and climbed about 500 m directly upward to about 7000 m high. An A-shaped rock wall rises for 100 m from there. We tried a chimney but could not complete it because of dangerous condition.

Neverthless the weather was fine and the wind was gentle, our highest point of 7010 m was reached on August 22 and 23.

All members returned back to BC on August 28. After that, Captain Henry Morgan and a British team of six came to our BC on September 1.

Morgan's subsequent letter to me says that they also could not get to the summit for lack of time. They got to within 75 m of the top.

On our back way from BC, we have taken camels to across two violent water streams from the Sarpo Laggo Glacier and K 2 Glacier.

At Shaksgam River, we have often acrossed deep water streams by taking camels and had dangerous feelings sometimes because we had no life jackets.

Indo-Japanese Nanda-Kot Expedition 1987

OHTA Kosuke

Rikkyo University Apline Club led by Y. Hotta succeeded in the first ascent of Nanda-Kot Oct. 5 1936. That was the first Japanese Himalayan Expedition. In commemoration of the silver anniversary of our seniors' success, the present club members planed a return expedition to the mountain in autumn 1987. Since entry to this area by foreigners is restricted, we accepted an Indo-Japanese joint expedition. We appreciate by IMF's kindness and appreciation of the achivement of our seniors.

Sept. 20 th 7 Japanese members including leader of Japanese party, K. Ohta, left Japan and arrived at Delhi.

Sept. 28 th 2 Indian members including leader of Indian party, Mr. Vijai, a liaison officer, and 5 Sherpas joined us and we all left Delhi.

Oct. 2 nd We started our caravan with 14 porters and 12 horses from Munsiari. (Bus service goes only as far as this town.)

Oct. 5 th We pitched a temporary Base-House (3650 m) on the right bank of Lwanl Gad, and relayed loads from there to Base Camp.

Oct. 6 th We established our Base Camp (4150 m). This site was below the end of Lwanl Glacier, so we had plentiful running water.

Oct. 7 th The weather was fine. We went to reconnoiter the site of the Advanced Base Camp (ABC) and chose our climbing route for the NE ridge which consists of gravel at the end. It was easy to climb because it was snow efre.

Oct. 8 th Cloudy, with occasionally snow, 0°C at BC. We set up ABC at 5050 m. All members carried loads up to ABC from BC. It took three hours and a half, and one and half coming down.

Oct. 9 th It was very fine, +1°C at BC. ABC was at the snow-line, snout of the Kuchela Glacier so that running water was available during the day-time only. 7 members carried loads from BC to ABC, 4 of them stayed at ABC to prepare the upper route. Some members suffered slight mountain sickness.

Oct. 10 th Very fine, −12°C at ABC. The NE ridge became steep at 5300 m and formed an 800 m-long snow wall, then became gentle leading to the top. We climbed the broad glacier at the east side of the NE ridge to a height of 5300 m. It was technically easy but difficult to find the route below the snow wall, because of a complicated system of crevasses. We reconnoiterd up to 5600 m and returned.

Oct. 11 th Very fine day, −15°C at ABC. We fixed a 50 m length of rope between crevasses and a 130 m length of rope on the snow wall, then pitched Camp 1 at 5700 m. It was a dangerous place with many hidden crevasses. We returned to ABC immdeately. The nex day we stayed at ABC to rest.

Oct. 13 th Very fine, −10°C at ABC. 8 members left ABC at 9 : 30 to carry loads up to C 1 which they reached at noon, 4 remained at C 1 to extend the route that afternoon and the next day.

Oct. 14 th Clear turning to cloudy. At first we traversed the snow wall to the left side from C 1 and then we climbed up and to the right. In the last part we went up straight again and reached a ridge which was below a little peak. On the whole the steep zone was hard ice and the gentle zone was deep snow. I think this part was most difficult on this climbing route. We fixed about 200 m length of rope on the steep part because there was avalanche danger. Scenery was very fine, we could see many Himalayan peaks, especially Nanda-Devi. We reached the ridge and went up a little, and pitched C 2 at 6150 m. The weather became gradually worse. We returned to C 1 against strong and cold wind.

Oct. 15 th Fine changing to snow, −18°C at C 1. We took three hours to reach C 2. In the afternoon we prepared a route on the upper part of the ridge in bad weather. There was an easy and broad snow plateau on the opposite side of the NE ridge. When we returned to C 2, we decided that the first summit attempt would be on 17 th Oct.

Oct. 16 th Very fine, strong wind, −20°C at C 2. At first we climbed the left side of a ridge and then climbed on the right side after breaking a cornice. After that, the ridge became wide and easy. The previous party had prepared the route up to about 6300 m of fixed rope. Today 2 members climbed up to C 2 from C 1. Tomorrow, all 6 members would attempt the summit.

Oct. 17 th Very fine, −20°C at C 2. We started at 5 : 20. It was a fine day, no wind. Though the broad ridge had no technical problems, we were exhausted by breakable crust snow. At 8 : 00 we passed a dome with an easy slope. A long steep slope led from there to the top, so much stamina was needed. After climbing a very steep slope in two and a half hours, we broke a cornice just under the summit, and then reached the flat summit at 10 : 45. 4 Japanese students and 2 Sherpas stood on the summit of Nanda Kot. It took one hour and a half to descend from the summit to C 2 whthout any further trouble.

Oct. 18 th Fine and then cloudy. $-28°C$ at C 2. 4 members including the Japanese leader K. Ohta and 2 Sherpas succeed in the second ascent.

Our memorial Nanda-Kot expedition after 51 years was successful without any victims. 10 members (6 Japanese, 4 Sherpas) became summiters. But it was quite regrettable that Indian members could not reach the summit by reason of bad health condition. Our success was largely due to the good weather. But I think that we might have failed but for the kind support of the Indian members, IMF and Indian Army.

<Book Review>

NORTH TO THE POLE

by Will Steger with Paul Schurke

Times Books division of Random House, Inc. (New York, Toronto) 1987

Reviewed by Harold Solomon

Just exactly what is a polar expedition "without resupply"?

The early Arctic expeditions, such as the (debated) successful North Pole expedition in 1909 led by Admiral Robert Peary and Matthew Henson, pioneered what is now called the "polar method" of exploring, establishing a series of camps and relaying supplies among them to support the final assault on the objective. In later years, with the advent of modern technology, aircraft resupply came to replace the series of camps, with their large number of dogs and Eskimo assistants, though the "polar method" lives on in major mountaineering expeditions.

Recently, parallel to the interest among mountaineers in "alpine style" mountain climbing, some polar explorers have become interested in reducing their dependence on technology and returning to the ways of the early explorers. This book describes a 1986 expedition led by veteran Minnesota dog sledders Will Steger and Paul Schurke, advertised as an attempt to reach the North Pole "without resupply".

Just exactly what constitutes an expedition "without resupply" has been hotly debated. One thing this expedition did not do was duplicate the Peary-Henson method. A polar expedition has been compared to an artificial satellite launch in which most of the initial fuel is needed to propel its own weight. Peary and Henson started with 130 dogs, most of which were needed to haul their own food. As food was used up, eliminating both the need for some dogs and the means to sustain them, dogs, starting with the weak and injured, were killed and fed to other dogs and the explorers. Today's public would not stand for such an expedition, nor would the explorers themselves. So Steger and Schurke arranged to have dogs taken out by air as they became superfluous, contending that the integrity of the expedition would be maintained as long as no supplies were brought in. The superfluous sledges would be burned as fuel.

During a training period at Frobisher Bay, the members spent much time debating the true meaning of "without resupply". If supplies ran low, would it be all right to send one or two expedition members out with the dogs, to stretch the remaining supplies? A visitor to camp, British explorer Sir Ranulph

Fiennes, on his way to an expedition of his own, advised that this would constitute "reverse resupply"; the only justification for sending someone out would be injury. Other arguments concerned, for example, whether killing seals or polar bears for meat would constitute "resupply". It was decided that members could send letters out, but not receive letters which would constitute "psychological resupply".

Tsuguo Saotome, a veteran of the Nippon University Alpine Club's 1978 North Pole expedition who now runs an Arctic expedition support operation, is blunt. "Steger hasn't done anything without resupply. Sending dogs out is equivalent to what Nippon University did, receiving supplies of dog food by air and then sending the dogs back over the ice". He suggests that fund raising pressure might have led to exaggerated claims. Saotome's partner in the expedition support business, Resolute-based Bezal Jesudason, agrees completely. One could add that the sending out of 2 injured members, though unavoidable, was exactly the "reverse" resupply that Ran Fiennes warned about, since the supplies that they would have used were not sent out with them.

Nevertheless, even if sending dogs out is reverse resupply, it is not at all equivalent to what Nippon University did. First, since all supplies had to be carried from the beginning, initial sledge loads were over 600 pounds, and many round-trips had to be made to relay supplies, roughly doubling the total distance traveled. Second, it was impossible to selectively resupply individual items that ran short after departure, leading to internal disputes. For example, the two tent groups quarreled over alleged squandering of precious fuel by one of them; and Shaklee's chicken soup became a more popular item than anticipated, leading to mutual suspicion and recriminations over its distribution. All the Nippon University people had to do if something ran short was hold out until the next resupply flight. Third, tents were unheated at night, resulting in enormous condensation in sleeping bags, which came to weigh 50 pounds and more.

The problem of exaggerated claims was not limited to the problem of resupply. Concerned that dietary sugar would cause blood sugar level to fluctuate, the expedition planned a sugar (and salt)—free diet that was even trumpeted in Joe Weidor's Sports Fitness magazine as proof that the human body does not need sugar even in very cold weather. However, careful reading of this book reveals that the members also carried individual snacks, mostly consisting of brown sugar and other sweets. Toward the end some members became so sick from the expedition's high-fat diet that they purchased sweets from others at exorbitant prices.

This expedition reached the North Pole by the most difficult method yet attempted, and placed the first woman, Ann Bancroft, on the Pole. Even Saotome concedes this much. But its accomplishments were marred by exaggerated claims.

On the other hand, this book deserves mention for one contribution that is not directly claimed. When discussing the first successful North Pole expedition in 1909, Steger is always careful to refer to "Peary and Henson" rather than merely "Peary". Limited and valuable photograph space, which might have been used to include more of the expedition's own photographs, was sacrificed to include a full-page portrait of Henson and several photographs of the "Peary and Henson" expedition. Although Matthew Henson's skill as a linguist, sledge driver and navigator made him virtually a co-leader of the expedition, the history books refer to the expedition as simply Peary's and to Henson as his "manservant", in deference to Peary's heirs who did not want him equated with a black. And whereas Peary returned home a national hero, Henson fell into oblivion as a Staten Island customs house clerk. Steger's effort to restore Henson to his rightful place in history is welcome, as is his inclusion of a Soviet explorer in his 1988 multinational Greenland traverse, for which he paid by incurring logistical difficulties caused by being unable to use Thule Air Base. Perhaps some day Steger's humanitarian efforts will be recognized as more important than the semantic squabbling over how to label his expeditions.

This book is must reading for anyone interested in polar exploration, and hopefully will be translated into Japanese in the near future.

〔この書評の日本語版（直訳では無いが）は「岩と雪」1988年8月号に掲載されています。ソロモン〕

来日 100 年記念

W・ウェストン年譜 その2

（明治 30 年<1897>—明治 43 年<1910>まで）

お読みになる前に

1. この年譜は，前号に続いてウェストンの第2回目の来日を中心に，第3回来日前年までの 14 年間とし，以後は次号に譲ることにした。
2. 年譜は，すでに公開されている資料と，新しく発掘した資料を出来る限り集大成したものである。
3. 日時や行程は「The Playground of the Far East」(「極東の遊歩場」1918 年刊）を中心に，その他の著作や資料によって作成した。
4. 解説は，出来るだけ新しい事実を紹介することとし，登山の状況など著書に述べられているものは割愛した。また，周辺資料に基づいて推論したケースも多々あるが，煩雑を避けるためその過程は省略あるいは略記し，資料名も省略した。
5. 重要な新事実については，出典を明らかにするため参考資料名を（　）内に記した。さらに『　』は論文名とし，著者，誌名，刊行年月日の順に列記した。ただし，ウェストンの著作については，著者名を省略した。また，○○資料，書簡と記したものは，未公刊の個人資料等である。
6. この年譜の作成に当たっては，ウェストンの事績を探究している編者３人の資料を基に，川村が執筆した。資料の読み違い，推論の誤り等の責任は全て川村が負うものである。
7. 全体にわたって，名誉会員島田巽氏の監修を受けたほか，「山岳」編集担当の大森久雄氏にも貴重な助言を頂いた。そのほか，さまざまな形でご協力下さった方々に，この場をかりて厚くお礼申し上げる。

昭和 63 年6月 15 日

編纂者　日本山岳会会員　川村　宏
同　三井　嘉雄
同　安江　安宜

明治 30 年（1897）

2月……英国地学協会誌（The Geographical Journal＝以後 RGS 会誌と略称）が「日本アルプスの登山と探検」の短評を掲載。

(The Geographical Journal, Vol. 9, No. 2, 1897)

＊ 日本での登山の楽しさは十分に理解出来るとしながらも，登山そのものを評価する言葉はなく，評者も無署名である。

7月……クライネ・シャイデックからアイガー・ヨッホを試登。

(『An Adventure on the Eiger Joch』 The Alpine Journal, Vol. 23, No. 174, 1906)

8月2日（月）……ブロック（H.S. Bullock）と共に，ポーター1人を連れてアイガー・ヨッホを越える。〔ホテルベルビュー〕

(『An Adventure on the Eiger Joch』 The Alpine Jpurnal, Vol. 23, No. 174, 1906)

＊ 8月2日早暁クライネ・シャイデックを出発，アイガー氷河を登った。コル直下で激しい雷に襲われながら，アイガーとメンヒの間のアイガー・ヨッホを越えたのである。降路はフィッシャー氷河上部のアイスフォールを経て，ウンター・グリンデルワルト氷河をベレックへ下った。ガイドなしで，20 時間余にわたる苦闘の末のアイガー・ヨッホ越えは，ウェストンが終生誇りとした登攀であった。

この年……ウィンブルドン（Wimbledon）のクライスト・チャーチ（The Christ Church）の副牧師に就任。

(Who was Who 1929-1940)

(The Crockford's Clerical Directory, 1923)

＊ この頃の住所は，Vine Cottage, Cottenham Park Road, Wimbledon である。

(The Derby School Register)

明治 31 年（1898）

2月 23 日（水）……ロンドン日本協会の例会で，バクストン（N. Buxton）とフォーダム（M. Fordham）の両氏が，ウェストンと行をともにした日本での登山について講演。

(『Mountaineering in Japan』 By Noel Buxton, 『An Ascent of Fuji in May』 By Montague Fordham, 倫敦日本協会雑誌 四之巻 1900)

＊ バクストンは明治 26 年（1893）5月に，ウェストン，オーラ

ーク（H.W.L. O'Rorke）と一緒だった恵那山，富士山などの登山を語り，フォーダムも明治 25 年（1892）5月の富士登山について述べた。フォーダムは，講演の中で『その時まで誰もが成し得なかった積雪期の富士登山を，ウェストン氏と行なった破天荒な記録である』としている。ウェストンは明治 25 年（1892）の暮れには，その登山が‘初登’でないことを，「ジャパン・メイル」の編集者から指摘されていた。そのことをフォーダムに伝えていなかったようだが，帰国後に会うこともなかったのだろうか。

＊　この例会にウェストンは出席していないが，ガウランド（W. Gowland）やサトウ（E.M. Satow）らが出席していて，講演後に発言している。ガウランドは，鳥海山や日光山群，それに大峰山など南大和の登山に触れた後『富士山には冬の早い時期に登った』と語っているが，年月は分からない。また，サトウは日本の登山の良さは『ヨーロッパと違って，至る所にガイドを連れた観光客の群れがいないことであり，登山中にシャンペンの瓶の破片で足を切らないことだ。また，日本では，近くの村で温泉に入れるが，スイスでは滅多にそうした楽しみは得られない』と述べている。

8月……英国山岳会誌（The Alpine Journal＝以後 AC 会誌と略称）が「日本アルプスの登山と探検」の書評を掲載。

（『Reviews and Notices』The Alpine Journal, Vol. 19, No. 141, 1898）

日時不明……ブロック（H.S. Bullok），ハード（H.J. Hard）と共に，新ルートからアレッチホルンに登る。

（『In Memoriam』The Alpine Journal, Vol. 52, No. 261, 1940）

明治 32 年（1899）

月日不明……ブロック（H.S. Bullock），ロングスタッフ（T.G. Longstaff）と共に，ヴェンゲルンアルプからメンヒ登頂。

（『In Memoriam』The Alpine Journal, Vol. 52, No. 261, 1940）

＊　この登攀でウェストンは fine icemanship を発揮したと追悼記に述べられている。

明治 35 年（1902）

1月 23 日（木）……日本聖公会オードレイ監督（Right Rev. W. Awdry）が，来日を希望したウェストンについて注意を促す書簡を英国の福音伝播協会（The Society for the Propagation of the Gospel

＝以後 SPG と略称）に発信。
（『聖公会宣教師・司祭ウォルター・ウェストンと横浜聖アンデレ教会』垣内茂 主の御名によりて～横浜聖アンデレ教会百年史～ 1985）

＊ 第1回は英国国教会伝道協会（The Church Missionary Society＝以後 CMS と略称）の宣教師として来日したウェストンが，今回は SPG 本部に日本派遣を要請した。これを受けて SPG 本部が日本の監督に，その是非を打診したことへの返書である。オードレイ監督は，ウェストンが眼病のため宣教師を辞任したことや，登山休暇を取り過ぎて英国人信者から不満を持たれていたことなどについて危惧の念を表明しながらも，歳月や結婚は人を成長させるものだとし，本部が派遣を決めれば喜んで受け入れると返事をしたためている。

4月3日（木）……フランシス・フォックス（Sir Francis Fox）の二女，フランセス（Miss Frances Emily Fox）と結婚。

（Who's Who in Japan, 1914）
（Clare College 資料）

＊ この時，ウェストン 40 歳，フランセス 29 歳であった。松方三郎氏によれば2人の馴れ初めはスイスのロウゼンラウイであったという。いかにもロマンチックで，これを否定するものではないが，フォックス家はウィンブルドンの名家であり，ウェストンも同地の教会の副牧師を勤めていた。すでに知り合いの仲だった2人が，山を縁として結ばれたものとみたい。

（『登山家の横顔』 松方三郎 アルプスと人 1976 年1月 30 日）

5月 25 日（日）……カナダのバンクーバーからエンプレス・オブ・インディア号（S.S. Empress of India）に乗船，夫妻で日本に向かう。

6月9日（水）……横浜に到着。

（『Passengers』The Japan Weekly Mail, June 14, 1902）

＊ SPG の宣教師として日本へ派遣されることになったウェストンは，挙式したばかりの新婦を伴ってカナダのロッキー山地を訪ね，その足で横浜へ向かった。当時，横浜市寿町3丁目 130 番地にあった横浜聖安得烈教会（正式名は漢字だが，以後聖アンデレ教会とする）の牧師に就任したのである。住居は横浜市山手町 219-B であった。

7月 第1日……箱根・宮ノ下一乙女峠一御殿場 〔富士屋〕
第2日……御殿場一<馬車鉄道>一須走 〔宿不明〕
第3日……雨で滞在。 〔同 上〕

第 4 日……雨で滞在。 〔同　上〕

第 5 日……須走—馬返し—中食場—六合目 〔六合目小屋〕

第 6 日……午前中雨のため滞在 〔同　上〕

第 7 日……六合目—富士登頂—六合目—馬返し—須走—<馬車鉄道>—御殿場—<汽車>—国府津—箱根・宮ノ下

〔富士屋ホテル〕

(『Fuji San, Old and New』 By Mrs. Frances Weston, F.R.G.S., 倫敦日本協会雑誌，第 16 巻 1918)

* ウェストン夫妻は，早速富士登山を企てている。ウェストンにとっては 4 度目で，夫人は無論初めてであった。夫人の紀行文には日時が記されていない。従って，上記の日程表はその記述から推定したものである。ただ 7 月 4 日に富士屋ホテルに投宿したことだけはわかっている。

* 箱根・宮ノ下の富士屋ホテルから，コック兼荷持ちの『キオ』という人物を連れて乙女峠を越えた。御殿場で 1 泊し，明治 31 年に開業した御殿場馬車鉄道で須走に着いた。しかし，雨のため 3 日間動けず，4 日目に強力 2 人を雇って頂上を目指した。六合目の小屋でもう 2 晩を過ごしたあと登頂し，その日のうちに御殿場経由で箱根に戻った。

* この富士登山について小島烏水は「登山に就きて」などの著作の中で，時期を何れも “秋” としている。しかし，フランセス夫人の登山記から 7 月の，それも山開きの直後と分かった。この頃の開山時期は 7 月 15 日から 9 月 10 日であるが，この年は天候不順などで開山を 5 日ほど遅らせたと言う記事が英字新聞に見えている。

8 月 18 日 (月)……横浜—<汽車>—新宿—<汽車>—八王子—<汽車>—鳥沢—<馬車>—猿橋 〔宿不明〕

19 日 (火)……猿橋—<馬車>—黒野田—笹子峠—駒飼—<馬車>—勝沼—<馬車鉄道>—甲府 〔米　倉〕

20 日 (水)……甲府—<人力車>—有野 (対岳楼で昼食)—駒場—芦安 〔名取運一村長の家〕

* ウェストンは夫人を残して，単独で北岳へと向かった。横浜から汽車を乗り継いで鳥沢に出，馬車で夜道を走って猿橋に 1 泊。翌日，黒野田から駒飼まで徒歩で笹子峠を越えた。勝沼からは明治 31 年に開業していた山梨馬車鉄道で甲府に着き，米倉に投宿した。この夜，美味しい夕食を取り寄せたという『カイロテイ』は，文献

や資料にもその名が見当らない。音のよく似た『開峡楼』はあったが，大正年代に廃業していて確認出来ない。

宿の主人米倉善八から，登山口の芦安の村長名取運一を紹介され，北岳登山のメドもついた。翌日，ウェストンは心躍らせて芦安へ向かったのである。

8月 21 日（木）……芦安—刈安峠—野呂川—広河　〔広河小屋〕
22 日（金）……休養　〔同　上〕
23 日（土）……広河—大樺沢—小太郎尾根—北岳［外国人初登頂］—大樺沢　〔ビヴァーク〕
24 日（日）……大樺沢のビヴァーク地—広河　〔広河小屋〕
同 日…………『英国人の白嶺登山』の記事を「山梨日日新聞」が掲載。
25 日（月）……広河—野呂川沿いに下降—杖立峠—芦安　〔名取村長の家〕
26 日（火）……芦安—有野—鰍沢　〔粉奈屋〕
27 日（水）……鰍沢—富士川下り<舟>—岩淵—<汽車>—横浜方面

＊　ウェストンは名取村長の斡旋で3人の案内人を雇っている。マサオ（19），清水長吉（44），清水オジサン（61）である。長吉は芦安村の人であることが確認出来たが，ウェストンが長吉の父親と書いているオジサン，それに熟練した漁師だというマサオは不明である。オジサンと長吉が親子だとすれば，オジサンの17歳の時の子供となり，年齢的にも疑問が残る。だが，こうした詮索を抜きにすれば，3人は息の合ったベストトリオだったのだろう。ウェストンは1日1円の日当に値する以上の働きをしてくれたと喜んでいる。

＊　ウェストンが辿ったルートもよく分からない。清水権現と呼んでいる泉は不明で，杖立峠から野呂川へ下ったコースも漠然としている。明治38年の日本人の北岳登山記を見ると，堀切峠から赤沢の頭を経てシレイ沢に下るルートが示されていた。しかし，堀切峠がどこを指すのかわからず，ルート自体も廃道になっていてはっきりしない。が，ともかくウェストンらは野呂川に下り，上流へと遡った。日が暮れてしまい，ランタンを頼りに広河（広河原とも呼ばれた）の杣小屋に着いた。当時の小屋は左岸にあった。翌日はゆっくり休息し，土曜日の朝，清水長吉とマサオだけを連れて，大樺沢を登った。二股あたりから右股コースを経て，小太郎尾根から北岳に登頂したのである。帰途に雷鳥を見つけてみんなで追い回し5羽を

射止めた。このうちの3羽はウェストン自身が清水長吉から猟銃を借りて撃ったものだった。しかし，雷鳥を追いかけているうちに，尾根の上で自分らの位置がわからなくなり，踏み跡も見失ってしまった。やむなく大樺沢を目指してバットレスの下部をがむしゃらに下り，やっとの思いで沢に出たものの，宵闇に包まれてビヴァークを余儀なくされた。この地点は広河の小屋から1時間の所で，オジサンを安心させるため，マサオだけ下の小屋に下らせた。ところが，夜の9時頃になってウェストンの無事な顔を見たいというオジサンを連れてマサオが戻って来た。2人はすぐ小屋へ下ったが，この心遣いにウェストンはびっくりもし，感激している。

＊　翌日，ウェストンと長吉は広河小屋へ下り，のんびりと休日を楽しんだ。聖職者であるウェストンは，日曜の安息日に礼拝などの宗教活動をする以外，一切何もせずに安息日を守っている。明治24年（1891）のあわただしい登山でも日曜日は動いていない。前夜のビヴァークでやむを得なかったとはいえ，日曜日に下山したのは筆者の知る限り初めてである。

＊　この24日（日），地元紙にウェストンの北岳登山を報じる記事が載った。記事の一部を紹介すると『英国人ダブリーウェストン氏は高山観測の目的を以て入峡し両三日前四人の人夫を雇ひて白嶺に登山したりと云ふ聞く処に依れば氏は熱心なる高山観測家にして既に世界の各高山を抜渉したる由氏の説に依れば日本に在りては白嶺が第一の高山にして富士の如きは純然たる山岳に在らず火山作用によりて噴出したるものに過ぎずと云ふにありと氏が今回白嶺登山を企てたるも全く此の理由に基くものなりと』となっている。記者も直接ウェストンから取材したものでなく，また聞きの記事らしいが，登山の目的を高山観測としているのは面白い。

＊　ところで，外国人の北岳登山はこの時のウェストンが初登とされている。しかし，未確認ながら気になる新聞記事がある。ウェストンの北岳登山を報じたのと同じ地元紙の2日後の記事である。『甲府の学生団体にも白嶺や駒ヶ岳のやうな人跡の余り至らぬ険山へ攀登するのが一つや半分はありさうなものじゃドルワル氏のやうな老人でもモウ二回も白嶺へ登ったと云ふではないか（弱太郎）』（山梨日日新聞　明治35年8月26日）。

ほかにもドロワー氏が明治27～28年（1894～1895）頃から白根御池畔で夏に昆虫採集をしていたと述べている資料がある。しかし，新聞記事も伝聞に基づいたもののように思える上，他に確認出

来る資料が見出せないため，現段階ではウェストンの登頂を初登としておきたい。

＊　ドロワル，ドロワーと記されている外国人は，甲府カトリック教会の初代の神父であったドルワール・ド・レゼー（L'abbé Lucien Drouart de Lezey）である。明治6年（1873）にパリ外国宣教会から派遣されたフランス人で，東京，新潟，仙台，松本，甲府などで布教に当たり，御殿場の神山復生病院の4代目院長も勤めた。甲府在勤は明治 25 年（1892）から明治 40 年（1907）であったが，登山に関しては東京のパリ外国宣教会本部にも何も伝えられていない。

10 月……小田原津浪災害の救援基金にウェストン夫人が 50 円を寄附。

（The Japan Weekly Mail, Oct. 18, 1902）

＊　この津波は台風や地震によるものではない。9月初旬から被害をもたらしていた土用波の激浪が 28 日に急激に高まり，小田原町を含む沿岸の1町 12 村に大きな被害を与えたものである。死者 67 人，重軽傷者 264 人，家屋の流失及び全半壊は 1190 戸に上ったと言う（小田原市史料　歴史編）。

11 月1日（土）……『甲斐ヶ根の登山』を「ジャパン・メイル」に寄稿。（『The Ascent of Kaigane San』 The Japan Weekly Mail, Nov. 1, 1902）

＊　この一文をもとに小島烏水が『甲斐の白峰』を雑誌「太陽」（明治 36 年2月号）に発表した。後に烏水自身はまだ北岳に登っていないとわかり，盗作まがいの創作として問題になった。烏水の汚点として拭い去れるものではないが，『甲斐の白峰』が当時の青年らの冒険心を刺激し，登山への興味を掻き立てた功績は否定出来ない。また，烏水と武田久吉らを引き合わせるきっかけともなり，ウェストンも含めた人間模様が山岳会結成へと結びついて行くことになる。

11 月 22 日（土）……横浜でのフットボール試合にバックスとして出場。

（『Football』 The Japan Weekly Mail, Nov. 29, 1902）

＊　このゲームは，横浜のチームを紅白に分けて行なわれた。ウェストンは紅組のバックスで出場，2対1で白組を破った。このゲーム以後ウェストンは選手として出場していない。1カ月余後に満 41 歳を迎える彼にとって，登山はともかくフットボールのような激しい球技では体力が続かなくなったのだろう。

12 月 5 日（金）……横浜文芸協会（The Yokohama Literary Society）の例会で『山岳登攀と冒険』と題して講演。

（『Alpine Ascents and Adventures』 The Japan Weekly Mail, Dec. 13, 1902）

* ウェストンは，講演をアルプスでの登山の歴史から始め，大半は自分で撮影した 50 枚近いスライドを見せながら，ヨーロッパアルプスにおける自分自身の数々の冒険を詳細に語った。聴衆は文学会の会員と友人たちで，登山家でもあり座談の名手であるウェストンの講演に，最初から最後まで心を奪われていたと記事は伝えている。

12 月 18 日（火）……日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）の評議員となる。

（『The Asiatic Society』 The Japan Weekly Mail, Jan. 3, 1903）

* ウェストンは英国公使館で開かれた日本アジア協会の年次総会で，評議員に選出された。同じ評議員にチェンバレン（B.H. Chamberlain）の名前も見える。

12 月 26 日（金）……ウェストン宅で日曜学校児童のためのクリスマス祝会開く。

（『横浜聖安得烈教会近況』基督教週報　第六巻第二十号　明治 36 年 1月 16 日）

* 『日曜学校生徒のために先月廿六日ウェストン教師の宅にてクリスマス祝会を開きしに，児童四十五名，大人廿五名列席したり教師の奨励，生徒の答辞，賞品の授与，生徒の演習等ありたる後茶菓の饗応あり，右終て別室に飾りたる大クリスマス，ツリーの下にて種々なる贈品を分配せられたり，一同喜悦の情に充されて散会したり（同教会幼年信徒報）』とある。ウェストン教師の宅とは山手 219-B の居宅だったと思われる。ほかに 12 月 24 日には横浜聖アンデレ教会で 5 人の男女が洗礼を受け，その後にクリスマス祝賀会が開かれたことが報じられている。

月日不明……ブロック（H.S. Bullock）とシュマドリ・ヨッホに登り，バルストン（F.W. Balston）とミッテルホルンと北東稜を登る。

（『In Memoriam』 The Alpine Journal, Vol. 52, No. 261, 1940）

* ブロックによるウェストン追悼記には上記の登山が記されている。しかしウェストンは，この年の 4 月初旬にはフランセス夫人と結婚し，その足でカナディアン・ロッキーを経て来日した。とする

と，この登山は冬期に成されたことになるが，ウェストン自身は何も記していない。年度に誤りがあるのではないだろうか。

明治 36 年（1903）

1月 14 日（水）……SPG 本部（英国）へ教勢報告を送る。

（「主の御名によりて ～横浜聖アンデレ教会百年史～」 日本聖公会横浜聖アンデレ教会 昭和 60 年 11 月 30 日）

* ウェストンは在籍信徒数 101 名，前年中の献金収入総額 52 円 15 銭，受洗者は 12 名で，11 月の聖アンデレ日に初めて日本語で説教したこと，これからは毎月 2 回行ないたいと報告している。また，教会の移転新築を計画し，必要なおよそ 1000 ないし 1500 ポンドの資金作りに着手していることも付け加えている。

2月 10 日（火）?……横浜公会堂で『アルプス登山と冒険』と題して講演。

（『Alpine Ascents and Adventures』 The Japan Weekly Mail, March. 21, 1903）

* この少し前に「日本アルプスの登山と探険」を偶然に見つけた岡野金次郎とウェストンの出会いがあった。日本山岳会誕生のエピソードとして，余りにも有名な出来事であり，本稿ではその経緯は割愛する。

* 講演のタイトルは前年 12 月 5 日に横浜文芸協会でのそれと同じであるが，内容はかなり変えていたようだ。記事によれば『第 1 部はアルプスそのものを論じ，第 2 部はウェストン自身の数々の冒険を語った。スライドもその多くは前回とは別だったが，幻燈機とスクリーンの配置が悪くピントがぼけていた。しかし，第 1 部と第 2 部の間に，ご婦人の素晴らしい歌もあって，聴衆は楽しみながら熱中して聞き入っていた』と言う。また，この日の司会をした英国のマクドナルド公使（Sir Claude Macdonald）が，『言わせてもらうなら，私は谷戸坂の急斜面でうんざりと思っている』と述べて，聴衆の笑いを誘ったことが記されている。

* この日，岡野，小島にそれぞれウェストンから招待状が届けられた。岡野は招待に応じたが，小島は何故か行かなかった。小島によれば，初めてウェストンと会ったのは，何日か後の春雨しめやかな土曜の午後のこととあるが，この日を特定出来る資料は見つからない。

* 2月 10 日に “？” を付けたのは，この講演を報じた「ジャパ

ン・ウィークリー・メイル」が“水曜日”としているためである。水曜日とすれば 11 日であるが，今のところどちらとも判断出来ない。

(『Alpine Ascents' and Adventures』 The Japan Weekly Mail, Feb. 14, 1903)

2月 17 日（火）……横浜—＜汽車＞—東京—＜汽車＞—青森へ。

(『The Famine』 The Japan Weekly Mail, Feb. 28, 1903)

＊ 青森地方の飢饉の救援に東京・横浜の外国人居留民を代表して派遣されたものである。パロット（F. Parott）と共に午後横浜を出て，上野駅で佐々木医師と岡田という日本人と合流して午後6時発の汽車で青森へ向かった。2人の日本人との関係はよく分らないが，ウェストンは岡田を横浜の知事の私設秘書としている。

2月 18 日（水）……青森着。山之内知事を訪ね状況を聞く。〔宿不明〕

19 日（木）……笹森青森市長と会う。〔同　上〕

20 日（金）……青森—＜汽車＞—小湊（平内町）—＜汽車＞—青森 〔同　上〕

東津軽郡長と会う。

21 日（土）……青森—＜汽車＞—小湊—藤沢—山口—＜汽車＞—青森 〔同　上〕

22 日（日）……行動不明。

23 日（月）……青森—＜汽車＞—沼崎—＜馬車＞—上野—＜馬車＞—徳万才—＜馬車＞—才市田—＜馬車＞—七戸 〔同　上〕

24 日（火）……七戸—中—花松—七戸 〔同　上〕

村上上北郡長，七戸町長らに会う。

25 日（水）……行動不明。〔同　上〕

26 日（木）……行動不明。〔同　上〕

27 日（金）……青森—＜汽車＞—小湊—＜汽車＞—青森 〔同　上〕

28 日（土）……行動不明。〔同　上〕

3月 1 日（日）……青森—＜汽車＞—三戸 〔田　子〕

2 日（月）……三戸—文治屋敷—佐山—三戸—＜汽車＞—尻内 〔宿不明〕

3 日（火）……行動不明。〔同　上〕

4 日（水）……尻内—＜馬車＞—五戸—金ヶ沢（現新郷村）〔戸来久次郎郵便局長の家〕

5 日（木）……金ヶ沢—羽井内—金ヶ沢—五戸　〔宿不明〕
6 日（金）……五戸—<馬車>—尻内—<汽車>—沼崎—浦野館—沼崎—<汽車>—八戸　〔同　上〕
7 日（土）……八戸—行動不明—青森—<汽車>—東京へ。
3月　8 日（日）……横浜帰着。
(The Japan Weekly Mail, Feb. 28, March 7, 14, 1903)

＊　この青森飢饉は明治 35 年の大凶作によるもので，岩手，福島，宮城など東北各県も冷害の被害を蒙ったが，とりわけ青森県南部地方は被害甚大で上北郡では収穫ゼロとなった。明治 36 年2月頃には上北郡四和村などの飢餓に瀕する人々の状況が報道され，被害の深刻さがクローズアップされた。この事態で青森県など行政側の救済が遅れたのに対し，在日外国人の対応は素早かった。横浜居留外国人らは「青森飢饉救援基金」を設立して募金を呼びかけ，ウェストンとパロットを現地に派遣したのである。2人は被害の惨状を視察し，直ちに米，味噌，毛布などを横浜から取り寄せて，飢えと寒さに苦しむ住民に配布した。南部方面だけでも，米は6斗入り 493 袋，味噌 12 貫目入り 290 樽，毛布 390 枚であったという。
（青森県議会史）

（東奥日報　明治 36 年2月 22 日，27 日，3月3日，8日，12 日，18 日，28 日）

4月……ウェストンの自宅で「聖アンデレ同胞会」再興の第1回集会が開かれた。
（『横浜聖安得烈教会青年会』基督教週報　第八巻第三号　明治 36 年9月 18 日）

＊　1年前の 3，4 月頃に設立されて以来，有名無実の存在になっていたこの会をウェストンの主唱で再興することになり，その再起第1回の集会が開かれたことの報告である。教会内の青年会組織らしいが，詳しくはわからない。しかし，ウェストンが宣教活動に熱心に取り組んでいたことを窺わせている。

5月 11 日（月）……品川—<汽車>—新宿—<汽車>—八王子—<汽車>—勝沼—<鉄道馬車>—甲府　〔米　倉〕
12 日（火）……甲府—榎原—有野—芦安　〔名取運一村長の家〕
13 日（水）……芦安—岩下の湯—奈良田峠—奈良田—蓬莱温泉　〔原湯屋〕
14 日（木）……蓬莱温泉—新倉—保　〔保泉屋〕
15 日（金）……保—飯富　〔扇　屋〕

16 日（土）……飯富—田原—古関—精進湖畔　〔精進ホテル〕
17 日（日）……安息日　〔同　上〕
日不明……大室山麓の氷穴探検
日不明……精進湖畔—吉田—<馬車鉄道>—御殿場—<汽車>—横浜

(『Highways and Byeways in Central Japan』The Japan Weekly Mail, Aug. 15, 1903)

*　この山行はケナウェイ（Sir J.H. Kennaway）と一緒だった。ケナウェイは 1837 年生まれの 65 歳，3 等准男爵でイーストデボン州選出の英下院議員であり，当時は CMS の会長でもあった。この時は観光目的の来日であったが，ウェストンと行を共にした契機などは不明である。

*　2 人は開通したばかりの笹子峠のトンネルを汽車で抜けて勝沼へ，そこから鉄道馬車で甲府に着いた。宿の米倉で待っていた芦安の猟師清水長吉と落ち合い，翌日芦安へ向かったのである。前年歓待された名取運一村長宅に 1 泊したあと，奈良田峠を越えて早川の谷に下り，現在の西山温泉に泊まった。当時は西山村の蓬莱温泉で，宿は新湯とか蓬莱湯と呼ばれていた原湯屋である。奈良田で村人に取り囲まれて休んでいる間か，蓬莱温泉かでウェストンは財布を中味ごと持ってゆかれた。『私の金のほとんどが入った財布が，それ以上に大事なものごと無くなっているのに気づいた』と記しており，その後も出て来なかったようだ。翌日は保で泊まっているが，ウェストンのいう「ほしみや」はない。保泉屋（ほずみや）の聞き違いであろう。

*　飯富で富士川を舟で下るケナウェイを見送ったウェストンと長吉は，八日市場と切石の間で対岸へ舟で渡り，精進湖畔へと足を延ばした。精進湖に突き出た岬の上に，こじんまりしたホテルがあった。日本人女性と結婚して帰化した英国人星野芳春（H.S. ホイットウォーズ）の経営するもので，賑やかな箱根や軽井沢を避けて来る外国人らの隠れた保養の場であった。ここでフランセス夫人と落ち合い，静かな日曜日を過ごした後，大室山の麓の氷穴を訪ねている。いつまで滞在したかは不明だが，2 人は吉田から都留，御殿場の 2 つの馬車鉄道を乗り継いで富士山の東麓をぐるっとまわり，御殿場から汽車で横浜へ帰った。

5 月 23 日（土）……春の漕艇大会で競技委員を務める。また，各種競技の勝者にフランセス夫人が賞品を授与している。

(『Yokohama Amateur Rowing Club』 The Japan Weekly Mail, May 30, 1903)

5月 30 日（土)……春の体育大会で審判を務めた。

(『Y.C. and A.C. Athletic Meeting』 The Japan Weekly Mail, June 6, 1903)

6月 30 日（火)……SPG 本部へ教務報告を送る。

(『主の御名によりて　～横浜聖アンデレ教会百年史～』 日本聖公会横浜聖アンデレ教会　昭和 60 年 11 月30 日)

＊　ウェストンは『人口 30 万人余の横浜で，聖アンデレ教会は信徒が 50 人程と教勢はプロテスタント各派中最低である。教会は最も貧しい地区にあり，普通の民家と変わらない建物は老朽化している。こうした状態を1日も早く改善するために，教会の移転建設が急務であり，そのためには 1000 ポンド（約1万円）が必要だ。月収 30 円程度の日本人信徒 20 世帯も 250 円を目標に積立を始めているし，横浜在住外国人と英国の友人から 3000 円の寄附を約束されている。英国の SPG 本部やその後援者も，この計画の重要性を認めて欲しい』と支援を求めている。

8月　第1日……軽井沢―<汽車>―塩尻―上諏訪　〔牡丹屋〕

第2日……上諏訪―富士見―机―蔦木―台ヶ原　〔竹　屋〕

第3日……台ヶ原―黒戸尾根―五合目　〔五合目小屋〕

第4日……五合目―甲斐駒ヶ岳登頂―七丈　〔野　営〕

第5日……七丈―頂上―鋸岳への尾根―戸台川―戸台―黒川　〔宮下喜代十の家〕

第6日……黒川―高遠―天竜川の谷―塩尻―<汽車>―軽井沢

＊　この甲斐駒ヶ岳登山の日時をウェストンは8月中旬としか記していない上，日を類推する記述も見当らない。8月 10 日から 15 日頃と推定しているが，確証は得られない。しかし，安息日をはさまない行程から見て，月曜から土曜までの山行であることはほぼ間違いないだろう。

＊　この年6月に開通したばかりの松本，塩尻間を汽車で来たウェストンは，塩尻で待っていた清水長吉と落ち合い，上諏訪へ向かった。さらに台ヶ原の宿〔竹屋〕で1泊し，ここで長吉の息子熊治郎とミズイチが加わった。ミズイチはミズイシの聞き誤りで，本名は水石林八である。一行4人は黒戸尾根を経て五合目の小屋で泊まった。翌日，甲斐駒に登頂したが，その景観の美しさに惹かれてもう

1泊することにし，七丈まで下って野営した。翌朝，西側へと頂上を乗越した一行は戸台を目指したが，ここでは宿泊を断られ黒川で泊まっている。

＊　黒川で一行を泊めてくれた親切な農家の主人を，ウェストンは宮下キクジロウとしている。しかし，キクジロウは実在せず，宮下喜代十であることが柿木憲二氏の調査で分かった。

(『ウェストンと伊那（二）』 柿木憲二　伊那路　第 16 巻第 10 号　昭和 47 年 10 月発行)

＊　ウェストンは『2度目の駒ヶ岳登山で東から西へと乗っ越したが，これは外国人による初横断と思う』と述べている。とすれば，最初の登頂は前年かこの年のもっと早い時期となる。しかし，最初の登頂を推定出来る資料なり，記述は今のところ見出せない。この登山で4日目にいったん登頂した後，七丈まで下って野営し，翌日再登頂して戸台へと乗っ越したことを『2度目』と称したのかも知れない。

9月頃……教会移転新築の寄附金として 258 円が集まった。

(『横浜聖安得烈教会の近状』 基督教週報　第八巻第五号　明治 36 年 10 月2日)

＊　『……当教会は信者の数僅かに百拾四名，之れを家数に改ときは三拾戸内外にして，場所柄に比例せは至て微弱たる小教会に御座候。剰さへ信者の資力は土地不相応に少なく，尋常一様の熱心にては，とても大会堂建築などは思ひも拠らざることに御座候。然るに昨年ウェストン氏専任長老として来浜せられし以来，熱心に建築を称道せられ，遍ねく当地在住の外国人に同情を求められ，又書を外国に飛して大いに画策を尽され候に付，如何に微力なりとも所属信者の袖手すべき時にあらず，時機こそ来れ，天佑は空しくすべからずと，大決心と大勇気とを以て，寄附金募集の計画をなし，先月上旬より着々歩武を進め，やうやく今日に至る迄寄附金弐百五十八円余を得申候。……』とある。ウェストンの熱意に煽られて，日本人信徒も懸命に寄附金を集めた様子が窺える。6月 30 日付け教務報告の信徒目標額を上回っており，教会委員らの奔走の結果であろう。

10 月　3 日（土)……秋の漕艇大会でウェストン夫人が賞品を授与した。

(The Japan Times Weekly Edition, Oct. 10, 1903)

11 月　4 日（水)……日本アジア協会の例会に出席。

(Transaction of the Asiatic Society of Japan, Vol. 31, 1904)

11 月 25 日（水）……日本アジア協会の特別例会に出席。

(Transaction of the Asiatic Society of Japan, Vol. 31, 1904)

* 特別例会は，横浜のヴァン・スカイック・ホール（Van Schaick Hall）で開かれ，河口慧海が「チベットの旅」を講演した。後の討論でウェストンが一寸した質問をしている。ヴァン・スカイック・ホールは，フェリス女学校の講堂である。

12 月 14 日（月）……日本アジア協会の年次総会で評議員に再選された。

(『The Asiatic Society』The Japan Weekly Mail, Dec. 26, 1903)

12 月 25 日（金）……クライスト・チャーチ（Christ Church）のクリスマス祝会で聖餐式を補佐した。

(『Christmas in Yokohama』The Japan Weekly Mail, Jan. 2, 1904)

12 月……横浜市日ノ出町に土地を借り，そこに建っていた家屋を購入。そのうちの１棟を聖アンデレ教会として使い始めた。

(『Correspondence』The Japan Weekly Mail, April 1, 1905)

* ウェストンの念願していた教会移転新築の第１歩が叶えられた。寿町の老朽家屋から日ノ出町の日本家屋へまず教会を移転させたのである。土地の借用と家屋の購入費は，横浜とウィンブルドンのクライスト・チャーチの友人らの援助によるものだったと報告されている。新築資金が集まり，教会建設が始まったのは翌明治 37 年のクリスマスの直前だった。

12 月末日……SPG 本部へ教務報告を送る。

(『主の御名によりて　～横浜聖アンデレ教会百年史～』日本聖公会横浜聖アンデレ教会　昭和 60 年 11 月 30 日)

明治 37 年（1904）

2月　1 日（月）……横浜アマチュア漕艇クラブの委員に選出された。

(The Japan Times Weekly Edition, Vol. 14, No. 19, Feb. 6, 1904)

* この日の年次総会で，任期途中に横浜を離れた委員の後任として選ばれたものである。

2月 16 日（火）……外国人居留民による日露戦争被害者救援の集会で，ウェストンは副委員（sub-Committee）となっている。

(『The Relief Meeting』The Japan Weekly Mail, Feb.20, 1904)

＊　2月8日に海陸で戦いの火蓋が切られ，同月 10 日に宣戦が布告されて日露戦争が始まった。傷病兵や戦死者の遺族を扶けるために，国内では「帝国救恤義会」，「出征軍人家族慰問婦人会」等が早速組織された。この外国人の集会も日英同盟を結んでいた英国人が中心となって開いたもので，義援金募集の会を設立するのが目的であった。ウェストンと同じ副委員には，英，米，仏，独など 13 カ国 25 人の名前が挙がっている。そして「戦争被害者救済のための横浜・東京居留外国人協会」(The Yokohama and Tokyo Foreign Residents Association for the relief of sufferers by the War) が設立された。

2月 29 日(月)……「戦争被害者救済のための横浜・東京居留外国人協会」の実行委員会のメンバーの1人に選ばれた。

(『War and Patriotic Funds』The Japan Weekly Mail, March 5, 1904)

4月　5 日（火）・6 日（水）……両日に横浜のクライストチャーチ (Christ Church) で行なわれた2組の結婚式に，フィールド牧師 (Rev. R.P.G. Field) の司式を補佐した。

(『Weddings』The Japan Weekly Mail, April 9, 1904)

4月 14 日（木）・15 日（金）・16 日（土）……箱根・宮ノ下の富士屋ホテルに投宿。

（富士屋ホテル　レジスターブック）

春……金峰山（甲州）登山。

(『Travel and Exploration in the Southern Japanese Alps』The Geographical Journal. Vol. 27, No. 1, 1906)

＊　翌年の 11 月6日に英国地学協会 (The Royal Geographical Society＝以後 RGS と略称) で講演した『南日本アルプスの旅と探検』で，春に登ったと記しているが，詳細は不明である。

5月 28 日（土）……春の体育大会で審判を務めた。

(『Y.C. and A.C. Athletic Sports』The Japan Weekly Mail, June 4, 1904)

6月　3 日（金）・4 日（土）……この両日に亙って行なわれた漕艇大会で競技委員を務めた。

(『Yokohama Amateur Rowing Club』The Japan Weekly Mail, June 11, 1904)

6月 10 日（金）……横浜ジュニア体育クラブの大会で審判を務めた。

(『Yokohama Junior Athletic Club』The Japan Weekly Mail, June 18, 1904)

7月　7日（木）……立教女学校の演芸会で「アルプス登山」と題し，幻灯を使って講演の予定だったが，開演の遅れなどで秋に延期された。（『立教女学校演芸会』基督教週報　第九巻第二十号　明治37年7月15日）

＊　この演芸会は陸海軍恤兵部への寄附を目的に，校内の三一会館で開かれた。ウェストンの幻灯説明はプログラムの最後に予定され『(六) 幻灯……アルプス登山の景数十種』とある。しかし，『不幸にして事情の為め開演の少しく後れたると，幻灯説明者ウェストン氏の横浜に帰るを急がれたる為め，時間に不足を告げ，幻灯のみ省かれたるは遺憾なりき，尤も秋冷と共に再び切符携帯者に右幻灯を観覧せしむる約束をなせり』という結果に終わった。なお，この夜の参集者は250名余りで，純益は190円ばかりだった。

7月12日（火）……？ー<汽車>ー甲府　〔宿不明〕

13日（水）……甲府ー小笠原附近で富士川を渡るー高尾ー鳩打峠ー岩下の湯　〔岩下の湯〕

14日（木）……岩下の湯ー大曽利ー清水権現ー杖立峠ー辻山ー御室　〔杣小屋〕

15日（金）……御室ー砂払岳ー鳳凰山［オベリスク初登頂］ー御室　〔杣小屋〕

16日（土）……御室ーゴバン沢鉱山跡ー野呂川渡渉ー広河　〔小　屋〕

17日（日）……安息日　〔同　上〕

（『第七章　日本南アルプスの探検』極東の遊歩場　岡村精一訳　昭和45年1月15日）

＊　ウェストンはこの夏の遠征の最初に鳳凰山を選んだ。案内人の清水長吉に連絡し，甲府で落ち合うことにしていたが，長吉は参謀本部陸地測量部の調査に雇われていたため，息子の熊治郎と近親者の清水弥十郎，清水トラジロウを迎えに来させたと著書に記している。長吉と熊治郎父子と弥十郎は確認出来たが，トラジロウはわからない。宿も米倉と推定されるものの確証はない。

＊　7月8日から10日まで続いた大雨で，有野へ通じる富士川の橋が流されていたため，南の方へ遠回りして小笠原近くで橋を渡り，高尾から鳩打峠を越えて御勅使川右岸の岩下の湯で泊まっている。明治40年（1907）以降の日本人の紀行などには，岩下の湯に清水館という宿の記述も見えるが，どちらも現存していない。

＊　翌日は2年前と同じ道を通り，杖立峠に達した。ここから辻山を越えて，御室の朽ちかけた伐採小屋に1泊，鳳凰山を目指した。地蔵仏と呼ばれていた未登頂のオベリスクを，ロープを使って初登したことは広く知られている。初登攀を見届けた唯一の案内人として，文中にフクザワヤスジロウ（深沢安次郎らしい）が登場するが，甲府に迎えに来た3人のうちの1人と入れ替わったものか，ウェストンの記憶違いなのかは判然としない。また，この登山を記した別資料には清水ソーキチの名も見え，案内人に関するウェストンの記述には混乱が見られるようだ。

＊　御室の杣小屋でもう1泊した一行は，翌日観音岳の山腹を野呂川に下り広河に出た。ここで泊まったのは前回の小屋とは違っていた。ウェストンは，国有林と民有林とを区別する小屋と記しており，農商務省山林局の小屋ではないかと考えられる。

7月 18 日（月）……広河―白峰御池　〔野　営〕
　19 日（火）……白峰御池―小太郎尾根―北岳―間ノ岳―白峰御池　〔野　営〕
　20 日（水）……白峰御池―広河　〔小　屋〕
　21 日（木）……休養　〔同　上〕
　22 日（金）……広河―北股出合い―北沢―仙丈岳基部　〔杣小屋〕
　23 日（土）……仙丈岳基部―仙丈岳［外国人初登頂］―仙丈岳基部　〔杣小屋〕
　24 日（日）……安息日　〔同　上〕
　25 日（月）……仙丈岳基部―北沢出合い―北沢峠―戸台―高遠　〔松田屋〕
　26 日（火）……高遠―＜馬車＞―塩尻―＜汽車＞―松本　〔丸中千歳館〕

（『第七章　日本南アルプスの探検』極東の遊歩場　岡村精一訳　昭和45 年1月 15 日）

＊　広河からの北岳登山は2年前とは違って，白峰御池を経由するルートをとった。間ノ岳まで足をのばす関係上，最初から池畔で野営することを計画していたためであろう。この野営地で清水長吉が合流している。

＊　ウェストンは2年前に登った北岳を経由した北から間ノ岳への外国人初登を狙ったのである。これより以前に奈良田から農鳥岳を経て間ノ岳まで外国人が縦走していたことは，明治 24 年（1891）刊の「日本旅行案内」（A Handbook for Travellers in Japan, Third Edition, 1891）の記述からも明らかである。ウェストンは北岳から間ノ岳へのルートの執筆をチェンバレン（B.H. Chamberlain）から依頼されていたのかも知れない。この一連の登山の主たる目的は仙丈岳を外国人として初登し，北沢峠越えで甲州から信州へ抜けることであったと見たい。

* 小仙丈沢と大仙丈沢の間の杣小屋に泊まり，仙丈岳を目指した。登路は最初大仙丈沢を辿り，次に長く広がった自然の砕石の上を登る。どちらかと言えば，退屈な4時間の登高だったと述べている。

* 月曜日の朝，北沢峠の踏破に向かい，雨で増水した北沢を 20 数回も渡渉しながら峠に達した。そこから2時間下り，去年駒ヶ岳から下った時の道に出た。これは現在の赤河原分岐あたりを指すものだろう。ウェストンらは戸台を抜け，黒川の宮下宅にも寄らず，12 時間かかって高遠に着いた。宿の「マスダヤ」は「松田屋」の間違いである。この「松田屋」は昭和 22 年に廃業し，近年までその面影を残していたが，昭和 58 年5月に火災で焼失した。

* 翌日，長吉だけを残して熊治郎らは山越えで芦安へ戻り，ウェストンと長吉は松本へ出た。宿は「丸中千歳館」だった。第1回の来日時に定宿にしていた「信濃屋」が廃業していたためである。理由などははっきりしないが，廃業は明治 30 年代の初めころと見られる。

月日不明……吉田口から夫妻で富士登山。火口底を探検した後に村山口へ下山。

* 南アルプスの旅を終え，軽井沢でフランセス夫人と合流して富士山へ向かったものか，横浜から出直したものかはわからない。頂上では，近代的な気象観測機械と，その横でご来光を待つ白衣の巡礼との対比を興味深く観察している。山頂の室で泊まったことは間違いないだろう。

* 夫妻は大宮か村山の富士浅間神社の神主と共に，約 550 フィートの火口底に下った。フランセス夫人は，火口に降りた最初の女性ということで，神主から富士登山クラブの名誉会員の金メダルを贈られたという。富士登山クラブとは富士講のことであろう。

* では，富士の火口底に降りた最初の外国人は誰なのか。明治 11 年（1878）4月 28 日に「日本アジア協会」で，『Notes of Some of the Volcanic Mountains in Japan』と題して講演したマーシャル（D.H. Marshall）は，『噴火口はライマージョーンズ氏（J.

Rymer-Jones）によって下られ，500 フィートの深さであることがわかった』と述べている。ライマージョーンズは工部省測量司に明治5年頃から在職したお雇い外国人である。これが外国人による初下降とは断定出来ないが，記録としてはこの程度しか見出せない。

月日不明……戸隠・剣ヶ峰（高妻山）を夫妻で登る［外国人初登頂？］

（『Eight Years' Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps』 倫敦日本協会雑誌　九之巻　1912）

＊　ウェストンは剣ヶ峰の登山について『両側におよそ 300 フィート切れ落ち，幅2フィート長さ 100 フィートのギザギザの岩のナイフリッジが登攀を企てたヨーロッパ人をちゅうちょさせてしまった。そこは蟻の戸渡りとして知られ，私たちがヨーロッパ人では初めて最高点に達したと思う』と記している。

月日不明……八ヶ岳の箕冠山，赤岳に夫妻で登頂。

（『Eight Years' Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps』 倫敦日本協会雑誌　九之巻　1912）

＊　ウェストン夫妻は八ヶ岳を東から西へ越えた。海尻から本沢温泉に来て数日滞在し，箕冠山と赤岳に登った。箕冠山は現在の硫黄岳である。この時本沢温泉附近でクロユリを見ており，西側へ下る途中の 5500 フィートあたりでクロフサスグリを発見している。花の時期から登山月日を絞れるかも知れないと本沢温泉に問い合わせたところ，クロユリは花期が長く6月 20 日前後に咲き始め8月初旬にはまだ咲いているとの返事を頂いた。この夏全体の登山の状況から見て，甲府から北岳へ登る直前の7月 10 日前後とみるのが妥当のように思える。

8月 13 日（土）……水泳選手権大会の競技委員を務めた。

（『Swimming Races and Diving Competitions』 The Japan Weekly Mail, Aug. 20, 1904）

8月 27 日（土）……横浜アマチュア漕艇クラブの水中競技会で委員を務めた。

（『Aquatic Sports』 The Japan Weekly Mail, Sep. 3, 1904）

＊　競技はトーナメント方式やリレーなどの競泳，それに紅白に分かれての水球の試合であった。

9月 25 日（日）……キリスト教徒日本兵の葬儀を司式。

（『Funeral of a Christian Soldier』 The Japan Weekly Mail, Oct. 1, 1905）

＊　葬儀は日ノ出町の聖アンデレ教会で，どしゃ降りの雨の中で行

なわれた。故人は日露戦争で戦死した横浜の兵士で，知事の代理や横浜市長，連隊区司令官らのほか僧侶や神主も参列し，大勢の人たちが小さな教会に入れないでいたという。聖アンデレ教会の信者の一人だったのだろう。ウェストンが司式し，オードレイ監督らが彼を補佐した。この教会は日ノ出町に購入した日本家屋の方で，新教会はまだ着工していない。

9月 30 日（金）……小島烏水がウェストン宅を訪問。

（日本山水論　小島烏水　明治 38 年7月1日）

10 月　1 日（土）……フランセス夫人が横浜紳士図書室協会のレセプションに出席。

(『Yokohama Men's Reading Room Association』The Japan Weekly Mail, Oct. 8, 1904)

10 月　5 日（水）……小島烏水に書信を送る。

（日本山水論　小島烏水　明治 38 年7月1日）

10 月 15 日（土）……秋の漕艇大会で競技委員を務めた。

(『Y.A.R.C. Autumn Regatta』The Japan Weekly Mail, Oct. 22, 1904)

11 月　1 日（火）
2 日（水）
3 日（木）
4 日（金）
……夫妻で日光・金谷ホテルに滞在。

（金谷ホテル　レジスターブック）

11 月5日（土）……RGS 書記ケルティに書信を送る。

（RGS 所蔵　ウェストン書簡）

＊　2度目の来日で『1万フィート以上の外国人未踏の4峰に登頂し，うち1峰は日本人でも登った人はいなかった』と，日本での登山の近況を報せている。ウェストンのいう外国人未踏の4峰とは，日本人にも登られたことのなかった鳳凰山オベリスクのほか，北岳，仙丈岳，金峰山であろう。

11 月 12 日（土）……「ジャパン・ウィークリー・メイル」にフォックス（Sir Francis Fox）の新しい著書が紹介された。

＊　著書のタイトルは「河川，道路，鉄道」(River, Road, Rail) で，フォックスはウェストンの義父であると註釈が付されている。

11 月 19 日（土）……横浜紳士図書室協会の写真コンテストのB部門で2位に入賞。

(『Men's Reading Room Association』The Japan Weekly Mail, Nov. 26, 1904)

＊　この協会の初めての写真コンテストで，A部門は出品者が撮影から焼付けまでを行なった写真，B部門は出品者が撮影しただけの写真という区別があったらしい。ウェストンは Coolies houling と題した作品を出品して２等賞を得た。天竜川か富士川かで舟を上流へ引き上げる人夫たちを写したものであろうか。この日，フランセス夫人が賞品を授与した。

11 月 21 日（月）……立教女学校の幻灯会で，スライドを使い１時間半にわたってアルプスでの登山について語った。

(『立教女学校幻灯会』基督教週報　第十巻 第十四号　明治 37 年 12 月２日)

＊　７月７日に予定されながら，時間不足で延期されたアルプス登山の幻灯会が午後６時半から講堂で開かれた。『ウエストン長老は特に横浜より幻燈画を携へて出張し，一時半の間壮大雄偉快絶奇絶の光景を三百有余の来会者に観せしめたり，殊に前後四回アルプス登山を為せし同氏は実験によりて説明したるのみならず，幾度か登山を人生に比較し有益なる教訓を一同に与へたりといふ』と基督教週報は伝えている。筆者の知る限り，ウェストンが日本人に対して初めて登山について語ったものである。しかし，内容は日本アルプスではなくてスイスアルプスでの登山の模様だったようだ。文中ウエストン長老とあるが，当時は司祭を長老と呼び，主教を監督と呼んでいた。日本聖公会も当時の通称は監督教会であった。

11 月 25 日（金）……紳士図書室で開かれた討論会に出席。

(『Should Bachelors be Taxed ?』The Japan Weekly Mail, Dec. 5, 1904)

＊　『独身者に課税すべきか？』というテーマの討論で，ウェストンは課税賛成の立場を取った。最後の表決は同数になったという。しかし，この討論が何を目的にしたものかはわからない。明治 32 年（1899）に改正条約が施行されて，居留地での外国人の自治権は消滅している。単に討論そのものを楽しむ外国人一流のしゃれっ気だったのかも知れない。

12 月 14 日（水）……日本アジア協会の年次総会で評議員に３選された。

(Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. 32, 1905)

この年か前年……日本聖書協会 (Bible Societies' Commitee for Japan) 委員に就任。

(The Japan Directory, 1904)

＊　この日本聖書協会の委員には，日本聖公会CMS系のバンコム（Rev. W.P. Buncombe）や改革派教会のバラ（Rev. J.H. Ballagh），組合教会のグリーン（Rev. D.C. Greene）らの名前が見える。キリスト教プロテスタント各派の合同組織で，聖書の出版や販売に当たっていたものらしい。なおウェストンの名前は翌年には見当らない。

この年か前年……紳士図書室協会（Men's Reading Room Association）の管理者となる。

（The Japan Directory, 1904）

＊　フランセス夫人がレセプションに出席したり，写真コンテストを開いたりしている紳士図書室協会が何を目的にしたものかはよくわからない。前年あたりにフランセス夫人も婦人国際図書室（Ladies' International Reading Room）の管理者となっている。この両者は男女別の図書センター兼クラブのようなものだったのだろうか。ここで思い出すのは，岡野金次郎や小島烏水とウェストンを結びつけた経緯である。岡野の勤める石油会社の支配人がボーイに命じて返却させようとした1冊の書物が「日本アルプスの登山と探検」であった。何気なく手にとった岡野が『自分たちよりも何年も前に外国人が槍ヶ岳に登っていた！』と驚いたエピソードであるが，この書物を返却しようとしたのがこの紳士図書室協会だったとも考えられる。

明治 38 年（1905）

1月……教会新築のため，私財を含め総額 8000 円の寄附を集めた。

（『横浜聖安得烈教会』基督教週報　第十巻第十九号　明治 38 年1月8日）

＊　記事では『ウェストン師が教会を思う熱誠に，信徒はみんな感激している。教会新築費にも相当の私財を投じられ，8000 円が集まった。教会を愛する気持ちも人一倍で，求道者が大いに増えた。また，婦人会も盛んで，会長のウェストン夫人は全力を尽くされている。しかし，ウェストン師の母堂は長い病気で回復の見込みはないそうで，教会の新築が成り次第帰国される』と記されている。教会の資料に，ウェストンの帰国は有力信徒との教義上の意見の相違と述べたものもあるが，実際は母の病気であったことがわかる。

1月 17 日（火）……『日本アルプスの登山』と題して外国人居留者に講演。

(『Mountaineering in the Japanese Alps』 The Japan Weekly Mail, Jan. 21, 1905)

* この講演は横浜のヴァン・スカイック・ホールで行なわれた。これは文芸協会の例会などの一環ではなく，純粋にウェストンの講演会だったようだ。しかし，講演の合間のアトラクションとして，女性の独唱や合唱もあった。聴衆は居留外国人で，記事ではウェストンの10シーズンにわたる日本アルプスでの経験を述べたとしている。実際は日本アルプスでは7シーズン，九州での登山と春の富士登山などを含めると12シーズンである。登山史的には，彼の日本アルプスについての日本での初講演として特記すべきものであろう。

2月 14 日（火）……日本アジア協会の特別例会に出席。

(Transaction of the Asiatic Society of Japan, Vol. 33, Dec., 1905)

2月 28 日（火）……小島烏水に手紙を送り，3月 25 日の帰国を告げる。

(『ウェストンをめぐりて』 小島烏水　アルピニストの手記　昭和 11 年8月 20 日)

* 帰国を前に，かねて約束していた山の写真を届け，高山植物の本も贈っている。そして，帰国前に会いたいと伝えており，これが武田，高野，岡野3氏をまじえての昼食会となった。

3月 11 日（土）……「ジャパン・ウィークリィーメイル」が，新教会の奉堂式の日時を知らせ，横浜居留外国人に出席を呼びかけるウェストンの投書を掲載。

(『Correspondence』 The Japan Weekly Mail, March 11, 1905)

同 日（土）……新教会落成の感謝会。

12 日（日）……新教会の奉堂式。

14 日（火）……この日から3夜に亙って説教会が開かれた。

(『横浜聖安得烈教会』基督教週報　第十一巻第三号　明治 38 年3月 17 日)

* 12 日の奉堂式は，マキム監督（Right Rev. Bishop John Mckim）の司式で行なわれた。当日は天気晴朗で，日ノ出町に高くそびえる深紅の会堂は塔頂の十字架が金色に輝き，門前の日英の国旗が鮮やかであったと「基督教週報」は記している。全会衆は 100 人で，ウェストン長老は早禱を司り，聖餐でマキム監督を補佐した。

* 3月 14 日からの3夜連続の説教会でウェストンは説教してい

ない。これは日本人聖職者が担当した。

3月……明治天皇に自著「日本アルプスの登山と探検」と風景写真を献上。

（『個人』基督教週報　第十一巻第四号　明治 38 年3月 24 日）

＊『▲ウェストン氏（在横浜長老）は先般三宮式部長を経て日本のアルプスなる書籍と風景写真を天皇陛下に献上せられし所此程宮内大臣より嘉納あらせらりたりとの書面を受けられたり……』との記事が出ている。書籍は「日本アルプスの登山と探検」で，風景写真も日本アルプスのものであろう。

3月 17 日（金）……アンデレ英学会の発会式。

（『アンデレ英学会の発会式』基督教週報　第十一巻第五号　明治 38 年3月 31 日）

＊　横浜聖アンデレ教会の有志で企画したアンデレ英学会の発会式が，午後7時半から新教会の控室（アンデレ館）で開かれ，ウェストンが英語で演説した。会衆は 70 人に達し，当夜の入会申し込み者は 20 人で，3月末には定員の 40 人になったという。ウェストンの演説には通訳が付いたが，その内容はわからない。また，英学会が何を目的にしたものかも不明である。神戸や横浜などの居留地に数多くあった英語学校のようなものではなかったか。当時，キリスト教各派の宣教師らは，こぞって英語学校を開いていた。教育伝道は，医療伝道とともに当時のキリスト教宣教の大きな柱だった。

3月……オリエンタル・パレス・ホテルに小島烏水らを招いて会食。席上，日本に山岳会の設立を勧めた。

＊　昼食会に出席したのは，小島烏水，岡野金次郎，武田久吉，高野鷹蔵の4人であった。この年の1月か2月には武田，高野が初めて小島を訪問しており，小島から話を聞いてこの2人も一緒にということになったものらしい。ウェストンは，日本の山岳会の設立は君らの力に待つと，繰り返しその設立を勧めたと言う。

3月 21 日（水）……山県五十雄に地学雑誌の記事翻訳の礼状と万年筆を送る。

（『日本アルプスの父…ウェストン氏をしのぶ…』高橋秀男　山と博物館　昭和 37 年5月号）

＊　山県は小島烏水の友人で，当時の地学雑誌に掲載された日本アルプスの1論文を英訳して送ったが，小島からウェストンが日本アルプスの開拓者と聞いて自発的に英訳したものか，小島に依頼されてだったかは記憶にないと述べている。この経緯はともかく，ウェ

ストンは未知の山県の厚意に万年筆を贈り，『ご書面と原稿はあなたのご親切と努力に対する思い出とともに郷里に持ち帰ります』と礼状を認めた。

＊ では山県が英訳した「日本アルプスの1論文」とは何を指すのか。当時の地学雑誌には，日本アルプスという言葉がタイトルになっている論文は見当らなかった。強いて言うなら明治 27 年から明治 29 年まで断続的に連載されていた『飛騨国地理小誌』(佐藤順造　第6集第 68 巻～第8集第 87 巻) かも知れない。

3月 22 日 (水)……横浜聖アンデレ教会でウェストンの送別会が開かれた。

(『ウェストン教師の送別会』基督教週報　第十一巻第五号　明治 38 年3月 31 日)

＊ 『▲ウェストン教師の送別会　二十二日夜礼拝後，アンデレ館に開かれ，会する者三十六名，讃美歌を以て初まり岩佐琢蔵氏の英語送別の辞より，続て吉村，吉田，佐藤，炭竈諸氏交も懇篤の送別の辞あり，後ウェストン教師の答辞（岩佐氏訳）あり，塩崎伝道師の送別の祈と，ウェストン師の祝福に終り夫れより茶菓を喫し別れを惜しむ，而して仝師に信者一同より感謝状一軸を呈したり，……』。ウェストン教師とあるのは，当時の宣教師が教育伝道のため，各種の学校の語学教師を勤めることが多かったことから，宣教師を一般的に教師と呼んでいたものである。もっとも，ウェストン自身もアンデレ英学会の教師をしていたためかも知れない。

3月 25 日 (土)……ウェストン夫妻，フランス汽船トーレン号 (S.S. Tourane) で帰国の途に就く。

(『Passengers』The Japan Weekly Mail, April 1, 1905)

＊ トーレン号 (2338 トン) は郵便，雑貨を積んだ貨客船で，神戸，長崎，香港などを経由してのマルセイユ行きである。ロンドンへ帰るウェストン夫妻がどこまで乗船したのかはわからない。

4月　1 日 (土)……「ジャパン・ウィークリー・メイル」が，新教会建設への援助を感謝するウェストンの投書を掲載。

(『Corrspondence』The Japan Weekly Mail, April 1, 1905)

＊ ウェストンは『過去 18 カ月にわたって新教会建設の積立基金に援助と同情を寄せて下さった多くの友人に感謝します。教会の移設は長い困難な事業でしたが，親切で好意的な寄金と励ましの言葉は嬉しいものでした』と感謝の気持ちを綴っている。冒頭に『あす日本を離れるに当たって……』と述べていることから，3月 24 日

に書いて投書したものらしい。

5月 10 日（水）……ウェストン夫妻，ロンドン着。

（『会報　本会の成立』K.K. 山岳　第1年第1号　明治 39 年4月）

5月 31 日（水）……SPG 会長モンゴメリー主教宛てに書信を送る。

（『第七部　外史篇　聖公会宣教師・司祭ウォルター・ウェストンと横浜聖アンデレ教会（一）』垣内茂　主の御名によりて 〜横浜聖アンデレ教会百年史〜　昭和 60 年 11 月 30 日）

＊　書簡の中でウェストンは『……健康上の問題，その他の理由で横浜での私の働きが短期間に終ったことは残念です。しかし横浜での生活は大変有意義でしたし，日本人と日本宣教についての理解が，働きに実際に従事することによって深められました。……』と述べている。『その他の理由』は，母親の病気を指すとみられるが，『健康上の問題』とは後の書信などから見て，フランセス夫人の健康状態らしい。

6月　7 日（水）……英国山岳会（The Alpine Club＝以後 AC と略称）のブリストル会長（G.F. Bristol），マム名誉書記（A.L. Mumm）がウェストンに AC の会則と会員名簿を送る。

（『Alpine Notes』The Alpine Journal, Vol. 22, No. 169, 1905）

＊　帰国したウェストンは AC の例会に出席し，日本にも山岳会の設立を希望している青年らがいることをブリストル会長らに報告した。これが前日6日，AC 委員会で発表され，満場一致でその設立を援助することが決まった。早速 AC の会則と会員名簿の写し2通をウェストンに托し，それを日本の青年らに送るよう求めたのである。なお6月6日の委員会にウェストンは出席していない。

6月 23 日（火）……小島烏水に早く山岳会を設立するよう促す書信を送り，7日付けのブリストル会長らからの書信と AC の会員名簿，会則の写しを同封。

（『会報　本会の成立』K.K. 山岳　第1年第1号　明治 39 年4月）

＊　この書信でウェストンは『城，武田らの諸氏と図って一刻も早く山岳会の設立に着手することは出来ないか。AC も今でこそ高名ではあるが，初めは極めて微々たるものだった。日本の山岳会がどんな小規模なものであっても，ためらったり恐れたりせずにすぐ設立に着手し，そのことを知らせて欲しい』と小島を励ましている。

7月頃……母エマ（Emma Weston）死去。

（愛知教育大学チェンバレン文庫所蔵　ウェストン書簡）

＊　この訃報は明治 39 年6月7日，チェンバレン（B.H. Chamberlain）に宛てた書信で，ウェストンは『去年5月に帰国してから2カ月後に，長病いの母を亡くした』と記している。

8月 14 日（月）……スイスの クライネ・シャイデックから RGS 書記ケルティに書信を送る。

（RGS 所蔵　ウェストン書簡）

＊　この書信はケルティが 11 月6日に RGS で講演して欲しいと依頼したのに対する返事である。ウェストンは，丁度その日はシュロプ州（Shropshire）で約束があり，11 月 20 日なら空いていると答えている。しかし，11 月6日に RGS で講演していることから，その後シュロプ州の約束を変更したものらしい。

10 月 14 日（土）……日本に「山岳会」創立される。

＊　山岳会発足とともに，会誌「山岳」が明治 39 年4月に創刊され，さらに明治 42 年に会名も「日本山岳会」に改められた。

11 月　6 日（月）……『南日本アルプスの 旅と 探検』と題して RGS で講演。

（The Geographical Journal, Vol. 27, No. 1, 1906）

＊　ウェストンは，日本の地理学的態様から話を始め，甲府盆地を中心とする北岳，甲斐駒ヶ岳，鳳凰山などへの登山。天竜川，富士川の舟下りのほか，周辺の鉱物資源，山地の動物，高山植物などについて述べ，早川峡谷の奈良田の七不思議にも言及している。

＊　この例会に，明治 26 年（1893）にウェストン，バクストン（N. Buxton）と共に恵那山に登り，天竜川を下ったオーラーク（H.W.L. O'Rorke）が出席していた。講演後の討議で発言した彼は，天竜川はライン川やドナウ川よりも遥かに素晴らしいと，その峡谷美を激賞した。この言葉を小島烏水が，大正3年7月の「文章世界」に発表した紀行『天竜川』で初めて引用した。その時，オーラークが『Lo'Roke』と誤植され，これがそれ以後の天竜川関係の書籍や観光案内に正体不明の“英人ロッケ氏”として引用されるきっかけとなった。

『ロック（ロッケ）氏は実はオゥラーク氏』今村良夫　伊那　1957 年3月号）

12 月 18 日（月）……英国山岳会の例会で『日本の南アルプスにおける探検と登山団体』と題して講演。

（The Alpine Journal, Vol. 23, No. 171, 1906）

＊　ウェストンは北岳や鳳凰山オベリスクの登攀について語り，御岳講の巡礼の様子を詳しく述べている。そして，富士の山頂の気象

観測器械の傍らで日の出を待つ白衣の巡礼の姿に，日本の科学の進歩と昔ながらの信仰行事を感慨深く対比し，やがては巡礼たちに代わって登山を楽しむ若い世代が登場すると予見した。講演の最後に，日本の友人から最近受け取ったという書信を披露したが，それには『……私の見るところでは，登山が年々益々盛んになることは確かだと思えますし，日本の山岳会に入会する必要性がそう遠くない将来，多くの若い人々に認められるでしょう……』とあり，前後の内容から小島烏水が山岳会結成後の様子を知らせたものであろう。

この年か前年……横浜墓地の委員となる。

(The Japan Directory, 1905)

明治 39 年（1906）

1月……『日本南アルプスの旅と探検』が RGS 会誌に掲載された。

(『Travel and Exploration in the Southern Japanese Alps』The Geographical Journal, Vol. 27, No. 1, 1906)

* 前年 11 月 6 日の RGS での講演記録であるが，附録としてウェストン自身が南アルプスの北岳，仙丈岳，駒ヶ岳で採集した高山植物のリストが付されている。これらの植物名の同定や分類については，東京帝国大学植物学教授の松村任三に依頼したことを講演の中で明らかにしている。

2月……『日本南アルプスに於ける登山と日本の登山団体』が AC 会誌に掲載された。

(『Mountaineering in the Southern Alps of Japan, and Japanese Mountain Clubs』The Alpine Journal, Vol. 23, No. 171, 1906)

* 前年 12 月 18 日の AC での講演記録である。この文末にも附録として北岳，仙丈岳，駒ヶ岳，八ヶ岳の高山植物リストが付されている。これについて植物学者でもあった武田久吉の思い出を紹介しておきたい。『帰国後のウェストン師は，私に書面を送って，八ガ岳と甲斐駒の植相や植物目録を欲しいと申し越されたので，それを詳しく書き送ったが，原稿落掌の挨拶もなしに，『アルパインジャーナル』一七一号に，南アルプス植物目録を発表して，私がそのあるものを提供したと注記したことについて，私はいまだにその行為に釈然たる感じを持ち得ないでいる。ウェストンはまずそんな坊サンであった』

(『ウェストン師の思い出』武田久吉　日本山岳名著全集　月報 No. 6 昭和 37 年 10 月 15 日)

2月　6 日（火）……AC の例会に出席。

（『Proceedings of the Alpine Club』The Alpine Journal, Vol. 23, No. 172, 1906）

＊　この例会でベルチャー（H.W. Belcher）が AC 会員に選出されている。ベルチャーは，明治 24 年（1891）にウェストンが初めて日本アルプスを訪れた時の同行者である。在日中は山陽鉄道の顧問技師であったが，この頃の職業などはわからない。

5月　1 日（火）……AC の例会に出席。

（『Proceedings of the Alpine Club』The Alpine Journal, Vol. 23, No. 173, 1906）

＊　席上，ウェストンは最近設立された日本の山岳会に関する彼への書信を読みその会則の幾つかに言及したとある。しかし，詳しい内容は不明である。

5月初旬……サリー州ユーエル（Ewell, Surrey）の教区牧師（Vicar）として着任。

（愛知教育大学チェンバレン文庫所蔵　ウェストン書簡）

（The Crockford's Clerical Directory, 1923）

＊　ウェストンは着任の数ヵ月前に大法官（Lord Chancellor）によって教区牧師に任命されているが，帰国からそれまでの聖職者としての動静はわからない。彼は 3 度目に来日する明治 44 年（1911）まで在任した。この頃の住所は Ewell Vicarage, Surrey である。

5月……『アイガー・ヨッホの冒険』を AC 会誌に寄稿。

（『An Adventure on the Eiger Joch』The Alpine Journal, Vol. 23, No. 174, 1906）

＊　この紀行文にはフランセス夫人撮影によるアイガー近傍の写真 2 葉が付されている。

6月　7 日（木）……チェンバレン宛てに書信。

（愛知教育大学チェンバレン文庫所蔵　ウェストン書簡）

＊　ロンドンからウェストン宛てに出されたチェンバレンの手紙に対する返事である。チェンバレンが帰英していることに驚き，あす午後にロンドンへ行く予定があり，ほんの少しでもお目にかかれないかと面会を希望している。また，教区牧師に任ぜられて，5月の初めにユーエルへ来たこと。夫人の健康状態も良く，2人とも日本へのちょっとしたホームシックにかかる時がありいつかまた行きたいと望んでいると記した後，去年母を亡くしたばかりなのに先週の金曜日に長兄が死去したとの電報を受け取ったと知らせている。

＊　ここでちょっと前号の解説と合わない事実があるので訂正しておきたい。この書信でウェストンは『予期されたこととは言え，母の死が兄に与えたショックがその死を早めたのです。兄は生涯独身で母と一緒に暮らしました……』と述べている。長兄といえばジョン（John Weston）を指すと考えられる。とすれば明治 25 年の5月に富士屋ホテルで同宿したジョン・ウェストン夫人（Mrs. John Weston）とコンスタンス（Miss Constance Weston）は，長兄の夫人とその娘ではないかという推測は成り立たない。父親ジョン・ウェストン（John Weston）の妻，つまりウェストンにとって母と妹か，あるいは母と姪の可能性が強まったことをお断りしておく。

明治 40 年（1907）

5月……AC 年次写真展に日本のスライドを出展。

（『The Alpine Club Annual Photographic Exhibition』 The Alpine Journal, Vol. 23, No. 177, 1907）

＊　ウェストンの出品は着色した幻灯用のもので，非常に美しい特色のあるセットと説明されているが，写真の内容は分からない。

＊　ほかに日本関係ではポンティング（H.G. Ponting）が5葉の富士山の写真を出品している。こちらは写真家だけあって，室内で最も目を惹く写真だとの評を得ていた。ポンティング（1870～1935）は明治 35 年頃から明治 39 年までの大半を日本で過ごし，「逸楽の国　日本」（In Lotus-Land Japan）や「富士山」（Fuji-san）などの著書と写真集を出している。

12 月 17 日（火）……AC 創立 50 周年記念晩餐会に出席。

（『The Jubilee of the Alpin Club』 The Alpine Journal, Vol. 24, No. 179, 1908）

月日不明……ロンドン日本協会（The Japan Society, London）の会員となる。

（倫敦日本協会雑誌，第 21 巻　1924）

＊　ロンドン日本協会は，明治 25 年（1892）1月 28 日創立され，その創立総会は4月 29 日に開かれている。会員数は 180 名で，日英両国に関連したあらゆる部門の研究を促進しようとするものである。初代の会長は，当時特命全権公使だった河瀬真幸，実際の運営に当たる議長はアンダーソン（Professor W. Anderson）であった。

（『「ミカド」の国』 両洋の眼―幕末明治の文化接触　吉田光邦　朝日

選書 117　1978 年9月 20 日）

＊　明治 40 年当時の会長は，英国駐在日本大使加藤高明である。ウェストンは後年，名誉書記を務めるなど重鎮となり，死去まで在籍した。フランセス夫人も昭和3年から会員となっている。ロンドン日本協会がいつ解散したかはよく分からないが，第2次大戦の直前まで存続していた。

明治 41 年（1908）

5月……AC 年次写真展に出展。

（『The Alpine Club Annual Photographic Exhibition』 The Alpine Journal, Vol. 24, No. 181, 1908）

＊　この年，ウェストンは『From the Summit of the Rosenhorn』と題する作品を出展した。興味ある景色であり出来映えも優れていると評された。ただし，この写真を撮った山行がいつのものだったかはわからない。

明治 42 年（1909）

5月……杉浦藤四郎がユーエルのウェストン宅に止宿。

（『愛知教育大学「チェンバレン文庫」をめぐって』 栞り木生　ふるほん西三河　第9号　昭和 59 年8月 10 日）

＊　杉浦藤四郎について詳細を述べる余裕はないが，なぜウェストン宅に止宿することになったかを履歴も含めて簡単に触れておきたい。杉浦は明治 16 年（1883）に愛知県岡崎市に生れた。横浜で働きながら洋行の機会を待つうち，チェンバレン（B.H. Chamberlain）とめぐり会い，その学僕となって薫陶を受けることになった。そしてチェンバレンと共に明治 39 年（1906）渡英し，翌年にはカナダ経由でスイスに渡っている。この年には長年の念願が叶って，オックスフォード大学の入学準備のために単身渡英し，ウェストン宅に止宿することになった。留学の一切の面倒を見たチェンバレンの依頼によるものだったろう。

＊　しかし，杉浦がウェストン宅に止宿したのは数カ月であった。この止宿が当初から暫定的なものか，あるいは別の理由があったのかは不明だが，少なくとも 10 月頃までに彼は南ユーエルのマーティン（Martin）宅に移っている。マーティンはウェストンの知人で，杉浦がそこへ止宿したのもウェストンの世話によるものらしい。また，杉浦はユーエルにいた間に洗礼を受けている。

＊　杉浦は大正元年（1912）オックスフォードに入学して地理学を専攻，大正５年（1916）からはロンドン大学で経済学を学んだ。しかし，父の死去で翌年暮れに日本に帰国した。第１次大戦の終わった大正８年（1919）再び渡英し，その後スイスのチェンバレンのもとに滞在した。翌年の帰国に際し，チェンバレンから英文の蔵書と書簡類を贈られて日本に持ち帰った。洋和書 1100 余冊と書簡 600 余通で，戦後愛知学芸大学に寄贈され，チェンバレン研究には欠かせない貴重な資料となっている。杉浦は戦後岡崎市の市会議員を勤めるなどし，昭和 43 年死去した。

（『チェンバレンとサトウ（1895～1910）』 楠家重敏　ネズミはまだ生きている　1986 年 11 月 10 日）

5月 12 日（水）……ロンドン日本協会の例会に出席。

（倫敦日本協会雑誌　八之巻　1910）

＊　この例会でカルスロップ大尉（Captain E.F. Calthrop）が，「東京の巡礼たち」（The Tokyo Pilgrims）と題した講演を行ない，後のディスカッションでウェストンが指名されて「山岳巡礼の旅」について語った。

9月　5 日（日）……「My Swiss and Japanese Mountaineering」と題した一文を日本山岳会に送る。

（『会報　名誉会員ウォルタア，ウェストン氏略歴及び自伝』 山岳第５年第１号　明治 43 年３月）

10 月 22 日（金）……杉浦藤四郎に書信を送る。

（愛知教育大学チェンバレン文庫所蔵　ウェストン書簡）

＊　翌日，夫妻でロンドンに出かけることを伝え，ストランド街のレストランで昼食を共にしたいと誘っている。また，近いうちにユーエルで週末を過ごすようにと招き，チェンバレンの消息を尋ねてもいる。杉浦はすでにウェストン宅を出ていたことがわかる。

11 月 29 日（月）……杉浦藤四郎に書信を送る。

（愛知教育大学チェンバレン文庫所蔵　ウェストン書簡）

＊　最初に，先日ユーエルに来てくれた時，ゆっくり話す時間がなく申し訳なかったと詫びていることから，杉浦は前便の招きに応じたものらしい。そしてあす北海道のアンドリュース師（Rev. W. Andrews），九州のリー師（Rev. A. Lea）の監督任命式がウェストミンスター寺院で行なわれるのに出席すると結んでいる。

＊「日本聖公会教役者名簿」によれば，両師は 11 月 30 日に監督に任命されている。ウェストンが出席したのは間違いないだろ

う。

明治 43 年（1910）

1月 12 日（水）……ロンドン日本協会の例会で『日本アルプスに於ける8年間の登山と探検』と題して講演。

（倫敦日本教会雑誌　九之巻　1912）

＊　この講演でウェストンは日本の地理学的な態様から話を始め，明治 24 年（1891）から明治 27 年（1894）までと，明治 35 年（1902）から明治 37 年（1904）までの8年間の主な登山について語った。槍ヶ岳，前穂高岳，北岳，鳳凰山オベリスク，富士山の登山が柱だが，それぞれの登山にまつわる山人たちとのエピソードを温かく語っているのが印象的である。

3月……日本山岳会の最初の名誉会員に推される。『スイスと日本の登山』（My Swiss and Japanese Mountaineerings）が「山岳」に掲載される。

（山岳　第5年第1号　明治 43 年3月）

＊　この寄稿文はウェストンのそれまでの主な山歴を自述したものである。16 歳で初めてスイスを訪れたが，本格的な登山は満 24 歳の明治 19 年（1886）からだったと，その年と翌年のスイスでの華やかな登山を記している。そして，明治 21 年（1888）初来日以来，2度にわたる滞日時の登山を述べ，現在のところ鳳凰山の先端を踏んだただひとりの登山家であることに，非常な名誉を感じていると結んでいる。内容自体は一般的にそれほど面白いものではないが，来日前のスイスでの登山や日本の九州での登山に触れている唯一の記述である。

5月……AC の年次写真展に日本アルプスの着色スライドを出品。

（『The Alpine Club Annual Photographic Exhibition in 1910』The Alpine Journal, Vol. 25, No. 189, 1910）

7月……『日本アルプスに於ける8年間の旅と探検』を「山岳」に寄稿。

（山岳　第5年第2号　明治 43 年7月 15 日）

＊　この年1月 12 日にロンドン日本協会で講演し，「倫敦日本協会雑誌」九之巻（1912）に掲載されたものと同文である。

9月 11 日（日）……シャモニの谷で，寺田寅彦に声をかける。

（『先生への通信　ベルリンから（二）』寺田寅彦　東京朝日新聞　明治 43 年 11 月）

（寺田寅彦全集　11 巻　昭和 26 年）

＊　ひとりでメール・ドゥ・グラスからシャモニの谷へ下りて来た寺田寅彦に，ウェストンは『日本人ではないか』と声をかけ，自分は日本に８年いて，あらゆる高山へ登ったと話した。しかし寺田寅彦はウェストンについて何も知らず，この出会いはすれ違いに終わった。これについては「アルプスの廻り合ひ」（松方三郎　日本山岳会報　63　昭和 12 年１月）と「開かざりし花」（尾崎喜八　日本山岳会信濃支部報　第５号　昭和 25 年７月）の２篇のエッセイがある。

来日 100 年記念

ウェストン著作目録

安 江 安 宣

A BIBLIOGRAPHY OF THE WRITINGS OF THE REV. WALTER WESTON (1861–1940).

Compiled by YASUE Yasunobu

BOOKS

1) Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps. John Murray, London. 24×16, xvi+346 p, (1896).

2) The playground of the Far East. John Murray, London. 22×13.6, xii+333 p, (1918).

3) A Wayfarer in Unfamiliar Japan. Methuen, London. 19×12, x+207 p, (1925).

4) Japan. A & C Black, London. 21×13.5, xi+240 p, (1926).

ARTICLES

1) Letters from Cambridge men. Church Missionary Intelligencer and Record, N.S. Vol. 14, 292–294 p, (1889).

2) Correspondence : To the editor of the Japan Mail, Japan Weekly Mail, Vol. 14, No. 8, 183 p, August 22, (1890).

3) The Ascent of Fuji. Japan Weekly Mail, Vol. 18, No. 21, 619 p, November 19 (1892).

4) Fujiyama in May. Alpine Journal, Vol. 16, No. 118, 247–250 p, (1892).

5) Mountaineering in the Japanese Alps. Japan Weekly Mail, Vol. 18, No. 22, 666–668 p, November 26, (1892); Vol. 18, No. 23, 698–700 p, December 3, (1892); Vol. 18, No. 24, 737–741 p, December 10, (1892).

6) Mountaineering in the Japanese Alps. Alpine Journal, Vo l. 16, No. 120, 377–390 p, (1893).

7) The Foreigners "Lost" on Fuji. Japan Weekly Mail, Vol. 19, No. 22, 652 p, June 3, (1893).

8) Scrambles in the Japanese Alps. Alpine Journal, Vol. 17, No. 126, 237–249 p, (1894).

9) Exploration in the Japanese Alps, 1891–1894. Report of the British Association for the Advancement of Science, 1895. 761–762 p, (1895).

10) Mountaineering and Mountain Superstition in the Japanese Alps.

Alpine Journal. Vol. 17, No. 129, 493-510 p, (1895).

11) Exploration of Japanese Alps, 1891-94. Geographical Journal, Vol. 7, No. 2, 125-149 p, (1896).

12) Customs and Superstitions in the Highlands of Central Japan. Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland. Vol. 26, 29-32 p, (1897).

13) The Ascent of Kaigane San. Japan Weekly Mail, Vol. 38, No. 18, 487-491 p, November 1, (1902).

14) Alpine Ascents and Adventures. Japan Weekly Mail, Vol. 39, No. 12, 312-316 p, March 21, (1903).

15) Highways and Byways in Central Japan. Japan Weekly Mail, Vol. 40, No. 7, 166-169 p, August 15, (1903).

16) St. Andrew's Mission Church, Yokohama. Japan Weekly Mail, Vol. 43, No. 13, 360 p, April 1, (1905).

17) Mountaineering in the Southern Alps of Japan and Japanese mountain club. Alpine Journal, Vol. 23, No. 171, 1-15 p, (1906).

18) An Adventure on the Eiger Joch. Alpine Journal, Vol. 23, No. 174, 277-284 p, (1906).

19) Travels and Explorations in the Southern Japanese Alps. Geographical Journal, Vol. 27, 18-36 p, (1906).

20) The famine in Japan. Times, March 5, 6 p, d. (1906).

21) The famine in Japan. Times, April 18, 6 p, b. (1906).

22) The Lord Chamberlain and The Mikado. Times, May 17, 11 p, e. (1907).

23) Japanese famine relief fund souvenirs. Times, October 5, 11 p, b. (1909).

24) My Swiss and Japanese mountaineering. Sangaku, Vol. 5, No. 1, Eng. suppl., 1-3 p, (1910).

25) Eight years of travel and exploration in the Japanese Alps. Sangaku, Vol. 5, No. 2, Eng. suppl. 1-18 p, (1910).

26) Eight year's mountaineering and exploration in the Japanese Alps. Transactions and Proceedings of the Japan Society, London. Vol. 9, Pt. 1, 49-70 p, (1910).

27) 余が日本の登山, 2-6.（1は記者によるウェストン氏紹介記事） 東京朝日新聞, 明治 45 年3月 12 日, 13 日, 14 日, 15 日, 16 日.（1912).

28) ウェストン序文. 志村烏嶺『千山萬岳, 嵩山房, 東京 大正2年刊, 巻頭英

文3頁，和文3頁，(1913).
29) Exploration in the Northern Japanese Alps. Geographical Journal, Vol. 46, 188-200 p, (1915).
30) Suggested glacial phenomena in the Northern Japanese Alps. Geographical Journal, Vol. 46, 239-240 p, (1915).
31) Two climbs in the Japanese Apls. Journal of the fell and rock climbing club of the English Lake District. Vol. 3, No. 3, 75-82 p, (1915).
32) A Royal mountaineer. Times; Literary Supplement, September 21, 453 p, d. (1916).
33) Recent exploration in the Japanese Alps. Scottish geographical magazine, Vol. 32, 306-315 p, (1916).
34) Exploration in the Northern Japanese Apls. Alpine Journal, Vol. 30, No. 213, 246-259 p, (1916).
35) Note on the Sakurajima eruption of 1914. Geographical Journal, Vol. 47, 382-383 p, (1916).
36) Annals of Fuji San : An appendix. Alpine Journal, Vol. 30, No. 213, 260-272 p, (1916).
37) Mountaineering in Japan. Japan Chronicle, October 26, 5 p, (1917).
38) Mountaineering in Japan. Japan Weekly Chronicle, N.S. No. 826, 723-724 p, November 1, (1917).
39) Mountaineering in Japan. Inaka, Vol. 8, 17-21 p, (1918).
40) Of the origin of the term "The Japanese Alps". Sangaku, Vol. 13, No. 3, Eng. suppl. 17-18 p, (1919).
41) Mrs. Weston —A famous lady climber. Inaka, Vol. 13. No. 2, (1920). Illustrations.
42) The Alpine Club. Inaka, Vol. 13, 3-4 p, (1920).
43) In the playground of Europe. Sangaku, Vol. 15, No. 1, Eng. suppl., 1-12 p, (1920).
44) Rural Japan. Discovery, Vol. 2, 229-233 p, (1921).
45) Some social survivals of rural Japan. Discovery, Vol. 2, 318-328 p, (1921).
46) The geography of Japan, with special reference to its influence on the character of the Japanese people. National geographic Magazine, Vol. 41, 45-84 p, (1921).
47) Old friends and new faces : some recent explorations in the Northern

Japanese Alps. Transactions and Proceedings of the Japan Society, London., Vol. 18, 2-17 p, (1921).

48) The ascent of Kaigane San. Inaka, Vol. 14, 76-101 p, (1921).

49) Alpes Japonaises. Congrés International de L' Alpinisme, Monaco, 1920. Comtes Rendus. Tome 2, Paris, (1921).

50) Japan : the island Empire and its cultured peoples. in J.A. Hammerton (ed.); Peoples of all nations. Vol. 2, 3121-3224 p, Amalgamated Press, London, (1922).

51) Some aspects of rural Japan. Transactions and Proceedings of the Japan Society, London., Vol. 19, 76-90 p, (1922).

52) Some aspects of rural Japan. National Geographic Magazine, Vol. 42, 275-301 p, (1922).

53) Religious beliefs and survivals in rural Japan. Discovery, Vol. 3, 126-132 p, (1922).

54) Sir G. Prothero and Alpine Club. Times, July 15, 11 p, g. (1922).

55) The geography of Japan in its influence on the character of the Japanese. Transactions and Proceedings of the Japan Society, London., Vol. 20, 2-12 p, (1923).

56) A complete mountaineer. —Review. Geographical Journal, Vol. 61, 372-375 p, (1923).

57) In Lotus-Land Japan. —Review. Geographcial Journal, Vol. 61, 455-456 p, (1923).

58) The earthquake of 1891. Times, September 10, 8 p, d. (1923).

59) Help for Japan. Times, September 19, 11 p, e. (1923).

60) Volcanic belts. Times, January 11, 15 p, d. (1924).

61) Mr. E.N. Buxton. Times, January 14, 8 p, e. (1924).

62) The influence of nature on Japanese characters. Geographical Journal, Vol. 63, 106-120 p, (1924).

63) The Octopus as food. Times, May 27, 12 p, e. (1924).

64) English as she is wrote. Times, June 14, 6 p, c. (1924).

65) English as she is wrote. Times, June 20, 10 p, d. (1924).

66) Obituary : Prof. F. Omori. Geographical Journal, Vol. 63, 462-463, (1924).

67) Reconstruction of Tokyo. Times, November 12, 10 p, e. (1924).

68) British troops in Cairo. Times, November 29, 8 p, c. (1924).

69) Obituary : Joseph Henry Longford. Transactions and Proceedings of

the Japan Society, London, Vol. 22, xi-xiii, (1925).
70) Highest North American peak. Times, February 4, 10 p, d. (1925).
71) King Albert and mountaineering. Times, April 13, 15 p, d. (1925).
72) Wasp killing. Times, April 22, 10 p, e. (1925).
73) Memorials to the missing. Times, May 11, 15 p, e. (1925).
74) The church in Japan. Times, October 5, 10 p, d. (1925).
75) Badgers in Japan. Times, October 9, 10 p, d. (1925).
76) Weather folklore. Times, January 22, 8 p, d. (1926).
77) In and out of the Kienthal. Alpine Journal. Vol. 39, No. 233, 211-215 p, (1926).
78) The Eiger Joch without guides. Ladies' Alpine Club 1926. 26 p, (1926).
79) A Japanese St. Francis. Times, October 7, 8 p, c. (1926).
80) The new Emperor of Japan. Times, December 31, 12 p, c. (1926).
81) Obituary : Professor Shigetaka Shiga. Geographical Journal, Vol. 70, 95 p, (1927).
82) The new ruler in Japan. Times, February 11, 10 p, d. (1927).
83) Britain and Japan. Times, February 15, 8 p, d. (1927).
84) Motor-cycling on Surrey Hills. Times, July 19, 10 p, d. (1927).
85) Reliquien aus der Zeit der frühen japanischen Christenverfolgung. Ostasiatische Rundschau, Vol. 9, 519-520 p, (1928).
86) Prince Chichibu. Times, January 11, 8 p, c. (1928).
87) Obituary : F.C. Bainbridge-Bell. Alpine Journal, Vol. 40, 365-366 p, (1928).
88) The ascent of the Eiger. Times, August 27, 8 p, d. (1928).
89) Origin of place-names. Times, December 6, 12 p, e. (1928).
90) Shops in distressed areas. Times, December 11, 12 p, e. (1928).
91) The volunteers of 1859. Times, February 14, 10 p, e. (1929).
92) Greece of the Far East. Discovery, Vol. 10. 258-261 p, (1929).
93) Greece of the Far East, II. Discovery, Vol. 10, 295-298 p, (1929).
94) H.I.H. The Prince Chichibu : Eight days in the Japanese Alps. (Translated by S. Uramatsu & W. Weston). Alpine Journal, Vol. 41, No. 238, 8-21 p, (1929).
95) Double blues. Times, April 1, 6 p, d. (1929).
96) Dovedale. Times, May 2, 12 p, d. (1929).
97) A Japanese shrine. Times, May 8, 17 p, e. (1929).

98) H.I.H. Prince Chichibu, "A climb in the Japanese Alps." (Translated by W. Weston & S. Uramatsu). Transactions and Proceedings of the Japan Society, London. Vol. 26, 125-139 p, (1929).
99) Place-names. Times, December 18, 10 p, d. (1929).
100) Inn signs. Times, January 6, 8 p, e. (1930).
101) Police on Point Duty. Times, January 16, 8 p, d. (1930).
102) Printer's errors. Times, January 28, 15 p, e. (1930).
103) Obituary : T.C. Fry. Alpine Journal, Vol. 42, 97-98 p, (1930).
104) Fuji-San. Alpine Journal, Vol. 42, 129-130 p, (1930).
105) The Dean of Lincoln. Times, February 14, 19 p, b. (1930).
106) Young geographer. Times, April 1, 12 p, e. (1930).
107) Now and Then. Sangaku, Vol. 25, No. 3, Eng. suppl. 1-4 p, (1930).
108) Obituary : G.F. Browne. Alpine Journal, Vol. 42, 295-297 p, (1930).
109) Obituary : Professor Naomasa Yamasaki. Geographical Journal, Vol. 75, 93-94 p, (1930).
110) Farrer's plants. Times, January 7, 8 p, d. (1931).
111) Oranges in Japan. Times, January 22, 10 p, c. (1931).
112) The Iron Duke. Times, March 7, 8 p, d. (1931).
113) Camellia Japonica. Times, March 14, 8 p, d. (1931).
114) The glory of Budda. Times, March 27, 10 p, d. (1931).
115) Faraday's lectures. Times, September 23, 8 p, e. (1931).
116) The Cornish wreckers. Times, October 23, 17 p, d. (1931).
117) Muffins and crumpets, Times, November 24, 10 p, e. (1931).
118) Remarks on the Lötschental. Geographical Journal, Vol. 79, 312 p, (1932).
119) Livingstone relics. Times, February 25, 10 p, d. (1932).
120) Sydney Harbour Bridge. Times, March 23, 10 p, d. (1932).
121) Bishop Foss., Obituary. Times, March 29, 13 p, c. (1932).
122) In rural Japan. Times, September 12, 11 p, d. (1932).
123) Off the beaten track in Japan. Discovery, Vol. 14, 188-192 p, (1933).
124) Agricourt. Times, October 26, 10 p, e. (1933).
125) The mind's eye.Times, November 29, 10 p, e. (1933).
126) Japan : life in cherry-blossom land.
in J.A. Hammerton (ed.); Peoples of all nations : A colourful pagent of the races of the modern world., New & Shorter edition. Vol. 2, 843-876 p. Amalgamated Press, London. (1934).

127) Japan.

in "Mountaineering", Lonsdale library, No. 18, Chapter 28, 338-348 p, Seeley Service, London. (1934).

128) Korea and Formosa.

in "Mountaineering", Lonsdale library, No. 18, Chapter 29, 349-353 p, Seeley Service, London. (1934).

129) Crying the neck. Times, September 22, 8 p, d. (1934).

130) A Jubilee service. Times, May 22, 12 p, e. (1935).

131) Votive ships. Times. August 16, 6 p, d. (1935).

132) Guiding the tripper. Times, September 7, 6 p, c. (1935).

133) Obituary : W.G. Edwards. Alpine Journal, Vol. 48, 165 p, (1936).

134) Sir Owen Seaman. Times, February 5, 8 p, d. (1936).

135) A fighting family. Times, February 7, 15 p, (1936).

136) Cuvier and Silhouettes. Times, March 21, 8 p, d. (1936).

137) Profitable food. Times, August 8, 11 p, e. (1936).

138) Crystal Palace Site. Times, December 4, 17 p, e. (1936).

139) Mountaineering in Japan. Times, August 14, 6 p, d. (1937).

140) The Elizabeth Jonas. Times, September 28, 11 p, d. (1938).

* * * * * *

P.S.

Reports of Mrs. Frances Emily Weston (1872-1937)

1) Fujisan, old and new., Transact. Proc. Japan Soc. London, Vol. 16, 116-129 p, (1918).

2) Two climbs in the Japanese Alps., Ladies' Alpine Club 1926, 4-7 p, (1926).

3) Eiger and Eiger Glacier. Alpine Journal, Vol. 23, No. 174, 277 p, photo. (1906).

4) Icefall of Grindelwald Fiescher Glacier. Alpine Journal, Vol. 23, No. 174, 283 p, photo. (1906).


FOREST

高所脳障害とその予防法

ENDO Katsuaki and TAKAHASHI Jun-ichi : The preventive physiology of high altitude brain disorders

遠藤克昭
（京都大学医学部生理学教室）
高橋純一
（住友病院外科）

はじめに

高所における脳の機能障害，即ち，視力，判断力，意識，平衡機能，運動機能等の障害は，主として，大気圧低下による酸素の欠乏が原因で引き起こされるという考えが，すでに 1870 年代に，フランスのポール・ベールらにより示唆されていたが，高所脳障害に対する予防対策の重要性が広く登山家に認識されるに至ったのは 1950 年以降のことであった。即ち，この頃から，高所登山に関する技術，装備，生理学等の急速な進歩に伴い，エベレスト（標高 8848 m）を筆頭に，世界の屋根に連なる高峰は，多くの登山家の熱意と努力により次々と登頂され，これまで人跡未踏の地であった頂上の大多数に人類の足跡が記されたが，それとともに，遭難事故も激増し，多くの人材が登山界から失われていった。

1988 年 6 月に群馬県の水上で開催された第 8 回日本登山医学シンポジウム（田中壯佶会長）において，山森欣一氏が発表した統計によると，1952 年より 1987 年に至るヒマラヤの 6000 m 以上の峰を目指して入山した日本隊の登山隊員の総数は 6537 名であるが，このうち遭難死亡者は，実に 172 名にもおよび，入山者総数の 2.6% を占めている。原因別死亡状況は，雪崩が 76 名（44.2%）と最も多く，続いて転滑落が 69 名（40.1%），高山病が 11 名（6.4%），その他 16 名（9.3%）であった。しかるに，転滑落が原因と考えられる遭難事故の記録を，我々がさらに詳しく調べたところ，登山技術の問題に帰せられるものは少なく，脳の機能障害に起因する不可抗力ともいえる事故が大多数を占めていることが判明した。即ち，高所における酸素の欠乏，脱水，飢餓，寒冷等の過酷な環境により，視力，判断力の低下に加えて，平衡機能，運動機能等の障害が重なり転滑落を誘発したものと考えられる。標高 8000 m におよぶ頂上近くの高所においては，脳障害に起因する転滑落の危険がさらに増大している。エベレストの無酸素登頂者の約半数が，下山中に遭難死しているが，その原因は，ほとんどが高所脳障害による転滑落であると推察される。

本報告においては，はじめに高所で困難な登山活動に従事した登山家の貴重な記録をもとにして，高所脳障害の実態を把握し，その原因について分析を行った。さらに，今後の高所登山活動において，これらの高所脳障害を予防するための適切な手段を，現在

可能な範囲で，登山家が活用できる形に整理し，具体的な説明を加えた。なお本稿においては，一般に 4000 m 前後の高度において現われる，自律神経症状を主とする急性高山病に対して， 6000 m から 8000 m の高度で顕著となる，感覚および運動機能に関連した脳症状を，高所脳障害として区別した。また，対象とする登山活動としては，主に 8000 m 前後の高峰の登頂を目指す場合を念頭に置いて記述した。

高所脳障害の実態——登山家の記録から

1973 年 10 月 26 日，日本隊の石黒 久と加藤保男は，冬も近づいたポスト・モンスーンのエベレストに登頂した。以下の記録は，加藤保男『雪煙をめざして』より引用したものである。

“頂上に着いたのだ！ 時計を見ると 4 時 35 分。普通なら真先に登頂を報告するためトランシーバーで交信をする。トランシーバーは石黒さんが持っているはずだのに交信しようとしない。山頂のくぼみに若山美子さんの写真等を埋める。石黒さんはピッケルで雪を掘り，家族の写真とお守りを埋めた。石黒さんの酸素を少し吸わせてもらうと，目の前がパーッと明るくなってきた。登頂が遅かったのであたりが暗くなっているものとばかり思っていたが，何のことはない，すでに視力に影響が出ていたのだ。頂上に着いて約 30 分後に下り出す。頭は朦朧としていた。……やっとの思いでチムニーを抜ける。そこから先は切り立った所もないので，アンザイレンをはずす。ぼくが先に下りようとしたがアイゼンの跡すら見えない。酸素を吸っている者とそうでない者とでは，まるでスピードも視力も違い，次第に石黒さんのスピードについて行けなくなる。これ以上歩いては危ない！ 膝のあたりにピッケルを刺し，雪の上に直に坐った。……寒さは一段と増し，口はこわばり，思うように喋れない。そして三重靴の足の指先がズキンズキンと痛む。この寒さの中で眠ったら，間違いなく死んでしまう。起き続けて朝を迎えるのだ。眠ってはいけない。……はっとして正気に戻る。石黒さんに揺り起こされたのだ。互いに声をかけ合い，揺り起こし合って，長い夜を耐えた。……（この日の夜は標高 8,650 m，気温マイナス 45°C の強風下で，雪の棚の上に座ってビバークした。）

あたりが明るくなりだした。昨夜ぼくが見たイタリア隊のキャンプ跡は幻覚で，そのまま下っていたら大変なことになっていた。寒いので一刻も早く体を動かしたいが，隣りにいるはずの石黒さんがまるで見えないのだ。そこで太陽の光が当るまで待ってもらい，雪の上に写る人影にぴったりくっついて，何とか下りることができた。何度も足を踏みはずしては転倒した。……ふと右手をみると，雪どけ水がチョロチョロと流れている。四つんばいになり，一歩一歩近づき，きらきら光る水面に口をつけると——氷の塊りだった。ごろっと横になる。急に眠くなってくる。……その時どこかでぼくを呼ぶ声がした。「保男くーん，保男くーん」まぎれもなく長谷川さんの声だ。長谷川さんのがっしりした体が視界にぼんやりと入ってきた。「ありがとう，長谷川さん……」。酸素を吸わせてもらいしばらく休息した。”

この記録から学ぶことのできる教訓は，まず，登頂後まで全く自覚症状はないようにみえるが，注意すると，すでに，軽度ではあるが視力障害や記憶障害のみられることである。ビバークの翌日は高所障害も強くなり，視力は衰え幻覚に惑わされて，共に相手を見失ったが，幸運にも仲間に発見され，最終キャンプに帰還することができた。彼等のように強力なメンバーでも，これだけ厳しい環境下でビバークを行うと脳機能障害が進行し，翌日には，もはや正常な活動は遂行できなくなることがわかる。ここに現われた脳機能障害は，視力障害，記憶障害，幻覚，幻視，立体感覚異常といった大脳の機能障害が主である。その症状は，時間とともに加速度的に進行し，本人もその経過を自覚することができる。酸素の吸入も効果がある。しかし，次に引用する記録に示される脳機能障害の症状はこれとは大きく異なっている。同じく『雪煙をめざして』からの引用である。

“1973 年にエベレスト遠征に参加した時，先発隊より少し遅れたため，高度順化をかね，BC のすぐ手前にあるヌプツェの肩に一人で試登したことがある。ヌプツェの肩を通ってアイスフォールの上へ出，そこからせめてエベレストの南西壁の写真を撮って，本隊のための参考資料にしようとしたのだ。しかし，6000 m 近くに来ると，だんだん体が動かなくなってきた。20 歩進もうと目印にした岩に向って歩くが，ハッと気がつくと，その岩へは相変らず 20 歩の距離がある。つまり，自分の足は1歩か2歩しか出ていなかったのだ。よし，もう一度やってみようとして歩き出し，しばらくたって気がつくと，その岩は同じように先にある。時計を見てびっくりした。1時間近くも，同じ場所で動かずにいたことになる。そんなに疲れていないし，意識もはっきりしている。ところが歩き出そうとすると，そこで意識がなくなっている。これは危ないと思い，当初の計画を断念し，必死に懸垂氷河を下って何とかテントに戻ることができたのだった。”

ここでは運動機能障害が最も強く現われており，視覚や判断力は保持されているが，随意運動の指令が発現していないことから，小脳の機能障害が主に生じていると考えられる。また一時的な意識障害を来しているので，脳幹に障害が及んでいる可能性もある。この症状は何の前兆もなく出現し，予測不能な面もあることから，困難な登行活動時においては危険な状態に陥りやすい。特にこの記録の場合のように単独で行動している際には，異常を指摘してくれる者もなく，そのまま，転滑落を起こしたり，その場で体が動かなくなり，孤立無援のまま遭難することが多いと考えられる。

運動機能障害が原因で遭難した可能性を強く示唆する昨年の冬の記録を紹介する。八木原圀明『栄光と悲劇のアンナプルナ南壁』からの引用である。

“1987 年 12 月 20 日 15 時すぎに4人は南壁から冬のアンナプルナⅠ（8091 m）の頂上に立った。……18 時 57 分，山田が 7400 m の C_4 に帰着した。それより先，三枝は 18 時に着いていた。山田の一ピッチほどうしろにいた斎藤が遅い。三枝がキャンプから声をかけると，闇のなかから「だいじょうぶだ」という斎藤の声がした。しかし，15 分たっても 20 分たっても斎藤は現れない。三枝が様子を見にゆくと，斎藤はトラバース終了点，C_4 へわずか 20 メートルほどの地点まで来ていた。次の瞬間「ア

レッ」という声とともに斎藤が転落してしまったのである。時計は 20 時 03 分をさしていた。”

斎藤はは前記の加藤氏の症状のように，C_4 に着く直前に運動機能障害に襲われ，三枝氏の呼びかけに答えることはできたが，自分の意志に従って体が前に動かず，トラバース地点で転滑落したものと考えられる。

1973 年 5 月 14 日午後 6 時に日本隊の松田隆雄と上田　豊はヤルン・カン（8505 m）に初登頂した。以下の記録は上田　豊（共著）『ヤルン・カン』からの引用である。

“頂上は，やせた雪稜がほぼ同じ高さで 50 ないし 100 m ばかり続いており，その先は落ちていた。そしてそのリッジ上の端の方のやや南面寄りに 1, 2 m のちっぽけな岩の突起が見えた。クリノメーターを用いて，頂上の雪稜の先端をねらう。水準器の気泡を慎重に確かめ，この頂上稜線が水平であることを確認した。松田がトランシーバーをとり出し，BC を呼ぶが答えがない。故障だ。時間がないので，斎藤ドクターにたのまれていた脈拍の測定に移る。1 分間 132 という計算になる。野帳に鉛筆で，Peak 18：00 と書き，2 人の高度計の読みをメモした。（下降開始後，間もなく酸素が切れた。夜の 8 時頃に高度約 8400 m の地点で雪の上にすわってビバークした。夜半に，風雪の中の困難な下降を再開し，午前 3 時頃に再び雪洞を掘って避難した。）

午前 5 時だ。空はよく晴れている。だが，景色がかすんでみえる。近くのものは見えるが，遠くがだめだ。雪盲かと思うが目にいたみはない。松田もよく見えないそうだ。「これが眼底出血というやつかな」と冗談半分にいう。とにかく行こうか，と腰を上げる。数歩行くと，松田が「動けん」という。酸素不足による疲労は，日本の山でバテるという，疲労こんぱいして足が前に出ない感じとは，少しちがう。まず第 1 に，動く意志がなくなるようだ。酸素ボンベがからになってからもう 10 時間くらいたっている。酸素が不足すると，まず最初に脳がおかしくなるようだ。2 人とも舌がよくまわらなくなりしゃべるのもゆっくりになっている。早く酸素のデポにたどり着く必要がある。あらたまって「お役に立つのがおそくなりまして」といって松田のもとを離れた。……（デポした酸素は上田の懸命の努力にも拘らず発見できなかった。）12 時ごろ，松田のいるはずのあたりでかれをさがし，名前をなんどか呼んだ気がする。この頃になると，自分の現在地がはっきりしなくなっていた。岩角がぼんやりとポーターの姿に似て見えたりするが，これは幻覚に近いものだなという自覚はある。まわりに人がたくさんいるような気がする。あるいはもう一人，不特定だが人がいる気がする。そのうち夢と現実の区別がつかなくなる。おそらく，錯覚しながらの実際行動であろう。……

いったいどれくらいたったろう。日はすでに西に傾き，寒さでわたしは，われに返った。絶壁の端に，体をつっぱってかろうじて止まっていた。いつのまにか左足のアイゼンがなくなっている。ずっとあとで思い当たったことだが，夢の中で，テントに入るつもりで外してしまったようだ。救援隊が来てテントを張ったのは夢であったことが，ここで初めてはっきりとわかった。とにかくここにいてもなんにもならない。わたしは断固 C_5 に下ろうと決心した。右手が凍りついて痛い。枯木のようになってまがらない。一歩一歩慎重に下る。……「ポッポさーん」と声がする。近い。返事する。ヘッドラン

プの明かりが見えた。助かった。今度は本物だ。たがいに声をかけ合いながら近づき，合流した。甲斐，森本，ニマ・ノルブだった。長い孤独な放浪は終わった。松田の消息は，かれらも知らなかった。”

頂上における調査，記録等の作業は順調に遂行された。まもなく，酸素が切れ，厳しい風雪の中の下降活動を続けるうちに，脳機能障害の症状が現われ始めた。特に松田氏は自ら先頭に立って先人未踏のルートを探索しながら前進するという困難な活動を一昼夜にわたって続けたが，翌朝には，強い運動障害を来した。比較的余力のあった上田氏はデポした酸素を発見するために単独で彷徨するうちに，視力，判断力，位置感覚等の支障を来し，幻覚，幻視に苦しめられ，disembodiment といわれる霊魂の肉体からの離脱現象も体験し，まもなく意識を失ったが，夕刻の寒気が刺激となり，奇蹟的に意識を回復して，自力で下降中のところを救援隊に発見されて生還した。松田氏は，視力障害，運動障害，幻覚等が原因となり，転滑落したものと推測される。

8000 m におよぶ高峰の頂上に立ち，厳しい環境下を下降する隊員に対しては，積極的な救援活動がぜひ必要である。また，高所脳障害を来した状態での単独行動は極めて危険であることをこれらの記録は示している。

高所脳障害の予防対策

1. 酸素吸入

前出の記録に見られるように，高所脳障害等を予防する目的で酸素の吸入を行いながら登山活動を進めるときは，能率もあがり，目的遂行のための強力な手段ともなりうるが，酸素が切れた後は，特にビバークの翌日において，非常に危険な状態に陥ることを予測して対策を講じておかなくてはならない。下降中に，デポした酸素ボンベを発見することは，脳障害を来している時は，困難なことが多い。デポした位置をわかりやすくしておく必要がある。視力障害や運動障害に対しては，少量の酸素の吸入が著効を発揮することが多いので，携行する酸素は使い切らずに，適当量を残しておくのが賢明である。

2. 水分と栄養の補給

これは，登山活動を安全に能率よく進めるために必ず実行しなければならないことであるが，意識してこの対策を推進することは極めて重要である。特に水分は絶えず補給することが必要であるにもかかわらず，登頂の前後は水も飲まないで頑張り，脳障害に苦しむことが多い。1953 年のイギリス隊によるエベレスト登頂の成功は，高所における水分の充分な補給が大きな支えになったとされている。下降時に備えて酸素ボンベとともに，大量の紅茶の入ったテルモスをデポしておくのも有効である。高度 8000 m 以上においても，1人につき，1日に 4 l 以上の水分を摂取できるように前もって準備しておく必要がある。

3. 高所順応

高所脳障害等を予防する目的で，酸素の補給とともに，高所順応活動が初めて組織的

に実行されたのは，これも，1953 年のイギリスのエベレスト登山隊においてであったが，その後，これは非常に有力な手段であることが認められた。特に 8000 m 以上の高峰を，酸素の吸入を行わずに登頂する場合は，高所順応，充分な水分と栄養の補給，そして速やかに登り，下降できるための基礎体力の育成等に対して，格別の努力を払う必要がある。1980 年の日本カンチェンジュンガ北壁登山隊の高所順応計画を含む卓越した登山活動は，その模範となるものである。

4．速やかな登行と下降

高所順応が形成された後は，できるだけ速やかに登頂し，下降することが，高所脳障害を防ぐための原則である。脳浮腫や肺水腫等の重篤な高山病の兆候が現われた時は，高所に滞在し続けると命を失う危険が迫ってくるため，何よりも下降を優先させる。この場合は酸素吸入の効果はあまり期待できない。ヒマラヤにおける脳浮腫，肺水腫等の高山病による日本隊員の死亡者は，前記の山森氏の統計では 11 名（6.4%）と推定され，比較的少ないが，これは，その予防及び治療対策が，本邦の医師と登山家の協力によって積極的に推進されているためであると考えられる。

以上に述べた高所脳障害の予防法は，予防生理学ともいえるもので，現在では常識となっているが，高所登山を安全に推進するための基本原則でもある。これらは，長年にわたる登山活動において，多くの試行錯誤と経験を蓄積することにより確立されたものである。しかるに，以下に述べるいくつかの項目は，現在のところ，まだ評価は定まっていないが，今後，高所脳障害の有力な予防法として活用されることが期待されているものである。

5．炭酸ガスの吸入

炭酸ガスの吸入は呼吸中枢を刺激し，酸素の摂取量を増大させることはすでに明らかにされている。一方，高所で必要な酸素量を摂取するために，過換気の状態が持続すると，血液がアルカリ性になり，脳および神経系に対しても障害を与えることになるが，これは炭酸ガスの吸入により予防することができる。また，睡眠中に 5% 程度の炭酸ガスを含む酸素を吸入することは，脳の機能回復と高所脳障害の予防のために特に有効な手段であると考えられる。吸入に要する炭酸ガスは少量であるため，高所へ携行する労力と負担も少ない。炭酸ガスの吸入必要量と吸入方法を，早急に確立する必要がある。

6．血液から赤血球を一部除去する方法

高所に滞在すると血液中の赤血球の数が増え，赤血球の濃度が上昇することにより，血液の粘度が増し，血液の流れがおそくなるため，脳血栓等の起こる危険性も増す。これを防ぐために，血液を濾過して赤血球を除き，血漿は身体に戻すことにより，赤血球の濃度を下げ，高所における脳障害を予防しようとする試みが行われている。赤血球の総数を 70% 程度にまで減らしても酸素の供給能力には支障は起こらないと考えられている。現在のところ，これらの赤血球の除去操作を自分で簡単に行うことができないところが難点である。

7．アセタゾルアミド

利尿剤として疾病の治療に用いられるアセタゾルアミドは，血液がアルカリ性になるのを防ぐ性質があり，高所脳障害の予防に用いることができる。また，呼吸促進作用もあるため，酸素摂取能力を高める効果がある。さらに，その利尿効果により，高所における浮腫の除去にも有効である。副作用として，腎および循環系の障害，感覚異常等を来すので，高所での使用には注意を要する。少量の投与により現われる効果を注意深く観察しながら必要最小限の範囲で使用する。

8．グルココルチコイド

グルココルチコイドは血糖値を上昇させる作用があるため脳の代謝を促進し，脳障害を予防すると考えられている。また精神活動の賦活作用があるともいわれる。長期間連続して使用しない限り副作用も少なく，必要な時は大量に投与してよい。登頂活動を開始する日の朝，あるいは長時間の登山活動を行う日の朝に，水分，栄養等と共に摂取する方法も推奨される。急性高山病，脳浮腫，肺水腫等の予防と治療にも用いられる。

9．脳機能検査

最後に，我々の計画している脳機能検査について説明する。神経系の電気活動（脳波，誘発筋電図，大脳誘発電位，運動関連脳電位，脊髄誘発電位等）は脳の機能を調べるための指標として，現在，それらの記録と分析が広く行われている。ヒマラヤあるいはカラコラムにおいては，これらの調査を系統的に行った報告はほとんど見当らないが，将来は，高所における脳機能の検査に対して，重要な意義が認められるものと期待される。脳の電気活動を記録し，分析を行うことにより，高所脳障害の発生機序と診断の基準を，電気生理学的手法を用いて確立することは重要な課題であるが，それよりもまず進めなければならない急務は，脳障害を来した登山隊員をできるだけ早く発見する手段の開発である。高所において，運動機能，平衡機能，視覚機能等の障害に陥り体が自分の意志の通りに動かなくなり，転滑落の危険が迫っている隊員を早く発見するために，現在我々が試みている方法は次のようなものである。左右の上肢に記録用の電極を取りつけ，両極間の随意運動に伴う筋電図および心電図を同時に記録し，これを隊員の身につけた小型送信機から周波数変調波として発信する。一方，ベースキャンプあるいは他の近くのキャンプに設置した受信機を用いて，上記の波形を観察しただちにその分析を行う。四肢の運動が停止したときは，運動に伴って発生する筋電図も消失し，被検者の活動状態もある程度把握できるので，トランシーバーかポケットベル式の無線機により本人に連絡をとり，適当な指示を与え，必要な場合は救援隊が出動する。各隊員が身につけている小型送信機は，常に電波を発信しているので，これらの隊員が雪崩に遭った場合等にも，迅速に捜索活動を行うことができる。このように，本方式はヒマラヤにおける登山活動を推進し，脳機能障害による転滑落や雪崩による遭難事故を防ぐための有力な手段になり得るものと期待される。高所における脳および神経系の電気活動の解析は，小型軽量で特性の優れた測定装置を開発し，今後さらに推進していく予定である。

おわりに

本報告では，高所登山を安全に行うための方法を，高所脳障害の予防法を中心にして述べた。その中には，ヒマラヤ登山に成功するための方法論的な内容も含まれており，積極的に，二，三の新しい提案も行なった。

1983 年 10 月 8 日，日本の吉野 寛，禿 博信の両氏は，エベレストの頂上附近でビバークを敢行し，命をかけて人間の能力の限界に挑戦したが，下降中に，不運にも高所脳障害のために倒れた。しかしながら，科学の進歩は，以前は不可能と考えられていたことも可能にする。近い将来，エベレストの頂上で露営した後，安全に下山できるようになる時代が必ず来るはずである。ただし，そこに至るまでには，まだ多くの努力と経験の積み重ねも要求されるであろう。高所脳障害の新しい予防法を確立していく仕事は，そのような目標達成のための，一つの支えにもなりうるものと，著者は確信している。

参考資料

1) 辰沼廣吉：マナスル登山と生体の順化 『医学のあゆみ』65 325–332, 1968
2) 田中壮佶：高所環境の脳機能におよぼす影響 『登山医学』1 35–46, 1981
3) 中島道郎：高所肺水腫について 「山岳」70 22–29, 1976
4) 中島道郎：高山病の本質を考える 『岩と雪』56 38–43, 1977
5) 原 眞：高所登山論—高山病と高所適応の実践的考察 『岩と雪』34 62–76, 1973
6) 松林公蔵：神経系からみた高所医学 『臨床スポーツ医学』4 617–627, 1987
7) 川久保芳彦：8000 m 無酸素登山者のその後の諸検査の結果について 「山岳」81 45–52, 1986
8) 山森欣一：日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故 『登山医学』8, 1988（印刷中）
9) 日本山岳会・高所登山研究委員会：高所登山におけるアルパイン・スタイルの問題点について 「山岳」81 92–119, 1986
10) 遠藤晴行：エヴェレスト無酸素登頂および 8000 m 峰無酸素登山の研究 「第 22 回海外登山研究会報告書」 35–46, 1984
11) J. ハント：エベレスト登頂 田辺主計・望月達夫訳 朝日新聞社 1954
12) C.S. ハウストン：高みをめざせ／高所への挑戦の物語 中島道郎訳 『岩と雪』113, 1985–123, 1987
13) 加藤保男：雪煙をめざして 中央公論社 1982
14) 八木原圀明：栄光と悲劇のアンナプルナ南壁 『山と渓谷』632 119–123, 1988
15) 上田 豊ほか：ヤルン・カン 京都大学学士山岳会編 朝日新聞社 1975
16) 小西政継ほか：カンチェンジュンガ北壁・無酸素登頂の記録 1980

「山と登山に関する科学」図書目録（第一次）

日本山岳会　科学研究委員会

科学研究委員会では 1982 年春以来，登山者の立場からみて参考となり，山と登山についての認識が深まり，遭難防止にも役立つ科学文献を集める企画をたてた。

作業を進めるにあたり，実際登山や遠征に出かける人々にすこしでも役立つことを第一の目標とし，差当り今回は図書に限定することにした。学術雑誌や山岳関係の雑誌に掲載された論文は入手の困難も考慮して，今回は原則として採り上げないことにした。その選択基準も，古典や名著にこだわらず，利用しやすいものを優先的にとりあげた。従ってその内容が現代にそぐわなかったり，登山に直接関係のうすいものなどは思いきって省略した。また初版本より改訂版を，また文庫判のあるものは文庫判を収録した。多少専門的な内容の図書も入れる必要が認められたので，星印（*）を各書名の始めに加えた。

また，山の人文・社会科学についても検討したが，今回は自然科学を中心とすることとした。

なお，本会図書室に所蔵されているものについては，書名の前につけた No. を○で囲った。

「山と登山に関する科学」の図書の分類を どのようにすべきかについては 科学研究委員会としても，この企画の作業を始めて以来多くの議論を重ね，改訂も行なった。一応別表のようなものとなったが，未だ検討すべき点があると考えている。今後会員諸兄姉のご批判をまち，さらに検討したい。

図書目録の作成にあたっては多くの会員諸兄姉や各分野の専門家のご推薦，ご協力をいただいた。とくに図書の内容紹介執筆の労を多とし，心から感謝申上げたい。

率直にいって科学研究委員会としても時間と能力に限度があり，項目選定についても内容についても不充分な点が少なくない。それにも拘らず敢えて公表することとしたのは，一つには少しでも登山の科学性，安全性について寄与できればと考えたことと，さらにこれを今後より完全なものに近づけるための叩き台として，多くの方からご批判，ご助言をいただきたいと考えたからである。新しい図書の内容の紹介，解説についてもご協力を頂きたく，切にお願い申上げます。

協力者（敬称略 ABC 順）

阿部　和行	千葉　重美	遠藤　泰孝	藤井　理行	藤田　和夫
原　　褰	樋口　敬二	伊藤　正敏	石井恵美子	岩田　修二
神谷　光昭	金坂　一郎	川喜田二郎	木村　武二	木下　是雄
小西　奎二	近藤　信行	楠　　宏	増井　光子	松丸　秀夫
松永　敏郎	森　　滋夫	村井　　葵	中川　和道	中島暢太郎
中村　純二	中村　方子	大井　正一	岡沢　祐吉	大木　淑子
大森弘一郎	大森　薫雄	小野　有五	三枝　礼子	斎藤　　桂
式　　正英	田口　二郎	高橋　　詢	高遠　　宏	滝口　正三
徳久　球雄	梅野　淑子	渡辺　興亜	渡辺　兵力	渡辺　正臣
山瀬　一祐	吉野　正敏	横山宏太郎		

山の自然科学

1-1 気　　象

1　**天気予報と天気図**　大谷東平・斎藤将一　法政大学出版局　昭和32年(1957)　A 5 判　205 頁。

地上天気図の型が詳細に分類されており，天気図をもとに天気を予報するうえで，抜群の強みを発揮する“バイブル”的書物である。アマチュア予報官を目指す人に勧めたい。

②　**登山者のための気象学**　山本三郎　山と渓谷社　昭和 53 年(1978)　B 6 判　238 頁。

著者自らの体験から書きとめた気象学の本。

3　**高層の天気**　丸山健人　岳書房　昭和 57 年(1982)　B 6 判　158 頁。

山岳気象として放送されている上層天気図の描き方，見方のガイドブック。特に地上と上層の関係を知るための実例が豊富にみられる。高層天気図のみの本はこれ以外には今のところない。

4　**山登り気象学**　中村　繁　日本気象協会　昭和 55 年(1980)　B 5 判　216 頁。

地上，700 mb，500 mb 天気図の相互関係，及び山でその時に期待される気象変化をわかりやすく解説してある。冬春夏秋の順で多くの例が示してある。

⑤　**気象衛星「ひまりの四季」**　飯田睦次郎・渡辺和夫　山と渓谷社　昭和 57 年(1982)　A 5 判　156 頁。

新聞でおなじみとなった「ひまわり」の雲の写真に天気図や天気解説を添えて，四季の典型的な天候を解説。視覚による気象学の入門書としてすすめたい。

6　＊**大気の科学**(NHK ブックス 76)　小倉義光　日本放送出版協会　昭和 43 年(1968)　B 6 判　224 頁。

大気力学の立場から地球規模での気象，高層気象を解説した本。やや専門的。

7　**気象の科学**(NHK ブックス 196)　駒林　誠　日本放送出版協会　昭和 48 年(1973)　B 6 判　256 頁。

気象全般（環境・災害・惑星の三つの分野）解説書。やや専門的ではあるが，基礎知識を勉強するのによい。

8　＊**天気予報の科学**(NHK ブックス 369)　高橋浩一郎　日本放送出版協会　昭和 52 年(1977)　B 6 判　224 頁。

天気図の見方など，天気予報の基礎から応用面まで総合的に解説してあるが，やや専門的。

9　**雪**　中谷宇吉郎　→ 1-5-1

⑩　**アルプスの氷河**　第一部，第二部　J. チンダル著　矢島祐利訳　岩波書店　→ 1-4-8

11　**雲**(高度一万米の素顔)　石崎秀夫監修　昭和 57 年(1982)　変型判 157×260 cm　183 頁。

全頁原色写真の雲の解説集。雲の分類では 10 種の雲形が捉えられており，応用編では天気判断の参考になる雲や珍しい雲が集められている。低気圧通過などのとき，上空の雲の状態はどうなっているか，高山で登山者にとって，最も直接的なアドバイスとなる本。

12　＊**気象ハンドブック**　気象ハンドブック編集委員会　朝倉書店　昭和 59 年(1984)　A 5 判　698 頁。

気象関係の分野で使われる用語を解説。図表類，数値，統計表等の百科全書。

13　**ヒマラヤの気候と氷河**（気象学プロムナード 15）　安成哲三・藤井理行　東京堂出版　昭和 58 年(1983)　A 5 判　254 頁。

ヒマラヤの学術調査を純科学的でなく，探検，行動の面までも含めて物語的に報告しようとの意図をもって，大気圏と雪氷圏の相互作用を扱った啓蒙書。しかし内容はむしろ現代的，学問的である。

14　**山の気象はどうかわるか**　大井正一　恒星社厚生閣　昭和 37 年(1962)　A 5 判　116 頁。

山の気象の基本的な知識や表をまとめたもの。

⑮　**登山と気象**　大井正一・奥山　巌　地人書館　昭和 42 年(1967)　A 5 判　126 頁。

昭和 33 年～35 年に起こった重大な気象遭難の調査。主として気象庁の資料を使って研究した。日本の山岳の気象の学術的な特徴を説明する。

16　**山の遭難気象**（登山講座Ⅱ）　大井正一　山と渓谷社　昭和 45 年(1970)　A 5 判　21 頁。

昭和 27 年～31 年に起こった重大な気象遭難について，当時の気象状態を調べたもの。"登山と気象" の併読がのぞまれる。

⑰　**山の気象**　第 1 集　山の気象研究会　恒星社厚生閣　昭和 36 年(1961)　A 5 判　156 頁。

昭和 29 年～36 年に行なわれた各山岳会・学校山岳部による山の気象研究の成果をまとめたもの。

18　**山の気象**　第 2 集　山の気象研究会　恒星社厚生閣　昭和 39 年(1964)　A 5 判　175 頁。

昭和 36 年～38 年に行なわれた各山岳会・学校山岳部による山の気象研究の成果をまとめたもの。

19　**天気図の読み方**　庄司　亮　ユニ出版　昭和 52 年(1977)　B 6 判　253 頁。

ラジオ天気図の見方，書き方，上層天気図，登山との関連性，重大な遭難の起きた時の天気図からの考察，天気図の登山への応用を説明する。

20　**ひまわり画像の見方**　気象衛星センター　日本気象協会　昭和 58 年(1983)　B 5 判　271 頁。

ひまわり画像の見方の一般的な解説書。ひまわり画像の地上，上層天気図との対応を解説する。

21　**天気予報ことわざ事典**　大後美保　東京堂　昭和 59 年(1984)　A 5 判　364 頁。

天気俚諺，観天望気の編集編。

22　**学校気象ガイドブック**　藤井幸雄　誠文堂新光社　昭和 45 年(1970)　A 4 判　176 頁。

学校のクラブ活動として気象観察・観測を行なう指導書であるが，山で気象観測を行なう場合の指針としても使える。

23　**気象台の 24 時間**　高橋浩一郎他　南郷出版　昭和 58 年(1983)　B 5 判　352 頁。

富士山頂，鳥島，定点観測船等における気象観測の現状や，動植物との関係等を記述してあり，気象を理解する助けとなる。

24　**新版気象学概論**　山本義一　朝倉書店　昭和 59 年(1984)　A 5 判　248 頁。

高校卒業程度の学力を前提とした気象学の最も標準的な教科書。山の気象を勉強する場合に，基礎的な知識を得るためには良書である。

25 **一般気象学** 小倉義光 東海大学出版会 昭和 59 年(1984) B5 判 314 頁。

気象学の教科書。山の気象を勉強した人がさらに深く気象を知りたい場合に，広範な知識を与えてくれる。

26 **気象** I，II 伊藤 博他 東海大学出版会 昭和 54 年(1979) A5 判 300 頁。

気象学の一般的な知識が比較的平易に説明してある。特に低気圧，上層の谷等の立体的な構造を知るのによい。

27 **図説気象学** 根本順吉他 朝倉書店 昭和 59 年(1984) A3 判 229 頁。

気象学全般を図，グラフ，表等で表わした百科全書的な本で，辞書的に使うには良い。

1-2 地　　形

① **山** 辻村太郎 岩波書店 昭和 15 年(1940) 新書判 177 頁。

地形学の先駆者である著者が，山地の地形の成因とその侵食過程について，事例を加えて解説した。

2 **日本アルプスと氷期の氷河** 今村学郎 岩波書店 昭和 15 年(1940) A5 判 162 頁。

日本アルプスにおけるカール地形を中心に日本の氷河活動についての最初の研究。北，中央，南アルプスの氷河地形について詳細な研究がのせられている。

③ **日本アルプスの自然** 小林国夫 築地書館 昭和 47 年(1972) A5 判 258 頁。

内容はやや古くなったところもあるが，日本アルプスの地形や地質の入門書としてすぐれている。

④ **登山者のための地形図読本** 五百沢智也 山と渓谷社 昭和 47 年(1972) B6 判 445 頁。

地図の読み方についての優れた良書。地図についてのあらゆる情報がまとめられており，あわせて日本アルプスの地形の説明もしてある。

5 **地図の見方と作り方** 藤原健蔵・五百沢智也・柿沼清一 朝日新聞社 昭和 47 年(1972) A5 判 348 頁。

新しい探検地域での地図の作り方が述べられている。

⑥ **日本の山地地形** 岡山俊雄 古今書院 昭和 49 年(1974) A5 判 246 頁。

日本の山岳の地形と，氷河問題に関するすぐれた研究書。前半は地球内部からの力によってできる山地の大地形について，後半は日本の氷河地形の研究展望。

7 **日本の地形** 貝塚爽平 岩波書店 昭和 52 年(1977) 新書判 224 頁。

日本の地形全般についての入門書。

8 **地形と土壌**(新地学教育講座 9) 多田文雄監修 東海大学出版会 昭和 51 年(1976) A5 判 157 頁。

地学全般を基礎から系統的に網羅してあり，正しく理解できるような教育普及書。地球の表面に見られる地形の形態と形成の条件，自然体としての土壌について記述。

9 **大地を測る**(出光科学叢書 11) 檀原 毅 出光書店 昭和 51 年(1976) 四六判 242 頁。

地球の形と大きさ，三角測量，山脈の隆起などを測量法を中心にのべてある。

⑩ **鳥瞰図譜 日本アルプス** 五百沢智也 講談社 昭和 54 年(1979) B4 変型判 192 頁。

日本アルプスの氷河地形についての極めて優れた解説書。丹念なスケッチによ

って日本アルプスの地形をわかりやすく説明してある。

11 **地形学辞典** 町田 貞・貝塚爽平・佐藤 正編 二宮書店 昭和56年(1981) A5判 784頁。

地形，地質などの用語辞典。特に氷河・周氷河地形などに詳しい。

1-3 地 質

1 **図説日本の自然** 渡部 隆・恩藤知典 朝倉書店 昭和48年(1973) B5判 224頁。

簡明な解説と豊富な写真で，地質を中心に日本の自然を浮き彫りにしている。

2 **大地の動きをさぐる** 杉村 新 岩波書店 昭和48年(1973) A5判 232頁。

山はどうしてできるのかという問題についてのわかりやすい入門書。

3 **日本列島の生いたち**(コスモス ライブラリー <おはなし科学書>) 成瀬 洋 同文書院 昭和51年(1976) 変型B6判 240頁。

日本列島の最近200万年間の形成過程が描かれている。後半に山地の成長が述べてある。

4 **群馬のおいたちをたずねて**(上・下) 木崎喜雄・野村 啓・中島啓治編著 上毛新聞社 昭和52年(1977) 変型A5判 上238頁，下229頁。

尾瀬，奥利根，谷川岳，赤城，浅間，草津白根等の地質時代の山のおいたちを，平野部の地史とあわせて解説。一地方の地質現象を素材としているが，日本列島の地質現象一般の解説書としてもすぐれている。

5 **世界の変動帯** 上田誠也・杉村 新編 岩波書店 昭和48年(1973) B5判 420頁。

雑誌“科学”に掲載された造山運動に関する論文の再録。世界の大山脈のほとんどについて形成過程の形成にかかわる諸現象について解説してある。ヒマラヤの生いたちなど，興味深いものがある。

6 ＊**変動する地球**――造山運動――(岩波講座 地球科学12) 都城秋穂・安芸敬一編 岩波書店 昭和54年(1979) A5判 265頁。

よく使われる語であるわりには理解されていない造山運動について全般的に解説してある。

7 **地形と土壌**(新地学教育講座9) 多田文雄監修 →1-2-8

8 **岩石**(新地学教育講座4) 舟橋三男監修 東海大学出版会 昭和51年(1976) A5判 172頁。

地学の基礎としての教育普及書。岩石についてどのように研究が進められてきたか，それぞれの現状，造山運動などとの関連はどうかが記述されてある。また個々の岩石の記載や分類について図表あり。

9 **土の科学** 大政正隆 日本放送出版協会 昭和52年(1977) B6判 230頁。

土壌学の輪郭だけもで伝えたいという著者の言葉であるが，内容も豊富。

10 **図説日本の土壌** 山根一郎他 朝倉書店 昭和53年(1978) B5判 214頁。

土壌生成から働きまでを図，写真，表を用いてわかりやすく解説した土の科学の入門書。

11 **土と岩石**(自然をしらべる地学シリーズ3) 地学団体研究会編 東海大学出版会 昭和57年(1982) B5判 200

頁。

地学分野の実験と観察の分かりやすい手引書。

12 **地層と化石**（自然をしらべる地学シリーズ4） 地学団体研究会編 東海大学出版会 昭和 57 年(1982) B5 判 180 頁。

地学の実験と観察を中心にとりあげ，図や写真を豊富に入れ，初心者にもわかりやすくまとめられている。地層観察のコツ，砂丘のおいたち，地質図のつくりかた，みかた，化石のしらべかたなど。

13 ＊**原色岩石図鑑** 益富寿之助 保育社 昭和 30 年(1955) A5 判 238 頁。

岩石ブロック写真 288 種，顕微鏡写真 86 種の原色図版。

14 **火山および火山岩**（第2版） 久野久 岩波書店 昭和 51 年 (1976) B6 判 292 頁。

岩石についての記述は専門的ではあるが，初版以来 30 年近く読まれている名著。

⑮ ＊**Geology of the Nepal Himalayas** 北海道大学ヒマラヤ学術調査団 菜根出版 昭和 48 年 (1973) A4 判 286 頁。

全ネパールの地質構造・層序・変成作用を総括。カラー地図・単色地図付，秩父宮記念学術賞受賞。

⑯ ＊**日本の山地形成論** 藤田和夫 蒼樹書房 昭和 58 年(1983) A5 判 466 頁。

地質学と地形学とを結び，グローバルな視野から日本の山地形成を論じている。カラコラム，アラスカ，中国奥地についても言及。

1-4 氷　河

1 **氷河** 未知の宝庫を探る（改訂版 中公自然選書） 東 晃 中央公論社 昭和 49 年(1974) B6 判 210 頁。

著者のアラスカ氷河調査の紀行と氷河について（おもに氷河氷の結晶について）述べる。

2 **氷河の科学**（NHK ブックス 319） 若浜五郎 日本放送出版協会 昭和 53 年(1978) B6 判 240 頁。

氷河は氷雪から成るので，氷の一般的な性質に始まり，氷河の分類，構造，流動，さらに気候変動と氷期にふれている。

3 ＊**Glacier Ice** A. Post, and E.R. Lachapelle University of Washington Press 昭和 46 年(1971) A5 判 113 頁。

現在の氷河についてのすばらしい写真集。北アメリカの氷河の写真が多い。短く要領のよい解説があり，氷河のことがひととおり理解できる。

4 ＊**ヒマラヤ山脈** 特にネパールヒマラヤの氷河研究における諸問題 樋口敬二他（比較氷河研究会）編 名古屋大学水圏科学研究所 昭和 48 年(1973) A5 判 100 頁。

文部省科研費特定研究（水資源）によって行なわれたネパールヒマールの氷河調査の報告書。

5 ＊**日本の氷期の諸問題** 式 正英編 古今書院 昭和 50 年(1975) B5 判 205 頁。

第四紀気候変化と地形および湖底堆積層の対比に関する研究であって，専門的ではあるが，日本の圏谷，堆積物，古気候についての最新の知識を得ることがで

きる。

6　**日本アルプスと氷期の氷河**　今村学郎　→1-2-2

7　＊**Mountain Glaciers of the Northern Hemisphere** (2 vols and atlas)　FIELD, William ed.　昭和 50 年(1975)　A 5 判　Vol. 1, 697 頁, Vol. 2, 932 頁, 地図 49 葉。

北半球にある氷河のカタログで，特に歴史時代の氷河末端の変動について述べる。第1巻にアジア，ヨーロッパ，北米中部，南米の氷河，第2巻にアラスカ，カナダ北部の氷河を収録してある。

⑧　**アルプスの氷河――第一部および第二部――**(岩波文庫)　J．チンダル　矢島祐利訳　岩波書店　昭和 23 年(1948)　A 6 判　第一部 223 頁，第二部 239 頁

The Glacier of the Alps (London, 1860)の翻訳。第一部では 1856～59 年のアルプス氷河紀行，モンブラン登攀記など，第二部では氷河の起源，運動，クレバスの成因などについての科学的記述がなされている。

9　**ヒマラヤの気候と氷河**　安成哲三・藤井理行　→1-1-13

1-5　雪氷・雪崩

1　**雪**(岩波新書)　中谷宇吉郎　岩波書店　昭和 13 年(1938)　新書判　165 頁。

雪の結晶がどういう条件でできるか，実験室の中で雪の結晶を育ててそれを明らかにする。既に古典の域に入った本。

2　**雪の科学**(NHK ブックス 136)　吉田順五　日本放送出版協会　昭和 46 年(1971)　B 6 判　304 頁。

積雪の科学，物理的な性質を中心に積雪の観測方法や雪崩にもふれる。末尾にX線や光による氷の構造の研究方法などが述べられている。

3　**日本の雪**　高橋喜平　読売新聞社　昭和 49 年(1974)　変型判　140 頁(うち100 頁写真)。

著者自身撮影の雪の写真集，冠雪，着雪，波状雪，雪庇などの美しい貴重な写真が収められている。随筆風の文章もまた他の人によっては書かれることのない貴重な体験についての珠玉の文章。

4　＊**地球雪氷学**(月刊地球 15 号)　海洋出版　昭和 55 年(1980)　A 5 判　80 頁。

氷河，積雪，永久凍土を，地球的視点から取り上げた 10 編の論文から成る。やや専門的。

5　**日本の雪崩**　高橋喜平　講談社　昭和 55 年(1980)　四六判　240 頁。

50 年間雪崩の調査に取り組んできた著者の総括編。

⑥　**山の紋章・雪形**　田淵行男　学習研究社　昭和 56 年 (1981)　B 4 判変型　371 頁。

残雪の山に見られる様々な雪形が，美しい写真と共に数多く収録され，言い伝えや雪形の季節の里の様子も語られ，趣のある山への誘いの書になっている。著者畢生の大作である。

7　**雪華図説(復刻版)＋続雪華図説考**　土井利位記，小林禎作説明　築地書館　昭和 56 年(1981)　四六判　165 頁。

土井利位の雪の結晶のスケッチとその解説。これを小林がさらに説明している。

⑧　**雪崩の世界から**　新田隆三　古今書院　昭和 56 年(1981)　B 6 判　228 頁。

登山者の立場に最も近いアプローチから書かれた雪崩の本。森林と雪崩を専攻した著者による随筆風の雪崩の話。

9　＊**雪氷の研究**（No. 4, No. 6）　日本雪氷学会編　日本雪氷学会　昭和 45 年（1970）　昭和 56 年（1981）　A 5 判。

日本雪氷学会の機関誌であるが，特に雪氷の研究 No. 4（1970）には積雪や雪崩の解説，No. 6（1981）は雪氷研究の展望や文献目録が出ていて参考になる。

10　＊**氷の化学物理**　N.H. Fletcher　前野紀一訳　共立出版　昭和 49 年（1974）　A 5 判　235 頁。

専門書。氷の物理化学的性質が一般的立場から説明されていて参考になる。

⑪　**スキーヤーの ための 雪の科学**（共立ブックス 15）　黒岩大助　→ 2-3-5

⑫　**雪崩**――その遭難を防ぐために――　アメリカ林野局　→ 2-4-2

⑬　**雪崩**　金坂一郎　→ 2-4-3

1-6　火山・地震

1　**火山の話**（岩波新書）　中村一明　岩波書店　昭和 53 年（1978）　新書判　228 頁。

火山学の基礎を教科書風にではなく，著者自身の調査に基づいて，伊豆大島，ハワイ島，アイスランド等興味深く説明してある。

2　**日本の火山 I**　村上　磐　大明堂　昭和 53 年（1978）　A 5 判　314 頁。

日本の火山の概観と活動記録をまとめたもの。各火山の概観および活動。千島列島，北海道地方，東北地方についての記録。

3　**日本の火山 II**　村上　磐　大明堂　昭和 54 年（1979）　A 5 判　276 頁。

I に続いて関東地方，中部地方，伊豆・小笠原諸島についての記録。

4　**日本の火山 III**　村上　磐　大明堂　昭和 54 年（1979）　A 5 判　242 頁。

II に続いて九州，南西諸島についての記録。

5　**日本の火山**（第 2 版）　地質調査所編　地質調査所　昭和 56 年（1981）　A 1 判　地図。

1/200 万の地質編集図であるが，火山の形式，活動した時代，岩石等火山についての新しい情報も盛られている。日本の百名山の約半数は火山であることからも興味深い。

6　＊**火山および火山岩**（第 2 版）　久野　久　→ 1-3-13

7　＊**火山**（岩波講座　地球科学 7）　横山　泉・荒牧重雄・中村一明　岩波書店　昭和 57 年（1982）　A 5 判　306 頁。

火山全般にわたる教科書。噴火予知や地球外の火山にも触れており，読み物として面白い。やや専門的。

1-7　植　　物

1　**原色日本高山植物図譜**　牧野富太郎　誠文堂新光社　昭和 28 年（1953）　A 5 判　211 頁。

高山植物の写真による図鑑が出る以前の原色図譜として，研究者の間で使用されていた唯一のもの（第 2 次世界大戦後）。戦前にも原色刷りのものあり。

2　**原色日本樹木図鑑**　岡本省吾　北村四郎補　保育社　昭和 34 年（1959）　A 5 判　382 頁。

日本産有用樹木 380 余種の花・実・樹皮・樹相等をエングラーの分類順に原色写真で配列，検索表がつけられ，詳細な解説がある．

③　**山とお花畑**（写真と文）（1～3 巻）　田辺和雄　高陽書院　昭和 36 年（1961）　B 5 判　第 1 巻 220 頁，第 2 巻 158 頁，第 3 巻 170 頁。

地域別に高山植物やハイマツの生態が捉えられ，専門的解説の他，案内や紀行・随筆も含まれた楽しい本。原色版700枚に田淵行男・深田久弥氏も協力し，外国の高山植物や蝶にも言及している。

4　**続原色日本高山植物図鑑**　武田久吉　保育社　昭和37年(1962)　A5判　212頁。

正編に収録できなかった北海道の高山植物，また亜高山帯のものなど244種の図版と解説。ハイマツの生態，春の白馬岳についての文章も巻末に付けられている。

5　**原色日本高山植物図鑑**(増補改訂版)　武田久吉　保育社　昭和38年(1963)　A5判　260頁。

著者が生涯をかけて苦心撮影した日本の高山植物281種を原色図版とし，その分布，自生地，開花期等について詳述されている。巻末に高山植物という言葉がいつごろから使われたか等が書いてある。

6　**原色現代科学大事典** 3(植物)　宮脇昭編　学習研究社　昭和42年(1967)　A5判　535頁。

日本列島の植生全般を知るのに非常に良い入門書。

7　**尾根に咲く花**　前沢秋彦　朝日新聞社　昭和45年(1970)　A5判　141頁。

2000m以上の中部地方の亜高山帯以上の登山路やハイキングコースで，たやすく見ることのできる約90種の高山植物の生態写真と解説。

8　**尾瀬の湿原をさぐる**(そのおいたちと植物)　堀　正一　築地書館　昭和48年(1973)　B6判　213頁。

尾瀬はなぜ大切か，尾瀬の植物と自然をわかりやすく説明。1年に1mm成長する泥炭，湿原はこわれすやいなど。また，その保護と保護運動についても触れている。

9　**図説日本の樹木**　矢頭献一　朝倉書店　昭和52年(1977)　B5判　176頁。

日本の代表的な約100種の樹木について，現地に生育している写真を掲げ，詳細で平易な解説がつけられている。

10　**落葉広葉樹図譜**　四手川綱英・斎藤新一郎　共立出版　昭和53年(1978)　A5判　378頁。

冬の落葉樹を判別するため，冬芽・枝分かれ・樹皮の形態などからの分類方法について，日本に分布する主要な落葉を図示・解説している.

11　**高山植物**(野外ハンドブック8)　木原　浩(写真)・小野幹雄(解説)　山と渓谷社　昭和54年(1979)　B6判　278頁。

本州中部の高山でみかける高山植物238種を，その生育環境の特徴で，高山礫地，高山草原，高茎草原，針葉樹林帯，高層湿原の5つのグループに分け配列し，その種類の印象的な特徴が解説されている。

12　**北海道の樹**　鮫島惇一郎・辻井達一　北海道大学図書刊行会　昭和54年(1979)　B6判　183頁。

北海道内に自生するものを主とし，並木，庭園や植林に用いられるものを含め，代表的な樹木157種を葉の形で分類し，葉・幹・花・実などが豊富な写真で紹介されている。生育環境区分図あり。

13　**原色新日本高山植物図鑑**(I)　清水建美　保育社　昭和57年(1982)　A5判　331頁。

キク科からバラ科までの日本高山植物

235 種をカラーで収め，近縁種を含む全435 種が検索表を付して解説されている。また高山植物研究の文献，高山植物の地下部の観察がまとめられている。

14 **原色新日本高山植物図鑑（II）** 清水建美 保育社 昭和 58 年(1983) A5判 400 頁。

ユキノシタ科から単子葉植物までと，裸子・シダ植物を含む約260種が，また近縁種を含む全400種がカラー写真で解説されている。その他，とくに地下部の観察や微細構造の観察，染色体数一覧もある。

⑮ **北海道の高山植物と山草** 伊藤浩司 誠文堂新光社 昭和 57 年(1982) B5判 230 頁。

北海道の植物から約 630 種を選び，植生のカラー写真と解説がつけられている。また，北海道の植物について植物学的な解説。分類のむずかしい植物の見分け方などについても記述がある。

⑯ **東日本の高山植物と山草** 鈴木昌友 誠文堂新光社 昭和 57 年(1982) A5判 216 頁。

東日本地域の高山や山地に分布している数多い植物の中から約 640 種を選び，個々の植物の生育写真と解説がつけられている。また，植物学的な解説や自然保護についての記述もある。

17 ＊**日本高山植物概論** 竹中 要 春陽堂 昭和 9 年(1934) A5判 288頁。

高山植物の生態学的見方により，まとめられた著書として貴重なものである。気象，土壌，垂直分布，高山植物の生態，群落について書かれている。単色図版 82 が収められている。

1-8 動　物

1 **日本の蝶 I，II**（カラー自然ガイド 4，5） 高橋 昭・田中 蕃・若林守男 保育社 昭和 48 年(1973) A6判 各158 頁。

蝶に関する一般的なハンドブック。

2 **野鳥の生活**（正・続） 羽田賢三 築地書館 正・昭和 50 年(1975)，続・昭和 51 年(1976) 四六判 正 184 頁，続194 頁。

野鳥についての生態や繁殖について分かりやすく解説した書。

3 **野鳥**（野外ハンドブック 4） 高野伸二編 山と渓谷社 昭和 53 年(1978) B6判 239 頁。

よく見かける野鳥約 206 種が生息場所別（里，草原，山，高い山，水辺，海）に分けて紹介されている写真図鑑。野外での瞬間的識別に最適。

4 **日本の野鳥**—野外での見分け方— 高野伸二 小学館 昭和 51 年(1976) B6判 192 頁。

自然観察と生態シリーズ，日本の野鳥についての標準的な解説書。

5 **野鳥識別ハンドブック** 高野伸二 小学館 昭和55年(1980) A5判 378頁。

野外で形やさえずりから鳥を識別するための格好のハンドブック。

⑥ **雷鳥** 矢沢米三郎 岩波書店 昭和4年(1929) A5判 87 頁。

7 **日本の動物**（自然観察と生態シリーズ 9） 増井光子 小学館 昭和 51 年(1976) B6 変型判 176 頁。

日本の動物についての新しい解説書。カモシカ，シカ，クマ，イノシシ，キツネ，タヌキ，オコジョ，ウサギ，イタチ

等について説明されている。

8　**日本の動物**(学習百科図鑑)　今泉吉晴　小学館　昭和 55 年(1980)　B 5 変型判　194 頁。

野生動物についての総合的な解説書。

9　**追われる[けもの]たち**—森林と保護・獣害の問題—　四手井綱英・川村俊蔵編著　築地書館　昭和 51 年(1976)　菊判　210 頁。

滅亡の危機に瀕している日本のけものたち——その生態と保護，林業に対する害獣としての管理等についてまとめられている。

⑩　**カモシカ物語**(中公新書)　千葉彬司　中央公論社　昭和 56 年(1981)　新書判　228 頁。

日本に棲むカモシカの解説書。

11　**雪国動物誌**　高橋喜平　創樹社　昭和 56 年(1981)　四六判　166 頁。

東北地方に棲むツキノワグマ，カモシカ，ノウサギ，モモンガ等の愛すべき動物たちや，スリルに富んだ狩猟の話，姿を消しつつあるマタギのことなどが書かれている。

1-9　生 態 系

1　**生物と環境**(現代生物学講座)　芦田譲治他編　共立出版　昭和 33 年(1958)　A 5 判　231〜269 頁。

生態系全般を簡潔にうまくまとめてある。

2　**図説日本の植生**　沼田　真・岩瀬徹　朝倉書店　昭和 50 年(1975)　B 5 判　178 頁。

日本における植生のすがたを，分布と遷移を軸として，写真と図を豊富に用い平易に解説したユニークな著書。

3　**図説植物生態学**　沼田　真編　朝倉書店　昭和 50 年(1975)　A 5 判　300 頁。

各分野の権威者が分担執筆したもので，図や写真など視覚的なものを多く取り入れて，具体的に解説している。

4　**山岳森林生態学**　加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編　中央公論社　昭和 51 年(1976)　A 5 判　473 頁。

<今西錦司博士古稀記念論文集>

5　**日本の植生**　宮脇　昭編　学習研究社　昭和 52 年(1977)　B 5 判　535 頁。

日本の植生の生態や分布について，生育場所別に分けて，群落のようすについて解説され，多数の資料写真や図が収められ，また模式図などにより視覚的に考えられている。

6　＊**日本の森林植生**　山中二男　築地書館　昭和 54 年(1979)　菊判　222 頁。

日本の森林の姿と，それが今どのような状態にあり，それを研究者はどう捉えているかについて，よくまとめられている。

⑦　**登山者のための生態学**　渡辺弘之　山と渓谷社　昭和 54 年(1979)　A 5 判　226 頁。

生態学とくに森林生態学を中心に，登山者の理解を助ける啓蒙書。

8　**地球を囲む生物圏**<生物学教育講座 9>　沼田　真編　東海大学出版会　昭和 55 年(1980)　A 5 判　200 頁。

環境としての土壌，陸水，大気等についての解説から始まって，地球上の生物圏を論じ，人間環境まで触れている。

9　＊**尾瀬ケ原の植生**　宮脇　昭・藤原一絵　国立公園協会　昭和 45 年(1970)　B 5 判　152 頁(付表，植生図付)。

尾瀬ヶ原湿原植生の生態学的研究。植生調査の結果から把握された，植生の具体的な配分を植生図に描き，湿原植生の

維持，管理，復元について植物社会学的，生態学的考察がされている。

10 ＊**森林学** 帝国森林会編・大政正隆監修 共立出版 昭和53年(1978) A5判 572頁。

従来の林学や林業と異なり，森林を植物・動物・微生物・土壌などからなる一つの生態系としてとらえ，自然科学的立場から研究し，その成果を体系化したものとなっている。

登山の科学

2-1 生理・心理

1 **異常環境の生理と栄養** 万木良平・井上太郎 光生館 昭和55年(1980) A5判 290頁。

2 **登山生理学** 勝田 茂 逍遥書院 昭和47年(1972) A5判 180頁。

登山が人体にどのような影響をおよぼすか，疲労の問題を中心に登山者の体力測定やトレーニング処方などにおよぶ。

3 **歩行の科学** 阿久津邦夫 不昧堂 昭和50年(1975) 新書判 159頁。

歩行について生理学的に分析し，地上被覆や傾斜度によってエネルギー消費の相違度について研究。

2-2 高所医学

1 **高所医学** マイクル・ウォード 御手洗玄洋，中島 寛訳 山と渓谷社 昭和51年(1976) 変型判 21.5×15.5 cm 402頁。

高所医学をわかりやすく，しかも余すところなく解説している。ハイアルティチュード・クライマー必読の書。

② **高峰への挑戦——**高所における自己管理技術 村井 葵 岳書房 昭和54年(1979) A5判 225頁。

ヒマラヤ登山の経験を生かして，高所における団体生活は自己管理が必要であることを力説した。

③ **高山病ふせぎ方・なおし方** ハケット著 栗山喬之訳 山洋社 昭和58年(1983) 新書判 83頁。

現地でも読めるハンディな本でありながら，有用な情報を網羅している。入門書として勧めたい。巻末の投薬処方欄も役立つ。

4 **登山の医学** J.A. ウィルカーソン著 東大スキー山岳部医学部OB訳 東京新聞出版局 昭和57年(1982) 変型判 19×13 cm 341頁。

一般登山者のための基礎医学書。この書物があれば緊急事態に対応できる。

5 ＊**MOUNTAIN MEDICINE and PHYSIOLOGY** Chales Clark, Michael Ward, Edward Williams Alpine Club 昭和50年(1975) 変型判 21×13.5 cm 143頁。

英国国立登山センターで行なわれたシンポジウムにおける講師の論文集。高所登山術につき教えるところが多い。

6 ＊**ERFOLG AM KANTSCH 8438 M** Gunter Sturm BLV Verlagsqese Teselschaft 昭和50年(1975) 変型判 142頁。

資料集とでもいうべきもので，特に医学的分野について Dr. R. Zink が40ページほどを使って健康と酸素および吸入器について語っている。

7 **Medical Care for Mountain Climbers** Peter Steele William Heineman Medical Books Ltd., London. 昭和51年(1976) 変型判 18.5×12 cm 220頁。

現役の登山者，登攀者自身のための救急処置法を手ぎわよく図を用いて 21 項目にわたりわかりやすく説明してある。

8 **"GOING HIGH" THE STORY OF MAN AND ALTITUDE** Charles S. Houston and The American Alpine Club The American Alpine Club 昭和 55 年(1980) 変型判 21.5×14 cm 211 頁。

人と高所のかかわりを歴史を追って解説し，生理学的研究と併せて書物をも紹介している。

9 ***HIGH ALTITUDE PHYSIOLOGY STUDY** Charkes S. Houston The Arctic Institute of North America 昭和 55 年(1980) 変型判 28×21.5 cm 367 頁。

近年，アメリカで研究発表された高所医学学術論文の集大成書。高所生理にかかわる者に得るところ大。

10 **IKAR Report** International Kommission fur Alpines Rettungswesen(山岳救助国際委員会) 昭和 55 年(1980) 変型判。

JAC ルームに送られている。UIAA の医療委員会もこの組織から力を借用。1981 年 11 月開かれた医療部門委員会で，肺水腫，トレッカーの高山病に対する応急器具の開発，クロスカントリーの心臓病に対する方策も協議。

11 **MAN AND HIGH ALTITUDE** Donald Heath & David R. Williams Churchill Livingstone 昭和56年(1981) 変型判 25×19 cm 347 頁。

副題に適応と順応とあるように病態生理学とアンデスの経験をもとに二人の病理学者が高所医学全般にわたり専門的な解説をおこなっている。

12 **HIGH ALTITUDE DETERIORATION** J. Rivolier, P. Cerrelelli, J. Foray & P. Segantini Karger (UIAA) 昭和 55 年(1985) 変型判 24.5×17.5 cm 227 頁。

1984 年 3 月 UIAA の医療委員会が主催してフランスのシャモニーで開催した第 1 回国際登山医学会議の際の発表論文の中から筋生体エネルギー学，血流，心臓，呼吸の生理，高所肺水腫，精神生物学，凍傷，その他に分類して最新の知見を解説している。

2-3 登山技術と装備

1 **登山の小史と用具の変遷** 西岡一雄 朋文堂 昭和 33 年(1958) B 5 判 246 頁。

登山史が始めにあり，次に用具の主なもの，リュックサック，ピッケル，ザイル等の日本への移入のエピソード等も含めた論説。登山史を知る上で貴重。

2 **ザイル 強さと正しい使い方** 梶原信男 日刊工業新聞社 昭和 34 年(1959) B 5 判 88 頁。

昭和 34 年当時の麻・ナイロン・テトロンなどのザイルの強度に関するデータが多数収録されている。登山における使い方の例や強度データ，望ましい確保の在り方などが記されているが内容は古い。

3 **登山技術と用具** 登山ハンドブックシリーズ 村井 葵 日本登山学校編 日本文芸社 昭和 45 年(1970) B 6 判 250 頁。

日進月歩の登山技術，用具分野では成書が長い寿命を保つかという疑問が残るが，この本は図が豊富にあり，基礎的技術と用具について丁寧に解説がされてい

る。

④ **新岩登り技術** 阿部和行 東京新聞出版局 昭和46年(1971) A5判 171頁。

岩登りに関する技術の基本から応用にわたるまで，豊富な経験に裏付けされ，写真・イラストを使って具体的に解説しており，理解し易い。付録の「制動確保論」(伊藤仁之)は確保を力学的に考察。

⑤ **スキーヤーのための雪の科学**(共立ブックス 15) 黒岩大助 共立出版 昭和47年(1972) B6判 186頁。

著者の札幌における永年にわたる雪の研究成果を中心に，雪の結晶から積雪，スキー，なだれなどにふれている。スキーのみならず冬山に興味を持つ者に基礎的知識を与えてくれる。

⑥ **スキーの科学** 中公新書339 木下是雄 中央公論社 昭和48年(1973) 新書判 227頁。

スキーに抗力を与える雪の物理，スキーは何故滑るのか，直滑降の力学，回転の力学からなり，平易に解説するよう努力して書かれている。

7 **高所登山研究** 日本山岳会編 山と渓谷社 昭和50年(1975) A5判 373頁。

発行当時までにおける高所登山の諸問題の集約というべきもの。

⑧ **ヒマラヤ・トレッキング** 五百沢智也 山と渓谷社 昭和51年(1976) B5判 207頁。

ヒマラヤ・トレッキングのガイドだけでなく，ヒマラヤの自然，山地社会，文化についてのすぐれた入門書。

⑨ **登山の技術** 上・下 日本山岳会編 白水社 昭和52年(1977) 四六判 382頁（上)，386頁（下)。

上・下巻を通して諸登山における行動について専門的に詳細に記述されているので，あらゆる角度から必要最小限の登山技術についての知識を体系づけている。

⑩ **ビッグウォールクライミング** その歴史，技術，用具 D. スコット 岡本信義訳 山と渓谷社 昭和55年(1980) A5判 382頁。

登攀史から用具と技術，特に人工登攀における相互の関連について十分に解説したもの。イギリス等でのクライミングガイドも含むが，内容の濃いオーソドックスな作品。

11 **クリーンクライミング入門** ロイヤル・ロビンス 新島義明訳 森林書房 昭和55年(1980) 四六判 283頁。

基礎編と上級編に分かれている。チョックの使用法を含めて著者の実践に裏付けられた的確な解説が豊富な写真とイラストで十分に活かされている。

12 **山岳救助技術——岩場編** 森谷重二朗・河原 崇・西原 正編 東京都岳連遭難対策委員会 昭和57年(1982) B5判 23頁。

岩場での事故に際して負傷者を安全に搬出するためのロープの結束，アンカーの取り方，器具の使用法などを基礎的なロープ操作から解説。岩登りの応用技術としても体得しておきたい。

⑬ **大岩壁——その歴史・ルート・体験** R. メスナー 桂川文雄訳 山と渓谷社 昭和53年(1978) A4判 148頁。

メスナーの初期の基礎訓練を知ることができる。

2-4 遭　難

① **遭難の実態** 明治大学山岳部遭難対

策委員会　教育図書　昭和 39 年(1964)　新書判　170 頁。

明治大学山岳部の遭難調査をまとめたもの。

② **雪崩――その遭難をふせぐために**　アメリカ林野局　橋本誠二・清水　弘訳　北海道大学図書刊行会　昭和49年(1974)　A 5 判　338 頁。

雪崩・雪崩事故の記録，新しい雪崩救助法の 3 文献の合本。アメリカ人によるアメリカ雪崩の本格的研究書。日本と較べ堅い雪板雪崩が圧倒的に多い。

③ **雪崩**＜登山技術　下巻＞　金坂一郎　白水社　昭和 52 年(1977)　A 5 判　386 頁。

雪崩遭難の予防を中心にして記された技術書。

4 **山岳遭難救助技術テキスト**　文部省編　東洋館出版　昭和 54 年(1979)　B 5 判　150 頁。

登山研修所で使用するだけでなく，救助技術を中心に緊急時の対策なども具体的に述べている。イラストがやや雑であるが，この種のものとしては役に立つ一冊である。

⑤ **山岳遭難の教訓――死なないための発想転換法入門**　出海栄三　岳書房　昭和 55 年(1980)　四六判　316 頁。

遭難に関する諸問題を，技術，気象，法律・保険・裁判など多面的にアプローチする。登山の社会的側面が取り上げられている点が興味深い。

6 **山岳遭難の死角――続・死なないための発想転換法入門**　出海栄三　岳書房　昭和 55 年(1980)　四六判　278 頁。

上記「山岳遭難の教訓」の続編で内容的にも同様の特徴を有する点で価値が高い。

⑦ **雪崩の世界から**　新田隆三　→1-5-8

⑧ **黒姫山の想いで**　遠藤徳重　柏原物産　昭和 56 年(1981)　A 5 判　116 頁。

著者が長年かかって開発した雪崩の際の埋没姿勢の研究報告書。

9 **Mountaineering First Aid**(4 th edition)　D. Mitchell　The Mountaineers, Seattle, Washington　昭和 53 年(1978)　A 5 判　102 頁。

日赤救急法の登山者版，豊富な図と表で現場での有効なテキストとなる。

2-5　登山者と社会

1 **体育と法**　体育事故と法的責任　伊藤　堯　道和書院　昭和 44 年(1969)　A 5 判　133 頁。

体育事故の法的責任について判例を中心に研究した解説書。

2 **体育スポーツ事故判例の研究**　伊藤堯　道和書院　昭和 44 年(1969)　A 5 判　133 頁。

体育授業，クラブ活動等における事故の法律問題について判例を中心に研究。キャンプ事故，青井岳，北海道芦別岳等の事故ものっている。

3 **スポーツの事故と裁判**　中林俊夫　兵庫県体育協会　昭和 46 年(1971)　A 5 判　138 頁。

スポーツの事故における法律問題についての解説書。

4 **体育と法**　園部　暢・田所勝太郎　法律文化社　昭和 48 年(1973)　A 5 判　140 頁。

体育，特に学校体育における事故例を中心に法律問題を解説。

5 **行動科学事典**　ブレア・J・コラーサ　上野一郎監訳　産業能率短期大学

昭和 49 年(1974) A 5 判 774 頁。

登山者における成功と失敗(遭難)の諸ケースの分析に人間行動の分析を無視してはかかれない。人間はいかなる行動をとり，その社会的なつながりをつけていくかをとらえるための基本の項目についての平易な理解が持てる。

6 **体育スポーツ事故と対策** 早川芳太郎他 第一法規 昭和49年(1974) A 5 判 260 頁。

スポーツを安全にするために，事故の原因を究明し，それを解決する形でスポーツの啓蒙をはかるための技術書。

7 **山岳遭難の教訓** 出海栄三 →2-4-5

8 **山岳遭難の死角** 出海栄三 →2-4-6

9 **パーティ学——人の創造性を開発する法——現代教養文庫 A 007** 川喜田二郎 社会思想社 昭和 39 年(1964) 文庫判 320 頁。

人間は一人では生きられないが，多くの人と手をつなぐ事は難しい。人がチームを組み一つの目的を果たすためには，創造的な働きが望まれる。そのためにはいかにパーティを組むかである。

一 般

3-1 講 座

① **山岳研究講座** Ⅰ，Ⅱ 日本山岳会関西支部 朋文堂 昭和 18 年(1943) B 6 判 200 頁。

桑原武夫氏の登山の文化史他 5 編の論文をおさめる。

② **山岳講座** 川崎隆章・近藤 等編 山と渓谷社 昭和 29 年(1954) A 5 判 各 200 頁。

6 巻よりなる戦後初の講座で，文学，科学，案内など各方面にわたった論文を収録している。

③ **山岳**(Ⅰ～Ⅲ) モーリス・エルゾーグ監修 藤原敏男他訳 朋文堂 昭和 33 年(1958) B 5 判 216 頁。

Ⅰ山の探求，Ⅱ山の科学，Ⅲ山の芸術の 3 巻にわたって著名な著者が論説を展開している。フランスのラ・モンターニュの日本語訳。

④ **登山講座** 川崎隆章編 山と渓谷社 昭和 33 年(1958) A 5 判 320 頁。

6 巻と別巻事典よりなり，論説と山岳案内も付してあり，科学と技術の論文が多い。

⑤ **岳人講座** 全 4 巻 跡部，諏訪多，高須監修 東京新聞出版局 昭和 41 年(1966) A 5 判 1 : 393 頁，2 : 393 頁 3 : 398 頁，4 : 364 頁。

冬山，春山，夏山，秋山の 4 巻よりなり，『岳人』の 1-200 号の間の主要論説を中心に編集したもの。

⑥ **現代アルピニズム講座** 第Ⅱ次RCC あかね書房 昭和 43 年(1968) 四六判 各 213 頁平均。

アルピニズムの歴史，登攀用具と装備，続夏期登攀と設営技術，人工登攀とスーパーアルピニズム，岩と雪の遭難対策，海外登山と世界の山の 7 巻よりなる。

⑦ **登山教室** 山と渓谷社 昭和 53 年(1978) A 5 判 各 112 頁平均。

計画と用具，尾根歩きと生活技術，岩登り，沢登り，雪山，雲と天気，地図と地形，健康管理と救急法の 8 巻よりなり，新進の登山家達によって執筆されている。

⑧ **登山ハンドブック** 山岳研究会 ベ

ースボールマガジン社　昭和54年(1979)　A５判　120 頁。

登山教本，登山技術，世界の山岳，山の心，山の自然科学，山の資料の６巻よりなり，従来と異なった編集方針がとられている。

⑨　**日本登山体系**　1～10　柏瀬裕之・岩崎元郎・小泉　弘編　白水社　昭和57 年(1982)　A５判　約 300 頁。

日本の全山域にわたるバリエーションルートの新しいガイド・ルート図が多く，資料的価値が高い。

⑩　**日本登山記録大成**　第1～20巻　山崎安治編　同朋社　昭和 58 年(1983)　A４判　4,000 頁。

北アルプス，南アルプス，中央アルプスおよび富士山を中心に冬山記録を厳選の上，収録したもの。

⑪　**新岳人講座**　徳久球雄他監修　東京新聞出版局　昭和 58 年(1983)　A５判　300～400 頁。

『岳人』の 200～400 号の各号の主要論説を中心にアルピニズムⅠ，Ⅱ，技術と用具Ⅰ，Ⅱ，日本の山，世界の山Ⅰ，Ⅱ，山と文学，山の科学の９巻よりなる。

3-2　辞　　典

①　**日本山嶽志**　高頭　式　博文館　明治 39 年(1906)　A５判　644 頁。復刻版(大修館版)あり。

日本最初の本格的な山岳百科事典で，現在もその価値は失われていない。

②　**山岳事典**　川崎隆章編　山と渓谷社　昭和 35 年(1960)　B５判　440 頁。

登山講座の別冊だが単独でも市販され，登山年表，山岳団体，山岳書についての資料や用語が含まれる。

③　**世界山岳百科事典**　山崎・吉沢・横川・沢村・小島・徳久編　山と渓谷社　昭和 46 年(1971)　B５判　766 頁，付録 253 頁及び地図。

山と渓谷社が 1970 年当時 400 名に及ぶ執筆者に依頼してまとめた百科事典。項目は 8000 項目に及ぶ。

4　**朝日小事典ヒマラヤ**　川喜田二郎　朝日新聞社　昭和 52 年(1977)　B６判　254 頁。

項目別の辞書式読み物としてもよい。自然・歴史・社会・政治・文化・登山史などあらゆることを扱っている。

⑤　**図説百科　山岳の世界**　バウム・ガルトナー他　西堀栄三郎・宮下啓三他訳　大修館書店　昭和 56 年(1981)　B４判　33×25 cm　304 頁。

図と写真による山岳の総合的な解説。内容は高度であるがわかり易い。

⑥　**岳人事典**　湯浅・雁部・塚本・徳久編　東京新聞出版局　昭和 58 年(1983)　A５判　460 頁。

登山史上の人名と装備，技術を中心とし，あとは概説的にのべた百科事典。

⑦　**山と登山**　エドワード・パイアット　山崎安治・岡沢祐吉訳　講談社　昭和58 年(1983)　A５判　310 頁。

登山に関連するギネスブック的な資料集で各種のデータが集められている。

3-3　そ の 他

①　**山登りの研究**　篠田軍治　吉野書房　昭和 23 年(1948)　B６判　122 頁。

登山の科学についての基礎的な啓蒙書。地形，気象，とくに装備などについての研究的な解説が集められている。

②　**山の科学**　原田三雄　朋文堂　昭和35 年(1960)　A５判　298 頁。

山の成り立ち，褶曲山地や火山活動等

について子供にも理解できるように解説した啓蒙書。

③　**日本の山々　その正しい呼び方集**　日本山岳会監修　朝日放送アナウンサー室編　昭和 37 年(1962)　A 5 判　97 頁。

日本の山の呼び方が不統一であるので，放送で正確を期するため主な山の呼び方を収録したもの。

4　**地球からの発想**　樋口敬二　新潮社　昭和 47 年(1972)　四六判　283 頁。

山，地球を柔軟な視点でとらえている。

⑤　**北アルプス博物誌**　I 登山・民俗，II 植物・地学　大町山岳博物館　信濃路　昭和 49 年(1974)　A 5 判　I 346 頁，II 342 頁。

大町山岳博物館の学芸員の人達が北アルプスの自然—地形，地質，気象，動植物，森林—から民俗にまでわたって研究された論文の集成。

⑥　**北アルプス博物誌**　III動物・自然保護　大町山岳博物館　信濃路　昭和 50 年(1975)　A 5 判　252 頁。

7　**世界の自然環境**　山本正三他編　大明堂　昭和 48 年(1973)　A 5 判　268 頁。

気候，地形，土壌，動植物などの世界の自然環境の地理学的解説。第 3 章に山地地域の章がある。

8　**山**＜ライフネーチュア　ライブラリー 6＞　ローラス・ミルン，マージェリー・ミルン　村内必典訳　パシフィカ　昭和 52 年(1977)　B 6 判　282 頁。

山の成り立ち，分布，火山，山地民の生活等，山に関する全体的な科学的な解説書。

9　**自然活動学のすすめ**　塚本珪一　岳書房　昭和 55 年(1980)　B 5 判　354 頁。

広く人間と自然という立場から土壌への道程としての自然活動についての研究，広い意味で登山を捉えている指導書。

⑩　**山の博物誌**　西丸震哉　実業之日本社　昭和 56 年(1981)　変型 A 5 判　271 頁。

山の動物や鳥，チョウ，高山植物，霧や霜柱など 258 項目と図版を収め，自然界の生きものと友達づきあいをしている著者が，体験をもとにして書いた絶好の自然への案内書。

⑪　**山**(東京大学公開講座 32)　向坊　隆編　東大出版会　昭和 56 年(1981)　A 5 判　283 頁。

火山・気象・文学・民俗・災害・宗教・アルピニズム等各分野にわたった公開講座の集録。

12　**山**(自然読本)　河出書房新社編集部編　河出書房新社　昭和 56 年(1981)　A 5 判　240 頁。

山に関する文学的，科学的な文章や論説を集録したもの。

⑬　**アウトドア・ライフサイエンス**　塚本珪一　岳書房　昭和 57 年(1982)　B 5 判　168 頁。

自然活動ハンドブックとして山を中心として広く子供の教育を中心に取り上げている。

⑭　**自然の博物誌＜山＞**(NHK ブックス)　式　正英　日本放送出版協会　昭和 55 年(1980)　B 6 判　212 頁。NHK ブックス　カラー版 C 3。

山の自然や山と人との関わりについて，初心者向きに分かりやすく書かれている。

『ヒマラヤ山岳誌』ノート(第1回)

1981～1987

馬 場 勝 嘉

このノートは『ヒマラヤ山岳誌』のためのノートの一部で7000m以上の峰々をABC順に配し，年代的には1981～87年の各遠征を収録したものである。

AAJ=The American Alpine Journal (The American Alpine Club, New York)，「岩と雪」(山と溪谷社)，「山岳年鑑」(山と溪谷社)を基本参考文献とし，さらに下記の定期刊行物を参照して作成したものであるが，編者の浅学のためヨーロッパ大陸系のものを見ることが出来なかったための未採録や，誤解，誤読からの間違いがあるやも知れず，会員諸兄姉のご教示により補いたく思っています。

AJ=The Alpine Journal (The Alpine Club, London)
HCNL=Himalayan Club News Letter (The Himalayan Club, Bombay)
Hima=Himavanta, Vol. 18, 19 (Himalayan Federation, Calcutta)
HJ=The Himalayan Journal (The Himalayan Club, Bombay) Vol. 40 欠
IM=Indian Mountaineer, Vol. 11, 12 (Indian Mountaineering Foundation, New Delhi)
Moun=Mountain (Mountain Magazine Ltd., England)
岳人=東京新聞出版局
山岳=日本山岳会
山と溪谷=山と溪谷社

最後に，「岩と雪」編集部の方々及び貴重な文献をお貸し下さった松田雄一評議員に深甚なる謝意を表するものである。

ABI GAMIN 7355 m

Garhwal Himalaya Kamet group 30°55′57″ N, 79°36′09″E

① 1982年春 Indian Military Academy 隊, Jagit Singh 他11 Meade's Col を経て6月22日4人, 23日1人登頂 ●→Kamet No. 2

② 1983年夏 Indian Kumaon Regiment 隊, Col Narindar Kumar 他24 East Kamet gl. より7月8日2人登頂 ●AAJ, 1984, 263-64 (N. Kumar)／IM, 12, 184／岩と雪, 103, 80／→Kamet No. 3

③ 1985年春 Indian Nature & Adventure Club of Jamnagar 隊, Mohmed Vahanvati 他9 Meade's Col を経て6月17日 7315mまで ●山岳年鑑, '86, 67-68／→Kamet No. 6

④ 1985年秋 Indian Climbers & Explorers Club (Delhi) 隊, Jasvider Singh 他13 Meade's Col を経て 9月26日 4人登頂 ● Muni, Divyesh : Kamet and Abi Gamin Climbed. HJ, 42, 171-73, 1984･85／AAJ, 1986, 253／山岳年鑑, '86, 68／→Kamet No. 8

⑤ 1986年春 Indian Regiment of Artillery 隊, Major H.S. Mann 他42 Meade's Col を経て6月13日と15日に計9人, 19日に8人登頂, 同日 Kamet にも登頂 ●Hima, 18-4, 62／→Kamet No. 11

⑥ 1986年夏 Indian, N. Purohit 8月28日(25日?)登頂 ●AAJ, 1987, 259／HCNL, 40, 16

⑦ 1986年秋 Indian, Himalayan Association 隊, Ujjwal Ganguly 他8 Meade's Col を経て9月19日2人登頂 ●→Kamet No. 12

⑧ 1986年秋 Indian Garhwal Rifles Adventure Club, S.S. Patwal 他31 Meade's Col より10月3日4人登頂(同日 Kamet にも登頂)下山中1人が高山病で死亡する ●Hima, 18-7, 106／山岳年鑑, '87, 78／→Kamet No. 13

⑨ 1987年春 Indian Border Security Force

隊, Chhering Ram 他 34 Meade's Col より 6月15日3人登頂, Kamet にも4人登頂 ●→Kamet No. 14

⑩ 1987年 Indian, Army D.T. Kulkarni 他 Meade's Col を経て登頂, Mana は失敗したが Kamet には登頂 ●山岳年鑑, '88, 80／→Kamet No. 15／HCNL, 41, 36

ABRUZZO PEAK 7016 m

Karakorum Batura gl. の源頭 Kampire Dior の北東 4 km

① 1986年夏 Italian, Luigi Barbuscia 他 13 8月1日 Kampire Dior North (Pescara Peak, 6572 m) に 6250 m のコルから北東稜を登り登頂, 8月3日 7016 m 峰に北稜より Domenico Alessandri, Antonio Capassi, Domenico Mancinelli, Antonio Tansella が初登頂し Abruzzo Peak と命名する ●Barbuscia, Luigi : Peak 7016 m. HJ, 44, 165-69, 1986・1987／山岳年鑑, '88, 106

ANNAPURNA I 8091 m

Nepal Annapurna Himal 28°35′45″N, 83°49′20″E

① 1980/81年冬 Japanese, 坂下直枝 Naoe Sakashita (Solo) 1980年12月偵察に入山後, 81年1月再入山, North Annapurna gl. より 2月13日 6700 m まで ●坂下直枝 : 冬のヒマラヤに挑戦して, 岩と雪, 83, 42-47, 1981／坂下直枝 : 山と渓谷, 1981年7月号／岩と雪, 88, 52 (坂下直枝)／AAJ, 1982, 227／Moun, 79, 14／HCNL, 35, 8

② 1981年春 Swedish, Tommy Sandberg 他 9 5月13日 Roc Noir をこえて東稜 7480 m まで。なお Glacier Dome に南東稜より5月5日3人, 12日4人, Roc Noir に5月13日2人, 14日3人, 16日2人が登る ●AAJ, 1982, 229-30 (Tommy Sandberg)／岩と雪, 88, 53 (Tommy Sandberg)／Moun, 80, 11／HCNL, 35, 9／→Glacier Dome No. 1; Roc Noir, No. 1

③ 1981年春 Polish, Klub Wysokogorski, Zakopane 隊 Ryszard Szafirski 他 8 70年イギリス Bonington ルートの右手のピラーを登り, 5月23日 Macej Berbeka, Boguslaw Probulski が中央峰 (8051 m) に新ルートより登頂, Pope John Paul II ルートと命名する ●AAJ, 1982, 227-29／Moun, 80, 11／岩と雪, 88, 54

④ 1981年秋 French, Jean-Paul Vion 他 7 北西稜, 9月26日 7600 m まで。雪崩で André Durieux, Yves Favre 及びシェルパの Pemba Tsering, Ang Nima が死亡する ●AAJ, 1982, 230／岩と雪, 88, 55

⑤ 1981年秋 Japanese, イエティ同人隊吉野寛 Hiroshi Yoshino 他 11 南壁中央岩稜 (70年イギリス隊, 81年ポーランド隊ルートの中間)初登攀, 10月29日柳沢幸弘 Yukihiro Yanagisawa, 青田浩 Hiroshi Aota が中央峰とのコルをへて主峰に登頂。31日第二次隊の加藤康二 Yasuji Kato 隊員が 8000 m 付近で転落死する ●吉野寛 : アンナプルナI峰南壁, 山岳, 77, 11-16, 1982／吉野寛 : アンナプルナ南壁中央稜, 岩と雪, 87, 20-27, 1982／山と渓谷, 1982年2月号／岳人編集部 : それぞれのアンナプルナ, 岳人, 416, 28-32, 1982・2／岩と雪, 88, 55 (吉野寛)／AAJ, 1982, 230／Moun, 83, 9

⑥ 1982年春 Austrian-Swiss-Czech, Hanns Schell 3月～5月 Dutch Rib からスペイン・ルートに転進, 北東バットレスから中央峰へのランペを伝って主峰を目指し, 5月4日4人(内シェルパ1) が登頂する。Werner Burkli は疲労が原因の心臓マヒで死亡, また HAP の Shanti Ral は行方不明となる ●AAJ, 1983, 240／Moun, 86, 11／岩と雪, 95, 45

⑦ 1982年春 W. German, Siegfried Siebauer 他 13 上記隊と行動を共にする。5月6日 7255 m から頂上を目指したが天候の悪化にあい断念 ●AAJ, 1983, 240-41 (Herbert Ziegenhardt)

⑧ 1982年秋 Japanese, イエティ同人隊赤松進 Susumu Akamatsu 他 2 北面 Dutch Rib, 10月16日 6200 m まで。18日C2=5400 m で赤松隊長 S. Akamatsu, 小野幹雄 Mikio Ono が雪崩に襲われ死亡する ●岩と雪, 95, 45 (尾崎隆)／山岳, 78, 113／AAJ, 1983, 242／Moun, 89, 12

⑨ 1982年秋 British-Italian, Alex Mac Intyre 他 2 南壁南面ポーランド・ピラーの右手の新ルートをアルパイン・スタイルで登る。10月17日 7200 m まで登り一旦下降する途中, Mac Intyre が落石事故で即死する ●AAJ, 1983, 241-42 (John Porter)／Moun, 90, 9／岩と雪, 95, 45

⑩ 1983年秋 South Korean, An Chang-Yeul

他9 北面 Dutch Rib，10月1日 6700mまで。9月24日雪崩で Chang Yang-Keun と Magar 族のポーター Malla と Tikaram が死亡する ●AAJ，1984，259／Moun，96，11／岩と雪，102，46

⑪ 1983年秋 Italian，Paolo Panzeri 他10 北西バットレス，10月8日 6200mまで ●AAJ，1984，258-59（P. Panzeri）／Moun，96，11／岩と雪，102，46

⑫ 1983年秋 5 Slovenians-2 Italians，Andrej Stemfelj 南壁（70年イギリス隊と81年日本隊ルートの間の新ルート）10月22日 6400mまで ●AAJ，1984，258／Moun，96，11／岩と雪，102，46

⑬ 1983年12月 Japanese，東京岳志会隊杉本忠男 Tadao Sugimoto 他3 北面フランス・ルート，12月19日 6900mまで ●AAJ，1984，259／岩と雪，109，54

⑭ 1984年春 5 Frenchs 2 Canadians 1 Nepalese，Henri Sigayret Annapurna I峰と Fang との間の Nameless Peak（7700m）の北西スパーから主峰西稜，4月23日 7200mまで。4月21日 C3 にいた Patrick Taglianut，Philippe Dumas が雪崩で死亡する ●Sigayret，H.：Nameless Peak — Annapurna Massif Route in Sketches. HJ，41，45-49，1983・1984／AAJ，1985，283-85（H. Sigayret）／Moun，99，9／岩と雪，109，54

⑮ 1984年秋 Swiss，Frank Tschirky 他5 東稜初登・初トラバース（酸素，シェルパなし）Glacier Dome 南西稜～Roc Noir，10月22日 Roc Noir に登った4人のうちの Erhard Loretan と Norbert Joos が23日東峰（8047m）に登頂，中央峰とのコル 8020m でビバークし，翌24日中央峰を越えて主峰に登頂，ノースフェースを下る。24，25日他のメンバーは東峰を試登 ●Buhler，Ueli：Annapurna Swiss Expedition. HJ，42，164-66，1984・1985／AAJ，1985，285-88（Erhard Loretan）／岩と雪，109，54-55（F. Tschirky）／Moun，102，13／→Roc Noir，No. 2

⑯ 1984年秋 Spanish，Enric Lucas，Nil Bohigas 他2 南壁，82年 Mac Intyre らが試登したポーランド稜の右のランペを N. Bohigas と E. Lucas がアルパイン・スタイルで登り，10月3日中央峰に登頂，ポーランド稜を下る ●Lucas，Enric：Annapurna South Face —Alpine Style. Moun，102，26-31，1985／AAJ，1985，285（E. Lucas）／岩と雪，109，55-56（E. Lucas）／Moun，100，14；102，14

⑰ 1984年秋 Swiss Jean Troillet，Pierre-Alain Steiner（ペア）北西フェース，プレのフランス隊ルートの左手をアルパイン・スタイルで登る。10月12日北西稜の肩 7600mまで ●AAJ，1985，288／Moun，102，13-14／岩と雪，109，56

⑱ 1984年秋 5 Japaneses-4 Czechs-1 French 武川俊二 Shunji Takegawa アルパイン・スタイルで北面オランダ・ルート，C2=6000mの上部まで 10月22日断念 ●山崎祐和：撤退のアンナプルナル山群，山と溪谷，583，42-43，1985・1／AAJ，1985，291／岩と雪，109，56／→Nilgiri No. 10，Tilitso Himal. No. 8

⑲ 1984年冬 S. Korean Yeul An-Chan 他9 北面オランダ稜より12月7日キム・ヨンジャンがシェルパ4人と冬期初登攀（当時反対の北面西側にいたフランス隊はこの登頂を疑問視している）下降中シェルパのキーパが突風に飛ばされパサン・ノルブはそれにひきずられて転落，2人は死亡 ●山岳年鑑，'86，60／Moun，102，16／→Annapurna I No. 34

⑳ 1984年冬 French，Bernard Muller 他9 北面初登ルート，アルパイン・スタイル，12月8日 C2=6000m よりアタックに出発したが韓国隊の遭難を知り救助に向かう。10日 5800mまで ●AAJ，1985，288-89（B. Muller & E. Hawley）／山岳年鑑，'86，60

㉑ 1984/85年冬 Japanese，群馬県山岳連盟隊八木原圀明 Kuniaki Yagihara 他13 南壁70年イギリス Bonington 隊ルートの一本左の尾根，12月29日 7200mまで，1月19日 6500mまで ●八木原圀明：冬期アンナプルナ南壁敗退記，山岳，80，81-88，1985／八木原圀明：荒れる雪壁からの撤退，山と溪谷，588，34-35，1985・5／山岳年鑑，'86，59（八木原圀明）／AAJ，1986，242／報告書

㉒ 1985年春 Italian，Reinhold Messner 他4 84年春のフランス隊ルートの左の西北西スパーの頂から主峰への新ルートをアルパイン・スタイルで登り4月24日 R. Messner と Hans Kammerlander が登頂，次いで Dhaulagiri I へ ●メスナー，ラインホルト：『生きた，還った』，11章，185-91，横川文雄訳，東京新聞，1987／AAJ，1986，242／Moun，105，10／山岳年鑑，'86，60／→DI No. 19

㉓ 1985年秋 Japanese 岩遊会隊安村淳 Jun

Yasumura 他 5　北面 Dutch Rib, 10月3日 6000 m まで　●山岳年鑑, '86, 60／AAJ, 1986, 243

㉔ 1985年秋　Swiss, Jean Troiller, Pierre Steiner (ペア)　1984年に試登した北西フェースを 5600 m まで登る。10月25日断念　●山岳年鑑, '86, 60／AAJ, 1986, 243／→Annapurna I No. 17

㉕ 1985/86冬　Bulgarian, Boyan Atanasov 他 12　南壁ポーランド・ルート (Pope John Paul II) 2月22, 23日 7000 m まで　●AAJ, 1986, 243／Hima, 17-11, 170; 18-2, 27／Moun, 110, 10

㉖ 1986年春　Bulgarian, 冬に引き続きプレ・モンスーンの許可をとり再び南壁ポーランド・ルート (Pope John Paul II) へ, 5月9日 7550 m まで　●AAJ, 1987, 249 (M. Cheney)／Moun, 110, 10／Hima, 18-2, 27／岩と雪, 118, 80-81／山岳年鑑, '87, 71-72 (P. Totev)

㉗ 1986年春　Italian, Giaccomo Stefani 他 4　1950年フランス隊初登ルート, 4月25日 6200 m まで　●AAJ, 1987, 249-50 (M. Cheney)／Moun, 110, 9／Hima, 18-2, 28／山岳年鑑, 87, 72

㉘ 1986年秋　Italian, Sergio Martini 他 3　Nanga Parbat を終えて, 北面通常ルートより 9月21日 3人登頂　●AAJ, 1987, 250 (Sergio Martini)／Moun, 112, 10／Hima, 18-7, 109／山岳年鑑, '87, 72／→Nanga Parbat No. 46

㉙ 1986年秋　French-Nepalese Jérôme Greggory 他 6　Main North gl. より北西稜, 9月21日 6000 m まで。23日 Benoit Grison が滑落死する　●AAJ, 1987, 250 (Jérôme Greggory)／Hima, 18-7, 109／岩と雪, 120, 96／山岳年鑑, '87, 72

㉚ 1986年秋　S. Korean, Kim Jung　9月26日 6150 m まで　●Hima, 18-7, 109

㉛ 1986年秋　French Henri Sigayret 他 2　北西稜を目指したが隊長と Patrick Gabarrou の意見が合わず 7900 m で失敗。Gabarrou は Sherpa Pemba Norbu と 2人だけで 85年に R. Messner と H. Kammerlander が登った西北西稜をたどり 10月8日その頭 (A I 峰と Varah Shikhar=Fang との間の Nameless Peak, c 7850 m, A I 峰南西峰) に初登頂。(Messner らはこのピークをまいて主峰に登っている)　●AAJ, 1987, 250-51 (Henri Sigayret)／Moun, 114, 12／山岳年鑑, '87, 72／Hima, 18-7, 109; 19-2, 31 (Jozef Nyka)／HCNL, 40, 11

㉜ 1986年秋　French 8-Nepalese, 3 Marc Battard　Modi Khola 内院から Roc Noir を越えて東稜, しかし Roc Noir の 7100 m まで, 11月7日 Tarke Kang=Glacier Dome に 3人登頂　●AAJ, 1987, 251 (M.J. Cheney)／山岳年鑑, '87, 72

㉝ 1986年秋　Swiss, Daniel Ankey 他 1　南壁, 11月 5300 m まで　●山岳年鑑, '87, 72

㉞ 1986年冬　Polish Jerzy Kukuczka 他 3　北面初登ルートより 87年2月3日 J. Kukuczka と Artur Hajzer が登頂 (84年12月8日の韓国隊の登頂には疑問点が多くこれが確実な冬期初登頂)。なおもう一組の 2人は 6800 m まで, BC より上では酸素, シェルパなし　●AAJ, 1987, 251 (Elizabeth Hawley)／Moun, 116, 9／岩と雪, 122, 93 (J. Nyka)／Hima, 18-11, 170; 19-2, 31／山岳年鑑, '87, 72-73／HCNL, 41, 29／山, 506, 2, 1987. 8 (ユゼフ・ヌイカ)

㉟ 1987年春　New Zealand-American-British, Robert Hall 他 3　北面 5600 m まで　●Hima, 19-2, 31／山岳年鑑, '88, 72／HCNL, 41, 30／AAJ, 1988, 218

㊱ 1987年春　Spanish, Juan Maldonado 他 9　北面通常ルート, 5月22日 6850 m まで, 24日 Andres Ferrer 転落死する　●Moun, 116, 10／Hima, 19-3, 35／山岳年鑑, '88, 72／HCNL, 41, 30／AAJ, 1988, 218-19

㊲ 1987年秋　Spanish, Josep M. Maixe 他 7　北面通常ルートより 10月8日 2人 (内シェルパ 1) 登頂　●山岳年鑑, '88, 72／HCNL, 41, 32／Moun, 120, 11／AAJ, 1988, 219

㊳ 1987年秋　Spanish, Juan Carlos Gompez　80年西ドイツ隊ルートを登り 6700 m で通常ルートに合し 10月11日 3人 (内シェルパ 1) が登頂　●山岳年鑑, '88, 72／HCNL, 41, 32／Moun, 120, 11／AAJ, 1988, 219 (J.C. Gompez)

㊴ 1987/88年冬　Canadian, Steven Adamson 他 8　南壁東端のバットレス, 12月10日 6100 m まで　●山岳年鑑, '88, 72／Moun, 121, 11／AAJ, 1988, 220 (J. Cunningham)

㊵ 1987/88年冬　Japanese, 群馬県山岳連盟隊八木原圀明 Kuniaki Yagihara 他 12　南壁, 84/85年冬試登と同じルート, 11月13〜20日 Tent Peak, 24〜26日 Fluted Peak で順応を

終え，12月20日に山田昇 Noboru Yamada，斎藤安平 Yasuhei Saitou，三枝照雄 Teruo Saegusa，小林俊之 Toshiyuki Kobayashi が南壁の冬期初登攀をなす。しかし下降中 7900 m 付近で小林隊員 T. Kobayashi が，C4＝7300 m 手前のルンゼで斎藤隊員 Y. Saitou が転落行方不明となる。このため第二次アタックは中止 ●山田昇：栄光と悲劇の山，岳人，489, 9-14, 1988・3／岳人編集部：冬のアンナプルナ南壁に賭けた男たち，岳人，489, 84-88, 1988・3／八木原圀明：栄光と悲劇のアンナプルナ南壁，山と溪谷，632, 119-23, 1988・3／山と溪谷編集部：鎮魂のアンナプルナ南壁，山と溪谷，633, 151-57, 1988・4／山岳年鑑，'88, 72／Moun, 120, 11 (John Porter)／AAJ, 1988, 220

㊶ 1987/88年冬 Japanese カモシカ同人隊 大蔵喜福 Yoshitomi Ohkura 他3 アルパイン・スタイルで北面初登ルート，12月5日 6100 m まで ●山岳年鑑，'88, 72 (福島正明)／大蔵喜福：ヤマケイ・ジャーナル，山と溪谷，632, 74-75, 1988, 31／AAJ, 1988, 219-220

ANNAPURNA II 7937 m

Nepal Annapurna Himal 28°32′05″N, 84°07′30″E

① 1981年秋 Japanese 大阪登攀俱楽部桑原信夫 Nobuo Kuwabara 他8 南稜，10月11日 7400 m 付近で市川協一 Kyoichi Ichikawa 隊員がバランスを崩して転落死亡。このため断念 ●岩と雪，'88, 49 (桑原信夫)／AAJ, 1982, 230-31 (Nobuo Kuwabara)／Moun, 83, 9

② 1981年秋 Italian, Bologna 隊 Arturo Bergamaski 他18 北面ドームへのスパーよりの登頂を目指す。10月11日 7300 m で断念 A Ⅳ 峰へ ●AAJ, 1982, 231 (A. Bergamaski)／岩と雪，'88, 49／→A Ⅳ No. 2

③ 1982年秋 Japanese, 信州大学学士山岳会山田和彦 Kazuhiko Yamada 他4 南稜，10月4日 7350 m で断念 ●山岳，78, 111／岩と雪，95, 44 (山田和彦)／AAJ, 1983, 239

④ 1983年春 Austrian Hans Gsellmann 他3 A Ⅳ 峰の北西稜より西稜(73年日本隊ルート)，5月5日 7300 m 付近で Klaus Schlamberger が突風にあおられて転落死する。このため 7450 m を最高到達点として断念 ●AAJ, 1984, 252-53 (Robert Schauer)／Moun, 92, 9／岩と雪，102, 43

⑤ 1983年秋 Australian, Timothy Macartney-Snape 他4 南壁初登，10月8日 T. Macartney-Snape, Lincol Ross Hall, Andrew Henderson, Gregory Mortimer が登頂する ●Macartney-Snape, Tim : Australian Annapurna Ⅱ Expedition, 1983. HJ, 41, 145-48／AAJ, 1984, 253／Moun, 96, 11／岩と雪，102, 43-44

⑥ 1983年秋 S. Korean, Yeung Nam Univ. 隊 Jung Sang-Mo 他5 北面から西稜，10月5日 7300 m まで ●AAJ, 1984, 253／Moun, 96, 11／岩と雪，102, 43

⑦ 1983/84年冬 British, Ronald Rutland 他3 北壁，5950 m まで，12月13日断念 ●AAJ, 1984, 253 (K.K. Guha)／Moun, 96, 12／岩と雪，109, 52

⑧ 1984年春 Japanese, 岡山クライミング・クラブ近藤国彦 Kunihiko Kondo 他3 南壁新ルート，4月2日 6000 m まで ●岩と雪，109, 53 (近藤国彦)／AAJ, 1985, 281-82／Moun, 99, 9

⑨ 1984年秋 Japanese, 大阪登攀俱楽部桑原信夫 Nobuo Kuwabara 他3 南壁81年秋のルートに再挑戦，9月25日 5200 m で断念 ●岩と雪，109, 53 (桑原信夫)／AAJ, 1985, 282／Moun, 102, 14

⑩ 1985年秋 Japanese, 田川山の会藤井雅章 Masaaki Fujii 他6 南面，10月5日 7200 m まで ●山岳年鑑，'86, 58 (藤井雅章)／AAJ, 1986, 243 (M.J. Cheney)

⑪ 1986年春 Spanish, Basques 隊，Jesus Bereziartua Etxaniz 他6 A Ⅳ 峰北西稜から西稜，4月30日 7000 m まで ●Azpiazu, Jose Maria : Expedition to Annapurna Ⅱ. HJ, 44, 182-85, 1986・1987／AAJ, 1987, 252 (M. Cheney)／Moun, 110, 9／Hima, 18-2, 28／山岳年鑑，'87, 70

⑫ 1986年春 American Women 隊，Shari Kearney, Lucy Smith 他7 A Ⅳ 峰北西稜から西稜(上記スペイン隊と同じルート)，5月4日西稜 7250 m で断念 ●Kearney, Shari : 1986 American Annapurna Ⅱ Expedition. HJ, 43, 121-23, 1985・1986／AAJ, 1987, 251-52 (S. Keaney)／Moun, 111, 11／Hima, 18-7, 110／山岳年鑑，'87, 70

⑬ 1987年秋 Japanese, 岡山クライミング・クラブ近藤国彦 Kunihiko Kondo 他1 南西壁アルパイン・スタイル，10月13日 7500 m で断念 ●HCNL, 41, 32／山岳年鑑，'88, 71

／Moun, 120, 11／AAJ, 1988, 215

ANNAPURNA III 7555 m

Nepal Annapurna Himal 28°35′01″N, 83°59′31″E

① 1981年秋 British, Timothy A. Leach 他2 南東壁アルパイン・スタイル，AⅢ峰とAⅣ峰のコル（5750 m）を経て10月18日6500 m まで ●AAJ, 1982, 232-33 (Nicholas Colton)／岩と雪, 88, 49-50 (T.A. Leach)

② 1982年春 Japanese, 名古屋渓稜会・蒲郡山の会中瀬司 Tsukasa Nakase 他10 北面，4月22日 6800 m まで，24日岡部政美 Masami Okabe 隊員がセラックの崩壊による雪崩で死亡する。このため登山活動を中止する ●岩と雪, 91, 46-48 (中瀬司); 95, 44 (中瀬司)／AAJ, 1983, 239／Moun, 86, 11

③ 1982年秋 Spanish, Guillem Arias 他5 南西フェース，10月7日 AⅢ峰と Gangapurna のコルから 6500 m まで ●AAJ, 1983, 239-40 (Xavier Nogner)

④ 1983年秋 British, Nikola Kekus 他3 東稜，10月7日 6300 m まで，10日 100 m ほど下ったところで Rob Uttley が胸の痛みを訴え動けなくなり，Trevor Pilling が助けを求めに下山，南東ピラーに向かった2人と共に救助に向かったが雪崩の危険大きくあきらめる。18日 BC ●Kekus, N.: Annapurna Ⅲ. HJ, 41, 149-51, 1983・1984／AAJ, 1984, 254-55 (N. Kekus)／岩と雪, 102, 44-45 (N. Kekus)

⑤ 1983年秋 Australian Jonathan Chester 他4 西稜（70年日本女子隊ルート），10月22日 7315 m まで ●AAJ, 1984, 255／岩と雪, 102, 44

⑥ 1984年秋 S. Korean, Chosun Univ. 隊 Ko Kwang-Soo 南西壁，10月28日 6650 m まで ●AAJ, 1985, 282／Moun, 96, 11; 102, 14／岩と雪, 109, 53

⑦ 1985年春 Royal, Nepal Army 隊 Bhagrinath Narsing Rana 北面初登ルートより5月4日4人登頂 ●AAJ, 1986, 244／Moun, 105, 10／山岳年鑑, '86, 58

⑧ 1985年秋 Scotch, E. Todd 他3 東稜を目指したが大雪のため BC までもたどりつけず，10月4日計画中止 ●山岳年鑑, '86, 58-59

⑨ 1986年秋 Italian, Maurizio Maggi 他6 南西稜新ルート，9月25日 6500 m まで。26日 Massimo Caslino が 5500 m 付近でセラックの崩壊から転落死する。このため断念 ●AAJ, 1987, 253 (M.J. Cheney)／Hima, 18-7, 110／山岳年鑑, '87, 70

⑩ 1986年秋 S. Korean Kim Jung 他5 9月21日 5300 m まで ●→Gangapurna No. 2

ANNAPURNA IV 7525 m

Nepal Annapurna Himal 28°32′14″N, 84°05′02″E

① 1981年春 W. German (DAV), Franz Kröll 他6 北西稜より4月25日4人（内シェルパ2）登頂 ●AAJ, 1982, 231 (Franz Kröll)／岩と雪, 88, 49 (Franz Kröll)／Moun, 80, 11

② 1981年秋 Italian Arturo Bergamaski 他18 AⅡ峰をあきらめた後，AⅣ峰を北面ドームへのスパーより目指す。10月10日頂上まであと 650 feet にせまったが強風のため引き返す ●→Annapurna Ⅱ No. 2

③ 1981/82年冬 Canadian, Gordon Smith 他8 北西稜より12月22日 Adrian and Alan Burgess, Roger Marshall が冬期初登頂する ●Burgess, Adrian : アンナプルナ4峰冬期初登頂の記録，岩と雪, 89, 45-47, 1982／岩と雪, 95, 44 (Adrian Burgess)／AAJ, 1982, 231-32 (Adrian Burgess)／Moun, 84, 11／Canadian AJ, Vol. 65, 1982

④ 1982年秋 Austrian 4, Swiss 3, Yugoslav 8, Wolfgang Stefan 北面～北西稜より10月17日5人（内シェルパ2）登頂。ドームに10月15日3人，17日3人登頂 ●AAJ, 1983, 239 (W. Stefan)／Moun, 89, 12／岩と雪, 95, 44

⑤ 1983年春 Japanese, ティマングチョール山の会隊山野康光 Yasumitsu Yamano 他3 北面北稜（Ⅱ峰信州大ルート），5月9日サーダーを含む3人登頂 ●岩と雪, 102, 44 (山野康光)／AAJ, 1984, 253-54 (Yasumitsu Yamano)／Moun, 92, 9

⑥ 1983年秋 Austrian, Adolf Weissensteiner 他9 北西稜初登ルートより10月7日5人（内シェルパ1）登頂 ●AAJ, 1984, 254 (K.K. Guha)／Moun, 96,11／岩と雪, 102, 44

⑦ 1984年秋 French 7, W. German 2 Swiss 1, Hervé Thivierge 北西稜通常ルート，10月6日 6400 m まで ●AAJ, 1985, 282 (M. Cheney)／岩と雪, 109, 53 (H. Thivierge)／Moun, 102, 14

⑧ 1984年秋 Italian 6, French 3, Renato Moro 北壁10月6日 6800 m まで。北西稜に

転進 3500m まで，10月9日断念 ●AAJ, 1985, 282 (M. Cheney)／岩と雪，109, 53

⑨ 1985年秋 French, Association pour la Recherche en Physiologie de l'Environnement Philippe Paumier 他14 医学調査を目的に入山。10月6日と7日に北西稜の 5000m まで登る ●AAJ, 1986, 244 (M.J. Cheney)／山岳年鑑，'86, 58

⑩ 1986年春 Nepal Police 隊, Basundhara Lama 他23 北西稜通常ルート，5月2日6人(シェルパ4) 登頂 ●AAJ, 1987, 253 (M. Cheney)／Hima, 18-2, 28／山岳年鑑，'87, 70

⑪ 1986年秋 French 公募隊 Michel Vincent 他8 北西稜通常ルート，11月7日3人(内シェルパ1) 登頂 ●AAJ, 1987, 253-54 (M. Vincent)／Hima, 18-11, 170／山岳年鑑，'87, 70

⑫ 1987年春 Swiss, Eiselin Sports 公募隊, Harold Navé 他5 北西稜通常ルート，4月27日 5700m で断念 ●Hima, 19-2, 32／山岳年鑑，'88, 71 (H. Nave)／AAJ, 1988, 215

⑬ 1987年秋 American, Steven Brimmer 他6 北面リブより10月10日隊員1，シェルパ1が登頂 ●山岳年鑑，'88, 71／Moun, 120, 11／AAJ, 1988, 216-18 (S. Brimmer)

⑭ 1987年秋 American, Eric Simonson 他14 北稜～西稜，10月中旬 6550m まで ●山岳年鑑，'88, 71 (E. Simonson)／Moun, 120, 11／AAJ, 1988, 215-216 (E. Simonson)

ANNAPURNA SOUTH (ANNAPURNA DAKSHIN) 7219 m

Nepal Annapurna Himal 28°31′04″N, 83°48′30″E

① 1981年秋 S. Korean, Sung Kyun Kwan Univ. 隊, Han Sang-Kook 他4 北東壁から北稜，10月25日 4人 (内シェルパ1) 登頂 ●AAJ, 1982, 235／Moun, 83, 9／岩と雪，88, 55

② 1982年秋 French, Patrick Jacquenot 他10 東稜，10月21日 6500m まで ●AAJ, 1983, 243 (M. Cheney)／岩と雪，95, 45

③ 1984年秋 American, Colorado Outward Bound School 隊 Mark Udall 他6 南西面から東稜 (76年ホンコン隊ルート)，10月25日5人登頂。Tent Peak (5663m) に西側から通常ルートで9月27日全員＋サーダーと HAP1 が登頂する ●AAJ, 1985, 290 (Mark Udall)／Moun, 102, 14／岩と雪，109, 54

④ 1984/85年冬 Japanese, 千葉工業大学宮野伸章 Nobuaki Miyano 他2 南壁，70年フランス隊ルートと交差するように (西よりから東よりに) ほぼ直上するラインをとり，1月6日 6300m まで登る ●山岳年鑑，'86, 60-61 (藤井正善)／AAJ, 1986, 245

⑤ 1985年春 Italian, Slovenskega Planinskega Drustva Trst 隊, Luciano Cergol 他7 南西稜，4月21日 5650m まで ●AAJ, 1986, 245／山岳年鑑，'86, 61

⑥ 1985年秋 Greek, Mike Tsoukias 他13 南壁を断念，東面にまわって北東面初登ルートを西ドイツ隊と前後して登る。10月22日ドイツ隊の4人と前後して 6400m 付近を登っていた時, Dimitris Bountolas かドイツ隊の Robert Wohlschlager のどちらかが踏み出した雪崩によって Klimis Tsatsaragos (Greek), Rupert Wohlschlager (German) が死亡し，2人が重傷を負う。また C3 も雪崩で破壊される ●Tsoukias, Mike : Annapurna South; East Face 1985. HJ, 43, 123-25, 1985・1986／AAJ, 1986, 245／Moun, 108, 11／山岳年鑑，'86, 61

⑦ 1985年秋 W. German DAV Section Stuttgart 隊, Walter Fichter 他5 南西稜の最初のピーク (5500m) まで登ったがアルパイン・スタイルでは長すぎるとみて断念，南壁中央のルート (千葉工業大ルート) も悪天つづきで放棄し，初登ルートへ転進，10月22日ギリシャ隊と共に 6400m 付近で雪崩にあい隊員1名を失う ●AAJ, 1986, 245／山岳年鑑，'86, 61 (Walter Fichter)

⑧ 1986年春 Yugoslavian Women 隊, Marija Frantar 他8 南西稜，5月9日 6100m で断念 ●AAJ, 1987, 254 (Vlasta Kunaver)／Moun, 111, 11／Hima, 18-2, 29; 19-2, 32／山岳年鑑，'87, 71＼AAJ, 1988, 221 (M. Frantar)

⑨ 1987年秋 French, Philippe Berger 他9 南西稜，11月14日 6300m まで ●山岳年鑑，'88, 73／AAJ, 1988, 221

⑩ 1987年冬 Japanese, 宇都宮白峰会山形正巳 Masami Yamagata 他7 南壁 (84/85冬千葉工業大試登) は雪崩のため断念，南西稜に転進，12月20日 5800m まで ●岩と雪，127, 82／山岳年鑑，'88, 73 (山形正巳)／AAJ, 1988, 221

API 7132 m

Nepal Api-Nampa group 30°00′15″N, 80°56′00″E

① 1981年秋 Polish, Stanislaw Rudzinski 他7 北西稜初登ルート（60年同志社大ルート）アルパイン・スタイル，10月30日 6700 m で断念 ●AAJ, 1982, 241／Moun, 85, 12

② Agnew, C.: Soldier on Api. HJ, 40, 65-

③ 1983/84年冬 Polish, Katowice 山岳会 Tadeusz Piotrowski 他10 北西稜初登ルート，12月24日 T. Piotrowski, Andrzej Bielun が冬期初登頂する。しかし A. Bielun は下降中に行方不明となる。12月28日 C2 のすぐ上にある 6050 m 峰に3人が初登頂する ●Piotrowski, T.: The Winter Expedition to Api. HJ, 41, 55-60, 1983•1984／AAJ, 1984, 262-63／Moun, 96, 12; 99, 9／岩と雪, 109, 58

④ 1987年秋 Italian, Sylvana Camus 登山許可を取得したがトレッキングのみで登山活動はせず ●山岳年鑑, '88, 77

BAINTHA BRAKK (OGRE) I峰=7285 m, II峰=6960 m

Karakorum Latok group I峰=35°56′54″N, 75°45′11″E

① 1981年夏 Japanese, グループ・ド・コルデ隊加藤泰平 Taihei Kato 他2 II峰南東稜，8月7日 6400 m まで ●岩と雪，88, 72（加藤泰平）／AAJ, 1982, 276 (Taihei Kato)

② 1981年 S. Korean, Lee Jong-Gun II峰，Baintha Brakk との間のクーロワールから西壁 6800 m まで試登。下降中 6700 m 付近で Jeon Dae-Lee 隊員が転落死する ●AAJ, 1982, 276／岩と雪，88, 72

③ 1982年夏 British, Paul Nunn 7月23, 24日 5950 m 峰 (Uzun Brakk Spire) を頂上直下 200 m まで試登。次いでII峰 (Pt. 6960 m) をアルパイン・スタイルで試登する ●AAJ, 1983, 276-80 (Paul Nunn)／Moun, 88, 12／岩と雪，95, 65 (Alan Rouse)

④ 1983年春 French, Michel Fauquet 他3 主峰南ピラー，7100 m のピラーの頭に達したが6月17日断念。頂上はあきらめ下る。Uzun Brakk gl. 周辺の4峰に初登する。6月16日 Dominique Suchet は韓国隊の Han Kyu Yoo 柳漢圭と 6400 m 峰 (Uzun Brakk V) に登る ●AAJ, 1984, 299 (Gerard Pailheiret)／岩と雪，102, 69／Illustrated Note, HJ, 40

⑤ 1983年夏 Korean Climbers Club 隊, Yon Sae-Pyo 他7 II峰初登頂，Baintha Brakk との間の「Death Valley」から北西壁（81年よりも西よりのライン）を登り，7月16日 You Han-Gyu, Kim Dug-Yong がII峰に初登頂する ●岩と雪，102, 69 (Kilnam Chon)／AAJ, 1984, 299／Bergsteiger, 1984年3月号

⑥ 1985年 American Robert Knight 失敗

BARUNTSE 7129 m

Nepal Mahalangur Himal 27°52′19″N, 86°58′55″E

① 1980/81年冬 Japanese, 北海道大学 林和夫 Kazuo Hayashi 他11 南稜より1月15日 池上宏一 Koichi Ikegami, 石村明也 Akinari Ishimura, 花井修 Osamu Hanai, 浜名純 Jun Hamana, Ang Pemba (Sherpa) が冬期初登頂をなす。第二次隊は 7000 m まで ●Nakamura, H.: Baruntse Expedition, 1980/1981 (Winter). HJ, 38, 162-64, 1980•81／岳人編集部：創意で踏みしめた山頂，岳人，407, 30-34, 1981•5／岩と雪，88, 37（池上宏一）／報告書／HCNL, 35, 8

② 1981年春 Japanese, 千葉大学隊沼田真，吉永英明 Hideaki Yoshinaga 他7 南稜より4月24日2人（内シェルパ1），25日3人（内シェルパ1）が登頂 ●岩と雪，88, 37（吉永英明）／AAJ, 1982, 210／Moun, 80, 13／報告書

③ 1982年秋 Swiss, Romolo Nottaris 南稜よりアルパイン・スタイルで10月2日 1人，9日2人（内女性1）登頂，Marie Hiroz は女性初登頂者となる。一部隊員4人は Makalu に向かう ●岩と雪，95, 34／AAJ, 1983, 221 (Romolo Nottaris)／Moun, 89, 12／→Makalu No. 12

④ 1983年春 Dutch, Joost Ubbink 他3 アルパイン・スタイルで西面より北稜のコル(6220 m) を経て北峰 (7057 m) に5月4日 Joost Ubbink, Edwin van Newkerk が初登頂する ●岩と雪，102, 32／AAJ, 1984, 233／Moun, 92, 9; 94, 12

⑤ 1983年秋 French, F. Faure 他5 Makalu IIを終えてから北稜より北峰に10月15日6人全員が登頂，主峰は断念 ●岩と雪，102, 32-33／AAJ, 1984, 231-33 (Frederic Faure)／

Moun, 96, 11／→Kangchungtse No. 5
⑥ 1983年秋 French Robert Mandin 他9 Barun gl. から南東稜，10月11日 6300m まで ●岩と雪，102, 33／AAJ, 1984, 233／Moun, 96, 11
⑦ 1984年春 S. Korean, Kim Byung-Joon 他6 西面から北稜（83年オランダ・ルート），4月9日1隊が北峰に，別の1隊が中央峰(7066m)まで達したが主峰までは行かず ●岩と雪，109, 41／AAJ, 1985, 256
⑧ 1984年春 International 隊，Doug Scott 他11＋トレッカー10人 Makalu BC から8日間の周遊を行いその間に，5月4日南東稜より6人(内シェルパ2)が登頂，5月3日 Baruntse の南にある Pt. 6730m＝Baruntse SE に2人が登頂 ●Scott, Doug : Multi Peak—Alpine Style. AJ, 334, 88-96, 1985／Scott, Doug : Makalu—Almost. AAJ, 59, 70-80, 1985／岩と雪，109, 41／→Makalu No. 18; Chamlang No. 2
⑨ 1984年秋 W. German Commercial 隊，Gunther Harter 他15 南東稜より10月27日7人(内シェルパ3)，28日5人，29日5人(内シェルパ1) が登頂 ●岩と雪，109, 42／AAJ, 1985, 256
⑩ 1985年秋 Italian-Swiss-W. German, Hermann Tauber 他14 南東稜より11月1日6人（内 HAP 2)，2日6人（内女性1）が登頂 ●山岳年鑑，'86, 40／AAJ, 1986, 220 (Cestmir Lukes)／Moun, 108, 13
⑪ 1985年秋 French 公募隊，Claude Jaccoux 他19 深い雪に阻まれて BC 手前から引き返す ●山岳年鑑，'86, 40
⑫ 1987年秋 French, André Mathis 他3 北東壁，10月18日 6000m まで ●山岳年鑑，'88, 58／AAJ, 1988, 195
⑬ 1987年秋 French 公募隊，Claude Jaccoux 今度もまた大雪で BC にたどりつけず登山活動なし ●山岳年鑑，'88, 58

BATURA MUZTAGH Karakorum
I峰＝7785m 36°30′39″N, 74°31′26″E
II峰＝7710m 36°31′54″N, 74°30′01″E
① 1980/81年冬 Austrian, Gustav Ammerer Furtner 他3 I峰南壁，2月17日 6300m まで ●岩と雪，88, 73／AAJ, 1982, 279 (Alois Furtner)／Alpinismus, 1981, 10
② 1983年春 Austrian, Edi Koblmüller 他9 I峰南面，76年ドイツ隊の初登ルートの左をダイレクトに登り南西稜より6月25日4人登頂 ●AAJ, 1984, 302-03 (E. Koblmüller)／Moun, 95, 10／岩と雪，102, 71
③ 1983年夏 Poland Krakow 隊，Wladyslaw Wisz 他10 8月31日主峰の東のIV峰（7500m）に南壁より Zygmunt Heinrich, Volker Stallbohm (W. German), Pawel Mularz がアルパイン・スタイルで初登頂する。9月2日3人が第2登頂 ●岩と雪，102, 70 (Nyka)／AAJ, 1984, 303 (Jozef Nyka)
④ 1983年夏 Italian, Giorgio Mallucci 他5 Hachindar Chish の南にある Sia Chhish に西面下のコル（5550m）から 6950m のコルを経て北稜を登り 7040m の最高峰に7月20日 Enrico De Luca, Giampiero Di Federico, Giorgio Mallucci が登頂，同日コルの反対側にある 6000m 峰に東稜より2人が登頂する ●AAJ, 1984, 303 (Giorgio Mallucci)
⑤ 1984年 American, Old Codgers 隊 Warton Nala の 4200m に BC をおき，周辺の 6000m 以下の峰数座に登頂する ●AAJ, 1985, 331 (Leo Le Bon)
⑥ 1984年 W. German, Volker Stallbohnn 他2 I峰失敗 ●AAJ, 1985, 329
⑦ 1984年夏 British, Steve Roberts 他4 Batura Muztagh の西端に位置する Pt. 6872m (Serei Porkush) に8月4日 Steve Roberts, Steve Pymm が初登頂する ●岩と雪，109, 82／AAJ, 1985, 329; 1986, 287／Moun, 100, 13
⑧ 1986年 13 Polish, Jerzy Tillak I峰断念 ●AAJ, 1987, 290
⑨ 1987年夏 Austrian, Theodor Kubicka 他6 I峰南稜，7月 5020m で断念 ●岩と雪，125, 103 (Theodor Kubicka)／山岳年鑑，'88, 106 (Theodor Kubicka)／AAJ, 1988, 258 (T. Kubicka)

BOJOHAGUR DUAN ASIR (ULTAR I) 7329 m
Karakorum Batura Muztagh 36°24′10″N, 74°41′43″E
II峰＝7388m 36°23′33″N, 74°42′57″E
① 1982年6〜8月 Japanese，朝霧山岳会植田宗男 Muneo Ueda 他4 I峰南西稜，8月5日南西稜のコル 6000m で断念 ●山岳，78, 124-25／岩と雪，95, 66（植田宗男）／AAJ,

1983, 280／Moun, 90, 10／HCNL 36, 29
② 1984年夏 Japanese, 広島山岳会隊大前恒雄 Tsuneo Omae 他14 Ⅰ峰南西稜，7月28日 7250 m の前衛峰を越え 7150 m のコルを経て名越実 Minoru Nagoshi, 木佐英一 Eiichi Kisa, 岡本良治 Ryoji Okamoto の3名が初登頂し，30日5人が第2登頂する ●岩と雪，109, 81（名越実）／AAJ, 1985, 329／Moun, 99, 10／HCNL, 38, 19／報告書
③ 1984年夏 British, North London Mountaineering Club, Anthony Saunders 他5 Ⅰ峰南西稜，7月17日南西稜のコル（6150 m）で広島隊と出会ったが 6900 m で断念 ●Fowler, Mick : Bojohagar. AJ, 334, 77-83, 1985／Saunders, Anthony : Bojohagur, 1984. HJ, 42, 133-43, 1984・1985／岩と雪，109, 82
④ 1985年夏 Spanish, Kike de Pablos, Jose Luis Zuloaga（ペア） Ⅰ峰南西稜 5800 m まで。なお，8月13日 Maidon Sar（6660 m）に初登頂，Shispare 北東稜試登，Lupghar Sar 南東面偵察 ●山岳年鑑，'86, 102／AAJ, 1987, 290-91（Jose Luis Zuloaga）
⑤ 1986年5〜7月 9 Japanese, 神渡湖衆隊—3 Pakistan AC 成田俊夫 Toshio Narita Ⅱ峰（南西峰），Gulkin gl. を登り6月10日 4200 m に C1 を設けたが雪崩で断念，南稜を試登30日 6200 m で断念，7月1, 2日別のルートを試みたがこれも断念，7月8日 BC 撤収 ●岩と雪，119, 94（成田俊夫）／山岳年鑑，'87, 107（成田俊夫）／AAJ, 1987, 292（Toshio Narita）

BROAD PEAK

Karakorum Baltoro Muztagh
Main＝8051 m 35°48′35″N, 76°34′25″E
中央峰＝8016 m 35°49′23″N, 76°34′15″E
北峰 ＝7536 m 35°50′01″N, 76°33′34″E
① 1981年夏 Spanish, Antoni Sors 他5 西稜初登ルート，8月5日4人登頂。しかし下降中 7300 m 地点で2人が滑落 Pujol が死亡し1人が重傷を負う ●岩と雪，88, 71／AAJ, 1982, 273（Antoni Sor）
② 1982年夏 American Howard Weaver 他3 西稜通常ルート，アルパイン・スタイルで7月17日 6250 m まで ●岩と雪，95, 63（Howard A. Weaver）／AAJ, 1983, 272（Howard A. Weaver）
③ 1982年夏 Italian, Renato Casarotto 他3 北峰 Casarotto が単独で下部岩壁帯から北西稜に挑み，7月17日 7000 m で断念 ●AAJ, 1983, 272（Renato Casarotto）／岩と雪，95, 63（Renato Casarotto）
④ 1982年夏 W. German, Peter Gloggner 他6 西稜通常ルート，7月23日4人がオーストリア隊の3人と共に登頂 ●岩と雪，95, 63／AAJ, 1983, 272（Peter Gloggner）
⑤ 1982年夏 Austrian, Hans Schell 他9 K2 登攀中，3人が7月23日上記ドイツ隊と共に西稜より登頂再び K2 に向かう ●岩と雪，95, 63／AAJ, 1983, 273（Alois Furtner）／→K2 No. 6
⑥ 1982年夏 Italian－Pakistan, Reinhold Messner 他2 Gasherbrum Ⅱ 峰に登頂後，アルパイン・スタイルで8月2日3人が登頂 ●メスナー，ラインホルト：『生きた，還った』，9章，153-59，横川文雄訳，東京新聞，1987／岩と雪，95, 63／AAJ, 1983, 271／Moun, 88, 11／→GⅡ No. 9
⑦ 1983年春 W. German, Helmut Rüdele 他4 BC 着後，意見が分れ隊長他1名は未踏の北峰を他の3人は西壁の通常ルートから主峰を目指す。主峰隊は南西スパーより5月26日 7750 m まで登る。北峰隊では5月29日隊長が単独で北峰と中央峰のコルを目指して出発，消息を絶つ ●AAJ, 1984, 291（Hubert Weinzierle）／岩と雪，102, 64（Hubert Weinzierle）
⑧ 1983年春 British, Doug Scott 他11 Urdukas に BC をおき Lobsang Spire, Muztagh Pass 付近で活動後 K2 南稜を試みる前に2人ずつ5組に分かれて通常ルートをアルパイン・スタイルで登る。6月26日2組4人，28日2人が登頂，4番目のペアは頂上手前で高山病のため断念，Peter Thexton が肺水腫で死亡，5番目のペアはこの事故のため断念 ●Scott, Doug and Alan Rouse : Karakorum Alpine Style. Moun, 93, 26-33, 1983／Child, Greg : On Broad Peak. Moun, 94, 18-20, 1983・1984／Scott, Douglas : Lobsang Spire. AAJ, 58, 28-36, 1984／AAJ, 1984, 293-94／岩と雪，102, 64-65
⑨ 1983年春 Italian, Renato Casarotto, Goretta Casarotto 82年の右手の氷雪帯から直接北西稜上部に達するラインをとり6月28日 R. Casarotto が北峰に単独初登頂する（登り7日，下降3日間） ●AAJ, 1984, 289-91（Renato Casarotto）／岩と雪，102, 66-67（Re-

nato Casarotto)／Moun, 94, 11
⑩ 1983年春 Swiss, Stefan Wörner 他8 Gasherbrum I, II 峰に登頂後，西稜より6月30日4人，7月2日2人登頂 ●岩と雪, 102, 65 (S. Wörner)／→Gasherbrum I No. 7
⑪ 1983年春 Polish Women 隊, Anna Czerwinska, Krystyna Palmowska 西稜通常ルート，6月30日 C3 をスイス隊より遅れて出発 Palmowska が単独で登頂, Czerwinska は頂上と前峰の中間（前衛峰）から引き返す ●Palmowska, Krystyna : Broad Peak. AJ, 333, 11-15, 1984／パルモフスカ，クリスティナ：女二人，八千メートル，岩と雪, 106, 64-68, 1984／岩と雪, 102, 65 (Jozef Nyka)／AAJ, 1984, 293 (Jozef Nyka)／Moun, 95, 10
⑫ 1983年夏 Dutch, Ronald Naar, Gerard van Sprang（ペア）高所順応のため Godwin Austin gl. の東, Savoia gl. と Khalkhal gl. の間にある Pt. 6393 m に南 Khalkhal gl. より東稜を登り7月26日登頂（初登頂？），通常ルートをアルパイン・スタイルでポーランド女性隊，スイス隊に1日遅れて取り付き7月1日 8000 m で強烈な嵐にあい引き返す。この後2回目は 7100 m まで，3回目は 6200 m で断念 7月19日 BC 撤収 ●岩と雪, 102, 65-66 (G. van Sprang)／AAJ, 1984, 291-93 (Ronald Naar)／Moun, 94, 11
⑬ 1983年夏 French, Pierre Pujos 試登
⑭ 1984年春 French, Michael Vincent 他5 5月28日～6月2日，6月8日～10日と2回試登し，7800 m まで登る ●AAJ, 1985, 312
⑮ 1984年春 International, Stefan Wörner 6ヶ国27人 通常ルートの西稜より 6月26日スイス人2，コロンビア人1人が登頂，7月13日 Rüdiger Schleypen が他のパーティの3人と共に登頂，7月18日 Kurt Diemberger とイギリス人女性 Julie Tullis が登頂 ●岩と雪, 109, 75 (S. Wörner)／Moun, 99, 10／→K2 No. 12
⑯ 1984年春 Swiss—W. German, Harald Navé 他4 Chogolisa 登頂後，6月26日2人，7月13日1人登頂 ●岩と雪, 109, 75-76 (H. Navé)／→Chogolisa No. 2
⑰ 1984年春 Italian, Valsesia 隊, Gianni Calcagno 他5 西稜より6月27日3人登頂，7月13日2人が K2 国際隊 (S. Wörner 隊) の R. Schleypen 及びスイス・ドイツ隊の1人と共に登頂 ●岩と雪, 109, 75 (G. Calcagno)
⑱ 1984年夏 Polish, Janusz Majer 他3 西稜，7月14日3人が登頂する。同日 Krzysztof Wielicki は BC を午前0時20分に出発，14時中央峰とのコル（7800 m），頂上直下で登頂を終えて下山してきた3人にあい16時頂上に立ち22時30分 BC に帰る。標高差 3150 m，8000 m 峰を1日で往復する ●Wielicki, Krzysztof : Broad Peak Climbed in One Day. AJ, 334, 61-63, 1985／AAJ, 1985, 315 (Krzysztof Wielicki)／岩と雪, 109, 76 (J. Nyka)
⑲ 1984年夏 Polish, Voytek Kurtyka, Jurzy Kukuczka 北峰～中央峰～主峰の縦走，アルパイン・スタイル，7月13日北峰西稜北面の側壁にある雪のクーロワールに取り付き西稜 6300 m に出る。15日北峰を越す，16日中央峰に立ち主峰とのコル（7800 m）でビバークし7月17日主峰を往復，18日 BC ●Kurtyka, Voytek : The Abseil and the Ascent. HJ, 42, 120-24, 1984・1985／クルティカ，ヴォイチェフ：ブロード・ピーク，岩と雪, 111, 42-46, 1985／岩と雪, 109, 76-77 (Wojciech Kurtyka)／AAJ, 1985, 313-15 (Wojciech Kurtyka)／Moun, 99, 10-11; 100, 13
⑳ 1984年夏 French, Bernard Moreau 他8 西稜 アルパイン・スタイル，3ビバークの後8月5日4人登頂（前衛峰まで？）●岩と雪, 109, 77; 117, 96-97 (Z. Kowalewki)／Moun, 100, 13／AAJ, 1985, 315-16 (Bernard Moreau)
㉑ 1984年夏 Austrian—W. German, Robert Schauer 他7 通常ルート，8月8日2人登頂 ●岩と雪, 109, 77／AAJ, 1985, 316 (Robert Schauer)
㉒ 1984年 W. German, Hubert Schmidbauer 失敗 ●AAJ, 1985, 312
㉓ 1985年春 Swiss, Ruth Steinmann 他7 西稜，5月15日 7300 m まで ●山岳年鑑, '86, 97 (R. Steinmann-Hess)／AAJ, 1986, 269 (Ruth Steinmann)
㉔ 1985年夏 Pakistani Army School of Mountain Warfare & Physical Training 隊 Rayyaz Hussain 他6 通常ルート，7月31日3人登頂 ●山岳年鑑, '86, 97／AAJ, 1986, 268 (Jozef Nyka)／Moun, 106, 10
㉕ 1985年春 Eric Escoffier (French), Stephane Schaffter (Swiss), K2 後，西稜より1日での登頂を計画していたが悪天候のため

断念（無許可） ●山岳年鑑，'86，97／→K2 No. 14

㉖ 1985年夏 Japanese，関西カラコルム隊賀集信 Shin Kashu 他10 Masherbrum 登頂後，アルパイン・スタイルで西稜より8月12日6人登頂 ●和田城志：ブロード・ピーク登頂日誌，岩と雪，114，36-39，1986／村井葵：マッシャ，ブロード・ピーク連続登攀，岳人，462，76-80，1985・12／山岳年鑑，'86，97／AAJ，1986，275-77（Sadao Tambe）；1987，278

㉗ 1985年夏 French，Liliane and Maurice Barrard 西稜アルパイン・スタイル，1回目8月14日 7950 m，2回目20日 7800 m，3回目26日 7300 m，4回目 Maurice が単独で 7300 m まで ●山岳年鑑，'86，97（L. Barrard）／AAJ，1986，268（L. and M. Barrard）

㉘ 1985年夏 Polish women，Wanda Rutkiewicz，Barbara Kozlowska. Swiss，Stéphane Schaffter 西稜，8月19日 Rutkiewicz は単独でコル直下 7750 m まで登る。20日 Kozlowska が 7000 m より BC へ単独下山中氷河上の激流に転落死亡する。Schaffter のワンデイ・アッセントの試みも失敗 ●山岳年鑑，'86，97（J. Nyka）／AAJ，1986，269（J. Nyka）／Hima，17-11，167

㉙ 1985年 Canadian，Daniel Griffith 西稜失敗 ●山岳年鑑，'86，98

㉚ 1986年春 Italian Quota 8000 隊，Agostino Da Polenza 他19 K2のSSW稜が主目標だが Broad Peak に向かった班は通常ルートの西稜より6月20日3人が登頂，Josef Rakoncaj は 16 mm カメラが凍ったため前峰（8030 m）より引き返す。また Benoit Chamoux は19日夕刻BCを立ち20日夕刻までに頂上を往復24時間以内の登頂に成功する。22日 J. Rakoncaj が単独登頂する ●岩と雪，119，93／山岳年鑑，'87，95（J. Raconcaj，A. Polenza）／Moun，112，10／AAJ，1987，274（Josef Rakoncaj）／→K2 No. 19

㉛ 1986年春 International 隊 K.M. Herrligkoffer 他15 K2南壁を目指したが隊長が高山病になり下山したためもあって隊が分裂大半が Broad Peak へ転進する。西稜通常ルートより6月21日スイス人3人，オーストリア人，西ドイツ人各1人の計5人が登頂，22日ドイツ人2人が前峰に登頂，7月6日ドイツ人ペアと Balti のポーター1人が前峰まで登る ●岩と雪，119，93／山岳年鑑，'87，96-97（K.M. Herrligkoffer）／Moun，112，10／AAJ，1987，275-76（Norman Dyhrenfurth）／→K2 No. 20

㉜ 1986年夏 Spaniards，Sebastian Alvaro 他6 Chogolisa 北稜を終えてからアルパイン・スタイルで西稜通常ルート，7月6日3人（内パキスタン人1）が登頂 ●山岳年鑑，'87，97／Moun，112，10／AAJ，1987，279-81（Gregorio Ariz）／Chogolisa No. 4

㉝ 1986年夏 W. German-Swiss，Franz Piffl 他7 スイス・アイゼリン・スポーツ公募隊 Frank Tschirky 他7名が許可を得られなかったため合同して両隊ほぼ併行して行動する。通常ルートで7月7日スイス隊1人，西ドイツ隊1人が登頂，2人が前峰で引返し，西ドイツ隊の1人が中央峰（8016 m）に登頂，8日にもスイス隊の1人が中央峰に登頂，スイス，西ドイツの各1人が前峰で引き返す ●Piffl，Franz: Broad Peak，1986. HJ，44，205-07，1986・1987／山岳年鑑，'87，97／Moun，112，10-11／AAJ，1987，277-78

㉞ 1986年夏 Yugoslav，Viktor Groselj 他13 西稜通常ルート，7月28日2人，29日5人（Tomo Cesen は BC より19時間で単独登頂），30日1人，8月4日4人，計12人登頂 ●岩と雪，119，93／山岳年鑑，'87，97（V. Groselj）／Hima，18-6，88（V. Groselj）／Moun，111，10／AAJ，1987，276-77（Tomo Cesen）／→K2 No. 26；GII No. 34

㉟ 1986年夏 W. German，Siegfried Hupfauer 他3 西稜通常ルート，8月16日オーストラリア陸軍隊のC4より1人，C2より3人登頂 ●山岳年鑑，'87，97／AAJ，1987，278／→GII No. 39

㊱ 1986年夏 Australian Army 隊，Major Patrick A. Cullinan 他12 88年 Everest のトレーニングのため入山，西稜通常ルート，8月16日8人登頂 ●山岳年鑑，'87，97／AAJ，1987，278

㊲ 1986年 Polish woman，Wanda Rutkiewicz K2登頂後，西稜線通常ルートを単独試登 ●AAJ，1987，278

㊳ 1986年夏 Scottish，Andy Fanshawe British Chogolisa 隊の3人が帰途 Broad Peak の西稜通常ルートを登る。8月中旬頂稜で雪庇の崩落のため Liam Elliott が墜死行方不明となり断念 ●山岳年鑑，'87，97／Moun，112，11／AAJ，1987，278

㊴ 1986年 Swiss 公募隊 Manfred Lorenz 他5 西稜失敗 ●→Gasherbrum I No. 20
㊵ 1987年春 Swiss, Bruno Honegger 他4 Norbert Joss が先行パーティのキャンプは勿論なんの恩恵も受けずに単独2日間で5月29日登頂する。6月7日2人登頂 ●Moun, 117, 7／山岳年鑑, '88, 98／Der Bergsteiger Dec. 1987／AAJ, 1988, 248
㊶ 1987年夏 British-American-Australian, Doug Scott 他5 K2南壁を目標に入山したが7月21日〜23日 Scott 父子を除く4人が Broad Peak に向かい 6800 m まで登る。7月下旬 Scott 父子は 6500 m まで登る ●→K2 No. 30
㊷ 1987年夏 British, ノーマン・クラウチャー 7月両膝下が義足の彼は 6500 m のビバーク地で D. Scott の国際隊とあうが結局ここまで ●→K2 No. 30
㊸ 1987年夏 French, Pierre Mazeaud 他4 8月 西稜 7300 m まで ●山岳年鑑, '88, 98
㊹ 1987年夏 Spanish, Josep Estruch 他5 中央峰の許可で入山したが連絡官の承認を得て主峰に変更, 3月29日2人登頂 (前峰?) ●岩と雪, 126, 99／山岳年鑑, '88, 98／Moun, 118, 5／AAJ, 1988, 248-50 (J. Estruch)
㊺ 1987年夏 Norwegian, Ragnhild Amundsen 他5 西稜, 7月21日 7000 m まで, 数日後 7300 m で断念 ●山岳年鑑, '88, 98
㊻ 1987年夏 French, Languedoc 隊, Jean Louis Barbet 他6 西稜, 7月6日 7300 m, 16日 7500 m まで ●山岳年鑑, '88, 98 (J.L. Barbet)／AAJ, 1988, 248
㊼ 1987年 British, Mark Hallum 他3 西稜, 7300 m まで ●山岳年鑑, '88, 98
㊽ 1987年 Yugoslav, Slavko Cankar 他3 6月16日 Trango Nameless Tower (6251 m) の南東壁を初登攀してから入山, そのため日数が足りず西稜 7500 m で断念 ●山岳年鑑, '88, 98／AAJ, 1988, 248
㊾ 1987年 Mexican, Antonio Cortes 他7 中央峰の許可を得ていたが主峰とのコルまで行けず 7000 m で断念 ●山岳年鑑, '88, 98
㊿ 1987/88年冬 国際隊 Andrej Zawada 他 K2の冬期初登頂を目指していた国際隊の Maciej Berbeka (Polish) が西稜より3月6日冬期初登頂 (アルパイン・スタイルで前進キャンプを用いず一気にアタック, 1人は疲労のため途中で断念) ●→K2 No. 35／Moun, 121, 11／岩と雪, 129, 96 : 130, 99-100

CHAMAR 7187 m

Nepal Sringi Himal 28°33′19″N, 84°56′43″E
① 1983年春 7 Japanese, 慶応大学-3 Nepaleses 宮代良治 Ryoji Miyashiro 他9 東稜の北斜面より東稜 (53, New Zealanders), 5月23日 7050 m まで。同日 C2=5600 m に降りたところテントが雪崩の下敷きになっており, テントに残っていた碇宏一 Koichi Ikari 隊員が死亡していた ●岩と雪, 97, 8; 102, 40／山岳, 79, 44／AAJ, 1984, 246／登高行 18号

CHAMLANG 7319 m

Nepal Mahalangur Himal, Barun group 27°46′30″N, 86°58′57″E
① 1981年秋 British-Italian-Nepalese, Doug Scott, Reinhold Messner 他 Makalu 南東稜に挑む前の順応のために北面の Chamlang gl. より9月26日主峰上のコルに出て Pt. 7010 m に登頂したが主峰はあきらめる ●Moun, 83, 10／岩と雪, 87, 48-50 (Douglas Scott); 88, 38 (Douglas Scott)／AAJ, 1982, 208-10 (Douglas Scott)
② 1984年春 International, Doug Scott 他11＋トレッカー10 Baruntse を終えて, 5月16日 D. Scott, Michael Scott (息子), Jean Afanassieff, Ang Phurba がアルパイン・スタイルで北壁〜北東稜を登り東峰 (7235 m) に初登頂し, さらに中央峰 (7180 m) へ縦走し再び北面を下る一周を6日間で成就する ●岩と雪, 109, 42 (D. Scott)／→Makalu No. 18; Baruntse No. 8
③ 1986年秋 S. Korean-Nepalese, Woo Jong-Duk 他17 南稜 (北大・84年 D. Scott route), 10月10日5人 (内 Neapalese 2) 登頂 ●山岳年鑑, '87, 53／HCNL, 40, 13／AAJ, 1987, 226 (M.J. Cheney)
④ 1986年秋 13 Japaneses, 酪農学園大学-3 Nepaleses 新谷暁生 Akio Shinya 西稜初登攀, 10月16日擲見理 Osamu Kushimi, Wangar Sherpa が登頂 ●岩と雪, 121, 80 (新谷暁生)／山岳年鑑, '87, 53／Hima, 18-8, 128／HCNL, 40, 13／AAJ, 1987, 227 (Akio Shinya)
⑤ 1987年春 American, Julliard Mountain Club 隊, Richard Hartshorne 他9 北東稜か

ら東峰 (7250 m), 5月2日 6750 m まで, 24日断念 ●Hima, 19-3, 46／山岳年鑑, '88, 58／AAJ, 1988, 195 (R. Hartshorne)

CHANGTSE (ZHANGZI) 7553 m

Tibet Mahalangur Himal, Khumbu group 28°01′31″N, 86°54′51″E

① 1982年秋 W. German, Oberstdorf 隊, Eduard Geyer 他10 Rongbuk gl. より東稜, 10月14日 Udo Zehetleitner が初登頂, 16日4人登頂 ●岩と雪, 102, 26／AAJ, 1983, 294 (Eduard Geyer)／Moun, 97, 11

② 1983年春 Chilean Qomolangma 隊の Gino Casassa が East Rongbuk gl. よりドイツ隊ルートのやや左手のダイレクトなラインで東稜に取り付き20時間のアルパイン・スタイルで5月14日単独登頂する ●岩と雪, 102, 26／AAJ, 1984, 310 (Gino Casassa)／Moun, 97, 11／→Everest No. 19

③ 1986年春 日中合同登山技術研修会隊 Japan-China Joint Mountaineering Technics Training Expedition 日本側＝長野県山岳協会・堀内利美 T. Horiuchi 他16, 中国側＝中国登山協会・貢布他26 (内支援隊5, 報道3) 北面から東稜, 5月10日 8 Japaneses, 8 Chineses (内 Tibetan woman 1) が登頂, 11日 8 Chineses が登頂 ●宮本義彦：チョモランマ北峰・章子峰登頂, 岳人, 471, 63-66, 1986・9／岩と雪, 118, 83 (堀内利美)／山岳年鑑, '87, 45-46 (堀内利美)／AAJ, 1987, 304-05

④ 1986年 American, Ed Webster, Roger Marshall の Everest 単独行を撮影するためカメラマンとして同行していた彼が北東稜を15時間で単独登頂する ●山岳年鑑, '87, 46／Moun, 112, 10／→Everest No. 63

⑤ 1987年秋 Australian, Glen Nash, Rob Turner が North Face の日本隊ルートを4日間のアルパイン・スタイルで登り, 9月28日登頂 ●Moun, 119, 8／山岳年鑑, '88, 47／AAJ, 1988, 272 (Louis A. Whitton)

⑥ 1987年秋 Irish Joss Lynam 他10 Rongbuk gl.～Zhang La～南稜, 10月14日 7200 m まで ●Lynam, Joss : Zhangzi-Autumn, 1987. HJ, 44, 15-23, 1986・1987／AAJ, 1988, 272-74 (J. Lynan)

CHAUKHAMBA I 7138 m

Garhwar Gangotri group 30°44′59″N, 79°17′28″E

II峰＝7068 m 30°43′56″N, 79°16′53″E, III峰＝6974 m, IV峰＝6854 m

① 1983年秋 Indian Assam Mountaineering Association Ajit Kalita 他9 ノース・フェースより 6450 m のコルをへて9月18日4人(内シェルパ1) 登頂 ●AAJ, 1984, 264／IM, 12, 183／HCNL, 38, 3

② 1987年春 Indo Tibetan Border Police 隊, Vinod K. Dandona 他37 Bhagirath Kharak gl. より5月31日 6人と Bhutia 犬2匹が登頂, 内5人は頂上よりスキーで BC に下り, 他の1人は犬と共に3日かかって BC に帰る ●岩と雪, 126, 96／Moun, 119, 9／Hima, 19-4, 59-60／山岳年鑑,'88, 81／HCNL, 41, 37／AAJ, 1988, 227

CHIRING WEST 7025 m

Karakorum Panmah Muztagh 36°26′N, 80°18′E

① 1986年春 Japanese, 横浜山岳会重谷務 Tsutomu Omotani 他9 Chiring gl. より西峰 (7125 m) 南西稜上に6月22日 C2＝5560 m を設けたが, 25日神田久雄 Hisao Kanda 隊員が中間デポ (4870 m) 手前でヒドン・クレバスに転落行方不明となる。このため断念 ●岩と雪, 118, 86; 119, 94 (重谷務)／山岳年鑑, '87, 103 (重谷務)／報告書／AAJ, 1987, 288／HCNL, 40, 23

CHO AUI (QOWOYAT) 7352 m

Nepal-China Khumbu group 28°04′14″N, 86°38′10″E

① 1986年秋 Japanese, 日本ヒマラヤ協会八嶋寛 Hiroshi Yashima 他9 Gyabrag gl.～北西稜の 6519 m のコルを経て10月12日遠藤幸寿Yukitoshi Endo, 志小田美弘 Yoshihiro Shikoda, 江村克志 Katsushi Emura, 松木克雄 Katsuo Matsuki が初登頂し, 14日第二次隊の6人が登頂する ●HAJ, チョー・アウイ登山隊：チョーウイに全員登頂, 岳人, 476, 61-63; 81-84, 1997・2／Yashima, Hiroshi : Cho Aui Expedition, 1986. HJ, 44, 163-65, 1986・1987／岩と雪, 120, 92／山岳年鑑, '87, 46 (八嶋寛)／AAJ, 1987, 305／ヒマラヤ No. 182／報告書, 1987

CHOGOLISA
Karakorum Masherbrum Range
I峰=北東峰 7654 m 35°36′44″N, 76°34′23″E
II峰=南西峰 7554 m 35°36′33″N, 76°33′55″E
① 1983年春 W. German, Georg Brosig 他5 北面初登ルートより, 6月14日3人登頂(スキー使用) ●岩と雪, 102, 68/AAJ, 1984, 289 (Georg Brosig)/Moun, 95, 10
② 1984年春 Swiss-W. German, Harald Navé 他4 Vigne gl. 源頭より 6450 m のコルを経て北西壁右よりを登り6月10日登頂, 次いで Broad Peak へ向かう ●岩と雪, 109, 73 (H. Navé)/AAJ, 1985, 308-09 (Hans Zebrowski)/→Broad Peak No. 16
③ 1984年夏 French, Christian Blot 他7 Bueten gl. 奥のコル 5550 m を経て南西フェースから南稜に出て, 7月26日 Jean-Marie Galhiche, Eric Monier, Philippe Dubois, Brigitte Aucher の4人が北東峰に登頂。Aucher と Dubois がまずスキーで滑降, 次いで Galhiche と Monier が登路の東斜面を滑降する。途中雪崩の跡を認め頂上斜面下に横たわる Aucher と Dubois の遺体を発見する。このため第二次アタックは中止 ●岩と雪, 109, 73/AAJ, 1985, 309-10 (Christian Blot)
④ 1986年春 Spanish, Sebastian Alvaro 他7 Upper Baltoro gl. より北東稜を登り, 6月22日2人, 23日2人が北東峰に登頂, 頂上で日本人形を発見する。Broad Peak へ ●岩と雪, 120, 101 (S. Alvaro)/山岳年鑑, '87, 91 (S. Alvaro)/→Broad Peak No. 32/AAJ, 1987, 279-81 (Gregorio Ariz)/山, 514, 3, 1988 (平井一正)
⑤ 1986年夏 British, Andy Fanshawe 他4 南西峰〜北東峰初縦走, アルパイン・スタイルで南西峰に北西壁から南西稜を経て9月14日登頂, そのまま北東峰へ縦走し北東面初登ルートを下り15, 16日5人 (Liam Elliot, Hamish Irvine, Ulric Jessop, Simon Lamb, Andrew R. Fanshawe) 全員BCに下る ●Fanshawe, Andy : Chogolisa Diary. Moun, 113, 24-29, 1987/Fanshawe, Andy : Walking Conway's Great White Roof. AJ, 336, 74-78, 1987/AAJ, 1987, 281 (A.R. Fanshawe)/Moun, 112, 11/山岳年鑑, '87, 91-92/HCNL, 40, 22
⑥ 1987年夏 French, Lyonnaise 隊, Jean Etienne Hénault 他5 Chogolisa 北稜上の6851 m 峰から派生する支稜に取り付き8月11日 7300 m で断念したが, 再度アタックして13日2人登頂する ●山岳年鑑, '88, 94-95 (J.E. Henault)/AAJ, 1988, 250 (J.E. Hénault)

CHO OYU (ZHOUAOYOU) 8201 m
Nepal Mahalangur Himal, Khumbu group
28°05′37″N, 86°39′43″E
① 1981年春 Japanese, 日本勤労者山岳連盟-Nepalese Police 隊豊田重彦 Shigehiko Toyota, 小松猛 Takeshi Komatsu 他28+Yogendra Bahadur Thapa 他13 4月21日南東壁を断念して南稜に転進, 5月21日 7120 m まで ●山と仲間, 1981年11月号, 12月号/岩と雪, 88, 44 (奥谷恵美子)/AAJ, 1982, 220/Moun, 80, 12
② 1982年春 Austrian, Wolfgang Nairz 他6 南東壁78年 Koblmuller route, 5月19日 C2=6500 m で雪崩のため Reinhard Karl が死亡し, Nairz 隊長も重傷を負う。このため断念 ●岩と雪, 95, 38/AAJ, 1983, 232-33 (Oswald Ölz)/Moun, 86, 11
③ 1982/83年冬 Italian, Reinhold Messner (イ6, ポ1, オ1他トレッカー6) 12月18日南東壁, バットレスの最上部に C3=7500 m を設けたが雪崩の危険性高く断念, 21日 BC ●AAJ, 1983, 233 (Oswald Ölz)/Moun, 90, 9/岩と雪, 97, 8; 102, 36
④ 1983年春 Italian-W. German-Nepalese, Reinhold Messner 他7 アルパイン・スタイルで南西壁を登り, 5月5日登頂(3人) ●メスナー, ラインホルト:『生きた, 還った』, 10章, 169-75, 横川文雄訳, 東京新聞, 1987/岩と雪 97, 8; 102, 36/AAJ, 1984, 243/Moun, 92, 9
⑤ 1983年秋 11 Japaneses, 福岡登山研究会-3 Nepaleses 重藤一美 Kazumi Shigefuji Ngojumbakang から縦走する計画であったが失敗 ●→Ngojumbakang No. 3
⑥ 1983年秋 4 Italians-3 Nepaleses, Toni Klingendrath 南稜, 10月6日, 12日に 6500 m まで達したが, 20日断念 ●岩と雪, 102, 37/AAJ, 1984, 243
⑦ 1983年秋 W. German, ルディ・クリングル他2 西稜, 11月15日2人登頂, 17日ルディ・クリングルが単独登頂 ●Saleki, Mischa: "Ailein zum Cho Oyu"/岩と雪, 118, 81 (J. Nyka)/ベルクヴェルト, 1986年2月号

⑧ 1984年春 Vera Komarkova (USA), Dina Sterbova (Czechoslovakia) 南西バットレス (variant of Messner's route) を登り5月13日 Komarkova, Sterbova, Ang Rita Sherpa, Nuru Sherpa の4人全員登頂 (女性初登攀) ●Komarkova, Vera : Cho Oyu. AAJ, 59, 88-93, 1985/岩と雪, 109, 48 (V. Komarkova)/Moun, 99, 8-9

⑨ 1984年春 8 Britons-1 American-1 New Zealander, Steven Berry Gokyo 側から南壁〜東稜の新ルート, 5月17日 7750m まで ●Berry, S.K. : The Bristol Cho Oyu Expedition, 1984. HJ, 41, 36-44, 1983・1984/AAJ, 1985, 274 (M.J. Cheney and E. Hawley)/岩と雪, 109, 48

⑩ 1984年秋 5 Spanish-1 French-3 Nepaleses, Lluis Belvis del Rio 西北西稜, 9月20日4人 (内シェルパ1), 21日2人登頂 (5850m で春の Czech-American Ladies 隊のキャンプサイト, 6000m で Messner 隊のビバーク地を通る) ●AAJ, 1985, 275 (Jordi Pons)/岩と雪, 109, 48

⑪ 1984年秋 Yugoslav, Matjaz Pecovnik 南稜アルパイン・スタイル, 10月27日 7700m まで ●岩と雪, 109, 48/AAJ, 1985, 275/Moun, 102, 14

⑫ 1984/85年冬 8 Polish-4 Canadians, Andrzej Zawada 南東ピラーの新ルートより冬期初登頂, 84年 Yugoslav 隊試登の南東稜に取り付き85年2月12日 Maciej Berbeka, Maciej Pawlikowski が登頂, 15日 Jerzy Kukuczka, Zygmunt A. Heinrich が登頂する ●Zawada, Andrezej : Cho Oyu's Three-kilometer-High Face. AAJ, 60, 7-13, 1986/山岳年鑑, '86, 50/AAJ, 1985, 275 (J. Nyka)/Moun, 102, 16

⑬ 1985年春 Tibetan Mountaineering Association 成天亮他83 初登ルートの西稜, 5月1日9人 (全員 Tibetan) 登頂 ●山岳年鑑, '86, 28/AAJ, 1986, 234 (Ying Dao-Shui)/岩と雪, 117, 76

⑭ 1985年春 Spanish, Xabier Garaioa 他6 初登ルート Nangpa La〜西北西稜, 5月15日4人, 17日3人登頂。医学調査も行う ●山岳年鑑, '86, 50-51/AAJ, 1986, 234 (Xabier Garaioa)/Moun, 105, 10

⑮ 1985年春 12 Poles-2 Americans, Waclaw Ottreba Ngojumba Kang とのコルよりアメリカ側の2人は北東稜を登り7800m で大きなジャンダルムに阻まれて断念 Ngojumba Kang に向かう。一方ポーランド側隊員2人は Nangpa La から西北西稜をアルパイン・スタイルで登り5月28日登頂する ●山岳年鑑, '86, 51 (J. Nyka)/AAJ, 1986, 234-35/→Ngojumba Kang No. 4

⑯ 1985年秋 Japanese, カトマンズクラブ金沢健 Ken Kanazawa 他3 Nangpa La〜西北西稜, 10月3日3人が無酸素登頂する (日本人初登頂, 三谷統一郎 Toichiro Mitani, 中西紀夫 Norio Nakanishi, 北村貢 Mitsugi Kitamura), 三谷統一郎 : チョー・オユー, 一九八五, 山岳, 81, 33-37, 1986/山岳年鑑, '86, 51-52/AAJ, 1986, 235/Maun, 108, 11/カトマンズクラブ通信, No. 6, No. 7

⑰ 1985/86年冬 2 Americans-2 Czechoslovakians-2 Canadians, Roger Marshall 3組のペアにわかれて西稜をアルパイン・スタイルで登る。12月5日2人登頂。あとの2組は7400m と 7000m で断念 ●AAJ, 1986, 235-36 (Roger Marshall)/Moun, 108, 13/山岳年鑑, '86, 52

⑱ 1986年春 Polish Zakopane 隊, Ryszard Gajewski 他7 西稜 Messner's route に C2=6800m まで設けたが, 同ルートの許可を持ったアメリカ隊の抗議にあい南西ピラーに転進, 7750m で Tichy's route に合し4月29日2人, 5月1日1人, 3日2人が登頂 ●AAJ, 1987, 240 (J. Nyka)/Hima, 18-2, 31-32; 18-7, 112/Moun, 110, 10/岩と雪, 118, 80/山岳年鑑, '87, 63-64

⑲ 1986年春 International Stefan, Worner 他11 Ngojumba Kang の南面から東稜 (84年 British, 85年 Poles-Americans が 7950m まで試登) を 6400m で断念, 南西面に転進, 上記ポーランド・ルートより5月5日2人, 9日2人, 10日1人, 11日1人, 16日1人計7人が登頂 (無酸素, セミ・アルパイン・スタイル) ●AAJ, 1987, 240-41 (M.J. Cheney)/Moun, 110, 10/岩と雪, 118, 80/山岳年鑑, '87, 64/Hima, 18-2, 31; 18-3, 44; 18-7, 111

⑳ 1986年春 American Cowboys 隊, James Frush 他7 Gyabrag gl. より北西稜, 5月11日2人登頂 (酸素, HAP なし) ●Frush, Jim : Cowboys on Cho Oyu, 1986. HJ, 43, 114-16, 1985・1986/AAJ, 1987, 241-42(Jaems Frush)/Hima, 18-2, 31; 18-7, 111/Moun,

110, 10; 111, 11／岩と雪，118, 80／山岳年鑑，'87, 64

㉑ 1986年春 W. German 西稜から単独で5月12日登頂（詳細不明）

㉒ 1986年秋 Japanese, 北九州ヒマラヤ同人隊白石宣夫 Norio Shiraishi 他7 Ngojumba Kang から東稜，9月29日 C3=7500 m を設けたが断念，Nangpa La を越して西面に転進，通常ルートをアルパイン・スタイルで登り，10月16日日野悦郎 Etsuro Hino が単独登頂する ●岩と雪，121, 81-82（山下健夫）／山岳年鑑，'87, 64（山下健夫）／HCNL, 40, 11／AAJ, 1987, 242 (Nobuo Shiraishi)／Hima, 18-11, 174／→Ngozumba Kang No. 5

㉓ 1986年秋 Swiss, Erhard Loretan 他2 西壁基部の ABC より 7300 m でポーランド・ルートに合する新ルートを 7200 m まで登る。10月20日強風のため一旦下降を決意し，下降中 6800 m 付近で Pierre-Alain Steiner が強風でステップを踏み外して転落3日後に死亡する ●AAJ, 1987, 242 (Erhard Loretan)／Hima, 18-11, 174／Moun, 114, 12／岩と雪，121, 82／山岳年鑑，'87, 64

㉔ 1987年春 Chilean Mauricio Purto Arab 他3 Nangpa La を越して西北西稜，4月29日ヨーロッパ混成隊の2人と共に4人（内シェルパ2）が登頂。第二次隊は5月1日～3日まで C5=7600 m にいたが好天気訪れず断念 ●Purto, Dr Mauricio : Cho Oyu, 1987. HJ, 44, 68-72, 1986・1987／Moun, 116, 9; 118, 5／Hima, 19-3, 36-37; 19-4, 63-64／岩と雪，123, 94／山岳年鑑，'88, 66／AAJ, 1988, 210 (M. Purto)

㉕ 1987年春 International Commercial 隊 Marcus Schmuck 他28 西北西稜，4月29日 2人がチリ隊の4人（内シェルパ2）と共に登頂，つづいて5月5日3人，6日1人，7日1人，8日1人，9日4人が登頂する（全員無酸素，HAP なし） ●Moun, 116, 9／山岳年鑑，'88, 48 (M. Schmuck)／HCNL, 41, 47／AAJ, 1988, 274 (M. Schmuck)

㉖ 1987年春 American Robert J. Watters 他5 西北西稜通常ルート，4月30日 7600 m に C7 を設けたが，中国官憲とのいざこざから5月10日断念 ●Watters, Robert J. : Cho Oyu, 1987. HJ, 44, 72-75, 1986・1987／Hima, 19-3, 37／Moun, 118, 5／山岳年鑑，'88, 65-66／HCNL, 41, 30-31／AAJ, 1988, 209-10 (R. Watters)

㉗ 1987年春 Dutch, Bart Vos 北北西壁を試登 6700 m で断念。隊長はヨーロッパ公募隊に合同して5月12日単独登頂 ●→No. 25

㉘ 1987年春 French, Jean Clémenson 他1 無許可登山 西北西稜 5800 m まで ●山岳年鑑，'88, 66

㉙ 1987年秋 Japanese カモシカ同人隊高橋通子 Michiko Takahashi 他5+報道4 西北西稜，9月20日2人，21日6人（内シェルパ2），22日5人（内サーダー及びシェルパ2）登頂（3人を除いて全員無酸素，髙橋和之隊員は頂上よりパラパントに成功する） ●カモシカ同人チョー・オユー登山隊：ヒマラヤ 8000 m 峰チョー・オユーの登頂と滑空，岳人，486, 63-67, 1987・12／早川晃生：私は登り，あなたは飛んだ，岳人，486, 92-97, 1987・12／髙橋和之：ヤマケイ・ジャーナル，山と溪谷，629, 71-73, 1987・12／岩と雪，125, 95／Moun, 119, 8／山岳年鑑，'88, 71-73（大蔵喜福）／AAJ, 1988, 274-75 (Mrs. M. Takahashi)

㉚ 1987年秋 French, Thierry Renard 無許可登山，西北西稜，カモシカ同人隊のルートをたどり同隊の登頂終了をまって単独登頂，スキー滑降に成功する ●岩と雪，125, 95／山岳年鑑，'88, 49

㉛ 1987年秋 Polish, Tadeusz Karolczak, Aleksander Lwow 無許可登山，Nangpa La を越えて南面から西北西稜，9月30日登頂（取り付きから頂上まで12時間） 山岳年鑑，'88, 66

㉜ 1987年秋 Swiss, Norbert Joos 他2 南稜アルパイン・スタイル，1回目 7600 m のビバーク地まで。2回目10月2日 7100 m まで ●岩と雪，127, 87／山岳年鑑，'88, 66／HCNL, 41, 32／AAJ, 1988, 210

㉝ 1987年秋 W. German, Hans Eitel 他4 南稜，7450 m まで，10月29日断念 ●山岳年鑑，'88, 66／HCNL, 41, 32／AAJ, 1988, 210

㉞ 1987年 British-American, Mark Udall 南面の2ルート試登 南稜 6500 m, 南側稜 6700 m で10月17日断念 ●山岳年鑑，'88, 66／HCNL, 41, 32／AAJ, 1988, 211 (M. Udali)

㉟ 1988年冬 Spanish, Fernando Garrido (Solo) シェルパ1人を伴う。しかし BC 以後は単独で行動，西北西稜より2週間で，2月6日単独無酸素登頂 ●山岳年鑑，'88, 66／

Moun, 120, 11／AAJ, 1988, 211 (E. Hawley)
㊱ 1987/88 年冬 S. Korean, Chung Jin-Yang 他 8 東稜 7600 m まで，2月13日断念，2月11日 Ngojumba Kang (Cho Oyu II, 7743 m) 登頂 ●→Ngozumba Kang No.7

CHUREN HIMAL

Nepal Dhaulagiri Himal
西峰＝7371 m 28°43′55″N, 83°12′45″E
東峰＝7371 m 28°44′37″N, 83°13′47″E
① 1982 年秋 French, Gérard Grossan 他 5 南面 Kaphe Khola から西峰を南東稜より 6600 m まで，東峰を東稜から 11 月 3 日 7150 m まで ●岩と雪，95, 48／AAJ, 1983, 247
② 1983 年秋 W. German DAV, Gustav Harder 他 15 南西稜，10 月 9 日 6850 m で断念，12 日雪崩で Hans-Peter Hamm, Christoph Hawlistscher を失う ●岩と雪，102, 48 (J. Nyka)／AAJ, 1984, 262／Moun, 96, 12
③ 1984 年春 S. Korean, Kim Byoung-Hoon 他 1 Kaphe Khola から西峰西稜，4月5日 5950 m＝C 2 まで ●岩と雪，109, 57／AAJ, 1985, 294
④ 1984 年春 Northern Irishmen, Dawson Stelfox 南西面から西峰，5月5日 6550 m まで ●Stelfox, Dawson : Churen Himal (7371 m). HJ, 41, 157-61, 1983·1984／AAJ, 1985, 294
⑤ 1987年春 S. Korean, Chong Dong Alpine Club Do Chang-Ho 東峰，南東稜 7200 m まで，5月11日断念 ●Hima, 19-3, 35／山岳年鑑，'88, 77／AAJ, 1988, 225

CROWN, THE 7295 m

China Karakorum 36°06′N, 76°11′E
① 1985 年秋 Japanese, 日本ヒマラヤ協会舘野秀夫 Hideo Tateno 他 10 9月28日東壁 6300 m まで，9月30日，10月1, 2日南西稜につづく 6117 m 峰に 8 人登頂 ●舘野秀夫：中国の 7000 m 未踏峰クラウン，岳人，463, 57-61, 1986·1／報告書
② 1987 年春 Japanese, 静岡大学山本良三 Ryozo Yamamoto 他 13 南東稜，85 年日本ヒマラヤ協会隊ルートの左手，8月22日 7050 m で断念 ●岡本良治：世界第3位の未踏峰皇冠峰落ちず，山と渓谷，630, 119-23, 1988·1／近藤信行：西域の山旅から，学鐙，85-1, 24-29, 1988／山岳年鑑，'88, 52／AAJ, 1988, 286 (Ryozo Yamamoto)
③ 1987 年 British 陸軍隊，F. Mogan 南東稜，上記隊と同じルート，頂上下 75 m まで登る ●山岳年鑑，'88, 53

編集後記

＊いい季節の休日に東京近郊の山に出かけてみると、いわゆる中高年ハイカーの大集団にぶつかります。こうした状態は、日本全国あちこちで見られるのでしょうが、こういう現象に象徴されるように、山の世界も何か様変りしている、そんな現状を一度整理してみようと、二年ほど前から話し合っていたことを江本氏（東京外語大OB、読売新聞社外報部）にまとめてもらいました。会員諸兄姉はどのようにいまの山の世界を見ておられますか。

＊今号は、例の三国登山関係の記事のほか、悲しいことに追悼欄がふくらんでしまい、そのうえ、二、三年前から予定されていた原稿が次々とまとまってきて増ページとなりました。なかでも「ヒマラヤ山岳誌ノート」は克明な記録の集成で、すばらしい資料です。厖大な量で、一回では無理なので分載となりました。

＊今号で編集の任期満了、交替します。「山岳第八十年」より担当、多くの岳友に知己を得たのは大きな幸せです。海外記録偏重という会員の声が以前から多かったのを気にして、そのほかの会の活動もわかるように、さらには文芸復興もと願ったのですが、意あって力足りず、という結果となりました。しかし、読める記事が多くなったという声をあちこちから聞くのは喜ばしいことです。編集にあたっては、会員諸兄姉から暖い支援を受けました。なかでも名誉会員望月達夫氏からは、終始、懇切、的確なアドバイスを頂戴しました。ハロルド・ソロモン氏には厄介な英訳でご苦労をおかけしました。地味な作業をお願いした高遠宏、松家晋の両委員を含め、記して厚く感謝の意を表します。

（編集担当・大森）

山岳　第八十三年（通巻一四一号）
一九八八年十二月二十日発行
価三五〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五—四
サンビュウハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京二六一局四四三三番
振替口座　東京三—四八二九番
発行人　今西寿雄
編集人　大森久雄
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二—一
電話　東京二九一局九四四二番
振替口座　東京八—二四七二三番

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 83

1988